

上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ

いずみ
和泉 A 遺跡

(本文・観察表編)

1 9 9 9

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

上信越自動車道関係発掘調査報告書V

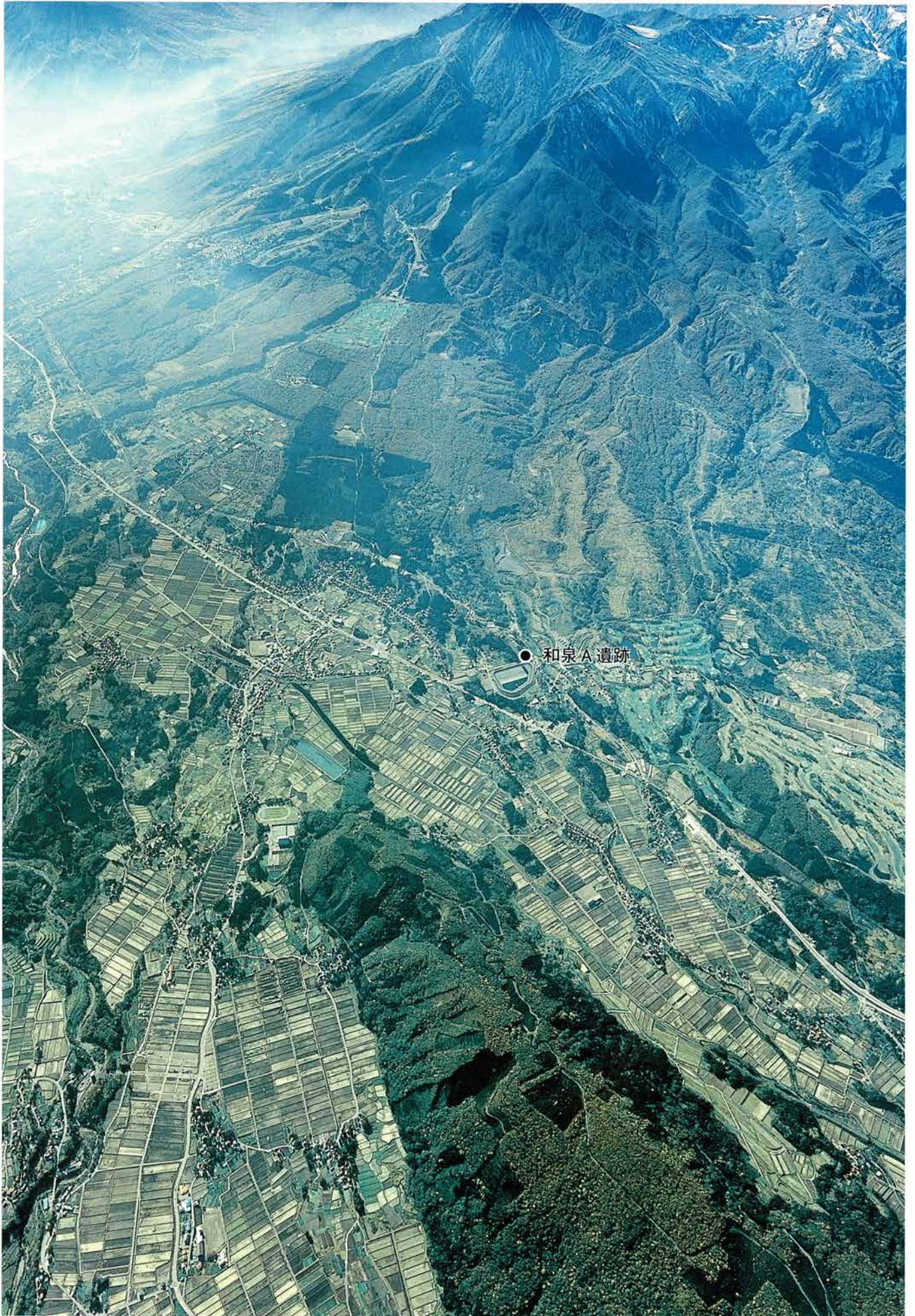
和泉^{いずみ}A遺跡

(本文・観察表編)

1 9 9 9

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団



和泉 A 遺跡周辺の景観

1996年11月撮影



1997年11月撮影

和泉A遺跡下層全景と周辺の景観



和泉 A 遺跡下層全景

1997年9月・11月撮影（一部合成）

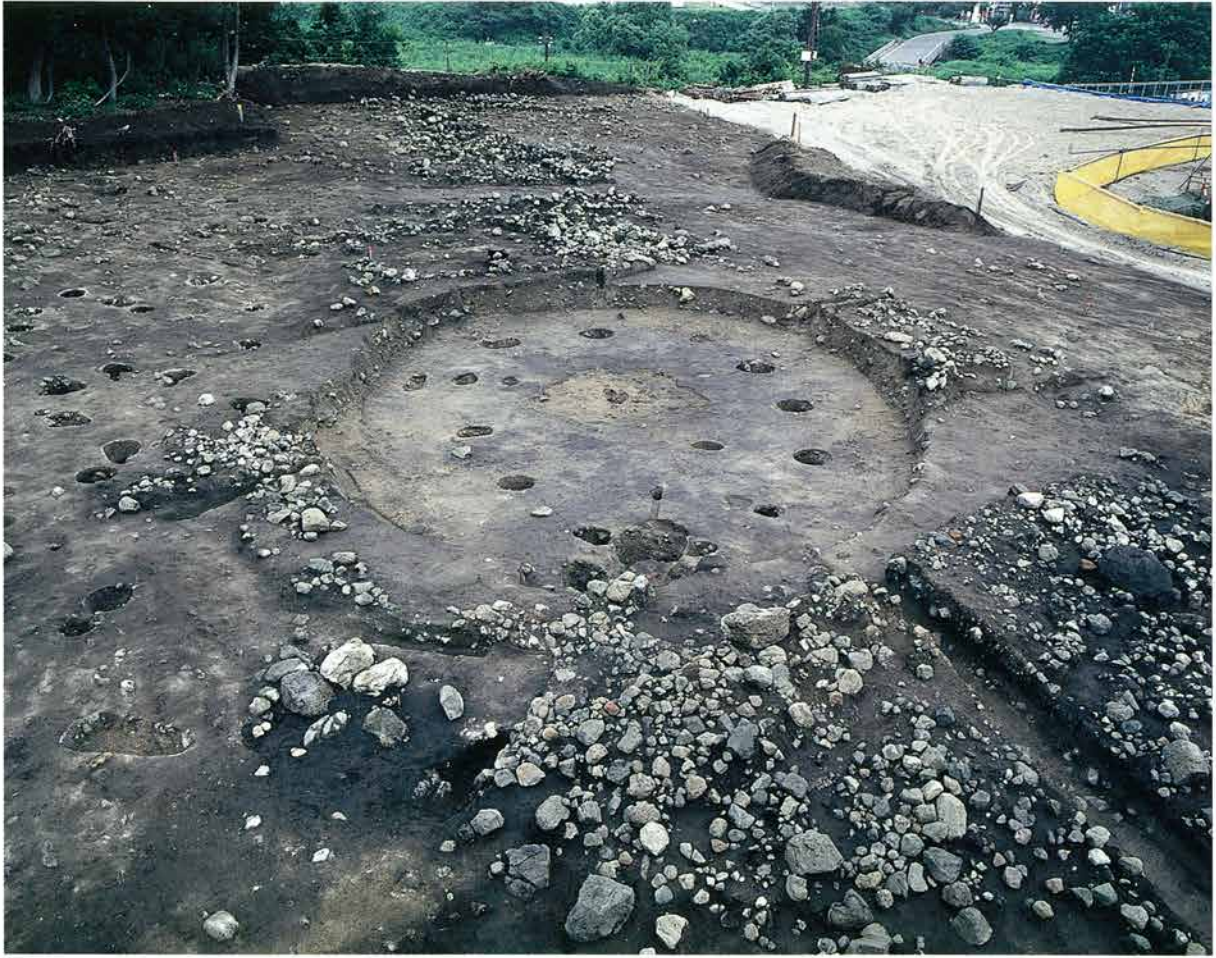


和泉 A 遺跡下層遠景（東から）

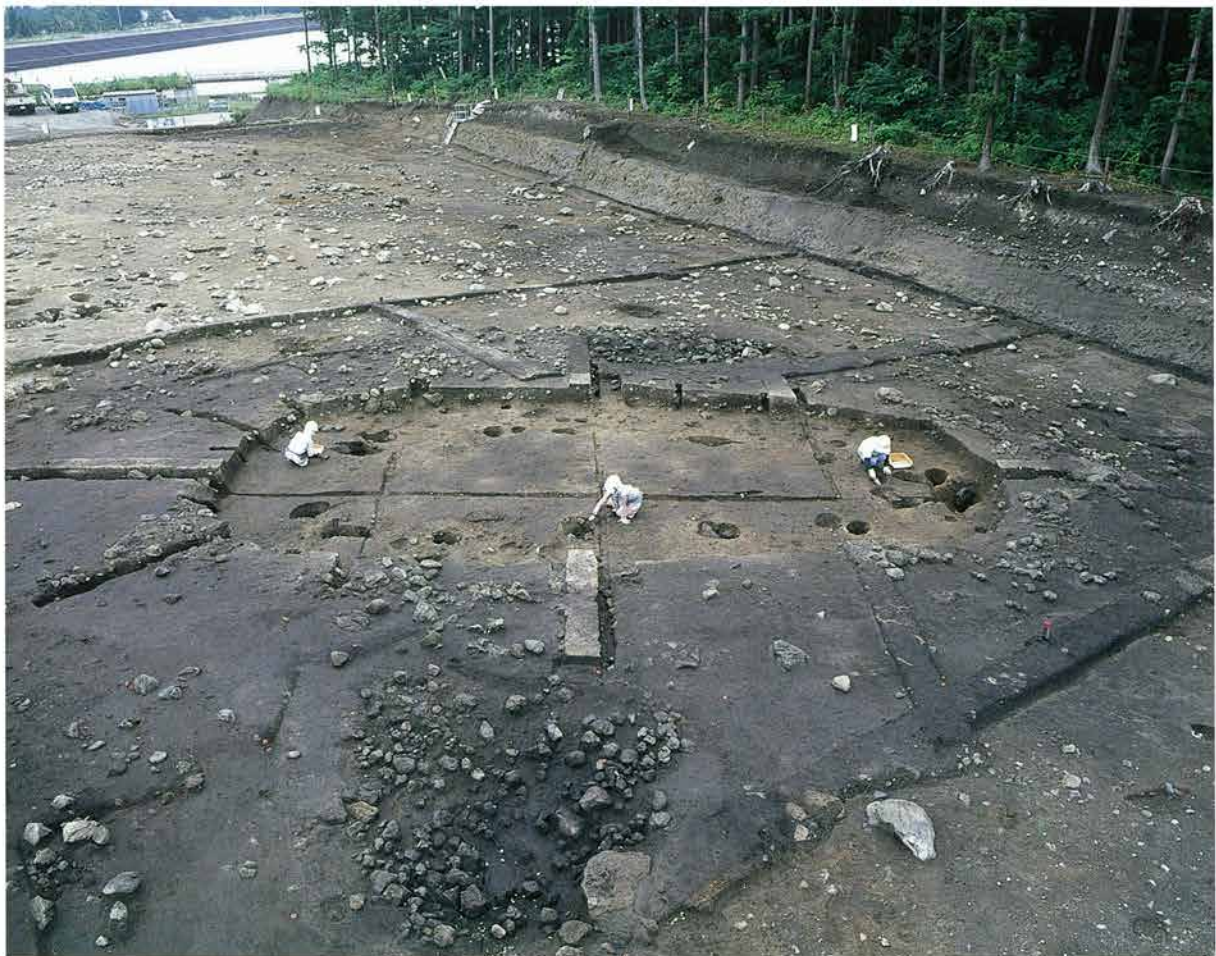
1997年11月撮影



土層断面（8F～Gグリッド 北から）



SI117 床面検出状況（南東から）



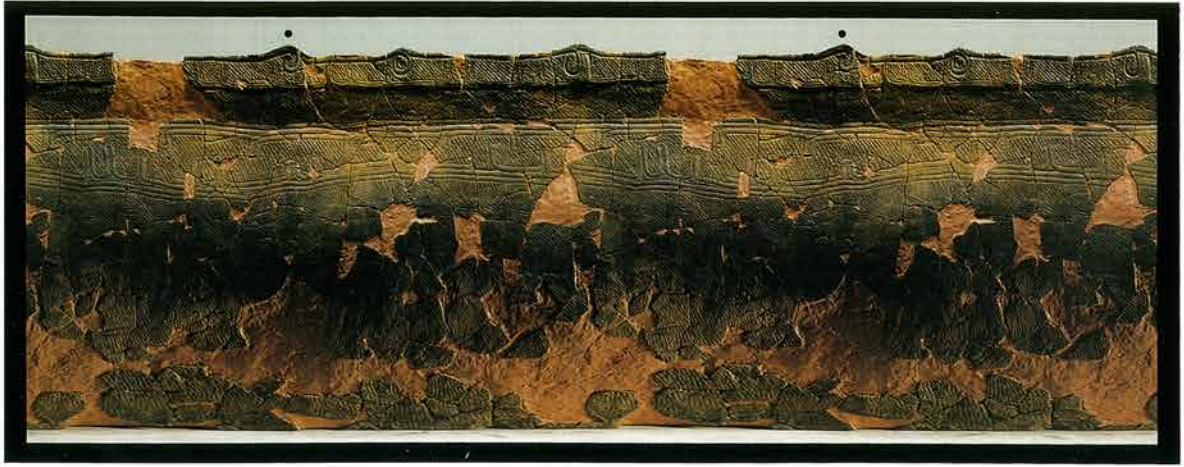
SI403 調査風景（南西から）



和泉 A 遺跡下層出土土器



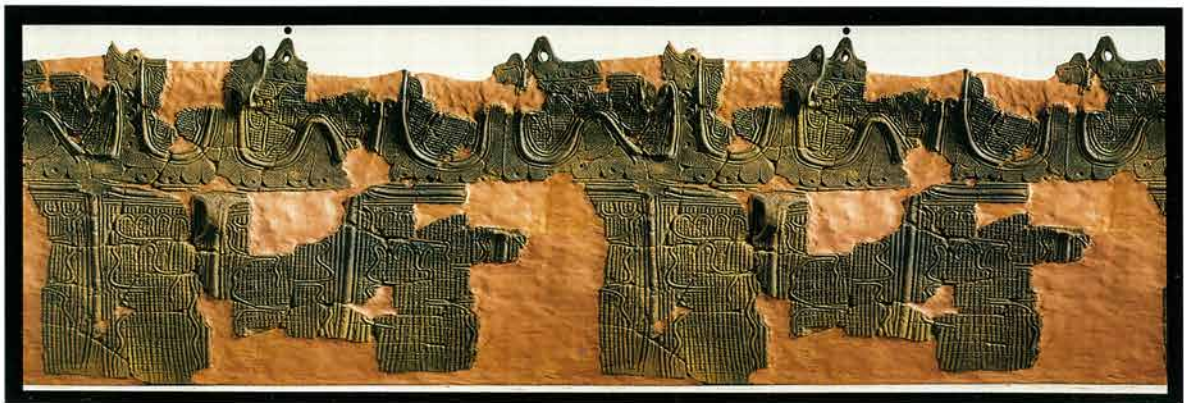
和泉 A 遺跡上層出土土器



71



285



下層出土土器の展開写真

288



下層出土の玉

620・618

序

上信越自動車道は、関越自動車の群馬県藤岡ジャンクションから分岐し、群馬県・長野県を経て、新潟県上越市に至る全長203キロメートルの高速自動車道です。開通することで関越自動車道・磐越自動車道とならび、太平洋側と日本海側とを結ぶ大動脈として沿線地域の発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この道路建設に先立ち発掘調査を実施した「和泉A遺跡」の発掘調査報告書です。調査の結果、縄文時代・弥生時代・古墳時代・鎌倉～戦国時代の遺物が発見されています。特に、縄文時代、弥生時代の調査成果は、質・量ともに本県を代表する資料のひとつとして調査時から多くの方々から注目されていました。

今回の調査結果が、今後の本県における縄文時代・弥生時代・古墳時代・室町～戦国時代を解明する研究資料として活用されると共に、県民の方々の文化財に対する理解と認識を深める契機にしていいただければ幸いです。

最後に、この調査に対して多大なご協力とご支援を賜った中郷村教育委員会ならびに調査に参加された地元の方々をはじめ、日本道路公団北陸支社・同上越工事事務所に対して厚く御礼を申し上げます。

平成11年 3月

新潟県教育委員会

教育長 野 本 憲 雄

例 言

1. 本報告書は、新潟県中頸城郡中郷村大字稲荷山新田字^{かごみね}麓^{いづみ}650番地ほかに所在する和泉A遺跡の発掘調査報告書である。本書は、2分冊から構成されるうちの本文・観察表編である。
2. 発掘調査は上信越自動車道の建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、県教委）が日本道路公団（以下、道路公団）から受託して実施したものである。
3. 発掘調査は、県教委が調査主体となり、財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を委託し、平成4～7年度に実施した。
4. 整理および報告書作成にかかる作業は、平成8～10年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。ただし、遺物写真図版の一部（集合写真・完形土器の写真・土器の展開写真）と実測用写真の撮影・印画は、小川忠博氏に委託した。
5. 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。ただし、航空写真のフィルムは撮影者の株式会社 国際航業が、遺物写真図版の一部と実測用写真のフィルムは撮影者の小川忠博氏が保管している。
6. 本書に掲載した遺物番号は上層土器・上層石器・下層土器・下層石器それぞれで通し番号を付した。本文・実測図版・写真図版の番号は一致している。また、土製品は土器、石製品は石器の通し番号と連続する番号を付してある。
7. 引用・参考文献は著者および発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第Ⅶ章 自然科学分析は、各報告の末尾に掲載した。また、既成の地図を用いた場合は、その出典を併記した。
8. 本書の記述は、荒川隆史（埋文事業団文化財調査員）、加藤 学（同文化財調査員）があたり、図版・観察表作成において小池義人（同主任調査員）、野水 仁（同文化財調査員）の協力を得た。編集は、加藤が担当した。記述の分担は、次のとおりである。

第Ⅰ章・第Ⅲ章（2A(1)bを除く）・第Ⅳ章・第Ⅴ章2A・第Ⅵ章1、2A …… 荒川

第Ⅱ章・第Ⅲ章2A(1)b・第Ⅴ章1、2B～2D・第Ⅵ章2B～2D …… 加藤

ただし、第Ⅱ章は、県教委・埋文事業団刊行の大洞原C遺跡〔武田1997、屋1997b〕、中ノ沢遺跡〔立木ほか1997b〕の報告書、中郷村教育委員会刊行の麓遺跡の報告書〔野村1996〕をもとに、加筆・修正したものである。

9. 第Ⅶ章 自然科学分析は、次に示す機関・個人へ委託した。
 1. 和泉A遺跡における自然科学分析…………… 株式会社 古環境研究所
 2. 縄文時代晩期土坑のリン・カルシウム分析…………… パリノ・サーヴェイ株式会社
 3. 和泉A遺跡の土器胎土分析…………… パリノ・サーヴェイ株式会社
 4. 和泉A遺跡出土黒曜石、安山岩製遺物の原材産地分析…………… 藁科哲男（京都大学原子炉実験所）
 5. 和泉A遺跡出土ヒスイ製玉類、玉材の産地分析…………… 藁科哲男（京都大学原子炉実験所）
 6. 琥珀の産地分析…………… 財団法人 元興寺文化財研究所

10. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示とご協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。（五十音順、敬称略）

石井 寛 石川日出志 石黒立人 上田典男 上野秀一 大竹憲昭 大塚昌彦 岡村道雄 織笠 昭 金子直行
小島正巳 佐藤雅一 高橋 学 谷口 肇 親跡 喬 堤 隆 寺村光晴 中沢道彦 中村友博 中村由克
布尾和史 林 謙作 早津賢二 平林 彰 細田 勝 堀沢祐一 町田勝則 水島陸男 宮崎朝雄 宮本長二郎
百瀬長秀 安 英樹 綿田弘実 渡邊朋和 渡邊裕之 (財)長野県埋蔵文化財センター 長野県大町市教育委員会
長野県松本市立考古博物館 長野県上高井郡高山村教育委員会

目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
1. 和泉A遺跡の発見	1
2. 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
1. 地理的環境	2
A 遺跡周辺の地理的環境	2
B 妙高火山の活動	3
2. 歴史的環境－周辺の遺跡－	5
A 縄文時代	5
(1) 赤倉火砕流堆積以前	6
a. 草創期	6
b. 早期	6
c. 前期前葉～前期中葉	6
(2) 赤倉火砕流堆積以後、大田切川火砕流堆積以前	6
a. 前期後葉～中期前葉	6
b. 中期中葉～中期後葉	8
(3) 大田切川火砕流堆積以後	8
a. 後期	8
b. 晩期	8
B 弥生時代	9
C 古墳時代	9
(1) 古墳	9
(2) 集落遺跡	10
第Ⅲ章 調査の概要	12
1. 発掘調査	12
A 一次調査	12
B 二次調査	13
(1) グリッドの設定	13
(2) 基本層序の観察	13
(3) 上層の調査方法	14

(4) 大田切川火砕流堆積物層の除去	14
(5) 下層の調査方法	14
(6) 写真撮影	14
(7) 遺物の整理	14
(8) 遺構の整理	14
C 調査経過	15
D 調査体制	18
2. 整理作業	19
A 整理方法	19
(1) 遺物	19
a. 土器	19
b. 石器	19
(2) 遺構	20
B 整理経過	20
C 整理体制	21
 第IV章 層序と概観	 23
1. 層序	23
2. 遺跡の概観	24
 第V章 上層の調査	 28
1. 遺構	28
A 記述の方法	28
(1) 記述の方法と遺構の分類	28
a. 基本方針	28
b. 遺構番号	28
c. 遺構の形態分類	28
d. 土坑・ピット・掘立柱建物	29
(2) 図化の方法	29
a. 全体図（遺構配置図）	29
b. 個別図	29
B 遺構各説	29
(1) 土坑	29
a. 土坑群	29
b. その他の土坑	30
(2) 掘立柱建物	31
(3) その他の遺構	32

(4) ブロックの認定	33
2. 遺物	36
A 土器（縄文時代後期～弥生時代）	36
(1) 土器の分布	36
(2) 記述の方法	36
(3) 図化の方法	36
(4) 観察表の記載方法	37
(5) 分類	37
(6) 遺構出土の土器	46
(7) 遺物ブロック出土の土器	47
(8) ブロック外出土土器	54
(9) まとめ	56
a. 各ブロックにおける土器組成	56
b. 編年的位置	62
B 土製品	63
C 石器	65
(1) 記述の方法	65
a. 上層石器群と下層石器群の分離	65
b. 資料提示の方法	65
c. 出土石器の分類	67
(2) 石器の分布	71
(3) 石器組成	72
a. 遺構出土の石器	72
b. 包含層出土の石器	74
(4) 剥片剥離技術	81
(5) 石材組成	82
(6) 石材環境	84
a. 在地石材	85
b. 遠隔地石材	87
(7) まとめ	87
a. 石器組成と石材組成	87
b. 石材環境と石材組成	90
c. ブロック間における石器組成・石材組成の差	91
D 石製品	94
E 古墳時代以降の遺物	95
第VI章 下層の調査	97

1. 遺構	97
A 記述の方法	97
(1) 記述の方針	97
a. 基本方針	97
b. 遺構番号	97
(2) 図化の方法	98
a. 図の縮尺	98
b. 図の表現	98
(3) 観察表	98
B 遺構各説	99
(1) 竪穴住居	99
(2) 掘立柱建物	106
(3) 土坑	120
(4) 柱穴列	124
(5) ピット	124
(6) 溝	125
(7) 環状廃棄遺構	125
C まとめ	129
(1) 竪穴住居跡について	129
a. 覆土の形成過程	130
b. 周堤・垂木尻ピットについて	132
c. 上屋構造の復元	132
(2) 掘立柱建物について	134
a. 各分類別の分布と規模	134
b. 掘立柱建物群の分布	135
c. 掘立柱建物C類について	138
(3) 土坑について	138
(4) 集落の構成	140
2. 遺物	141
A 土器	141
(1) 土器の分布	141
(2) 記述の方法	141
(3) 図化の方法	142
(4) 観察表の記載	142
(5) 分類	143
a. 器形	143
b. 文様帯	145

c. 文様	146
d. 口縁部内面の仕上げ	147
(6) 器形と文様の組み合わせ	147
(7) 遺構出土の土器	156
(8) 遺構外出土の土器	167
(9) まとめ	168
a. 資料の分析	168
b. 土器の変遷	178
c. 編年的位置	180
B 土製品	183
C 石器	185
(1) 記述の方法	185
(2) 石器の分布	185
(3) 石器組成	186
(4) 剥片剥離技術	199
(5) 玉髓製小形石錐の製作と使用	200
a. 製作工程の復原	200
b. 使用痕の観察	202
c. 類例	202
(6) 流理構造質安山岩の利用	203
a. 製作工程の復原	203
b. 類例	206
(7) 石材組成	206
(8) 石材環境	208
(9) まとめ	208
a. 石器組成と石材組成	208
b. 石材環境と石材組成	209
c. 遺構出土の石器	210
d. 調査区北側と南側に見られる石器組成の差	211
D 石製品	212

第Ⅶ章 自然科学分析

1. 和泉A遺跡における自然科学分析	217
A 和泉A遺跡の土層	217
B 和泉A遺跡出土試料の放射性炭素年代測定	219
C 和泉A遺跡出土炭化材の樹種同定	222
D 和泉A遺跡の植物珪酸体分析	227

E	和泉A遺跡における花粉分析	235
F	和泉A遺跡における寄生虫卵分析	239
G	和泉A遺跡における種実同定	241
H	和泉A遺跡から産出した昆虫化石について	244
I	総合考察	246
2.	縄文時代晩期土坑のリン・カルシウム分析	247
3.	和泉A遺跡の土器胎土分析	253
4.	和泉A遺跡出土黒曜石、安山岩製遺物の原材産地分析	263
5.	和泉A遺跡出土ヒスイ製玉類、玉材の産地分析	271
6.	琥珀の産地分析	277
	要約	279
	引用・参考文献	280

挿 図 目 次

第1図	和泉A遺跡の位置	2
第2図	遺跡周辺の地形と大田切川火砕流・赤倉火砕流の到達範囲	4
第3図	関川流域における縄文時代の遺跡	7
第4図	関川流域における弥生時代・古墳時代の遺跡	11
第5図	一次調査のトレンチの位置と二次調査対象とした範囲	12
第6図	グリット設定図	13
第7図	年度別調査範囲図	15
第8図	整理作業の様子	20
第9図	整理作業の経過	21
第10図	土層断面図(1)	25
第11図	土層断面図(2)	26
第12図	土層断面図(3)	27
第13図	遺構の平面形態と断面形態の分類	28
第14図	ブロックの認定	35
第15図	主要器種分類および部位の名称	37
第16図	文様抽出手法の分類	38
第17図	浅鉢・台付浅鉢の分類	39
第18図	甕の分類	42
第19図	壺・深鉢の分類	43
第20図	壺・蓋の分類	45
第21図	各ブロックにおける土器組成(1)	57
第22図	各ブロックにおける土器組成(2)	60

第23図	各ブロックにおける土器組成（3）	62
第24図	古期欠損と新期欠損の図示	65
第25図	スクリーントーンを表示	66
第26図	石器の計測位置	66
第27図	石鎌の形態分類	67
第28図	石鎌の欠損状態	67
第29図	石錐の形態分類	67
第30図	楔形石器の形態分類	68
第31図	打製石斧の形態分類	68
第32図	打製石斧の欠損状態	68
第33図	磨製石斧の刃部平面形態	68
第34図	磨製石斧の断面形態と欠損形態	68
第35図	スクレイパー刃部の認識	69
第36図	両面調整石器の分類	69
第37図	折断調整石器の分類	70
第38図	磨石類の分類	70
第39図	石皿の分類	70
第40図	砥石の分類	70
第41図	包含層出土石器の点数分布	71
第42図	上層石器群の石器組成（点数比）と石材組成（重量比）	72
第43図	折断面の名称	79
第44図	和泉A遺跡周辺の在地石材	85
第45図	和泉A遺跡をめぐる遠隔地石材	87
第46図	上層・石材産地分析資料（黒曜石）	88
第47図	上層・石材産地分析資料（ガラス質安山岩・滑石）	89
第48図	ブロック間における石器組成・石材組成の差	93
第49図	珠洲焼片口鉢の口縁部変遷模式図	96
第50図	掘立柱建物分類図	107
第51図	掘立柱建物における規模の計測位置と呼称	108
第52図	竪穴住居覆土分類	131
第53図	S I 403復元模式図	131
第54図	竪穴住居覆土形成模式図	133
第55図	掘立柱建物分類別分布図	136
第56図	掘立柱建物群の分割案	137
第57図	掘立柱建物C類の類例	137
第58図	土坑分布図	139
第59図	下層出土土器の重量分布	141

第60図	器形分類	144
第61図	文様帯の区分	145
第62図	三角形彫去文の分類	146
第63図	口縁部内面の分類	147
第64図	器形と文様の組み合わせ(1)	149
第65図	器形と文様の組み合わせ(2)	151
第66図	器形と文様の組み合わせ(3)	153
第67図	器形と文様の組み合わせ(4)	155
第68図	器形と文様の組み合わせ(5)	157
第69図	S I 117出土土器	170
第70図	S I 117出土土器残存率	171
第71図	S I 403B'層出土土器	173
第72図	S I 403B'層出土土器残存率	173
第73図	廃棄ブロック6出土土器	175
第74図	廃棄ブロック6出土土器残存率	176
第75図	土器の変遷	179
第76図	異系統の土器	182
第77図	土偶の出土位置	183
第78図	県内出土の中期前葉の土偶	184
第79図	下層出土石器の点数分布	186
第80図	下層石器群の石器組成(点数比)と石材組成(重量比)	187
第81図	磨製石斧の形態分類	190
第82図	スクレイパーG類の裏面調整(横断面形)	192
第83図	両面調整石器K2類の形態的まとまりと類似形態	194
第84図	両面調整石器K4類の形態的まとまり	194
第85図	砥石の分割と再利用	199
第86図	玉髓製小形石器の大きさ(IV~VI類)	200
第87図	玉髓製小形石器の形態分類	200
第88図	玉髓製小形石器の細分形態の組成	201
第89図	流理構造質安山岩の利用	205
第90図	石材産地分析資料(黒曜石・翡翠)	207
第91図	調査区北側と南側に見られる石器組成の差	211
第92図	琥珀の原産地と縄文時代の琥珀が出土した遺跡	213
第93図	琥珀玉の集成	215
第94図	サンプル位置図	218
第95図	和泉A遺跡No.1地点の土層柱状図	218
第96図	和泉A遺跡No.2地点の土層柱状図	218

第97図	和泉A遺跡No. 5地点の土層柱状図	218
第98図	和泉A遺跡No. 8地点の土層柱状図	218
第99図	和泉A遺跡No. 9地点の土層柱状図	218
第100図	和泉A遺跡No. 10地点の土層柱状図	218
第101図	和泉A遺跡SI403の土層柱状図	218
第102図	和泉A遺跡出土炭化材の顕微鏡写真(1)	225
第103図	和泉A遺跡出土炭化材の顕微鏡写真(2)	226
第104図	和泉A遺跡No. 1地点(4Hグリッド)の植物珪酸体分析結果	230
第105図	和泉A遺跡No. 2地点(10Hグリッド)の植物珪酸体分析結果	231
第106図	和泉A遺跡No. 5地点(14Gグリッド)の植物珪酸体分析結果	231
第107図	和泉A遺跡No. 8地点(14Eグリッド)の植物珪酸体分析結果	231
第108図	和泉A遺跡No. 9地点(13Eグリッド)の植物珪酸体分析結果	231
第109図	和泉A遺跡No. 10地点(13Eグリッド)の植物珪酸体分析結果	232
第110図	和泉A遺跡SI403の植物珪酸体分析結果	232
第111図	和泉A遺跡の植物珪酸体分析結果	232
第112図	植物珪酸体の顕微鏡写真(1)	233
第113図	植物珪酸体の顕微鏡写真(2)	234
第114図	和泉A遺跡No. 1地点における主要花粉組成図	237
第115図	和泉A遺跡No. 2地点における主要花粉組成図	237
第116図	和泉A遺跡No. 5地点における主要花粉組成図	237
第117図	和泉A遺跡の花粉・孢子	238
第118図	和泉A遺跡の寄生虫卵分析	240
第119図	和泉A遺跡出土の種実	243
第120図	和泉A遺跡から産出した昆虫化石	245
第121図	縄文時代晩期土坑リン・カルシウム分析 試料採取層位	248
第122図	土器胎土および河川砂の重鉍物組成	255
第123図	胎土分析資料	259
第124図	胎土中の重鉍物	260
第125図	植物珪酸体分析プレパラート内の状況(1)	261
第126図	植物珪酸体分析プレパラート内の状況(2)	262
第127図	黒曜石原産地	264
第128図	サヌカイト及びサヌカイト様原石の原産地	266
第129図	和泉A遺跡出土安山岩製遺物と片貝川・関川採取安山岩原石のクラスター分析結果図	268
第130図	ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類の原材使用分布図	273
第131図	ヒスイ原石の元素比值 Zr/Sr 対 Sr/Fe の分布および分布範囲	273
第132図	ヒスイ原石の元素比值 Ca/Si 対 Sr/Fe の分布および分布範囲	273
第133図	ヒスイ原石の元素比值 Na/Si 対 Mg/Si の分布および分布範囲	273

第134図	和泉A遺跡出土の玉類のZr/Sr対Sr/Feの分布	276
第135図	和泉A遺跡出土の玉類のCa/Si対Sr/Feの分布	276
第136図	和泉A遺跡出土の玉類のNa/Si対Mg/Siの分布	276
第137図	分析No. 51395の玉の蛍光X線スペクトル	276
第138図	分析No. 51396の玉の蛍光X線スペクトル	276
第139図	分析No. 51397の大珠の蛍光X線スペクトル	276
第140図	分析No. 51398の原石の蛍光X線スペクトル	276
第141図	和泉A遺跡出土琥珀玉の赤外吸収のスペクトル	278
第142図	和泉A遺跡出土琥珀玉の赤外吸収のスペクトル(部分拡大)	278

表目次

第1表	年度別遺物出土量	19
第2表	不定形石器の分類	69
第3表	上層石群の石器組成と石材組成	72
第4表	掘立柱建物観察表	108
第5表	竪穴住居跡掘削土量表	133
第6表	SI117出土土器 破片数および残存率	172
第7表	SI403出土土器 破片数および残存率	174
第8表	廃棄ブロック6出土土器 破片数および残存率	177
第9表	下層石器群の石器組成と石材組成	186
第10表	各遺構における石器組成	210
第11表	放射性炭素年代測定の試料と方法	219
第12表	放射性炭素年代測定の測定結果	220
第13表	和泉A遺跡出土炭化材	222
第14表	和泉A遺跡出土炭化材の樹種同定結果	223
第15表	和泉A遺跡の植物珪酸体分析結果	230
第16表	和泉A遺跡における花粉分析結果	236
第17表	種実同定試料一覧	241
第18表	昆虫化石一覧	244
第19表	リン・カルシウム分析試料一覧表	252
第20表	リン・カルシウム分析結果	252
第21表	各調査地点のリン酸含量のt分布検定	252
第22表	試料採取位置の違いによるリン酸含量のt分布検定	252
第23表	各調査地点のカルシウム含量のt分布検定	252
第24表	試料採取位置の違いによるカルシウム含量のt分布検定	252
第25表	重鉍物分析結果	255

第26表	植物珪酸体分析結果	256
第27表	各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値（1）	264
第28表	各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値（2）	265
第29表	各サヌカイト原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	266
第30表	原石産地不明の組成の似た遺物で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	266
第31表	和泉A遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果	268
第32表	和泉A遺跡出土安山岩製遺物の元素比分析結果	268
第33表	片貝川・関川採取安山岩の元素比分析結果	268
第34表	和泉A遺跡出土石器の原材産地分析推定結果	270
第35表	ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（1）	273
第36表	ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（2）	273
第37表	和泉A遺跡出土の玉類および玉材の元素分析値の比量と比重（1）	276
第38表	和泉A遺跡出土の玉類および玉材の元素分析値の比量と比重（2）	276
第39表	和泉A遺跡出土の玉類および玉材の原石産地分析結果	276

観察表目次

上層	遺構観察表	289
上層	土器観察表	290
上層	土器片円盤観察表	304
上層	石器観察表 遺構出土石器	304
上層	石器観察表 包含層出土石器	305
上層	古墳時代以降の土器観察表	314
下層	遺構観察表 竪穴住居	315
下層	遺構観察表 掘立柱建物	319
下層	遺構観察表 土坑	328
下層	遺構観察表 柱穴列	329
下層	遺構観察表 溝	329
下層	遺構観察表 性格不明遺構	329
下層	遺構観察表 ピット	330
下層	土器観察表	350
下層	土器片円盤観察表	370
下層	土製品観察表	371
下層	石器観察表 遺構出土石器	371
下層	石器観察表 廃棄ブロック・包含層出土石器	384

第 I 章 調査に至る経緯

1. 和泉 A 遺跡の発見

和泉 A 遺跡は、古くに土地所有者等によって発見され、遺物が表面採集されていた。新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）は、昭和48年に実施した県内の遺跡分布調査の際に中頸城郡中郷村稲荷山新田字箆峰463番地を和泉遺跡としてはじめて登録している。この時点では、縄文時代後・晩期の土器が採集されたことが記録されている。その後、昭和51年に県教委が実施した詳細分布調査において縄文時代中・後期の土器約40片が採集され、新たに同稲荷山新田字箆峰441・463番地を中心とした70m×50mの範囲が和泉 A 遺跡として埋蔵文化財包蔵地調査カードに登録された。なお、和泉 A 遺跡の北側、同稲荷山新田字箆峰地内に和泉 B 遺跡を登録したが、後になってからこれを箆峰遺跡に含め、和泉 B 遺跡の名称を抹消している。

2. 調査に至る経緯

上信越自動車道は、群馬県藤岡市で関越自動車道から分岐し、長野県を經由して新潟県上越市で北陸自動車道と連結する総延長203kmの高速自動車道である。本路線は、現在、中郷インターチェンジまで開通しているが、全通することで北陸圏・中部圏と首都圏とを直結する大動脈となる。そして、沿線地域の産業・流通・観光などの社会経済活動の進行に大きな役割を果たすものと期待される。

上信越自動車道の長野・新潟県境から上越ジャンクションまでの34kmは、昭和48年11月に基本計画が決定された。和泉 A 遺跡にかかる第10次施工命令区間（長野県中野市～新潟県中頸城郡中郷村38.2km）は、昭和63年9月に施工命令が出された。これを受けて、日本道路公団新潟建設局（以下、道路公団と略す）と県教委との間で、法線内の遺跡の分布調査・試掘調査等に関する協議が本格化した。

県教委は道路公団の依頼を受け、同年11月14日から19日に第10次施工命令区間の踏査を行い、周知の遺跡14か所、新発見の遺跡2か所、遺跡推定地7か所、総計848,000㎡について調査が必要である旨、道路公団に通知した。この後、県教委と道路公団で一次・二次調査についての話し合いがもたれた。

県教委から委託された財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）は、平成4年6月10日から7月28日、同年9月9日から10月23日に、第10次施工命令区間中郷村地内の遺跡6か所について遺跡の有無を確認し、今後の取り扱いについての協議に必要な資料を得るために一次調査を実施した。和泉 A 遺跡の一次調査は、6月10日から7月19日に実施され、縄文時代中期の竪穴住居とみられる遺構のほか縄文時代の遺物を含む遺物包含層が検出された。この結果をもとに、埋文事業団は県教委に対し9,500㎡について二次調査が必要であることを報告している。

県教委は、この旨を道路公団に通知するとともに、道路公団と調査工程の協議を重ねた。そして、和泉 A 遺跡については、遺跡中央部に未買収地が存在していたことなどから、平成5年度から平成6年度にかけて二次調査を実施することに決定した。

第II章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

A 遺跡周辺の地理的環境

和泉A遺跡が所在する中頸城郡中郷村は、新潟県南西部の上越地方南部に位置し、南は中頸城郡妙高村、北は新井市、西は西頸城郡名立町と接している。中郷村は総面積43.75k㎡、人口約5,500人〔新潟県1998〕と県内でも小規模な準山村であるが、日本海側と信濃を結ぶ北国街道が通り、各時代をとおして繁栄してきた。また、街道として整備される以前も、例えば縄文時代に信州産の黒曜石が頸城地方に搬入されていることなどから、人々の往来があったことが推測される。

中郷村の南西側には、妙高山（標高2,454m）、火打山（2,462m）など新第三紀層の山々が形成する西頸城山地が、東側には、魚沼山系の西端にあたる高床山（527m）、花房山（460m）などの小山塊が形成されている。村内の大地は、妙高火山の造山活動に伴う火砕流と、その後の山体の崩壊による岩屑流や泥流によって形成され、それが片貝川・渋江川・矢代川などによって開析されている。これらの河川は、火打山・焼山の山腹に源を発する関川と新井市で合流し、穀倉地帯である頸城平野を潤して日本海に注ぐ。

この地域は、山間地であるため、年間を通じて冷涼な気候にある。年平均気温をみると、平野の上越市高田では13.1℃であるのに対して、妙高村関山では11.7℃と1.4℃も低い。また、豪雪地帯としても知られ、中郷村の過去の記録をみると1984年に最高積雪385cm、積雪日数152日を記録している。こういった気候条件に加え、周辺の土壌は火山灰の風化により生成する黒ボク土であり、耕作土には適さないといわれている。現在では多くの用水が開削され耕作も可能となっているが、用水が開削される江戸時代以前は、作物の栽培は困難であったと推測される。



第1図 和泉A遺跡の位置

B 妙高火山の活動（第7図）

妙高山は、火山活動によって形成された火山体であり、外輪山である神奈山、赤倉山などと共に「妙高山」と総称される。この周辺には多くの火山体が集中しており、妙高山の南側には黒姫山・飯縄山が一直線に並び、西側には佐渡山と焼山が南北に位置する。野尻湖を挟んで東側には斑尾山が位置し、これら6つの成層火山の集まりは妙高火山群と呼ばれている [早津1985]。

妙高火山の活動は、数十万年前、第四紀更新世の中頃に始まったと考えられ、大きく第Ⅰ～Ⅳ期の活動期と3回の休止期に分けられる。活動期に形成された成層火山体は、活動期末期から休止期の間に侵食を受けて崩壊し、やがてこれを土台として再度成層火山体が形成されるという過程が繰り返された。その結果、4つの火山体が重複した複式成層火山が形成されたのである。つまり、現在の妙高山は中央火口丘と呼ばれる最も新しい火山体で、周囲を囲む神奈山などの外輪山はそれ以前に形成された古い妙高火山の姿なのである。

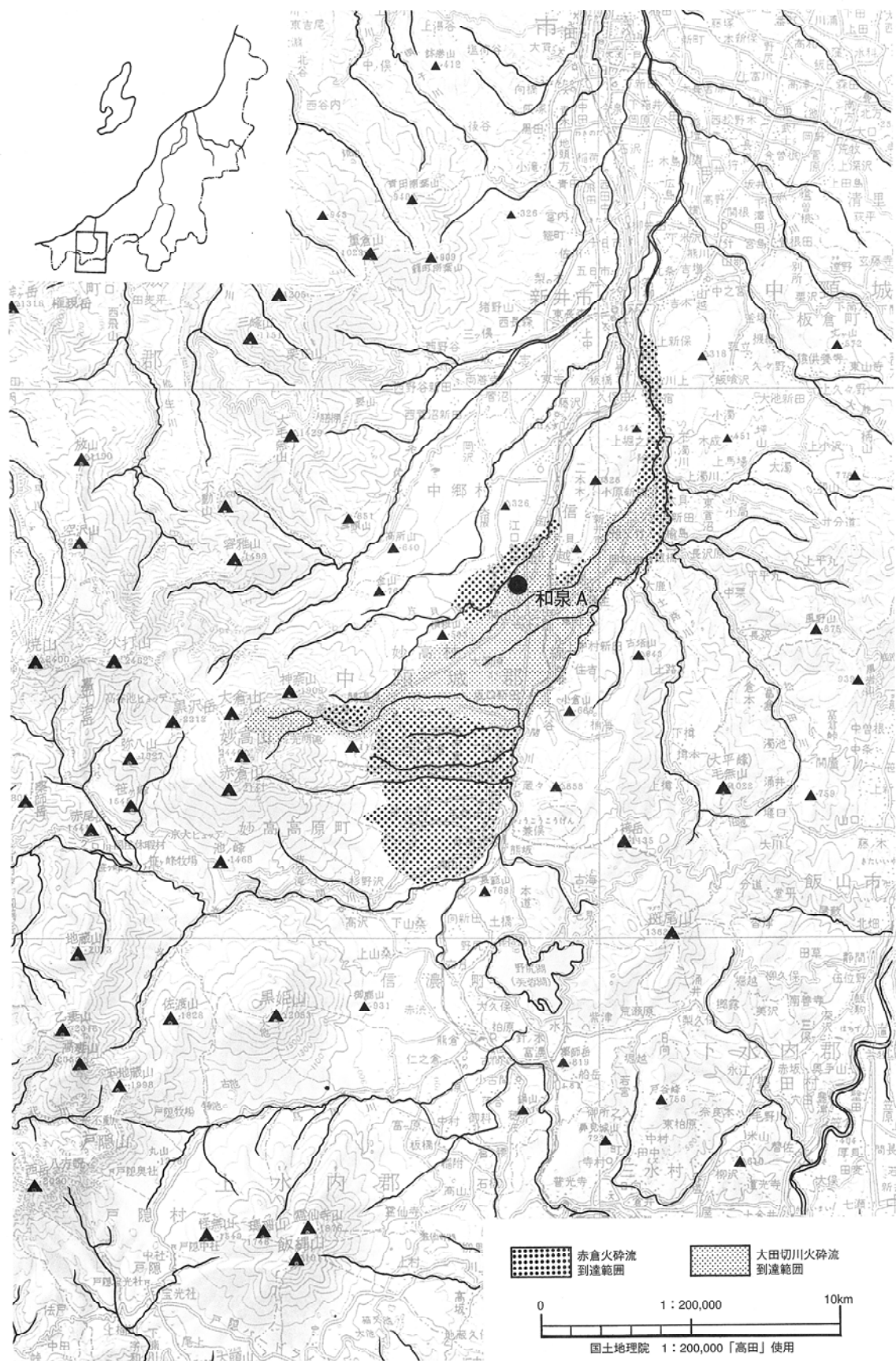
それらの火山活動は、周辺地域の地形形成に大きな影響を及ぼしている。特に、活動末期に発生した高温の火山灰・火山砂・火山岩塊といった火砕物質とガスが一体となって高速で山腹を流下する火砕流や、火山体の崩壊によって生じた岩石片や土砂が高速で地表を流下する岩屑流、岩屑流より水分を多く含む泥流といったものが山麓に堆積し裾野を成長させた。

現在に近い形となった第Ⅳ活動期は約3万年前に活動を開始し、先カルデラ期、カルデラ形成期、中央火口丘形成期の3期に分けられる。約19,000年前頃にカルデラ形成期が始まり、大規模な水蒸気爆発により、山頂部が大崩落を起こしてカルデラがつくられた。このとき発生した「関川岩屑流」は、妙高山の東から東北山麓に広く分布し、新井市南端の原通地区でも確認されている。

これに続く中央火口丘の形成活動では、山腹の北地獄谷と南地獄谷に沿って「赤倉火砕流」が扇状に流下し東麓一帯を覆った。北は新井市の矢代川から、南は妙高高原町池の平までの範囲で認められる。従来、赤倉火砕流には、 ^{14}C 年代測定法により $5,880 \pm 190\text{y.B.P.}$ (Gak-7543) [早津・古川1981]、 $5,710 \pm 140\text{y.B.P.}$ (Gak-11393) [早津1985] といった年代が与えられており、考古遺物からみた噴出時期は縄文時代早期末～前期初頭と考えられてきた。ところが、妙高高原町関川谷内遺跡 [小池ほか1998] で赤倉火砕流が縄文時代前期中葉の有尾式土器を包含する黒色土を覆っているのが確認され、従来の認識を改める必要性が出てきた [小島1995]。実年代の測定においても、妙高村道添遺跡で採取された試料の ^{14}C 年代測定法では $5,310 \pm 110\text{y.B.P.}$ (I-17,943) という結果が得られている。こうして、噴出年代は約5,300年前と捉え直されている [早津1995]。この赤倉火砕流の噴出に引き続き、カルデラ内に粘性の大きな溶岩が多量に押し出され、巨大な中央火口丘が誕生した。

妙高火山最後の大規模な噴火は、中央火口丘から東方～北東方向に「大田切川火砕流」を噴出させたものである。この火砕流は、北地獄谷から大田切川に沿って流れ、片貝川と小二俣川に挟まれた地域に分布する。和泉A遺跡付近は、火砕流が到達した末端部にあたる。噴出年代は、 ^{14}C 年代測定法の測定値にばらつきがあるため、約4,000～4,500年前頃と幅をもった値が示されており [早津1985]、考古遺物からみた噴出時期は縄文時代中期末～後期初頭とされている [早津・小島1985]。和泉A遺跡では、この大田切川火砕流堆積物層が間層となり、遺物包含層を上層（縄文時代後期後葉以降）と下層（縄文時代中期初頭～中期後葉）とに分離している。

II 遺跡の位置と環境



第2図 遺跡周辺の地形と大田切川火砕流・赤倉火砕流の到達範囲

現在の妙高高原町・妙高村の緩傾斜地は「赤倉」・「大田切川」の2つの火砕流堆積物が基盤となって形成されたものであり、約4,000年前には現地地形に近い様相を示していたものと考えられる。また、確認できる最後の活動は約2,600年前に起きたと考えられる水蒸気爆発で、この時降下した火山灰は黄橙色を呈し、中郷村内でも確認されている。

妙高火山が最後の活動を開始した約3,000年前、妙高火山群の北端に位置している焼山（標高2,400m）でも噴火活動が開始された。焼山は昭和期にも3回の水蒸気爆発を起こしており、現在も活動を続けている火山である。火打山から妙高山にかけて点在する天狗の庭・高野池・黒沢池などの湿原の堆積物中には、高野池火山灰グループ（KG）と呼ばれる複数の火山灰層があり、その中の5層が焼山起源の火山灰層とみられ、上位からKG-a～KG-eと分類されている〔早津1994〕。

このうちKG-c火山灰は、焼山起源の火山灰の中では最も広範囲に分布し、焼山の東方一帯、新井市の周縁部にまで広がっている。火山灰は灰白色を呈する特徴的なものであり、妙高村大洞原C遺跡〔三ツ井ほか1997〕や柳平遺跡〔大滝・小池1996〕などでも確認されている。噴出時期は、中郷村籠峰遺跡において、溝状遺構内に堆積したこの火山灰層下で平安時代の須恵器が出土していることと¹⁴C年代測定法の分析結果などから、約1,100年前の平安時代中頃とされる〔早津1994〕。

このように山麓の各遺跡で検出される妙高火山・焼山起源の火砕流・火山灰の堆積物層は、遺物包含層と対比させることで年代を決定づける重要な指標となっている。

2. 歴史的環境 - 周辺の遺跡 -

ここでは、長野県境の妙高山麓から頸城平野南部における縄文時代から古墳時代の遺跡を概観したい。遺跡の内容については、埋蔵文化財包蔵地カードをもとに既刊の発掘調査報告書および現地説明会資料などの知見を加え、平成10年8月現在の状況をまとめた。なお、この地域の地形は、妙高山や関田山脈、およびこれに連なる丘陵等からなる山麓部と、頸城平野とその周縁の扇状地・低丘陵等からなる平野部とに大きく二分される。両地形間では、遺跡の分布状況においても異なった様相が観察されるため、新井市長森と吉木を結んだラインを境として山麓部と平野部とに分けて記載することとしたい。

A 縄文時代（第3図）

縄文時代の遺跡は、山麓部に多数存在するが、平野部には小規模な遺跡が点在する程度である。妙高山麓周辺における縄文時代の遺跡は、戦前より知られており調査も行われている。『新潟縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第七輯』〔齊藤1937〕には、妙高村杉野沢遺跡・大洞原遺跡・葎生遺跡など34遺跡が掲載されているが、中古遺跡、長沢遺跡、大貝遺跡、小濁遺跡など22遺跡は位置不明である。また、縄文時代の遺跡は三仏生式か石倉式または不明形式として分類されている点は注目される。

1963年から1965年に実施された県教委および頸南地区総合学術調査会の分布調査の結果は、『頸南』〔室岡ほか1966〕にまとめられ47遺跡について報告されている。頸南地区総合学術調査と同じ頃、立教大学により妙高村葎生遺跡〔中川ほか1966〕・新井市大貝遺跡〔中川ほか1967〕の発掘調査が実施された。葎生遺跡では後期末から晩期にかけての配石遺構などが、大貝遺跡では中期の住居跡3軒などが検出されている。

1970～1980年代になると、諸開発により妙高高原町兼俣遺跡〔本間・室岡1976〕、妙高村中古遺跡〔室岡・早津1986a〕、中郷村籠峰遺跡〔室岡1986b、中郷村教育委員会1987〕・南田遺跡〔親跡1988〕などが発掘調査された。1990年代には、国道や上信越自動車道建設に伴う発掘調査により資料の蓄積が進んでいる。

II 遺跡の位置と環境

調査例が増加する一方、妙高山麓では地質調査との連携により火山噴出物の年代との対応関係が精力的に研究されてきた〔早津・小島1985、小島1995〕。妙高火山・焼山火山に由来する様々な年代の火山性堆積物との層位関係を厳密につかむことができる貴重なフィールドなのである。その反面、起源となる火山と距離をおかないことから火山性堆積物が厚く、より古い時代の遺跡の発見を困難にしている。ここでは、火山性堆積物との対応関係に留意しながら、妙高山麓の状況を中心に各期の概要に触れることとしたい。

(1) 赤倉火砕流堆積以前

a. 草創期

先行する旧石器時代から草創期にかけての遺跡は多く発見されていない。

山麓部では、赤倉・大田切川火砕流が覆っていない地域で発見されている。妙高高原町大堀遺跡では、約8,000年前の田口岩屑流〔早津・河内ほか1992〕の下層から旧石器時代と草創期・早期の遺物が出土している〔立木ほか1996b〕。平野部では、上越市蛇谷遺跡で有舌尖頭器が1点出土している〔田海・加藤1996〕のみであるが、今後の資料の蓄積が期待される。

b. 早期

発見されている早期の遺跡は、山麓部を中心に分布する。

山麓部では、妙高山麓で赤倉・大田切川火砕流が覆っていない地域で発見されている。長野県境に近い側から妙高高原町大堀遺跡〔立木ほか1996b〕・関川谷内遺跡〔小池1998b・滝沢1995〕・中ノ沢遺跡〔立木ほか1997b〕、妙高村松ヶ峯遺跡群〔小島1991・93など〕、中郷村八斗蒔原遺跡〔飯坂1997〕・前原遺跡〔橋谷田1997〕、新井市高床山周辺の遺跡群〔高橋1994〕、中古遺跡〔室岡ほか1986a〕などで押型文を中心とした当該期の土器が出土している。近年の資料の増加は、中部高地と県内の編年観を対比する上で重要な資料となっている〔小熊1997など〕。また、大堀遺跡・関川谷内遺跡では、器形が復原される表裏縄文土器の出土が注目される。

平野部においても、近年の調査によって断片的な資料ではあるが、上越市下馬場遺跡〔小池1998〕・蛇谷遺跡〔星1997a〕で押型文土器、炭山遺跡〔三ツ井1997b〕・裏山遺跡〔小池1997〕で条痕文土器、大塚遺跡〔杉田1998〕では沈線文系土器が出土している。かつて妙高山麓に限られていた早期の遺跡分布が、海岸近くにまで広がる様子が明らかになりつつある。

c. 前期前葉～前期中葉

発見されている前期前葉～前期中葉の遺跡の殆どは、山麓部に分布する。

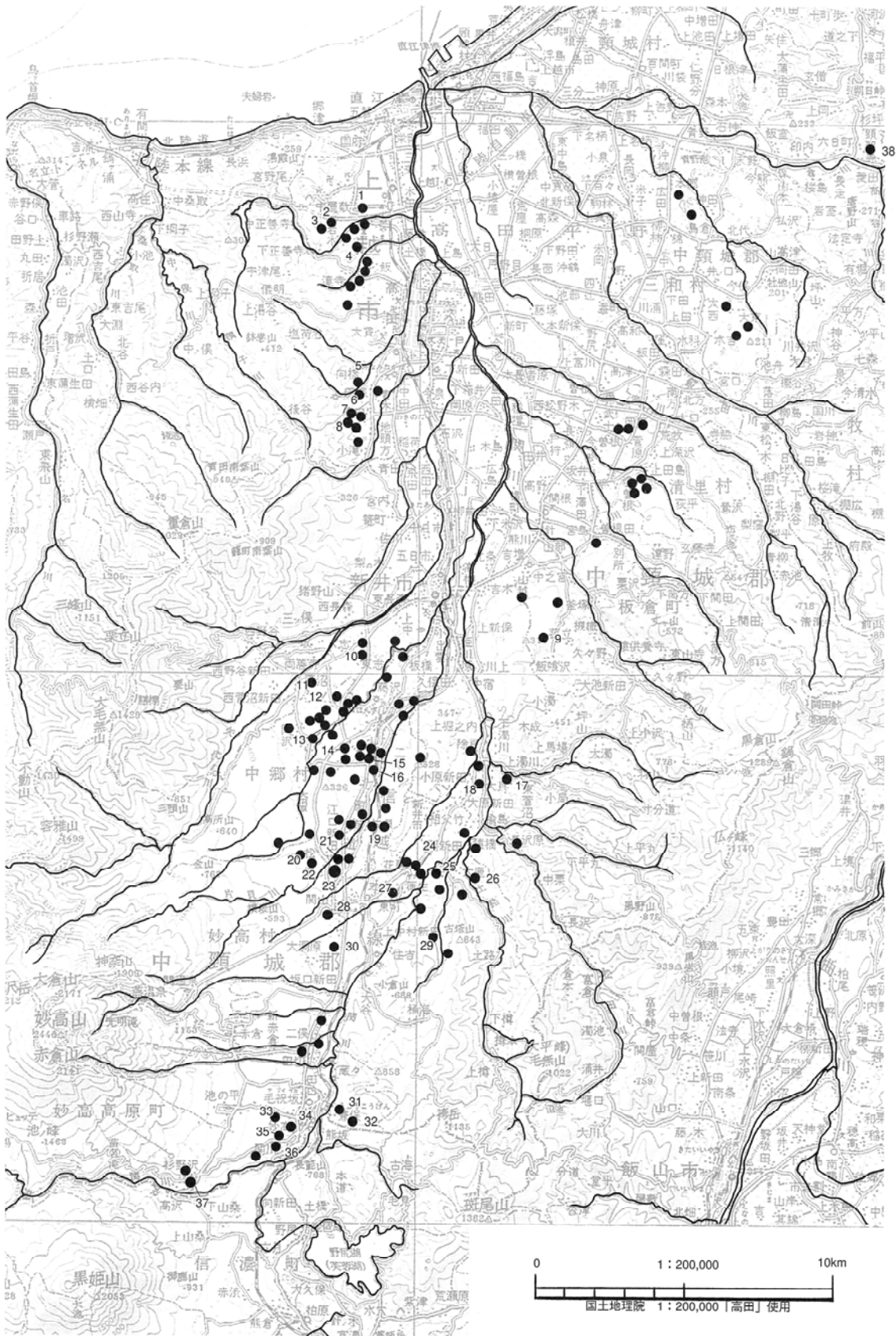
当該期の遺跡は、関川谷内遺跡〔小池1998b〕、新井市三本木新田B遺跡〔立木ほか1997a〕などがあり、有尾式土器が出土している。特に、関川谷内遺跡では赤倉火砕流堆積物層の下位から有尾式土器が出土したことは、赤倉火砕流堆積物の噴出物時期を再検討する契機となった〔小島1995〕。

(2) 赤倉火砕流堆積以後、大田切川火砕流堆積以前

a. 前期後葉～中期前葉

山麓部・平野部ともに、前後の時期と比べると遺跡数が多く、大規模な遺跡も認められる。

山麓部では、主に妙高山北東側に点在しており、湯の沢B遺跡〔室岡ほか1966〕、籠峰遺跡〔中郷村教委1987〕、柿ノ木町遺跡〔親跡1992〕、和泉A遺跡で、下位の赤倉火砕流堆積物層と上位の大田切川火砕流堆積物層に挟まれた層位から遺構・遺物が検出されている。殊に、和泉A遺跡は大型堅穴住居と環状に分布



- 1 八反田
- 2 炭山
- 3 裏山
- 4 山屋敷 I
- 5 蛇谷
- 6 大塚
- 7 黒田古墳群
- 8 下馬場
- 9 峯山B
- 10 三本木新田
- 11 道灌林
- 12 小丸山
- 13 前原
- 14 八斗詩原
- 15 二本木西林
- 16 奥の城 (西峰)
- 17 大貝
- 18 原通りハツ塚
- 19 南田
- 20 松ヶ峯
- 21 籠峰
- 22 湯の沢B
- 23 和泉A
- 24 柿ノ木町
- 25 道添
- 26 松原B
- 27 律生
- 28 柳生
- 29 中古
- 30 大洞原
- 31 兼俣A
- 32 兼俣B
- 33 関川谷内A
- 34 関川谷内B
- 35 中ノ沢
- 36 大堀
- 37 杉野沢
- 38 顕聖寺

第3図 関川流域における縄文時代の遺跡

II 遺跡の位置と環境

する廃棄帯が検出されており、集落構造を検討する上で重要な意味を持つ。また、そこから出土した充実した土器群は、当該期の編年研究を大きく進展させるものである。そのほかにも、妙高高原町兼俣遺跡A地区〔本間・室岡1976〕、妙高村道添遺跡〔室岡ほか1994〕・中古遺跡〔室岡ほか1986a〕、中郷村南田遺跡〔親跡1988〕・道灌林遺跡〔野水1998〕、新井市原通八ツ塚遺跡〔甘粕・小野1982〕・大貝遺跡〔中川ほか1967〕などでも当該期の良好な資料群が得られている。

平野部では、数少ないながらも当該期の遺構・遺物が発見されている。上越市黒田古墳群〔田海1998〕の墳丘下から前期後葉の遺跡が発見されている。中期に入ると、上越市山屋敷I遺跡において、拠点的な集落が形成されはじめる〔上越市教委1978〕。集落からは、中期前葉から後葉にかけての遺構・遺物が検出されている。東頸城丘陵の板倉町峯山B遺跡においても当該期の充実した資料群が出土している〔秦ほか1986〕。

b. 中期中葉～中期後葉

当該期の遺跡数は、山麓部・平野部ともに少ないものの、いくつかの大規模な遺跡が発見されている。

山麓部で特に注目されるのは、中葉の中郷村前原遺跡〔橋谷田1997〕である。弧状に並ぶ7軒の竪穴住居と、それを取り囲むような位置に土坑が検出された。また、竪穴住居の中には焼失家屋が認められ、住居構造を考える上で重要な資料である。そのほか、妙高高原町兼俣遺跡A地区〔本間・室岡1976〕、和泉A遺跡では、後葉の土器が出土しているが、和泉A遺跡では大田切川火砕流堆積物層に位置づけている。

平野部では、上越市山屋敷I遺跡で前葉から引き続き後葉にかけて拠点的な集落が築かれる〔上越市教委1978〕。上越市蛇谷遺跡では、痩せ尾根上に後葉の住居跡2軒が信州系の土器とともに検出されている〔星1997a、田海1997〕。

(3) 大田切川火砕流堆積以後

大田切火砕流は、中期末～後期初頭に山麓部一帯を覆ったといわれている。火砕流が覆った地域においては、後期以降の遺跡は大田切川火砕流堆積物層より上位に発見されている

a. 後期

発見されている当該期の遺跡は、山麓部・平野部ともに少ない。

山麓部では、兼俣遺跡A地区〔本間・室岡1976〕・南田遺跡〔親跡1988〕で前葉、兼俣遺跡D地区〔室岡1986c〕・籠峰遺跡〔中郷村教委1987〕・松原B遺跡〔小島・早津1995〕で中葉～後葉、中郷村小丸山遺跡〔親跡1990〕で後葉の土器が出土している。

平野部では、炭山遺跡において4軒の竪穴住居跡と配石土坑などが、後葉の土器群とともに検出されている〔三ツ井1997b〕。頸城平野における当該期の数少ない資料として注目される。

b. 晩期

山麓部において大規模な遺跡が発見されている。

籠峰遺跡は、後期中葉～晩期末葉にかけての大規模な遺跡として知られている。石棺状配石80基を含む様々な形態の配石や掘立柱建物跡などの遺構とともに、充実した遺物群が検出されている〔中郷村教委1987・96〕。籠峰遺跡で特筆される石棺状遺構は、東頸城郡浦川原村顕聖寺遺跡においてはじめて発見され〔浦川原村教委1959〕、頸南地方では葎生遺跡で検出されたのを契機とし〔中川ほか1967〕、中郷村奥の城(西峰)遺跡・二本木西林遺跡〔岡本1982〕、小丸山遺跡〔親跡1990〕でも確認されている。また、籠峰遺跡と近接して位置する和泉A遺跡においては、前葉の土坑群と後葉の充実した遺物群が検出されている。

B 弥生時代 (第4図)

弥生時代の遺跡は、山麓部・平野部ともに稀薄である。

山麓部では、これまで中郷村籠峰遺跡で前期～後期末葉にかけての土器が報告されていた〔中郷村教委1987〕ほか、妙高高原町伏見遺跡で土器片が採集されているのみであった。しかし、上信越自動車道建設に伴う発掘調査により、大洞原C遺跡〔三ツ井ほか1997a〕で後期末～古墳時代前期の、和泉A遺跡で前期の土器が出土している。特に、和泉A遺跡の資料群は、県内では報告例の少ない時期の遺物群として注目される。

平野部では、前期にさかのぼる遺跡は現在までに確認されていない。中期の遺跡は、関川左岸の沖積段丘上立地する新井市上百々遺跡が知られており、沖積地の開発が弥生時代にはすでに始まっていたことを示唆している〔高橋1984〕。後期に入ると新井市斐太遺跡や上越市下馬場遺跡・裏山遺跡など、丘陵上に立地する集落やいわゆる高地性集落が頸城平野西側に発見されている。

斐太遺跡は環濠を伴う東日本有数の大規模な集落遺跡として著名である。これまでに2回、部分的な調査が行われ、半埋没状態の竪穴住居跡70基とこれを取り囲む総延長656mにおよぶ環濠が確認されている〔駒井・吉田1962〕。出土土器は後期後半～古墳時代初頭が主体であるが、近年の研究により一部、中期にさかのぼる土器の存在も指摘されており〔滝沢1994〕、集落が営まれ始めた時期が再検討されつつある。

下馬場遺跡は、斐太遺跡から北へ約2kmの地点に位置する後期の集落遺跡である。上越市の確認調査で半埋没住居4基が確認されていた〔小島1989〕が、昨年、その南側が上信越自動車道建設に伴って発掘調査された。その結果、集落の広がり確認され、数十基の住居からなる比較的大きな集落であったことが明らかになった。また、遺跡内で管玉製作の痕跡が認められたことも注目される〔小池1998a〕。

裏山遺跡は、下馬場遺跡から北へ約6kmの地点に独立した島状の台地に立地する後期の高地性集落である。上信越自動車道建設に伴う調査で発見され〔田海1996〕、発掘調査された。その結果、頂上部に8基の住居跡と、急勾配の斜面をめぐる環濠が検出され、防禦的性格の強い高地性集落の全貌が明らかになった〔小池1997〕。また、玉製品・鉄製品など集団の力量を反映すると思われる遺物も出土している。このような高地性集落が出現する背後には、大きな軍事的緊張が存在したことが予想され、畿内政権の外圧を想定する説がある。

C 古墳時代 (第4図)

古墳時代の遺跡は、古墳と集落遺跡で分布の傾向を異にするので、それぞれにわけて概観したい。

(1) 古墳

古墳の分布は、山麓部が全くの空白地帯であるのに対し、平野部は県内でも有数の古墳集中地域である。殊に、頸城平野の周縁には後期の群集墳が密集している。

前期の古墳は、上越市中島廻り遺跡〔小島1991〕・子安遺跡〔上越市教委1993〕で検出された円形に廻る周溝が墳墓に伴うものと評価されている。

中期の古墳は、上越市黒田古墳群、新井市月岡遺跡が報告されている。黒田古墳群は、23基の古墳から構成される5世紀から6世紀にかけての群集墳である。上信越自動車道建設に伴い13基が調査され、木棺直葬の主体部から鉄剣、鉄刀、鉄斧、白玉などの副葬品が出土している〔沢田1997、田海1998〕。関川左岸

II 遺跡の位置と環境

の扇状地上に立地する月岡遺跡では、沖積層に埋没する3基の円墳が検出された。周溝底部から出土した土器の年代から、5世紀中葉に位置づけられる初期的な群集墳と考えられている [高橋1985]。

後期になると、多くの群集墳が頸城平野の東西周縁部に現れる。これらは横穴式石室の有無により、大きく2グループに分けられる。横穴式石室をもたないグループは、頸城平野西側の南葉山麓に灰塚・黒田・南山・稲荷山・青田・観音平・天神堂の7古墳群あり、古墳の総数は220基を超える。造営年代は6世紀を主体として、一部が5世紀にさかのぼる [坂井1995]。最大規模の天神堂古墳群は、現在までに数度の調査が行われ、このうち90号墳の内部主体が天井石をもたない石室であることが確認された [中川・岡本1961]。これにより、主体部は木棺を石で囲って直接盛土したものと推定されている [甘粕1986]。

以上の古墳群に対して、横穴式石室をもつグループは東頸城丘陵縁辺部と頸城平野南西部の扇状地上に分布する。造営年代は6世紀中葉から7世紀とされている [坂井1995]。東頸城丘陵縁辺部の一群は、水吉・水科・宮口・北方・南方・菅原・大塚の7古墳群からなり、古墳の総数は200基を超える。このうち菅原古墳群は最大の古墳群で、頸城平野唯一の前方後円墳を含む。現在に残されている調査記録によると、円墳4基の石室から直刀や鉄鎌、鎧の断片などが出土している。ほかの古墳でもほぼ共通して武器・武具が副葬されていることから、この一群の造営主体は軍事的性格を備えた集団と推定されている [甘粕1986]。頸城平野南西部の一群は、梨ノ木・谷内林・小丸山・三ツ俣・上中・小出雲の6古墳群からなる。墳墓の総数は50基を数えたが、現在では半数近くが壊滅しており、三ツ俣・上中の一部については確認調査の結果、古墳と考えることは難しいとされている [吉田・山本1983]。梨ノ木1号墳は1975年に調査され、巨石を用いた大型の横穴式石室をもつことが確認されている [金子ほか1976]。

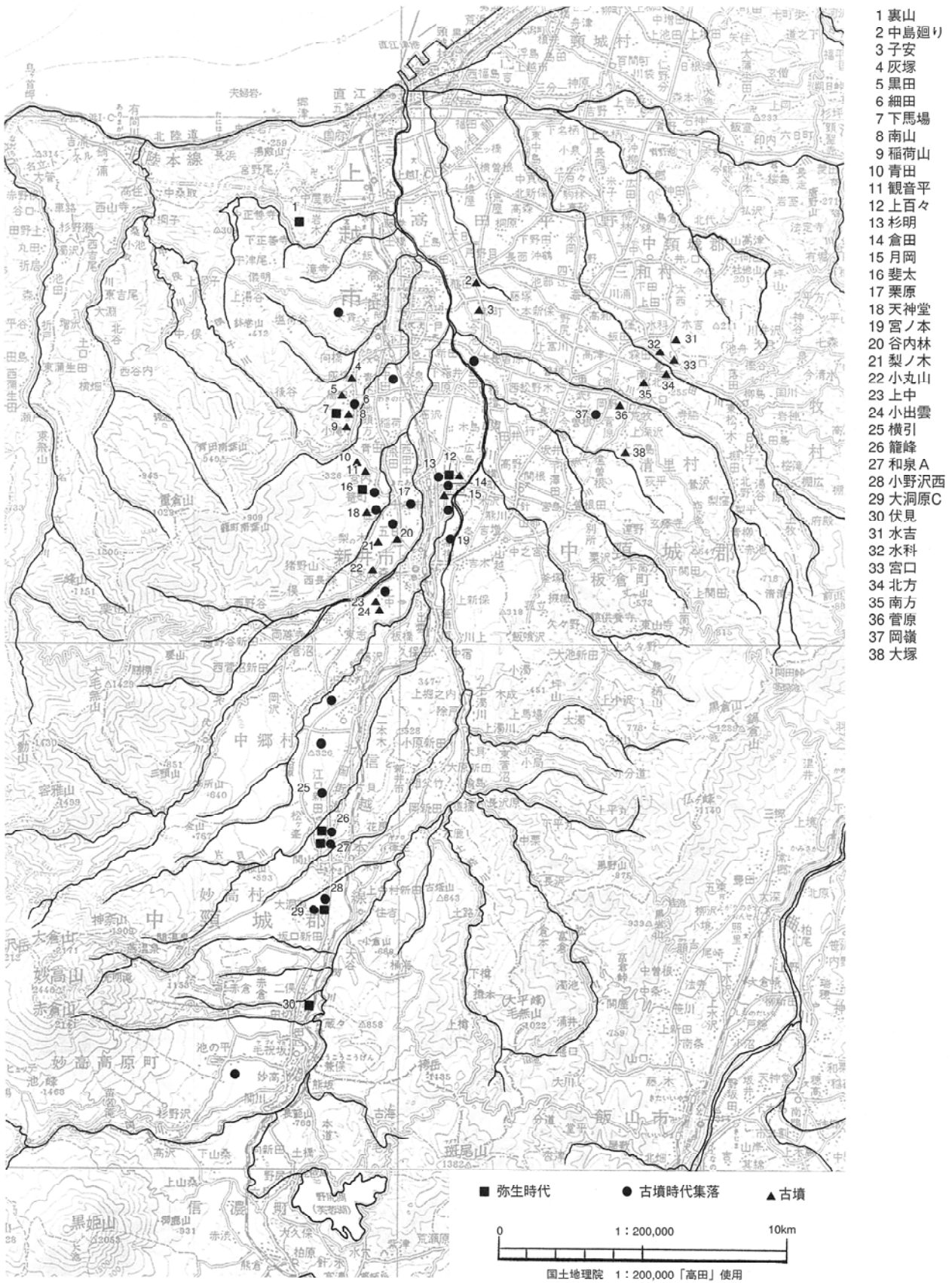
(2) 集落遺跡

一方、集落遺跡の発見例は山麓部・平野部ともに多くない。

山麓部では、関川左岸の妙高山麓に数カ所の遺跡が点在するが、集落遺跡はいまだ確認されていない。しかし、上信越自動車道建設に伴う大洞原C遺跡 [三ツ井ほか1997a] と小野沢西遺跡 [武田1996] の調査で当該期の土器が多量に出土しており、調査区外に集落の存在が予想される。また、籠峰遺跡 [中郷村教委1987、川村1988]、横引遺跡 [立木1996a]、和泉A遺跡などで量的には少ないものの古墳時代の土器が出土している。このように、近年の調査でこれまで空白地帯だった山麓部の様相が明らかにされつつある。

平野部では、多くの古墳群の存在に比して集落遺跡の発見例は極めて少なかったが、近年、新井市教育委員会の調査により、沖積地上の微高地に立地する住居跡の存在が確認されている。前期の遺跡には、上百々遺跡があり、確認調査の結果、竪穴住居状の遺構と溝から古式土師器が出土している。また、黒田古墳群と近接する上越市細田遺跡からも前期の土器集中域が検出されている [吉沢1998]。中期の遺跡には先述の月岡遺跡があげられる。住居跡は未確認であるが、井戸2基と土坑が検出されており、集落の存在が確実視されている。後期に入ると遺跡数は増加する。宮ノ本遺跡の確認調査で6世紀代の竪穴住居跡が1基、倉田遺跡では水田跡が検出された。7世紀代の遺跡には杉明遺跡があり、竪穴住居跡30基が検出されて大規模な集落の存在が推測されている。また、栗原遺跡・倉田遺跡などでも集落跡が確認されている [高橋1984・85・93・96、新井市教委1995]。

一方、東頸城丘陵の岡嶺段丘上の岡嶺遺跡では、竪穴住居跡2基が検出されており、出土土器より7世紀初頭から中頃の時期が与えられている [秦1990]。同段丘上には、菅原古墳群があり、近接するほぼ同時期の集落として注目される。



- 1 裏山
- 2 中島廻り
- 3 子安
- 4 灰塚
- 5 黒田
- 6 細田
- 7 下馬場
- 8 南山
- 9 稲荷山
- 10 青田
- 11 観音平
- 12 上百々
- 13 杉明
- 14 倉田
- 15 月岡
- 16 斐太
- 17 栗原
- 18 天神堂
- 19 宮ノ本
- 20 谷内林
- 21 梨ノ木
- 22 小丸山
- 23 上中
- 24 小出雲
- 25 横引
- 26 籠峰
- 27 和泉A
- 28 小野沢西
- 29 大洞原C
- 30 伏見
- 31 水吉
- 32 水科
- 33 宮口
- 34 北方
- 35 南方
- 36 菅原
- 37 岡嶺
- 38 大塚

第4図 関川流域における弥生時代・古墳時代の遺跡

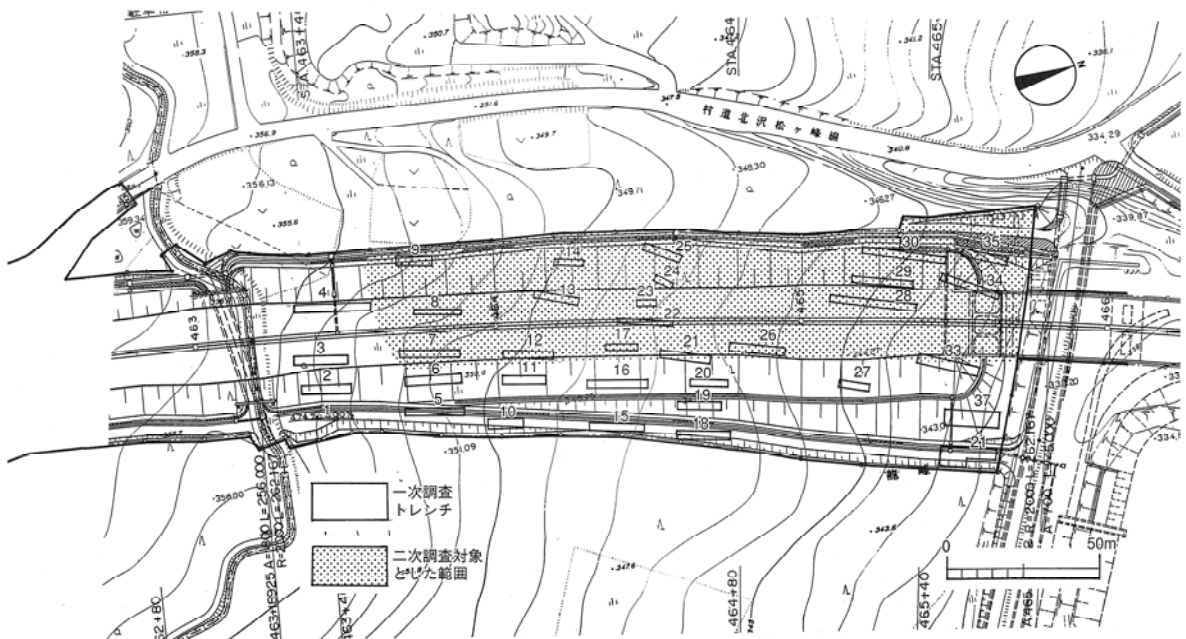
第Ⅲ章 調査の概要

1. 発掘調査

A 一次調査 (第5図)

一次調査は平成4年6月10日から7月19日にかけて行った。調査は対象地域全体に任意にトレンチを設定し、バック・ホーで薄く土層を剥ぎ、遺構・遺物の有無・土層の堆積状況などを確認するものである。トレンチ数は合計35で、調査面積は調査対象面積18,000㎡に対し7.5%を占めた。なお、調査対象地内に未買収地が含まれていたため、この部分は調査を行っていない。調査の結果、8基のトレンチで縄文土器や遺構が検出された。28～30トレンチでは明褐色シルト質土層の下に形成される黑色土層から縄文時代中期初頭の遺物のほか竪穴住居とみられるプランが検出された。縄文時代中期初頭の遺物は21トレンチより南側で認められなかったことから、これより西側に遺跡が広がるものと考えられた。また、24・25トレンチでは縄文時代晩期後葉の遺物が出土したが、28～30トレンチでみられた明褐色シルト質土層はなく、中期初頭の遺物も検出されなかった。晩期後葉の遺物は南側の7・9トレンチで出土したものの、北側の28～30トレンチでは検出されなかったため、24・25トレンチを中心として南側に遺跡が広がるものと考えられた。この結果、両時期の遺物分布範囲が重なっていないと判断され、9,500㎡について二次調査が必要とされた。

しかし、一次調査で検出された明褐色シルト質土層が大田切川火砕流堆積層であることと、地山である黄褐色土層が赤倉火砕流堆積層であることをこの段階で認識しておらず、この二層を混同していた。このことは、二次調査において調査面積が大幅に変更する大きな要因となった。

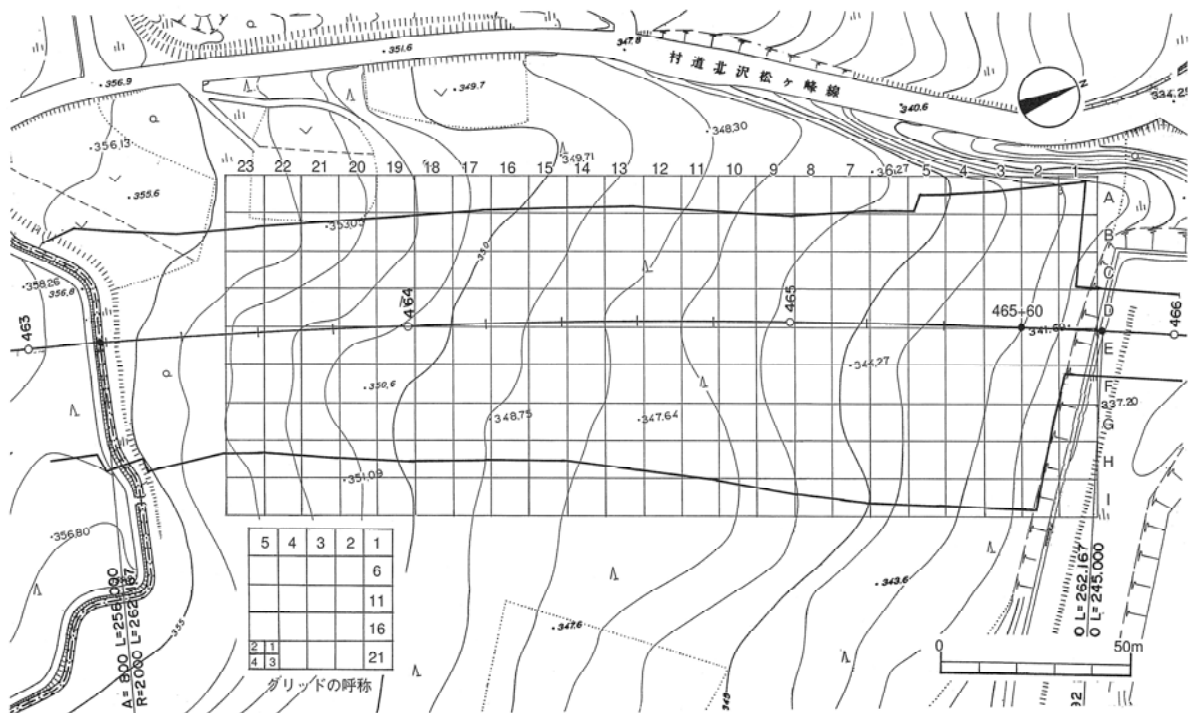


第5図 一次調査のトレンチの位置と二次調査対象とした範囲

B 二次調査

(1) グリッドの設定 (第6図)

発掘調査区は南北に細長く、また、全体的に北側に緩く傾斜していたこともあり、上信越自動車道のセンター杭を利用してグリッドを設定した。S T A. 465+60 (X = 104528.084, Y = -25200.082) と S T A. 464+00 (X = 104376.126, Y = -25250.033) を結ぶ方向を基準として、S T A. 465+60を起点に10m四方の方形を組み、これを大グリッドとした。このため、グリッドの長軸方向は真北から約18度東偏している。大グリッドは北西隅から長軸方向を算用数字、短軸方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。大グリッドはさらに2m四方に分割して北西隅を起点に1～25の小グリッドとし、5B10のように表記した。また、小グリッドはさらに1m四方に細分して1～4とし、5B10-2のように表記した。



第6図 グリッド設定図

(2) 基本層序の観察

掘削調査に先立ち、土層観察用のベルトをグリッドラインに沿って任意に設定した。3C19・20グリッドにあるベルト脇にトレンチを設定して地山面まで深く掘り下げ、基本層序の観察を行った。その結果、明褐色シルト質土層を挟み上下に黒色土層が認められ、下位の黒色土層から縄文時代中期初頭の土器片が検出された。一次調査の結果からこの黒色土層を縄文時代中期初頭の遺物包含層と判断した。そして、表土層から地山までを6層に分層し、ローマ数字を用いてⅠ～Ⅵ層と表記し、さらにⅡa・Ⅱbのようにアルファベットを用いて細分した。後に、黒色土層を分層する明褐色シルト質土層が大田切川火砕流堆積層、地山が赤倉火砕流堆積層であることが明らかとなった。

Ⅲ 調査の概要

(3) 上層の調査方法

表土であるⅠ層の除去はバック・ホーを用いて行った。上層の遺物包含層（Ⅱa層～Ⅲ層）は黒ボク土で柔らかく、掘削はジョレンや移植ごてなどを用いて人力で行った。遺物の取り上げは、平成5年度調査区の一部、平成6年度の大部分、平成7年度調査区のすべてについて位置・標高・出土層位を記録し、他のものは小グリッド単位で取り上げた。遺構精査は大田切川火砕流堆積物層（Ⅳ層）上面でジョレンを用いて行い、検出した遺構は半截し土層断面の写真撮影と実測を行ったが、覆土が単層のものについてはそれを行っていないものもある。遺構平面図は簡易遣り方により手取りで実測した。Ⅳ層上面の地形図および風倒木痕の位置図については、平成5年度はラジコンヘリコプターによる航空測量を利用し、平成6・7年度は平板測量で作成した。

(4) 大田切川火砕流堆積物層の除去

遺跡の北西側では大田切川火砕流堆積物層の堆積が薄かったため、一部人力で除去した。しかし、南東側に行くにしたがい厚く堆積し、層厚が2 m50cmを超える部分もあったため、大部分はバック・ホー数台で除去し、排土は大型ダンプ数台により搬出した。

(5) 下層の調査方法

下層の遺物包含層（Ⅴb～Ⅴc層）は極めて硬く、移植ごてやミニジョレンによる掘削ができなかったため、主に手唐鍬を用いて掘り下げた。出土遺物は小グリッド単位や小グリッドを4細分して取り上げた。堅穴住居から出土した遺物は位置・標高・出土層位を記録した。チップ等が大量に出土した場合は、小グリッド単位や遺構別に土壌をサンプリングした。また、堅穴住居の床面直上の覆土も同様にサンプリングした。そして、これらと比較するために平成6・7年度調査区の大グリッド外枠に設定した土層観察用ベルトの中央部分を層位別にサンプリングした。サンプルはすべて水洗し、チップ・植物遺体等を選別した。遺構精査はⅥ層上面で行ったが、大小の礫が大量に含まれていた上、遺構覆土の区別が難しかったため、Ⅵ層上面の礫をすべて取り除き平坦に掘り下げた段階で行った。遺構発掘において覆土が非常に硬かったため、手唐鍬や鉄製の芋掘り棒を利用した。遺構実測は、ラジコンヘリコプターによる航空測量を利用したほか、主な遺構は簡易遣り方により手取り実測も行った。

(6) 写真撮影

現場での記録写真はモノクロとカラーライドをセットで撮影した。モノクロには6×7版カメラと35mm一眼レフカメラ、カラーライドは35mm一眼レフカメラを使用した。ただし、遺構の完掘写真など特に重要なものは6×7版カメラでカラーライドも撮影した。

(7) 遺物の整理

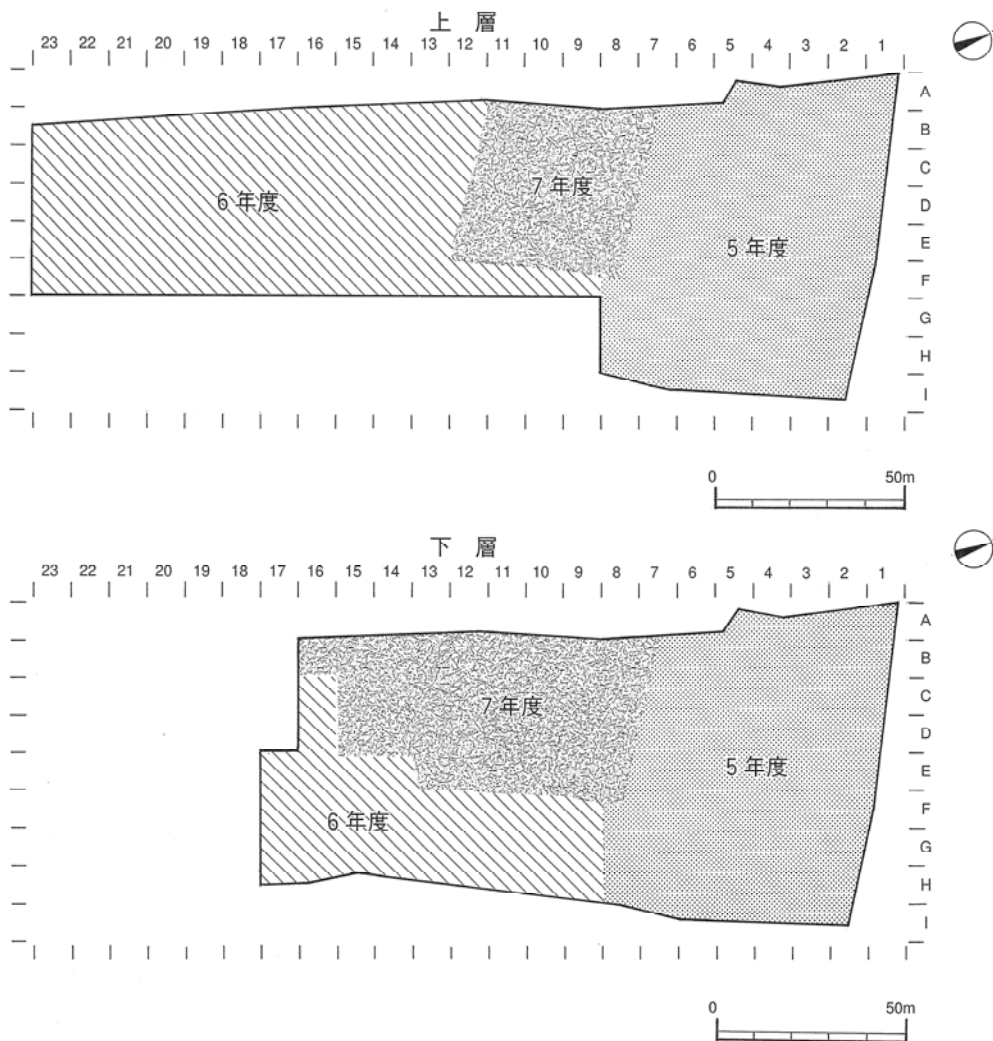
出土した遺物は現場で数名の作業員を専従させて水洗・註記を行った。また、サンプリングした土壌も現場でウォーターセパレーション用の水切りかごを使い水洗を行った。

(8) 遺構の整理

検出した遺構は遺構台帳にグリッド別あるいは検出順に記録し遺構番号を付けていったが、検出数が特に多い場合はグリッド別に仮番号を付した。遺構調査終了後には遺構カードを作成し、調査経過や所見などを記入したほか、関連する図面・写真を貼付した。しかし、調査中に作成できなかったものが多く、それらは調査終了以後に記入した。

C 調査経過

本遺跡の発掘調査は平成5年度～7年度まで3カ年にわたって実施した。一次調査結果による当初計画では平成6年度で終了の見通しであった。しかし、平成5年度の調査途中で遺跡の範囲が上下層とも大幅に拡大することが判明したことで、調査範囲内の中央に未買収地（平成7年度上層調査範囲）があったことから、調査は平成7年度まで延長することとなった。各年度の調査範囲は第3図の通りである。



第7図 年度別調査範囲図

平成5年度

調査面積：上層5,700㎡、下層5,700㎡

調査期間：5月6日～11月19日

当初は、発掘対象面積9,500㎡のうち1～11A～Fグリッドの未買収地を除く4,100㎡を調査した後に、中郷村龍峰遺跡の調査を行う予定であった。

5月6日、調査開始。調査区北西側から重機により表土剥ぎを始める。3～6 A～Cグリッドにおいて晩期の遺物が縄文時代中期の遺物を含まずに出土する。

5月10日、グリッドを設定し杭打ちをする。土層観察用のセクションベルトを設け基本層序の確認をする。黄褐色シルト質土層（IV層）を挟み上下に黒色土層があり、このうちの上層から晩期の遺物が出土す

Ⅲ 調査の概要

る。一次調査の所見では、この地区で晩期の遺物は検出されていないことが報告されていたが、良好な包含層が中期の包含層と別に存在することが明らかとなる。

5月18日～8月2日、上層の調査を行う。1～3 A～Bグリッドで遺物がまとまって出土したほか、土坑群が検出される。4～7 B～Dグリッドおよび8 Dグリッドで多量の遺物が出土する。遺構精査で遺構と考えられた落ち込みは、ほとんどが風倒木痕であることが判明する。6 Dグリッドで集石状の高まりを検出したが、中期の遺物を多量に含むことから、晩期の調査終了後まで現状を維持することとする。後に、これがS I 117の南側周堤部分であることが判明する。

6月3日、妙高火山研究所の早津賢二氏が来跡し、IV層が大田切川火砕流堆積物層、VI層が赤倉火砕流堆積物層であることご教示いただく。

8月4日、上層の航空測量を行う。

8月5日、1～7 A～C区から下層の包含層掘削に取り掛かる。4～5 A～Bグリッドと6～7 E～Fグリッドで中期の遺物と大小の地山礫が帯状となって出土する（廃棄ブロック1・2）。礫を残し、遺物の取り上げを行う。5～6 C～Dグリッドでは集石状の高まりが約10mの環状となって検出され、環状内部の黒色土層からも大量の遺物が出土する（S I 117）。集石状の高まりにトレンチを開け土層を観察した結果、旧表土面上に堅穴住居の堀上土が盛られていることを認識する。6 Fグリッドでも同様に弧状に集石が検出され、さらに調査範囲外に続いていることを確認する（S I 120）。

9月27日、県文化行政課に遺物包含層が上下2層あり調査面積が2倍になっていること、遺跡が調査範囲外にも伸長し1～8 G～Iグリッド（1,800㎡×2層）の追加調査が必要であること、追加範囲のIV層土は厚い部分で2mを超えるため重機による掘削でも相当の時間を要すること、の3点を報告する。そして、調査範囲の拡張と調査期間の延長が決定する。

10月7日、下層の1回目の航空測量を行う。

10月12日、拡張部分の下層の包含層発掘開始。S I 120についても周囲に環状の集石が検出される。

11月4日、下層の2回目の航空測量を行う。

11月8・9日、次年度の調査面積を確定するため、対象地の再試掘を行う。その結果、一次調査において12ラインから南側のIV層を掘り抜いていなかったことがわかり、下層に中期の遺跡が広がっていることが判明する。以上から、次年度調査面積は上層7,800㎡、下層6,000㎡と大幅に増加する結果となる。本年度の調査は、1～3ラインまでを公団に引き渡すものの、4ラインより南側は現状を維持し、堅穴住居の柱穴・周堤の調査と廃棄ブロックの完掘は次年度に持ち越すことにする。遺構内部には土嚢袋を敷き詰めて養生を施す。

平成6年度

調査面積：上層6,200㎡、下層3,500㎡

調査期間：4月18日～11月22日

本年度も遺跡中央部に未買収地が残ったため、上層はこれを除く23ラインまで、下層は9～16ラインE～I区の調査を予定した。上層は12ラインから重機で表土剥ぎと包含層発掘を開始する。12～14ラインで弥生時代初頭のブロックを検出する。15ラインから南側では遺物分布が希薄となったため、17ラインから南側の範囲で2m×2mのトレンチを市松模様にかけて遺物の有無を確認し、重機により包含層を掘削することにする。

上層の調査と併行して5年度調査区に残る竪穴住居の調査を再開する。S I 117ではピットの覆土が地山に良く似ていて識別が難しく、慣れるまでに時間を要した。

6月20日、S I 117の状況から、5年度調査区での遺構精査が不十分であったのではないかと考えられたため、再度、遺構の有無を確認する。その結果、多数のピットを検出する。柱穴の覆土は包含層に比べ一層硬く、完掘までに相当の時間を要す。9～17ラインでは下層調査に備えIV層を重機で掘削を進めたが、深さが2m前後あり難航する。この途中、11・12ラインF・G区でIV層の下部が長径10m以上の小判形状に落ち込んでいることがわかり、竪穴住居と予想する。

7月20日、9ラインから下層の包含層掘削を開始する。遺物は12・13ラインE区で多く、それが未調査区に続いていることを確認する。E・F区で柱穴群を確認する。竪穴住居はIV層を薄く残してベルトを設定して掘り下げ、ピット・周堤を検出する。

9月14日、上層の23ラインより南に遺物が広がらないことを確認し、調査終了。

10月2日、現地説明会を開催する。大堀・中ノ沢・関川谷内の三遺跡の資料も併せて公開する。

10月4日、文化庁記念物課 岡村道雄主任文化財調査官から調査指導を得る。5・6年度調査区で検出した竪穴住居および廃棄ブロックが貴重な事例とのことから、完掘せずに次年度まで現状を維持し、集落全体の状況を見てから遺跡の取り扱いを判断すべきとの指導を受ける。

11月9日、下層の航空測量を行う。本年度の調査によって環状集落の可能性が高まったため、竪穴住居跡周堤部分と廃棄ブロックは掘り下げず現状のまま7年度まで持ち越し、遺跡全体の状況を確認の上で調査することとする。

平成7年度

調査面積：上層1,600㎡、下層2,900㎡

調査期間：4月17日～11月22日

上層は、買収できず調査区中央に島状に残っていた部分の調査を行う。配石状遺構と遺物ブロックを検出し、7月31日に終了。

上層の調査と平行してS I 117・120の周堤下の調査を行う。S I 120では垂木尻跡とみられるピットを検出する。また、5・6年度調査区の柱穴群部分の遺構精査・発掘をさらに行う。本年度調査区では、重機でIV層を剥ぐ途中、12～14ラインで廃棄ブロックの盛り上がりを確認する。

6月6日、東京都国立文化財研究所 宮本長二郎国際文化財保存修復協力センター長から、竪穴住居および掘立柱建物の上屋構造等についてご教示いただく。

7月28日、下層の状況を確認するため7～14ラインのCライン沿いに長くトレンチを入れる。その結果、南側においても柱穴群・廃棄ブロックが検出されたため、環状集落の可能性が一層高まる。

8月1日、7ラインから下層の包含層発掘開始。8～12ラインでは柱穴群の遺構発掘を行う。

廃棄ブロックは盛土状を呈していたため、9月21日に航空測量により地形測量を行ってから掘り下げ、多量の遺物が出土する。S I 403も周堤部の調査を行い、垂木尻跡を検出する。

10月14日、現地説明会を開催する。

11月13日、下層の航空測量を行う。柱穴群について掘立柱建物の検討を行う。

11月22日、すべての調査を終了する。

Ⅲ 調査の概要

D 調査体制

平成4年度（一次調査）

主体 新潟県教育委員会 （教育長 本間栄三郎）
調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）
管理 藍原直木 （専務理事・事務局長）
渡辺耕吉 （総務課長）
茂田井信彦（調査課長）
庶務 藤田守彦 （総務課 主事）
調査指導 戸根与八郎（調査課 調査第一係長）
調査職員 高橋一功 （調査課 文化財専門員）

平成5年度（二次調査）

主体 新潟県教育委員会 （教育長 本間栄三郎）
調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）
管理 藍原直木 （専務理事・事務局長）
渡辺耕吉 （総務課長）
茂田井信彦（調査課長）
庶務 藤田守彦 （総務課 主事）
調査指導 藤巻正信（調査課 調査第一係長）
担当 荒川隆史（調査課 文化財調査員）
調査職員 永井 学（調査課 主任調査員）
藤田豊明（調査課 主任調査員）
星野信明（調査課 文化財調査員）
土橋由理子（調査課 文化財調査員）
山田 昇（調査課 嘱託員）

平成6年度（二次調査）

主体 新潟県教育委員会 （教育長 本間栄三郎）
調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）
管理 藍原直木 （専務理事・事務局長）
渡辺耕吉 （総務課長）
茂田井信彦（調査課長）
庶務 泉田 誠（総務課 主事）
調査指導 藤巻正信（調査課 調査第一係長）
担当 荒川隆史（調査課 文化財調査員）
調査職員 菅井良咲（調査課 主任調査員）
星野信明（調査課 文化財調査員）
山田 昇（調査課 嘱託員）
山崎 天（調査課 嘱託員）

平成7年度（二次調査）

主体	新潟県教育委員会	（教育長 平野清明）
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団	（理事長 平野清明）
管理	藍原直木	（専務理事・事務局長）
	山上利雄	（総務課長）
	亀井 功	（調査課長）
庶務	泉田 誠	（総務課 主事）
調査指導	藤巻正信	（調査課 調査第一係長）
担当	荒川隆史	（調査課 文化財調査員）
調査職員	高木 裕	（調査課 主任調査員）
	菅井良咲	（調査課 主任調査員）
	内山 徹	（調査課 文化財調査員）
	南 雄二	（調査課 文化財調査員）
	石山精哉	（調査課 文化財調査員）
	山崎 天	（調査課 嘱託員）

2. 整理作業

A 整理方法

	平成5年度	平成6年度	平成7年度	合計
土器	158箱	89箱	125箱	372箱
石器	86箱	60箱	114箱	260箱
合計	244箱	149箱	239箱	632箱

(1) 遺物

第1表 年度別遺物出土量

3カ年の遺物出土量は合計632箱（箱：縦40cm×横60cm×高さ10cm）であり、その内訳は第1表の通りである。遺物量の割に土器の復元率が高いのが特徴である。

a. 土器

水洗・註記の後、小グリッドに分けて接合した。また、口縁部片をすべて抜き出し、整理番号を付して、出土位置、層位、口縁部残存率などのデータをコンピュータに入力し、台帳化を図った。そして、所属時期の検討や実測用個体の選別を行った。復元作業は、上層のものについては従来通り石膏を用いた。下層は形状記憶樹脂を芯材とし、その上にエポキシ樹脂を補充する復元方法を用いた。図化は手取り実測のほか、望遠カメラで撮影した写真から実測図をおこす方法を用いた。

b. 石器

水洗・註記が終了した石器全点を観察し、グリッドごと・遺構ごとに一覧表を作成した。それと同時に、グリッドごと・遺構ごとに整理番号を付し、一覧表の記載と石器とを対応できるようにした。特に、下層の遺構出土石器については、出土位置に関する情報は註記されておらず、台帳上で管理されている整理番号が付されていた。すなわち、注記番号をもとに台帳を検索してはじめて出土位置がわかるような状態であった。そこで、石器1点1点をチャック付きのポリ袋に収納し、本来、註記されるべき情報を記載して再整理することを最初に行った。新たに付したこの整理番号は、出土位置に関する情報を盛り込んだものであり、利用者の混乱を招くような性格のものではない。また、観察表はすべてコンピュータに入力しており、報告書に掲載できなかった石器の情報もすべて整理番号をもとに検索できるようになっている。

Ⅲ 調査の概要

観察を経て図化が必要と判断された石器は、簡易実測器を利用して正確に早く実測した。一部、剥離痕の複雑な石器については、写真実測を導入した。なお、リング・フィッシャーは、すべて調査員が記入し、トレースは整理作業に従事する嘱託職員・日々雇用職員が行った。

(2) 遺構

現地で作成した遺構図面には、簡易遣り方による手取り図面と航空測量によるものがある。遺構平面図についてはこの2つをコンピュータによりスキャニングして合成し使用した。これにより希望する範囲と縮尺率でプリントアウトすることが可能となり、下図作成を簡素化できた。各遺構については、位置・規模・底面標高などのデータをコンピュータに入力し、台帳化を図ることにより、掘立柱建物の配置を検討する基礎データとした。

B 整理経過 (第9図)

平成6・7年度

調査終了後の冬期間に、調査職員が遺構カードの作成や図面・写真資料の整理(基礎整理)を行った。また、7年度には、8年度からの長期整理を見越して、上層土器の本格的な接合・復元を開始した。

平成8年度

4～12月までは整理職員が1名であったため、上層土器の復元・実測と下層土器の接合を併行して行った。また、現地でやり残した遺物註記、および土壌サンプルのウォーターセパレーションは外部に委託した。1月からは整理職員が5名に増えたため、石器の整理作業を開始したほか、遺構図版の下図作成を行った。

平成9年度

整理職員は2名であり、遺構・土器と石器の二手に分かれて作業を行った。遺構は、三ヵ年分の平面図をコンピューター上で合成する作業を外部に委託した。土器は、上層のトレースと下層の復元・実測を行った。石器は上層の実測・トレースと下層の観察・実測を行った。

平成10年度

9年度に引き続き整理職員2名が二手に分かれて整理を担当した。ただし、後半では作業の遅れが見られたため、職員2名の協力を得た。遺構は、上下層とも下図作成・トレース・観察表・図版の作成を行った。下層については各遺構のデータを作成し、掘立柱建物の配置について検討した。土器は、下層の実測・トレースの後に、上下層の図版・観察表の作成を行った。石器は、下層のトレースと上層・下層の図版・観察表の作成を行った。そして、すべての原稿執筆と編集・校正を行った。

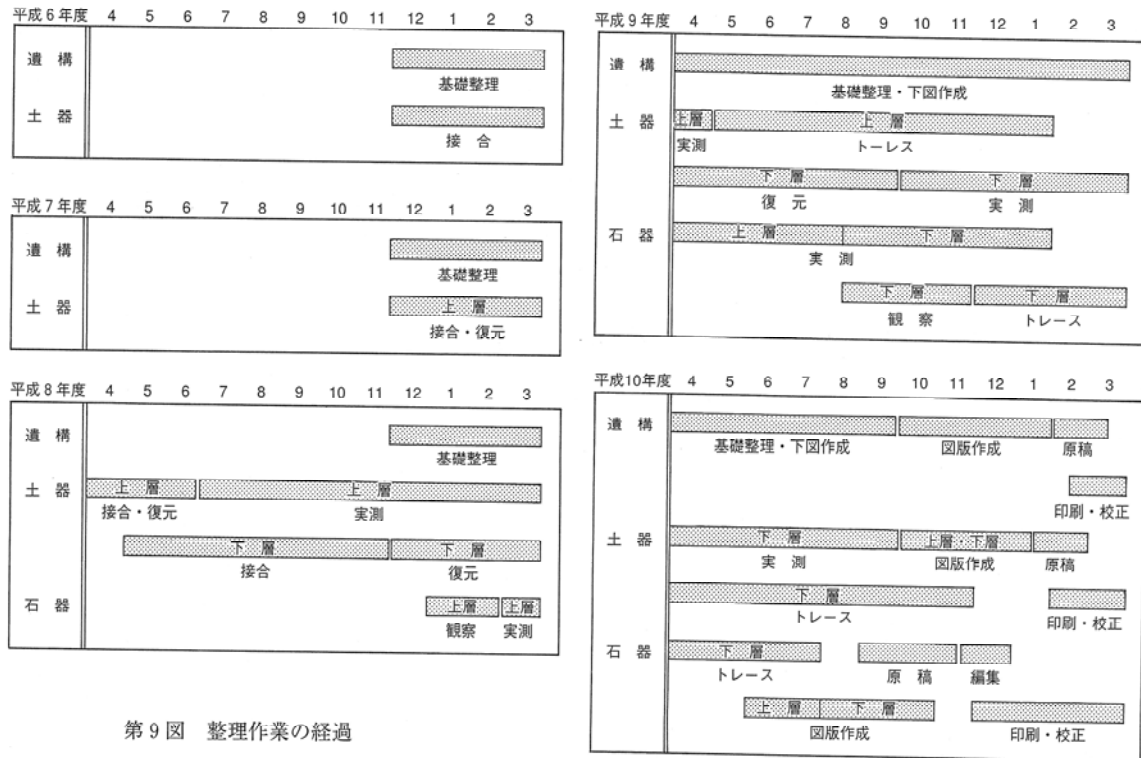


石器実測図のトレース



遺構図面の整理

第8図 整理作業の様子



第9図 整理作業の経過

C 整理体制

整理は県教委の委託を受けて埋文事業団が平成6年度～10年度に実施した。平成6・7年度は発掘調査後の冬期間に基礎整理を行い、平成8年度～10年度には通年で整理を行った。各年度ごとの体制は以下の通りである。

平成8年度

- 主体 新潟県教育委員会 (教育長 平野清明)
- 整理 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 (理事長 平野清明)
- 管理 藍原直木 (専務理事・事務局長)
- 山上利雄 (総務課長)
- 亀井 功 (調査課長)
- 庶務 泉田 誠 (総務課 主事)
- 整理指導 藤巻正信 (調査課 調査第一係長)
- 担当 荒川隆史 (調査課 文化財調査員)
- 整理職員 内山 徹 (調査課 主任調査員)
- 加藤 学 (調査課 文化財調査員)
- 山崎 天 (調査課 嘱託員)
- 江口志麻 (調査課 嘱託員)

平成9年度

- 主体 新潟県教育委員会 (教育長 平野清明)
- 整理 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 (理事長 平野清明)

Ⅲ 調査の概要

管理	須田益輝	(専務理事・事務局長)
	若槻勝則	(総務課長)
	亀井 功	(調査課長)
庶務	泉田 誠	(総務課 主事)
整理指導	藤巻正信	(調査課 調査第一係長)
担当	荒川隆史	(調査課 文化財調査員)
整理職員	加藤 学	(調査課 文化財調査員)

平成10年度

主体	新潟県教育委員会	(教育長 野本憲雄)
整理	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団	(理事長 野本憲雄)
管理	須田益輝	(専務理事・事務局長)
	若槻勝則	(総務課長)
	本間信昭	(調査課長)
庶務	椎谷久雄	(総務課 主事)
整理指導	寺崎裕助	(調査課 調査第一係長)
担当	荒川隆史	(調査課 文化財調査員)
整理職員	小池義人	(調査課 主任調査員)
	野水 仁	(調査課 文化財調査員)
	加藤 学	(調査課 文化財調査員)

第IV章 層序と概観

1. 層序

遺跡の土層は、妙高火山に由来する赤倉火砕流堆積物（AK-p）と大田切川火砕流堆積物（OT-p）により明瞭に区分される。これらの火砕流堆積物は、その後の地形に大きな影響を与えている。本報告では大田切川火砕流堆積物層より以後の堆積土層を「上層」、赤倉火砕流堆積物層と大田切川火砕流堆積物層に挟まれる土層を「下層」と呼称する。表土層から赤倉火砕流堆積物までを大きくⅠ～Ⅵ層に分層し、土質によりさらに細分した。

Ⅰ層 7.5YR3/3暗褐色～7.5YR3/2黒褐色を呈する腐植土を主とする表土層である。

Ⅱ層 黒褐色土を呈する土壌であり、上層の遺物包含層である。本層は、Ⅱa・Ⅱb層に上下二分できる。Ⅱa層は7.5YR3/1黒褐色を呈し、粘性が弱く、しまりがやや強いもので、主に縄文時代晩期後葉以降の遺物を含む。Ⅱb層はⅡa層より色調が明るく7.5YR3/2黒褐色を呈し、しまりが弱いもので、上層の最も良好な遺物包含層であり、縄文時代晩期～弥生時代の遺物を多く含む。なお、18～23グリッドでは、耕作による攪乱を受けている可能性が高く、Ⅱa・Ⅱb層との対応ができなかったため、しまりの強い層をⅡ1層、しまりの弱い層をⅡ2層とした。

Ⅲ層 7.5YR2/1黒色を呈するいわゆる「黒ボク」と呼ばれる土壌で、粘性があり、しまりは弱い。白色の粒子を含む。上層の遺物包含層であり、縄文時代中期末葉・後期・晩期の遺物が出土するが、量は少ない。調査区全域ではほぼ均一に堆積するものの、Fグリッドや調査区南側では堆積が厚く一般的でないため、色調やしまりの特徴からⅢ1・Ⅲ2層に分層した。

Ⅳ層 大田切川火砕流堆積物層であり、「上層」の遺構確認面である。大田切川火砕流堆積物は妙高山の東方から北東にかけて流出し、北東側では片貝川までをその範囲とする。本遺跡では下層調査区南西端から北東端に向かって流れていることが確認された。その厚さは南東側で厚く、北西に向かって徐々に薄くなっている。南東側は火砕流の本流に当たり、厚さは40cmから2mを超える部分もある。本層は10YR5/4にぶい黄褐色～10YR5/8黄褐色を呈す硬い砂礫層（Ⅳb～Ⅳd層）で、厚い部分では径20cm～1m以上の安山岩の礫を多量に含む。また、その下部に7.5YR7/6橙色を呈すシルト質の火山サージ（Ⅳe層）が5cmほどの厚さで堆積する部分もある。一方、北西側では、火砕流に伴う泥流を主とする層（Ⅳa層あるいはⅣ層）となり、火砕流に起因する8/6黄色～2.5Y5/6黄褐色を基本とするシルト質土に暗褐色土や黒褐色土がブロック状に混入する。1～2A～BグリッドではⅣ層が薄く、上層と下層の区分が不明瞭となっている。

Ⅴ層 暗褐色から黒色を呈する土壌で、「下層」に該当する。土質からⅤa・Ⅴb・Ⅴc層の3層に細分される。ただし、集落の中央部および柱穴群の一部と調査区東端の斜面部分では堆積状況が異なっていたため、前者はⅤe～Ⅴg層、後者はⅤa～Ⅴc層として区別した。Ⅴa層は10YR3/3暗褐色を呈し、しまりがあり、粘性が弱く、白色の粒子が混入する。本層には縄文時代中期初頭の遺物がほとんど含まれない。Ⅴb層は10YR2/1黒褐色を呈し、しまりが非常に強く、粘性は弱いもので、白色粒子の混入量が多く、炭化物も混じる。本層は縄文時代前期末葉から中期前葉の遺物包含層である。Ⅴc層はⅥ層への漸移的な層で、10cmほどの安山岩製の礫や砂の占める割合が高いもので、しまりが非常に強く、粘性はない。一部の遺構をこの上面で確認できる。また、縄文時代前期末葉から中期前葉の遺物がわずかに含まれる。Ⅴe～Ⅴg層は、Ⅴa～Ⅴc層にそれぞれ対応するものと考えられる。Ⅴe層は10YR3/2黒褐色を呈し、Ⅴa層に比

べ非常にしまりが弱い。V f 層は10YR2/2黒褐色を呈し、V b層に比べしまりが弱く、薄く途切れるなど堆積が安定しないことが特徴である。柱穴群12Cグリッドはほぼ平坦な面であり、V b層が10cm前後で安定して堆積する。一方、北側に続く11Cグリッドは緩やかな斜面となるが、V b層に代わってV f層が堆積している。そして、平坦な中央部においてもV f層が堆積する。以上から、V b層とV f層の堆積環境に差が認められる。V f層の堆積範囲は、東側では9Eグリッドまで確認できるものの、9ラインより北側ではV a～c層と区別しなかったために確認できなかった。沢a～c層はV a～c層に対応する可能性が高い。沢a層は10YR1.7/1黒色を呈し、粘性が強く、粒子が細かい。下部に褐色の砂粒を含む部分がある。沢b層は10YR1.7/1黒色を呈し、しまりがややあり、鉄分の沈着がみられる。沢c層は10YR3/3暗褐色を呈し、粘性が弱くしまりが強いもので、安山岩製の礫をほとんど含まない。

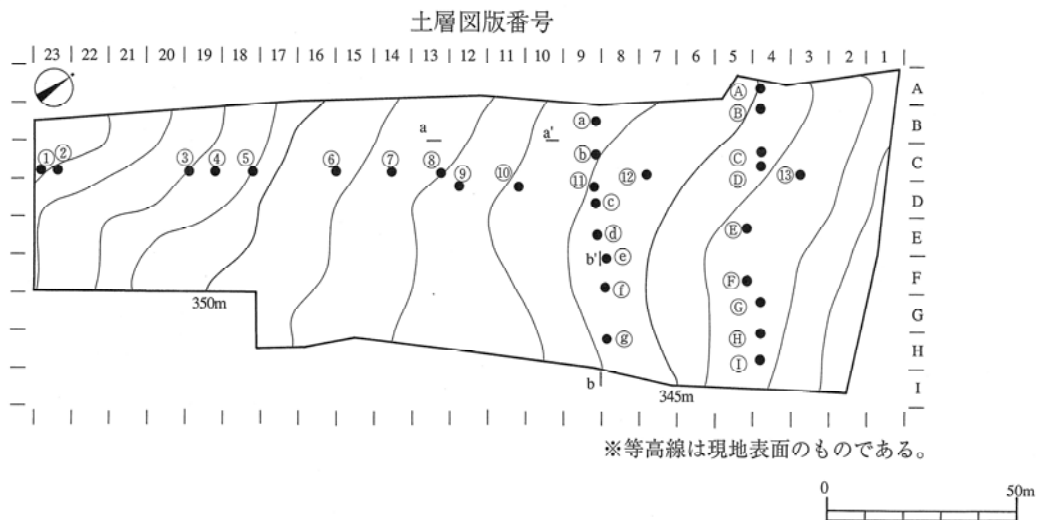
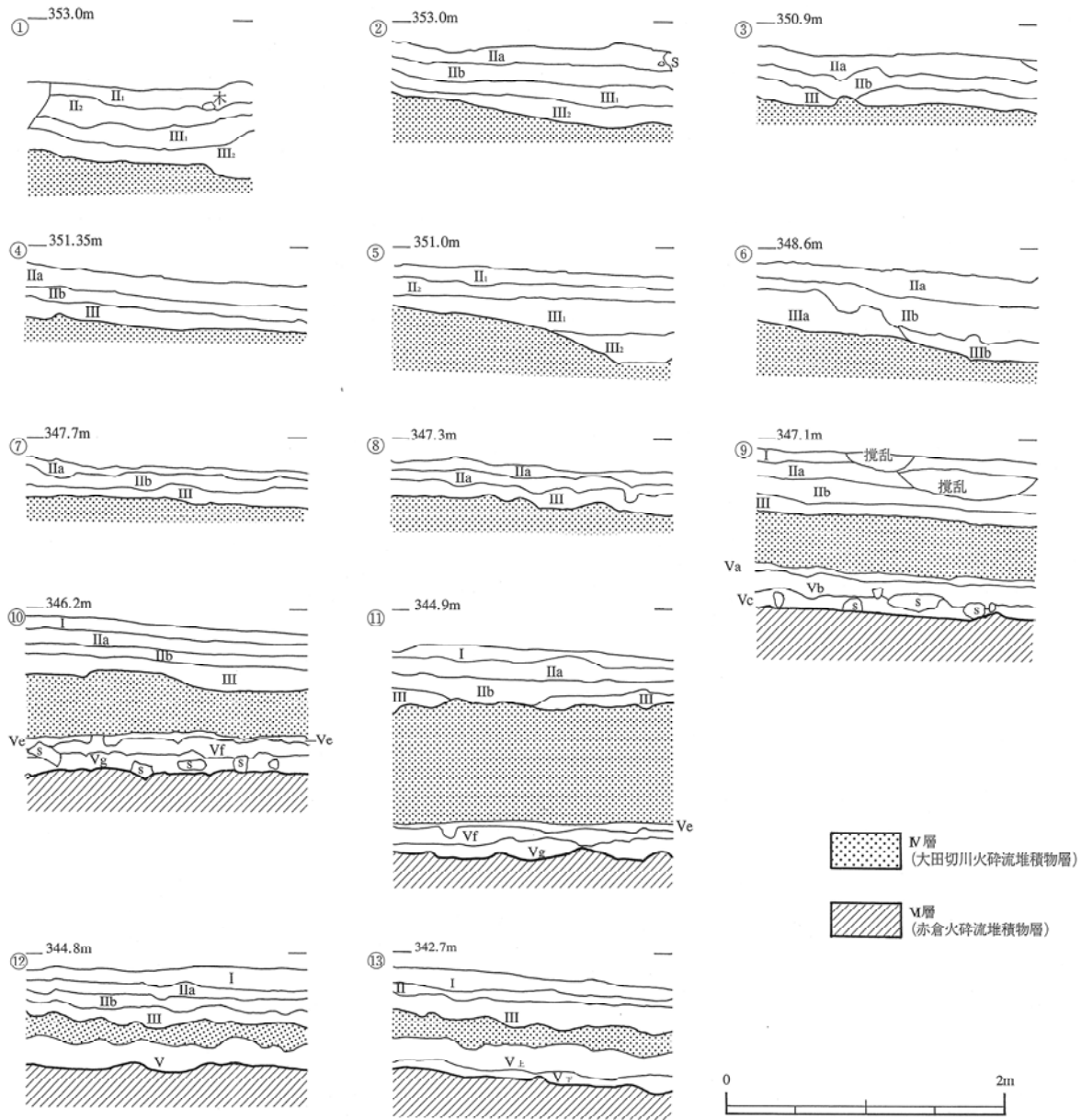
VI層 赤倉火砕流堆積物層である。大量の安山岩製礫を含む砂礫層であり、10YR4/4褐色土を呈す。しまりは極めて強く、粘性はない。「下層」の遺構確認面である。調査区北側の崖断面の観察により10m以上の堆積が確認したため、これ以下の調査を行っていない。11Eグリッドにおいて本層中から炭化木が検出され、放射性炭素年代測定の結果、 5210 ± 70 BPという結果が得られた。

2. 遺跡の概観

上層13,500㎡、下層12,100㎡、延べ25,600㎡の調査を行った。その結果、上層では縄文時代晩期後葉および弥生時代前期を中心とする集落が、下層では縄文時代中期初頭の環状集落が検出された。上・下層とも出土遺物は豊富であり、当該期の基準資料になりうるものと考えられる。以下に、各概要を記す。また、これ以降の遺構・遺物の各説は、「上層」と「下層」に分けてそれぞれ行うものとする。

上層 調査は1～23A～Eグリッドを中心とする南北に長い範囲を行った。遺構は、掘立柱建物5棟、土坑13基、ピット50基、集石土坑1基などが検出された。また、遺物集中地点が14ヵ所認められた。出土遺物量は土器130箱、石器2,488点である。4～14グリッドA～Eグリッドおよび22～23B～Cグリッドの2ヵ所にほぼ平坦な面が認められ、遺構・遺物の多くは前者において検出されている。1～9F～Gグリッドについても調査を行ったが、遺物・遺構は検出されていない。出土土器から縄文時代後期中葉～後葉・晩期前葉～後葉・弥生時代前期～中期初頭に大別される。遺物集中地点は、晩期前葉と晩期後葉および弥生時代前期～中期初頭に形成されたものである。遺物集中地点の西側は、遺物が希薄で掘立柱建物やピットが検出されていることから、遺物集中地点の形成に関与した居住域があったものと考えられる。

下層 調査は1～17A～Iグリッドについて行った。その結果、4～14A～Gグリッドを中心に、竪穴住居3軒、掘立柱建物41棟、土坑25基、柱穴列3基、ピット868基（掘立柱建物・柱穴列除く）、溝1基などが検出された。ピットは、半環状に密集して検出された。その多くは柱穴とみられることから、これらを「柱穴群」と総称する。柱穴群では掘立柱建物39棟を認定したが、これ以外にも多数の掘立柱建物があったものと予想される。また、柱穴群の外縁に平行して遺物・礫が濃密に出土した。これを「環状廃棄遺構」と名付けた。竪穴住居は環状廃棄遺構と重複ないしその外側において検出された。いずれも長軸10mを超えるもので、外縁に盛土による周堤を伴う。柱穴群より集落内側は遺構・遺物の空白域となっており、これを「中央部」と呼ぶ。以上から、下層の集落は、中央部の周囲に掘立柱建物が巡り、さらに外縁に環状廃棄遺構および竪穴住居をもつ、直径約100mの環状集落と予想される。出土遺物量は土器242箱、石器69,161点である。出土土器から、この集落は縄文時代中期初頭～前葉に営まれたものと考えられる。このほか、中期後葉のものがわずかに出土している。



第10図 土層断面図 (1)

第V章 上層の調査

1. 遺構

A 記述の方法

(1) 記述の方法と遺構の分類

a. 基本方針

個々の遺構を説明するにあたっては、観察表・遺構各説・図面図版・写真図版を用いた。観察表で全ての遺構の記載を行い、遺構各説・図面図版・写真図版で特に重要と思われる遺構の解説を加えた。その記載方法は、以下のように統一した。なお、遺構各説では観察表から読み取れる記載（規模など）を特に必要な場合を除いて省き、写真図版は実測図の補助という観点から選択して掲載することとした。また、記載にあたっては、調査者が調査時の所見を記録した「遺構カード」をもとにしている。

b. 遺構番号

遺構番号は、遺構種別の後ろに番号を付した。番号は、コンピュータで管理する上で必要に迫られ、3桁で記録・注記してある。すなわち、遺構番号「3」の場合は「003」といった具合で記録・注記されている。ただし、掘立柱建物跡に関しては、それとは別途に番号を付してある。

c. 遺構の形態分類 (第13図)

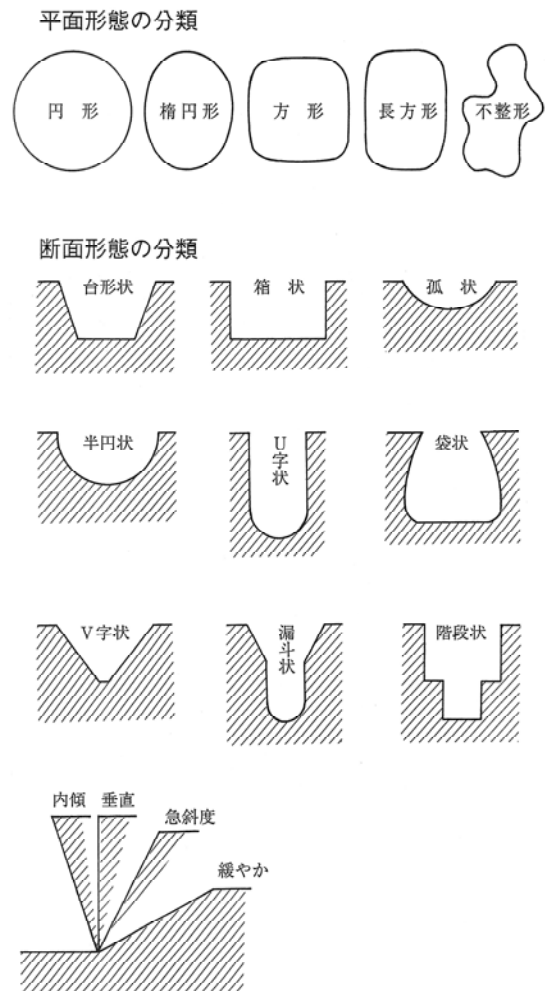
遺構の形態は、平面形態と断面形態を次のような分類基準に基づいて記載した。

① 平面形態

- 円形：長径が短径の1.2倍未満のもの
- 楕円形：長径が短径の1.2倍以上のもの
- 方形：長軸が短軸の1.2倍未満のもの
- 長方形：長軸が短軸の1.2倍以上のもの
- 不整形：凸凹で一定の平面形をもたないもの

② 断面形態

- 台形状：底部に平坦面をもち、緩やか～急斜度に立ち上がるもの
- 箱状：底部に平坦面をもち、ほぼ垂直に立ちあがるもの



第13図 遺構の平面形態と断面形態の分類

- 弧 状：底部に平坦面をもたない皿状で、緩やかに立ち上がるもの
- 半円状：底部に平坦面をもたない碗状で、急斜度に立ち上がるもの
- U字状：確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ちあがるもの
- 袋 状：確認面の径よりも底部の径が大きく、内傾して立ち上がるもの
- V字状：点的な底部をもち、急斜度に立ち上がるもの
- 漏斗状：下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの
- 階段状：階段状の立ち上がりをもつもの

d. 土坑・ピット・掘立柱建物

基本的には、長径1 m以上の掘り込みを土坑、それに満たない大きさの掘り込みをピットと分類した。したがって、単に大きさのみを基準としているため、性格の差などを十分に検討したわけではない。そのようなこともあり、観察にあたっては両者を同等の基準で検討することとした。検討するにあたっては、形態・規模・覆土・出土遺物のほか、底面標高・柱痕・根固めの状況などを記録した。規模については、確認面（上場）の長径と短径、底面（下場）の長径と短径、確認面から最深部までの深さを記録した。こういった記録をもとに、底面標高・覆土・規模の近似するものの配列に、方形や長方形などの規則性が認められたものを掘立柱建物と判断した。

(2) 図化の方法

a. 全体図（遺構配置図）

調査区内における遺構配置を示す図面である。

b. 個別図

図化にあたっては、平面図・セクション図・エレベーション図で提示することを基本とした。また、必要な場合は個別図のほかに遺構群内の配置を示す平面図も別に用意した。縮尺率は、原則的には1：40に統一した。しかし、著しく大きい遺構や、細かい表現を必要とする遺構に関しては、適宜、縮尺率を変えてある。なお、スケールは全ての図版に明示してある。

B 遺構各説

(1) 土坑（図版2・3）

a. 土坑群（図版2）

調査区の北西側、2A・3Aグリッドに長径120cm前後の円形の土坑8基が近接して検出された。規模・形態とも類似しており、晩期の土器が出土している。また、そのうち3基は墓坑である可能性がある。これらのまとまりを有意な一群と考え、「土坑群」と呼ぶこととした。

S K 002 平面形は円形、断面形は浅い逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

S K 003 VI層精査中に検出された。平面形は円形、断面形は浅い台形を呈する。遺物は出土しなかったが、確認面上に川原石3点が確認された。墓坑と考えられる遺構が隣接しており、S K 003も同様の性格をもったものかもしれない。

S K 004 III層から掘り込まれている。平面形は円形、断面形は半円形を呈する。覆土5層中から安山岩製の垂飾品が出土しており、墓坑である可能性がある。なお、そのほかに遺物は出土しなかった。

S K 005 VI層精査中に検出された。平面形は円形、断面形はやや内傾する箱形を呈する。残存状況は極めて良好で、75cmほどの深さをもつ。覆土が上層と似た土質であること、晩期前葉の土器が出土したことから上層の遺構と判断した。出土遺物には、晩期初頭の土器（図版7-1）、メノウ製の剥片1点、耳栓1点があり、上層の他の遺構と比べると充実している。特に、時期を決定する上で一定の役割を果たす土器と、土坑の性格を考える上で重要な意味をもつ耳栓の出土は重要である。それに加えて、9層中で長さ20cmほどの川原石が、その直下（5層中）から甕形土器1個体がつぶれた状況で出土した点は注目される。また、耳栓はその下の7層の覆土を水洗した際に検出されたものである。これらの遺物出土状況から、墓坑である可能性が高いと考えられた。そこで、それを裏付けるため覆土のリン・カルシウム分析を実施したが、有効な結果を得ることはできなかった（第Ⅶ章2参照）。

S K 006 II～Ⅲ層中で検出された。平面形は円形、断面形はやや内傾する箱形を呈する。残存状況は極めて良好で、120cmほどの深さをもつ。遺物は、覆土上部（2～5層）から晩期後葉の土器（図版7-2～5）やガラス質安山岩製の楔形石器・スクレイパーなどの石器（図版40）が多量に出土したが、覆土下部からは土器片1点と打製石斧1点（図版40-29）のみが出土しただけである。覆土上部の2～5層から出土した遺物に関しては、土坑がある程度埋没した後に覆土を掘り込んだことが断面図から読み取れ、S K 006本体に直接帰属しない可能性もある。

こういった問題点もあるが、上部から出土したガラス質安山岩製石器の特異な出土状況は注目される。垂直幅をもたず平面的にまとまって出土しており、あたかもその場に置かれたような出土状況であった。しかも、それらは全て同一母岩から連続的に作出されたと考えられるものであり、剥片剥離技術を考える上で良好な資料といえる。また、二次加工が入念に施されたものは認められず、素材段階を示す石器群と考えられる。これらの状況から、一括して遺棄された可能性が考えられる。また、墓坑と考えられたS K 005と規模・形態が似ており、覆土のリン・カルシウム分析を実施したが、有効な結果は得られなかった（第Ⅶ章2参照）。

S K 010 調査区の縁辺、崖線際のIV層上面で検出された。平面形は円形、断面形は袋状を呈する。西側の一部が崩壊しているものの、残存状態は良好で、70cmほどの深さをもつ。遺物は出土していない。

S K 011・S K 012 調査区縁辺、崖線際のVI層上面で2基が一部重複して検出された。2基とも平面形は円形で、断面形はテラスをもち階段状を呈する。切り合い関係は、断面の観察からS K 011がS K 012を切っていることがわかる。遺物は出土していない。

b. その他の土坑（図版3）

上述した以外に単独で検出された土坑を取り上げたい。

S K 001 土坑群の北側やや離れた1 Bグリッドに位置し、IV層中で検出された。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。覆土は、黒褐色土の単層であり、V層にみられる白色粒子を多量に含む。出土遺物は礫2点のみであり、時期を特定するようなものは含まれなかったが、土坑群の一角を占める可能性もある。

S K 007

土坑群の南側やや離れた4 Aグリッドに位置し、V層上部で検出された。平面形は円形、断面形は浅い逆台形を呈する。出土した土器の特徴から、上層の遺構と判断した。遺物は、晩期後葉の土器が多数出土しており（図版8-6～8）、底部付近では1個体が押しつぶされたような状態で検出されている（図版8-6）。また、近接する土坑群に墓坑の可能性があるものが認められることから、覆土のリン・カルシウム分析を実施したが、有効な結果は得られなかった（第Ⅶ章2参照）。

S K 013 土坑群の北東側やや離れた1Bグリッドに位置し、Ⅵ層精査中に検出された。平面形は円形、断面形は上部を大きく削平されているため浅い皿状を呈する。土坑群からやや離れて独立して存在するが、土坑群のひとつに取り込めるものかもしれない。遺物は出土しなかった。

S K 116 8Eグリッドに位置し、上層包含層調査中に検出された。平面形は南北に細長い楕円形、断面形はテラスをもち階段状を呈する。覆土中からは、晩期後葉の土器2個体(図版8-9・10)が良好な状態で出土している。また、風倒木痕を切る形で土坑が作られているが、風倒木により形成された穴を利用した可能性がある。

S K 402 23Cグリッドに位置し、微高地の頂部に単独で検出された。確認面は、Ⅲ層中である。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈し、30cmほどの深さをもつ。この周辺はかつて桑畑として利用されており、壊滅してしまい検出できなかつた遺構が存在していた可能性もある。

(2) 掘立柱建物(図版4~6)

上層では、50基にのぼるピットが検出され調査されたが、単発的に存在するものと、数基がまとまりをもって存在するものがある。後者には、大きく7つの群が存在するが、そのうち5つのまとまりにピットの規則的な配列が認められた。ピットの底面標高も共通していることから、それらを有意な一群と考え、掘立柱建物と判断した。しかし、このほかにも掘立柱建物跡を復原できるまとまりも存在する可能性がある。なお、記載にあたっては、籠峰遺跡の報告書[藤原1996]を参考にした。

これらは、縄文晩期後葉~弥生時代中期の弧状に広がる遺物分布集中域(ブロック)の内側に位置している(図版1・第14図)。相伴遺物から明解に説明することはできないものの、それらの遺物集中域と同時期のものと考えられる。

また、上層の遺構は本来、大田切川火砕流堆積物層(Ⅳ層)上面より上位で確認されなくてはならなかったが土の見分けが難しく、下層の地山である赤倉火砕流堆積物層(Ⅵ層)上面まで掘り下げてようやく確認できたものがある。下層の地山で検出された遺構の中から、上層の遺構に特徴的な覆土を伴うものを上層の遺構として抽出している。そこで、Ⅵ層上面で確認されたものについては、本来確認されるべきⅣ層上面の高さを復原することで、ピットの実質的な深さにより近い値を表現した。

S B 1(図版5) 5Aグリッドに位置する。Ⅵ層面で検出されたが、覆土が上層遺構のものと共通することから上層に分類した。配列の平面形は長方形を呈するが、南西側の1本には明瞭な掘り込みは認められなかった。しかし、楕円形の硬化面が検出されており、それを含めて掘立柱建物として判断した。規模は、長辺2.65m、短辺1.95mを測る。ピットは、長径0.3m~0.25m、短径0.22mで、円形を呈する。大田切川火砕流堆積物層(Ⅳ層)上面からの深度は0.6mを測る。

S B 2(図版6) 7Bグリッドに位置する。Ⅵ層面で検出されたが、覆土が上層遺構のものと共通することから上層に分類した。配列の平面形は、長方形の短辺の midpoint 外側に張り出しピットを配しており五角形を呈する。しかし、確認された掘り込みは0.1m程度と浅く、張り出しピットが他端にも存在し六角形を呈した可能性もある。規模は長辺1.6m、短辺1.3~1.2mと非常に小形である。ピットは、長径0.34~0.24m、短径0.26~0.18mを測り、円形や楕円形を呈する。Ⅳ層上面からの深度は0.5mを測る。

S B 3(図版5) 8Bグリッドに位置し、Ⅲ層中で検出された。配列の平面形は、方形の長辺(やや長い側)の midpoint 外側に張り出しピットを配した六角形、いわゆる亀甲形を呈する。ただし、北東側のひとつは、推定される位置と風倒木による攪乱が重なったため検出できず、位置を割り出し復原したものであ

V 上層の調査

る。規模は、長辺3.3m、短辺2.8m、張り出しピット間3.6mを測る。ピットは、長径0.4～0.35m、短径は0.35～0.25mで、円形・楕円形・方形が認められる。確認面からの深度は、0.65～0.45mを測る。

この遺構で注目されるのは、各ピットに上部に方形の石組みが確認された点である。用いられている石は、地山の火砕流堆積物層に多量に含まれるものではなく川原石であり明らかな搬入礫であった。断面を観察したものに関しては、壁際に縦長の石が縦位に差し込まれている様子を読み取ることができる。柱と壁の間に差し込むことで、柱を安定させる役割を果たしていたことが予想される。また、石組みのプランが方形であること、ピット底部のプランが隅丸方形であることは、柱の形状を反映している可能性がある。

なお、方形の石組みはⅢ層中で、ピット底部は下層の地山（Ⅵ層・赤倉火砕流堆積物層）で検出されたものであることを断っておく。すなわち、石組みとピット底部は異なる確認面で発見され調査されており、後日、図面を重ね合わせて配置が重なることが判明したのである。別々に発見され調査された遺構を、同一の遺構と判断した理由は、第1に配置が完全に重なること、第2にピット底部の覆土が上層遺構に特徴的な覆土であったこと、第3に石組みの下にⅣ層を切ったピットが存在することを挙げることができる。断面図・エレベーション図において上部と下部の間をつないでいる破線は、こういった事情から復原した推定線を意味している。

S B 4 (図版6) 9Bグリッドに位置する。Ⅵ層面で検出されたが、覆土が上層遺構のものと共通することから上層に分類した。配列の平面形は長方形を呈し、規模は長辺1.6m、短辺1.3～1.2mと非常に小形である。ピットは、長径0.32～0.2m、短径0.3～0.18mを測り、円形・楕円形を呈する。Ⅳ層上面からの深度は1.0～0.8mを測る。

S B 5 (図版6) 12Bグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出されたが、覆土が上層遺構と共通することから上層に分類した。配列の平面形は、方形の短辺（やや短い側）の midpoint 外側に張り出しピットを配した六角形、いわゆる亀甲形を呈する。ただし、東側の1本は、推定される位置と風倒木による攪乱が重なったため検出できず、位置を割り出し復原したものである。規模は、長辺2.8m、短辺2.65m、張り出しピット間3.8mを測る。ピットは、長径0.4～0.3m、短径は0.25mで、円形が認められる。Ⅳ層上面からの深度は0.55mを測る。

(3) その他の遺構 (図版4)

S S 400 単独で12Eグリッドに位置し、Ⅲ層中で検出された。集石土坑と考えられるが、集石下の土坑の深度は10～20cmと浅い。また、東側には炭化物の集中域が検出されているが、遺構との関係は不明である。遺物の出土はなく、遺物分布の集中域から離れており、帰属時期は不明である。

S X 124 柱穴列1の東側5Bグリッドに位置する。長径30cm、深さ20cmほどの小さなピット状の遺構である。平面形は円形、縦断面形は半円形を呈する。確認面で口縁部を欠いた浅鉢(図版8-11)が見つかったような状態で検出され、その分布と重なるように石器308点が狭い範囲から集中して出土した。また、石器の垂直分布図を作成したところ、10cm前後の深度をもつ浅い凹みも復原された。

石器のうち300点は同一母岩から得られたガラス質安山岩製で、石鏃製作工程に産出されたと思われるものが大多数を占める。しかし、いずれも未成品や調整剥片であり、良好な素材や成品はほとんど含まれていない。すなわち、石鏃製作の失敗品や石屑の捨て場であることが予想される。土器との関係については、いくつかの土器片が覆土中で縦位にささった状態で検出されており、石屑が土器に入れられて一括廃棄された跡であると予想される。

類例として、縄文前期以前と考えられる塩沢町十二木遺跡〔家田ほか1988, 鈴木1992〕で検出された石鏃未成品の一括出土例を挙げることができる。ただし、この一括出土例の中には、SX124のような調整剥片などは一切含まれておらず、未加工の剥片を含む良好な素材のみから構成されている。詳細な分析を行った鈴木俊成氏は、将来的に穴から取り出し、仕上げを施し、使用することを前提として埋納されたものであると考えている。

SX124例と十二木遺跡例は、狭い範囲から一括して出土した点では共通するが、その性格は石器群の内容の検討から大きく異なるであろうことが予想される。すなわち、前者が不要なものを捨て去った廃棄であるのに対し、後者はその後の利用も考えて置き去られた遺棄〔岡村1978〕と評価できよう。

また、十二木遺跡では、製作技術の共通性と母岩の種類が少ないことに着目し、短期間に限定された作り手が製作した可能性を予想しているが、SX124についても同様のことが考えられる。石器群の詳細については後述するが、両者を比較検討することは石器製作を復原するに留まらず、製作者に接近する有効な手掛かりといえる。

(4) ブロックの認定 (第14図)

上層では、特定の範囲に遺物が集中する傾向が認められたため、この範囲を遺物集中地点（以下ブロック）とした。これらは2～14ラインA～E区に分布し、合計14ブロックを認定した。その範囲は土器の重量分布図における遺物の特に集中する地点を中心とし、調査時の出土状況及び土器の接合関係を参考に括った。

ブロック1 2Aグリッド南東隅を中心に2A～3Aグリッドに分布する南北16m、東西8mの範囲である。土坑群と範囲が一部重なっている。この範囲はほぼ平坦な面となっており、遺物はⅢ層から出土したものが多く、散発的な出土状況ながら、土器の遺存率が高いことと、石器の出土点数が少ないことが特徴である。縄文時代晩期前葉を主体とする。

ブロック2 4B2・3・7・8小グリッドを中心とした径約9m四方の範囲である。この範囲の地形は北東側にやや急斜している。出土層位はⅡb層～Ⅲ層を中心とする。特に中心部では遺物が集中し、出土状況から短期間に廃棄された可能性が高いと思われる。縄文時代晩期後葉を主体とする。

ブロック3 5Bグリッド北東側を中心とした南北24m、東西12mの範囲である。この範囲の地形は6Cグリッド側ではほぼ平坦な面で、その北東側では緩やかに傾斜している。出土層位はⅡb層からⅢ層を中心とする。出土量は多く遺物密度は高いが、土器は細片となっているものが多く、遺存率が低い。ブロックの東辺には1次調査時の29トレンチがあるため、ブロック5との境界が明瞭ではない。縄文時代晩期後葉～弥生時代前期を主体とする。

ブロック4 6B1・6グリッドを中心とする東西・南北約7mの範囲で、ほぼ平坦な面に位置する。出土層位はⅡ層からⅢ層を中心とする。出土量はきわめて少ない。縄文時代晩期後葉～弥生時代前期を主体とする。

ブロック5 6Cグリッド東端及び6Dグリッド西端を中心に5・6-C・Dグリッドに分布する南北19m、東西9mの範囲で、ほぼ平坦な面に位置する。出土層位はⅡb層からⅢ層を中心とする。出土量は多いが、土器は細片化したものが主である。ブロックの東西辺に1次調査時の29・30トレンチがあるため、ブロック3・6との境界が明瞭でない。縄文時代晩期後葉～弥生時代前期を主体とする。

V 上層の調査

ブロック6 6Dグリッド南東端を中心に6・7-D・Eグリッドに分布する南北12m、東西11mの範囲で、北東側に傾斜する緩斜面上に位置する。出土遺物はⅡa層からⅢ層を中心とする。遺物量は少なく、土器も細片化したものが多く、遺存率は低い。ブロック西辺に1次調査時の28トレンチがあり、ブロック5との境界は明瞭でない。また、7Dグリッド中央ではブロック8と接している。縄文時代晩期後葉～弥生時代前期を主体とする。

ブロック7 7Cグリッド中央を中心に7・8-Cグリッドに分布する南北15m、東西10mの範囲で、ほぼ平坦な面に位置する。出土層位はⅡa層からⅢ層を中心とする。土器の出土量は少ないものの、石器の出土点数は多い。ブロック東辺に1次調査時の28トレンチが延びるため、ブロック8との境界が明瞭でない。縄文時代晩期後葉～弥生時代前期を主体とする。

ブロック8 8Dグリッド中央を中心に7～9-D・Eグリッドに分布する南北17m、東西14mの範囲で、ほぼ平坦な面に位置する。出土層位はⅡa層からⅢ層であるが、Ⅱa・Ⅱb層を中心とする。遺物量は最も多く、中心地点では遺物の集中が際立っており、土器の遺存率も高い。また、石器の集中地点は土器よりやや北側にもある。ブロック6と接し、ブロック7との境界は明瞭でない。縄文時代晩期後葉～弥生時代前期を主体とする。

9ブロック 9Cグリッド南東側および9Dグリッド南西側を中心に9・10-C・Dグリッドに分布する南北13m、東西15mの範囲で、北側に傾斜する緩斜面に位置する。出土層位はⅡa層からⅢ層であるが、Ⅱb層を中心とする。遺物量は多く、土器の遺存率が高い。縄文時代晩期後葉～弥生時代前期を主体とする。

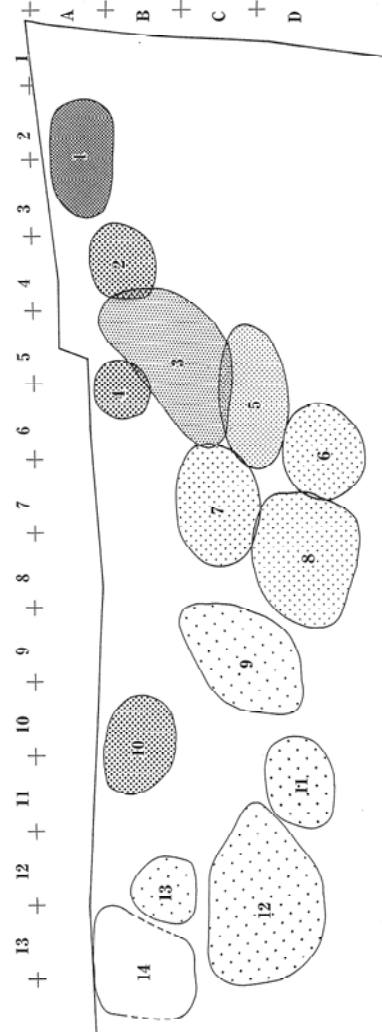
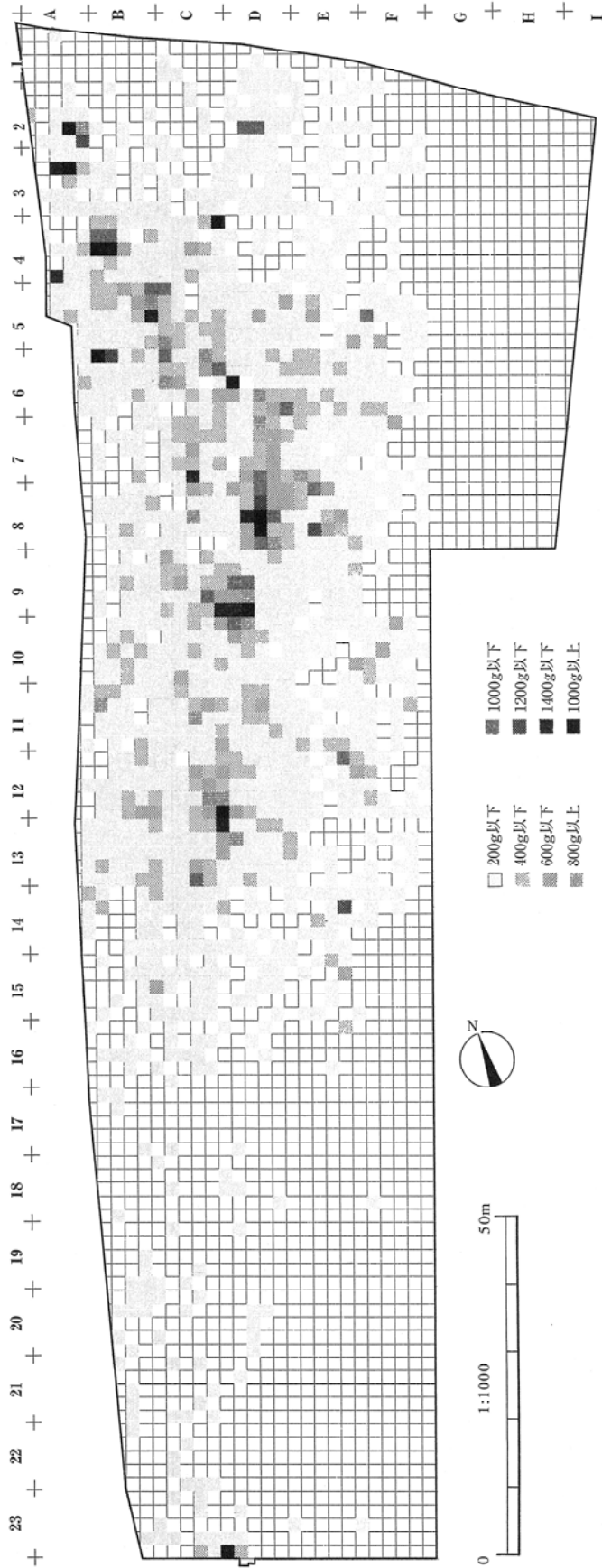
10ブロック 10Bグリッド南西側を中心に10・11-Bグリッドに分布する南北12m、東西9mの範囲で、ほぼ平坦な面に位置する。出土層位はⅡa層からⅢ層であるが、Ⅱb層を中心とする。遺物量は極めて少ないものの、土器の遺存状態が良好なものが含まれる。縄文時代晩期後葉を主体とする。

11ブロック 11Dグリッド北側を中心に10・11-Dグリッドに分布する東西12m、南北9mの範囲で、ほぼ平坦な面に位置する。出土層位はⅡa層からⅢ層であるが、Ⅱb層を中心とする。遺物量は少ない。弥生時代前期を主体とする。








12ブロック 12Cグリッド南東隅及び13Dグリッド北東隅を中心に11～13-C・Dグリッドに分布する南北24m、東西15mの範囲で、ほぼ平坦な面に位置する。出土層位はⅡa層からⅢ層であるが、Ⅱa・Ⅱb層を中心とする。遺物量は極めて多く、土器の遺存率も高いが、密集してはいない。弥生時代前期を主体とする。

13ブロック 12Bグリッド南東隅を中心に12・13-B・Cグリッドに分布する南北8m、東西8mの範囲で、ほぼ平坦な面に位置する。出土層位はⅡa層からⅢ層であるが、Ⅱa・Ⅱb層を中心とする。遺物量は少なく、土器の遺存率も低い。弥生時代前期を主体とする。

14ブロック 14Bグリッド北西隅を中心に13・14-A～Cグリッドに分布する南北14m、東西13mの範囲で、北東側に傾斜する緩斜面に位置する。ブロック中央部を1次調査時の25トレンチが走るが、土器の接合関係等から単一のブロックと認定した。遺物量は少ないが、土器には遺存率の高いものが含まれる。本ブロックは西側の調査区外に続いているものと予想される。弥生時代中期初頭～前半を主体とする。



第14図 ブロックの認定

-  縄文晩期前葉を主体とするブロック
-  縄文晩期後葉を主体とするブロック
-  縄文晩期後葉を主体とし弥生前期後半が一部加わるブロック
-  縄文晩期後葉と弥生前期後半が同じ割合で加わるブロック
-  弥生前期後半を主体とし縄文晩期後葉が一部加わるブロック
-  弥生前期後半を主体とするブロック
-  弥生中期初頭～前半を主体とするブロック

2. 遺物

A 土器 (縄文時代後期～弥生時代)

(1) 土器の分布 (第14図)

上層の土器は、縄文時代晩期後葉～弥生時代前期のものが豊富に出土している。他に縄文時代中期末葉・後期中葉・後期後葉～晩期前葉、古墳時代、古代、中世のものが若干ある。

遺跡は、4～14-A～Eグリッドおよび22～23-B～Cグリッドの2カ所においてほぼ平坦面となっている。このうち前者において、晩期後葉～弥生時代中期の遺物ブロックが合計13カ所認められる。11ブロックを除く2～14ブロックは、概ね弧状に点在している。弧状の内側では土器が希薄で、掘立柱建物が検出されていることから、居住域の可能性が考えられる。2～3-A～Bグリッドは、瘦せ尾根状を呈し、土坑群のほかに晩期前葉の遺物ブロック1が形成されている。東側のFグリッドは沢地状に窪み、遺物ブロックは形成されないが、縄文時代後期後葉～晩期前葉のものが出土している。特に、ブロック5・6の北東側に多く認められる。2カ所の平坦面の間は緩やかな斜面となっており、晩期末葉のものが散見される。22～23-B～Cグリッドの平坦面では、耕作等の攪乱を受けていたため、土器の出土量はわずかである。

(2) 記述の方法

最も出土量の多い縄文時代晩期～弥生時代中期の土器について、器形・文様等に主眼を置いて器種分類を行い、以下の各説においてこの分類に従い記述することとする。また、これ以外の土器についてはその都度、記述するものとする。記述の順序は、遺構出土、遺物ブロック出土、遺物ブロック外出土とする。遺構出土は、遺構覆土および遺構直上の遺物包含層から出土したものとする。遺物ブロックは包含層出土ながらも出土地点にまとまりが認められるものをブロックとして認定し、ブロック別の出土土器について記述した。その他の包含層出土の遺物は、上記以外のもので遺物の出土量が希薄な地点ながらも、特に重要と考えられる土器を抽出した。なお、一次調査のトレンチ埋め戻し土からも土器が多く出土したため、ブロック出土のもの併せて提示した。また、複数のブロック間で接合しているものは、破片数が多い方のブロックに掲載した。

(3) 図化の方法

上層の土器は、手取り実測で行った。口径が推測可能な資料については、できるだけ復元実測を試みた。拓本図は原本をコピーして図版に用いた。

図の縮尺

縮尺率は実測図が1/4、拓本図が1/3を基本とするが、浅鉢形土器や模様の細かいもの、小型品の実測図は1/3とした。これらについては実測図版にそれぞれの縮尺の遺物番号を明示している。

図の表現

土器の地文である条痕文や縄文は、できるだけ施文単位を明示するよう心がけた。断面図における「輪積み痕」は破線で示し、欠損部は波形で表し、実測図および断面図の実存部分は細線でくくり、推定部分と実存部分の境界は間隔を空けて復元部分を実線とした。

(4) 観察表の記載方法

図版に掲載したすべての土器について、観察項目を設定し、その内容を一覧表にした（不明のものは空白）。観察項目は以下の通りである。なお、器種・器形・分類については、次項を参照されたい。

図版No.

上層と下層でそれぞれ1番から通し番号とした。なお、同一個体のもので、実測図あるいは拓本図を複数掲載した場合は、図版No.にa・bのようにアルファベットを加えた。

出土地点・層位

接合したり同一個体とみなしたすべての破片について、出土した小グリッドと層位を記した。遺構出土の場合は、遺構名と遺構内の層位を記した。

外面（内面）調整・施文等

内外面におけるナデ・ミガキなどの調整と、文様を部位別に記した。調整・文様の方向は「↑」などの矢印で表した。調整および文様の施された順序は、「+」記号を用いて古い順に記した。

法量

器形の外寸を計測し、器高・口縁部径・底部径などをcm単位で記した。

胎土・色調・炭化物

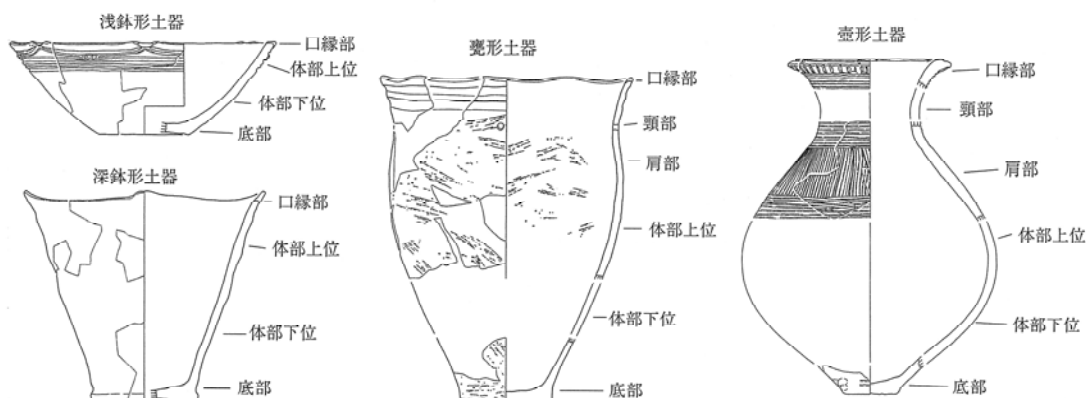
胎土は、鉍物などの混和材を中心に記した。色調は、内外面の色調を標準土色帖〔小山・竹原1994〕に基づき記した。炭化物は、二次焼成による炭化物の付着について記した。

遺存率

口縁部破片から口径を算出し、遺存している率を%で表した。

(5) 分類

上層で検出された遺物ブロックは1～14までであるが、そのうちブロック1を除いて縄文時代晩期後葉から弥生時代の土器が主体を占めている。また、遺物ブロック以外からも良好な資料が出土している。出土土器の分類にあたっては、器形の特徴から浅鉢形土器・甕形土器・深鉢形土器・壺形土器（以下「形土器」を省略する。）の大別器種を設定し、さらに文様や器形により細分を行った。さらに、口縁形態や器形にもいくつか種類があるため、それぞれに基準を設けた。部位の名称は第15図の通りである。



第15図 主要器種分類および部位の名称

①文様の描出手法の分類 (第16図)

縄文時代晩期後葉から弥生時代の土器に施される沈線、および隆線の描出手法は分類が可能である。晩期後葉のものについては、すでに石川日出志氏が分類している [石川1985 b]。ここでは晩期前葉のものも含めて分類を行う。ただし、以下に含まれないものも存在する。

沈線手法①

沈線は浅く幅広のものである。沈線内にミガキは施されず、鋭角的でない。また、沈線同士の間隔が開く。晩期前葉のものに多くみられる。

沈線手法②

沈線幅と2条の沈線に挟まれた隆線幅がほぼ同じもの。隆線の上面は平坦で器面より盛り上がらない。

沈線手法③

隆線幅が沈線幅より狭いもの。沈線手法②と同じく、隆線の上端は平坦で、器面より盛り上がらない。沈線内部はミガキが施されるものが多い。

沈線手法④

沈線は幅広で深い。沈線内部にはミガキが加えられる。沈線の間隔が開く。弥生時代初頭のものに多くみられる。

隆線手法

隆線は沈線より幅が狭いが、沈線部・隆線部にミガキを加えることにより、隆線の頂部に丸みが出来上がり、器面より盛り上がる。沈線の断面形は深く逆台形状となり、立体的である。

浮線手法

沈線部にミガキを加えたり彫去することにより、幅の極めて狭い浮線を描出するものである。なお、浮線の頂部にミガキを加えて平坦にするものと、頂部を断面三角形に尖らすものがある。

隆線帯①

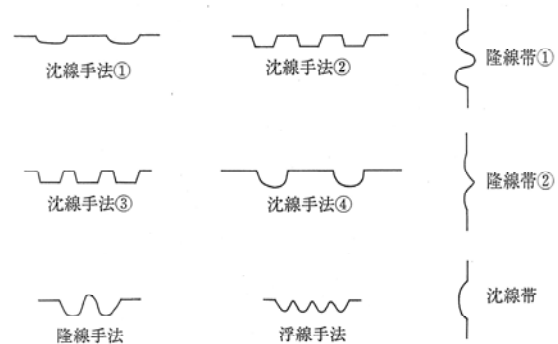
隆線手法によるもの。

隆線帯②

浮線手法によるもの。

沈線帯

沈線部に彫去やミガキを加えて幅広の沈線を作り出す。沈線の上端は鋭角張る。



第16図 文様描出手法の分類

②胎土・焼成

雲母や長石のほか、白色を呈する不透明で光沢のない粒子（以下、白色粒子と呼ぶ）を含むものが一般的であり、焼成は堅緻なものが多い。一方、こうした鉱物の混和が少なく、他のものと比べ比重の軽いものが若干ある。これは、新井市東関遺跡から出土した「発泡土器」[小島・早津1996]と特徴が類似する。以上の在地的な特徴を示すものと外来系のものとを区別することは可能であり、その多くは東海・信州・東北地方からの搬入品かと思われる。東海地方の影響が窺えるものの胎土は、大粒の長石が多く含む器面の粗い、いわゆる「東海系胎土」の特徴を示す。

③器種分類

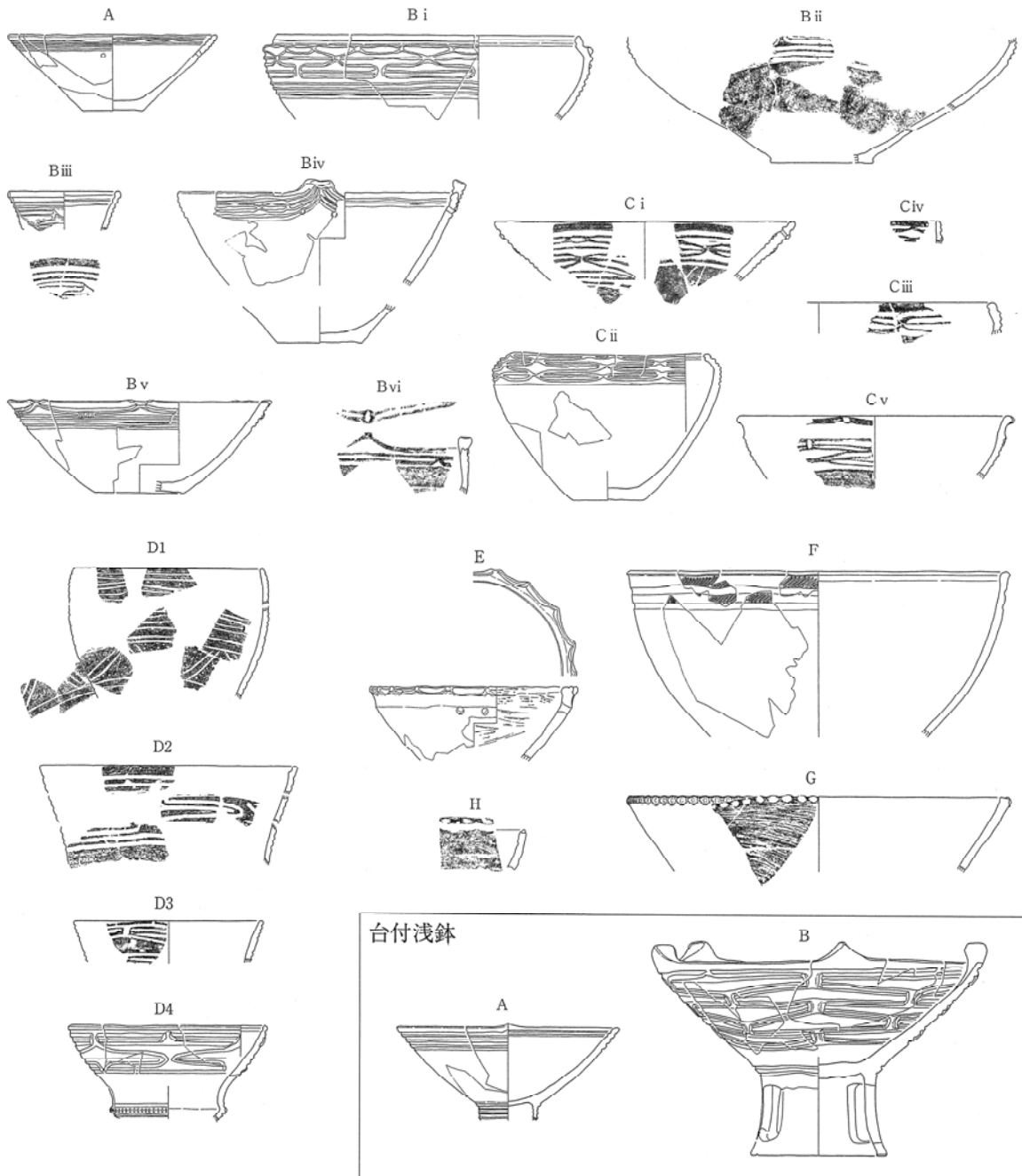
浅鉢

口径が器高を上回るもので、口縁部から体部の屈曲が少ないものである。部位は口縁部・体部上位・体部下位・底部に分かれる。

器形

- 1 口縁部が直立し、張り出す肩部をもつもの。
- 2 口縁部が内傾するもの。
- 3 体部から口縁部にかけて直立、あるいは直立気味のもの。
- 4 口縁部が直線的に外傾するもの。
- 5 屈曲する頸部を有し、口頸部が外反するもの。

浅鉢



第17図 浅鉢・台付浅鉢の分類

V 上層の調査

分類 口縁部と体部上位の文様により分類を行った。

A類 口縁部に平行沈線文が施されるもの。

B類 口縁部や体部上位に各種工字文が施されるもの。工字文の種類により6種に分類できる。

B類 i 器形1で肩部に眼鏡状隆帯をもち、体部上位に工字文が施されるもの。

B類 ii 反転部が連結されない入組工字文が施されるもの。

B類 iii 工字文の反転部が斜位の浮線により連結されるもの。

B類 iv 平行隆線を上下に連結して退化した眼鏡状隆帯風のモチーフが描かれるもの。

B類 v 口縁部に工字文が連なるもの。

B類 vi 口縁部に匹字文が施されるもの。

C類 浮線文が施されるもの。隆線手法と浮線手法を用いるものがある。モチーフの違いにより分類できる。

C類 i S字形を基本とする曲線的な構図で、交点は水平な浮線で結ばれる。

C類 ii S字形が入り組み、1条と2条の浮線で表現されるもの。

C類 iii 紡錘形を横に連続させる構図で、紡錘形の内部には1条から数条の浮線が施される。

C類 iv 交点間に水平な浮線をもたない網目状の構図のもの。

C類 v 細く直線的な浮線3・4条をZ字状に組み合わせるもの。

D類 東北・関東地方を分布の中心とする変形工字文が施されるもの。そのほとんどが搬入品とみられる。沈線手法④が用いられるものが多い。

D 1類 体部でやや丸みをもって立ち上がるもの。

D 2類 体部付近が外反し、体部から口縁部へ直線的に立ち上がるもの。

D 3類 体部から口縁部にかけて台形状に直線的に立ち上がるもの。

D 4類 体部が内湾ぎみに立ち上がり、屈曲した頸肩部を有するもの。

E類 頸部無文帯を有し、口縁部はナデを加えたり外方につまみだすことにより、口外帯風に仕上げられるもの。

F類 口縁部に幅広の平行沈線文が施されるもの。

G類 口縁部に玉縁状の押圧文が加えられ、体部に条痕文が施されるもの。

H類 全面無文のもの。

台付浅鉢

A類 口縁部と台部に平行沈線文が施されるもの。

B類 体部に変形工字文が施されるもの。台部にはすかしが入れられる。

甕

器高が口径を上回り、屈曲する頸部を有する器形である。上から口縁部・頸部・肩部・体部上位・体部下位・底部の各部位に分かれる。

器形 口頸部の傾きから1～3の器形に分類した。

1 口頸部が内傾し、口径が体部最大径を下回るもの。

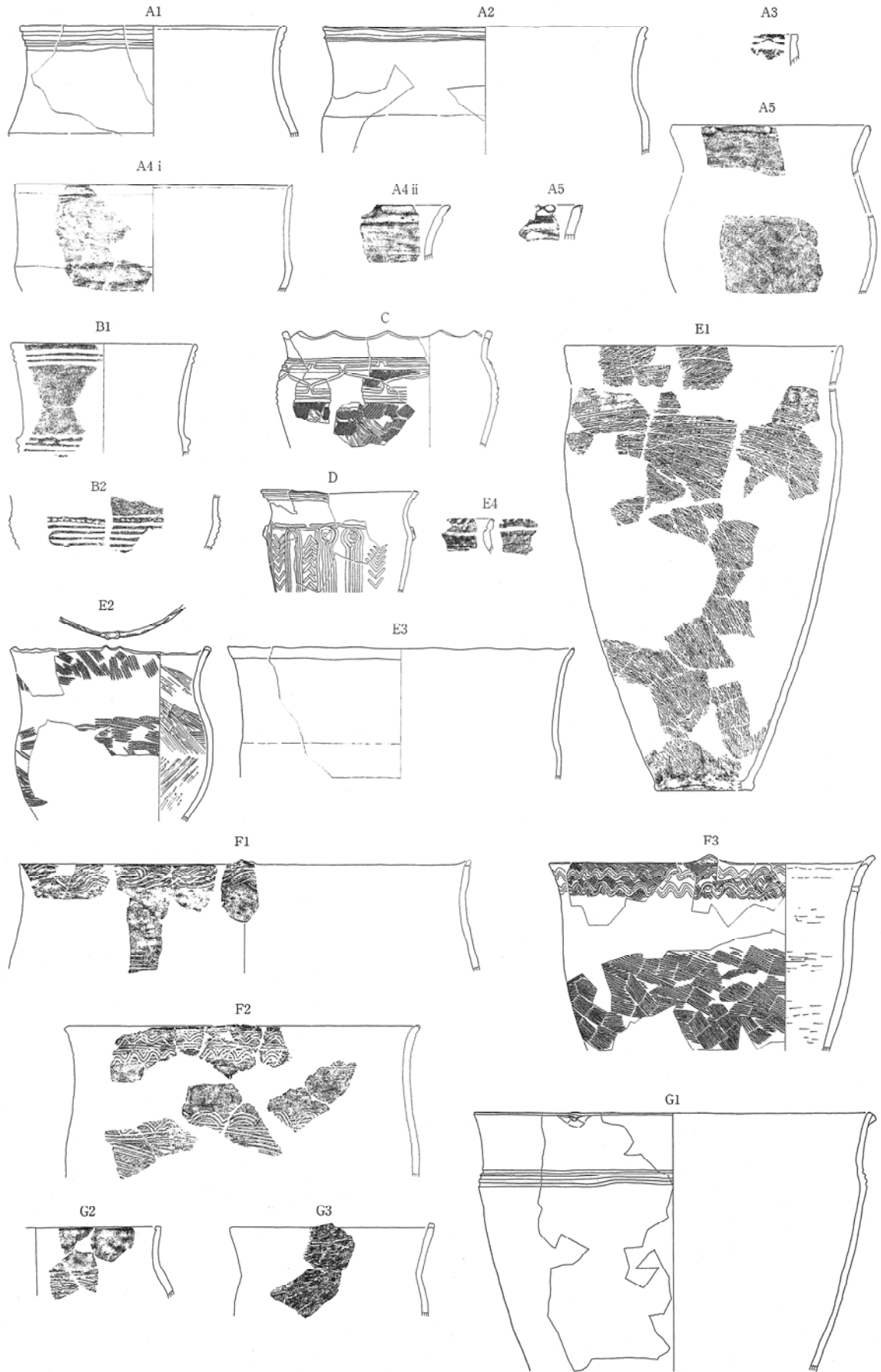
2 口径が体部最大径とほぼ同じもの。頸部の屈曲が強いものと弱いものがある。

3 頸部が外傾または外反し、口径が体部最大径を上回り最大となるもの。頸部の屈曲が強いものと弱いものがある。

分類 文様帯構成と文様種類により分類を行った。

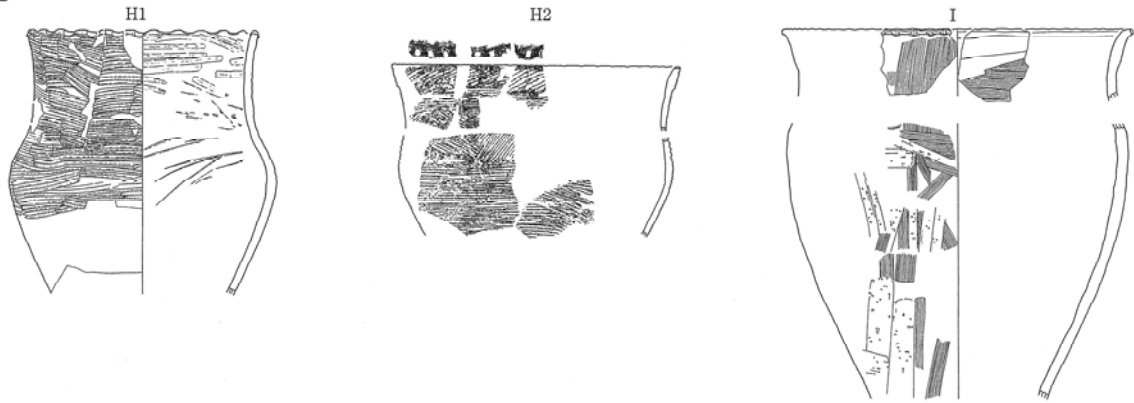
- A類 口縁部を文様帯とし、頸部を無文とするもの。口縁部以外が不明なものも便宜的に含めた。
- A 1類 口縁部に平行沈線文が施されるもの。
- A 2類 口縁部に隆線帯①が施されるもの。
- A 3類 口縁部に工字文や浮線文が施されるもの。
- A 4類 口縁部に沈線帯や隆線帯②が施されるもの。
- A 4類 i 口外帯がないもの。
- A 4類 ii 口外帯をもつもの。
- A 5類 口縁部の口外帯に退化傾向が窺えるもののほか、平坦に面取りされた口端部が外方を向くものや、刻目が施されて玉縁状にするものを一括する。
- B類 口縁部および肩部を文様帯とし、頸部に明確な無文帯を有するもの。
- B 1類 口縁部や肩部に隆線帯①が施されるもの。肩部には眼鏡状隆帯文が付属するものも多い。
- B 2類 口縁部や肩部に工字文や浮線文などが施されるもの。
- C類 肩部が張り、外傾する口頸部がつく器形で、肩部以下に変形工字文が施されるものである。
- D類 肩部に突起をもち、体部に羽状沈線文などが施される、いわゆる「柴山出村式土器」[久田1991]、ないし「沈線文系土器」[永井1994]に類似するもの。
- E類 頸部を無文とするもので、平行沈線文などの単位文様が施されないもの。
- E 1類 条痕文が施されるもの。口縁部の施文方向から、横位のをa種、斜位のをb種、縦位のをc種、羽状に施されるものをd種とする。
- E 2類 撚糸文が施されるもの。E 1類と同様に口縁部に施文方向によりa～d種がある。
- E 3類 撚糸文以外の縄文が施されるもの。
- E 4類 無文のものを一括する。
- F類 E類と同じく頸部を無文とするもので、口縁部や肩部に波状沈線文が加えられるものである。波状沈線文の原体は条痕文の原体と同じ場合が多く、弥生時代中期の櫛描文や水神平式の波状文と区別される。地文の違いなどによりさらに分類できる。
- F 1類 地文はなく、波状沈線文のみが施されるもの。
- F 2類 条痕文を地文として波状沈線文が加えられるもの。波状沈線文の原体は条痕文のものと同一の場合が多い。
- F 3類 撚糸文を地文として波状沈線文が加えられるもの。
- G類 頸部が短く、口縁部に文様帯をもたず、明確な頸部無文帯をもたないもの。
- G 1類 肩部に平行沈線文が施されるもの。
- G 2類 肩部以下に条痕文が施されるもの。
- G 3類 全面無文のもの。
- H類 頸部を有文とするものである。
- H 1類 条痕文が施されるもの。
- H 2類 条痕文に波状沈線文が加えられるもの。
- I類 外面にハケ目調整が施されるもの。

V 上層の調査

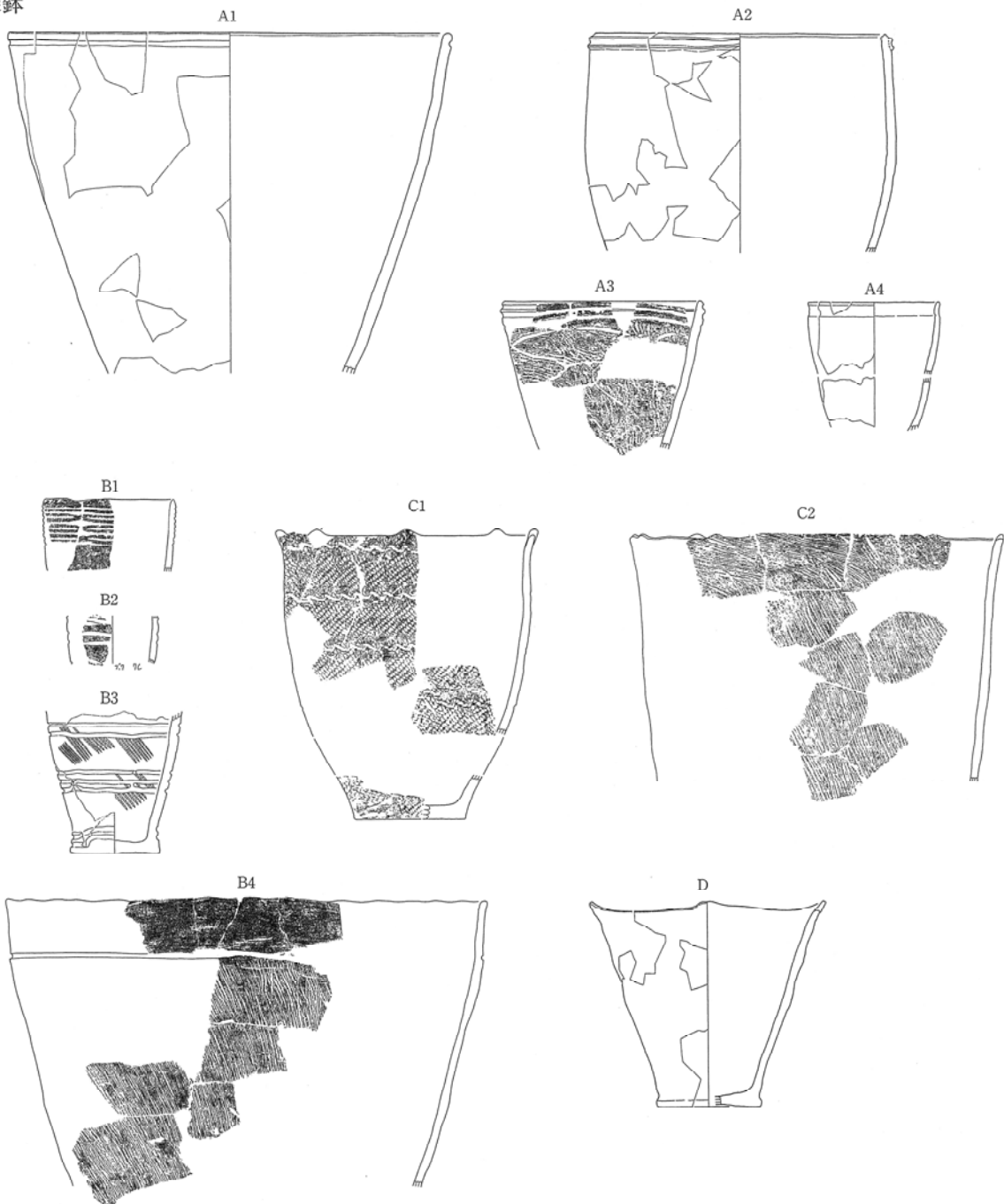


第18図 甕の分類

甕



深鉢



第19図 甕・深鉢の分類

深鉢

器高が口径を上回るもので、口縁部から体部にかけて明瞭な屈曲部をもたないものである。部位は上から口縁部・体部上位・体部下位・底部に分かれる。

器形 1～3の器形がある。

- 1 口縁部が内湾するもの。
- 2 口縁部が直立するもの。
- 3 口縁部が外傾または外反するもの。

分類

A類 口縁部を文様帯とするもの。

- A 1類 平行沈線文が施され、体部は無文のもの。
- A 2類 口縁部に隆線帯①が施されるもの。
- A 3類 口縁部に平行沈線文や隆線帯が描かれ、体部には縄文や稲妻状文などが施されるもの。
- A 4類 沈線帯が施されるもの。

B類 口縁部から体部にかけて文様が施されるもの。

- B 1類 工字文や浮線文が施されるもの。
- B 2類 変形工字文が施されるもの。
- B 3類 体部に平行沈線文と縄文帯をもつもの。平行沈線文に抉りを入れて工字文風に仕上げられるものがある。
- B 4類 体部上位に口縁部と体部を区画する平行沈線文が施されるもの。

C類 単位文様をもたない一群。

- C 1類 口縁部から体部に各種縄文が施されるもの。
- C 2類 口縁部から体部に条痕文が施されるもの。

D類 無文のもの。

壺

頸部がすぼまり、口径が体部最大径よりかなり小さいもの。部位は、口縁部・頸部・肩部・体部上位・体部下位・底部に分かれる。個体数が少なく器形を把握しにくいいため、器形についての分類基準を設定していない。

分類

A類 口縁部や体部に浮線文などの文様帯をもつもの。

- A 1類 口縁部と肩部に平行沈線文が施される広口無頸壺。
- A 2類 肩部が鋭く張り出し、頸肩境に明確な屈曲をもたない長頸壺。
- A 3類 肩部に浮線文が施されるもの。
- A 4類 肩部に変形工字文が施されるもの。

B類 鳥屋式に系譜を求めうる広口大形壺。

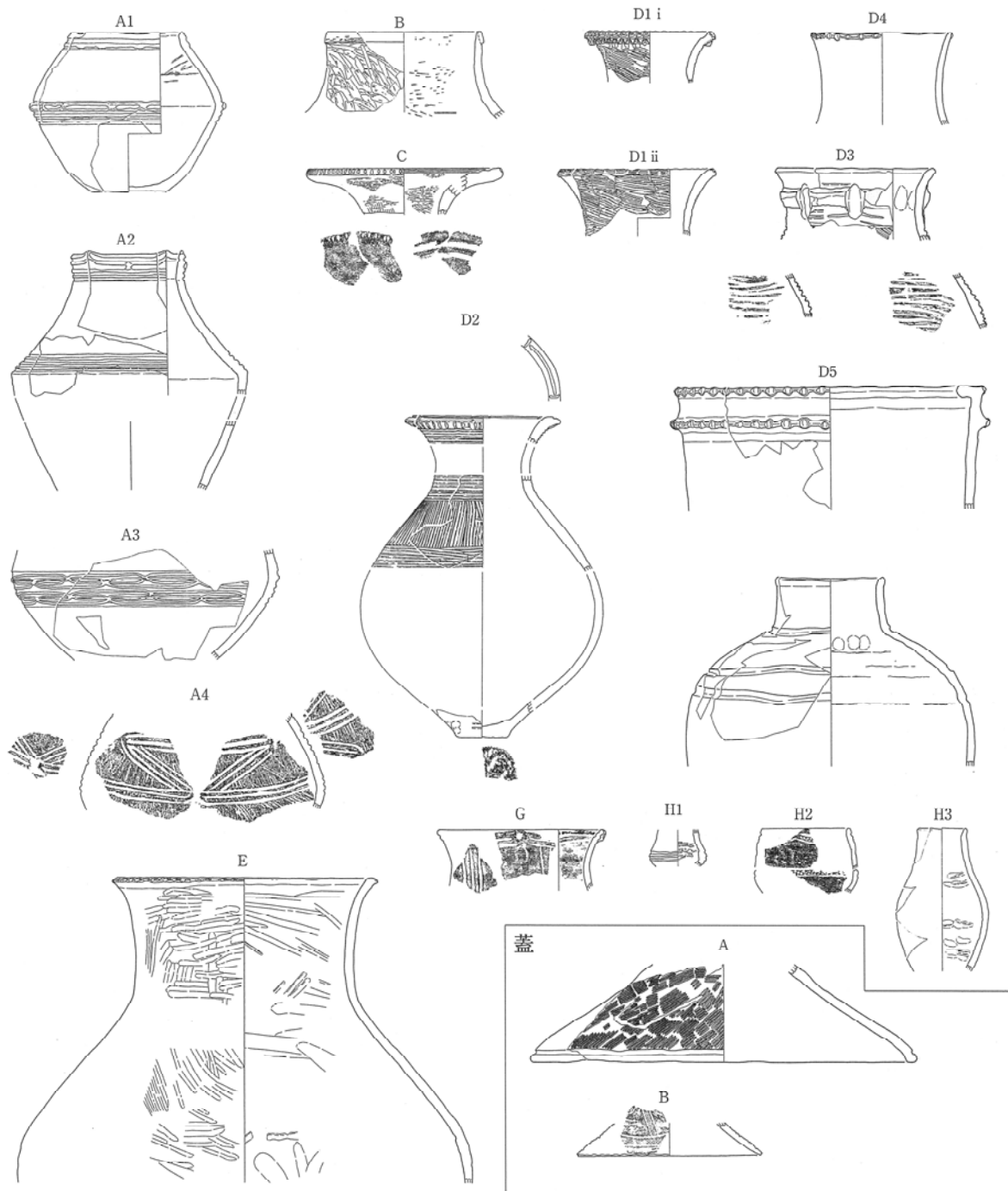
C類 遠賀川系土器と考えられるもの。

D類 東海地方の条痕文土器に系譜を引くものや、それらが信州地方で在地化したもの。

- D 1類 水神平式あるいはそれを模倣したもの。口縁端部に押しき文が施される。「東海系胎土」のもので貝殻腹縁によるものとみられる条痕文が施される体部片も含める。

- D 1 類 i 口縁部に突帯を有するもの。
- D 1 類 ii 口縁部に突帯をもたないもの。
- D 2 類 口縁部に低突帯を付され、頸部以下に条痕文が縦横に施されるもの。
- D 3 類 頸部に突帯をもつもの。
- D 4 類 口縁部に刻目文が施されるもの。
- D 5 類 信州地方で在地化し発展したとみられる突帯が口縁部外面に 2 段付され、突帯上は玉縁状に刻目が入られるもの。信州地方の「在地系突帯壺」[中沢1991]である。

壺



第20図 壺・蓋の分類

V 上層の調査

E類 頸部が直立し、口縁部が外反する大形壺。

F類 口縁部が直立し、体部が丸く張り出す器形で、頸部と体部に平行沈線文が施されるもの。

G類 口縁部が外傾し、頸部には縦位に沈線が施されるもの。

H類 小形品を一括した。

H 1 類 体部上位に平行沈線文などの文様が施されるもの。

H 2 類 無頸壺で口縁部と体部に刺突文が施されるもの。

H 3 類 無文のもの。

蓋

端部から体部にかけて直線的な器形となるもので、2点しか出土していない。

A類 縁部に平行沈線文を描き、体部に縄文が施されるもの。

B類 磨消縄文が施されるもの。

(6) 遺構出土の土器

① S K 005 覆土内の土器 (図版 7 - 1)

1 は遺構の底部付近から器形の約1/3がふせられた状態で出土した。4 単位の波頂部をもつ大形の深鉢である。口縁部には隆帯文が巡り、隆帯上に列状の押圧文が施される。波頂部間には突起が貼付される。体部は無文である。

② S K 006 覆土内の土器 (図版 7 - 2~5)

下層に含まれる縄文時代中期初頭の土器片のほか、晩期の土器が出土した。2 は覆土上面の中央部からまとめて出土した浅鉢で、C類 ii に分類される。口縁部から体部上位に施された浮線文は口縁部に連結するほか、退化した眼鏡状隆帯風のモチーフも部分的にみられる。内屈した口縁部内面には平行沈線文が1条施される。3 は口縁部が緩やかに直立する平縁の深鉢である。口縁部には沈線手法③により平行沈線文2条が引かれる。4 は口縁部がやや外傾する深鉢である。口縁部には沈線手法①により平行沈線文が引かれるが、重ねて引かれているため水平でない。5 は頸部を無文とする甕で、口縁部は外反し、口縁端部に突起が付される。

③ S K 007 覆土内の土器 (図版 8 - 6~8)

6 は頸部が「く」の字状に鋭く屈曲する甕形土器である。口縁部外面は丁寧に面取りされ、小突起が配される。頸部には幅広の沈線帯が二列巡るが、途中で粘土がナデ寄せられたり貼りつけられているため、途切れて若干盛り上がる。体部は沈線帯施文以前に条痕文が縦位に施される。7 は口頸部が外湾する甕で、ハケ目調整が用いられる I 類である。口縁部外面にやや間隔をおいて刻目文が付される。内面もハケ目調整されている。8 は、浅鉢の底部かと思われる。内外面に丁寧なナデが加えられている。

④ S K 116 覆土内の土器 (図版 8 - 9・10)

底部のみを欠損する土器 2 個体が完形に近い状態で出土した。いずれも底部が人為的に打ち欠かれたものとみられる。9 は口縁部がやや内湾する深鉢である。口縁部には沈線手法②により平行沈線文3条が引かれる。口縁部内面は肥厚する。10 は口縁部が直立する甕である。口縁部には沈線手法②により平行沈線文4条が引かれるが、沈線部は浅く、粘土が沈線を部分的に覆っている。肩部は丸く張るが、頸部と肩部の境界は明確ではない。体部には輪積みの痕跡を残す。

⑤ S X124覆土内の土器 (図版8-11)

口縁部を欠く大形の浅鉢1個体が出土した。体部外面は丁寧にミガキが施されるが、口縁部の文様は不明である。

(7) 遺物ブロック出土の土器

① ブロック1出土土器 (図版9-12~20)

主に晩期前葉の土器が出土している。12は渦巻状文をもつもので、磨消縄文を伴う。13も磨消縄文をもつ浅鉢、14は平行沈線文をもつ小形品である。15は逆「L」字状の沈線文が施される深鉢の体部片である。16は12と同様に磨消縄文をもち、欠損部には入組文をもつものと思われる。17~19は沈線手法①により平行沈線文が施される深鉢である。いずれも口縁部内面に陵をもつのが特徴である。20は口縁部がやや外反する無文の深鉢である。17~20はつぶれた状態でまとまって出土した。

② ブロック2出土土器 (図版10・11-21~50)

晩期後葉から弥生時代のものが大半を占め、晩期前葉のもの(40・41)がわずかに含まれる。

晩期後葉~弥生時代

浅鉢 A類(24・25)、B類iii(22)、B類iv(23)、B類v(21)、C類ii(26・29・32)、C類iii(27・28・30)、D3類(36)がある。25の平行沈線文は沈線手法③による。22は浮線手法が用いられ、口縁部内面にも浮線が1条施される。21は沈線手法③で表出されていて、交点部は粘土貼付により盛り上がる。23は浮線手法に近く、眼鏡状隆帯の交点は盛り上がる。また、文様帯の下端は隆線状を呈す。26・27・30は沈線手法③である。その他のC類は浮線手法である。26は浮線文の交点が連結しない部分がある。口縁部内面に突帯状の隆線文が施される。

甕 A1類(42・43)、A2類(44)、B1類(35・45・50)がある。42・43は沈線手法③によるが、43は部分的に隆線状を呈す。50は口縁部に沈線3・4条で弧線文を描くものである。肩部は屈曲がほとんどないものの、口縁部と同様の沈線で3条の平行短沈線文を描いて肩部を意識している。このような途切れた平行沈線文の手法はブロック12の330と共通する。また、口端が平坦に整えられているのも後出的な要素と考えられる。47は口縁部がかかるもので、外面が無文、内面にケズリ痕が残る。胎土は砂粒が少なく、比重が他のものに比べ軽いものである。

深鉢 A1類(46)、A3類(34)がある。34は小形で内外面が赤彩されるもので、口縁部文様は隆線手法によることから便宜的にA3類に含める。

壺 A3類(33)がある。浮線文のモチーフは浅鉢C2類に共通する。

その他 49は高台とみられ、上部に浅鉢が付くものであろうか。内外面に丁寧にミガキが施されており、天地逆の可能性もある。38は撚糸地文に稲妻状文を施すもので、深鉢とみられる。48は深鉢の下半とみられる。

③ ブロック3出土土器 (図版12・13-51~97)

晩期後葉から弥生時代のものが主体を占める。晩期前半のもの(51)は少ない。

晩期後葉~弥生時代

浅鉢 A類(52・53・55)、B類iii(57)、B類v(56)、C類i(59)がある。53は口縁部に弧状沈線文を描き、その下には平行沈線文が施される。57は口縁部に浮線手法により三角形を横に連ねたモチーフが描かれる。交点には粘土が貼付され、縦に刻みが加えられる。58は隆線上に縄文LRが施されるもので、沈線のナゾリが深い。

甕 A 1 類 (65・67・68)、A 2 類 (69)、A 3 類 (66)、A 4 類 i (87)、A 5 類 (88)、B 1 類 (70～76・78・79)、B 2 類 (77)、B 3 類 (85)、E 1 類 b (89・90)、E 2 類 a (92)、F 1 類 (93・94)、F 2 類 (95)、G 2 類 (86) がある。69の隆線は先端があまり尖らず丸みをもつ部分が多い。70は内外面のミガキが顕著であり、口縁部内面にも外面と同様の平行沈線文が施される。71～73は小形品である。74は口縁部がやや肥厚する。75の平行沈線文は沈線手法③だが、部分的に浮線化している。体部には条痕文が縦位に施される。77は内外面にミガキが顕著になされるもので、肩部上端の隆線上に列点文が施される。匹字部分は下方からの隆線の押し上げにより作出される。78・79の平行沈線内には赤彩が残る。86は口縁部に山形の突起が付くもので、頂部が丸く窪む。87の口端は平坦に整えられた面を持つが、こうした特徴は88・90・92～94に共通するものである。88の口縁部下端は、頸部に加えられたナデによりやや膨れる。92は口縁部に捺糸文を縦位に施すc種である。94は内外面とも横位にハケ目調整が行われ、その上に波状沈線文が描かれる。

深鉢 A 1 類 (83)、A 3 類 (80)、B 類 (81)、D 類 (84) がある。80は体部に捺糸文Rを地文として稲妻状文が描かれる。捺糸文の施文方向は斜位を基本とするが、一定していないのが特徴である。82もA 3 類であろう。81はブロック外出土443のような筒形の器形とみられるもので、体部に浮線文が描かれる。84は本遺跡では珍しい口縁部が肥厚するものである。

壺 A 1 類 (62・63)、A 2 類 (64) がある。63は肩部に眼鏡状隆帯が付く。64は口縁部の平行沈線文間に粘土を貼り付けて上下を連結している。

その他 91は甕の体部片とみられ、内面に赤彩が濃く残る。96・97は甕あるいは深鉢の底部である。96は外面に横位のナデを明瞭に観察できる。いずれも時期の識別は難しい。

④ ブロック 4 出土土器 (図版14-98～110)

遺物量は少ないが、晩期後葉から弥生時代の遺物がまとまっている。

浅鉢 A 類 (99)、B 類 i (98)、C 類 i (100・102) がある。99は体部から口縁部にかけて丸みをもつ器形が特徴的である。内外面のミガキが顕著である。98は肩部に眼鏡状隆帯文をもち、その下部に隆線が反転し隣同士が連結しない工字文が付く。口縁部内面に平行沈線が描かれる。

甕 A 4 類 i (107)、A 4 類 ii (110) がある。107は口縁部内面にも外面同様に沈線帯が描かれる。110は口縁部に口外帯と隆線帯②をもつ。106・108・109は甕の体部片である。

深鉢 A 1 類 i (103・105)、C 1 類 (104) がある。105は沈線手法③による。

⑤ ブロック 5 出土土器 (図版15・16-111～148)

晩期後葉から弥生時代の遺物のまとまりであり、晩期前葉がわずかに含まれる。

晩期前葉

111は体部下位がふくらみ、底部を丸く納める器形で、幅広の沈線で渦文や平行沈線文が描かれる。渦文の中心は三叉文状にもみえることと、沈線内や器面にミガキが施されることから晩期前葉と考えたい。112はブロック6出土のものだが、111と同一かと思われる。

晩期後葉～弥生時代

浅鉢 A 類 (114)、C 類 i (115・116・121)、C 類 ii (115)、C 類 iii (117・120・122)、C 類 iv (119)、D 1 類 (137) がある。137は口縁部から体部上位に変形工字文をもち、体部下位は鋸歯状の沈線文と刺突文が施される。

甕 A 1 類 (125)、A 2 類 (126~128)、A 4 類 i (145)、A 5 類 (144)、B 1 類 (129)、B 2 類 (135)、C 類 (136)、E 1 類 b (147)、E 2 類 b (141・148)、E 2 類 c (142) がある。145の沈線帯は、浅く凹凸が明瞭でない。144は平坦に面取りされ口縁端部が外方を向く。129は肩部に眼鏡状隆帯を付される。135は頸部の屈曲がないものの、無文帯を有していることからB 2 類に含める。口縁部には幅広の沈線で三角形を上下交互に横に連ねるモチーフが描かれ、三角形の中心に垂線が加えられる。三角形の交点部には大振りな楕円形隆帯文が貼付される。135 a では口縁端部に 2 対突起をもち、口縁部には匹字文が描かれる。肩部には口縁部と同様の大振りな楕円形隆帯文が付く。135 c では対向する斜位の匹字文が描かれている。136の変形工字文は 1 段構成である。上端の匹字文は下方からの押圧により作出され、交点部には挟りが加えられている。地文には条痕文施文後に縄文が施される。141・142・148はいずれも口縁端部に捺糸文が施文されるのを特徴とする。142の口縁部には中央が楕円に窪む突起（以下、楕円状突起と呼ぶ）が付される。このほか、143は頸部を無文帯とするもので、肩部に竹管状工具により刺突文が施される。

深鉢 A 1 類 (130・133)、B 1 類 (132)、C 1 類 (134)、D 類 (131) がある。130の平行沈線文の下端は隆線状を呈している。132は口縁部から体部上位に反転部をもつ工字文が描かれる。内外面の赤彩が明瞭に残る。134は口縁部下端が肥厚し、体部に結節縄文が施される。胎土は粗い砂粒を多く含み一般的ではない。131は外面のミガキが顕著だが、内面はケズリ痕が著しい。

壺 A 3 類 (123)、A 4 類 (140)、D 1 類 (138・139) がある。123が体部の張り出す器形で、体部上位に浮線文が施される。そのモチーフは浅鉢C 類 ii と共通する。138の胎土は長石を多く含む「東海系胎土」である。口縁部の突帯は棒状工具で縦に刻まれ、口縁端部には条痕文の工具によるものとみられる押引き文が施されている。また、頸部には幅広のナデ痕が観察できる。139はD 1 類の肩部破片と思われ、条痕文は貝殻腹縁によるものとみられる。

その他 124は環状形を呈する特異な器形である。内面の調整から、「U」字形に残存する部分は管状に閉塞していたものとみられる。外面には刻目文のある微隆帯が付く。外面のミガキが顕著である。また、底面には浮線文が施されている。

⑥ブロック 6 出土土器 (図版17-149~171)

遺物量は少ないものの、晩期後葉から弥生時代の遺物が出土している。

浅鉢 A 1 類 (149) がある。149の平行沈線文は浮線手法で行われていることから浮線文になる可能性がある。

甕 A 2 類 (151)、A 3 類 (152)、A 4 類 i (154)、A 4 類 ii (155・156)、A 5 類 (157)、B 1 類 (153)、D 類 (163)、E 1 類 a (164)、E 1 類 b (164)、E 1 類 d (159)、E 2 類 a (168)、E 2 類 b (160・167)、F 3 類 (161)、G 2 類 (169) がある。152は粗雑な浮線文が施される。157は口縁部に刻目文をもつ。153は頸部が長く、肩部に眼鏡状隆帯文が施される。163は口縁部に浅い平行沈線文を描き、口縁端部に細かな刻目文が施されている。肩部にはボタン状の突起が付され、体部に逆「U」字状沈線文と羽状沈線文を交互に描かれる。164は口縁端部に押圧が施されて玉縁状となっている。170もE 1 類に属するもので、横位の条痕文を特徴とする。167は口縁端部が平坦に面取りされている。168は口縁端部にも捺糸文が施される。169は口頸部の短い器形で、口縁部に文様帯をもたず、肩部以下に条痕文が施される。

深鉢 A 1 類 (162) がある。

壺 D 1 類 (166)、H 3 類 (165) がある。165は口頸部が外反する器形が特徴的である。166は「東海系胎土」であり、D 1 類に属す。

その他 171は甕の底部と思われる。

⑦ブロック 7 出土土器 (図版18-172~194)

晩期後葉から弥生時代のもものがまとまっている。

浅鉢 A 類 (172)、C 類 (173)、D 4 類 (175) がある。172は頸部無文帯を有する器形 5 で、頸部下端に明瞭な段をもち、体部に撚糸文が施されている。175は口縁部に變形工字文が施されるものであろう。

甕 A 1 類 (176)、A 2 類 (177・178)、A 5 類 (187)、E 1 類 b (184)、E 2 類 c (189)、E 4 類 (190)、F 2 類 (191)、H 1 類 (188) がある。189は口縁端部が平坦に面取りされている。190は口縁部がやや肥厚している。191の波状沈線文は条痕文と同一の工具が用いられ、口縁部に 2 段、肩部に 1 段施される。また、口縁端部は平坦に面取りされ、小波状を呈す。188は条痕文が口頸部で水平に、肩部で羽状に施される。条痕文は凹凸のある粗いものである。192の口縁部は外方を向き、刻目文が施されている。体部はハケ目の後にケズリが施されている。

深鉢 B 2 類 (174)、C 1 類 (185・186)、D 類 (181~183) がある。183は口縁部が肥厚している。185・186は同一個体の可能性がある。185は口縁部が肥厚し、下端に沈線が 1 条引かれる。186は体部に大振りな結節部をもつ結節縄文が施されている。

壺 H 2 類 (180) がある。口縁部及び肩部に 2 条の平行沈線文が施され、その間を刺突文で充填される。

その他 193は内外面にミガキが施されるもので、浅鉢の可能性がある。194は甕か深鉢の底部である。

⑧ブロック 8 出土土器 (図版19-22-195~246)

晩期後葉から弥生時代の良好なブロックである。

浅鉢 A 類 (195・197・236)、B 類 v (198・201)、C 類 i (196) がある。195・197内面にも平行沈線文が描かれる。196の浮線文は隆線手法による。また、内面には外面と同様に眼鏡状沈線文が施されている。201は口縁部が直立し、口縁端部には大振りの山形突起が付される。口縁部には匹字文が描かれ、無文帯を挟み体部上位にも文様帯をもつ。198は体部上位に工字文とみられる文様帯をもつもので、201と同一の可能性が有る。236は沈線手法④で施文され、沈線幅が広く深い。

甕 A 1 類 (213)、A 2 類 (203)、A 4 類 i (212)、A 5 類 (205)、B 1 類 (202・204)、C 類 (207~209)、D 類 (115)、E 1 類 a (215~217・220)、E 1 類 b (232)、E 1 類 c (218)、E 1 類 d (219)、E 2 類 a (223)、E 2 類 b (222)、E 2 類 c (221)、E 4 類 (214)、F 1 類 (226・230) F 3 類 (227~229)、H 1 類 (233) がある。203は口縁部下端に列点の沈線文を施す。205は面取りした口縁端部が外方を向く。206・214は無文の E 4 類で、206は口縁端部が平坦に面取りされている。232は口縁部中央に 1 条の平行沈線文が引かれる。条痕文は条線間隔の広い原体が用いられている。218は肩部でも条痕文が縦位に施される。221の口縁部の施文方向は b 種と c 種が併用されている。223・222はいずれも口縁端部に撚糸文が施される。226の波状沈線文は波状を為さず入り組む部分がある。口縁端部には楕円状突起が付される。肩部以下は条痕文のみである。227には山形突起、228には小ぶりな二対突起が付く。229は体部に条痕文と同一の原体で縦位区画が 4 単位施され、その内部に羽状に条痕文が描かれる。223は頸部に条痕文が水平に施されている。

深鉢 A 2 類 (235)、B 2 類 (210・211)、C 1 類 (240)、C 2 類 (246)、D 類 (237) がある。235の胎土は比重の軽いものである。210・211は体部に變形工字文が施されている可能性が高い。240は口縁端部に山形突起が付き、全面に結節縄文が施される。246は口縁端部に2対突起が付く。

壺 A 3 類 (200)、A 4 類 (244)、C 類 (238)、D 類 (199)、G 類 (241) がある。238は口縁部内面に幅広の凹線文が施されるもので、359と同類と思われる。199は頸部下端に平行沈線文を施される。241は口縁部に突起が付され、口縁部内面に平行沈線文が施される。234は体部に丸みをもつもので、縄文Lを斜位あるいは縦位に磨り消しが施される。242は肩部に平行沈線文が描かれるもので、口縁部は外反するものと思われる。243は体部が張り出す器形とみられ、肩部に平行沈線文が引かれている。245は「東海系胎土」のもので、条痕文が羽状に施される。内面は器面の剥落が著しい。

その他 231は深鉢の底部とみらるもので、胎土は比重の軽いものである。

⑨ブロック 9 出土土器 (図版23～24-247～275)

晩期後葉から弥生時代の遺物が出土している。

浅鉢 B 類 ii (257)、B 類 v (247)、C 類 ii (252)、C 類 iii (248・249)、D 2 類 (258)、H 類 (262) がある。252はC 類 ii だが、内面調整がやや雑であることから壺の可能性もある。257は沈線手法により楕円工字文が2段入り組むものである。胎土に長石を多く含むもので、一般的でない。258は体部付近で外反し、口縁部へかけて直線的に立ち上がる器形で、体部に變形工字文が施される。口縁部内面には平行沈線文が描かれる。261も變形工字文が施されるものだが、沈線は浅い。262は口縁端部に上方からの押圧を加えられ玉縁状を呈す。263は浅鉢の底部で、上位に變形工字文が付く可能性が高い。

甕 A 1 類 (256)、C 類 (259)、E 1 類 (270)、E 1 類 a (271)、F 1 類 (269)、G 1 類 (266)、G 3 類 (267) がある。259は a～c が同一個体とみられることから、モチーフは2段構成であろう。266の口縁部には外方を向く突起が貼付されている。267は頸部に明瞭な無文帯をもたない。270は条痕文の原体に幅1cmの工具が用いられ、間隔をおいて施文される。271は口縁端部に楕円状突起が付される。268は口縁部で縦位に条痕文を施すE 1 類 c であろう。269は口縁部で撚糸文を波状に施文するもので、波状沈線文と共通するものと理解される。このほか、254は肩部に粘土を貼付することにより眼鏡状隆帯文風に仕上げられるもので、その上位に斜位の沈線文が描かれる。255は沈線文の両端に細かな刻目が入る。

深鉢 A 1 類 (272・275)、B 1 類 (250・251)、C 1 類 (274)、D 類 (273) がある。275は小形品で、口縁端部に突起が付く。273は内外面にケズリ痕が明瞭に残る。274は小形品で、肥厚する口縁部から口縁端部に撚糸文が施される。264の口縁端部には棒状工具で斜めに刻目文が施され、頸部から体部にはミガキが丁寧に施される。胎土は鉾物の混入が少なく一般的なものではない。260は体部の内傾が強いことから蓋とした。縁部に幅広の平行沈線文が描かれ、体部に縄文が施される。端部は平坦に面取りされる。内面上半に炭化物が付着する。

⑩ブロック10出土土器 (図版25-276～291)

晩期後葉から弥生時代のものが出土している。

浅鉢 A 1 類 (276・277)、C 類 iii (277・278・280～282) がある。276・277は沈線手法③による。

台付浅鉢 A 類 (279) がある。口縁部と台部に隆線手法による平行沈線文が描かれる。内外全面に赤彩が濃く残っている。

甕 E 4 類 (287) がある。肩部の張りが強く、口縁部は垂直に立ちあがる。全面にミガキが丁寧に施される。

深鉢 A 1 類 (285) がある。

壺 A 3 類 (283・284)、H 2 類 (289) がある。283のモチーフは浅鉢C類 ii と共通する。284は浮線文の交点部には山形の大振りな突起が貼付される。外面の赤彩が濃く残る。289は体部下半に丸みをもち、口縁部に向かって内傾する器形である。口縁部と肩部には2条の平行沈線文間に刺突文が施されている。

蓋形土器 B 類 (288) がある。

その他 286は無文の深鉢であるが、口縁部内面が肥厚していることや胎土の特徴から本期のものでない可能性が高い。290は外面に赤彩が施される。291は晩期中葉まで溯る可能性がある。

⑪ブロック11出土土器 (図版26-292~308)

晩期後葉から弥生時代のものが出土している。

浅鉢 D 4 類 (292・293) がある。292は口縁部に幅広の沈線で変形工字文が描かれ、その交点は縦の袢りと粘土貼付により作出されている。肩部には縦位に刻目文が施される。293も肩部をもつが頸部が無文でない特異な器形である。変形工字文の沈線は292に比べ細い。内外面のミガキが顕著である。

甕 A 4 類 ii (306)、B 3 類 (308)、E 2 類 a (302・303)、E 2 類 c (305)、F 3 類 (304) がある。302は口縁端部が口外帯風に面取りされる。303は口縁端部にも撚糸文が施される。307は肩部に半截竹管状工具により逆「L」字状の沈線文が施される。

深鉢 B 3 類 (308) がある。口縁部内面が肥厚する。

壺 D 1 類 ii (297)、H 1 類 (300)、H 2 類 (301) がある。298・299はD 1 類の体部片であろう。

その他 294・295は底部に平行沈線文を描くもので、294は外面に赤彩が観察できる。296は浅鉢の底部であろう。

⑫ブロック12出土土器 (図版27~30-309~348)

晩期後葉から弥生時代のものが主体を占め、縄文時代後期中葉のものがわずかに含まれる。

後期中葉

309は体部上位が強く張り出し、「く」の字状に屈曲する口縁部がつくもので、体部上位に半円状の沈線文とソロバン玉状の押圧文が施される。310も口縁部が内傾する無文の深鉢で、口縁部内面が肥厚していることから後期の所産と考えられる。

晩期後葉~弥生時代

浅鉢 D 3 類 (312)、E 類 (318)、G 類 (317) がある。312は内外面のミガキが顕著で、胎土が一般的でないため、搬入品の可能性が高い。これは、ブロック13の350と同一の個体である可能性が高い。317は内外面の赤彩が濃い。318は内面にケズリ痕が明瞭に観察される。このほか、313は底部に縄文を地文として平行沈線文が描かれるものである。

台付浅鉢 B 類 (319) がある。口縁端部に大振りな山形突起が5単位配される。体部の変形工字文は3段構成で、交点は縦の袢りと粘土の貼付により盛り上がっている。高台には隅丸方形の透かしが4単位施される。

甕 A 1 類 (330)、A 4 類 i (327)、E 1 類 b (333・338)、E 1 類 c (332)、E 1 類 d (339)、E 2 類 a (335)、E 2 類 c (336)、E 3 類 (331)、F 1 類 (337)、G 3 類 (328) がある。330の体部は同一とみられる破片から無文と推定される。327の沈線帯の両端はミガキにより角張っていない。また、内外面のケズリ痕を明瞭に観察できる。333・339は体部で条痕文を斜位に施してから肩部で縦位に加える手法を用いている。336も同様の手法で撚糸文が施される。

深鉢 A 3 類 (311)、B 3 類 (340)、B 4 類 (346)、C 1 類 (342~344)、C 2 類 (345)、D 類 (341) がある。311は口縁部に隆線帯①が施される。340は2条の平行沈線文に縦の挟りを入れて工字文としている。342・344は結節縄文が施されており、胎土・焼成が一般的ではない。

壺 C 類 (324)、D 1 類 i (320)、D 4 類 (321)、F 類 (323)、H 3 類 (322) がある。324は口縁部内面に幅広で深い平行沈線文が施されており、ブロック13の359と特徴が似ている。320の突帯は指頭による押圧が加えられている。322は丸底になるものと思われる。このほか、325は肩部に平行沈線文が描かれるもので、体部が張り出す器形と思われる。326はD 1 類の体部片であろう。

底部 347・348は底部外面にケズリが施されるもので、底面には347が網代痕、348はナデ痕が観察できる。

⑬ブロック13出土土器 (図版31-349~362)

晩期後葉から弥生時代のもものが主体をなし、縄文時代後期後葉がわずかに含まれる。

後期後葉

349は口縁部が外傾する深鉢である。口縁部は肥厚し、棒状工具による刻目文が施され、円管状になるとみられる突起には刺突文が施される。体部には逆台形状に2本の平行沈線文が描かれ、その内部は縄文がナデ消されている。

晩期後葉~弥生時代

浅鉢 D 3 類 (350) がある。ブロック12の312と同一個体とみられることから、2段構成の変形工字文が施されていると思われる。351・352は一次調査25トレンチから出土したものだが、本ブロックに含まれる可能性が高い。351は深い沈線で羽状文が施されるもので、外面のミガキと赤彩が顕著である。

甕 A 5 類 (356)、E 1 類 a (358)、F 2 類 (357) がある。358の口縁端部には楕円状突起がつく。357は波状沈線文が肩部にのみ施される。

深鉢 A 3 類 (355)、A 4 類 (353)、C 1 類 (354) がある。355は平行沈線文が小突起の下で山形に途切れている。354は口縁部~体部上位に結節縄文L L、体部下位に条痕文が施されるもので、胎土・焼成が一般的でない。

壺 C 類 (359)、H 1 類 (360・361)、H 3 類 (362) がある。359は口縁部が水平近くに外反するものである。口端部に刻目文を施し、頸部はハケ目の後にミガキが施される。口縁部内面には幅広の平行沈線文が描かれ、沈線の途切れが観察できる。360は口縁部に列点文が施され、361は肩部に変形工字文風の文様が描かれている。

⑭ブロック14出土土器 (図版32-363~374)

晩期後葉から弥生時代のもものが出土している。

甕 C 類 (366)、E 4 類 (370)、H 1 類 (368)、H 2 類 (367) がある。366は「く」の字状の短い口縁部がつくものと思われる。変形工字文は縄文L R 施文後に変形工字文が施される。366 b は出土地点が離れるが同一個体のものであろう。368に施される条痕文は原体に幅8 mmの工具が用いられ、条線の凹凸が明瞭である。367は肥厚する口縁部に縄文Lが施され、頸部には鋸歯状に条痕文が施される。

深鉢 B 3 類 (369)、C 1 類 (371) がある。369は平行沈線文が2条観察でき、内外面にミガキが施される。371は結節縄文が施されるもので、胎土・焼成が一般的でない。

壺 D2類(363)、D3類(364)、D5類(365)がある。363は口縁端部に沈線文が描かれ、短沈線で区切られている。胎土は一般的でなく、焼成はD1類のものに比べ良好である。394の条痕文は条線が深く角張っている。365は口縁部内面につく突帯の張り出しが大きい。

その他 372は深鉢の体部片かと思われ、条痕文が斜位に施される。373も深鉢と思われ、条痕文が縦位に施される。374は底部下端まで条痕文が施される。

(8) ブロック外出土土器(図版33~38)

遺物ブロック外から出土したものをまとめる。なお、後期後葉~晚期前葉のものについては百瀬長秀氏の論考[百瀬1984]および中沢道彦氏の論考[中沢1998]を参考とした。

後期中葉

加曾利B2あるいはB3式に併行すると思われるものである。375は体部上位でくびれ口縁部にかけて内湾する深鉢で、5単位の波状口縁を有する。口縁部内面が肥厚するのを特徴とし、体部上位に羽状沈線文が施される。胎土に石英が多量に含まれていて一般的ではない。376は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる浅鉢で、4単位の波状口縁がつくものと思われる。口縁部から体部上位に波状口縁と平行して多重の沈線文が施される。

後期後葉

所謂瘤付土器と思われるものである。380は体部が膨らみ、口縁部が緩やかに外傾する深鉢である。口縁端部には頂部が窪む突起が付され、口縁部縄文帯の下は磨消縄文帯となり、突起下に弧状沈線文が施されている。磨消縄文帯と体部無文帯との間は縄文帯となり、鋸歯状に沈線文が施されている。381は平口縁の深鉢で、口縁端部に厚手の山形突起が付されている。口縁部及びその下部は縄文地文に斜行沈線文が描かれ、部分的に鋸歯状となっている。体部は入組文を主とする。390も平口縁の深鉢で、口縁端部に厚手の山形突起が付されている。口縁部を縄文帯とし、体部には入組文が2段施されている。387も同様に磨消縄文により入組文が施される。388は波状口縁の頂部に加飾される突起で、側面に把手がついていたものと思われる。

377~379は平口縁の深鉢で、体部に斜行短線文が施されるものである。377は口縁部がやや内湾する深鉢かとみられる。口縁部内面の肥厚が著しい。口縁端部に381や390と類似する大振りな山形突起が4単位配され、その下には外方に大きく飛び出す突起が貼付されている。口縁部には幅広の凹線文が描かれる。378は口縁部がやや内湾する深鉢で、口縁部は縄文を地文として平行沈線文が描かれ、沈線間はナデ消されている。379は口縁部が内屈する深鉢で、378に比べ縄文帯の幅が広い。

晚期前葉

深鉢 389・391・392は波状口縁の深鉢である。いずれも口縁部には凹線文が施される。389は凹線文の内部および下端に瘤状の突起が貼付され、下端の突起上端に棒状工具による刺突が施される。口縁部内面の肥厚が著しい。391は口縁部が外傾するもので、口縁部内面の肥厚が著しい。波頂部は縦に刻みが施され、波頂部と波底部の中間に瘤状の突起が貼付される。また、波底部では外方に大きく飛び出す突起が貼付されている。392は口縁部内面の肥厚が391に比べ薄く、陵をもっている。また、凹線文を区画する突起は低い。

394は波状口縁の深鉢だが、凹線文はなく、突起頂部下に縦位の短い隆帯文が貼付されている。401・403は磨消縄文を主とするものである。403は口縁部下の隆帯上に刻目文が施される。409は体部上位が内湾す

るもので、上段の平行沈線文間の縄文が磨り消されている。406は口縁部に沈線手法①により平行沈線文が施される。407は体部に先端が鋭利な棒状工具で縦に沈線文が施される。408は羽状縄文が、410・413は全面に縄文LRが施されるものである。412・414は無文で、内外面に輪積み痕が観察できるものである。

浅鉢 393は口縁部に凹線文が施されるもので、口縁端部に上面に刻みのある方形の突起と山形の2対山形突起が付される。底部には平行沈線文が描かれている。395は体部上位に三叉文の変形したものが施される。396は4単位波状口縁のもので、波頂部には瘤状の突起が2個貼付され、波底部には把手状小突起が付される。397は磨消縄文により入組文が施される。382～386も磨消縄文により入組文などが施されるものであろう。398は体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもので、内外面のミガキが著しい。

晩期中葉

深鉢 399・402は口縁部内面に凹線文が施されるものである。402は口縁部の下位にも同様の凹線文が施される。404・415は平行沈線文間に刻目文が施されるものである。405は口縁部外面に隆帯が、内面に平行沈線文が施される。

416は口縁部が直立し体部が膨らむ甕形で、口縁部下に無文帯をもつ。体部には平行沈線文間に列点文や玉抱三叉文が施されている。

浅鉢 400は口縁部の平行沈線文間に棒状工具による刺突文が施されている。

晩期後葉～弥生時代

浅鉢 A類(444)、B類ii(418)、B類iv(417・421)、C類ii(419)、C類iii(422)、C類v(420・423)、F類(459)がある。444は沈線手法③で平行沈線文が施される。418は文様帯下端の交点が浮線文と同じ仕上げとなっているのが特徴である。417は沈線手法②により平行沈線文が描かれた後に、上下からの押圧により隆線が連結されている。口縁端部には楕円状突起がつけられる。421は浮線手法を用いている。420は焼成が良好で、内外面のミガキが顕著である。浮線文の交点部には縦位のスリットが刻まれている。このほか、424は420と同様に焼成が良好なもので、縦にスリットが刻まれている。425は相対する匹字文が施される。426は口縁部に隆線帯①が描かれ、口縁部内面にも同様に隆線帯①が施される。427は口縁部に沈線帯風の無文帯をもち、その下に隆線と棒状工具による刺突文が施される。428は細い平行沈線文を施文後に、その上下にケズリやミガキを加えて段状を呈するものである。内外面の赤彩が顕著である。429は表採品で、細い沈線により変形工字文の一部とみられる匹字文が描かれている。430は3条の平行沈線文が縦位の沈線文で区切られている。

甕 A1類(433・434・437・439)、A2類(435)、A4類i(431・466・468・469)、A4類ii(467)、B1類(436・438)、C類(464)、E2類(471～473)、E3類(440・441)、F3類(474・475)、H1類(476・477)がある。433は口縁部の平行沈線は隆帯の貼付により区切られている。440は口縁部が肥厚するもので、口縁端部に刻目文が施される。

深鉢 A1類(445・446・448・449・452)、B1類(442・443)、C1類(451・453)、C2類(450)、D類(411・455)がある。443の浮線文は曲線的な三角形を上下に縦横に連ねるモチーフであり、外面のミガキが顕著である。また、内外面の赤彩が濃く残る。411は口縁部内面に幅広の凹線文が2から3条施されるが、その特徴は壺C類の口縁部内面に施される凹線文と類似している。

壺 A4類(461)、B類(460)、G類(462)がある。461は条痕文を地文とし、3～4条の平行沈線文により変形工字文が施される。

(9) まとめ

a. 各ブロックにおける土器組成

ここでは縄文時代晩期後葉から弥生時代を主体とするブロック2～14について、口縁部片を集計し、大別器種組成および各器種の分類別組成をみることにする。なお、各組成は個体識別法および口縁部計測法〔宇野1992〕の二種を用いた。個体識別法は口縁部を観察して個体を識別する方法である。口縁部計測法は「残存する口縁周の長さ÷復元した口縁周の長さ」を読み取り、同じ分類に属するものを合計してそれぞれの比率を算出するものである。ここで対象とする資料の場合、口縁部片での個体識別がある程度可能であることと、資料数がそれほど多くないことから個体識別法が有効と考える。以下に述べる事項も個体識別法による集計に基づいて行う。ただし、ブロック間で接合する資料があることや、甕・深鉢では部分的に文様の施文方向が異なり個体識別が難しいものがあることから、口縁部残存率集計法も参考とする。第22～24図に各組成表を提示した。円グラフは個体数に基づく大別器種組成の比率を表している。

さらに、各ブロックは編年的に幅をもつものと予想されることから、ブロックにおける器種の組み合わせを検討し、編年の位置付けを考察したい。

①ブロック1

器種組成は算出していない。出土土器は図示されているもののほか、口縁部を有するもので深鉢1点、甕1点がある。磨消縄文により三叉文が変形したモチーフが描かれる12や16のほか、沈線手法①により平行沈線文が施される砲弾形の深鉢が主体な点は、長野市宮崎遺跡2号住居出土資料〔矢口・青木ほか1988〕に類似し、晩期前葉に所属するものと思われる。

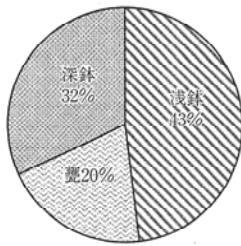
②ブロック2

大別器種の合計で25個体を確認した。浅鉢が48%と非常に高い比率を占めるのが特徴である。深鉢は個体数で甕を上回るが、口縁部残存率（以下、残存率）で大きく下回る。壺は確認されなかった。

浅鉢はA類、B類、C類がほぼ同率ある。A類では25の平行沈線文は沈線手法③によるものであり、B類と共通する。B類ivの23は口縁部が内傾する器形2で、体部上位に眼鏡状隆帯文をもち、松本市女鳥羽川遺跡〔樋口ほか1972〕を標識とする女鳥羽川式〔中沢1993〕に類似する。しかし、平行沈線文は浮線手法に近い沈線手法③が用いられていることや、隆帯部分には上下からの押圧が加えられている点は、削り出しによる立体的な眼鏡状隆帯文をもつ女鳥羽川遺跡例と異なり、後出的な要素といえよう。B類iiiの22もモチーフには浮線手法が用いられている。C類iiの26は浮線文のモチーフではあるが、描出手法が沈線手法③であることや、女鳥羽川式にみられる口縁部内面の突帯状の隆線文が施される点から、浮線文でも古相を示す。27も26と同様に描出手法は沈線手法③に近く、古相を示すものと思われる。甕はA類が主体を占める。沈線手法③によるA1類と隆線が施されるA2類が伴出している。B類45は口縁部を欠くものの、肩部に眼鏡状隆帯文をもち、A類と組成するものと思われる。50は前述したように他のものより新相を呈す。深鉢はA1類が主体である。壺はA3類の33があるが、浮線文は浮線手法による盛行時のものであり、26・27に比べて後出的と考えられる。

以上から、本ブロックは女鳥羽川式後半段階が中心と考える。図示した土器のほとんどがブロックの中心部から出土したもので、短期間に廃棄されたものとみられることから、良好な一括資料と思われる。ブロックの縁辺からは、これより新相のものが出土している。

ブロック 2



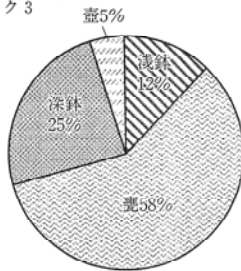
器種	浅鉢	甕	深鉢	合計
個体数 (%)	12(48)	5(20)	8(32)	25
残存率合計数 (%)	138.9(39)	160.5(46)	52.5(15)	352

分類	A	B iii	B iv	B v	C ii	C iii	H	合計
個体数 (%)	4(34)	1(8)	1(8)	1(8)	2(17)	2(17)	1(8)	12
残存率合計数 (%)	12.2(9)	12.5(9)	12.5(9)	62.5(45)	14.3(10)	18.8(14)	6.1(4)	138.9

分類	A1	A2	B1	合計
個体数 (%)	3(60)	1(20)	1(20)	5
残存率合計数 (%)	60.5(38)	50(31)	50(31)	161

分類	A1	B1	D	合計
個体数 (%)	5(62)	1(13)	2(25)	8
残存率合計数 (%)	29.7(56)	12.5(24)	10.3(20)	52.5

ブロック 3



器種	浅鉢	甕	深鉢	壺	合計
個体数 (%)	8(12)	38(58)	16(25)	3(5)	65
残存率合計数 (%)	46.6(10)	293.6(61)	99.6(21)	36(8)	475.8

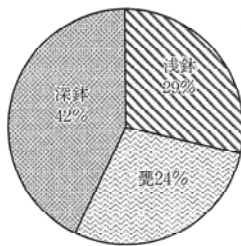
分類	A	B iii	B v	C	D4	合計
個体数 (%)	4(49)	1(12)	1(13)	1(13)	1(13)	8
残存率合計数 (%)	29.3(63)	8(17)	1.4(3)	1.8(4)	6.1(13)	46.6

分類	A1	A3	C1	D	合計
個体数 (%)	4(27)	1(7)	2(13)	9(53)	16
残存率合計数 (%)	18.6(20)	5(5)	7.1(8)	68.9(67)	99.6

分類	A1	A2	合計
個体数 (%)	2(67)	1(33)	3
残存率合計数 (%)	16(44)	20(56)	36

分類	A1	A2	A3	A4 i	A4 ii	A5	B1	D	E1	E2	E4	F1	G2	H i	合計
個体数 (%)	12(30)	1(3)	1(3)	3(7)	1(3)	1(3)	2(5)	1(3)	6(14)	2(6)	5(12)	2(5)	1(3)	1(3)	38
残存率合計数 (%)	100(32)	7.6(3)	5(2)	9.2(3)	3.1(1)	1.5(1)	33.7(11)	6(2)	40.8(14)	5.9(2)	51.6(17)	17(6)	12(4)	6.2(2)	293.6

ブロック 4



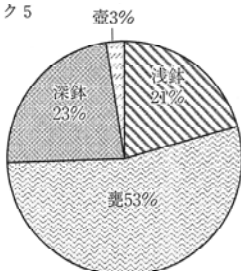
器種	浅鉢	甕	深鉢	合計
個体数 (%)	2(29)	2(29)	3(42)	7
残存率合計数 (%)	40.5(46)	10(11)	38(42)	88.5

分類	A	B i	合計
個体数 (%)	1(50)	1(50)	2
残存率合計数 (%)	28(69)	12.5(31)	40.5

分類	A4 i	A4 ii	合計
個体数 (%)	1(50)	1(50)	2
残存率合計数 (%)	6.5(65)	3.5(35)	10

分類	A1	C1	合計
個体数 (%)	2(67)	1(33)	3
残存率合計数 (%)	13(34)	25(68)	38

ブロック 5



器種	浅鉢	甕	深鉢	壺	合計
個体数 (%)	8(21)	21(53)	9(23)	1(3)	39
残存率合計数 (%)	40.7(12)	202(57)	102.2(28)	6(2)	351

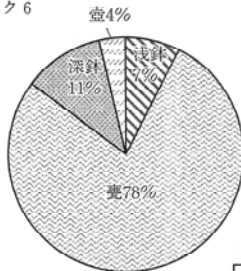
分類	A	C i	C ii	C iii	C vi	D1	合計
個体数 (%)	1(13)	1(13)	2(24)	2(24)	1(13)	1(13)	8
残存率合計数 (%)	4(10)	6(15)	8.2(20)	13(31)	4(10)	5.5(14)	40.7

分類	A1	A2	A4 i	A5	B2	C	E1	E2	E4	合計
個体数 (%)	1(5)	3(14)	3(14)	3(14)	1(5)	1(5)	2(10)	3(15)	4(18)	21
残存率合計数 (%)	16.5(8)	21(10)	22.9(11)	17.2(9)	33(16)	12.5(6)	9.4(5)	55.5(28)	14(7)	202

分類	A1	B1	C1	D	合計
個体数 (%)	4(45)	1(11)	1(11)	3(33)	9
残存率合計数 (%)	61.2(61)	2.4(2)	25(24)	13.6(13)	102

分類	D1	合計
個体数 (%)	1(100)	1
残存率合計数 (%)	6(100)	6

ブロック 6



器種	浅鉢	甕	深鉢	壺	合計
個体数 (%)	2(7)	22(78)	3(11)	1(4)	28
残存率合計数 (%)	7.2(4)	148.9(79)	13(7)	18.5(10)	187.6

分類	A	H	合計
個体数 (%)	1(50)	1(50)	2
残存率合計数 (%)	4.1(57)	3.1(43)	7.2

分類	A1	A4	合計
個体数 (%)	2(67)	1(33)	3
残存率合計数 (%)	11(85)	2(15)	13

分類	H3	合計
個体数 (%)	1(100)	1
残存率合計数 (%)	18.5(100)	18.5

分類	A1	A2	A4 i	A4 ii	A5	B1	D	E1	E2	E4	G2	合計
個体数 (%)	3(13)	1(5)	1(5)	2(8)	1(5)	1(5)	1(5)	6(31)	3(7)	1(5)	1(5)	21
残存率合計数 (%)	17(11)	8.5(6)	8.4(6)	8(5)	3.1(5)	12.5(8)	36(26)	32.1(22)	12.2(8)	1.8(1)	9.3(6)	112.9

第21図 各ブロックにおける土器組成 (1)

③ブロック 3

大別器種の合計で65個体を確認した。浅鉢が12%とやや低く、甕が60%と深鉢23%に対し非常に高い比率を占める。壺は5%ながら3個体が確認できた。

浅鉢はA類とB類が多く、C類・D類が1個体ずつ確認された。A・B類の特徴はブロック2とほぼ共通し、女鳥羽川式後半段階と考えられる。C類iの59は浮線手法によるもので、ブロック2より後出的といえよう。D4類54はブロック11の392と同類とみられることから緒立1期〔渡邊1998〕のものと考えられる。甕は多様である。A1・A2類はブロック2と共通する要素であるから、浅鉢A・B類に伴うであろう。B1類は2個体を確認したが、図示した中には口縁部を欠く資料が多く、実際はA類と共に主体をなす器種と考えられる。口縁部破片による個体識別法では肩部を欠く個体が多いことからB類と確認できずA類に含められているものが相当数あるものと予想され、B1・B2類の多くもA1・A2類に伴うものとみられる。A4・A5類は氷I式期に出現するものであるが、氷I式はブロック外出土の420・424があるほかは、本ブロックおよび周辺のブロックから検出されていないことから、これ以後のものである可能性が高い。F1類も氷I式以後のものと考えられる。深鉢A1類はブロック2と共通する。体部に撚糸文を地文として稲妻状文が施されるA3類80は、平行沈線文の特徴がA1類や甕A1類に類似する。類例は大町市長畑遺跡〔島田1991〕や一津遺跡で甕の体部に採用されているものがある。

④ブロック 4

浅鉢2、甕2、深鉢3個体の合計7個体であり、非常に少ない。

浅鉢B類i98は口縁部が直立し肩部が張り出す器形1で、肩部の立体的な眼鏡状隆帯文と体部の工字文は鳥屋1式前半の特徴を備える。A類99も出土地点が近接するため、98と同時期の可能性が高い。このほか、浮線文の破片もわずかに見られる。甕ではA4類iiの110が口外帯をもつことから氷I式の範疇に含まれる。106の条痕文は本遺跡で少ない「細密条痕」である。深鉢A1類103・105、C1類104は浅鉢98と近接して出土しており、これと同時期の可能性が高い。

⑤ブロック 5

大別器種の合計で39個体を確認した。浅鉢が21%とブロック2の半数足らずだが、甕は53%で深鉢23%を大きく上回る。壺は1個体のみ確認できた。

浅鉢はブロック2・3で主体であったA類が減少し、B類は検出されず、代わりに浮線文が施されるC類が最も多い。C類i115は体部文様帯の幅が広く、内面にも浮線文が施されており、古相を示す。他のものは頸部無文帯がみられなかったり口縁部が内傾する特徴から離山段階〔設楽1982、中沢1991〕に位置づけられよう。甕では隆線手法①が施されるA2・B2類が浅鉢C類に伴うものと思われる。B2類135は肩部に眼鏡状隆帯文が残存するものの、口縁部文様は群馬県藤岡市沖II遺跡〔新巻・若狭ほか1986〕などにみられる岩櫃山・須和田系甕A1類〔石川1985a〕の肩部文様に類似することから、浮線文土器後半以降と思われる。C類136は荒海3式〔鈴木1991〕の特徴を備える。浅鉢D1類はこれに伴うであろう。このほか、ブロック3と同様にA4類i、A5類がある。E1・E2類は口縁部で斜位あるいは縦位に施文されるほか、口縁端部に撚糸文が施されることを特徴とする。類例は、中郷村横引遺跡〔立木1996〕に認められる。しかし、岡谷市御社宮司遺跡〔百瀬1980〕や松本市石行遺跡〔竹原1987〕にはなく、南蒲原郡栄町長畑遺跡〔荒川1998〕でも確認されていないことから、浮線文期以降の可能性が高いものと考えられる。深鉢はA1類が最も多い。結節縄文が施されるC1類134は、鳥屋1式～2a式における信濃川流域からの影響とみられる。壺はD1類が確認されている。このほか、口縁部を欠くA4類があり、甕C類に伴うものとみられる。

⑥ブロック 6

大別器種の合計で28個体を確認した。浅鉢は7%と非常に少ないのに対し、甕が78%と極めて多い。

浅鉢では、A類149は浮線手法によるものであるから、C類に近いものと考ええる。甕はブロック5とほぼ同じ内容である。D類163は沈線文系土器について検討した永井宏幸氏のA類型にあたり、弥生時代前期末に位置づけられる〔永井1994〕。最も多いE1・E2類は氷Ⅱ式段階であろう。深鉢はA1類のほか、A4類が検出されている。壺はH3類が確認されているのみである。

⑦ブロック 7

大別器種の合計で27個体を確認した。ブロック6と同様に浅鉢が11%で少なく甕が63%と多いが、深鉢は25%とやや多めである。

浅鉢はブロック5と同じくA類とC類が確認されている。172は頸部無文帯を持つことや体部の捺糸文の特徴が227などに類似することから氷Ⅰ式以降に所属するものと考えられる。このほか、口縁部を欠くものにD4類があることから、本ブロックが二時期に別れることを示している。甕もブロック5と同様にA1・A2類の占める割合が多く、浅鉢A・C類に伴うものであろう。新たに加わるF2・H1・I類はA5類・E2類と共に氷Ⅱ式段階と考えたい。深鉢はC1類とD類がある。D類182は二重口縁のもので、C1類186とともに信濃川流域の影響が窺える。口縁端部に列点文が施される181は所謂氷Ⅱ式の特徴を示す。壺H2類の刺突文は浮線文期に少ない要素である。

⑧ブロック 8

大別器種の合計で64個体を確認した。浅鉢は8%と少なく、甕63%と深鉢23%はブロック7と同様だが、壺が8%と若干多いのが特徴である。

浅鉢はA・B・C類が確認された。C類iは浮線文のモチーフながら隆線手法で描かれており女鳥羽川式後半まで溯る可能性がある。甕はA1・A2・B1類は少ない反面、A5類やE1・E2・E4類が全体の半数を占める。E1類に用いられる条痕文は「細密条痕」ではなく、条線幅の広いものや半截竹管状工具で施文するものが大半を占める。そして、F類が全ブロック中最も多く検出されているのが特徴である。F類は頸部を無文帯とすることから、弥生時代中期初頭には下らないものと考ええる。類例は高山村湯倉洞窟〔太田1989〕にある。229の体部では縦区画の羽状沈線文が採用されており、甕D類に類似する。口縁部を欠くC類は緒立1期に属する。深鉢はA1類・D類が多いほか、B2類が確認されているのが特徴である。壺はA3類が離山段階のものであろう。遠賀川系のC類は、弥生時代前期後葉に属す。G類は甕D類と同様に柴山出村式〔久田1991〕とみられる。

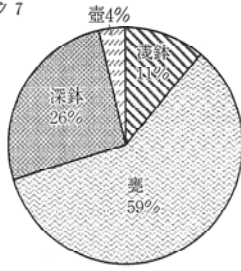
⑨ブロック 9

大別器種の合計で32個体を確認した。甕と深鉢がほぼ同率を示すのが特徴である。また、蓋が検出されている。

浅鉢はB類と口縁部を欠くC類が離山段階に位置づけられる。H類は口縁端部が玉縁状を為すから氷Ⅱ式段階であろう。甕はA1類が最も多いが、ブロック8と同様にF類やG類が確認されている。口縁部を欠くC類は緒立1期に所属するであろう。深鉢はA1類、B1類が目立ち、ほかにD類も多い。壺は大形のE類があるのが特徴である。蓋はA類がある。

V 上層の調査

ブロック7



器種	浅鉢	甕	深鉢	壺	合計
個体数 (%)	3(11)	17(63)	6(22)	1(4)	27
残存率合計数 (%)	15(7)	138.8(70)	33.5(17)	12(6)	199.3

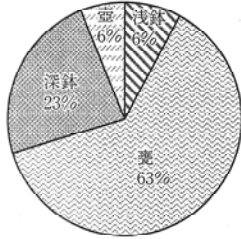
分類	A	C	合計
個体数 (%)	2(67)	1(33)	3
残存率合計数 (%)	9(60)	6(40)	15

分類	C1	D	合計
個体数 (%)	2(29)	5(71)	7
残存率合計数 (%)	11(29)	26.6(71)	37.6

分類	H2
個体数 (%)	1(100)
残存率合計数 (%)	12(100)

分類	A1	A2	A5	E1	E2	E4	F2	H1	I	合計
個体数 (%)	4(26)	2(13)	1(6)	1(6)	4(25)	1(6)	1(6)	1(6)	1(6)	16
残存率合計数 (%)	21(15)	18.2(14)	12(9)	6(4)	26.5(13)	20(15)	13(10)	5(4)	13(10)	134.7

ブロック8



器種	浅鉢	甕	深鉢	壺	合計
個体数 (%)	5(8)	40(63)	15(23)	4(6)	64
残存率合計数 (%)	66.4(8)	417.7(61)	169.5(24)	51.6(7)	695.2

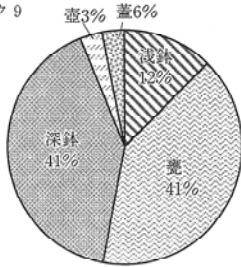
分類	A	Bv	Ci	合計
個体数 (%)	2(40)	1(20)	2(40)	5
残存率合計数 (%)	23.2(41)	8.2(15)	25(44)	56.4

分類	A1	A2	B2	C1	C2	D	合計
個体数 (%)	3(19)	1(6)	2(13)	1(6)	1(6)	7(44)	15
残存率合計数 (%)	18.1(9)	12(6)	11.2(6)	22(11)	75(39)	31.2(16)	169.5

分類	A3	C	D4	G	合計
個体数 (%)	1(25)	1(25)	1(25)	1(25)	4
残存率合計数 (%)	30(58)	4(8)	9.4(18)	8.2(16)	51.6

分類	A1	A2	A4 i	A5	B1	D	E1	E2	E3	E4	F1	F3	H1	合計
個体数 (%)	1(3)	1(3)	2(5)	6(15)	1(3)	1(3)	13(33)	3(9)	1(3)	5(13)	2(5)	3(8)	1(3)	40
残存率合計数 (%)	3(1)	3(1)	5.3(1)	56.2(13)	15.6(4)	4.1(1)	104.5(26)	25.7(7)	6.2(1)	44.7(11)	25.2(6)	105.5(25)	18.7(4)	417.7

ブロック9



器種	浅鉢	甕	深鉢	壺	蓋	合計
個体数 (%)	4(12)	13(41)	13(41)	1(3)	1(3)	32
残存率合計数 (%)	25.7(7)	154(42)	127.3(34)	37.5(10)	26(7)	370.5

分類	Bv	D2	H	合計
個体数 (%)	1(25)	1(25)	2(50)	4
残存率合計数 (%)	6.2(24)	10(39)	9.5(37)	25.7

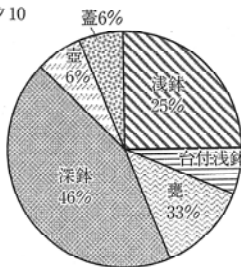
分類	A1	A5	E1	E4	F1	F3	G1	G3	合計
個体数 (%)	5(37)	1(7)	2(15)	1(8)	1(8)	1(8)	1(8)	1(8)	13
残存率合計数 (%)	37.2(24)	5(3)	37(24)	3(2)	7.5(5)	3(2)	6.3(4)	55(36)	154

分類	A1	B1	C1	D	合計
個体数 (%)	4(31)	2(15)	1(8)	6(46)	13
残存率合計数 (%)	54.1(42)	8.5(7)	18.7(15)	46(36)	127.3

分類	E
個体数 (%)	1(100)
残存率合計数 (%)	37.5(100)

分類	A
個体数 (%)	1(100)
残存率合計数 (%)	26(100)

ブロック10



器種	浅鉢	台付浅鉢	甕	深鉢	壺	蓋	合計
個体数 (%)	4(25)	1(6)	2(13)	7(44)	1(6)	1(6)	16
残存率合計数 (%)	82(53)	6(4)	3.1(2)	45.7(30)	8.5(5)	9.5(6)	154.8

分類	A1	Ciii	合計
個体数 (%)	2(50)	2(50)	4
残存率合計数 (%)	72(68)	10(12)	82

分類	A1
個体数 (%)	1(100)
残存率合計数 (%)	6(100)

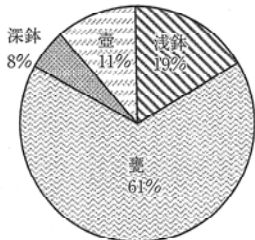
分類	E1	E4	合計
個体数 (%)	1(50)	1(50)	2
残存率合計数 (%)	2.7(87)	0.4(13)	3.1

分類	H2
個体数 (%)	1(100)
残存率合計数 (%)	8.5(100)

分類	A1	C1	D	合計
個体数 (%)	4(57)	1(14)	2(29)	7
残存率合計数 (%)	32.2(71)	2.5(5)	11(24)	45.7

分類	B
個体数 (%)	1(100)
残存率合計数 (%)	9.5(100)

ブロック11



器種	浅鉢	甕	深鉢	壺	合計
個体数 (%)	3(17)	12(66)	1(6)	2(11)	18
残存率合計数 (%)	30.6(26)	51.3(43)	7.5(6)	30(25)	119.4

分類	B3
個体数 (%)	1(100)
残存率合計数 (%)	7.5(100)

分類	B	C	D4	合計
個体数 (%)	1(34)	1(33)	1(33)	3
残存率合計数 (%)	3.1(10)	2.5(8)	25(82)	30.6

分類	H1	D1 ii	合計
個体数 (%)	1(50)	1(50)	2
残存率合計数 (%)	3(10)	27(90)	30

分類	A1	A4 ii	E1	E2	F3	合計
個体数 (%)	1(8)	1(8)	4(34)	5(42)	1(8)	12
残存率合計数 (%)	10(19)	4(8)	12(23)	20.3(40)	5(10)	51.3

第22図 各ブロックにおける土器組成 (2)

⑩ブロック10

大別器種の合計で16個体を確認した。浅鉢が25%と高く、逆に甕が13%で深鉢を大きく下回るのが特徴である。このほか、台付浅鉢、蓋がある。

浅鉢はA 1類とC類のみであり、ブロック3・5に類似する。台付浅鉢A 1類は、浅鉢A 1類に伴うものと思われる。甕はE 1類とE 4類がある。深鉢はA 1類、C 1類、D類があり、これもブロック3・5に類似する。壺はH 2類がある。このほか、口縁部を欠くものにA 3類があり、浅鉢C類に伴う。蓋B類は、磨消縄文が施されており、緒立2期と考えられる。

⑪ブロック11

大別器種の合計で18個体を確認した。甕が66%と高い値を示す一方、深鉢が6%と非常に低い値を示すのが特徴である。

浅鉢はB・C類があるものの、D 4類が主体である。292の変形工字文は、石川日出志氏の変形工字文B群〔石川1985a〕にあたり、匹字部分に縦の袂りを入れる特徴から緒立1期に位置づけられる。肩部に刻目を施す例は、黒崎町緒立遺跡・郡山市御代田遺跡〔目黒1962〕・山形市北柳1遺跡〔小林1997〕・一迫町山王団遺跡Ⅳa・k層〔伊藤・須藤1985〕などにある。甕はE 1・E 2類を主体とする。壺はD 1類iiとH 1類がある。

⑫ブロック12

大別器種の合計で57個体を確認した。これまでのブロックに比べ壺が増加しているのが特徴である。

浅鉢ではA～C類が確認されていない。D 3類は砂沢式の器形に類似する。E・G類は氷Ⅱ式であろう。台付浅鉢B類の変形工字文は下館市女方遺跡の第34号堅穴出土第198号壺形土器〔田中1972〕に類似する。甕はE 1・E 2類が多く、ブロック11とほぼ同じ傾向を示す。深鉢はC 1・D類が主体的である。結節縄文が施される342・344は胎土・焼成等が緒立遺跡のものに類似する。341の器形は上伊那郡中川村苧谷原遺跡例〔太田・設楽1983〕に近似し、氷Ⅱ式に所属する。壺は多様で、遠賀川系のC類と水神平系のD 1類iが含まれる。

⑬ブロック13

大別器種の合計で13個体を確認した。甕・深鉢・壺で構成される。浅鉢は確認できなかったが、口縁部を欠くものでD 3類がある。

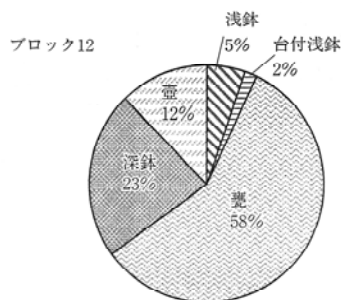
甕・深鉢・壺は個体数が少ないが、ブロック12に近い様相を示す。縄文LLが施される深鉢C 1類354は緒立1期の特徴を示す。遠賀川系の壺C類359は三重県津市納所遺跡〔伊藤1980〕や愛知県一宮市山中遺跡〔服部・石黒ほか1992〕など伊勢湾周辺を分布の中心とする所謂「亜流遠賀川式土器」とみられ、弥生時代前期新段階に位置づけられよう。

⑭ブロック14

大別器種の合計で13個体を確認した。浅鉢が出土せず、壺が31%と高い比率を示すのが特徴である。

甕はA 4類iとH 1類・H 2類が目立つ。366は緒立1～2期に位置づけられる。368の器形は糸魚川市大塚遺跡〔田中1988〕に類例するが、大塚例は体部下位で条痕文が斜位に施されている。367は明科町七貴緑ヶ丘遺跡〔河西・太田1983〕や大町市来見原遺跡〔鳥田1988〕に肥厚する口縁部下に横羽状の条痕文を施すものがあり、弥生中期前半に位置づけられよう。壺D 2・3・5類は他のブロックで検出されなかったものである。363は東海東部の丸子式の系譜を引くものとみられる。365は塩崎遺跡群〔矢口ほか1986〕に口縁部内面が肥厚する例があり、弥生時代前期後半から中期初頭に位置づけられる〔中沢1991〕。

V 上層の調査



器種	浅鉢	台付浅鉢	壺	深鉢	壺	合計
個体数 (%)	3(5)	1(2)	33(58)	13(23)	7(12)	57
残存率合計数 (%)	94.5(12)	20.8(3)	326.1(41)	191.8(25)	146(19)	779.5

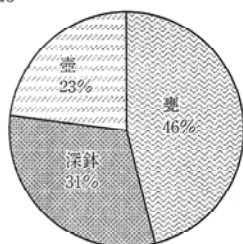
分類	D3	E	G	合計	台付浅鉢	分類	B
個体数 (%)	1(34)	1(33)	1(33)	3		個体数 (%)	1(100)
残存率合計数 (%)	10.5(11)	75(79)	9(10)	94.5		残存率合計数 (%)	20.8(100)

分類	A1	A4 i	A5	E1	E2	E3	E4	F1	G3	合計
個体数 (%)	3(9)	2(6)	2(6)	9(28)	8(24)	3(9)	3(9)	2(6)	1(3)	33
残存率合計数 (%)	21.8(7)	26.9(8)	14.2(4)	128(38)	66.9(21)	13.7(4)	24.5(8)	27.8(9)	2.6(1)	326.4

分類	A1	A3	B4	C1	C2	D	合計
個体数 (%)	1(8)	1(8)	1(8)	4(30)	2(15)	4(31)	13
残存率合計数 (%)	10.7(6)	25(13)	14(7)	63.5(33)	29.2(15)	49.4(26)	191.8

分類	B	C	D1 i	D4	F	H3	合計
個体数 (%)	1(14)	1(14)	1(14)	2(30)	1(14)	1(14)	7
残存率合計数 (%)	8.5(6)	2.5(2)	62(42)	35(24)	25(17)	13(9)	146

ブロック13



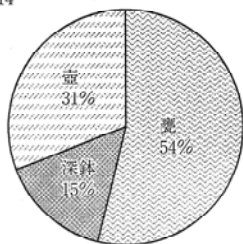
器種	壺	深鉢	壺	合計
個体数 (%)	6(46)	4(31)	3(23)	13
残存率合計数 (%)	62(43)	39.2(27)	42.6(30)	142.8

分類	A5	E1	E2	F2	合計
個体数 (%)	3(49)	1(17)	1(17)	1(17)	6
残存率合計数 (%)	13.5(22)	37.5(60)	6(10)	5(8)	62

分類	A3	A4	C1	合計
個体数 (%)	1(25)	1(25)	2(50)	4
残存率合計数 (%)	13(34)	12.5(33)	12.7(33)	38.2

分類	C	H1	H3	合計
個体数 (%)	1(34)	1(33)	1(33)	3
残存率合計数 (%)	15.6(37)	8(19)	19(44)	42.6

ブロック14



器種	壺	深鉢	壺	合計
個体数 (%)	7(54)	2(15)	4(31)	13
残存率合計数 (%)	67(47)	3.6(2)	72.5(51)	143.1

分類	A1	A4 i	E1	E4	H1	H2	合計
個体数 (%)	1(14)	2(30)	1(14)	1(14)	1(14)	1(14)	7
残存率合計数 (%)	5.5(8)	2.5(4)	4(6)	4.5(7)	37.5(56)	13(19)	67

分類	B3	C1	合計
個体数 (%)	1(50)	1(50)	2
残存率合計数 (%)	1.8(50)	1.8(50)	3.6

分類	D2	D3	D5	H1	合計
個体数 (%)	1(25)	1(25)	1(25)	1(25)	4
残存率合計数 (%)	30(42)	12.5(17)	25(34)	5(7)	72.5

第23図 各ブロックにおける土器組成 (3)

b. 編年的位置

上述した通り、各ブロックの大別器種組成および各器種の特徴は異なる。これは、時期差を反映しているものと考えられる。2～14ブロックの編年的位置についてまとめたい。

1期は女鳥羽川式の段階である。ブロック2・3・4を中心とする。浅鉢はB類を主体とし、ブロック2では初現的な浮線文が伴う。B類iは本期でも古相、B類ii～viは新相を示す。壺はA1類が主体である。条痕文を施すE類はブロック2で認められず、条痕文の発生において鳥屋式が先行するという見解[小林1991]に肯定的である。深鉢はA1・A2・A3類を主体とする。壺はA1・A2類が本期に属するものとするが、2期に下る可能性も否定できない。これらの器形は東海地方の五貫森式の影響により成立した可能性がある。以上、ブロック2・3は本期の後半に位置づけられ、新発田市館ノ内遺跡D地点65a号土坑一括資料[田中ほか1991]・村尻遺跡B地区[石川1991]を指標とする鳥屋1式後半に併行するものと考えられる。

2期は離山段階である。ブロック5・10を中心に、ブロック2～4・6～9に若干含まれる。このほか、SK006出土土器2・3・6も本期に属す。浅鉢はA類およびC類i～ivが該当する。いずれも口外帯をもたず、頸部無文帯が発達していない。台付浅鉢A類も本期に属す。甕はA1・A2・B1類とA4類iの一部が含まれる。隆線手法・隆線帯①は本期に出現する手法であろう。また、E1・E2類はブロック5で検出されていて、本期に属するものが含まれる可能性はあるが、多くは3期の所産と考えられる。深鉢はA1・B1類のほか、C1類では信濃川流域の影響による結節縄文の施文が確認される。壺はA3類が伴う。本期は浮線文の特徴から鳥屋2a式に併行するものと考えられる。

3期は氷Ⅱ式および緒立1期の段階である。ブロック11～13はほぼ単純で、ブロック8・9も主体的である。ブロック3・5・6・7の一部が含まれる。また、SK007出土土器も本期に属す。浅鉢はD・E・F・G・H類が該当する。D類の変形工字文はいずれも緒立1期段階のものである。甕は在地的なA1・A4・A5・E1・E2・F1～3・G1～3類が主体となり、これにC・D類が加わる。A5類の口外帯が退化したものは氷Ⅰ式から逸脱するものとする。氷Ⅰ式終末段階とされる松本市石行遺跡では、発達した口外帯下に沈線帯②や隆線帯②が巡るものが主体的であり、和泉A遺跡とは差がある。F類は頸部無文帯を持つことから本期の所産と考える。その波状沈線文は類例が乏しく、その成立過程は不明であるが、緒立遺跡〔渡邊・荒川1998〕・安田町横峰A遺跡〔石川ほか1981〕・六野瀬遺跡〔杉原1968〕・水原町下金田遺跡〔関ほか1973〕など緒立1期の遺跡で棒状工具による波状沈線文が出現することと、水神平式の波状文との関連を否定できない。深鉢はA1類の一部・A4・B2・B3・B4・C1・C2類とD類の一部が属する。C1類には緒立遺跡の縄文Lや結節縄文に近似するものがある。壺はA4・C・D1・D4・E・F・H類が含まれる。遠賀川系C類の出土は、本県では大塚遺跡に次いで2例目である。D1類は水神平式との併行関係を示す。蓋はA類が含まれる。各ブロック中に中郷村籠峰遺跡〔小池1996b〕等でまとまっている明確な氷Ⅰ式土器が含まれないことも、本期の編年的位置づけの根拠となっている。

4期は弥生時代中期初頭～前半である。ブロック14が該当する。甕はC類の一部・H1・H2、深鉢はC1類、壺はD2・D3・D5類が該当する。中部高地・東海系のものが目立つ。緒立2期に概ね併行するものとする。

以上のように、中部高地および新潟平野の編年観に当てはめてみた。しかし、本遺跡の土器は初例あるいは類例の希少な資料を多数含み、いずれの地域とも様相を異にしている。これは、周辺地域の影響を受けつつも独自の土器文化の存在を裏づけるものである。これまで不明であった頸南地域の縄文時代から弥生時代への変遷を知りうる重要な資料であり、今後、更に検討が必要である。

B 土製品 (図版39)

①土器片円盤 (483～489)

上層からは、土器片の周囲を打ち欠いたり磨ることによって円盤状に仕上げられる、いわゆる「土器片円盤」17点が出土した。この一群は、様々に呼称されている〔藤巻1989〕が、素材と形を明示した名称を採用することとした。

観察にあたっては、出土位置、法量、素材となる土器片の特徴（土器片の部位・色調・混和材）、調整の方法に着目した。法量の計測・実測は、体部・口縁部を利用しているものに関しては土器片の上下を基軸とした。これは、どういった土器のどういった部位が利用されているかを明示するためである。また、実測図化した縦断面と横断面は、土器片の反り具合を示すために必要と考えた。以上のように、資料提示の

視点は素材に重点を置いたものとなっている。しかし、土器片円盤をひとつの道具と考えるのであれば、加工部位や機能部位に留意した視点に立ち観察・図化する必要がある。

出土位置

土器片円盤の分布は、土器や石器の分布の集中域と重なり、ある特定の範囲から集中して出土した様子は認められない。遺構から出土したのは483のみで、S X 124からの出土である。

法量

円形またはそれに近い形に整えられているので、長さや幅の計測値に大きな差は認められず、平均値は、長さが3.8cm、幅が3.6cmである。しかし、それぞれの個体における大きさのバラエティーは広く、2.6～4.9cmと様々なものがある。重さも、大きさのバラエティーを反映して、6.5～24.0gと様々である。一方、厚さは大きさの差に関係なく、0.7～1.0cmというごく狭い範囲に収まり、平均値は0.9cmである。限られた器種の、限られた部位が用いられていたことが予想される。

素材（土器片）の特徴

全ての資料において、土器片の胴部～頸部が用いられていた。いずれも反り具合が小さく、比較的偏平な部位が選択されているようである。文様は、483に浮線文が施されているほかは、無文か条痕文や捺糸文といった地文が施されている。

調整の方法

調整の方法には、「打ち欠き」と「磨り」とが認められる。「磨り」は、製作や使用の過程に形成されたものと考えられる。しかし、いずれに起因するかを判断する根拠を持ち合わせておらず、残された形態を作出した一過程と考えたい。

ここでは、「打ち欠き」と磨りの組み合わせから3つに分類してみた。その結果、「打ち欠きのみ」が4点（24%）、「打ち欠き+磨り」が8点（47%）、「磨りのみ」が5点（29%）であった。「打ち欠き」「磨り」とも、ほぼ同数の資料に観察されたといえる。両者の関係については、城之腰遺跡の報告において詳述されている〔藤巻1991〕が、「打ち欠き→磨り」という原則は本遺跡にも共通する。「打ち欠き+磨り」の一群における2つの調整方法の切り合い関係は、読み取れるものに関しては必ず磨りが後であった。「磨り」という過程を経て、シルエットがより滑らかな円形に仕上げられたと考えられる。なお、城之腰遺跡の報告において「磨り」の方向が円周方向のみとされているが、本遺跡では確認できなかった。

②耳飾り（490）

S K 005から1点出土した。一部分のみの出土であり全体像は定かでないが、文様をもたず厚さ3mm程度と薄手なつくりで、両端がわずかに肥厚する。残存部から復原した径は、実測図上の上側が2.6cm、下側が3.6cmと一端が広がり、いわゆる「滑車形」とは形態を異にしている。

③その他（491～493）

土器片円盤・耳飾り以外の土製品は、包含層から3点出土している。491は6 E 17グリッドⅢ層、492は8 D 14グリッドⅡa層、493は一次調査の28トレンチからの出土である。いずれも欠損しており全体像を把握できないが、残存部は、491は中央部がくびれて鼓のような形、492・493は靴のような形を呈する。492の実測図上の上側には焼成前の横方向の穿孔？が、表面の中央にも裏面に向かう焼成前の刺突が上下に2つ並んで認められる。いずれの胎土も、上層の土器と共通する。

C 石器 (図版40~61)

(1) 記述の方法

a. 上層石器群と下層石器群の分離

本遺跡では、剥片・碎片まで含めると、71,649点にのぼる石器が出土している。それらは、大田切川火砕流堆積物層(Ⅳ層)を挟んで上下に大きく二分できる。しかし、実際にはそれが薄い範囲もあり厳密に両者を分離できない現実もある。そこで、出土層位がⅠ層~Ⅲ層の石器を上層、Ⅴ層以深の石器を下層と機械的に分類した。したがって、本来行われるべき個別分類や垂直分布の検討など文化層分離のための過程は踏まれておらず、純粹に上層と下層とが分離されたというわけではない。しかし、多くが混在していないことは土器の出土状況から予想され、有効な分類基準であると思われる。なお、上層には下層の石器が若干混在していることが予想されたが、下層には上層の資料がほとんど含まれていないようである。

b. 資料提示の方法

資料の提示にあたっては、実測図・写真・観察表・記載を基本とし、遺構出土のものと包含層出土のものに区別、さらに、それぞれを器種ごとにまとめて掲載した。遺跡の特徴をよく示す個体を、各分類の細分形態に著しい偏りがないう図化した。写真については、実測図と対応する番号を付してある。なお、剥片・碎片の一覧表については、図化したものを除いては表などをもって提示することとした。

①資料の表現方法および記載事項

実測図の表示方法

展開図法により図化し、展開面数を器種ごとである程度統一した。このことにより、器種ごとに同様の視点で比較検討できるようにした。ただし、必要の都度、面を加えたり省いたりした。以下、実測図を提示するにあたり、表現の共通点や方法について触れておきたい。

図の縮尺

縮尺率は、基本的に図版ごと器種ごとに統一した。しかし、同一の器種でも大きさが著しく隔たるものは、縮尺率を変えている。スケールは、すべて実測図版に明示してある。

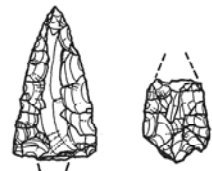
図の表現

実測図表現の原則について触れておきたい。

表面と裏面 剥片および剥片素材の石器は、主要剥離面が観察される側を裏面とした。二次加工が両面におよび素材剥片の剥離面を観察できない場合、礫を素材とする場合は、より平坦な側を裏面とした。

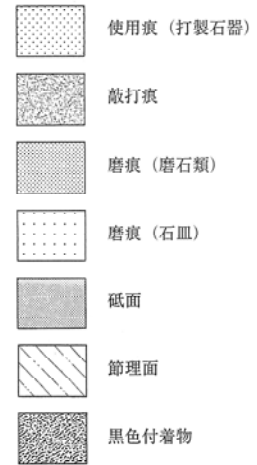
上側と下側 剥片・微細剥離痕を有する剥片は主要剥離面の打点側を上、石核は最終剥離面の打面を上、石鏃・尖頭器は尖頭部を上、石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧・スクレイパー・両面調整石器・礫器は刃部を下、石皿は搔き出し口を下、楔形石器は両極剥離の2極を上下に、砥石は主要な砥面の長軸を上下の軸として設定した。

欠損面の表示 古期の欠損部は短めの想定延長線を実線で、新規の欠損部(いわゆるガジリ)は想定延長線を破線で示した〔織笠1992〕(第24図)。なお、新規の欠損による剥離面は、リング・フィッシャーを記載せず空白で示した。



第24図 古期欠損(左)と新規欠損(右)の図示

使用痕・敲打痕・磨痕・砥面の表示 使用痕・敲打痕・磨痕（磨石類・石皿）・砥面・黒色付着物の範囲を、それぞれ異なるスクリーントーンを添付することで表現した（第25図）。ただし、使用痕と磨痕の多くは、いずれも使用の痕跡と思われる摩滅である。ここでは、打製石器に見られる光沢や線状痕をともなう摩滅を使用痕、磨石類・石皿に見られる摩滅を磨痕に区別して表示した。なお、使用痕や砥面に見られる線状痕は併せて記載した。



第25図 スクリーントーンの表示

節理面の表示 節理面は、実線と破線の直線を交互に記載することで示した（第25図）。剥離方向を把握できるものについてはリング、フィッシャーを併せて記載した。

②観察表の記載方法

出土位置

出土位置の情報として、出土したグリッド・遺構番号・層位を明記した。また、上層と下層遺構の一部についてはドット処理されており、それについては取り上げ番号も明記した。

整理番号

出土石器の整理にあたっては、すべての石器を観察、石器1点1点の観察記録を一覧表にまとめた。整理番号は、観察記録と石器とを照合するために整理作業の段階で付したグリッドごと・遺構ごとでの通し番号になっている。なお、今回、図化できなかった石器、一覧表を提示できなかった石器についても、管理している一覧表をもとに必要な石器の検索が可能な状態になっている。

器種

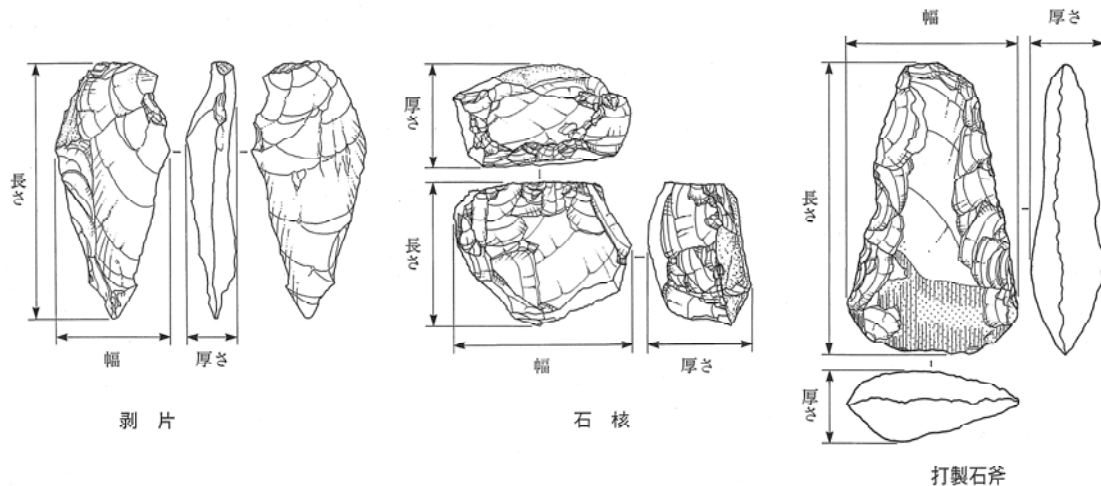
後述する分類基準に則って各器種に分類、必要なものについては各器種の細分類を加えた。

石材

岩石名に加えて物性を記載することにより、石材の細分類を行った。このことにより、各器種に適した石材をより具体的に明らかにするとともに、原石採取地との対応関係を調査する手掛かりとしたい。しかし、今回の分類では不十分であり、関東地方を対象に実践されている柴田徹氏・山本薫氏らによる研究[柴田1994、山本1996など]が理想とされよう。

法量

長さ (cm) ・幅 (cm) ・厚さ (cm) ・重さ (g) を計測した。計測位置は、第26図のとおりである。



第26図 石器の計測位置

折断

剥片を対象として折断面の有無を記載した。本来であれば、折断面の位置を記載する必要もあろう。

欠損

完形品が一定の形態を示す、石鏃・尖頭器・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧・磨石類・石皿を対象として、完形品であるか否かを記載した。なお、石鏃・打製石斧・磨製石斧については、欠損部位という情報から様々なことが読み取れることが予想されたため分類して記載した。

被熱

被熱の判断は、ヒビ割れ・赤化・発泡により判断した。被熱のあり方には、意図的なものと、偶発的なものがある。意図的なものは、むしろ積極的に加熱と呼ぶべきであろうが、両者を厳密に分類することは難しく、ここでは一括して取り扱いたい。なお、縄文時代に積極的な加熱加工技術があったであろうことは、御堂島正氏の研究〔御堂島1993a・b〕により紹介されている。

備考

使用痕・付着物の存在など、上記の項目で触れることのできない観察事項を記載した。

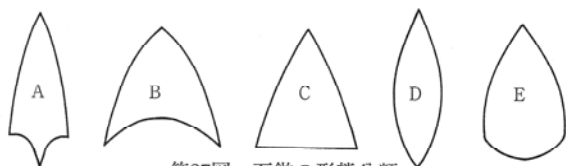
c. 出土石器の分類

出土した石器および石製品は、上層2,488点・下層69,161点で、その内訳は第3表のとおりである。ここでは、細分類を行った器種の基準を示しておきたい。なお、本報告では「製品」でなく、「成品」「未成品」という用語を使用した。それにより、「完成品」「未完成品」という意味合いを含ませ、「土製品」や「石製品」と区別することとしたい。

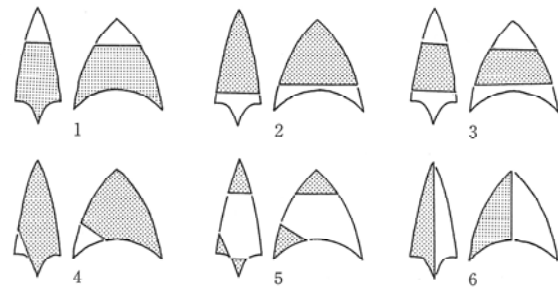
①石鏃（第27・28図）

成品 ここでは、概ね左右線対称に先端部・基部が作出されているものを成品と判断した。分類にあたっては、鈴木道之助氏の基部形態の分類〔鈴木1974〕を参考に、有茎鏃（A類）、無茎凹基鏃（B類）、無茎平基鏃（C類）、尖基鏃（D類）、円基鏃（E類）に分類した。欠損部位については、先端部欠損（1類）、基部欠損（2類）、先端部・基部欠損（3類）、脚部・肩部欠損（4類）、体部欠損（5類）、縦位半割（6類）に分類した。

未成品 未成品には、製作工程の様々な段階を示す資料が含まれている。これらは、素材剥片の使い方に着目して、横位に利用するものをA類、縦位に利用するものをB類と分類した。



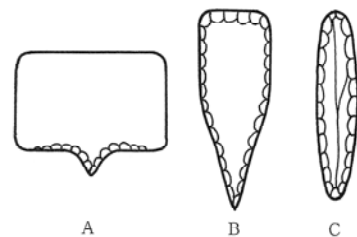
第27図 石鏃の形態分類



第28図 石鏃の欠損状態

②石錐（第29図）

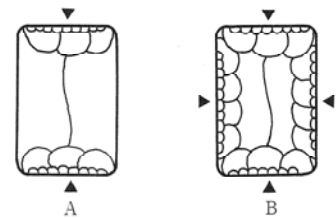
「一端に錐部と考えられる鋭角な先端部を二次調整によって作り出した石器〔織笠1992〕」を呼ぶこととする。剥片の一端に錐部のみが作出されるもの（A類）、調整が全周におよび基部が幅広いもの（B類）、棒状のもの（C類）に分類した。



第29図 石錐の形態分類

③ 楔形石器 (第30図)

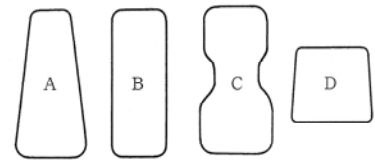
対置する「両縁辺または両先端からほぼ平行に剥離痕が入り、両端には細かい碎屑の剥落した痕跡が連続して残され、ステップ・フラクチャー(階段状剥離)を多く残しているもの〔岡村1976〕」を呼ぶこととする。2極1対のもの(A類)と、4極2対のもの(B類)とに分類した。



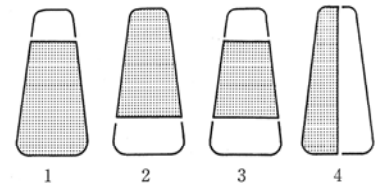
第30図 楔形石器の形態分類

④ 打製石斧 (第31・32図)

比較的厚手の素材(剥片・偏平礫)の周縁に剥離による調整を加えることで、平面形態が撥形・短冊形・分銅形に成形された石器を呼ぶこととした。また、調整の多くは両面に施されており、特に刃部と側縁に入念に加えられている。打製石斧は、撥形・短冊形・分銅形の3つに分類されている〔大野・鳥居1895〕が、ここではその分類を基本的に踏襲した。刃部が幅広になる撥形をA類、両側縁がおおよそ平行する短冊形をB類、体部にくびれがある分銅形をC類とし、さらに、寸詰まりの形態を呈するものをD類として分類に加えた。欠損部位については、基部欠損(1類)、刃部欠損(2類)、基部・刃部欠損(3類)、縦位半割(4類)に分類した。



第31図 打製石斧の形態分類



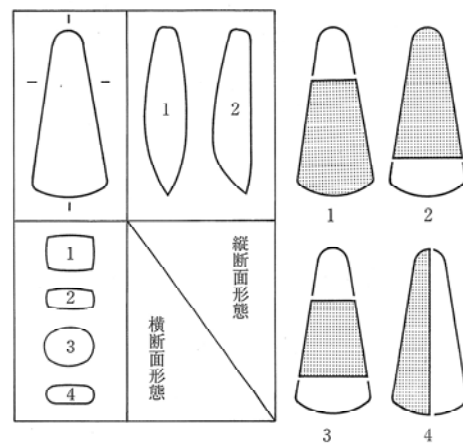
第32図 打製石斧の欠損状態

⑤ 磨製石斧 (第33・34図)

刃部を研磨によって作出している石斧を呼ぶこととし、大形(1類・長さ10cm以上)・中形(2類・長さ5.1cm~9.9cm)・小形(3類・長さ5cm以下)の三者に分類した。欠損品に関しては、残存部の長さ・幅・厚さの比率から推測して分類したが、欠損が著しいものについては分類していない。さらに、刃部形態と基部形態に着目した。刃部形態は、平面形態を平刃(1類)・角が角張る円刃(2類)・角に丸みをもつ円刃(3類)・偏刃(4類)に、縦断面形態を両刃(1類)・片刃(2類)に分類した。基部形態は、ソケットの形態を推測する手掛かりとして横断面形態に着目し、厚手の長方形(1類)・薄手の長方形(2類)・厚手の円形(3類)・薄手の楕円形(4類)に分類した。一覧表の分類を4桁の数字で表現しているのは、これらの分類の組み合わせを意味している。すなわち、左(大きな桁)から「大きさ-刃部平面形態-刃部縦断面形態-基部横断面形態」の各分類を示している。



第33図 磨製石斧の刃部平面形態



第34図 磨製石斧の断面形態と欠損状態

なお、「0」は分類不明のものである。欠損部位については、基部欠損(1類)、刃部欠損(2類)、基部・刃部欠損(3類)、縦位半割(4類)に分類した。

⑥不定形石器 (第2表)

清水上遺跡の報告「高橋・鈴木1980」以降、
 県教委・埋文事業団で刊行した多くの報告書で
 は、縄文時代の搔・削器類、スクレイパー、二
 次加工のある剥片、使用痕のある剥片、微細剥
 離痕のある剥片、不定形剥片石器などといわれ
 ている石器を一括して「不定形石器」として扱
 い、混沌とした状況にあった縄文時代の石器を
 整理してきた。これは、刃部形状、素材、二次
 加工部位に着眼したものであり、石器観察の三
 要素「素材・加工・形」[織笠1984]の多くの範
 囲をカバーした有効な分類といえる。しかし、
 それぞれの分類は共通項をもってグルーピング
 されたものであり、これに「形が定まらない」
 という名称を与えることは矛盾した話になる。
 実際、各分類において、そのグループの特徴を
 あらわす器種名が付されていることは注目され
 る。ここでは基本的には分類そのものを活用し
 つつ、名称についての検討を行い整理したい。

スクレイパー (第35図)

A類～G類とI類を「スクレイパー」と呼ぶことにしたい。実際、A
 類とB類はスクレイパーと付されている一群であり、E類はノッチド・
 スクレイパーそのものである。そのほかについても、織笠明子氏がスク
 レイパー刃部剥離痕の緻密な検討から得られた特徴「刃部剥離痕が複数
 種類の剥離痕の構成から形成されていることが多く、微細剥離痕が何ら
 かの形で加わるものが90%を超える」[織笠1993]と、そう大きくは矛盾
 するものではないと思われる。もちろん、スクレイパーとしたものすべてが機能を一にしたわけではなく、
 「刃部剥離痕の形態」というひとつの視点によりグルーピングしたものである。

両面調整石器 (第36図)

K類と分類されていたものを、ひとつの器種として独立さ
 せたい。打製石斧よりは、素材が薄く、調整が全周しないも
 のをここに分類した。特に、下層において多量に出土し、刃
 部の平面形態の観察により、直線形 (K 1類)、外弯形 (K 2
 類)、内弯形 (K 3類)、端部のみの調整 (K 4類)に細分を
 試みた。

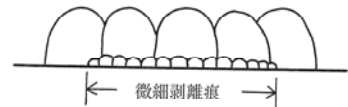
微細剥離痕を有する剥片

不定形石器の分類のH類・J類が対応関係にある。剥片の縁辺に、2mm以下の微細剥離痕が一定の長
 さにわたり連続して形成されているものを呼ぶこととした。

分類	刃部形状	刃部ライン	素材	二次加工部位	細分類
A類	スクレイパー 中型・急角度・連続剥離	—	縦長	側縁と端部	A 1類
B類	スクレイパー 小型・急角度・連続剥離	外彎状	縦長 横長	片側縁と端部 底縁	B 1類 B 2類
C類	鋸歯縁石器 大型・中型・急角度・鋸歯状剥離	直線状	縦長・厚手 横長・厚手	片側縁 底縁	C 1類
		内彎状	縦長・厚手 横長・厚手	片側縁 底縁	C 2類
		外彎状	縦長・厚手 横長	片側縁 底縁	C 3類
		—	厚手	—	C 4類
D類	鋭利な尖端部をもつ石器 大型・急角度剥離	直線状	厚手	片側縁 (一方の側縁は古い剥離面や折断面等を利用する)	D 1類
		内彎状	厚手	片側縁 (D 1類と同じ) 両側縁	D 2類
	大型・浅角度剥離	直線状	厚手	片側縁 (D 1類と同じ) 両側縁	D 3類
		内彎状	厚手	両側縁	石 鏝
	小型剥離	直線状	厚手	—	—
		内彎状	厚手	—	—
E類	大ノッチ 大型・中型・急角度剥離	内彎状	縦長・厚手	側縁	E 1類
			横長・厚手	底縁	
	小ノッチ 中型・急角度剥離	内彎状	縦長	側縁	
			横長	側縁・底縁	
F類	中型・小型・急角度・不連続剥離	端部に丸味	縦長	側縁	F 1類
			横長	側縁と端部	F 2類
G類	大型・中型・浅角度剥離	直線状 外彎状	縦長	側縁	G 類
			横長	側縁・底縁	
H類	無加工 (使用痕の微細剥離・使用痕) 小型・浅角度剥離	外彎状	背面は自然面 横長	底縁	H 類
I類	端部に小型・連続剥離	端部に丸味	縦長・厚手 横長・厚手	端部	I 類
J類	無加工 (使用痕の微細剥離・使用痕)	—	縦長 横長	側縁 側縁・底縁	J 類
K類	両面加工 (調整) 石器 (刃部平面形は波状、側面形はジグザグ状)	外彎状	厚手	—	K 類

※ゴシック以外の明朝体は、一般的傾向を表したことが多い。

第2表 不定形石器の分類 [高橋・鈴木1980]



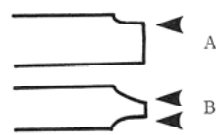
第35図 スクレイパー刃部の認識



第36図 両面調整石器の分類

⑦折断調整石器 (第37図)

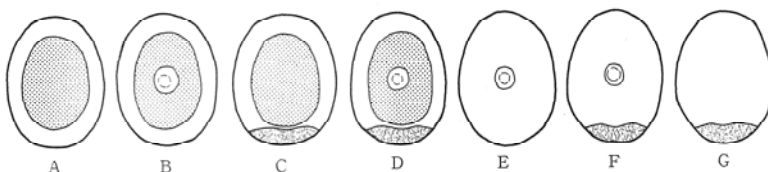
折断面を打面として二次加工が施された石器を呼ぶこととした。この種の石器の存在は、北海道七飯町聖山遺跡の報告において多数、存在することが指摘され注目されている〔阿子島1979〕。聖山遺跡の報告では、微細剥離痕の存在から残された剥片の縁辺を刃部と位置づけ、全体の形態と折断面の位置、数に注目して細分を試みている。本遺跡では、数量的に多くないこともあり、聖山遺跡のような細分は行わなかったが、折断面を打面とした二次加工は、石器製作の様々な場面で活用されていた。ここでは、加工の在り方に着目し、片面のみに加工しているものをA類、両面に加工しているものをB類と細分することとした。



第37図 折断調整石器の分類

⑧磨石類 (第38図)

細分類は、使用痕の組み合わせによって、磨痕のみ (A類)、磨痕+凹痕 (B類)、磨痕+敲打痕 (C類)、磨痕+凹痕+敲



第38図 磨石類の分類

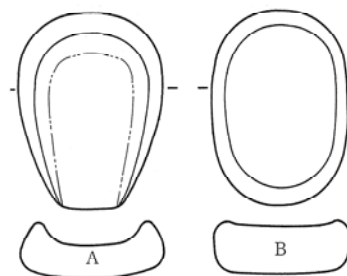
打痕 (D類)、凹痕のみ (E類)、凹痕+敲打痕 (F類)、敲打痕のみ (G類) に分類した〔後藤1979〕。

この分類を見てもわかるとおり、ここでいう磨石類には、いわゆる磨石・凹石・敲石を含んでいる。これらを一括して「磨石類」と呼ぶのは、ひとつの石器に磨石・凹石・敲石それぞれの特徴が同時に備わっている場合が多いためである。ただし、磨痕と敲打痕、凹痕と敲打痕は表裏一体の関係にあり客観的に判断できる基準でないという問題点もある。ここでは、その判断基準を次のように設定した。

磨痕 表・裏面にみられる明らかに滑らかな面と、側面にまみられるザラつく平坦面を磨痕と判断し、その範囲にスクリーントーンを添付した。しかし、滑らかな面と自然面、ザラつく面と敲打痕を区別する基準は観察者の感覚であり、必ずしも客観性を得たものとはいえない。

凹痕 凹痕と敲打痕は、双方とも敲打により形成されたものであり、その区別は極めて難しい。ここでは、平坦面に形成された局所的な深い凹みを凹痕として扱いたい。

敲打痕 面的な広がりをもつ敲打痕を判断し、その範囲にスクリーントーンを添付した。石器の端部に認められることが多く、時には剥離痕を伴う場合もある。



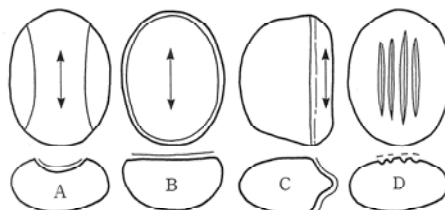
第39図 石皿の分類

⑨石皿 (第39図)

使用面の窪みの具合によって大きく2種類に分類した。使用面の断面形が弓状に深く窪むものをA類、平坦または緩く窪むものをB類とした。

⑩砥石 (第40図)

砥面の形状により4種類に分類した。砥面が窪むものをA類、平坦なものをB類、いわゆる石鋸をC類、いわゆる筋砥石をD類とした。



第40図 砥石の分類

(2) 石器の分布

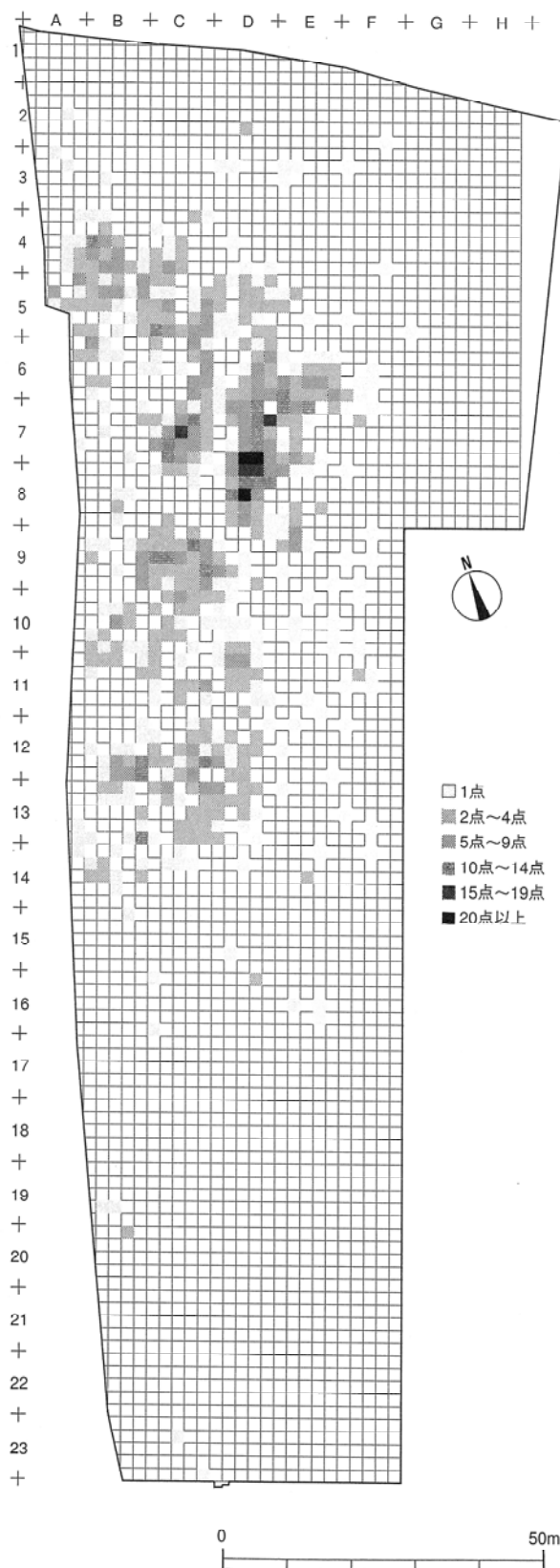
上層石器群は、表土（I層）から大田切川火砕流堆積物層の上位にあたるⅢ層の間に検出された石器群である。出土層位ごとの分布を見ると、Ⅱa層・Ⅱb層からの出土が多いが、極端な偏りは認められない。

包含層から出土した石器の平面的な分布は、土器の分布と同様に濃淡が認められた。おおよそは、土器の重量分布図（第14図）で認められた集中域（ブロック）と重複するように、分布の単位が把握される。しかし、石器の平面的な分布は、希薄ながらも切れ間なく連綿と続いており、明瞭な線引きをできない事実もある。このことは、第41図に示した石器の点数分布図をみても明らかである。

土器の重量分布と石器の点数分布を比較すると、特に、7・8ブロックの分布密度が濃いことがわかる。むしろ、土器の重量分布よりも明瞭にまとまりを把握することができる。この周辺からは石鏃の製作を示唆する未成品や楔型石器が多量に出土している。一方、10・14ブロックにおける石器の分布は希薄であり、ブロック認定にあたっては線引きの基準が問題となる。

土器の重量分布によって把握されたブロック間には、土器に編年的差異が認められている。石器についても、これと対応するかのように石器組成・石材組成に若干の相違が認められるが、土器のように明瞭にブロックを区切れないため、大局的な傾向を後述することとした。

遺構出土の遺物は、SK005とSX124に、ほぼ集約される。いずれも、同一個体と判断される良好な一括資料であり、石器製作技術を復原する上で極めて重要である。その具体的な内容については後述する。



第41図 包含層出土石器の点数分布

(3) 石器組成

上層からは、2,488点の石器が出土しており、その内訳は第3表と第42図のとおりである。ここでは、各器種の特徴を遺構出土と包含層出土とにわけてまとめた。

	石鏃	石鏃未成品	石鏃	楔形石器	打製石斧	磨製石斧	磨製石斧未成品	スクレイパー	両面調整石器	折断調整石器	微細剥離痕ある剥片	剥片・砕片	石核	原石	磨石類	石皿	砥石・砥石片	石製品	総点数	総重量 (g)	平均重量 (g)
安山岩A	24	31	7	97	10			41	12	11	40	1207	36	2					1518	14672.4	9.7
安山岩B								21	38	2	3	94	2	3					163	5745.4	35.2
安山岩C															81	3		2	86	37067.2	431
安山岩D					8	5		3				118	3				2		139	7159.5	51.5
黒曜石	21	5	1	19				4				307	6	1					364	1008.1	2.8
流紋岩	1	1		3								19	7						31	605.5	19.5
閃緑岩						1													1	343.3	343.3
玉髓	1											27	1	10					39	290.6	7.5
石英												3							3	120	40
チャート	1			3								24	1	1					30	183.1	6.1
凝灰岩	1				1	1	1					2							6	98.4	16.4
頁岩	1											1	1						2	27.5	13.8
粘板岩					1							5							6	59.1	9.9
砂岩												7							45	3751.6	83.4
硬砂岩					8	1													9	1056.9	117.4
蛇紋岩						12	2					1							15	988.6	65.9
滑石												16							7	23	44.9
結晶片岩																			5	512.1	102.4
翡翠												2							2	8.1	4.1
総点数	50	37	8	122	28	20	3	69	50	13	43	1833	57	17	83	3	38	14	2487	73742.3	29.6

第3表 上層石器群の石器組成と石材組成

a. 遺構出土の石器 (図版40・41)

上層から検出された遺構は先述のとおり少なく、そこから出土した石器は僅かである。石器が出土した遺構は、S K 005、S K 006、S X 124のみである。ここでは、各遺構から出土した石器の内容を報告する。

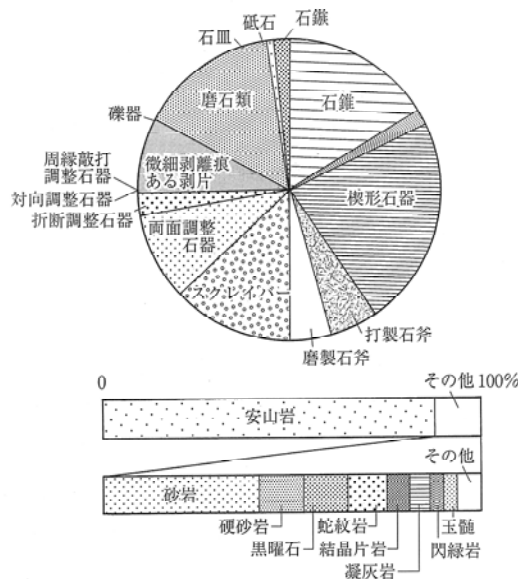
① S K 005

玉髓製の剥片が1点出土しているのみである。

② S K 006 (図版40-14~29)

本遺構から出土した石器は32点にのぼる。それらは、覆土の上で検出されたものと、下部で検出されたものとに分類されるが、ほとんどが上部出土である。下部からはガラス質安山岩製の打製石斧1点 (29) が、上部からは楔形石器2点 (14)、スクレイパー9点 (16~23)、微細剥離痕を有する剥片4点 (27)、剥片15点 (25~26)、石核1点 (28) が出土している。また、上部出土のスクレイパーには浅角度剥離のG類が多い。ちなみに、13は遺構周辺の包含層から出土したものであるが、上部出土のものと同様の母岩であったため併せて提示した。

上部からは多くの石器が出土しているものの、堆積状況の観察から本遺構の形成時期に伴うものかどうか判然としない。こういった問題もあるが、上部の石器は垂直幅をもたず平面的に出土しており、その在り方が注目される。しかも、上部から出土した31点のうち28点は同一母岩から作出された資料であり、剥片剥離工程を復原する上で重要な一括資料といえる。こういった状況から接合作業には十分な時間をかけ



第42図 上層石器群の石器組成 (点数比) と石材組成 (重量比)

たが、2組の確認に留まった。しかし、剥片の大きさ・形態は酷似しており、一連の剥片剥離から得られた一群と考えられる。

剥片剥離の方法で特徴的なことは、打面を固定し、打面調整を行わずに打点を左右に移動しながら幅広（横長）の剥片を得ていることである。すなわち、打面調整や頭部調整と積極的に判断できる調整は認められなかった。剥片剥離のための入念な準備が行われていないと考えられる。剥離角が65度前後でほぼ一定すること、剥片の形態的斉一性は、打面を固定して剥離角を変更せず連続的に剥離した結果であると予想される。

また、打点付近を通る縦位の折断面が3点（22・24・27）に確認されるが、剥片剥離の際の衝撃で偶発的に生じたものである可能性が高い。22にみられる折断面を境にしたV字状の凹みや、27の裏面打点付近にみられる微細剥離痕（折断面上微細剥離）は偶発的な折断に際し生じたものと考えられる。また、24・27のように厚さが8mmにも達する剥片の折断をコントロールするには、支持固定具等が必要という実験結果が得られており〔吉田1996〕、意図的な折断であるならばそういった技術をもっていた可能性が考えられる。

③ S X 124（図版41-30~52）

石鏃1点（30）、石鏃未成品3点（31~33）、楔形石器12点（34~41）、スクレイパー1点（43）、微細剥離痕を有する剥片3点（44・45・47）、剥片65点（46・48~51）、碎片224点、石核1点（52）が出土した。このうち、碎片7点が黒曜石であるほかは、すべてガラス質安山岩の同一母岩から得られたものである。また、出土状況からは一括して廃棄されたことが予想され、石器製作工程を考える上で重要な資料といえる。

さて、S X 124出土の石器において、まず注目されるのは石鏃およびその未成品の存在である。唯一、成品と判断したものは、先端部・茎部が作出されているものの調整が細部にまで及んでおらず、未成品的な側面を併せもつ。未成品には、調整が周縁に留まっていたり、対置する両端に階段状剥離が残っているものがある。前者はスクレイパーと、後者は楔形石器との関連性を窺うことができるものである。田中英司氏の指摘〔田中1979〕のように石鏃の原形をつくる過程に両極打法が用いられていたのであろうか。

楔形石器は、A類（2極1対）が9点（34~38・41）、B類（4極2対）が2点（39・40・45・48）であり、そのほかに楔形石器製作に付随して生じたと思われる剥片（42・44）も認められる。また、A類が比較的薄手であるのに対し、B類は大形で厚手であり特徴的である。B類が大形で厚手なのは、複数の方向を軸とした両極打法で厚みを減じようとした結果の可能性もある。もちろん一概にはいえず、A類の中には接合資料（41）のように異質なものもある。分割が、意図的であるか偶発的であるかは判断できないが、分割後の大きさがB類の大きさに近く、分割された姿が目的とした姿であった可能性もある。そして、分割後に両極打撃の軸を転位して厚みを減じようとしたのかもしれない。

スクレイパー（43）、微細剥離痕を有する剥片（44・45・47）は、剥片の端部付近に細かな調整加工を施していることが特徴的である。調整剥離の大きさや内側への進入の度合いは石鏃未成品（31~33）に共通する。分類者によっては、スクレイパー・微細剥離痕を有する剥片と石鏃未成品を区別しないであろう。中でも、43は素材剥片の大きさ・形状とも31とよく似ており、強い関連性が窺える資料である。

以上のように、これらの一括資料は石鏃や楔形石器を製作する一連の過程を示していると考えられる。しかし、資料はいずれも失敗品や石屑であり、塩沢町十二木遺跡（縄文前期以前と推測される）において石鏃未成品が一括して遺棄されている状況〔家田ほか1988、鈴木1992〕とは対照的である。

b. 包含層出土の石器 (図版42~61)

①石鏃 (53~125)

石鏃は、83点出土しており、製品と判断したものは49点、未成品と判断したものは34点である。

成品 (53~98)

成品で特筆されるのは、有茎鏃 (A類: 53~85) が32点と大多数を占めることである。割合にして90%にも及ぶ。もっとも、上層の遺物の主体となる縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけての石鏃に一般的な傾向といえる。そのほかに凹基鏃 (B類: 89・90) 2点、尖基鏃 (D類: 86・87) 2点、円基鏃 (E類: 88) 1点加わる。しかし、B類2点の形態は下層の石鏃に酷似しており、また、出土地点の大田切川火砕流堆積物層が薄いことを加味すると、本来的には上層石器群に帰属しない可能性が高い。

完形品と欠損品の比率は、ほぼ半数ずつにわかれる。24点 (49%) を完形品、25点を欠損品と判断した。欠損状態は、基部欠損が17点 (68%) と多く、先端部欠損と脚部・肩部欠損が3点ずつ (各12%)、先端部・基部欠損と体部欠損が1点ずつ (各4%) となる。しかし、脚部欠損の中には先端部の調整が不十分なものが認められ、未成品としての色合いが強い。すなわち、それらは遺跡内における石鏃製作の失敗品である可能性がある。また、そう考えられる資料の石材はガラス質安山岩が多く、未成品にそれが多い点とも一致する。

石材は、ガラス質安山岩23点 (47%)、黒曜石21点 (47%)、流紋岩、玉髄、チャート、凝灰岩、頁岩が各1点ずつ加わる。ここで注目されるのは、ガラス質安山岩と黒曜石の利用率の高さである。ガラス質安山岩は、関川や遺跡直下を流れる片貝川など妙高山麓でも採取可能な在地的石材であるのに対し、黒曜石は、霧ヶ峰や和田峠といった中部高地からもたらされた遠隔地石材である。また、1点ずつ加わる石材については、同質の個体がほかに認められず単独で搬入されている。特に、頁岩製の尖基鏃 (86) は、形態の上でも明らかに他と異なるものである。

上層の石鏃において大多数を占める有茎鏃ではあるが、その形態には幅広で寸詰まりなもの (I群) と、細長いもの (II群) とが認められる。また、I群は素材面を残す傾向にあるのに対し、II群は調整剥離が全面に及び素材面が残らない傾向にある。言い換えれば、II群のほうがより入念なつくりともいえる。しかし、単にI群はII群の未成品というわけではないようである。

この形態分類は、大きくはガラス質安山岩と黒曜石の石材分類とも一致する。I群にはガラス質安山岩が、II群には黒曜石が多用されている。しかし、この曖昧な分類にすべてがあてはまるわけではなく、I群に分類される黒曜石製、II群に分類されるガラス質安山岩製もある。特に、II群に分類されるガラス質安山岩製は一定量認められるが、両側縁のラインが緩やかな外弯状を呈し、直線的なラインを呈する黒曜石製との形態的相違点が看取される。また、黒曜石製のII群は、大きさにバラエティーがあるものの形態上の斉一性が高く、黒曜石の産地が、すべて霧ヶ峰と同定されていることは注目される。

こういった分類間の相違は、分布状況と対応関係にある。I群とII群、あるいはガラス質安山岩製と黒曜石製とで、分布が重複しない傾向にあることがわかった (第47図)。黒曜石製のI群 (68・69) とガラス質安山岩製は2~8ブロックに散漫と、黒曜石製のII群は11~13ブロックに集中して分布している。

特に、調査区北側のブロック (2~4) と、南側のブロック (9・11~13) とで石鏃の形態・石材に大きな差が認められる。北側のブロックからは縄文晩期後葉の土器が、南側のブロックからは弥生時代前期前葉の土器が出土しており、これを単純に石器に置き換えるならばブロック間における石器の相違点は時間差を反映している可能性がある。また、石材の変化は、供給環境・供給形態の変化を反映しており、和泉A遺跡

をとりまく社会の変化を窺い知る重要な材料といえる。帰属時期については、より詳細に検討する必要もあろうが、ここでは大局的な傾向を述べるに留めておきたい。

未成品 (99~125)

成品だけでなく未成品が多く加わることも特徴的である。その中には、成品に近いものからそうでないものまで様々あるが、いずれも調整が粗く、微細剥離による細部調整が加えられていない。一部は、左右対称の二等辺三角形に整えられており成品と捉えることもできようが、尖頭部・基部に入念な調整が施されていない。また、対置する両端に細かい碎屑の剥落した痕跡やステップ・フラクチャーが残されているものも認められ、楔形石器との関連性を窺うことができる。素材は、横長剥片を横位に用いる例が圧倒的に多く90%にも達する。時期は異なるが、塩沢町十二木遺跡における未成品の在り方〔鈴木1992〕と共通する。なお、123~125は石鏃の未成品というべき資料ではないかもしれないが、素材の大きさと用い方、調整の在り方が未成品としたものと共通しており、石鏃製作工程の初期段階を表す可能性が高いため併せて提示した。

石材は、ガラス質安山岩32点(84%)、黒曜石5点(13%)、流紋岩1点(3%)である。成品の利用率と比べると、未成品におけるガラス質安山岩製の割合が極めて高い。SX124出土例を併せて考えると、ガラス質安山岩を用いた石鏃製作が遺跡内で行われていた可能性を指摘できる。また、ガラス質安山岩は遺跡直下の片貝川や関川および対岸の関田山地で採取することができ、豊富な石材環境の反映と考えることができる。一方、黒曜石については成品の割合の高さと比べると、未成品の割合は極めて小さい。また、未成品の分布は、縄文晩期後葉の土器を主体とするブロックに偏る傾向がある。

②石錐 (126~133)

石錐は、9点出土した。その内訳は、棒状のものが5点、錐部のみを作出しているものが4点である。しかし、131~133は石鏃製作工程に産出された可能性が高い。また、折断面を打面として表裏に二次加工を加えることで錐部を作出する例(129・132)が認められた。詳細については「折断調整石器」の項で触れるが、折断調整が石錐の製作にも採用されているようである。石材は、133が黒曜石であるほかは全てガラス質安山岩である。

③楔形石器 (134~181・343・344)

楔形石器は、108点出土した。細分類は、2極1対(A類)が96点、4極2対(B類)が12点となり、2極1対が圧倒的に多い。

2極1対は、形態・大きさとも様々であるが、縦長(135・139など)と、横長(134・137など)に大きく二分される。両者を区分する基準を設けていないため、厳密なことはいえないが横長が多い。また、縦長は厚手、横長は薄手の傾向が強く、両者で性格が異なることが予想される。

縦長で厚手のものは、基本的には両極に激しいつぶれが見られず、少ない回数の両極打撃から形成されたと考えられる。また、それぞれの剥離痕は深く、他端にまで達する例もみられる。ただし、大きさが全く異なる144については両極が激しくつぶれている。

横長で薄手のものは、両極の軸を左右に移動させながら繰り返し打撃を加えているようである。もちろん、台石・敲石との接触面が大きければ、両極の軸を移動しなくてもこのような状況はつくりだされる。しかし、軸の移動の単位を示すと考えられる抉入部が、相対する両端の数カ所に認められる(164に顕著)ことから、複数回にわたる両極打撃が考えられる。結果として、広い範囲にわたり両極打撃による剥離痕が観察される。中には、石鏃未成品との共通点が見受けられるものもある。特に、162~167は法量が石鏃と近く、その最も有力な候補といえる。

横長で厚手のものは、数量的に少ないものの組成に加わる。168は、原石に対して直接、両極打撃を加えたものもある。石核になりえない小さな原石を最大限に利用しようとした結果、両極打撃が選択されたのであろう。169・171は、背面に礫面を大きく残しており、もともと分厚く小さな素材である。両極打撃により厚さを減じて、剥片石器の素材にしようとしたのであろう。159は、他の楔形石器とは形態を異にしており、表面平坦面（節理面）に線状痕が認められる。

4極2対は、比較的薄手なつくりであり、2極1対の薄手のグループと類似する。176・179・180・181は、平面形だけなら石鏃の未成品に近く、町田勝則氏により復原された石鏃製作工程の第1次器厚調整[町田1986]と共通する。170・174・177は、薄手で長方形に仕上げられており、2極1対の162・164と類似する。両極の軸を転位することで瘤を除去し、厚さを減じさせようとしたのであろう。

また、2極・4極を問わず、折断面などの狭小な平坦面を打面にして両極剥離を行っていることが特徴的である。134・135・152・157・158・176は折断面を、140・162・174は狭小な礫面を打面として両極打撃を加えている。しかし、両極打撃において狭小な打面を利用することが有効なのかどうかは判断できない。なお、折断面の利用については「折断面調整石器」の項で別途に触れることとしたい。

両極打撃に加えて、調整剥離を加えているものもある。136は、縦長で厚手のものであるが、両側縁に調整剥離がみられ、一端は錐状に仕上げられている。146は、縦長で薄手のものであるが、右側面にスクレイパー状の調整剥離がある。先述の石鏃未成品との共通性を考えても、楔形石器自体が目的的な生産物ではないのかもしれない。

④打製石斧（182～200）

打製石斧は、27点出土した。細分類の比率は、撥形（A類）が最も多く17点（74%）、短冊形（B類）5点（22%）、分銅形（C類）1点（4%）と続き、分類不能は4点である。また、両側縁が平行するか否かで撥形と短冊形に分類したが、ここでいう短冊形は、大きくは撥形のバラエティーのひとつと捉えることができるかもしれない。唯一、分銅形と判断したものについても挟入の度合いが弱く典型的なものとはいえない。むしろ、撥形の範疇に含まれるものかもしれない。

使用痕は、半数以上の16点（59%）に肉眼観察された。その多くは、基軸に対し縦位方向の線状痕を伴う磨耗であり、撥形の幅広な側に顕著に認められた。それは、両面に均等に分布するのではなく、片面により広範に分布する傾向がある（183・195・196・198など）。また、使用痕と剥離痕の切り合い関係から、刃部再生を意味すると思われる変形が認められた（186・188・191など）ほか、その際に生じた剥片（304）も出土している。

そのほかに、全面に使用痕が及んでいるもの（185）、斜位方向の線状痕（191・193・196）も認められる。前者は、刃部の位置を判断できないほどであり、どちらか一面に偏ることはない。また、実測図上の上部には斜位方向の線状痕が観察されるが、それぞれ平坦な「面」を形成しており、意図的な研磨による可能性が高い。なお、同様の平坦面は200にも認められる。こういった例もあるが、原則的には斜位方向の線状痕であっても、表裏でほぼ同方向であり、両面が同時に同方向に機能した結果の表れと考えられる。

石材別にみると、安山岩17点（63%、182～191）、硬砂岩8点（30%、192～199）、凝灰岩1点（4%、200）、粘板岩1点（4%）である。他の器種と同様、最も多用されている安山岩は、片貝川で同質のものを容易に採取できる。他の器種と比べて特徴的なことは、粒子の大きさと密度がよく似た硬砂岩が多用されている点である。同質の硬砂岩は、上層の打製石斧以外には認められず、上層石器群を特徴づける要素のひとつといえる。同質の石材を片貝川では採取できなかったが、より軟質の砂岩は採取されている。

⑤磨製石斧 (201~219)

磨製石斧は、成品21点、未成品3点が出土した。

成品 (201~216)

成品は、21点出土しているが、形態的バラエティーに富んでいる。大きさの分類では、大形2点(14%)・中形9点(65%)・小形3点(21%)・分類不明が7点となり、中形が半数以上を占めている。また、分類不明の破損品の殆ども中形に属する可能性が高い。

この大きさによる分類は、形態の分類とよく一致する。大~中形は、両刃(縦断面形1類)で厚手(横断面形1・4類)なつくり、小形は片刃(2類)で薄手(2・3類)なつくりであることがわかった。また、刃部の平面形態についても、大~中形は外弯状のカーブを描くのに対し、小形は直線的なラインを描く。すなわち、大きさによって形態が大きく異なることが理解される。この形態差は、柄の形態や機能の違いを反映していることが予想される。

また、大~中形は、基部の形態から2つに分類することができる。201・202は、両側縁がほぼ平行し、刃部付近の幅と基部付近の幅に大きな差は見られない。また、基部側は研磨による整形の後、剥離・敲打により大きさと形状が整えられている。その結果、つくりだされた両者の形態は酷似しており、柄の形態に合わせて基部を再調整したかのようなのである。また、厚手なつくり、石材に閃緑岩・安山岩が充てられている点で、弥生時代の大型磨製石斧に共通性が見出される。一方、203~208は、両側縁が基部側にむけて急速に狭まり、刃部付近に比べ基部付近の幅が極端に狭く、量的には大多数を占める。石材には、蛇紋岩が多用されている。形態・石材とも、縄文時代晩期の磨製石斧に共通性を見出すことができる。

このように、形態・石材に相違点が見られる両者は、異なるブロックから出土している。前者は弥生前期前葉の土器を主体とするブロックに、後者は縄文晩期後葉の土器を主体とするブロックに帰属する。しかし、後者の典型例である206は、弥生前期を主体とするブロックから出土しており、こういった傾向とは異なる。出土した土器の編年関係と照らし合わせるならば、形態・石材の差は時間的な差を意味している可能性がある。このことは、先述の石鏃の状況と関連付けて考えることができる。詳細については、後述することとしたい。

欠損部位については、刃部欠損品が半数を超えることが特徴的である。遺跡外で刃部を破損し、柄に装着された基部側のみが遺跡内に持ち帰られたことが予想される。また、残った基部を再加工することで、再び刃部を作出している例もある。213は、欠損面を再加工した上、当初、基部として利用していたと思われる側を刃部に再加工している。転用の例としては、珍しいケースといえよう。

製作技術については、未成品で触れることとするが、研磨の前段階の製作工程を示す資料がある。201・202・203・205には敲打痕が、207・214には擦切技法の痕跡が残されている。

未成品 (217~219)

未成品は3点出土したが、それぞれが製作工程の特徴をよく表している。217は、一見、打製石斧のようにみえるが研磨痕が観察される。研磨痕は、使用痕のように凹んだ部分には観察されず、高まりのみに観察された。すなわち、対象物が硬いため凹んだ部分は接触しなかったものと考えられる。また、表裏で研磨の方向が異なること、石材が蛇紋岩であることを含めても磨製石斧の未成品と考えるのが妥当と思われる。剥離により、成品の形態に近付けた後に研磨を行う工程が予想される。218は、平行する両側縁にほぼ平行して剥離痕が入り、階段状の剥離痕を多く残している特徴から、両極打法が採用された可能性が高い。蛇紋岩の小形偏平礫から両極打法を用いて成形していく工程を示す例である。219は、凝灰岩の転石を直接研磨することで形態を整えていく工程を示す例である。

⑥ スクレイパー (220~226・228~240・242・243・245・246・266~268)

スクレイパーと微細剥離痕を有する剥片の区分については、分類者によって随分と異なる。ここでは、織笠明子氏が示したスクレイパー刃部剥離痕の特徴〔織笠1993〕を基準にスクレイパーを分類した。しかし、刃部剥離痕の観察からスクレイパーと判断されるものの形態は様々であり、不定形石器の分類基準〔高橋・鈴木1990〕をもとに整理したい。

A類・B類は、急角度で直線状~外弯状の刃部ラインをもつスクレイパーである(220~230)。小形のものとは大形のものがあるが、いずれも剥片の形状が大きく修正されることはなく、直線的な刃部ラインをもつものが多い。調整加工は、裏面から表面に向けてのものが主体で、急角度に仕上げられている。その部位は、剥片の端部に施されているもの(226・228・229など)と、側縁に施されているもの(220・221・223など)とがある。

C類は、いわゆる鋸歯縁石器(デンティキュレイト)である(231~234)。ノッチが連続することで、鋸の歯のようにジグザグの刃部に仕上げられたもの〔芹沢1986〕を分類した。鋸歯縁のラインは直線状~外弯状を呈し、それぞれのノッチの刃角は90度に近く、極めて急角度な仕上がりである。

E類は、いわゆるノッチド・スクレイパーである(235・236・238)。鋸歯縁石器のようにノッチが連続せず、それぞれが独立して存在する。また、鋸歯縁石器と比べるとノッチの大きさが大きく緩やかである。

F類は、小形の剥離を剥片の端部に施すことで丸味をもたせたものである(237・239)。縦長剥片の先端部に急角度な調整剥離が加えられており、A類と共通するところがある。

G類は、大~中形の浅角度剥離を加えたもので、小形のもの(240・242)と大形のもの(236・245)とに分類される。小形のもの、石鏃未成品との共通性が窺え、石鏃製作工程の初期段階の資料といえる。大形のもの、浅角度で深い剥離痕が広い範囲に認められる。部分的に調整が両面に及んでいることがあり、両面調整石器を製作する一過程を示している可能性がある。

⑦ 両面調整石器 (227・244・249~257・269~276)

両面調整石器は、50点が確認された。このうち、38点は流理構造の安山岩を素材とするもの(269~276)である。これは、下層石器群に特徴的な形態の石器であるが、ここで扱ったものと下層のものとは特段、異なる点はみられない。また、上層と下層とを分離する大田切川火砕流堆積物層が薄い範囲から多量に出土している。これらのことから、この石器は下層石器群に帰属する可能性が高いと考えられる。しかし、当初の方針どおりI~III層から出土したものについては、上層石器群として扱っておきたい。

流理構造の安山岩を素材とした両面調整石器は、折断で適当な大きさに調整し、通常の片面調整、折断調整、両面調整などを加えて、最終的に滑らかな円形(269・272)や隅丸方形(270・273・274)に整えられている。流理構造の安山岩を有効に利用する一群については、下層石器群において詳述したい。

このほかの両面調整石器(249~257)は、すべてガラス質安山岩製である。両面調整により作出されたラインには、直線的なもの(227・249~251・257)と外弯状のもの(252~256)とがある。249は、両側縁が直線状に入念に調整され、先端にはクリーパー状の剥離痕が認められる。打製石斧の破損品、あるいは製作途中の資料の可能性もある。252・253は、薄手の縦長剥片の側縁に両面調整が加えられている。253は、横形石匙ともいえるような形態である。254は、厚手の剥片の端部に外弯状の両面調整が施されている。256は、厚手の縦長剥片の端部から右側面にかけて両面調整が施されているが、ほぼ全面に使用痕(磨耗痕)が認められる。肉眼観察では、打製石斧の使用痕と似ている。

⑧折断調整石器 (258~265)

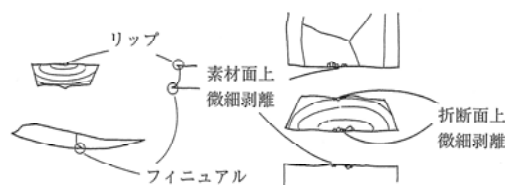
上層・下層を問わず、特徴的な技術のひとつに折断面を打面にした調整剥離がある。このような技術は、北海道・聖山遺跡の報告で「意図的に折断して成形したのではないか」と考えられ注目された〔阿子島1979〕。聖山遺跡では、この種の石器が大量に出土しており、8つの形態的まとまりに分類しているが、本遺跡における同様の石器からは、形態的なまとまりを見出すことはできなかった。そこで、ここでは折断面を利用する調整剥離の技術的位置付けを行いたい。

この種の技術を考える上で、まず重要となってくるのが折断である。石器製作において、折断が一定の役割を果たすことは滝沢浩氏〔滝沢1962〕、織笠昭氏〔織笠1978〕、小林博昭氏〔小林1980・1983〕、森山公一氏〔森山1978〕、西秋良宏氏〔西秋1996〕、吉田政行氏〔吉田1996〕らによって様々な視点から論じられてきた。本来であれば、全ての石器における折断部位や折断面の観察などを詳細に記載する必要があったであろうが、今回の分析では折断面の有無を記載するに留まった。また、ここで折断面と判断したものの中には、意図的・偶発的な折断面はもちろんのこと、使用時の折損面や埋没後の損傷結果も含まれると思われる。こういった問題を孕むが、剥片1833点のうち462点(25%)に折断面が確認された。この割合を、どう評価するかについては他の石器群との比較が必要であるが、決して少ない割合とは思わない。

折断によって作出される形態は様々であるが、剥片の剥離軸に対して縦位方向に折断したもの(258・260・263など)と、横位方向に折断したもの(259・288・289・291・297・300など)とが認められる。折断の結果、縦位方向のものは三角形~台形に近い形態を、横位方向のものは四角形に近い形態をとることとなる。縦位と横位を組み合わせることで均整のとれた長方形が作出されたものもある(277)。こういった折断が、偶発的にできないとはいえないが、折断位置をコントロールすることで目的とする素材に形態を変形させた可能性がある。縦長剥片の下半分を折断したもの(282・288・289・291・293)についてはその様子が顕著に窺え、大きさ・形態とも斉一的である。しかし、これ自体が目的とした生産物なのかどうかはわからない。

また、この種の折断剥片については頭部が残されるものの、中間部~末端部〔織笠1983〕は比較的多くは確認されていない。中間部~末端部が、何らかの形で加工が施されて変形してしまった可能性がある一方、残された頭部はその石器を製作する際に生じた残滓であることも考えられる。いずれにせよ、「折断」という技術を石器製作に積極的に取り入れていたと考えられる。しかも、折断位置をコントロールしていたとすれば、支持固定具や加圧具などの道具〔吉田1996〕とそれを活用する技術、もしくは、これにかわる高度な技術の存在が予想される。

折断剥片は、そのまま道具として機能したことも考えられるが、作出された折断面を利用した二次加工が13点に認められた。ここでは、折断面を利用した二次加工が認められるものを「折断調整石器」と呼ぶこととした。その二次加工の在り方は、先にも触れた折断面を打面とした調整剥離と、表裏面から折断面に向けた調整剥離とがある。上層石器群においては、前者が中心で、後者は262のみに認められた。262は、折断により形成されたリップ(第43図)を除去するかなのような形で二次加工が施されたものであるが、元来、リップやフィニユアルは薄く剥落しやすい部分であり、偶発的な剥離痕である可能性もある。あるいは、折断面を打面にした調整剥離のための準備であったかもしれない。



第43図 折断面の名称〔吉田1996〕

いずれにせよ、ここで折断調整石器としたもの全てにおいて、折断面を打面とした調整剥離が認められる。折断面と表裏面のなす角度は90度に近いことが多く、それが打角として生かされている。また、斜めに折断された場合は、鋭角の側に調整剥離が加えられている(259)。こういった技術は、様々な器種を製作するのに活用されている。

石錐では127・129・132に、打製石斧では192に折断調整の痕跡が残されている。両者とも、折断によって目的とする形態に近付け、通常の調整と折断面を打面とした調整を組み合わせて仕上げている。楔形石器では、折断面を打面とした両極剥離が135・152・157・176などに認められる。こういった石器の存在から、上層石器群における折断調整石器自体は、それ自体が目的とする石器ではなく、何らかの石器を製作する途上の産物であると考えたい。

⑨磨石類(355~386)

磨石類は、83点出土している。細分類による数量比は、磨痕のみのA類が29点(35%)、磨痕+凹痕のB類が31点(37%)、磨痕+敲打痕のC類が1点(1%)、磨痕+凹痕+敲打痕のD類が8点(10%)、凹痕のみのE類が8点(10%)、凹痕+敲打痕のF類が4点(5%)、敲打痕のみのG類が2点(2%)となる。それぞれの痕跡ごとにみると、磨痕は69点(82%)、凹痕は51点(61%)、敲打痕は15点(18%)となり、磨痕と凹痕が多く資料に認められたことになる。石材は、81点が粗粒の安山岩で、2点が砂岩である。

A類(355~363)は、円形の円礫を素材とし、表裏両面の平坦面に磨り痕が認められるもの(355~358)が多い。厚手なものは少数であるが、全面に磨痕が見られるもの(359・362)や、小形で球形を呈するもの(360~362)は特徴的である。また、363は偏平な亜角礫の平坦面に磨痕が観察されるものである。

B類(364~370)は、楕円形の扁平礫を素材とし、表裏両面の平坦面に磨痕と凹痕が認められるもの(364~368)が多い。磨痕により作り出された平坦面に凹痕が認められるもの(369・370)もある。

C類(372)は、1点のみに認められた。表裏両面と側面に磨痕により作り出された平坦面と、端部に敲打痕が認められる。表面の磨痕は、端部の敲打痕を打点とする剥離痕に切られている。

D類(371・373~375)は、B類とC類の特徴を併せ持った形態である。磨痕により作り出された平坦面に凹痕が、素材の端部に敲打痕が認められる。375は、表裏と側面に磨痕が認められ、「磨痕→凹痕・敲打痕」という関係を読み取ることができる。

E類(376~379)は、様々な形態の素材の平坦面に凹痕が認められるものである。379には、深い凹痕が認められ特異であるが表採資料であり、また、下層に特徴的な形態であることも考えると上層石器群に伴うものかはわからない。

F類(380~384)は、平坦面の凹痕と端部の敲打痕を特徴とする。380・381は、厚手の円礫の周縁、広い範囲に敲打痕が認められるものである。382~384は、偏平な礫の端部の狭い範囲に敲打痕が認められるものである。

G類(385)は、2点のみであるが縦長の礫の端部に敲打痕が観察される。

以上のほかに、明瞭な使用痕が観察されないものの、磨石類A類と大きさ・形態が共通する一群が認められた(387)。火砕流の堆積物から形成される地山には、こういった川原石が存在することはなく、明らかな搬入礫である。目的は分からないが、磨石類の素材であった可能性もある。また、肉眼で磨痕を観察できなかっただけで、実際は使用していることも考えられる。

⑩石皿 (388)

石皿は、3点出土しているがいずれも大きく欠損している。磨石類の数量と比べると極めて少ないといえる。皿面の形態は、いずれも若干窪むことはあっても、基本的には平坦である。石材には、粗い安山岩が利用されている。

⑪石鋸形石器 (389)

ここでいう「石鋸形石器」は、縦断面の形態が石鋸に似ているものである。いわゆる石冠であり、晩期後葉の土器を主体とするブロックから1点出土している。石材は、磨石や石皿に多用される粗粒の安山岩である。磨り痕、敲打痕、凹痕が認められ磨石類との共通点が多く、使用の結果、形成された形態といえそうである。そこで、磨石類と併せて提示することとした。

磨り痕は表裏の広い平坦面と下面に、敲打痕は裏面の中央部・上面、左右両端に、凹痕は下面に2ヶ所認められる。これらの痕跡の切り合いは、「磨り痕→敲打痕・凹痕」という前後関係にあり、先述の磨石類の在り方と共通する。特に、左右両端の敲打痕は著しく「敲石」として機能したことを予想させる。裏面の敲打痕は、広い平坦面を形成した磨痕を分断するように1条が認められる。この敲打痕が石鋸のような断面形を形成している。なお、表面においてそれと対応する箇所は、自然の凹みを利用している。

⑫砥石 (390~395)

砥石は、破片資料も含めると38点にのぼる。しかし、そのうち28点は砥面の残った破片資料であり、全体像がわからないものである。残った砥面の観察から細分類すると、砥面が窪むA類が2点(5%)、平坦なB類が28点(74%)、擦切石器であるC類が8点(21%)であった。B類が大きな割合を占めているが、その多くは破片資料であり、A類やC類の平坦な部分が残されている可能性もある。したがって、B類と純粋に判断できる個体はほとんどないと考えられる。石材は、全て粒子が細かい砂岩である。また、被熱したものが多くも特徴的である。

A類(390)は、川原石を素材とし、溝状に窪む砥面が5条観察される。裏面には平坦な砥面が観察される。B類(391・392)は、平坦な砥面を有するものであるが、幅2cmほどのごく浅い窪みも認められる。C類(393~395)は、擦切石器であるが、いずれも他の分類からの転用例(393・394)や破片の縁辺部を利用した例(395)である。使用の結果、擦切部の縦断面形はU字形、平面形は直線状~緩い外弯状を呈している。擦切を用いた磨製石斧が出土しているが、幅が擦切部の厚さと類似するものもあり、その関連性が予想される。しかし、実際には擦切部の厚さのほうが大きい傾向にあり、一概にはいえないかもしれない。

(4) 剥片剥離技術

ここでは、上層石器群における剥片剥離技術の復原を試みたい。代表的な石核と剥片を、図版54~59に提示したので、それらを中心に述べていく。

まず、最大の特徴として、剥片剥離のための入念な準備作業が行われていないことを挙げることができる。明らかな打面調整や頭部調整は認められず、頻繁な打面転位を行うことで適当な打角を準備している。また、その打面転位の方向に明確な規則性は認められない。すなわち、打面や作業面を固定することはなく、適当な打角さえあれば剥片剥離していると考えられる。

その打角は、80~90度と大きく準備されるもの(例えば、306・307・312・324・326など)と、70~80度と比較的小さく準備されるもの(例えば、305・315・318・319・321・333など)とが認められる。前者は、

打面が固定され、概ね90度方向の打面転位が行われ、3面以上に作業面が形成される。一方、後者は、打面が固定されることなく、180度方向の打面転位が頻繁に行われ、作業面が表裏2面に形成される。言い換えれば、前者が直方体に近い形状であるのに対し、後者は両面調整石器に近い形状となる。

こういった剥片剥離技術から得られた剥片に、有意な形態の斉一性は認められない。敢えて特徴をいうならば、横長剥片が多い点を挙げることができる。278・279・281・287・290・293などがそれと判断されるものであるが、SK006出土の一括資料のように大きさ・形態に強い斉一性は認めることができない。また、石核（特に、両面調整石器に似た形状の）に残された最終剥離面の形態とはよく似ており、相互の関連性が予想される。すなわち、石核に残された剥離痕の観察からも、横長剥片が得られたことが窺える。

一方、縦長剥片がないわけではなく、285・286・295・296・299・303などがそれと判断される。しかし、その割合は小さく、意図的に連続的に得られたものとは考えにくい。295・296・299は、打面転位をした結果、打面と作業面により形成された稜線に沿って力が加わったものであるし、303は上下両端に認められるファシット状の剥離痕から両極打法による衝撃により偶発的に産出された縦長剥片と考えられる。また、285・286についても表面の剥離方向の構成を見る限り、打面が固定された様子はみられず、いわゆる「石刃技法」のように画一的な剥片剥離技術から得られたものとは言い難い。

以上のように、横長剥片の製作に比重は置かれたものの、画一的な技術から、斉一的な形態の剥片が製作されるような性格のものでないことがわかる。二次加工の在り方が、素材の形状を大きく修正する形状修正的〔安藤1983〕なものであることは、素材の形状に細心の注意が払われなかった結果といえるかもしれない。

しかし、石鏃や打製石斧には横長剥片を素材とするものが圧倒的に多いことにも注意を払う必要がある。すなわち、「横長剥片しか得られないのでそれを利用せざるをえなかった」という考えと、「目的とする石器を製作するのに横長剥片が必要であった」という考えが成立するのである。どちらがより妥当な考えかという、特定の形態を呈する素材に固執する様子が認められないこと、縦長の素材も利用されていることから、前者の在り方の可能性が高いと考えられる。

（5）石材組成

ここでは、出土した石器の石材組成に触れたい。石材組成は、第3表・第42図に示したとおりである。

①安山岩

安山岩は、大きく4つに分類した。その内容は次の通りである。

安山岩A：いわゆるガラス質安山岩。割れ口は黒色であり、斑晶が極めて少ない。

安山岩B：流理構造の安山岩。節理面を巧みに利用した剥片剥離が行われる。特に下層石器群で多量に認められる特徴的な石材。

安山岩C：磨石や石皿に用いられる粗粒の安山岩。剥片石器の製作には適さない。

安山岩D：上記A～Cに分類されないものを一括して呼ぶこととした。

以上のように、一口に「安山岩」といってもその範疇は極めて広いが、上層石器群において圧倒的多数を占める第一石材である。総点数で1,906点（77%）、総重量で64,644.5g（88%）を占める。様々な特徴をもった安山岩ではあるが、それぞれの物性を巧みに利用した石器製作が理解される。

安山岩Aは、総点数1,518点（61%：上層石器群全体に対する割合）、総重量14,672.4g（20%：総点数に同じ）と点数の割合が極めて高く、重量の割合が小さい。1点あたりの平均重量にすると、9.7gになる。

これは、石鎌などの小形剥片石器の製作に多用されているための結果といえる。ガラス質安山岩を一括して分類したが、現実的には、その中でもバラエティーがある。極めて無斑晶質なものから若干の斑晶を含むものまである。しかし、それを細分すると限りがないので小形剥片石器に適したものを一括して分類することとした。なお、斑晶が極めて少なく均質なものは石鎌などの小形石器の製作に、斑晶が多く均質さに欠けるものは、打製石斧やスクレイパーなど中～大形石器の製作に利用される傾向にある。

安山岩Bは、総点数163点（7%）、総重量5,745.4g（8%）であり、1点あたりの平均重量にすると35.2gとなる。器種との対応関係をみると、両面調整石器・スクレイパー・折断調整石器に充てられていることがわかる。「両面調整石器」の項でも触れたが、この種の安山岩は下層石器群から膨大な数が出土している特徴的なものである。また、出土位置も上層と下層を分離する大田切川火砕流堆積物層が薄い範囲に偏っており、本来的には上層石器群に含まれないものである可能性が高い。

安山岩Cは、総点数86点（3%）、総重量37,067.2g（50%）であり、1点あたりの平均重量にすると431gとなる。点数の割合が小さく、重量の割合は極めて高いことがわかる。これは、磨石類や石皿に多用されているためである。剥片石器に適さない粗粒なものを一括して取り扱ったが、実際にはいくつかに細分できる。平面形が整った円形や楕円形のものが比較的緻密であるのに対し、彎曲や凹凸のあるものは粗粒な傾向にある。前者は磨痕のみの磨石類Aに特徴的で、後者の多くには凹痕が観察され、物性による使い分けが予想される。

その他の安山岩（安山岩D）は、総点数139点（6%）、総重量7,159.5g（10%）であり、1点あたりの平均重量にすると51.5gとなる。様々な種類のものが含まれているので一概にはいえないが、スクレイパーなどの大形の石器に充てられている。なお、石鎌などの小形石器にガラス質以外の安山岩が充てられることはなかった。

②黒曜石

黒曜石は、総点数364点（15%）、総重量1,008.1g（1%）であり、1点あたりの平均重量にすると2.8gとなる。点数の多さのわりに、総重量が極端に少ないことがわかる。これは、石鎌などの小形石器に多用されていることと、その製作過程に生じた碎片類が含まれていることの反映である。

③流紋岩

流紋岩は、総点数31点（1%）、総重量605.5g（1%）であり、1点あたりの平均重量にすると19.5gとなる。上層石器群で利用されている流紋岩は、ガラス質で良質なものであり剥片石器に適したものである。したがって、石鎌や楔形石器といった小形石器に利用されている。また、石核や剥片も一定量が認められ、遺跡内で剥片剥離が行われたと考えられる。341～346は、流紋岩の同一個体であるが、接合資料からは小形の剥片しか得られていないことがわかる。

④玉髄

玉髄は、総点数39点（2%）、総重量290.6g（0.3%）であり、1点あたりの平均重量にすると7.5gとなる。石鎌と石核・剥片・碎片から構成され、小形剥片石器に利用されていたことがわかる。

⑤チャート

チャートは、総点数30点（1%）、総重量183.1g（0.2%）であり、1点あたりの平均重量にすると6.1gとなる。石鎌・楔形石器・原石・石核・剥片から構成され、小形剥片石器に利用されていたことがわかる。

⑥砂岩

砂岩は、総点数45点（2%）、総重量3751.6g（5%）であり、1点あたりの平均重量にすると83.4gとなる。砥石に多用されるほか、磨石類にも少量認められ、大形の石器に利用されていることがわかる。

⑦硬砂岩

硬砂岩は、総点数9点（0.4%）、総重量1056.9g（1%）であり、1点あたりの平均重量にすると117.4gとなる。打製石斧には灰白色～茶褐色のものが、磨製石斧には暗緑色のものが利用されている。特に、打製石斧に利用されているものは、上層石器群のみにみられる特徴的なものである。

⑧蛇紋岩

蛇紋岩は、総点数15点（0.6%）、総重量988.6g（1%）であり、1点あたりの平均重量にすると65.9gとなる。磨製石斧とその製作過程に生じた資料から構成される。

⑨滑石

滑石は、総点数23点（0.9%）、総重量44.9g（0.06%）であり、1点あたりの平均重量にすると2gとなる。石器ではないが、小形の石製品とその製作過程の資料から構成される。また、そのほとんどは弥生前期前葉の土器を主体とするブロックからの出土であり特徴的である。

⑩結晶片岩

結晶片岩は、総点数5点（0.2%）、総重量512.1g（0.6%）であり、1点あたりの平均重量にすると102.4gとなる。石器ではないが、石棒のみから構成される。

⑪その他

以上のほかに、閃緑岩・石英・凝灰岩・頁岩・粘板岩・翡翠が若干量ずつ出土している。閃緑岩・頁岩・翡翠は、遠隔地石材と考えられるものであり単独で搬入されている。また、頁岩とした309は、黒色で著しく珪化しており、また表裏には珪化木にみられる繊維のような状態が観察される。

（6）石材環境

和泉A遺跡をめぐる石材供給環境に触れるにあたっては、まず、在地石材と遠隔地石材とに大きく二分することとした。両者間の線引きについては様々な議論があるが、ここでは、遺跡が所在する頸南地方を「在地」と、それより離れた地域を「遠隔地」と便宜的に呼ぶこととした。この頸南地方は、地形的に明瞭に区分される。南東を関田山地に、南西を妙高山麓に囲まれた山麓部であり、北は頸城平野と山麓部の境までを指している。関田山地と妙高山麓に源を発する小河川は、頸南地方の中央を流れる関川に集められ、頸城平野にむけて北流する。行政区分でいうと、北から新井市・板倉町・中郷村・妙高村・妙高原町に至る地域である。遺跡を中心とした場合の半径でいうと、およそ5kmの範囲にある。

さて、この頸南地域から産出される石器石材については、研究成果が公表されていない。そこで、どのような石器石材が採取できるのか頸南地域の河川を踏査したところ、石器製作に適した良質な石材がいくつかの河川で採取された。しかし、踏査は十分なものではなく、未踏査の河川すらある現状、地質的な検討が十分でないことを断っておきたい。

a. 在地石材 (第44図)

① 関川流域

関川は、火打山・焼山に源を発し、頸城地方の中心を流れ日本海に注ぐ大河である。妙高村住吉付近を踏査したところ、安山岩とチャートが採取された。安山岩は、黒色でガラス質ではあるが斑晶が多いものが多量に認められた。チャートは、赤茶色・青灰色・浅黄色の比較的良質なものが認められた。しかし、それらの起源となる河川（支流）や礫層までは把握できなかった。

また、関川の右岸山裾一帯と高床山に魚沼層群が分布する [新潟県1989]。一方、左岸は一部に確認されているものの、妙高山麓からの火砕流の堆積が厚く、実態が把握されていない。この魚沼層群には、「ツメ石」と称される良質なガラス質安山岩が含まれることが知られており [水島1973]、高床山の頂上でもツメ石が採取されている [歌代ほか1978]。このように、関川右岸に合流する支流の一部は、魚沼層群を開析していると考えられ、関川で採取される良質な石材の起源が魚沼層群に求められる可能性がある。

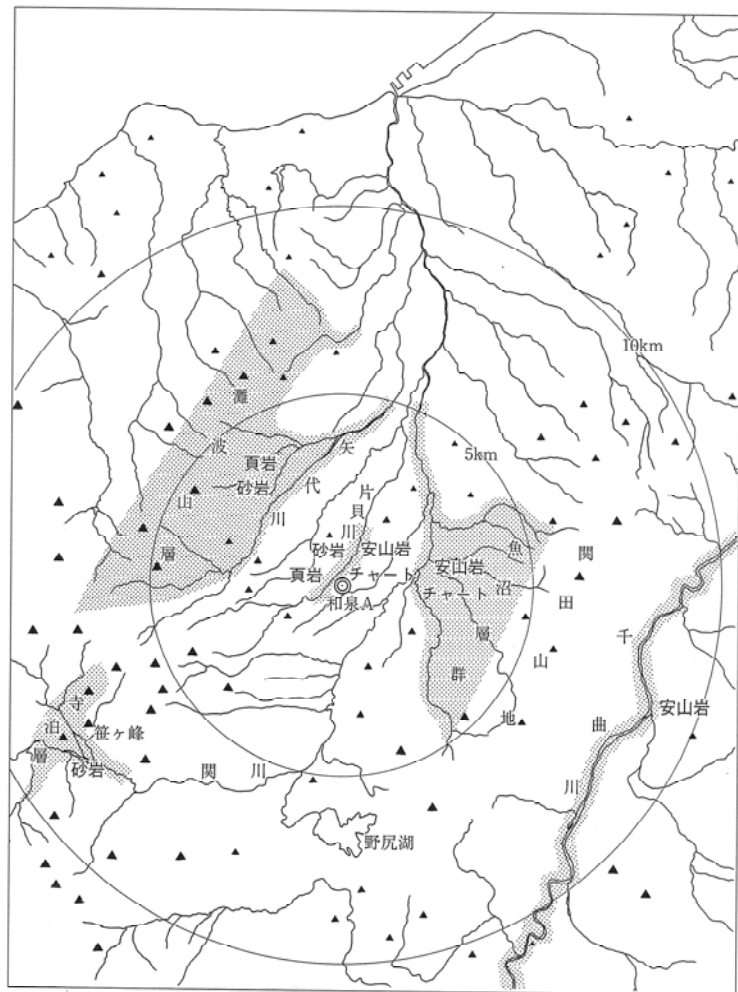
② 片貝川流域

片貝川は、神奈山に源を発する関川の支流である。和泉A遺跡の最も近くを流れる河川である。遺跡付近を踏査したところ、川幅は5mほどと広くはないが、様々な種類の円礫～亜角礫が採集された。まず、最も大きな割合を占める石材は妙高山起源の火山岩である。そのほとんどが安山岩で、ガラス質のものから粗粒のものまで様々なバラエティーが認められた。

ガラス質安山岩は、量的には多くないが、たたくと金属音がする良質なものも含まれており、そういったものの表面には爪状の傷が認められた。いわゆる「ツメ石」である。しかし、このような良質なものは量的に僅かであった。

ガラス質安山岩ほど良質ではないものの剥片石器に適した黒色の安山岩が多量に採取された。打製石斧やスクレイパーなど比較的大形の石器に多用されているのは、この種の石材である。しかし、石鏃などの小形石器にこの石材は用いられていない。

流理構造の安山岩は、下層石器群で両面調整石器に多用され



第44図 和泉A遺跡周辺の在地石材

V 上層の調査

ているものと同質のもの2点が採取された。遺跡からの出土点数を考えると極めて少ない。さらに、上流部の調査が必要であろう。

磨石類の素材となる粗粒の安山岩は多量に採取される。このほかに、流紋岩・玉髓を1点ずつ採取した。しかし、玉髓は1 cm程度の小円礫であり、色調についても淡黄色であり、遺跡で利用されているものとは異なる。

火山岩だけではなく、堆積岩が採取されたことは重要である。とりわけ、良質なチャートが多数、採取された。いずれも5 cm前後の小礫であるが、石鏃などの小形剥片石器を製作するには十分な大きさである。青灰色・赤茶色・浅黄色のものが認められ、石器に用いられているものと同系色のものも含まれる。チャート以外にも砂岩・頁岩・粘板岩が少量ずつ採取された。砂岩は、粒子がやや粗いものを若干採取したが、砥石と類似するものも含まれる。頁岩・粘板岩についても、遺物とは顔つきが異なるが、これらの堆積岩は豊かな石材環境を示しているといえる。

しかし、地質図〔新潟県1980・1989〕からは片貝川流域に、これら豊かな石材環境を示す地質を確認することができない。すなわち、妙高山起源の火砕流に厚く覆われているため、基盤の地質が示されていないのである。そういった中、「ツメ石」を含む良質な安山岩に加えて、チャートや砂岩といった堆積岩を採取できたことは、基盤層にその起源があることを示唆している。その有力な候補となるのが魚沼層群や難波山層である。魚沼層群は、妙高山の火砕流の影響を受けなかった関川右岸にまでしか分布が確認されておらず、その延長が火砕流下に埋もれていることが予想されるが、地質的な検討を要する。

いずれにせよ、遺跡から最も近い河川でこういった石器石材が採取された事実を重視すべきである。遺跡で利用されている石材のほとんどについて、遺跡直下の片貝川で採取された可能性を指摘でき、少なくとも重量が大きな石器に関しては、近くの河川で採取していたと考えるのが妥当であろう。利用の程度については、原石と石器との対応関係を十分に調べる必要があるが、片貝川で石器石材を獲得していたことを想定して論を進めるほうが効率的である。

③大田切川流域

大田切川は、燕温泉付近に源を発する関川の支流である。再三、登場してくる大田切川火砕流はこの川に沿って流下したものである。妙高村妙高大橋付近を踏査したところ、磨石類に利用されている粗粒な安山岩のみが採取された。妙高山の火山活動の影響を受けた地域における一般的な傾向といえる。仮に、剥片石器に適した安山岩があったとしても、量的には極めて少ないと考えられる。

④矢代川流域

矢代川は、火打山に源を発する関川の支流である。新井市菅沼付近を踏査したところ、頁岩・砂岩・チャートといった堆積岩が多く採取された。特に、砂岩は豊富で和泉A遺跡で利用されているものとよく似ている。一方、安山岩などの火山岩は比較的少なく、ガラス質安山岩は採取できなかった。妙高山麓に源を発する河川の中では異質な存在といえる。こういった状況は、悪水川・澄川といった支流が、頁岩と砂岩の互層から形成される難波山層〔新潟県1980・89、高野1994〕を開析していることに起因する。また、難波山層の下位に分布する火打山層は、硬質頁岩を主とした地層である。

b. 遠隔地石材 (第45図)

①西頸城地方 (糸魚川周辺)

西頸城地方からは、姫川本流・青海町で磨製石斧・装飾品に利用される蛇紋岩、装飾品に利用される翡翠・滑石が産出される。その起源は青海一蓮華帯にあり、蛇紋岩・滑石に関しては長野県側の八方尾根南方でも産出される。新潟県側では、いくつかの生産遺跡の存在が指摘されているが、長野県側でも、大町市一津遺跡 [大町市教委1990] における玉類・磨製石斧の大量生産は産地と密接な関係にある一例と思われる。

このように新潟側・長野側に産地があり、どちらから搬入されているかは明らかでないが、産地までの直線距離は新潟側の姫川 (糸魚川市) までが30km、長野側の八方尾根までが40kmある。しかし、八方尾根までの間には2000m級の山々がそびえており、長野市付近まで大きく迂回したル

ートを想定せざるをえない。この距離関係と下層において糸魚川産と同定された翡翠が搬入されていることを勘案すれば、新潟側の産地とのより強い関係が予想される。

②千曲川流域

千曲川は、大小の多くの河川を集めて流れているため、様々な種類の石器石材が採取可能である。中でも、石器石材として有名なのがガラス質安山岩である。頸南地方と千曲川が最も接近する飯山市付近で採取されるガラス質安山岩は、左岸の関田山地起源のものである。採取される「ツメ石」は、魚沼層群の中・上部累層に転石で含まれたもの [水島1973] と考えられる。魚沼層群は新井市平丸付近でも認められ、関田山地起源とされる安山岩は頸南地方でも採取される。

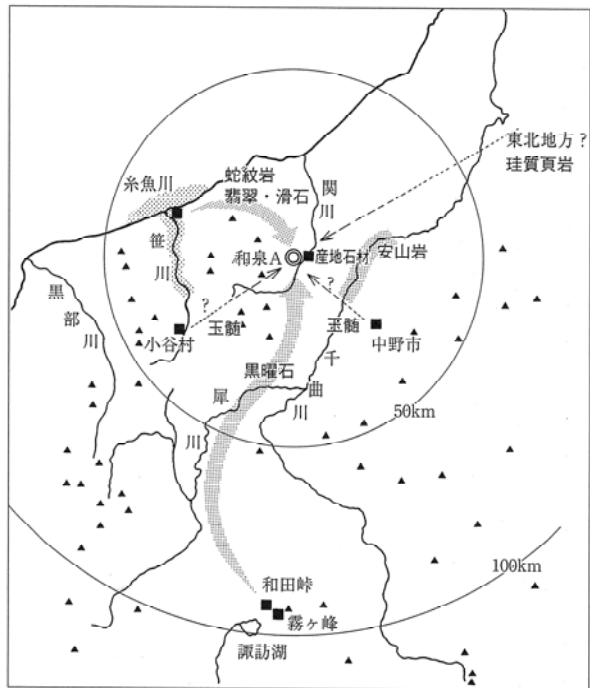
③中部高地

信州方面では、石鏃など小形剥片石器に多用される黒曜石の原産地が知られている。八ヶ岳中信高原の冷山・麦草峠・霧ヶ峰・和田峠・男女倉などの原産地が知られているが、科学分析の結果では霧ヶ峰と和田峠が同定されている。遺跡と原産地群との直線距離は、およそ90kmにも達する。なお、分析番号25 (図版55-309) は、一見、黒曜石のように黒色で透明感があるが、珪化が著しく進行した頁岩と考えられる。また、表裏には珪化木にみられる繊維のような状態が観察される。実際、産地分析においても日本全国の黒曜石原産地の成分と一致しないという結果が得られている。

(7) まとめ

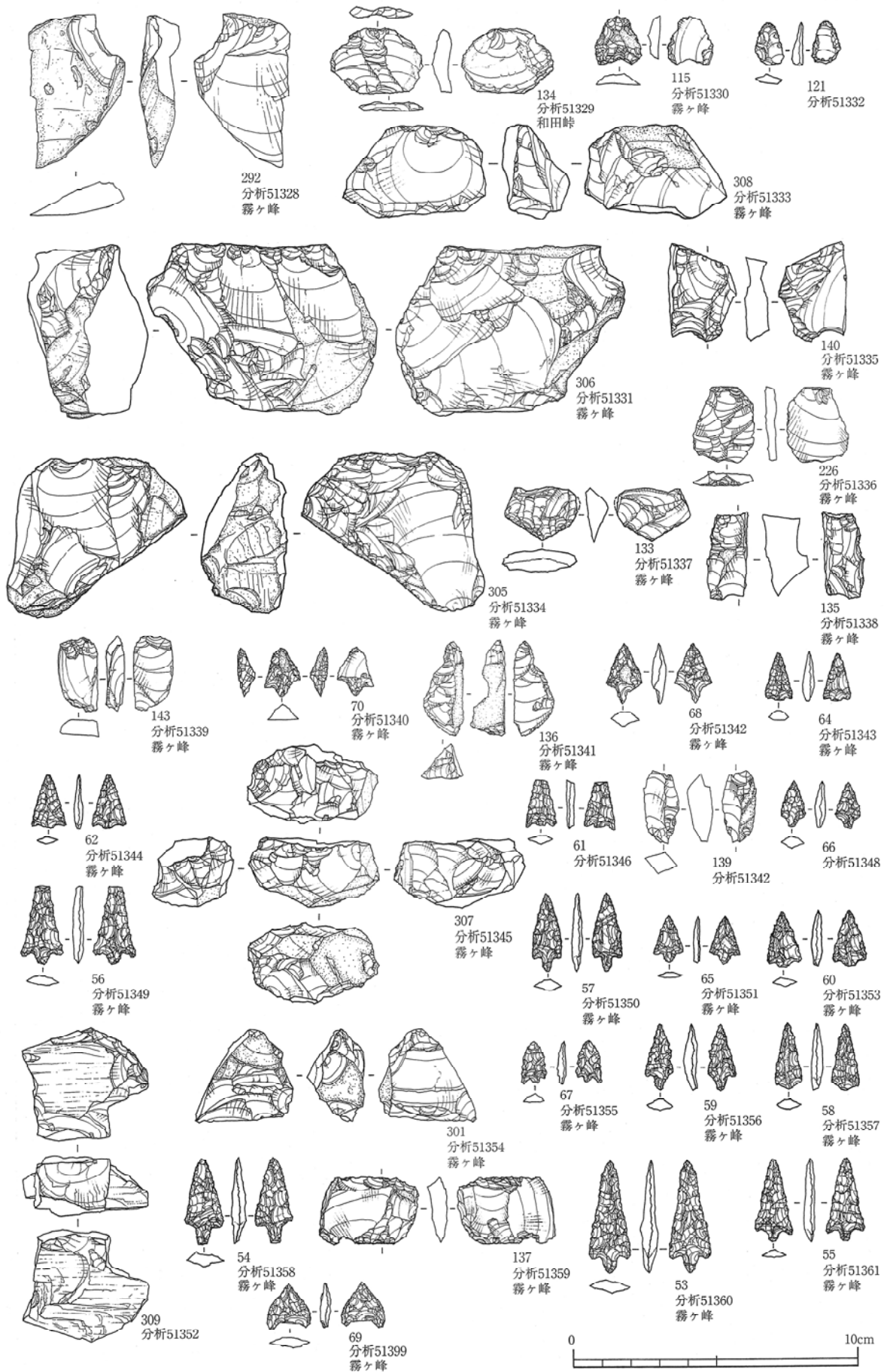
a. 石器組成と石材組成

上層石器群の石器組成には、石鏃・石錐・楔形石器・打製石斧・磨製石斧・スクレイパー・両面調整石器・折断調整石器・微細剥離痕を有する剥片・碎片・石核・原石・磨石類・石皿・砥石が認められた。剥片・碎片・石核・原石を除いた各器種の割合は、第42図のとおりである。

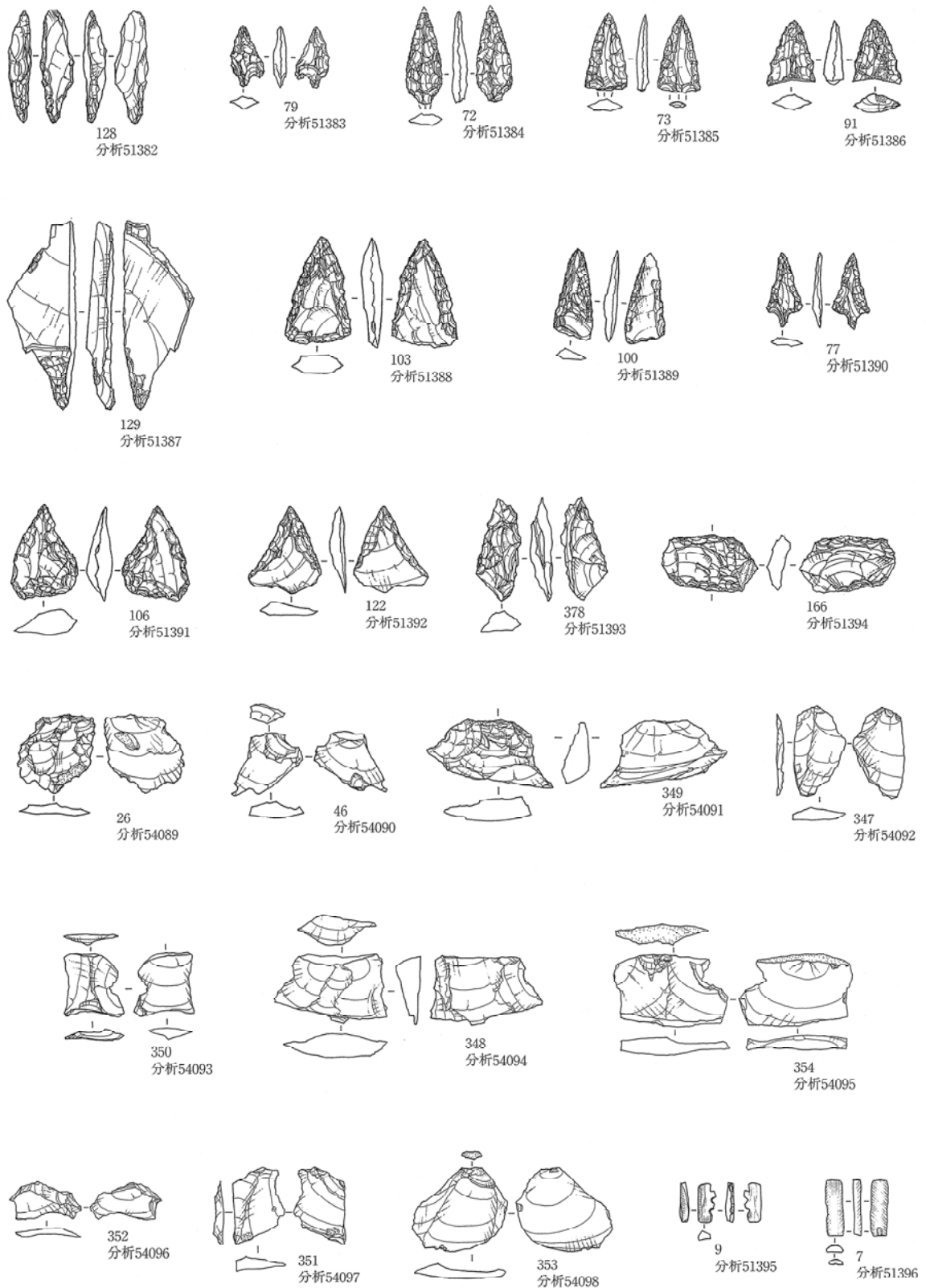


第45図 和泉A遺跡をめぐる遠隔地石材

V 上層の調査

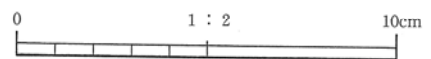


第46図 上層・石材産地分析資料（黒曜石）



※安山岩 分析番号51382~51394：超音波洗浄のみ
安山岩 分析番号54089~54098：エアブラシで表面風化層を除去

7・9：滑石
その他：ガラス質安山岩



第47図 上層・石材産地分析資料（ガラス質安山石・滑石）

この石器組成において最も特徴的なことは、石鏃・楔形石器といった小形石器が多いことである。石鏃は未成品も含めた数値だが16%、楔形石器は23%を占める。楔形石器の一部は、石鏃製作工程と密接に関わると思われるものである。すなわち、石鏃製作に関する資料が大きな割合を占めているといえる。いいかえれば、石鏃製作が盛んに行われていたことを示す石器組成と考えられる。これら一群の石器の石材にはガラス質安山岩が多用されている。ガラス質安山岩を用いた石鏃製作が行われたことは、S X 124出土の一群より明らかと思われるが、石鏃の未成品の多さはそれを支持している。一方、黒曜石は成品に多数見られるものの、未成品・楔形石器の点数はガラス質安山岩と比べると著しく少ない。しかし、原石・石核・剥片・楔形石器・石鏃未成品は少数ながらも認められ、少ないからといって黒曜石を用いた石鏃製作を否定することはできない。また、安山岩製は幅広で寸詰まり、黒曜石製は細長い形態をとる傾向が強い。しかも、黒曜石製の細長いものは、形態的斉一性が強い。安山岩と黒曜石以外にも、流紋岩・玉髓・チャート・凝灰岩・頁岩が用いられている。流紋岩については未成品・楔形石器も出土しているが、そのほかは単独で搬入されている。特に、頁岩製の1点は、形態も明らかに他と異なるものであり注目される。

石鏃は、2%とごく小さな割合で組成に加わる。棒状のものと錐部のみを作出するものとの構成され、基部を作出するような形態は認められなかった。錐部の作出には、折断面が活用されていることがわかった。石材には、ガラス質安山岩が多用されている。

楔形石器は、先にも触れたが23%と最も大きな割合を占める。2極1対と4極2対、縦長と横長、厚手と薄手というふうに様々な形態のものが含まれている。特に、横長で薄形のものについては石鏃製作と密接に関連する可能性が高いと考えられる。石材については、石鏃とほぼ同じ構成で、ガラス質安山岩・黒曜石・流紋岩・チャートから構成される。中でも、ガラス質安山岩の利用は群を抜いており、黒曜石の5倍の点数が確認されている。

打製石斧は5%を占め、ほとんどが撥形である。短冊形や分銅形のもの若干認められるが、撥形の範疇に含まれる可能性を指摘できる。石材は、安山岩と硬砂岩が多用されている。そのほかに、凝灰岩・粘板岩が1点ずつ加わる。特に、硬砂岩については質の似たものが、上層石器群の打製石斧のみに認められる。なお、こういった特徴的な石材の剥片は認められず、遺跡内で打製石斧製作が行われていないことを示唆している。関東地方における打製石斧の製作も、基本的には遺跡外で行われていることが指摘されているが、同様の傾向にあるといえる。

磨製石斧は4%を占め、大形のものから小形のものまであり、その形態は様々である。大形は、両刃かつ円刃で厚手であり、小形は、片刃かつ平刃で薄手である傾向が強い。石材は、ほとんどが蛇紋岩と安山岩で占められ、ほかに閃緑岩・凝灰岩・硬砂岩が若干量加わる。

b. 石材環境と石材組成

上層石器群に用いられている石材の多くは、頸南地方で採取可能なものである。殊に、安山岩は豊富な供給環境のもと、圧倒的多数を占める第一石材である。ガラス質・流理構造・粗粒の三者に分類、それぞれの利用状況を検討したところ、それぞれの物性を巧みに生かした在り方が看取された。いずれも、遺跡付近を流れる片貝川で容易に採取でき、遺跡周辺が豊かな石材環境にあったことが理解される。ただし、石鏃などに多用される良質なガラス質は、関田山地の魚沼層群に求められることが予想される。

妙高山麓では、安山岩以外の石材も採取可能である。妙高西麓から南葉山麓までの間には、頁岩と砂岩の互層から形成される難波山層が分布し、それを開析する河川では堆積岩を採取できる。この難波山層起源の砂岩が砥石に充てられている可能性がある。また、打製石斧に特徴的に用いられている硬砂岩にも同

様のことがいえるかもしれない。砂岩は、踏査した地点の中では、矢代川で最も多く見られたが、片貝川でも僅かながら遺物に似たものを採取できた。しかし、地質図〔新潟県1980〕によると片貝川は難波山層を開析しておらず、火砕流堆積物下に埋もれた魚沼層群に由来する可能性もある。しかし、起源については地質的な検討が必要である。また、良質なチャート・頁岩などの堆積岩を採取することも注目される。なお、片貝川で採取されるチャートは、5 cm以下の小礫が主体であるが、遺物に利用されているものと共通する。

頸南地方で採取できない石材には、黒曜石、蛇紋岩、滑石、結晶片岩、翡翠がある。黒曜石は、産地分析で霧ヶ峰と和田峠が同定されている。霧ヶ峰と和田峠は、いずれも蓼科高原の原産地であり、遺跡からの直線距離は90kmにも達する。

蛇紋岩・滑石・結晶片岩・翡翠は、青海-蓮華帯に産出される。蛇紋岩・滑石・結晶片岩については、新潟側では姫川本流・青海町、長野側では八方尾根南方部に産地がある。翡翠については、新潟側のみに産地がある。遺跡から産地までの直線距離は、新潟側で30km、長野側で40kmある。翡翠が搬入されている状況、地理的關係を考慮すると新潟側の産地との関連が予想される。

また、遠隔地石材と思われる石材として、閃緑岩（磨製石斧）・頁岩（石鏃）を若干組成する。これは単独個体、しかも成品として搬入されている。それらは、上層石器群に一般的な形態ではなく、異質な資料といえる。

c. ブロック間における石器組成・石材組成の差

上層における遺物の分布は、土器の重量分布の検討から14のブロックより構成されると考えられている。それらのブロックは、土器の構成から6つに分類されている（第48図）。それによると、北側のブロックからはより古く、南側のブロックからはより新しく位置づけられる土器が出土していると理解された。すなわち、上層で確認されたブロックすべてが併存したわけではなく、ブロック間に時間差が求められているのである。

さて、石器の点数分布の状況をみてみると、土器の重量分布の集中域とほぼ重複することがわかった。すなわち、土器の出土状況と単純に照らし合わせるならば、ブロック間における石器の相違点は、時間差を反映していることが予想されるのである。こういった問題に触れるには、帰属率なども含めて慎重に検討する必要があるが、ここでは大局的な傾向を示すこととしたい。こういった傾向を提示するにあたって、石器が多量に出土している2~13ブロックを大きく3つに分類して整理したい。

①縄文晩期後葉を主体とする2~4・10ブロック

石鏃は、寸詰まりで幅広なものが主体で、黒曜石・玉髓が充てられている。一方、細長いものは、すべてガラス質安山岩製であり対照的である。また、それと形態上の共通性が認められる石鏃が加わることは特徴的である。このほか、石鏃の製作工程を示すと考えられる未成品や楔形石器は少なく、石鏃製作の痕跡は積極的に評価できない。

打製石斧・磨製石斧は、出土点数が少ない。打製石斧は、両側縁がやや内弯する唯一の分胴形や、薄い素材に浅い調整のみが加えられるものが、磨製石斧は、中形で片刃のものや擦切痕を有するものが認められる。打製石斧・磨製石斧とも、上層石器群においては異質な形態といえる。

また、北側は南側と比べると磨石類がより多く、少ないながらも石皿が出土していることは注目される。ただし、下層との間層になる火砕流の堆積が薄い範囲からの出土であり、下層石器群に帰属するものが含まれる可能性もある。実際、先に触れた、磨製石斧など下層石器群を特徴付けると思われるいくつかの形態も認められる。

石製品についても、工字文が陰刻された石棒や石鋸形石器（石冠）といった、縄文晩期的なものが加わり、土器の様相と対応する。

②弥生前期に縄文晩期後葉が若干加わる6～8ブロック

石鏃の成品・未成品と楔形石器を多量に伴うが、そのほとんどがガラス質安山岩製である。ガラス質安山岩を用いた石鏃製作が行われたことを推測するに十分な資料が揃っている。また、石鏃の製作と技術的親和性が強い石錐が安定的に加わることも注目される。

打製石斧は、上層石器群に一般的な形態である撥形が多数出土している。石材は、安山岩と硬砂岩が充てられているが、特に同質の硬砂岩は上層の打製石斧にしか充てられておらず特徴的である。

磨製石斧は、様々な大きさのものが認められる。大形～中形は、いずれも基部側が急速に細くなるものである。小形は、偏平で片刃であり、この群のみに加わる特徴的なものといえる。石材は、蛇紋岩が主体であり、安山岩が一部加わる。

石製品は、2ヶ所が穿孔された頁岩製の垂飾が認められる。

③弥生前期を主体とする9・11～13ブロック

石鏃は、細長く両側縁のラインが直線的な有茎鏃が多数加わる。これらは、大きさにバラエティーがあるものの形態的斉一性が強い一群といえる。石材は、1点がガラス質安山岩であるほかは、すべて黒曜石であり、単一の石材に偏重した利用状況が窺える。産地分析の結果によれば、この群に含まれる黒曜石はすべて霧ヶ峰産と同定されており、特定の産地との強固な関連が予想される。また、唯一のガラス質安山岩製についても、黒曜石製と形態的によく共通しており、他の群に認められない特徴的なものである。黒曜石以外の石材についても、特定の形態に固執する在り方が理解される。

打製石斧は、1点のみガラス質安山岩製の撥形が認められるのみである。

磨製石斧は、細い基部を有するものと、両側縁がおおよそ平行する幅広なもののが認められる。後者については、分厚い刃部を有し、基部側は研磨後の剥離や敲打により整形されている。あたかも柄の形状に合わせて、基部形態を調整したかのようなものである。石材は、前者が縄文的な蛇紋岩であるのに対し、後者は弥生的な閃緑岩や安山岩である。

石製品は、滑石製の未成品および製作途中に産出した剥片が出土している。形態は様々であり一様でないが、同質の母岩から得られた素材を利用しており、出土グリッドは11～13グリッドに集中する。性格はよくわからないが、弥生前期後半を主体とするブロックのみに認められる特徴的な一群と考えられる。

以上のように、縄文晩期後葉を主体とするブロックと弥生前期を主体とするブロックとで、各器種の形態組成および石材組成が大きく異なると理解された。特に、石鏃および製作工程から産出される資料・打製石斧・磨製石斧における相違は顕著である。これらの相違は、磨製石斧の形態差にみられるように、縄文的な形態・弥生的な形態を示している可能性がある。縄文時代から弥生時代へと移行する画期において、こういった相違が把握されたことは、石器を系統的に理解する上で大きな意味をもっている。また、石材選択の変化は、単に技術的な問題のみに集約されるのではなく、社会的背景の変化を示唆している可能性がある。信州における石鏃の石材も、晩期中葉には在地的な石材（チャート・頁岩）が多用されるのに対し、後葉になると一変して黒曜石が多用されるようになるという [町田1992]。和泉A遺跡における石材組成の相違は、こういった信州の様相の変化と関連付けて理解できるのであろう。具体的に主体者の存在に近づくためには、隣接地域における状況との対応関係に注意を払って、綿密に検討する必要がある。



第48図 ブロック間における石器組成・石材組成の差

D 石製品 (図版39)

①石棒 (1~4)

石棒は4点出土した。1・2・4は、横断面形が楕円形であり、石剣といえることができるかもしれないが、「石剣は広義の石棒に属し、後期に至って石棒から変形し、発達したもの」[鈴木1991]である。両者を区分する根拠は曖昧であり、ここでは一括して石棒と呼んでおきたい。

上層の石棒は、すべて結晶片岩製で、節理方向を縦位に利用している。頭部が残された1と2には、工字文の陰刻が施されている。ただし、1は隆線的、2は沈線的な表現であり描出の方法が異なる。1は、晩期後葉の土器が主体を占めるブロックからの出土であり、こういった陰刻が施される蓋然性が高い。

また、1と4については実測図上の上下両端には意図的な破砕が認められる。特に、1の下側は執拗に破砕され、丸みを帯びている。その際の衝撃により、節理方向に沿って表側と裏側とに分割されている。その分割面の頭部側には剥離痕が認められ、分割後に破砕行為を継続したことが理解される。

②垂飾品 (5・6)

垂飾品は、2点出土している。5は節理面に沿って板状に剥がれた頁岩が水磨などによって丸みを帯びたものを、6は粗粒安山岩の小円礫の表裏を若干研磨したものを素材としている。穿孔は、両者とも表裏両側から穿孔具を回転させてできた凹み同士をつなぎ合わせる方法をとる。6は土坑群の一角を構成するSK004から出土しており、遺構の性格を考える上で重要な資料である。

③滑石製小形石製品 (7~12)

緑色を呈した滑石製の小形石製品および製作過程を示す資料が出土した。いくつかの例外はあるが、ほとんどが弥生前期前葉の土器を主体とするブロックからの出土である。図化しなかった剥片類についても同様のことがいえる。同質の滑石は、上層のこの一群のみにみられる特徴的なものである。

ここで「小形石製品」と呼称したが、実際に製品と判断されるものはない。7は円柱を半截したような形態で、全面に研磨痕が認められる。実測図の裏面下側には穿孔しようとした痕跡も認められる。もともとは、円柱の中心軸に穿孔し管玉を製作しようとしたのかもしれない。そうだとすると、穿孔時に半割してしまい、欠損面を研磨して再び何らかの製品を仕上げようとしたことが予想される。8も円柱を半截したかのような形態であるが、裏面は凹んでおり研磨痕はみられない。裏面には、表面にむけて穿孔しようとした痕跡が2ヶ所認められる。9は右側面に3ヶ所の穿孔が並んで認められる。この穿孔の列に沿って欠損している。穿孔部の研磨痕は、穿孔方向と平行するものであり、回転による穿孔後の研磨痕であると考えられる。10~12は研磨により整形されているが、それ以上の加工は認められない。中でも12は、表裏面と側面に整形が認められ、板状に仕上げられている。上下両端面の整形は、8に共通する。

E 古墳時代以降の遺物 (図版62)

古墳時代以降と断定できる遺構は確認されなかったが、古墳時代と中世を中心とする時期の資料が出土している。

①土師器 (494～502)

土師器は、4Dグリッドと21Bグリッドで3個体ずつとまとまっているほかは、単独での出土である。層位は、Ⅱa～Ⅲ層で、縄文時代・弥生時代の遺物とともに出土している。出土した土師器の多くは小破片であり、器形を復原できる口縁部や底部の破片を図化した。そこで確認された器種は、壺・甕・高坏であった。

壺と判断した2個体(494・495)は、胎土がよく似ている上、頸部の屈曲と復原した径の値が近く、同一個体の可能性がある。急角度に立ち上がる口縁部を有することは確実と思われ、特徴的といえる。器面の調整は、口縁部の内外面には横方向を主体としたナデが、体部から頸部の外面には横～斜方向で下から上に向けてのハケによる調整が加えられている。古墳時代の所産と思われるが、詳細な時期ははっきりしない。

甕は、496～501である。496は、「く」の字に屈曲した後、直立する口頸部と、球形に近く大きく張る胴部をもつ。口頸部の特徴的な形態は、有段口縁を模しているかのようである。口縁部内外面にはヨコナデ調整が、胴部外面にはハケメ調整が認められる。497・499は、口頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部外面がわずかに肥厚するものであり、大洞原C遺跡において在地系のB類〔三ツ井1997〕に分類されているものと共通する。口縁部内外面にはヨコナデ調整が、胴部内外面にはハケメ調整が認められる。498・501も、口頸部が「く」の字に屈曲するが、その度合いはより弱く、胴部の張りも大きくない。また、501の口唇部が面取りされており特徴的である。口縁部外面にはヨコナデ調整が、口縁部内面と体部外面にはハケメ調整が認められる。502は、甕または壺の底部と思われる。帰属時期は、形態差から498・501が平安時代の可能性があるほかは、古墳時代前期のものと思われる。ただし、平安時代と思われるものと、古墳時代と思われるものがほぼ同じ範囲から出土している。

503は、内面が黒色処理された高坏である。非常に厚手で、粗雑なつくりである。古墳時代と判断した壺や甕とは、焼成・胎土・つくりが全く異なるが、脚部の内面にはハケによる調整が認められたため、ここに分類した。むしろ、弥生時代以前に位置づけられる可能性もある。

以上、本遺跡出土の土師器について触れてきたが、特に注目されるのが古墳時代の土師器である。妙高山麓で発見されている古墳時代の遺跡は少なく、資料の増加は一定の意味をもつ。周辺では、中郷村籠峰遺跡〔川村1988〕、妙高村横引遺跡〔立木1996〕、大洞原C遺跡〔三ツ井1997〕、小野沢西遺跡〔武田1996〕で発掘調査により該期の土器が発見されているが、それらとともに、頸南地域における様相の解明に一定の役割を果たす資料群になると考えられる。

②青磁 (504～507)

中世の青磁4点が出土した。504～506が碗で、507が皿である。

碗の出土位置は、10D～10Eグリッドに限定される。いずれも、口縁部破片であり、端部付近でやや外反する共通点をもつ。文様は、504のみに蓮弁文が認められた。これは、細線と剣頭とが蓮弁としての単位を意識して施されたものであり、上田秀夫氏の編年試案〔上田1982〕に照らし合わせるならば、15世紀に位置づけられるものである。

皿は、幅広で短い高台をもつものが13E5グリッドから出土した。施釉は、内面は底部平坦面の周縁まで確認される(スクリーントーン添付範囲)。外面は、畳付付近まで施釉されているが、高台内側には認めら

れない。胎土が粗く、釉調はややくすむもので貫入が認められる。

③珠洲焼 (508~514)

中世の珠洲焼は、調査区内の各所から散漫に出土した。器種は、壺・甕・片口鉢が認められるが、いずれも小破片である。

508は、壺R種の肩部であり、外面に自然釉が認められる。

509~512は、甕もしくは壺T種の破片と思われるものである。509が、壺T種の頸部の屈曲する部分であるほかは胴部である。510の内面には、石と思われる当て具の痕跡が認められる。

513・514は、片口鉢である。514には、4条を1単位とする比較的太い卸目が認められる。513は、珠洲焼では唯一残された口縁部であり、編年の位置付けを行う上で重要である。坂井秀弥氏による片口鉢の口縁部変遷模式図(第49図)[坂井1987]に示された形態分類のA類に分類される。中でも段階2に示された「内端つまみあげが顕著でなく、この部分の断面は直角に近く、外端はゆるくくぼむもの」であり、吉岡康暢氏による編年区分のⅡ期[吉岡1982ほか]に相当すると考えられる。しかし、やや丸みを帯びており、段階3の要素も併せもち、検討を要する。

515は、珠洲焼ではないが須恵質の壺である。やや内傾した口縁部は端部で肥厚するものであり、器形は近世の越中瀬戸などにみられる小壺とよく似る。同様の器形は、珠洲焼には認められない。

④土師質土器 (516~523)

中世の土師質土器の皿が、調査区内の各所から散漫に出土している。いずれも小破片であるが、口径・底径を復原できるものを図化した。皿は、大きく手づくね成形のものとロクロ成形のものに分類された。

手づくね成形のもの(518・519)は、15世紀末~16世紀前半にかけて、京都での在り方を忠実に模倣してつくられた「京都系」[水澤1993]のものである。518の口縁部は水平に近い口縁の内端がつまみあげられ、体部との境あたりで屈曲している。519の底部は板状を呈し、内面の立ち上がり際に一条の溝が廻る。2点とも、焼成・胎土とも良好である。

ロクロ成形のものは、521に底部回転糸切り痕が認められた。より、立ち上がりが急で、碗に近い傾きと高さをもつものもある。胎土は、手づくね成形のものに比べると砂っぽい。

このほかに、碗(516・517)や甕か壺の底部(522・523)と思われる土師質の土器も出土している。

⑤古銭 (524)

13F22から開元通寶1点出土した。銭径は縦位方向で2.44cm・横位方向で2.50cm、内径(至輪径)は縦位方向・横位方向とも2.04cm、銭厚は0.12cm、重量は2.11gを測る。開元通寶の標準重量3.75g(2銖4累)と比べると非常に軽い。裏面に鑄造地の一文字が描かれていないことから、621年に鑄造された唐銭[永井1994]と考えられる。

⑥砥石(図版61-396・397)

中世以降のものと思われる砥石が3点出土した。2点が安山岩製で直方体を呈するもの(397)、1点は緑色凝灰岩製で扁平なもの(396)である。図化した2点とも、側面に鋸で分割した痕と思われる深い線状痕が認められる。

段階	形態	特徴	分類
1		端部は面(c)をもち、内端(a)が上方へつまみあげられる。この部分の断面は鋭角となるものが多い。	A類
2		内端のつまみあげが顕著でなくなり、この部分の断面は直角に近いかい。端部はゆるくくぼむ。	A類
3		内端のつまみあげがなく、外端と同様、丸味をおびる。	B類
4		外端(b)がつまみ出されるようになり、端部は丸味をおび、端部が不明瞭である。外端の下部(d)はくぼむ。	B類
5		端部が明確に水平になり、中央がややくぼむ。外端は鋭角になるが、内端は鈍角である。	C類
6		端部が広くなる。外端が厚くなり、内端も内側に引き出され、内端の下部(e)にくぼみが生じる。	C類
7		端部が内傾し、内端下部のくぼみが大きくなる。外端下部(d)はくぼまず、よくらむ。	D類

第49図 珠洲焼片口鉢の口縁部変遷模式図 [坂井1987]

第VI章 下層の調査

1. 遺構

A 記述の方法

(1) 記述の方針

a. 基本方針

検出された遺構のうち、竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・柱穴列・環状廃棄遺構は、検出したすべてについて記述した。そのうち、掘立柱建物・土坑については、平面形などの特徴により行った分類に基づいて記述した。記述にあたっては、位置・検出状況・覆土・出土遺物・時期の項目について下記の通り行った。以上の遺構と関連しないピットについては、特徴的な遺物出土状況を示すものを除き、すべて観察表に記載した。

位置 竪穴住居・掘立柱建物・溝・廃棄ブロックは大グリッドのみを、それ以外の遺構は小グリッドまで記した。

検出状況 検出面や検出時の状況について、遺構カードなどを基に記述した。

覆土 可能な限り覆土の流入先を検討してその特徴を記載した。

出土遺物 各遺構から出土した遺物については、土器・土製品は図版のNoを、石器については器種名を記した。なお、資料化に耐えうる土器は図版に掲載したが、小破片の土器のみが出土した遺構については、出土遺物の項に「土器」とのみ記した。

時期 各遺構内より出土した土器により決定した。

b. 遺構番号

平成5・6年度調査では、001番から始まる3桁の番号を基本的に検出順に付けていたが、平成7年度調査では予想以上の遺構数を検出したため、現地で仮番号を付して処理した。そして、調査終了後に上層と下層のものを4桁の通し番号に振り直した。また、掘立柱建物については調査終了後に認定したものが多いため、これとは別個に上層と下層を通して1番から付した。また、重複している遺構については、遺構番号の後にa・bなどのアルファベットを付し区別した。

遺構の略称

- S I 竪穴住居
- S B 床面・壁の検出されない平面形が円形や長方形などの掘立柱建物
- S K 原則として直径が1 m以上の穴
- P 原則として直径が1 m未満の穴
- S D 溝
- S A 柱穴列
- S X 性格不明の落ち込み

(2) 図化の方法

図版に掲載した遺構図は、全体図と個別図に大別され、構成は以下の通りである。

a. 図の縮尺

全体図

- 全体図 1 : 400 調査区全体の遺構配置を概観できるもの。
遺構全体図 1 : 200 和泉A遺跡全体図を4分割したもの。
個別図以外の遺構番号は、この遺構全体図に示した。

個別図

- 竪穴住居・掘立柱建物 1 : 60 (周堤を除いた竪穴住居 1 : 80、柱穴断面図 1 : 30)
土坑 1 : 40
ピット 1 : 30
柱穴列 1 : 80
溝 平面図 1 : 120、断面図 1 : 30
廃棄ブロック 平面図 1 : 150、断面図 1 : 60

b. 図の表現

遺構図をわかりやすくするため、図中にスクリーン・文字等を挿入し表現した。以下にその要点を記す。

- ①個別図中におけるPは土器を、Sは石器や自然礫などの石を示す。
- ②掘立柱建物の個別図においては、その範囲内にあるすべての遺構を図示し、掘立柱建物に関連するものにスクリーンを貼り区別した。
- ③各遺構は検出面における上端を図化している。そのため、検出面の違いにより同じ遺構内のものであっても上端の標高が大分異なる場合がある。
- ④断面図においては、上層のものはIV層を、下層のものはVI層を地山面として斜線のスクリーンで明示した。ただし、遺構の掘り込み面が地山より上位の層で確認された場合は、その層から以下にスクリーンを貼った。

(3) 観察表

個別図版に掲載した遺構およびそれ以外のすべての遺構について観察表を作成した。掲載順は遺構各説の順番と同じであり、それ以外の場合は末尾に遺構番号順に掲載した。観察表の項目は、遺構番号・位置・分類・検出年度・形態・規模・底面標高・覆土・柱痕・柱痕径・版築・出土遺物・切り合いである。なお、記録にあたっては以下の点に留意した。

規模 上端・下端の長径は最大径を計測し、短径は長径と直交するラインの最大径を計測した。深度は上端の標高の最高値から底面標高を差し引いたものである。また、重複や攪乱によって規模等が不明な場合は「-」で表した。

覆土 堆積については、人為的な埋め戻しによるものか、自然堆積かを中心に記入した。

柱痕 柱が立ち腐れて、その部分の覆土が自然堆積と認められた場合のみを認めた。柱の抜き取り等で版築部分が削平されている場合は認めていない。

柱痕径 柱痕と認められ、断面径が計測できる場合に記入した。

版築 地山ブロックや礫を含む層で、柱を固定するために柱掘形と柱との余分に充填して突き固めたもの。

柱の抜き取りにより削平されている場合でも、土層内容から版築と認めたものもある。

切り合い 遺構の切り合い関係を記号で示した。「= P 000」の場合はP 000との切り合い関係が不明、

「< P 000」の場合はP 000に切られ、「> P 000」の場合はP 000を切っていることを表す。

B 遺構各説

(1) 竪穴住居

地面を掘り込んだ床と壁をもつ半地下式の建物である。集落の外縁および環状廃棄遺構と重複して3軒が検出されている。記述にあたっては、各項目について下記の通り行った。

検出状況 検出面や検出時の状況について記述した。

平面形・規模 掘り込み面の上端における長軸と短軸の最大長を計測し記載した。平面形は楕円形と小判形がある。

周堤 すべての竪穴住居の外縁に、盛土による高まりが検出された。これを「周堤」と呼ぶ。「周堤」は床面掘削時の排土を利用したものと考えられ、地山土や地山に含まれる安山岩の礫が混入する。

覆土 住居廃絶に伴う周堤からの流入土や、その後の廃棄活動によるものなどがみられたため、可能な限り覆土の流入先を考慮してその特徴を記載した。

壁 確認された特徴を記載した。

床 床面は平坦に削平された後に貼床が施され、部分的に硬化している。これらの特徴を記載した。

炉 調査時に確認されたもののみ、その特徴を記載した。

柱穴 「支柱穴」のほか、上屋を補助的に支える「間柱」がある。それぞれの特徴を記載した。

S I 117 (図版 68～70、写真図版 229～231、巻頭カラー写真)

位置 5～6 C～Dグリッドにあり、北西側で廃棄ブロック1と重複する。

検出 一次調査の所見から、竪穴住居跡の存在が指摘されていた。平成5年度の上層調査において、包含層発掘時に褐色土と大量の礫で構成される高まりがIV層から露出しているのを検出した。これが東側の周堤である。下層調査で地山礫が環状の集中を示し、その内部に径8mの円形を呈する黒色土のプランを検出した。地山に近似する覆土を掘り抜いたところ貼床および壁を検出し、周囲の高まりが盛土であったことから、周堤を伴う竪穴住居跡と判断した。

平面形・規模 楕円形を呈し、P 3とP 9を結ぶラインを長軸方向として、長軸10.7m、短軸8.9mを測る。長軸方向はN-39.5°-Wである。床面積64.9㎡である。南側でテラス部分が張り出すが、その他は長軸を基準として平面形および柱穴位置がほぼ対称となる。

周堤 本遺構の外縁において、旧表土面上に地山VI層中の土や礫を多量に含む盛土を検出した。これらは竪穴住居掘削時の掘上土とみられることから、本遺構に伴う「周堤」と判断した。この周堤を形成する盛土層をA層、旧表土層をB層と呼称する。a-a'断面南側ではB層の上面に厚さ28cmのA層を確認できる。北側では木の根などにより土層が乱れていたため、A・B層を分層できなかった。南東側では盛土が他に比べ非常に厚い。f-f'断面では、A層がA①・A②層に分層できる。厚さはA①層が最大

VI 下層の調査

35cm、A②層が6～15cm、両方を合わせ最大45cmである。A①層は黄褐色砂質土で、VI層土に近似し、黒色土を含まない。A②層は黒褐色土で、地山ブロックのほか、地山礫を大量に含む。また、玉髓のチップが多量に混入することを特徴とする。図版70はA②層上面から出土した礫実測図である。礫は、A①層とほぼ同じ分布状況を示す。一次調査トレンチ南側ではA①層が削平されていたものの、A②層は残存していた。北側は実測していないが同様に礫が分布していた。B'層は上位に地山礫を含む。周堤は、一次調査のトレンチにより遺構の東西縁辺が削平されていたため、全周していたかどうかは確認できないが、覆土の状況から全周していたものと考ええる。

覆土 周堤を除くa-a'断面では、表土I層からバルトを残して分層を行った。IV層は周辺より厚く、黄褐色シルト質土を主とするIV a層と暗褐色土を主とするIV b層に分層できる。IV層下の覆土について1～9層に分層した。1層は黒色土を主とする自然堆積層で、色調の違いなどから1 a～dに細分できる。2層は遺物・礫を大量に含む黒褐色土層で、廃棄行為により形成されたものであり、遺構の南西側で厚く堆積する。3層は黒色土を主とし、しまりが弱いもので、遺物や礫の混入が少ないことから自然堆積層と考えられる。4層は礫が多く含まれる黒褐色土で、黒みの濃い4 a層、小礫の多い4 b層、砂質土の割合が高い4 c層に細分できる。いずれも自然堆積層と考えられる。5～8層はVI層土を主とする人為堆積層で、周堤A層と関連が深いものである。5・6層は黒褐色土と地山ブロックが混在する。7層はVI層土のなかに黒褐色土がブロック状に混入するもので、A層と特徴が共通し分離できない。そこで、8層の上位にあるものを7層、旧表土B層の上位にあるものをA層として区別した。8層はVI層土を主成分とするほぼ均質な黄褐色砂質土で、しまりが非常に強く、礫を含む。9層は黄褐色砂質土層で、地山と見分けがつかないほど特徴が近似しており、人為堆積層と考えられる。床面に接するが、水平に堆積せず所々途切れることが特徴である。b-b'断面は一次調査のトレンチにより削平されていたため、十分な観察ができていない。

壁 地形が南西側が高いため、壁は南西側で高く北東側で低い。立ち上がりからA層の上面までの高さは南西側で90cm、北東側で55cm、南西側のB層上面までの高さは65cmである。立ち上がりの角度は約45～60度である。また、o-o'断面では立ち上がりが角度25度と緩やかになっており、出入り口の可能性がある。

床 主柱穴と壁の間およびP 41を中心とする円形の範囲を除き、ドーナツ状に貼床が施されている。地山面を厚さ数cmの暗褐色砂質土で覆い、その表面に硬く叩き締められた黒色の床面が作出されている。貼床は柱穴上面の一部を覆っていることから、柱際まで施されていたことがわかる。また、k-k'断面のP 2-P 47間では貼床が二重となって盛り上がる。ほかにも部分的に二重となるところが数カ所検出された。

テラス 南側に最大幅80cmの三日月形をしたテラスが付属する。床面との比高差は約20cmである。壁近くに長さ2.4m、幅約10cmの周溝が検出された。周溝の東端ではピット状に浅く窪む。

炉 P 41は上面にきめの細かな黒色土が堆積し、内部にやや赤化した砂質土が堆積していたことから、炉穴と考えられる。P 38～40も内部に同様な砂質土が堆積しており、炉穴の可能性はある。

ピット P 3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14を主柱穴とし、これにP 16・20～28・30・34・46・48・49が間柱として付属する。主柱穴は上端長径39～102cmの円形や楕円形・不整形で、深度は35～68cmである。覆土は8層に類似する砂質土を主とするが、P 7～9・11・12・18は黒色土を主とする。また、P 7の上位中央には磨石類(536)が、P 9・10・11には礫が投棄されている。P 11の1～4層

は版築とみられ、1層上面に貼床が施されている。他の支柱穴でも貼床下にこうした版築が施されている。間柱は上端長径22～62cmの円形や楕円形で、深度は7～33cmである。覆土の多くは8層に類似する砂質土が堆積する。P 47は柱痕および版築が確認できる。P 29・32・35～37・44・45・50は貼床の下から検出されたものである。そのうち、P 29・36・37・44は内部が不定形で、覆土がP 38などに類似することから炉穴であった可能性がある。

土坑 南端にあるSK 1は、上位の多くがトレンチにより削平されているほか、床面および壁の立ち上がりを精査中に誤って掘りすぎたために北側半分を失っている。i-i'断面の覆土はいずれも砂質土で、1・2層を中心に4・5・8・9層から玉髓のチップが出土することを特徴とする。10層はP 19の覆土で、4・7層に切られていることから、SK 1はS I 117を切って構築されている可能性が高い。SK 1の北側にはP 2が連続しているものの、新旧関係は不明である。P 2は三日月状の掘形を有するもので、P 3の覆土を切って構築されている。1層は地山土に類似する。2層は黒色の砂質土で、玉髓のチップが出土しており、SK 1の2層および周堤②層に類似する。P 2の北側では貼床が二重に施されているが、P 2上の貼床の有無は不明である。

遺物出土状況 遺物は2層から大量に出土している。土器は破片が多く、完形に近いものは少ない。石器は両面調整石器の一括廃棄などがみられた。また、炭化したオニグルミ等の植物遺体も出土している。1・3層からも遺物は出土するが、量は少ない。4～8層ではほとんど遺物が出土していない。また、9層からも遺物は認められない。床面上での遺物は土器片などがわずかに出土したのみである。P 50から玉髓のチップが出土している。周堤では東側A①層の上面から土器が多く出土している。A層およびA①層内から遺物はほとんど出土していない。B'層からは玉髓のチップが大量に出土したほか、琥珀玉が出土した。土器片はわずかである。東側周堤外では礫と共に多量の遺物が出土している。土器は完形品がつぶれて出土したのものもある。礫は周堤から崩落したものと廃棄行為によるものがあると考えられるが、識別が難しい。

出土遺物 土器（1～55）、土製品（土器片円盤417～420）、石器（石鏃、尖頭器、石錐、楔形石器、打製石斧、磨製石斧、スクレイパー、両面調整石器、折断調整石器、対向調整石器、礫器、磨石類、石皿、砥石）。

時期 中期前葉I期に構築され、II期以前に廃絶されたものと考えられる。

その他 廃棄ブロック1との新旧関係は、覆土2層は廃棄活動により形成されたもので、廃棄ブロック1の在り方と同様な状況から、S I 117廃絶後に廃棄ブロック1と連続して形成されたものとみられる。また、東側周堤A①層上面およびその東側から出土した遺物もS I 117廃絶後に廃棄された疑いが強い。

S I 120（図版71～74、写真図版232～234）

位置 5～7F～Hグリッドにあり、北東側への緩やかな斜面上に位置する。西側に沢地状の窪地を挟んで廃棄ブロック2がある。

検出 平成5年度調査で、V b層掘削中に地山礫が多量に出土した。柱を柱状に残しながら掘り下げたところ、ほぼ環状の集中を示し、その内部に黒色土のプランを検出した。グリッドラインに平行して、東西・南北方向に十字ベルトを設定し、土層を観察した結果、硬くしまった床面とVI層の掘り込みを確認した。これにより、先に検出した地山礫は、住居構築時の排土を外縁に盛り上げた土砂に含まれていた礫と推察し、当住居跡が周堤を伴う竪穴住居と判断した。また、周堤部分からはVI層上面において柱穴が確認されている。住居跡の遺存状態は、これを覆っていた大田切川火砕流堆積物層（IV層）が薄かったため、

VI 下層の調査

風倒木や木の根などに攪乱され良好とはいえない。特に、南壁と中央部北側は風倒木によって破壊されていた。他の遺構との重複関係は確認されず、竪穴住居構築以前の人為的な痕跡、廃絶後の再利用および遺構の構築は認められない。

平面形・規模 南北に長い小判形を呈し、P 2 - P 4 を結ぶラインと直交するラインを長軸方向として、残存する長軸 13.3 m、短軸 7.8 m を測る。長軸方向は $N - 10^{\circ} - W$ である。床面積 80 m^2 である。南側短辺を確認できないが、長軸を基準として平面形は東側長辺が長くなっており、柱穴位置がほぼ対称となっていない。

周堤 遺構の外縁において環状をなす礫を検出したが、この礫だけ注目してしまい、周堤を形成していたであろう上位の土層の多くを削平してしまった。よって、設定した土層断面には顕著な周堤の盛り上がりおよびセクション図は得られなかった。周堤の残存状態は南東部分が最も良好で、風倒木で破壊された南壁を挟んで南西から西側、さらに北側部分にかけても礫の集中と若干の盛り上がりが認められている。東側部分は、礫の集中が立ち上がりより東側へ 2 ~ 3.3 m 離れて確認されている。図版 71 の周堤範囲は人為堆積による礫の出土位置から周堤土の範囲を推定したものであり、S I 117・403 とは認定の方法が異なっている。周堤を形成する盛土層を A 層、旧表土層を B 層と呼称する。南東コーナーの $\alpha - \alpha'$ 断面をみると、A 層は黒色土に褐色の地山ブロックが混入するもので、厚さ約 8 cm で残存する。上面には地山礫が敷き詰められた状態で出土した。P 39 の覆土 1 層は地山ブロックを多量に含む黒褐色土で、A 層に由来するものと推察される。南側周堤の外縁部では敷石状に礫が集中する部分が 3 ヲ所認められた。長径 1.6 ~ 2.2 m の楕円形を呈する。住居の壁からそれぞれ 2 ~ 2.2 m 離れて位置し、各々独立している。i - i'、ii - ii'、iii - iii' 各断面をみると、旧表土 B 層の上面に礫がのっており、周堤と同じ体積を示している。さらに、礫の下に掘り込み等が検出されなかったことから、これらを周堤の一部と推察した。

覆土 覆土は、他の竪穴住居跡に比べ堆積が薄い。大田切川火砕流堆積物層 (IV 層) 以下の覆土について、1 ~ 7 層に分層した。1 層は黒褐色土で、遺物をほとんど含まず、自然堆積層と考えられる。2 層は褐色の砂質土が混入したしまりの弱い黒褐色土層であり、人為堆積層と考えられる。3 ~ 7 層は地山ブロックを含む暗褐色土や黒褐色土層であり、住居周縁で検出されていることから、周堤 A 層の崩落に関連するものと推察される。

壁 西側長辺では 25 ~ 35 cm の比高を測る。南東壁では 11 ~ 21 cm、最も残存高が低い北東壁から北壁にかけては、7 ~ 13 cm と浅い掘り込みになっている。北東側に傾斜する地形に対して、床面を水平に削平し、住居を構築したため、南側で深く、北側では浅く掘削したものであろう。

床 床面はほぼ水平に整地されている。そして、ほぼ全面に黒褐色砂質土による貼床が厚さ数 cm で施されている。P 5 付近および P 3 から S K 23 北側にかけて、黒色の硬化した床面を検出した。

炉 検出されていない。

ピット 周壁内から 22 基のピットと 1 基の土坑が確認された。また、外縁では周壁に沿って 32 基のピットが検出された。

P 1 ~ 8・12 ~ 14・22 が主柱穴と考えられる。長軸を中心に P 2 と P 4 は対称となるが、ほか是非対称である。また、北側では P 1 が長軸線付近に位置するが、南側では長軸線上に柱穴が配置されていない。柱掘形は上端長径 44 ~ 62 cm の円形ないし楕円形で、深度は 25 ~ 59 cm である。覆土はしまりの強い

黒褐色や褐色土の単層が多く、柱痕や版築を確認できるものはなかった。なかには2基が重複するものもあるが、新旧関係を明確にできるものはない。

P 11・15・17～19・21は西側長辺に沿って検出されたもので、支柱穴と壁との間にある小ピットで間柱と考えられる。柱掘形は上端長径27～48cmの楕円形などで、深度は7～15cmである。覆土は砂質土が混入する黒褐色土である。東側長辺沿いにも調査途中で柱穴状の窪みを確認していたが、遺構と判断せず掘り下げてしまっている。よって、S I 403と同様に両側の長辺に沿って間柱が存在した可能性が高い。

住居跡の外縁では、周堤上面で出土した礫を取り除き、B層を掘り下げたところ、V c層下面からVI層上面において、黒褐色の砂質土がブロック状に混入した楕円形プランを検出した。比較的明瞭なものもあったが、ほとんどはVI層上面と区別できない土層が覆っていたため、検出が困難であった。半截した結果、ピットと判断した。東側長辺に沿ってP 24～37が、西側長辺に沿ってP 44～55が検出された。これらの柱穴間隔は40～190cmとまばらである。しかし、検出面のVI層に掘り込みが到達せず、検出できなかったピットがあったものと推察されることから、本来は50cm前後の間隔で並んでいたものと考えられる。柱掘形は、上端長径21～72cmの円形ないし楕円形で、深度は5～28cmである。P 29・30の断面形は住居内部方向に傾斜しているほか、P 27・32・45・48にも同様の傾斜が認められた。

以上から、これらのピットは、竪穴住居上屋の垂木尻を固定するために設けられた柱穴と判断し、これを「垂木尻ピット」と呼ぶこととする。P 38・39はトレンチのために全形が明らかではないが、深度が39・50cmと先述したものに比べ深く、断面形がU字状とみられることから垂木尻ピットでない可能性がある。また、P 40～43は南東コーナーから70～150cmの距離をおいて検出されている。垂木尻ピットとほぼ同規模ながら、周堤の礫部分範囲の中にあることから、これも垂木尻ピットと性格が異なる可能性がある。

土坑 住居の南東コーナー付近でS K 23を検出した。上面は風倒木で破壊されているものの、掘形は上端長径110cmの楕円形を呈していたものと思われる。断面形は台形状で、深度は50cmを測る。覆土は3層に分層される。1層はややしまりの弱い褐色土、2層はしまりの強い黒色土、3層は2層と地山に挟まれた壁面に黄褐色土がブロック状に混入する暗褐色土である。1層下面から2層にかけて土器・石器のほか玉髓のチップが多量に出土した。なお、2層の土質はS I 117 - S K 1の覆土2層や東側周堤B'層とよく似ている。

遺物出土状況 2・5層のほか床面直上から微量の遺物および炭化物が出土している。S K 23が最も多い。

周堤でも遺物はわずかである。P 39の2層から炭化物塊が出土している。

出土遺物 土器(56～63)、石器(尖頭器、石錐、楔形石器、打製石斧、磨製石斧、スクレイパー、両面調整石器、周縁敲打調整石器、磨石類、砥石)。

時期 S K 23の覆土3層から土器No.61が出土していることから、中期前葉Ⅲ期に構築されたものと考えられる。

S I 403 (図版75～79、写真図版235～238、巻頭カラー写真)

位置 11～12 F～Gグリッドにあり、西側はほぼ平坦な面に、東側は斜面にやや飛び出すように位置する。

北西側で廃棄ブロック4と重複する。

検出 平成6年度調査で、大田切川火砕流堆積物層(Ⅳ層)を重機で掘削中に、長径12mほどの小判形のブ

VI 下層の調査

ランを検出した。さらに、その外縁が高まりをもっていたことから、周堤を伴う竪穴住居跡と予想し、IV層下端を残したままセクションベルトを長短軸にあわせて「キ」の字状に4本設定した。トレンチ調査でVI層の掘り込みと床面および周堤を検出し、依存状態の良好な竪穴住居跡と判断した。

平面形・規模 南北に長い小判形を呈し、P6-P7間と直交するラインを長軸方向として、長軸13.3m、短軸7.5mを測る。長軸方向はN-38.5°-Wである。床面積は79㎡である。長軸を基準とすると、平面形はほぼ対称となるものの、南側コーナーが東側コーナーより張り出している。また、支柱穴配列はP1-9-23ラインが南西側に偏っている。

周堤 本遺構の外縁において、旧表土面上に地山VI層中の土や礫を含む盛土を検出した。これらは竪穴住居掘削時の掘上土とみられることから、本遺構に伴う「周堤」と判断した。この周堤を形成する盛土層をA層、その下の旧表土層をB層と呼称する。A層は本遺構の外縁全周において、幅1.2~3.3m、厚さ8~20cmで検出された。A層は場所によってその内容が異なっている。これは、掘上土を利用した性格上、付近の旧表土および地山の内容を反映したためと考えられる。よって、A①~A⑤層に分類した。a-a'断面西端は、地山地形が窪地状で、土層は通常と異なり礫が少なく、シルト状の黄褐色土となっている。また、B'層は廃棄ブロック4の形成土であり、遺物・礫が大量に出土した。A①層はシルト質の地山ブロックを含み、遺物・礫が出土していることから、付近の地山および廃棄ブロック4形成土を掘り上げたものと推察される。b-b'断面北側でもA②層に遺物・礫が含まれることから、同様に廃棄ブロック4形成土B'層を掘り上げたのであろう。ただし、A①・②層の下位は遺物が多量に含まれることから廃棄ブロック4形成土の可能性はあるが、土質が同じであるため分離できていない。a-a'断面東側のA⑤層は、地山土に類似する均質な砂質土である。A⑤'層はA⑤層に類似する砂質土のほか、礫を多量に含む。図版76はA⑤'層上面の礫出土状況である。遺構南東側短辺を取り囲むように礫が密集して出土している。

覆土 大田切川火砕流堆積物層(IV層)以下の覆土について、1~5層に大別し、それぞれをさらに細分した。1層は黒褐色土で、IV層に含まれるサージが粒状に混入する。遺物は含まず、自然堆積層と考えられる。2層はVI層が起源と考えられる黄褐色砂を含む層である。a-a'断面東側では堆積が厚く、2a・2b層に二分できる。2a層は、SK462の1層と連続する。これらは洪水等により短期間に堆積したものと考えられる。3層は黒褐色土で、自然堆積層とみられるが、遺物・礫を含んでいる。a-a'断面東側では5c層が途切れ、3b層が堆積している。4層は遺物を含まない均質な暗褐色砂質土で、遺構の中央にのみ厚さ約18cmで堆積する。a-a'断面をみると、5c③層の上に位置していることが明らかで、周堤崩壊後に堆積したものと考えられる。また、この層はA層と異なり、礫が少なく、地山土がブロック状に混入しないことから、周堤とは関連しないものと推察される。ただし、床面に接していることや5b・5d層と横位に接していることを考慮すれば、廃絶直後の短期間に堆積した可能性が高い。5層は地山ブロックや礫を含む黒褐色砂質土層で、人為堆積層と考える。5a層は遺構の東側で認められるもので、周堤A層と黒色土が混じり合ったものである。5b層はc-c'断面の南北で確認できるもので、5c④層と同様に地山ブロックを多数含む。5c層は周堤A層と分離できず連続しているものである。ここでは、壁より内側のものを5c層、外側のものをA層として区別した。周堤A層と同様に5c①~⑤層に分類でき、その内容も同一である。遺構の西側では5c③層が広く厚く堆積するものの、他では壁から50~100cmの幅で堆積する。東端ではSK10内が5c⑤層で満たされている。5d

層は黒褐色砂質土で、5 c 層に比べ地山ブロックが細かく、混入量が少ないことを特徴とする。土質は地山土を基調とすることから、人為堆積層と考えられる。5 d'・5 d"層は壁の崩落によるものの可能性が高い。5 e 層は d-d' 断面でのみ確認できるもので、狭い範囲で検出された。褐色砂質土で、地山と区別がつかないほど類似している。

壁 地形が南西側で高いため、壁は南西側で高く北東側で低い。立ち上がりから A 層の上面までの高さは南西側で 50～60 cm、北東側で 30～40 cm、B 層上面までの高さは 30～40 cm である。立ち上がりの角度は約 55～78 度である。

床 全体的に西側から東側にやや下がっている。床面全体に厚さ数 cm の貼床が施されている。主柱穴より内側では、貼床の表面に硬く叩き締められた黒色の床面が作出されている。貼床は P 14 のように柱穴上面の一部を覆っていることから、柱際まで施されていたことがわかる。二重に施された部分は検出されていない。

炉 検出されていない。

ピット P 1～7・9・13・14・16・17・20・23 が主柱穴と考えられる。柱掘形は上端長径 50～94 cm の楕円形や不整形などで、深度は 30～72 cm である。覆土は 5 層に類似する黒褐色砂質土が主体を占める。P 1～3・5・6・14・16 では柱痕および版築を確認できる。P 16 の 1 層上位に大礫が含まれるが、投棄によるものか自然堆積かは判断しかねる。このほか、P 8・15 もやや深めのものであり、補助柱として機能していた可能性がある。S K 10 の西側では P 21・22 A・22 B・24～26 が「コ」字状に配置されている。P 12・18・27～31・33・34・37・38・40・43・44 は間柱とみられる。柱掘形は上端長径 24～58 cm の円形や楕円形で、深度は 4～27 cm である。覆土は暗褐色砂質土が堆積するものが多い。いずれも柱痕・版築は確認されていない。P 35・36・39・45 は北側の壁にはほぼ接しているもので、規模は間柱と共通する。

P 46～96 は、遺構の外縁において周堤 A 層および旧表土 B 層・V c 層を掘り下げた後に、VI 層上面で検出されたものである。P 70・78・96 を除くピットは、両側の長辺に沿って 30～70 cm の間隔で並んでいる。その柱掘形は、上端上径 15～60 cm の円形ないし楕円形で、VI 層上面からの深度は 5～30 cm を測る。南西長辺側の i-i' 断面をみると、1 層は P 50 の覆土であり、B 層上面から掘り込まれていることがわかる。掘形は住居側に向かって傾斜している。この上を周堤 A④層が覆っているが、1 層はこれを突き抜けていない。ii-ii' 断面では、1 層が P 69 の覆土であり、P 50 と同様に B 層上面から掘り込まれ、1 層を周堤 A③層が覆っている。ただし、この 1 層は逆三角形に堆積している。また、viii-viii' においても P 81 覆土 1 層は住居側に傾斜して堆積している。北東長辺側では、c-c' 断面北端において周堤 A④層下から P 80 を検出している。これも B 層上面から掘り込まれ、掘形は住居側に向かって傾斜している。以上から、これら外縁のピットは、S I 120 の外縁で検出されたものと同じく竪穴住居上屋の垂木尻を固定するために設けられた垂木尻ピットと考えられる。

なお、P 46～96 の平面図は VI 層上面で実測したものであるため、壁上端および周堤範囲トーンと実測レベルが異なる。本来、垂木尻ピット上端の位置は、平面図の位置から 30～40 cm 内側にあったものと推察される。

土坑 S K 10 は住居の南端にあり、掘形が上端長径 109 cm の方形で、深さは 71 cm の台形状を呈す。覆土は 5 c⑤層が堆積することから、竪穴住居跡に伴うものである。3 層は 5 c⑤層と同じ土質ながら、底面付近に炭化物が帯状に含まれる。遺物は出土していない。

VI 下層の調査

遺物出土状況 遺物は廃棄ブロック4に近い5c層と3層から多く出土している。いずれも廃棄ブロック4形成土を掘り上げたA層に含まれる遺物が住居内部に流れ込んだものと考えられるが、3層出土のものはその後に廃棄された可能性もある。土器は復元率が高いものの、完形のものはない。5d層では少なく、床面直上からもほとんど出土していない。B'層からも大量の遺物が出土している。b-b'断面のA②層下からほぼ完形の土器(71)がつぶれて出土している。また、住居の北東側を中心に3・5層および床面上から炭化物が出土している。

出土遺物 土器(64~84・86~102・104~108・110・111・115~117)、土製品(土器片円盤421・422、焼成粘土塊430)石器(尖頭器、楔形石器、打製石斧、磨製石斧、スクレイパー、両面調整石器、折断調整石器、周縁敲打調整石器、磨石類、石皿、砥石)。

時期 周堤B'層出土土器から、中期前葉Ⅱ期以降に構築されたものと考えられる。

その他 廃棄ブロック4との新旧関係は、B'層が廃棄ブロック4形成層であり、S I 403がこれを切って構築されていることからS I 403が新しい。ただし、S I 403の廃絶後に周堤A層上および3層中に廃棄行為がなされ、廃棄ブロック4が継続していた可能性はある。

(2) 掘立柱建物

集落内側を中心に多数の柱穴が検出された。柱穴の深度は50cm以上のものが全体の1/4を占め、そのなかには1m前後のものも含まれる。その多くは柱を固定するための版築が施され、同規模のものが直線的に並ぶ傾向が看取された。また、浅いものは楕円状に巡るものが認められ、多様な建物が建設されていたものと予想された。また、竪穴住居跡と異なり地面を掘削して作出された半地下式の床面は検出されず、貼床や炉跡・焼土など地面直上における生活の痕跡も確認されなかった。以上から、これらを半地下式の竪穴住居跡に対し、地面下に柱を掘立てて構築された掘立柱建物〔宮本1996〕と呼ぶこととする。

掘立柱建物の認定

炉跡や焼土が検出されていないため、ピットの規模、深度、底面標高、覆土などのデータを集成し、その特徴が類似するものから配列の規則性を見出した。現地で検討したもののほか、整理段階で図上復元したものも多い。掘立柱建物とした柱穴の総数は全体の約1/4であるため、認定した以外にも多数あったものと予想される。

分類

基本的に長方形と円形を呈するものの2者がある。平面形態・柱穴配置を考慮し分類した(第50図)。

A類 平面形が長方形を基本とし、柱穴が単純に一重に巡るものである。

A1類 長方形を呈するもので、長辺の柱穴数が2本のものをi、3本のものをiiと細分した。

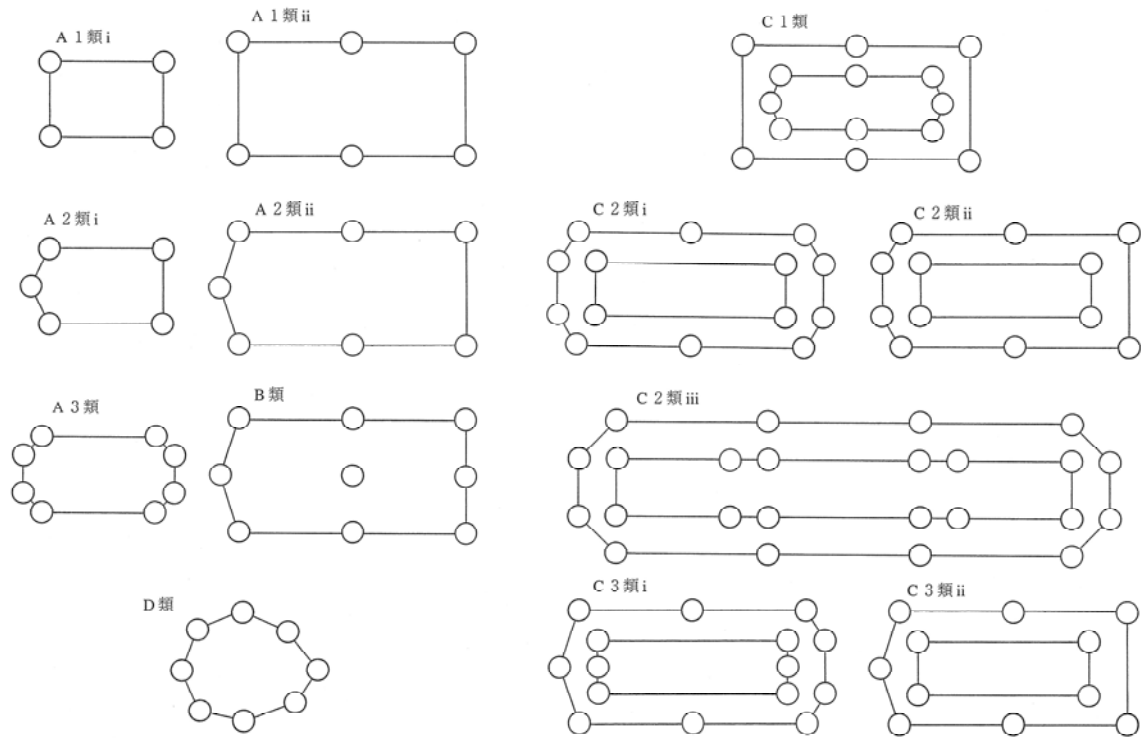
A2類 片側の短辺に柱穴を1本加えた五角形を呈するもので、長辺の柱穴数が2本のものをi、3本のものをiiと細分する。

A3類 八角形を呈するもの。

B類 短辺が3本、長辺が3本の柱穴で構成される平面形が長方形のもので、内部柱を有するもの。

C類 平面形は長方形を基本とするものの、柱穴が内外に二重に配列されるものである。外側に巡るものを「外周」、内側に巡るものを「内周」と呼ぶこととする(第51図)。

C1類 外周は短辺2本、長辺3本の柱穴で構成され、内周は短辺3本、長辺2本の長方形ないし六角形を呈するもの。



第50図 掘立柱建物分類図

C 2類 外周の短辺に柱穴が2本張り出すもの。

C 2類 i 両側に張り出しが付いて八角形となるもの。

C 2類 ii 片側にのみ付いて六角形となるもの。

C 2類 iii 外周の長辺の柱穴が4本以上の大形のもの。

C 3類 外周の片側の短辺中央に柱穴が1本張り出すもの。

C 3類 i 外周の片側にのみ張り出しをもち八角形を呈するもの。

C 3類 ii 反対側の短辺に2本の張り出しをもち七角形を呈するもの。

D類 平面形態が円形ないし楕円形を呈するものである。柱穴本数・規模は多様であるため細分は行わない。柱穴深度はA～C類に比べ浅い。

規模・長軸方向の計測

柱穴の下端における中央間を計測した(第51図)。

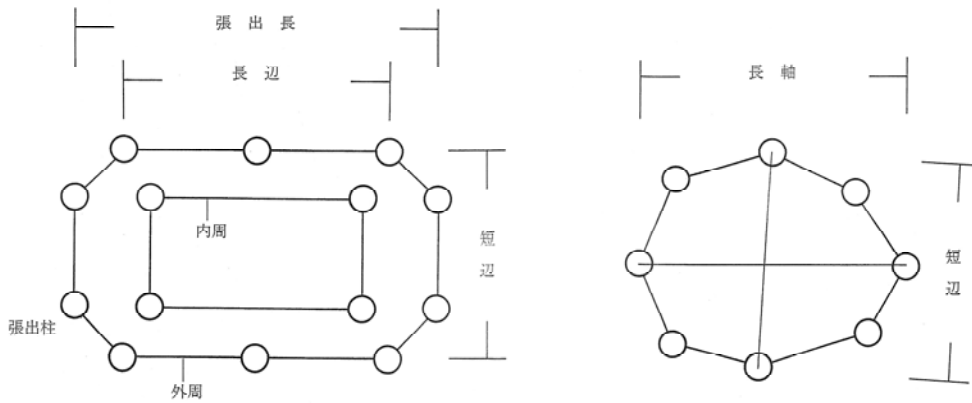
長軸 A～C類は、長辺のうち長い方を計測した。D類は、最も長くなる柱穴間を計測した。

短軸 A～C類は、短辺のうち長い方を計測した。D類は、長軸に対して直交する2柱穴間で最も長いものを計測した。ただし、直交しない場合は最も直交に近いものを選んだ。

張出長 A～C類のうち張り出しをもつものについて、長軸と平行する2基の張出柱穴間のうち長い方を計測した。また、片側にのみ張出柱をもつものや張出柱が1本のは、張出柱から反対側の短辺あるいは張出間と直交する長さを計測した。

主軸方向 長軸方向を主軸とし、真北を基準として東西に傾く角度を計測した。

VI 下層の調査



第51図 掘立柱建物における規模の計測位置と呼称

掘立柱建物No.	位置	分類	規模					主軸方向	
			長軸	柱穴間	短軸	柱穴間	張出長		
6	6A・B	C2 i	4.90	130-145	3.80	143-145	5.60	376A-508	N-53-W
7	6B	D	4.30	144-368	3.80	151-379			N-3-E
8	6B	D	3.85	309-378	3.74	150-374			N-60-E
9	6B・C, 7C	Al i	2.60	163-486	2.34	160-163			N-47-W
10	6C	D	3.58	174-664	3.14	171-176			N-62-W
11	6C, 7C	D	3.30	320-396A	2.70	332-1411			N-55-E
12	7C	Al ii	4.08	201-219	3.14	215-219			N-45-W
13	7C	Al i	2.50	1377-1386	2.14	659-1386			N-73-W
14	7C・D	D	3.20	209-232	3.00	224A-561			N-64-W
15	6C・D, 7C・D	D	4.25	208-235	3.52	228-229			N-57-W
16	7D	D	3.34	236-257	2.78	239-248			N-43-W
17	7D・8D	B	5.40	246-284	2.30	284-744	5.72	389-779	N-2-W
18	8C・D	D	3.58	497-743	3.17	532-729			N-20-W
19	7D・E, 8D・E	D	4.14	293-322	3.68	122-264			N-18-W
20	7E・8E	Al i	3.80	338B-575	3.18	336-338B			N-38-W
21	8D・E	Al i	3.44	339A-343	2.58	286-339A			N-3-E
22	8D・E	Al i	3.72	772-757	2.60	337C-757			N-2-E
23	8D, 9D, 10D	C2 iii	13.34	766-930	4.74	752-766	14.56	759と943-930ラインの直交点	N-22-E
24	8E, 9E, 10E	C2 iii	15.28	914-968B	4.10	968B-976	16.46	796-969	N-16-E
25	9D・E	C3 i	5.28	837-852	3.26	837-881	6.42	857と841-913ラインの直交点	N-19-E
26	8E・F, 9F	Al i	4.44	298-412	3.18	412-478			N-18-W
27	9E・F, 10E・F	C2 i	5.60	429-591	3.62	425-429	6.48	408-647	N-16-E
28	9F, 10F	A2 ii	9.50	415-433	3.84	415-583	9.52	435と415 583ラインの直交点	N-24-E
29	9FG・10FG	A2 i	2.96	595-628	2.34	608-628	3.10	607と595-596ラインの直交点	N-38-E
30	13F, 14F	D	3.08	1428-1432	2.52	1431-1434			N-2-E
31	10E・F, 11E・F	C1	8.88	1051A-476	3.80	451-1051A			N-46-E
32	10E・11E	C1	5.60	426-1061	3.40	426-971	6.40	972-975	N-47-E
33	10D・11E	C2 i	4.88	944-1025	3.84	1025-1031	5.50	949-1063	N-24-E
34	11D・E, 12E	C2 i	5.10	1001-1067A	3.78	1067A-1086	5.74	1085-1337A	N-74-E
35	11D・E, 12D・E	Al ii	5.58	1090B-1302	3.76	995-1302			N-67-E
36	11D, 12D	Al i	4.00	1283-1318	3.54	1303-1318			N-3-W
37	11C・D, 12C・D	C2 ii	5.14	1013-1230	3.34	1010-1013	5.74	1033と992-1230ラインの直交点	N-83-E
38	12C・D	Al ii	4.42	1243-1319C	2.92	1222-1243			N-8-W
39	12C・D	Al ii	5.04	1225-1326	2.94	1235-1326			N-83-W
40	12C・D	C3 ii	6.40	1212-1327	3.62	1232-1327	6.74	1242と1232-1327ラインの直交点	N-87-W
41	12B・C	C2 i	4.60	1096-1213	3.08	1213-1281	5.54	1167-1256	N-72-W
42	12B・C, 13B・C	Al ii	7.14	1124-1204	3.64	1124-1347B			N-87-W
43	12B, 13B	Al ii	5.44	1107-1128	3.12	1107-1181			N-82-W
44	12B, 13B	Al ii	4.16	1108-1150	2.44	1099-1108			N-85-W
45	12A・B	C2 i	4.54	1116-1148	3.36	1148-1173	5.26	1131-1134	N-80-W
46	12B, 13B	A3	3.24	1142-1186	2.06	1186-1191	3.90	1136-1189	N-20-E

第4表 掘立柱建物観察表

S B 6 (図版 80、写真図版 239)

位置 6 A・Bグリッドに位置し、廃棄ブロック 1 の南側に隣接する。北東コーナーで S B 7 と重複する。

分類・規模 西側コーナーを検出していないが、C 2 類 i とと思われる。長軸 4.9 m (P 130 - 145)、短軸 3.8 m (P 143 - 145)、張出長 5.6 m (P 376 A - 508) を測る。長辺の柱間は 2.3 ~ 2.6 m であり、ほぼ均等である。内周は柱穴間隔が均等な長方形を呈し、外周とはほぼ平行する。

柱穴 柱掘形は上端長径 42 ~ 92 cm の円形や楕円形・方形で、深度は長辺で 49 ~ 75 cm、張出柱で 43 ~ 58 cm、内周で 56 ~ 80 cm である。覆土は P 658 に版築が認められたものの、他では精査不足のため版築・柱痕とも確認できていない。堆積状況は、自然堆積が多いものの、P 369・658 の上面は地山ブロックの混入する黒褐色土で埋め戻されている。また、P 142 では版築とみられる壁際覆土から磨製石斧 1 点・打製石斧 2 点が出土した。

出土遺物 土器、石器 (磨製石斧 254、打製石斧 205・206、磨石類、剥片)。

その他 S B 7 との新旧関係は不明である。調査時に認定した。

S B 7 (図版 81、写真図版 239)

位置 6 Bグリッドに位置し、廃棄ブロック 1 の南側に隣接する。S B 6・8 と重複する。

分類・規模 柱穴 6 本で構成される D 類である。長軸 4.3 m (P 144 - 368)、短軸 3.8 m (P 151 - 379) を測る。柱間は 1.7 ~ 3 m と不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径 39 ~ 52 cm の円形ないし楕円形で、深度は 33 ~ 47 cm である。覆土は黒褐色土の単層で、自然堆積のものが占める。柱痕・版築は確認されていない。

出土遺物 土器(157)、石器 (スクレイパー、両面調整石器)。

その他 S B 6・8 との新旧関係は不明である。調査時に認定した。

S B 8 (図版 81、写真図版 239)

位置 6 Bグリッドに位置し、廃棄ブロック 1 の南側に隣接する。S B 7 と重複する。

分類・規模 柱穴 7 本で構成される D 類である。長軸 3.85 m (P 309 - 378)、短軸 3.74 m (P 150 - 374) を測る。柱間は 1.3 ~ 2.1 m とやや不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径 48 ~ 95 cm の円形ないし楕円形で、深度は 34 ~ 66 cm である。覆土は黒褐色土の単層で自然堆積のものが多く、P 378 では柱痕と版築が確認されている。また、P 152 は柱痕に相当する部分に礫が投棄されている。

出土遺物 なし。

その他 S B 7 との新旧関係は不明である。調査時に認定した。

S B 9 (図版 81、写真図版 240)

位置 6 B ~ C・7 Cグリッドに位置し、廃棄ブロック 1 の南側に隣接する。

分類・規模 A 1 類 i である。長軸 2.6 m (P 163 - 486)、短軸 2.34 m (P 160 - 163) を測る。P 486 - 162 間がやや長く、台形状を呈す。

柱穴 柱掘形は上端長径 46 ~ 87 cm の円形ないし楕円形で、深度は 30 ~ 57 cm である。覆土は黒褐色土の単層で自然堆積のものが多く、P 486 では柱痕と版築が確認されている。

出土遺物 土器。

その他 整理中に認定した。

VI 下層の調査

S B 10 (図版 82、写真図版 240)

位置 6 C グリッドに位置し、S I 117 の南側に隣接する。

分類・規模 柱穴 7 本で構成される D 類である。長軸 3.58 m (P 174 - 664)、短軸 3.14 m (P 171 - 176) を測る。柱間は 1.1 ~ 1.9 m とやや不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径 47 ~ 75 cm の円形や楕円形のほか不整形で、深度は 32 ~ 48 cm である。覆土は黒褐色土の単層で、自然堆積のものが占める。

出土遺物 なし。

その他 調査時に認定した。

S B 11 (図版 82、写真図版 240)

位置 6 ~ 7 C グリッドに位置し、S I 117 の南側に隣接する。

分類・規模 柱穴 7 本で構成される D 類である。長軸 3.3 m (P 320 - 396 A)、短軸 2.7 m (P 331 - 1411) を測る。柱間は 0.9 ~ 1.6 m とやや不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径 26 ~ 53 cm の楕円形で、深度は 10 ~ 45 cm である。覆土は黒褐色土の単層で自然堆積のものが多く、柱痕・版築は検出されていない。

出土遺物 土器。

その他 整理時に認定した。

S B 12 (図版 83、写真図版 240)

位置 7 C グリッドに位置し、S B 11・14 の南側に隣接する。

分類・規模 A 1 類 ii である。長軸 4.08 m (P 201 - 219)、短軸 3.14 m (P 215 - 219) を測る。長辺の柱間は 1.9 ~ 2.1 m であり、ほぼ均等な長方形を呈する。

柱穴 柱掘形は上端長径 37 ~ 84 cm の円形ないし楕円形で、深度は 38 ~ 78 cm である。覆土は黒褐色土の単層で、自然堆積のものが多く、P 310 の覆土上部は礫の投棄により埋め戻されている。

出土遺物 土器。

その他 整理時に認定した。

S B 13 (図版 83、写真図版 241)

位置 7 C グリッドに位置し、S B 12 の南西側に隣接する。

分類・規模 A 1 類 i である。長軸 2.5 m (P 1377 - 1386)、短軸 2.14 m (P 659 - 1386) を測る。短辺の柱間間隔が不等のため、平面形が台形状を呈す。

柱穴 柱掘形は上端長径 39 ~ 58 cm の円形ないし楕円形で、深度は 20 ~ 58 cm である。覆土は黒褐色土の単層で、自然堆積のものが多く、P 659 では柱痕・版築が確認されている。

出土遺物 なし。

その他 整理時に認定した。

S B 14 (図版 84、写真図版 241)

位置 7 C ~ D グリッドに位置し、S I 117 の南側に隣接する。S B 15 と重複する。

分類・規模 柱穴 7 本で構成される D 類である。長軸 3.2 m (P 209 - 232)、短軸 3 m (P 224 A - 561) を測る。柱間は 1.1 ~ 1.7 m とやや不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径 38 ~ 53 cm の円形ないし楕円形で、深度は 12 ~ 37 cm である。覆土は黒褐色土の単層で自然堆積のものが占める。P 378 では柱痕と版築が確認されている。

出土遺物 土器。

その他 S B 15との新旧関係は、P 224 AがP 224 Bを切っているためS B 14の方が新しい可能性が高い。
整理時に認定した。

S B 15 (図版 84、写真図版 241)

位置 6～7 C～Dグリッドに位置し、S I 117の南側に隣接する。S B 14と重複する。

分類・規模 柱穴8本で構成されるD類である。長軸4.25 m (P 208 - 235)、短軸3.52 m (P 228 - 229)を測る。柱間は1.4～1.8 mとほぼ均等である。

柱穴 柱掘形は上端長径47～92 cmの円形・楕円形・不整形で、深度は33～51 cmである。覆土は黒褐色土の単層で自然堆積のものが占める。柱痕・版築は確認されていない。

出土遺物 土器、石器 (両面調整石器、磨石類)。

その他 S B 14との新旧関係は、P 224 BがP 224 Aに切られているため、S B 15の方が古い可能性が高い。
調査時に認定した。

S B 16 (図版 84、写真図版 241)

位置 7 Dグリッドに位置し、S I 117の南側に隣接する。

分類・規模 P 236・257を張出柱とみることも可能だが、柱穴規模・柱穴間隔が付近のD類に類似することや、ピットの重複が著しく、他のものも関連する可能性があるためD類とした。長軸3.34 m (P 236 - 257)、短軸2.78 m (P 239 - 248)を測る。柱間は1.3～2.4 mと不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径51～53 cmの円形ないし楕円形で、深度は27～53 cmである。覆土は黒褐色土の単層で自然堆積のものが多く、P 352では版築が確認されている。

出土遺物 土器。

その他 調査時に認定した。

S B 17 (図版 85、写真図版 241)

位置 7～8 Dグリッドに位置し、S B 16の南側に隣接する。

分類・規模 B類である。両短辺に張出柱が認められ、さらに、この二つを結ぶラインとP 279 - 334間を結ぶラインの交点にP 391があることから、これを内部柱と認定した。長軸5.4 m (P 246 - 284)、短軸2.3 m (P 284 - 744)、張出長5.72 m (P 389 - 779)を測る。長辺の柱間は南半より北半が短く、短辺も南辺が短い。

柱穴 柱掘形は上端長径36～63 cmの円形ないし楕円形が多く、深度は長辺柱が50～71 cmだが、張出柱および内部柱は13～38 cmと浅い。覆土は黒褐色土と褐色土の複数に分層できるものが多く、P 246では柱痕・版築が、P 391では柱痕が確認されている。

出土遺物 土器 (147)。

その他 整理時に認定した。

S B 18 (図版 85、写真図版 241)

位置 8 C～Dグリッドに位置し、中央部と隣接する。

分類・規模 柱穴8本で構成されるD類である。長軸3.58 m (P 497 - 743)、短軸3.17 m (P 532 - 729)を測る。柱間は1～1.6 mとやや不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径32～54 cmの円形ないし楕円形で、深度は21～39 cmである。覆土は黒褐色土の単層で自然堆積のものが占める。柱痕・版築は確認されていない。

VI 下層の調査

出土遺物 なし。

その他 S B 18の内部および南北に接してピットが多数あることから、複数の掘立柱建物が重複している可能性がある。整理時に認定した。

S B 19 (図版 86、写真図版 242)

位置 7～8 D～Eグリッドに位置し、廃棄ブロック 2に近い。

分類・規模 柱穴7本で構成されるD類である。長軸4.14 m (P 293 - 322)、短軸3.68 m (P 122 - 264)を測る。柱間は1.5～1.8 mとほぼ均等である。

柱穴 柱掘形は上端長径53～86 cmの円形ないし楕円形で、深度は20～53 cmである。覆土は黒褐色土や暗褐色土の複数の分層できるものが多い。P 322では柱痕・版築が確認されている。また、P 122の覆土に遺物の投棄が認められ、P 264の覆土上部は礫の投棄により埋め戻されている。

出土遺物 土器(134・138)、石器(石核 484、石皿 560、磨石類)。

その他 調査時に認定した。

S B 20 (図版 86、写真図版 242)

位置 7～8 Eグリッドに位置し、S B 19の南側に隣接する。

分類・規模 A 1類 i である。長軸3.8 m (P 338 B - 575)、短軸3.18 m (P 336 - 338 B)を測る。短辺間隔が不等のため台形状を呈する。

柱穴 柱掘形は上端長径39～65 cmの円形ないし楕円形で、深度は18～59 cmである。覆土は黒褐色土や暗褐色土の複数の分層できるものが多い。P 575では柱痕・版築が確認されている。

出土遺物 土器。

その他 整理時に認定した。

S B 21 (図版 87、写真図版 242)

位置 8 D～Eグリッドに位置し、S B 21の南側に隣接する。

分類・規模 A 1類 i である。長軸3.44 m (P 339 A - 343)、短軸2.58 m (P 286 - 339 A)を測る。長辺および短辺はほぼ均等である。

柱穴 柱掘形は上端長径41～60 cmの円形ないし楕円形で、深度は50～74 cmである。覆土は黒褐色土の単層のものが多い。

出土遺物 土器。

その他 整理時に認定した。

S B 22 (図版 87、写真図版 242)

位置 8 D～Eグリッドに位置し、S B 22の南側に隣接する。

分類・規模 A 1類 i である。長軸3.72 m (P 772 - 757)、短軸2.6 m (P 337 C - 757)を測る。長辺および短辺はほぼ均等である。

柱穴 柱掘形は上端長径47～62 cmの円形ないし楕円形で、深度は42～69 cmである。覆土は黒褐色土や暗褐色土の複数の分層できるものが多い。P 794では柱痕・版築が確認されている。

出土遺物 なし

その他 整理時に認定した。

S B 23 (図版 88、写真図版 243・244)

位置 8～10 D グリッドに位置し、S B 25 と重複する。

分類・規模 C 2 類 iii である。P 752 - 943 間に柱穴が直線的に並び、それより西側が中央部となり同規模のピットが隣接しないこと、これとほぼ平行・ほぼ同じ柱間で P 766 - 930 間に柱穴が並ぶこと、P 753 - 927 間および P 763 - 929 間が平行してほぼ同じ柱間で柱穴が並ぶこと、これら 4 列の柱穴が東西にほぼ平行に並ぶこと、以上の 4 点から、これらを同一の掘立柱建物を構成する柱穴と認定した。これに張出柱として北辺に P 751・759 が付属するが、南辺にはない。なお、S K 838 は覆土上位に黒色土と礫がレンズ状に堆積しており、柱穴が新たに掘り込まれた可能性もある。長軸 13.34 m (P 766 - 930)、短軸 4.74 m (P 752 - 766)、張出長 14.56 m を測る。長辺間はほぼ均等だが、短辺間は北辺が長く不等である。本掘立柱建物は東西で柱穴間隔や規模が異なるため、P 822 - 860 ラインより北半と P 871 - 863 ラインより南半の 2 棟とすることも可能である。また、P 748 - 776・818・820 は小規模な柱穴ながら、本掘立柱建物の東西軸とほぼ平行しているため関連する可能性がある。

柱穴 柱掘形は上端長径 38～110 cm の円形・楕円形・不整形で、深度は外周で 32～69 cm、内周で 39～85 cm である。内周の方が外周より平均的に深く、外周のものは規模に差があることが特徴である。覆土は黒褐色土や暗褐色土の複数に分層できるものが多い。P 752・753・763・853・927・929 では柱痕・版築が、P 930・943 では版築が確認されている。堆積状況では、P 833・847・856・929 など礫等の投棄による埋め戻しを確認しうるものが多い。P 752・753・824 は柱穴下位を塞ぐように覆土中位に礫が敷き詰まっている。また、P 753 は地山中の大形礫を打ち欠いて掘り下げられている。

出土遺物 土器、石器 (磨製石斧 250、砥石、磨石類)。

その他 S B 25 との新旧関係は、P 845 が P 836 と重複するが新旧関係は不明である。整理時に認定した。

S B 24 (図版 89、写真図版 243～245)

位置 8～10 E グリッドに位置し、S B 25・32 と重複する。

分類・規模 C 2 類 iii である。P 914 - 968 間に柱穴が直線的に並び、それより東側に同規模のピット列が存在しないこと、これとほぼ平行・ほぼ同じ柱間で P 879 - 976 間に柱穴が並ぶこと、P 880 - 957 間および P 884 - 963 間が平行してほぼ同じ柱間で柱穴が並ぶこと、これら 4 列の柱穴が東西にほぼ平行に並ぶこと、以上の 4 点から、これらを同一の掘立柱建物を構成する柱穴と認定した。これに張出柱として北辺に P 751・759、南辺に P 958・969 が付属する。また、内周の南北辺を除く柱穴は近接して 2 基が並ぶことが特徴である。長軸 15.28 m (P 914 - 968 B)、短軸 4.1 m (P 968 B - 976)、張出長 16.46 m を測る。短辺間はほぼ均等だが、長辺間は 4.4～5.2 m とやや不規則で、西辺より東辺が長く不等である。本掘立柱建物は東西で柱穴間隔が異なるため、P 886 - 915 ラインより北半と P 953 - 956 ラインより南半の 2 棟とすることも可能である。

柱穴 柱掘形は上端長径 50～105 cm の円形ないし楕円形のものが多く、深度は長辺で 55～83 cm、張出柱で 32～61 cm、内周で 39～85 cm である。外周・内周とも深度が深いことが特徴である。覆土は黒褐色土や暗褐色土など複数に分層できるものが多い。P 884・891 A・954～956 では柱痕・版築が、P 879・880・886・887・889・904・915・959・969・976 では版築が確認されている。堆積状況では、P 796・914・953 A・963 で礫等の投棄による埋め戻しを確認できる。P 959 と重複する P 977 は、礫を多量に含む暗褐色土で埋め戻され、その底面が大形礫であったことから、これを放棄して P 959・960 が掘り上げられた可能性がある。なお、P 976 の 5 層下部から多量に出土した炭化物は、同定の結果、コナラ属コナラ節と

VI 下層の調査

判明した。また、その放射性炭素年代は 4610 ± 70 BP との測定結果が出ている。

出土遺物 土器 (125)、石器 (磨製石斧 249、磨石類)。

その他 SB 25 との新旧関係は不明である。整理時に認定した。

SB 25 (図版 90、写真図版 245)

位置 9D～Eグリッドに位置し、SB 23・24 と重複する。

分類・規模 C 3 類 i である。長軸 5.28 m (P 837 - 852)、短軸 3.26 m (P 837 - 881)、張出長 6.42 m を測る。短辺間はほぼ均等だが、長辺の柱間は 2.4～2.9 m とやや不規則である。内周は長辺および短辺とも柱間はほぼ等しい。張出柱 P 857 A と内周柱 P 859・861 が直線的に並ぶことが特徴である。

柱穴 柱掘形は上端長径 32～85 cm の円形ないし楕円形で、深度は長辺で 62～78 cm、張出柱で 47～68 cm、内周で 21～80 cm である。覆土は黒褐色土や暗褐色土など複数に分層できるものが多い。P 837・857・888 では柱痕・版築が、P 841・844・860・881・914 では版築が確認されている。堆積状況では、P 836・841・860 で礫等の投棄による埋め戻しを確認できる。

出土遺物 土器、石器 (磨石類)。

その他 SB 23・24 との新旧関係は不明である。整理時に認定した。

SB 26 (図版 91、写真図版 245)

位置 8E～F・9Fグリッドに位置し、廃棄ブロック 3 の西側に隣接する。

分類・規模 A 1 類 i である。長軸 4.44 m (P 298 - 412)、短軸 3.18 m (P 412 - 478) を測る。長辺および短辺はほぼ均等である。

柱穴 柱掘形は上端長径 51～74 cm の円形ないし楕円形で、深度は 32～51 cm である。覆土は黒褐色土の単層のものが多い。P 412 では柱痕・版築が確認されている。

出土遺物 土器。

その他 整理時に認定した。

SB 27 (図版 91、写真図版 245)

位置 9～10E～Fグリッドに位置し、SB 28 の西側に隣接する。

分類・規模 C 2 類 i である。長軸 5.6 m (P 429 - 591)、短軸 3.62 m (P 425 - 429)、張出長 6.48 m を測る。長辺間はほぼ均等だが、短辺方向 P 646 - 589 間が両短辺より長く、中央が膨らむ。

柱穴 柱掘形は上端長径 47～122 cm の円形や楕円形・不整形で、深度は長辺で 37～77 cm、張出柱で 35～80 cm、内周で 54～67 cm である。覆土は黒褐色土や暗褐色土など複数に分層できるものが多い。P 425・591 では柱痕・版築が、P 408・416・430・465・646・647・984 では版築が確認されている。堆積状況では、P 589・591・641・684 で礫等の投棄による埋め戻しを確認できる。P 591 は隣接する P 592 と同様に覆土上面に大形礫が投棄されている。

出土遺物 土器、石器 (両面調整石器 421、対向調整石器 431、磨石類)。

その他 整理時に認定した。

SB 28 (図版 92、写真図版 246)

位置 9～10Fグリッドに位置し、柱穴群の東端に存在する。

分類・規模 A 2 類 ii である。長軸 9.5 m (P 415 - 433)、短軸 3.84 m (P 415 - 583)、張出長 9.52 m を測る。短辺間はほぼ均等だが、長辺の柱間は 4.1～4.7 m とやや不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径59～102cmの円形や楕円形・不整形で、深度は長辺で66～93cm、張出柱で34cmである。長辺柱穴の規模が大きいことが特徴である。覆土は黒褐色土や暗褐色土など複数に分層できるものが多い。P 415・433・627では柱痕・版築が、P 440・441では版築が確認されている。堆積状況では、自然堆積とみられるものが多い。

出土遺物 土器(132)、石器(磨石類)。

その他 整理時に認定した。

S B 29 (図版 93、写真図版 246)

位置 9～10 F～Gグリッドに位置し、廃棄ブロック3と4の中間に存在する。東側にS A 1が隣接する。

分類・規模 A 2類iである。長軸2.96 m (P 595 - 628)、短軸2.34 m (P 608 - 628)、張出長3.1 mを測る。短辺間がやや不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径39～50cmの円形ないし楕円形で、深度は30～40cmである。いずれも浅い柱穴であることが特徴である。覆土は黒褐色土の単層である。柱痕・版築は確認されていない。堆積状況は自然堆積とみられる。

出土遺物 土器。

その他 整理時に認定した。

S B 30 (図版 93、写真図版 247)

位置 13～14 Fグリッドに位置し、S I 403より南側に存在する。北東側にS A 2が隣接する。

分類・規模 D類である。長軸3.08 m (P 1428 - 1432)、短軸2.52 m (P 1431 - 1434)を測る。柱間は0.6～1.05 mで不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径26～37cmの円形ないし楕円形で、深度は14～32cmと極めて浅い。覆土は暗褐色土の単層である。柱痕・版築は確認されていない。堆積状況は自然堆積とみられる。

出土遺物 なし。

その他 調査時に認定した。

S B 31 (図版 94、写真図版 247)

位置 10～11 E～Fグリッドに位置し、S I 403の北西側に隣接する。

分類・規模 C 1類である。内周ではP 1063 - 452ライン上に柱穴が2基配され、短辺中央にも張出すように柱穴が1基ずつ付属することが特徴である。長軸8.88 m (P 1051 A - 476)、短軸3.8 m (P 451 - 1051 A)を測る。長辺間は4.2～4.4 mでほぼ均等だが、短辺方向P 1063 - 452間が両短辺より長く、中央がやや膨らむ。

柱穴 柱掘形は上端長径42～120cmの円形や楕円形・不整形で、深度は外周で29～69cm、内周で16～89cmだが、内周柱P 457・1068は他に比べ非常に浅い。覆土は黒色土や黒褐色土など複数に分層できるものが多い。P 439・450・1045 Aでは柱痕・版築が、P 449・454・456・1063では版築が確認されている。堆積状況では、P 451・452・476・1063などで礫等の投棄による埋め戻しを確認できる。また、P 476・1051 Aは重複するピットに切られている。

出土遺物 土器(133・153)、石器(打製石斧196、両面調整石器、楔形石器、磨石類、剥片)。

その他 整理時に認定した。

VI 下層の調査

S B 32 (図版 95、写真図版 248)

位置 10～11 Eグリッドに位置し、S B 24 と重複する。

分類・規模 C 1 類である。内周では短辺中央に柱穴が 1 基ずつ付属することが特徴である。P 971・464・975 と重複する柱穴は建替え以前のものである可能性がある。長軸 5.6 m (P 426 - 1061)、短軸 3.4 m (P 426 - 971) を測る。長辺間は 2.5～3.2 m と不規則である。短辺方向 P 968 A - 427 間が両短辺より長く、中央がやや膨らむ。

柱穴 柱掘形は上端長径 46～86 cm の円形・楕円形・不整形・方形で、深度は外周で 48～62 cm、内周で 42～70 cm だが、内周柱 P 981・983 は他に比べやや浅い。覆土は黒褐色土や暗褐色土など複数に分層できるものが多い。P 427・970・975・980・981・983 では版築が確認されている。堆積状況では、P 427・971・973 で礫等の投棄による埋め戻しを確認できる。

出土遺物 土器(137)、石器 (楔形石器 74、両面調整石器、磨石類)。

その他 整理時に認定した。

S B 33 (図版 96、写真図版 249)

位置 10 D・11 Eグリッドに位置し、S B 23 の南側に隣接する。

分類・規模 C 2 類 i である。長軸 4.88 m (P 944 - 1025)、短軸 3.84 m (P 1025 - 1031)、張出長 5.5 m を測る。長辺間は 2.3～2.5 m とほぼ均等である。

柱穴 柱掘形は上端長径 52～101 cm の円形や楕円形・不整形で、深度は長辺で 55～79 cm、張出柱で 38～62 cm、内周で 60～78 cm である。覆土は黒褐色土や暗褐色土など複数に分層できるものが多い。P 925・926・934・936 では柱痕・版築が、P 918・1027～1031 では版築が確認されている。堆積状況では、自然堆積のものが多い。P 944 は 2 基の柱穴が重複している可能性がある。

出土遺物 土器。

その他 調査時に認定した。

S B 34 (図版 97、写真図版 250)

位置 11 D～E・12 Eグリッドに位置し、S B 35 と重複し、廃棄ブロック 5 B の北側に隣接する。

分類・規模 C 2 類 i である。長軸 5.1 m (P 1001 - 1064 A)、短軸 3.78 m (P 1067 A - 1068)、張出長 5.74 m を測る。長辺間は 1.95～3.2 m と不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径 44～103 cm の円形ないし楕円形で、深度は長辺で 58～76 cm、張出柱で 24～56 cm、内周で 32～54 cm である。覆土は黒色土や黒褐色土など複数に分層できるものが多い。P 1067 B・1334 では柱痕・版築が、P 1067 A・1079・1084・1085・1337 B では版築が確認されている。堆積状況では、自然堆積が多いものの、P 1001 では礫の投棄などによる埋め戻しを確認できる。

出土遺物 土器、石器 (磨製石斧素材 256、磨石類、剥片)。

その他 S B 35 との新旧関係は、P 1090 A が P 1090 B に切られていることから S B 34 が古い可能性がある。整理時に認定した。

S B 35 (図版 98、写真図版 250)

位置 11～12 D～Eグリッドに位置し、S B 34 と重複する。

分類・規模 A 1 類 ii である。長軸 5.58 m (P 1090 B - 1302)、短軸 3.76 m (P 995 - 1302) を測る。長辺間が 2.65～3.4 m と不規則であり、短辺方向も 3.2～4.6 m と不等のため、平面形は六角形に近い。

柱穴 柱掘形は上端長径42～78cmの円形ないし楕円形で、深度は44～81cmである。覆土は黒褐色土で複数に分層できるものが多い。P 995・1335では柱痕・版築が、P 1048・1302では版築が確認されている。堆積状況では、自然堆積が多いものの、P 1302では覆土下位に礫の投棄が確認できる。

出土遺物 土器。

その他 S B 34との新旧関係は、P 1090 BがP 1090 Aを切っていることからS B 35が新しい可能性がある。整理時に認定した。

S B 36 (図版98、写真図版250)

位置 11～12 Dグリッドに位置し、S B 35の南西側に隣接する。

分類・規模 A 1類iである。長軸4 m (P 1283 - 1318)、短軸3.52 m (P 1303 - 1318)を測る。長辺がやや不等のため、台形状を呈す。

柱穴 柱掘形は上端長径65～79cmの円形ないし楕円形で、深度は59～65cmである。覆土は黒褐色土や褐色土などの複数に分層できるものが多い。P 1303では版築が確認されている。堆積状況はすべて自然堆積である。

出土遺物 土器。

その他 整理時に認定した。

S B 37 (図版99、写真図版251)

位置 11～12 C～Dグリッドに位置し、集落中央部に隣接する。

分類・規模 C 2類iiである。長軸5.14 m (P 1013 - 1230)、短軸3.34 m (P 1010 - 1013)、張出長5.74 mを測る。長辺間・短辺はほぼ均等である。

柱穴 柱掘形は上端長径48～110cmの円形や楕円形・不整形で、深度は長辺で54～76 cm、張出柱で49・62 cm、内周で17～73cmである。覆土は黒褐色土や暗褐色土など複数に分層できるものが多い。P 992・1010・1013では版築が確認されている。堆積状況は自然堆積のものが多いものの、P 992・1010・1013では礫の投棄などによる埋め戻しが確認できる。

出土遺物 土器、石器(剥片)。

その他 調査時に認定した。

S B 38 (図版100、写真図版251)

位置 12 C～Dグリッドに位置し、S B 39・40と重複する。

分類・規模 A 1類iiである。長軸4.42 m (P 1243 - 1319C)、短軸2.92 m (P 1222 - 1243)を測る。長辺間が1.9～2.5 mと不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径59～81cmの円形や楕円形・方形・不整形で、深度は45～56cmである。覆土は黒褐色土や暗褐色土の複数に分層できるものが多い。P 1226・1319Cでは柱痕・版築が、P 1222・1243・1278では版築が確認されている。堆積状況は、自然堆積を呈すものが占める。

出土遺物 土器。

その他 S B 39・40との新旧関係は不明である。整理時に認定した。

S B 39 (図版100、写真図版251)

位置 12 C～Dグリッドに位置し、S B 38・40と重複する。

分類・規模 A 1類iiである。長軸5.04 m (P 1225 - 1326)、短軸2.94 m (P 1235 - 1326)を測る。長辺は南辺の方が若干長い。

VI 下層の調査

柱穴 柱掘形は上端長径52～70cmの円形や楕円形・方形・不整形で、深度は32～55cmである。覆土は黒褐色土や暗褐色土の複数に分層できるものが多い。P 1225・1258で版築が確認されている。堆積状況は、自然堆積のほか、P 1258・1260 Aで覆土上位に礫の投棄などによる埋め戻しを確認できる。

出土遺物 土器 (131)。

その他 S B 38・40との新旧関係は不明である。整理時に認定した。

S B 40 (図版 101、写真図版 251)

位置 11～12 C～Dグリッドに位置し、集落中央部に隣接する。

分類・規模 C 3類 ii である。西側短辺の中間に張り出すようにP 1242があることから、これを張出柱と認定した。長軸6.4 m (P 1212 - 1327)、短軸3.62 m (P 1232 - 1327)、張出長6.74 mを測る。短辺方向の柱間はほぼ均等だが、長辺間は3～3.4 mでやや不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径55～99cmの円形や楕円形・不整形で、深度は長辺で34～70cm、張出柱で38cm、内周で44～64cmである。覆土は黒褐色土や暗褐色土など複数に分層できるものが多い。P 1250・1327では版築・柱痕が、P 1208・1212・1214・1233・1272では版築が確認されている。堆積状況は自然堆積のほか、P 1208・1215・1228・1242・1272では礫の投棄などによる埋め戻しを確認できる。

出土遺物 土器、石器 (剥片 453)。

その他 S B 38・39との新旧関係は不明である。調査時に認定した。

S B 41 (図版 102、写真図版 252)

位置 12～13 B～Cグリッドに位置し、集落中央部南側に隣接する。

分類・規模 C 2類 i である。ただし、北西コーナーの張出柱を検出していない。長軸4.6 m (P 1096 - 1213)、短軸3.08 m (P 1213 - 1281)、張出長5.54 mを測る。短辺方向の柱間はほぼ均等だが、長辺間は2～2.45 mでやや不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径38～104cmの円形や楕円形・不整形で、深度は長辺で45～72cm、張出柱で30～58 cm、内周で49～73 cmである。覆土は黒褐色土や暗褐色土など複数に分層できるものが多い。P 1110・1146・1161・1256では版築・柱痕が、P 1096・1167・1170・1210・1213では版築が確認されている。堆積状況は自然堆積を示すものが多いが、P 1151・1213では礫の投棄などによる埋め戻しを確認できる。

出土遺物 土器。

その他 調査時に認定した。

S B 42 (図版 103、写真図版 252・253)

位置 12～13 B～Cグリッドに位置し、S B 43・44・45と重複する。

分類・規模 A 1類 ii である。長軸7.14 m (P 1124 - 1204)、短軸3.64 m (P 1124 - 1347 B)を測る。長辺間は3.1～3.75 mとやや不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径82cm前後の円形ないし楕円形で、深度は58～74 cmである。覆土は黒色土や黒褐色土の複数に分層できるものが多い。P 1124・1204・1350で柱痕・版築が確認されている。堆積状況は、自然堆積を呈すもののほか、P 1276・1347 Bでは覆土上位に礫の投棄などによる埋め戻しを確認できる。なお、P 1093・1094を切るP 1092から板状の炭化物が出土し、同定の結果、ケヤキと判明した。また、この放射性炭素年代は4400 ± 70 B Pとの測定結果が出ている。

出土遺物 土器(156)、石器 (スクレイパー、磨石類)。

その他 S B 43・44・45との新旧関係は不明である。調査時に認定した。

S B 43 (図版 104、写真図版 252・253)

位置 12～13 B～C グリッドに位置し、S B 42・44・45 と重複する。

分類・規模 A 1 類 ii である。長軸 5.44 m (P 1107 - 1128)、短軸 3.12 m (P 1107 - 1181) を測る。長辺間は 1.9～2.9 m と不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径 53～69 cm の円形ないし楕円形で、深度は 51～63 cm である。覆土は黒褐色土や暗褐色土の複数に分層できるものが多い。P 1132 A・1181 で柱痕・版築が、1107・1352 A で版築が確認されている。堆積状況は、P 1107・1128・1132 A・1352 A で覆土中に礫の投棄などによる埋め戻しを確認できる。

出土遺物 土器、石器 (磨石類)。

その他 S B 42・44・45 との新旧関係は不明である。調査時に認定した。

S B 44 (図版 105、写真図版 253)

位置 12～13 B グリッドに位置し、S B 42・43・45 と重複する。

分類・規模 A 1 類 ii である。長軸 4.16 m (P 1108 - 1150)、短軸 2.44 m (P 1099 - 1108) を測る。長辺間は 1.7～2.35 m、短辺方向は 2.3～2.7 m とやや不規則である。

柱穴 柱掘形は上端長径 48～65 cm の円形ないし楕円形で、深度は 30～68 cm である。覆土は黒褐色土や暗褐色土の複数に分層できるものが多い。P 1098・1099・1150 で柱痕・版築が、P 1091・1108 で版築が確認されている。堆積状況は自然堆積を示すものが多いが、P 1108 では覆土上位に大形礫の投棄による埋め戻しを確認できる。

出土遺物 土器。

その他 S B 42・43・45 との新旧関係は不明である。調査時に認定した。

S B 45 (図版 106、写真図版 253)

位置 12 A～B グリッドに位置し、S B 42・43・45 と重複する。

分類・規模 C 2 類 i である。長軸 4.54 m (P 1116 - 1148)、短軸 3.36 m (P 1148 - 1173)、張出長 5.26 m を測る。長辺間は 1.95～2.3 m とやや不規則で、短辺方向は西辺が 3.1 m と短くなっている。

柱穴 柱掘形は上端長径 45～83 cm の円形や楕円形・不整形で、深度は長辺で 55～71 cm、張出柱で 41～52 cm、内周で 55～82 cm である。覆土は黒褐色土や暗褐色土など複数に分層できるものが多い。P 1116・1134・1135・1139・1148・1159 では版築・柱痕が、そのほか P 1149 を除くすべてで版築が確認されている。堆積状況は自然堆積を示すもののほか、P 1127・1139・1173 では礫の投棄などによる埋め戻しを確認でき、P 1120 では覆土上位に土器が廃棄されている。

出土遺物 土器(127・130・152)、石器 (磨製石斧 253、両面調整石器 423、磨石類、剥片)。

その他 調査時に認定した。

S B 46 (図版 105・写真図版 253)

位置 12～13 B グリッドに位置し、S B 45 の北側に隣接する。

分類・規模 A 3 類である。ただし、西辺が調査区境に隣接するため柱穴をすべて検出していない可能性がある。長軸 3.24 m (P 1142 - 1186)、短軸 2.06 m (P 1186 - 1191)、張出長 3.9 m を測る。

柱穴 柱掘形は上端長径 31～43 cm の円形ないし楕円形で、深度は 12～27 cm と非常に浅い。覆土は暗褐色土の単層である。堆積状況はすべて自然堆積を示す。

出土遺物 石器 (磨石類)。

その他 整理時に認定した。

(3) 土坑

原則として深度1 m以上の穴を土坑としたが、柱穴の可能性が高いものはピットとしたものもある。また、深度1 m未満のものでも堆積状況から土坑としたものもある。平面形および断面形の形態分類は、第V章1. Aにおける上層遺構の形態分類に従う。

a. 分類

土坑には平面形や規模・堆積状況に特徴がみられる。これは、土坑の機能を反映している可能性が高いものとする。そこで、これらの特徴のまとまりを抽出して分類を行いたい。

- A類 深度40 cm未満の浅いもので、平面形は楕円形ないし円形を基本とする。断面形は台形状で、立ち上がりが緩やかなものが多い。堆積状況は自然堆積を示すものが大半である。
- B類 深度40 cm以上90 cm未満のもので、断面形が箱形状や台形状を呈す。立ち上がりが急斜ないし垂直なものも占める。堆積状況は埋め戻しとみられるものが大半である。
- C類 深度147～149 cmの深いもので、平面形は楕円形を呈す。底面に円形の小形ピットが付属するものである。堆積状況は覆土の大半が自然堆積を示すものの、上面に遺物の廃棄等が確認できる。
- D類 上端の長径が2 mを超えるもので、平面形は不整形を呈す。深度は45～47 cmで、断面形は弧状、立ち上がりは緩やかである。堆積状況は自然堆積を示すものが多い。

① A類

合計13基を検出した。S K 269・474・1343・1372を除き、柱穴群と分布が重なる。

S K 962 (図版107、写真図版254)

10 E 8～9グリッドにあり、S B 24の南端に位置する。平面形は楕円形で、上端長径99 cm、上端短径72 cm、深度15 cmを測る。底面はほぼ水平である。覆土は暗褐色土で、中央に礫の投棄が確認できる。遺物は出土していない。

S K 648 (図版107、写真図版254)

10 E 16～17グリッドにあり、S B 27の南西コーナーに隣接する。平面形は楕円形で、上端長径138 cm、上端短径66 cm、深度19 cmを測る。底面はほぼ水平である。覆土は暗褐色土の単層で、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

S K 431 (図版107、写真図版254)

10 F 2・7グリッドにあり、S B 28の西辺に重複する。平面形は楕円形で、上端長径161 cm、上端短径94 cm、深度25 cmを測る。底面は南側から中央にかけてほぼ水平だが、北端に楕円形の落ち込みがある。覆土は暗褐色土の単層で、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

S K 442 (図版107、写真図版254)

10 F 17グリッドにあり、S B 28の東辺に隣接する。平面形は楕円形で、上端長径122 cm、上端短径74 cm、深度36 cmを測る。底面はほぼ水平である。覆土は黒色土や褐色土ブロックが混入する黒褐色土で構成され、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

S K 1282 (図版107、写真図版255)

12 D 13・18グリッドにあり、S B 40の南側に隣接する。平面形は円形で、上端長径103 cm、上端短径83 cm、深度22 cmを測る。底面は凹凸を呈す。覆土は黒褐色土と暗褐色土の2層で、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

S K 205 (図版 107、写真図版 254)

7 C 10・15 グリッドにあり、S B 13 の東側と重なる。平面形は不整形で、上端長径 152 cm、上端短径 123 cm、深度 38 cm を測る。底面は南側で浅く落ち込む。覆土は礫の混入する黒褐色土の単層で、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

S K 269 (図版 107、写真図版 254)

7 F 25・7 G 5 グリッドにあり、S I 120 と廃棄ブロック 3 との中間に位置する。平面形は円形で、上端長径 102 cm、上端短径 96 cm、深度 39 cm を測る。底面はほぼ水平である。覆土は黒色土や黒褐色土の 4 層で構成され、自然堆積とみられる。遺物は 2・3 層から土器(143)、土器製品(434)、磨石類が出土している。

S K 414 (図版 107、写真図版 254)

6 F 9 グリッドにあり、S B 26 の南辺と重なる。平面形は楕円形で、上端長径 142 cm、上端短径 87 cm、深度 34 cm を測る。断面形は弧状を呈し、底面は中央が窪む。覆土は黒褐色土と暗褐色土の 2 層で構成され、自然堆積とみられる。覆土上面に礫が投棄されていたほか、覆土中位から土器 (144) が出土した。

S K 953 A (図版 107、写真図版 254)

10 E 1 グリッドにあり、S B 24 の西辺を構成する柱穴と重複する。平面形は円形で、上端長径 100 cm、上端短径 91 cm を測り、深度は約 32 cm と推定される。底面は北半が柱穴状に深く落ち込んでいることから、これを 953 B とした。953 A の覆土は礫を含む黒褐色土と暗褐色土の 5 層で構成され、埋め戻しとみられる。一方、953 B は黒褐色土の 2 層で、自然堆積と考えられる。よって、953 A は 953 B を切って構築された可能性が高いものとするが、これらを同一のものともみることが可能である。遺物は出土していない。

S K 474 (図版 107、写真図版 255)

11 H 8 グリッドにあり、集落外に位置する。平面形は不整形で、上端長径 128 cm、上端短径 82 cm を測り、深度は約 38 cm と推定される。底面はほぼ水平である。覆土は黒褐色土と褐色土の 2 層で、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。本遺構は S K 472 と S K 473 の延長線上に位置し、掘り下げが足りないと思われることから、C 類に属するものであった可能性がある。

S K 1288 (図版 107、写真図版 255)

12 D 13・18 グリッドにあり、S B 36 の南辺と重なる。平面形は円形で、上端長径 84 cm、上端短径 84 cm、深度 29 cm を測る。底面はほぼ水平である。覆土は黒褐色土と褐色土の 2 層で構成され、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

S K 1343 (図版 107、写真図版 255)

13 A 23 グリッドにあり、廃棄ブロック 7 の北側に隣接する。V b 層中で検出した。平面形は楕円形で、上端長径 106 cm、上端短径 75 cm、深度 26 cm を測る。底面はほぼ水平である。覆土は黒褐色土と暗褐色土の 2 層で構成され、自然堆積とみられる。遺物は覆土上位から両面調整石器が出土している。

② B 類

合計 7 基を検出した。S K 917 が集落中央部にあるほかは、柱穴群の 8～10 D～F グリッドに集中する。

S K 123 (図版 108、写真図版 255)

8 E 12・17 グリッドにあり、S B 20 の南側と重なる。平面形は円形で、上端長径 150 cm、上端短径 136 cm、深度 87 cm を測る。底面はほぼ水平である。覆土は黒色土や黒褐色土の 9 層で構成される。9 層は埋め戻しの可能性が高く、その他は自然堆積の可能性はある。遺物は覆土上半から土器が出土している。

S K 838 (図版 108、写真図版 255)

9 D 17 グリッドにあり、S B 23 の内周柱と重複する。平面形は円形で、上端長径 128 cm、上端短径 92 cm、深度 79 cm を測る。断面形は箱形状で底面はほぼ水平である。覆土は黒色土や黒褐色土・暗褐色土の 9 層で構成される。8・9 層は地山系の土を主体とし、5～7 層も褐色土ブロックを含む層であることから、これらは短期間に埋め戻された可能性が高い。2・3 層は黒色系の土がレンズ状に堆積し、礫の投棄もみられることから、土坑と重複して柱穴が掘り上げられて、それが埋め戻されたものとも考えられる。遺物は 3 層の壁側から石棒 (613) と搬入礫が出土し、覆土上位から土器が出土している。

S K 917 (図版 108、写真図版 256)

10 C 17 グリッドにあり、集落中央部に位置する。平面形は楕円形で、上端長径 138 cm、上端短径 105 cm、深度 60 cm を測る。断面形は箱形状で、底面はほぼ水平である。覆土は黒褐色土や暗褐色土の 9 層で構成される。3～7 層は地山系の土を主体とするほか、2 層は地山ブロックの混入率が高く、全体が水平堆積であることから、短期間に埋め戻された可能性が高い。1 層は黒色系の土がレンズ状に堆積することから、自然堆積と考えられる。遺物は 3 層から土器・石鏃・剥片が出土している。

S K 952 B (図版 108、写真図版 256)

10 D 19～20 グリッドにあり、集落 S B 33 の中央北側に位置する。平面形は楕円形とみられ、上端長径約 135 cm、上端短径約 120 cm とみられ、深度 52 cm を測る。北側では P 952 B に切られている。断面形は弧状だが、東側の立ち上がりは急斜である。底面は西側から東側に向かって傾斜する。覆土は黒褐色土や暗褐色土の 5 層で構成される。1～4 層はレンズ状の堆積を呈すものの、いずれも小礫や白色粒子を含む近似する覆土であることから、短期間に埋め戻された疑いがある。遺物は土器が出土している。

S K 951 (図版 108、写真図版 256)

10 D 7・12 グリッドにあり、集落 S B 23 の南西コーナーに隣接する。平面形は円形で、上端長径 95 cm、上端短径 80 cm、深度 44 cm を測る。断面形は箱形状で、底面はほぼ水平である。覆土は黒褐色土と暗褐色土を主体とし、7 層に分層される。1～5 層は黒色が強く、レンズ状の堆積を呈すことから自然堆積と考えられる。6・7 層は地山系の土を主体とすることから、短期間に埋め戻された可能性が高い。遺物は 1～5 層から土器・磨石類が出土している。

S K 432 (図版 108、写真図版 256)

10 F 7 グリッドにあり、S B 28 の南端に重なる。平面形は方形で、上端長径 108 cm、上端短径 97 cm、深度 59 cm を測る。断面形は台形状で、底面はほぼ水平である。覆土は黒褐色土と暗褐色土を主体とし、5 層に分層される。4・5 層は地山系の土を主体とすることから、短期間に埋め戻された可能性が高い。1～3 層は黒色系の土を主体とし、多量の大形礫や遺物の投棄により埋め戻されている。遺物は 1～3 層から土器 (166・167)、磨石類 5 点 (492・555)、石皿 (561)、砥石が出土している。

S K 477 (図版 108、写真図版 256)

8 F 10・9 F 6 グリッドにあり、S B 26 の南側と重なる。平面形は楕円形で、上端長径 106 cm、上端短径 90 cm、深度 56 cm を測る。断面形は半円状で、底面はほぼ水平である。覆土は黒色土と黒褐色土からなる 3 層に分層される。1 層は黒色系の土を主体とし、石皿 3 点が投棄されている。遺物は 1 層から土器、石皿 (566・567)、磨製石斧・剥片が出土している。

③ C類

合計2基を検出した。柱穴群と重ならず、S I 403の北側に位置する。

S K 472 (図版110、写真図版257)

11 F 16～17グリッドにあり、廃棄ブロック4と重なる。平面形は楕円形で、上端長径195cm、上端短径143cm、深度147cmを測る。断面形は階段状で、底面はほぼ水平であるが、底面中央に底面からの深度8cmの小ピットが付属する。覆土は黒褐色土と暗褐色土を主体とし、8層に分層される。6～8層は地山系の土が主体で壁の崩落土の疑いが強い。2～5層は褐色系と黒色系の互層となっており、自然堆積と考えられる。1層は廃棄ブロック4の構成土である。遺物は1層から土器が出土している。

S K 473 (図版110、写真図版257)

11 G 12・17グリッドにあり、S K 460の北側に隣接する。平面形は楕円形で、上端長径145cm、上端短径115cm、深度149cmを測る。断面形は台形状で、底面はほぼ水平であるが、底面中央に底面からの深度15cmの小ピットが付属する。検出段階では、覆土上面から遺物が出土し、浅い土坑として掘り上げたが、再度の精査によりさらに深く掘り込まれていることが判明したものである。覆土は黒褐色土と暗褐色土を主体とし、7層に分層される。7層は地山系の土が主体で壁の崩落土の疑いが強い。1～6層は褐色系と黒色系の互層となっており、自然堆積と考えられる。遺物は上面から土器、磨石類が出土している。

④ D類

合計3基を検出した。柱穴群と重ならず、S I 403に隣接するほか、集落中央部に位置する。

S K 994 (図版110、写真図版257)

11 C 7・8・11・13グリッドにあり、集落中央部の南側に位置する。平面形は不整形で、上端長径282cm、上端短径223cm、深度44cmを測る。断面形は弧状で、底面は凹凸がある。覆土は暗褐色土の2層で、いずれも礫を多く含む。検出段階では、この上にV f層に類似する黒色土が堆積していた。遺物は出土していない。

S K 460・461 (図版109、写真図版257)

11 G 8・9グリッドにあり、S I 403の北東側に隣接する。S K 460および461は東西に連なり、平面形はS K 460が楕円形で、S K 461が長方形とみられる。S K 460は上端長径が330cm、上端短径290cmになるものとみられ、深度は57cmを測る。断面形は弧状で、底面は若干東側に傾斜する。覆土は黒色土の2層で、2層上面に地山礫が集石状に敷き詰められている。1層は自然堆積と考えられる。S K 461は上端長径460cmになるものとみられ、上端短径220cm、深度47cmを測る。断面形は弧状で、底面は東側に傾斜し、地山中の礫が露出して凹凸をなす。覆土はS K 460と同じ1層である。これら2基の切り合い関係は認められない。遺物はS K 460で土器(150)が、S K 461で土器・剥片が出土している。

S K 462 (図版109、写真図版257)

12 F 5・9・10・15グリッドにあり、S I 403の南西側に隣接する。平面形は不整形で、上端長径285cm、上端短径278cm、深度45cmを測る。断面形は弧状で、底面は南側に傾斜し、地山中の礫が露出して凹凸をなす。覆土は黒褐色土と褐色土を主体とし、8層に分層される。1～4層は褐色系と黒色系がレンズ状に互層となっており、自然堆積と考えられる。1・3層はブロック状の明黄褐色砂を主体とするもので、洪水等による堆積の可能性がある。そのうち1層はS I 403の2 a層と同一である。遺物は4・5層から土器(162・165)、剥片が出土している。

(4) 柱穴列

集落東側～南東側の外縁において、ほぼ直線的に並ぶ柱穴列が検出された。これらの柱穴は遺構が希薄な部分にあり、規模・覆土等が類似していたことから、同時期に構築されたものと判断した。

S A 1 (図版 111、写真図版 246)

位置 9～10 G グリッドにあり、西側平坦面と東側斜面との傾斜変換点から斜面側に位置する。北端で廃棄ブロック 3 と重複する。また、西側に S B 29 が隣接する。

規模 14 基のピットがほぼ直線的に並ぶ。長さ 18.2 m (P 619 - 606) を測る。柱穴間は 0.8～2.5 m と不規則である。P 606 より南側にも続く可能性があったが、明確なプランを検出できなかった。

柱穴 柱掘形は上端長径 32～100 cm の円形ないし楕円形で、深度は 8～53 cm を測る。覆土は黒褐色土に褐色の砂質土が混入する単層のことが多い。柱痕・版築は確認されていない。

出土遺物 土器。

その他 調査時に認定した。

S A 2 (図版 112)

位置 13 F～G グリッドにあり、急斜する斜面から西側平坦面まで延びている。西端では S B 30 が南接する。

規模 7 基のピットがやや蛇行して並ぶ。長さ 13.2 m (P 631 - 640) を測る。柱穴間は 0.8～3.6 m と不規則である。P 640 より東側にも続く可能性があったが、明確なプランを検出できなかった。

柱穴 柱掘形は上端長径 23～62 cm の円形や楕円形などで、深度は 10～31 cm を測る。覆土は黒褐色土に褐色の砂質土が混入するもので、単層を示す。柱痕・版築は確認されていない。

出土遺物 なし。

その他 調査時に認定した。

S A 3 (図版 112)

位置 13 G グリッドにあり、東側斜面上に位置する。S A 2 と交差する。

規模 3 基の柱穴がほぼ直線的に並ぶ。長さ 6.8 m (P 634 - 639) を測る。柱穴間は 3.2～3.6 m である。

柱穴 柱掘形は上端長径 34～38 cm の円形ないし楕円形で、深度は 13～21 cm を測る。覆土は黒褐色土に褐色の砂質土が混入するもので、単層を示す。柱痕・版築は確認されていない。

出土遺物 なし。

その他 整理時に認定した。

(5) ピット

柱穴群を中心に 1290 基 (掘立柱建物・柱穴列含む) のピットが検出されている。掘立柱建物の復元に使用したピットは、柱穴群全体の約 1/4 であり、ほかにも多数の掘立柱建物が建設されていたものと思われる。掲載した掘立柱建物・柱穴列以外のピットは、深度 6～82 cm を測り、柱痕・版築を確認できるものが多数あるほか、人為的に礫や土器などを埋め戻したもの (P 593: 図版 256、写真図版 108 ほか) がある。個々のピットデータはすべて観察表に掲載しているので、そちらを参照頂きたい。

(6) 溝

S D 404・405 (図版 113、写真 258)

位置 12E・13E・14E・15Eに位置する。12Eでは廃棄ブロック5と、13Eでは廃棄ブロック6と接する。

検出状況 S D 405はV b層中で帯状に濃い黒色土を検出した。南端は自然地形による沢地部分に接している、それ以上伸びるかどうかは不明である。S D 404は地山VI層の起伏によってできた沢地状の地形を利用したのと考えられ、平面的には明確なプランを検出できなかったが、黒色の濃い部分を溝と推定しV c層上面で検出した。さらに北側に伸びるものと考えられるが、確認できなかった。

平面形・規模 南北に細長く、蛇行している。S D 405は長さ11.4 m、最大幅1.0 mを測り、深さは約10 cmと浅い。S D 404は直線距離で長さ21.6 m、最大幅2.7 mを測り、深さは10～20 cmである。

覆土 自然堆積とみられる黒色土を基調とする。

遺物出土状況 遺構内およびその周辺から土器片が少量出土している。

出土遺物 土器(140～142・148・155)、土製品(土偶423)、石器(スクレイパー、両面調整石器)

その他 廃棄ブロック5・6が本遺構に規制されていることから、廃棄ブロックと共存していたか、あるいは本遺構がこれらを切っている可能性がある。

(7) 環状廃棄遺構

集落の外縁において遺物や地山礫が多量に出土し、それが集落を環状に取り巻くように濃密に分布することが分かった(第59図)。これらの遺物や礫は、所謂「土器捨て場」と呼ばれるものと同様に廃棄行為により形成されたものと考えられる。廃棄場所は平坦面のほか、堅穴住居や自然地形による窪地も選地されている。遺物や礫が折重なって出土する状況から、意識的に同じ場所に廃棄を繰り返したことが窺えたため、これらを遺構として認識し、「環状廃棄遺構」と名付けることとする。この遺構は部分的に途切れて連続せず、大きく7つの廃棄ブロックに分けることが可能である。これらを廃棄ブロック1～7とそれぞれ呼称する。

本遺構の調査では、調査が3年にわたり、調査範囲も部分的に行われたこともあって、遺構に対する認識や調査方法・層位の呼称等が統一されていない。よって、調査経緯・方法を記した後に、以下の点について統一的な見地から所見を加えたい。

層位

廃棄ブロックを形成する遺物・礫・排土を含む土層をM層と呼称することとする。また、M層の直下に遺構形成以前の旧表土面を検出できる場合があり、基本層位のV c層とM層との間の黒色土層をB層と呼称する。これらの層を細分する場合は、算用数字を続けて記し、さらに細分する場合はアルファベットを加えた。なお、遺物の注記記号は調査時のままであるため、層位を変更したものについては当初の層位名を書き記した。

調査の経緯と方法

環状廃棄遺構の検出は、平成5年度の調査で北側1グリッドから順次南側に調査を進めてきた際に、4 A～Bグリッドにおいて急に遺物や地山中に含まれる礫が多量に出土し始めたことを発端とする。当初、遺物の濃密な包含層という程度の認識で調査を進めたために、遺物・礫をすべて取り上げて掘り下げていた。東側に調査が進むにしたがって礫が密集して出土し、その範囲が帯状を呈することが明らかとなった。これら

VI 下層の調査

は集石遺構とも考えられたため、集石帯と仮称し、磔を出土状態のままに残して調査を続けた。その結果、遺物・磔の集中は3ヵ所認められたものの、遺物と磔が混在することや、磔も人為的に組まれた様子が窺えなかったことから、遺物の廃棄によるものと考えた。ただし、この時点では柱穴群のほとんどを検出していなかったために、磔の供給元を割り出すことはできなかった。

平成6年度調査では、集落の東側を調査し、10～11Fグリッドおよび12Dグリッドで5年度と同様な遺物・磔の集中が2ヵ所認められたことから、これらを覆う大田切川火砕流堆積物層（IV層）を残して、土層観察用ベルトを設定して堆積状況を観察することとした。また、5年度調査区の再度の遺構精査で柱穴が多数検出されたことにより、地山磔の供給元が柱穴などの廃土と考え得るようになった。また、平成7年度調査区南側におけるIV層の掘り下げは、廃棄場の存在を前提として行ったため、IV層下面を薄く残して盛り上がりを検出することができた。これにより、廃棄場が環状に巡る可能性がでてきた。

平成7年度調査では、12～14B～Dにおいて検出された盛り上がりにはトレンチを入れて土層を観察した結果、旧表土上に地山ブロックが混入する人為層が2～3層形成されていることを確認した。

廃棄ブロック1（図版114、写真259・260）

位置 4～6A～Cグリッドにあり、南東側でS I 117と重複する。全体的に北側に傾斜していて、南側柱穴群と北側集落外との傾斜変換点にあたる。

検出 平成5年度に検出した。

平面形・規模 北西から南東に延びる帯状を呈す。調査区西端からS I 117の西側周堤境までの長さ約21m、幅約6～8mの範囲である。5Bグリッド北西側から4Bグリッド南西側では沢頭状に窪んでいる。一次調査の30トレンチにより分断されているが、調査所見から連続していたものと考えられる。また、S I 117の東西両端もトレンチに切られているが、S I 117の覆土中からも多量の遺物・磔が検出されていることから、本来はこれとも連続していた可能性が高い。

土層 調査段階では、廃棄ブロックとの認識がなかったため、基本層位と同じ分層を行っていた。調査時のVa・Vb層がM層に当たる。C-C'断面では西側が風倒木による攪乱を多く受けているため、Va層を検出していない。M層は厚さ15cm前後で形成されている。M層には廃棄ブロック6のように地山ブロックの混入が目立たない。東側では沢頭状の窪みがありB層を確認できる。A-A'およびB-B'断面は、すでにM層上位が掘り上げられた後の断面図である。上面の磔を含む部分がM層で、その下にB層を確認できる部分もある。

遺物出土状況 M層では攪乱の多い4～5Aグリッドを除き、遺物・磔の密集度が高い。沢頭状の窪み部分では大形の土器片が多いが、他では細片が主体的である。S I 117西側周堤上では遺物出土量が少な目である。

出土遺物 土器（168a～230）、土製品（土器片円盤396・398～400・402・413・415、焼成粘土塊433・434）石器（石鎌、尖頭器、石錐、楔形石器、打製石斧、磨製石斧、スクレイパー、両面調整石器、折断調整石器、対向調整石器、磔器、磨石類、石皿、砥石）、石製品（玦状耳飾り617・619）。

その他 S I 117との新旧関係は、S I 117覆土中の遺物出土状況から、廃棄ブロック1の大部分がS I 117の廃絶後に行われた可能性が高い。その他に重複する遺構は検出されていない。

廃棄ブロック 2 (図版 115、写真 259・260)

位置 6～7 E・7～8 F グリッドにある。ほぼ平坦な面に位置する。

検出 平成 5 年度に検出した。

平面形・規模 北西から南東に延びるやや弧状で帯状を呈す。長さ約 23 m、幅約 2.5～7.5 m の範囲である。北側で幅が広く、南側で狭くなる。

土層 調査段階では、廃棄ブロックとの認識がなかったため基本層位と同じ分層を行っていた。A-A' および B-B' 断面は、すでに M 層上位が掘り上げられた後の断面図である。調査時の V 層が M 層に当たる。調査段階で、V 層は上位に褐色土が多く混入し、下位にはほとんど含まれない部分があることが分かったため、前者を「V 層褐色土」、後者を「V 層黒」として遺物を取上げている。こうした経緯から、本遺構の M 層は廃棄ブロック 6 の M 1 層と同様に上面に地山ブロックを多く含む層が形成されていた可能性が高い。また、大形礫がほぼ同レベルで密集していたことから、礫を基準に上位から出土した場合は「V 石上」、礫中から出土した場合は「V 石中」、礫より下位の場合は「V 石下」と記入したものもある。B-B' 断面ではピット状の落ち込み(1～4 層)があるものの、平面的に遺構を検出するに至っていない。

遺物出土状況 北側の幅の広い部分では、完形に近い土器片を含み遺物量も多いが、南側では小破片が多く、遺物量も少ない。

出土遺物 土器(231～254)、土製品(土器片円盤 416)、石器(石鏃、楔形石器、打製石斧、磨製石斧、スクレイパー、両面調整石器、磨石類、石皿、砥石)。

その他 本遺構の下から P 299 が検出されている。これと本遺構との新旧関係は不明である。他にも重複する遺構は検出されていない。

廃棄ブロック 3 (図版 115、写真図版 261)

位置 8～9 F～G グリッドにある。柱穴群のある平坦面と東側斜面との傾斜変換点より斜面側に位置する。

検出 平成 5 年度に 8 グリッド分を、平成 6 年度に 9 グリッド分を検出した。

平面形・規模 北から南に長い楕円形を呈す。長さ約 8.5 m、幅約 5.5 m の範囲である。

土層 平成 5 年度調査では、廃棄ブロックとの認識がなかったため基本層位と同じ分層を行っていた。平成 6 年度調査において、A-A' 断面を観察し、地山ブロックが若干混入することから、M 層を V b 層から分離した。遺物の注記ではこれを「集石帯」と表記している。M 層は最大 20 cm の厚さで形成されている。

遺物出土状況 土器片は細片が多く遺物量も少ない。また、廃棄ブロック 1・2 に比べ礫の密集度も低い。

出土遺物 土器(255～260)、石器(石鏃、楔形石器、磨製石斧、スクレイパー、両面調整石器、磨石類、石皿、砥石)。

その他 本遺構の下から、P 304・666・618・619・419・420 が検出されている。これらと本遺構との新旧関係は不明である。

廃棄ブロック 4 (図版 116、写真図版 261)

位置 10～12 F・11～12 E グリッドにある。北東側に緩く傾斜し、西側平坦面と東側斜面との傾斜変換点より平坦面側に位置する。S I 403 の北西側で重複する。

VI 下層の調査

検出 平成6年度に検出し、S I 403との重複部分は平成7年度に行った。

平面形・規模 北東から南西に長い帯状を呈す。長さ約17.5 m、幅約9.5～5.5 mの範囲である。

土層 当初、礫が密集していた廃棄ブロック1～3と異なり、ブロック北側で礫の出土量が少なく、廃棄ブロックと認識していなかった。このため、基本層位と同じ分層を行い、遺物を取り上げている。しかし、S I 403と重複する南側で遺物が大量に出土し、南北が連続していることが明らかとなった。A-A'断面では、M層が約10 cm前後の厚さで形成されている。一方、S I 403西側短辺から南西コーナーにかけては窪んだ地形となり、S I 403北西コーナー付近とともに大量の遺物・礫が出土している。S I 403東西断面図(図版75)および南北断面図(図版75)で示した通り、周堤A②層下のB'層は、廃棄ブロック4の下部と考えられる。

遺物出土状況 S I 403付近では完形に近い土器や礫などが多数出土したが、北側は遺物が希薄である。

出土遺物 土器(85・103・109・112～114・118～124)、土製品(424)、石器(楔形石器、スクレイパー、両面調整石器、磨石類)、石製品(石棒614・616)。

その他 S I 403との新旧関係は、周堤A層下のB'層から多数の遺物が検出され、これが廃棄ブロック4と連続することから、S I 403が廃棄ブロック4を切って構築されたものと考えられる。ただし、S I 403の廃絶前後にも廃棄ブロック4が形成された可能性は否定できない。

廃棄ブロック5 (図版116、写真図版261・262)

位置 12～13 Eグリッドにある。ほぼ平坦な面に位置する。中央にS D 404が走るため、南東側(5 A)と北東側(5 B)に二分される。

検出 平成6年度に廃棄ブロック5 Aの東側を検出し、その西側と5 Bを平成7年度に検出した。

平面形・規模 AおよびBとも北東から南西に長い帯状を呈す。Aは長さ約9 m、幅約3～4.5 mの範囲である。Bは長さ約9 m、幅約1.5～3.5 mの範囲である。

土層 5 AのC-C'断面では、S D 404の東側に接してM層が厚さ20 cm前後で形成されている。礫は西よりで密集度が高く、東側で希薄となる。5 BのA-A'断面では、M層が約10 cm前後の厚さで形成されていて、2層に分層される。B-B'断面では、M層がV b層と不分明となっており、遺物出土状況からM層の範囲を想定している。この付近では、IV層とV b層およびM層との間に、洪水堆積層とみられる1・2層が確認できる。この2層は東側に向かって徐々に厚さを増しており、S I 403やS K 462で検出されている洪水堆積層との関連も窺われる。

遺物出土状況 5 Aでは遺物と礫が混在して出土しているが、5 Bでは礫の密集がみられず、遺物量も5 Aに比べかなり少ない。

出土遺物 土器(261～269)、土製品(土器片円盤)、石器(石鏃、石錐、打製石斧、両面調整石器、磨石類)。

その他 S D 404との新旧関係は、S D 404が廃棄ブロック5を切っている可能性はあるが、S D 404の内部に遺物等の廃棄がみられず、5 Aがこれに沿って形成されていることから、S D 404を機能させつつ廃棄ブロック5を形成していた可能性が考えられる。しかし、廃棄ブロック5 A-5 B間で土器が接合することから、S D 404が廃棄ブロック5を切っている可能性もある。

廃棄ブロック6 (図版117、写真図版262・263)

位置 12～13 B～Eグリッドにある。東側にやや傾斜する面に位置する。

検出 平成6年度のIV層土除去の際に本遺構上部の盛り上がりを検出し、平成7年度に調査を行った。

平面形・規模 東から西に長い帯状を呈す。長さ約24 m、幅約5.5～9.5 mの範囲である。

土層 ブロック中央では、M層が最大45cmの厚さで形成されている。M層はM1・M2・M3層に分層され、B-B'・C-C'断面ではM2層がA・Bに二分される。M1層は廃棄ブロックの薄い表層で、地山ブロックの混入やIV層の浸蝕により褐色を呈す部分が多い。M2層は廃棄ブロックの主体的な形成層で、遺物・地山礫を大量に含む。M2A層は大形の地山礫や地山ブロックの混入の多いことが特徴で、遺物も大量に含まれる。M2B層も遺物が多数出土するが、M2A層に比べやや小ぶりな地山礫が多く、地山ブロックの混入が少ない。M3層は黒色土が主体で、M1・2層からの崩落土を含む。遺物・地山礫は少ない。また、B-B'断面におけるKS・KN層はVb層に対応するものの、一般的なVb層に比べ白色粒子の混入が少ないことを特徴とする。C-C'断面のK層はB層ないしVb層に対応する可能性が高い。ブロックの周縁では、こうしたM3層やK層のようにVb層とやや異なる土層が形成されていたことが窺える。

遺物出土状況 遺物と地山礫は混在一体となって出土している。土器は破片が多いものの、ほぼ全形を残すものも出土している。

出土遺物 土器 (270a～332)、土製品 (土器片円盤401・403・414、環状土製品425・427・428、焼成粘土塊432・436)、石器 (石鎌、石錐、石匙、楔形石器、打製石斧、磨製石斧、スクレイパー、両面調整石器、折断調整石器、対向調整石器、周縁敲打調整石器、磨石類、石皿)、石製品 (石棒614、玉621)。

その他 本遺構下のVI層上面でピットを検出したが、これらとの新旧関係は不明である。

廃棄ブロック7 (図版118、写真図版262・263)

位置 13～14A～Bグリッドにある。ほぼ平坦な面に位置する。

検出 平成7年度に調査を行った。

平面形・規模 東から西に長い帯状を呈す。長さ約9.5m、幅約6～8mの範囲である。本ブロックは西側の調査区外に続いているため、全体の調査を行っていない。

土層 M1・2層がブロックを形成する土層と考えられ、20～30cmの厚さで堆積する。M1層は廃棄ブロックの薄い表層で、地山ブロックの混入やIV層の浸蝕により褐色を呈す部分が多い。M2層は廃棄ブロックの主体的な形成層で、遺物・地山礫・地山ブロックを多く含む。B層は調査時にM3層としていたもので、黒色土を主体とし、遺物・礫をほとんど含まない。

遺物出土状況 遺物と地山礫は混在一体となって出土している。土器は破片が多く、出土量もやや少ない。

出土遺物 土器 (333～346)、土製品 (土器片円盤405)、石器 (楔形石器、打製石斧、磨製石斧、スクレイパー、両面調整石器、折断調整石器、対向調整石器、周縁敲打調整石器、磨石類)、石製品 (管玉622、球状耳飾り? 623)。

その他 重複する遺構はない。

C まとめ

(1) 竪穴住居跡について

和泉A遺跡で検出された3軒の竪穴住居跡はいずれも長軸10mを超える大型のものである。外縁からは、県内で初例となった「周堤」が検出されている。この発見の要因には、集落全体が大田切川火砕流堆積物層(IV層)に覆われたことにより後世の攪乱を受けることが少なかったことが挙げられる。周堤のほかに、住居内覆土も同様に遺存状態が良好であり、覆土形成の良好なデータを得ることができた。ここでは、周堤と覆土に着目して、その形成過程を復元し、さらに上屋構造について検討したい。

a. 覆土の形成過程

はじめに、各堅穴住居跡の覆土および周堤の特徴についてみることにする（第52図）。

① S I 117

1～9層に分層できる。そのうち、9層は地山土に非常に似ているもので、床面中央付近に堆積するものの、分断して水平堆積を示さず、厚さも一様でないのが特徴である。壁外から流入した痕跡はなく、人為堆積によるものと考えられる。8層は地山土を起源とする均質な砂質土で、壁付近に三角状に堆積する。黒色土の混入がなく、住居廃絶直後に堆積したものであろう。そして、この上に7層が堆積する。7層は地山ブロックや礫が混入する砂質土で、周堤A層と線引きができず連続している。つまり、7層は本来周堤A層と同一の層であり、その一部が住居内に崩落したものと推察される。言い換えれば、周堤A層の高さは現状よりさらに高かったことがわかる。5・6層は7層およびA層と黒色土が、4層は9層と黒色土が混じり合ったものであり、いずれも住居廃絶後間もないものであろう。3層は自然堆積の黒色土層であるから、これ以後の堆積層は住居と関連しないものと思われる。以上から、S I 117では、廃絶直後の人為堆積層に9層→8層→7層→4～6層の過程を認めることができる。

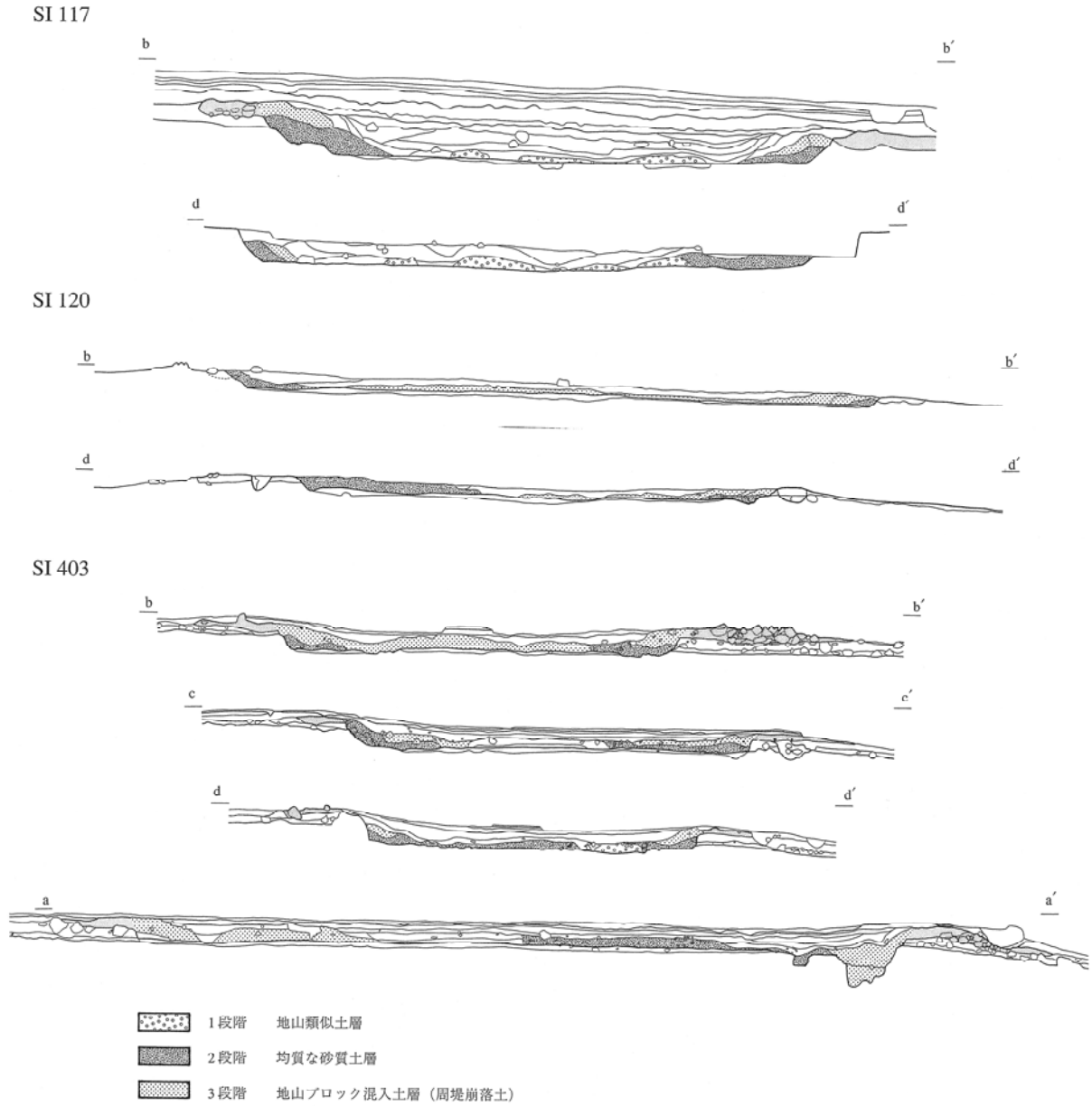
② S I 120

1～8層に分層した。このうち、5・6・7層は地山土に由来する均質な砂質土層で、壁付近に堆積することから廃絶直後のものと考えられる。2・3・4層は地山ブロックが混入する砂質土層で、5～7層上および床面中央まで堆積している。周堤A層が残存するz-z'断面では、A層に地山土がブロック状に混入していることから、これらはA層を起源とする可能性が高いものと推察される。1層は自然堆積の黒色土層であり、廃絶後、暫く期間をおいて形成されてものであろう。以上から、住居廃絶直後の人為堆積層に5～7層→2～4層の過程を認めることができる。

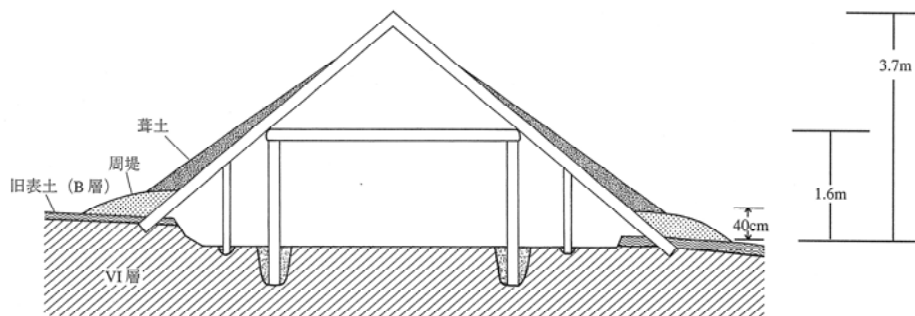
③ S I 403

1～5層に分層した。各層とも土層内容により細分している。5e層はd-d'断面にのみ確認されたもので、地山土に近似するものである。壁外から流入した痕跡はみられず、人為堆積層と考えられる。5d層は地山土を起源とする砂質土で、主に壁付近に堆積する。5c層は地山ブロックや礫が混入する砂質土で、壁際の5d層上に堆積する。周堤A層と線引きができず連続していることから、本来は周堤A層と同一層のものであり、その一部が廃絶直後に住居内に崩落したものと推察される。c-c'断面で確認される5b層も地山土がブロック状に混入するもので、5c層と同一起源の可能性が高いものとする。5a層はA層および5c層と黒色土が混じり合ったものであり、住居廃絶後間もないものであろう。4層は5c層上から床面直上に堆積する均質な砂質土である。5c・d層と異なり、礫の混入がほとんどみられず、人為的に攪拌された様子が認められない。このことから、廃絶直後の間もない期間に、なんらかの自然作用によって堆積した可能性が高いと考えるが、その要因については不明である。3層は自然堆積の黒色土層であるから廃絶後暫く期間をおいてから形成されてものであろう。1・2層も住居と直接関連のない自然堆積層である。以上から、住居廃絶直後の人為堆積層に5e層→5d層→5c・5b層→5a層の過程が認められる。

ここで、3軒の住居跡における廃絶直後の覆土形成について比較してみよう。S I 117およびS I 403では地山に類似する砂質土層が壁から離れた床面上に堆積している。ただし、S I 403ではこの層がごく一部の範囲に限定されていることから、S I 117と同規模のものとはいえないであろう。S I 120ではこうした土層が検出されていない。三者で最も共通する点は、壁際の均質な砂質土層が堆積した後に周堤A層の崩落土が堆積していることである。



第52図 竪穴住居覆土分類



第53図 SI403復元模式図

以上の2点を重要視し、各住居跡の廃絶直後の覆土形成について段階設定を試みる。第1段階は、地山類似土が床面中央付近に堆積する段階である。第2段階は壁際の均質な砂質土層が形成される段階である。第3段階は地山ブロックが混入する周堤崩落土が堆積する段階である。第52図をみると、各住居跡で2段階から3段階への過程が共通していることがわかる。

b. 周堤・垂木尻ピットについて

S I 120・S I 403において周堤下から垂木尻ピットが検出されている。垂木尻ピットは上屋の垂木尻を固定するためのものと推察される。垂木尻は周堤A層の上面では検出されず、S I 403のc-c'断面およびi-i'・ii-ii'断面において周堤A層を貫いてはいない。つまり、周堤中に垂木尻を固定したのではなく、垂木尻の上に周堤A層を被せたものと仮定できる。また、垂木の角度は、各断面から40度前後であったことが判明している。このほかに周堤で注目されるのは、S I 120およびS I 403において、周堤下端にある礫が住居外縁から数十cm離れたところに集中している点である。長辺では壁と礫の隙間に垂木尻ピットが並んでいることから、垂木尻より外側に礫を置いたものと仮定できる。また、各住居とも南側外縁で礫が多量に出土する点で共通する。S I 403のA⑤'層は、礫をB層上面と同じレベルまで意識的に積み上げたものと推察される。

c. 上屋構造の復元

以上で述べてきた特徴と平面形および柱穴配置から上屋構造の復元を試みたい。

はじめに、覆土形成の第1・2段階の解釈について検討する。第1段階は住居外部から流入した形跡がないことから、人為的な置き土かあるいは上屋から落下したものの二通りが考えられる。第2段階は周堤A層が盛土状を呈していたことから、外部からこれを乗り越えて流入したとは考えにくい。よって、周堤A層の上によほど高く盛られていたか、あるいは上屋の何処かに盛られていたものが周堤崩落以前に落下した二通りが考えられる。まず、第2段階の解釈だが、周堤を高盛土とした場合、垂木の角度が40度前後であることから、屋根尻と周堤との間にV字状の深い窪みができてしまい、屋根の雨水が周堤内に溜まり住居内部への雨漏りの原因になるものと予想される。このような雨仕舞いの悪い住居を建設したとは考えにくい。よって、第2段階の土層は、周堤から屋根上にかけて土葺きをしたものが屋根の落下に伴い堆積したものと推察される。そして、第1段階の土層も第2段階と同様に屋根上に葺かれていたものと考えたい。つまり、土葺き屋根の堅穴住居跡と考えるのである。垂木尻ピットの間隔が50cm前後と狭いのは、葺き土の荷重に耐え得るように設計したためであろう。また、支柱穴より壁側に間柱が付属するのも、荷重の最もかかる屋根尻を支えるためであろう。

以上をもとに、S I 403のc-c'断面をモデルとして堅穴住居跡の上屋を復元したのが第53図である。垂木の角度は40度とした。周堤の幅は垂木尻から1mとし、住居内部の周堤崩落土の厚さが15~20cmであったことからその高さを約40cmと推定した。この周堤は礫の出土状況から土留めの役も果たしていた可能性がある。土葺きはほぼ全面に及ぶものの、第1~3段階において住居の全床面が覆われていないことから部分的に欠けていたものと考えられる。これは煙り抜き用に土葺きがなされていないものとも予想される。土葺き屋根の勾配は約35度となり、土葺き屋根住居の復元実験による適性値とほぼ同じになる [高田1998]。部材には炭化材の樹種同定によりコナラを主としており、ほかにケヤキ・ブナ・クルミが用いられていたものとみられる。クリは確認されていない。S I 403は支柱穴と垂木尻ピットが平行することから上屋は切妻であったものと推察される。図上復元では、頂部の高さ3.7m、桁までの高さ約1.6mとなる。なお、S I 117は住居北側の支柱穴に付属する間柱がP 41を中心に放射状に配置することから、一部寄棟であったものと推

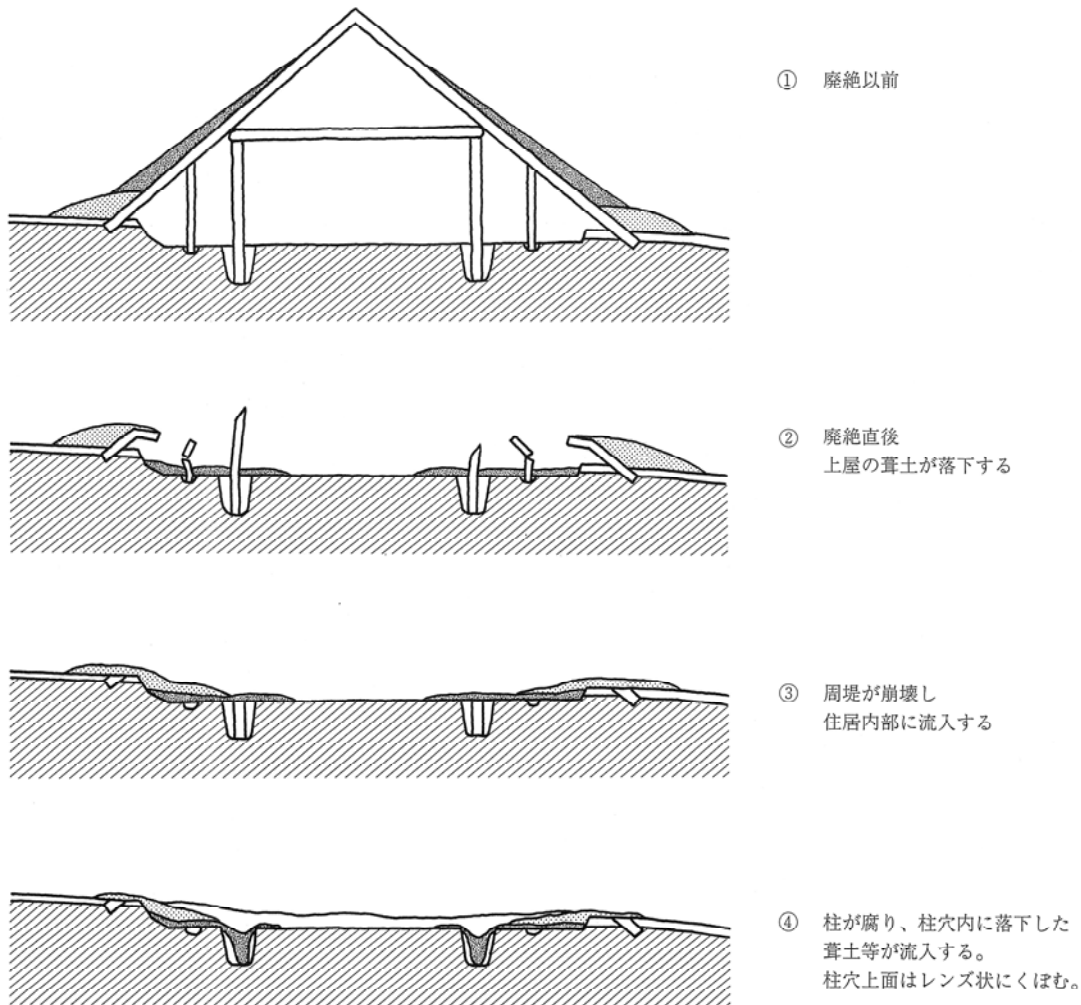
察される。

葺き土については若干検討する必要がある。土葺きに利用された土は地山土を主成分とし、黒色土の混入が少ない。そのため、十分な地山の掘削が必要となる。しかし、S I 403ではVI層の掘削厚が平均24cmと推定され、覆土堆積厚をみると不足することが予想される。土葺き屋根住居の復元実験においても土の不足が指摘されている [高田・西山1998]。和泉A遺跡の竪穴住居の掘削による排出土量を推測すると、計算上では第5表の通りになる。S I 117はVI層の掘削厚が平均39cmと推定され、排出土量は約27.4 m³

遺構名	掘削面	S 1 (上端面積・㎡)	S 2 (下端面積・㎡)	h (平均高・m)	V (堆積・㎡)
SI117	B層上面	75.8	64.9	0.59	41.5
SI117	VI層上面	75.8	64.9	0.39	27.4
SI120	B層上面	87.2	80.0	0.26	21.7
SI120	VI層上面	87.2	80.0	0.16	13.4
SI403	B層上面	84.5	79.0	0.39	31.9
SI403	VI層上面	84.5	79.0	0.24	19.6

第5表 竪穴住居跡掘削土量表

計算式： $V = \frac{1}{3} h (\sqrt{S_1} \sqrt{S_2} + S_1 + S_2)$
 (但し、上下両端面を相似形と仮定する)



第54図 竪穴住居覆土形成模式図

となる。一方、S I 403におけるVI層の排出土量は 19.6 m^3 となり、S I 117に比べ床面積の広いS I 403の方が少ない。この問題の解決策としてS I 403の南北に隣接するS K 460・461およびS K 462の存在に注目したい。これらの土坑は不整形を呈する大形の土坑D類で、掘形に特徴を見出せないものである。これを葺き土の不足分を補うための採掘坑と考えてはどうであろうか。逆に、地山土排出量の多いS I 117の南側にある異様に小高い周堤は、葺き土を仮置きしていたものが余ったものとも思われるが、想像の域を出ない。

こうして建設された竪穴住居は廃絶された後に、葺き土の落下→周堤の崩壊→柱根の腐植による陥没・自然堆積土の形成の順に埋没していったものと推察される（第54図）。

以上、和泉A遺跡の竪穴住居跡を土葺き屋根と想定し、覆土の形成過程および上屋構造の復元を行った。和泉A遺跡と同様に縄文時代の周堤を伴う竪穴住居跡が検出されている遺跡は、県内では上川村北野遺跡〔高橋1996〕で前期後葉～末葉の大型を含む7軒が検出されているほか、秋田県小坂町はりま館遺跡（前期後葉）〔大野1990〕、福島県会津高田町鹿島遺跡（前期後葉）〔本間1991〕、長野県更埴市屋代遺跡群（中期初頭）〔長野県埋蔵文化財センター1993〕があり、いずれも周堤と覆土との関係を明らかにした上屋の復元が必要であろう。また、周堤は検出されていないものの、岩手県一戸町御所野遺跡では炭化材が大量に出土した焼失住居が土葺き屋根の竪穴住居跡として復元されている〔高田ほか1998 a・b〕。江口志麻氏が指摘するように遺存状態の良好な竪穴住居跡をモデルとし、土層断面から上屋構造を復元する作業が必要〔江口1998〕と考える。

（2）掘立柱建物について

集落内側の柱穴群において合計41棟の掘立柱建物を認定した。その多くが集落中央部側に長辺（主軸）を向けて配列されることを特徴とする。これらの形態および柱穴配列からA～D類に大別し、さらに柱穴本数などにより細分を行っている。ここでは各分類別の特徴と集落内における配列についてみることにする。

a. 各分類別の分布と規模

- A 1 類 i 7棟が確認された。柱穴群北側から東側に多く分布し、西側には1棟と少ない。また、柱穴群の内外縁の偏りは認められない。長軸は $2.5\sim 4.44\text{ m}$ であり、幅が認められる。7棟すべての柱穴の深度を合計して算出した平均値（以下、柱穴平均深度）は 49 cm である。このうち、S B 13は柱穴群の最も内縁にあり、長軸・柱穴規模が他に比べかなり小さい。
- A 1 類 ii 7棟が確認された。柱穴群の南側に多く分布し、北側には1棟のみである。南側では概ね柱穴群の外縁に位置する。長軸は $4.08\sim 7.14\text{ m}$ で幅が認められる。S B 42は柱穴群南側の最も外縁に位置し、規模が最も大きい。柱穴平均深度は 55 cm である。
- A 2 類 i S B 29のみ確認された。柱穴群から外れ、集落東端に位置する。長軸は 2.96 m で、柱穴平均深度は 34 cm である。
- A 2 類 ii S B 28のみ確認された。柱穴群東側の最も外縁に位置する。長軸は 9.5 m で、C 2 類 iiiに次いで大きい。柱穴平均深度は 73 cm である。
- A 3 類 S B 46のみ確認された。柱穴群西側の最も内縁に位置する。長軸は 3.24 m 、柱穴平均深度は 19 cm であり、柱穴規模は小さい。
- B 類 S B 17のみ確認された。柱穴群北側の内縁に位置する。長軸は 5.4 m で、柱穴平均深度は 50 cm である。
- C 1 類 2棟が確認された。いずれも柱穴群東側に存在し、S B 31は最も外縁に位置する。長軸は 5.6

mと8.88mである。柱穴平均深度は57cmである。

- C 2 類 i 6棟が確認された。主要な分布は柱穴群東側と南側に認められ、北側に少ないことが挙げられる。6棟のうち4棟が柱穴群の内縁に位置する。長軸は4.54～5.6mで、ほぼ同じ規模であることが認められる。柱穴平均深度は56cmである。
- C 2 類 ii S B 37のみ確認された。柱穴群南側の最も内縁に位置する。長軸5.14mで、柱穴平均深度は58cmである。
- C 2 類 iii 2棟が確認された。柱穴群東側の内縁に2棟がほぼ平行して存在する。長軸は13.34mと15.28mである。柱穴平均深度は59cmである。
- C 3 類 i S B 25のみ確認された。柱穴群東側の内縁に位置する。長軸は5.28mで、柱穴平均深度は61cmである。
- C 3 類 ii S B 40のみ確認された。柱穴群南側の最も外縁に位置する。長軸は6.4mで、柱穴平均深度は51cmである。
- D 類 10棟が確認された。柱穴群北側に集中し、分布状況に特徴を見出すことができる。S B 30は集落外に位置する。長軸は3.08m～4.3mで、ほぼ同じ規模を有する。柱穴平均深度は35cmである。

b. 掘立柱建物の分布

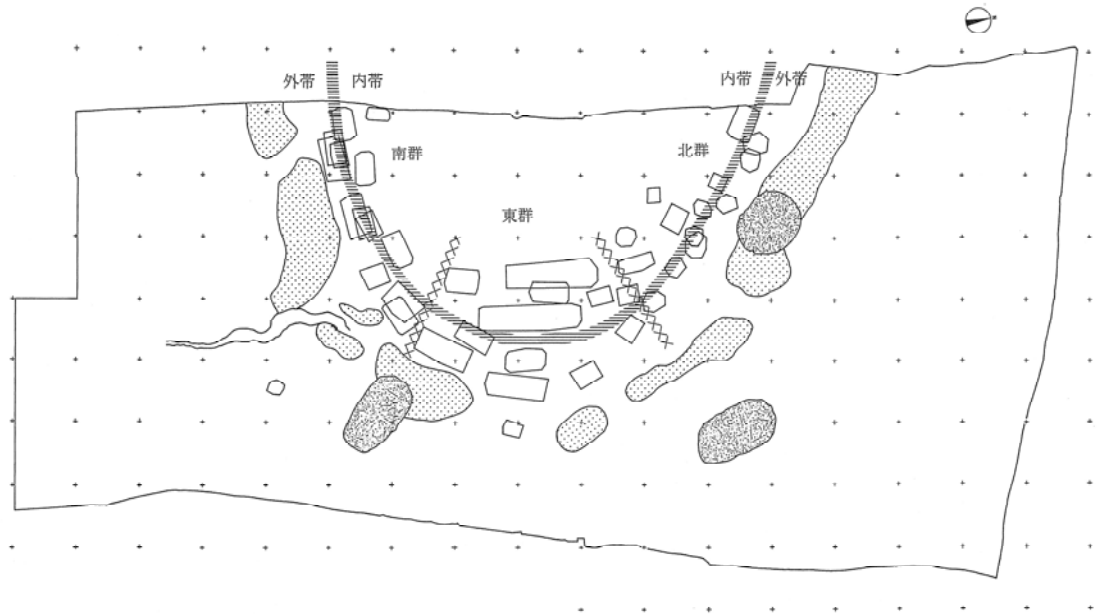
以上、各分類別の分布に特徴を読み取ることができた。これらをまとめると次の通りになる。

- ①D類は柱穴群の北側に分布し、主にその外縁側に位置する。
- ②A 2 類 ii・C 1 類・C 2 類 iii・C 3 類 i は柱穴群の東側に分布する。C 2 類 iiiは柱穴群の内縁側に、A 2 類 ii・C 1 類は外縁側に位置する。
- ③A 1 類 ii・C 2 類 ii・C 3 類 ii は柱穴群の南側に主に分布する。特に、A 1 類 ii・C 3 類 ii は柱穴群の外縁側に位置する。
- ④柱穴群の内縁側には、C 2 類 i (S B 6・33・41・45)・C 2 類 ii (S B 37)・C 3 類 i (S B 25) が位置する。特に、他のピットと重複が少ないものが多い。また、それらの主軸長は4.54～5.28mとほぼ同規模である。
- ⑤柱穴群の最も内縁側には、A 1 類 i (S B 13)・A 3 類 (S B 46)・D 類 (S B 18) など柱穴規模の非常に小さいものが位置する。また、S B 13・46の主軸方向は付近のA～C類と異なり、中央部に対し直交しない。

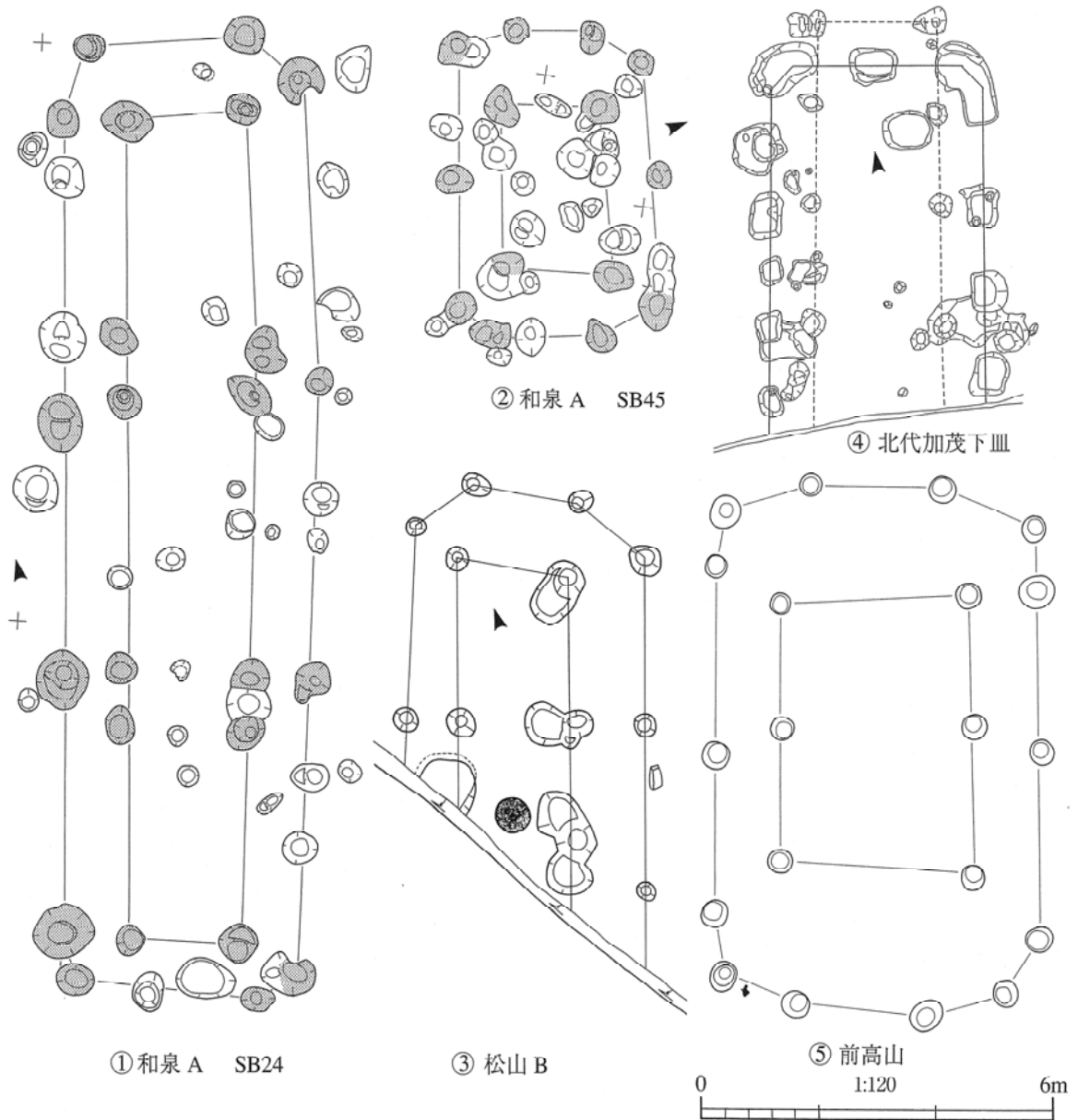
①～⑤でまとめた通り、掘立柱建物の分布は北・東・南側で大きく異なることが明らかとなった。また、柱穴群の内縁側と外縁側においても掘立柱建物の分布が異なることも指摘できた。よって、これらの特徴に掘立柱建物の主軸方向を加味することにより、掘立柱建物を第55図のように三群に分割することが可能と考える。それぞれを北群・東群・南群と名付けたい。さらに、掘立柱建物の内縁側を内帯、外縁側を外帯と呼称したい。

北群は外帯でD類が占める。D類は長方形を基調とするA～C類と異なり、主軸方向が一様でない。また、ピットの重複が著しい。内帯ではS B 6・9・12の主軸方向が真北から西に45～53度傾き、ほぼ類似した値を示す。ただし、S B 17は真北から西に2度傾き、東群のものと近い値を示す。内帯よりさらに内側にはS B 13・18を含む小ピットが点在する。

東群は幅が最大約23mに広がり、内外帯とも掘立柱建物が二列に並ぶ部分がある。外帯では各掘立柱建物の主軸が集落中央部側を向き、弧状を呈する。外帯の外側にはC 2 類 iiiに次いで大形のS B 28・31が配列さ



第56図 掘立柱建物群の分割案



第57図 掘立柱建物C類の類例

れるのが特徴である。内帯ではS B 23・25・33の主軸方向が真北から東側に16～24度傾き、ほぼ類似した値を示す。そして、C 2類iiiが並列することを最大の特徴とする。全体的に柱穴の重複は少ない。

南群はS B 36・46を除き、主軸方向がほぼ一定である。外帯でA 1類iiが主体を占めるほか、A 1類i・C 1類・C 2類iが含まれる。このうち、長軸が6mを超える一回り大きいS B 40・42を含む。柱穴の重複が著しい。内帯ではC 2類i・C 2類iiがある。柱穴の重複が少ないのが特徴である。

c. 掘立柱建物C類について

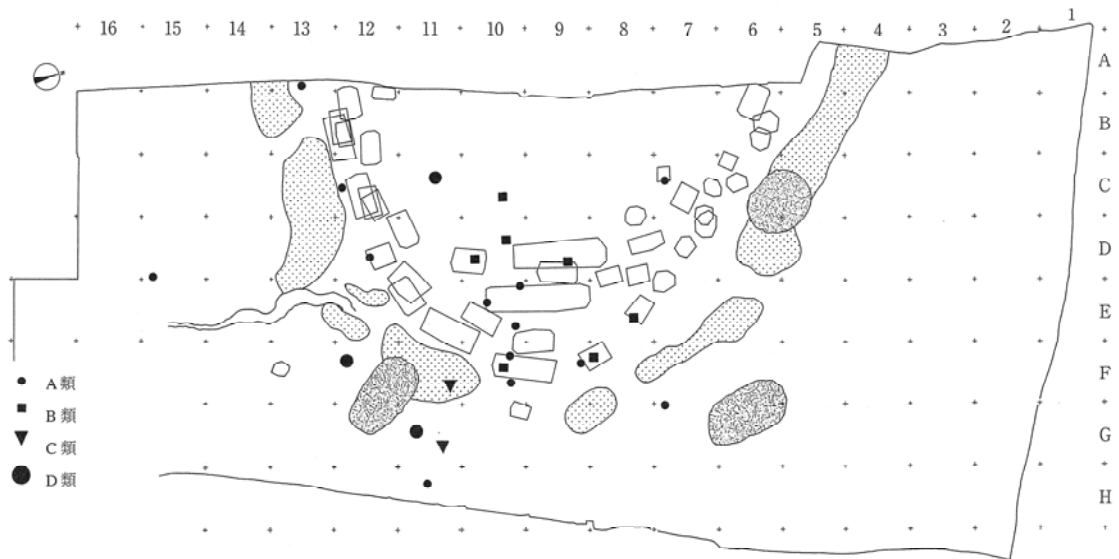
確認された41棟の掘立柱建物のうち、13棟は柱穴が二重に配列されるC類である(第57図)。このC類に類似するものとして、石井寛氏が掘立柱建物を集成し分類されたうちのD群[石井1989]を挙げられる。D群の分布は神奈川県を中心に東京都でも検出され、その数は40例以上に及ぶ[石井1995]。いずれも中期の所産とみられる。なかでも、中期前葉に位置づけられる横浜市前高山(池辺第10)遺跡では長軸10m前後の大形のものが10棟検出されている[石井1989]。また、中期中葉の横浜市神隠丸山遺跡でも竪穴住居跡群より内縁において数棟が検出されている[石井1989]。一方、北陸地方では富山市北代加茂下Ⅲ遺跡で柱穴が二重に巡る掘立柱建物が検出され、中期前葉に位置づけられている[堀沢1996]。しかし、こうした例は現在では関東と北陸の一部でしか検出されているに過ぎない。和泉A遺跡例はこれらの中でも古相を示し、その出自を検討する上で重要と考えられる。石井氏は新井市松山B遺跡例(中期初頭)[高橋1990]を取り上げ、北陸地方に分布する小判形大型住居跡とD群との構造上の関連を指摘している[石井1995]。ただし、松山B遺跡例は地床炉を伴い、内周柱の深度が深く、外周柱はこれに比べ浅いことから、張出柱を除き外周柱が深い和泉A遺跡例とは異なる。前高山・北代加茂下Ⅲ遺跡例は柱穴深度等の詳細が不明であるが、東京都多摩ニュータウンNo.471遺跡例では張出柱を除き内周・外周柱とも同様に深く、和泉A遺跡例と類似する。柱穴深度は上部構造と密接に関連するものと考えられることから、柱穴規模を含めた検討が必要であろう。

(3) 土坑について

本遺跡では、前述した通りA～D類がある。ここでは土坑の性格について若干の検討を加えてみたい。

はじめに、各土坑の特徴をまとめる。各土坑の分布は第58図に示す通りである。A類は13基が検出され、S K 269・1343・1372を除き、柱穴群と重なる。配置や形状に規則性は認められない。また、出土遺物は少なく、特徴は見出せない。覆土は自然堆積を示すものが多く、出土した遺物の多くは廃絶後の投棄によるものと考えられる。B類は柱穴群の内側にあるもの(S K 838・917・951・952 b)と外側にあるもの(S K 123・432・477)とに分類することが可能であり、前者をB類i、後者をB類iiとする。B類iの特徴は、地山土の混入する砂質土で人為的に短期間に埋め戻されていることである。また、S K 838では石棒や搬入礫が埋められており、その性格を知る手掛かりとなる。一方、B類iiの特徴は掘立柱建物の短辺付近と重複することである。覆土は黒色土ないし黒褐色土中に遺物・礫が投棄されている。ただし、S K 123は覆土下半が地山土を含む砂質土で短期間に埋め戻された可能性が高く、むしろB類iiと共通する。C類は規模や形状から陥し穴状土坑と考えられる。覆土は地山土を含む砂質土と黒色土とが自然堆積により互層となり、最上部の窪みにのみ遺物が投棄されている。このことから、廃絶後、ある程度の期間をおいてから遺物の投棄が行われたとみることができ、C類が集落形成以前に帰属する可能性が高いものとする。D類は前述した通り、S I 403の建設時に屋根の葺土採取のために掘削されたものと考えた。

他の遺跡の事例を見ることとする。塩沢町五丁歩遺跡[高橋ほか1992]や岩手県西田遺跡[佐々木1980]など典型的な環状集落では、居住域の内側に土坑墓が認められる場合が多い。西田遺跡の土坑は隅丸長方形



第58図 土坑分布図

を呈し、集落内側に放射状に配列する規則性を認めることができる。また、五丁歩遺跡では居住域にある長方形住居跡の長軸延長線上に土坑が位置することが明らかにされ、土坑と長方形住居跡との関連が指摘されている [高橋1992]。五丁歩遺跡の土坑は形態や覆土の状況からⅠ・Ⅱ・Ⅲ類に分類されている。報文から引用すると、Ⅰ類は「方形に近い平面形をもち、掘り方も垂直に近く、底面が平らなものである。…長軸120～150cm、深さ40～60cmである。いずれも自然堆積土ではなく、地山粒（ローム）を多く含んでいる層が見られることが特徴である。」とし、長軸方向や深さによりⅠa・Ⅰb類に分類できるものの、同一規模形態をとり、覆土も類似するとされる。上端長径112～150cm、深さ26～110cmを測り、平均深度は54cmである。Ⅱ類は「…Ⅰ類のように方形にはないものの楕円形で、やや細長いものである。土坑の多きさ・深さ等はⅠ類と類似する。また、堆積状況も同様である。」としている。上端長径118～150cm、深さ20～60cmを測り、平均深度は37cmである。Ⅲ類はⅠ・Ⅱ類以外のもので、Ⅰ・Ⅱ類と同様の深さのものとこれより深いものがある。そして、Ⅰ～Ⅲ類のうち集落内にあるものは墓坑の可能性が高いとしている。同様に典型的な環状集落である掘之内町清水上遺跡の集落1 [寺崎ほか1996] では、集落中央部に土坑があるものの、五丁歩遺跡ほど数は多くなく、むしろ居住域内およびその外縁から多数検出されている。こうした居住域付近に位置する土坑については、住居跡と関連する可能性があると考えられている。しかし、居住域の内側にあるものには五丁歩遺跡Ⅰ・Ⅱ類と同様に短期間に埋め戻された状況を示すものが含まれており、一様ではないものと思われる。

五丁歩遺跡の事例と和泉A遺跡とを対比させた場合、B類iが五丁歩遺跡Ⅰ・Ⅱ類と形状・覆土の点で類似する。また、清水上遺跡の居住域内にある土坑の一部が墓坑の可能性があるとすれば、和泉A遺跡の土坑のあり方と共通するものといえよう。和泉A遺跡SK838から石棒が出土していることを加味すると、B類iは墓坑の可能性が高いものと推察される。B類iiについては、竪穴住居跡と同様に掘立柱建物に付属する土坑とも推測できるが、掘立柱建物の上屋構造とも関連するためさらに検討が必要と考えられる。A類についても深度が深めものは居住域に伴う貯蔵穴と考えられるが、不明といわざるを得ない。和泉A遺跡では五丁歩・清水上遺跡と異なり、フラスコ状土坑など貯蔵穴と思われる土坑が明確でない。仮に、A類・B類iiがそうであったとしても、数的に少なすぎるものと思われる。集落全体を調査していないため別地点に集中していることも考えられるが、集落構成を考える上で重要な検討課題として残る。

(4) 集落の構成

集落の構成についてまとめたい。集落は、内縁に掘立柱建物群、外縁に環状廃棄遺構と竪穴住居により構成される。

中期前葉の土器はⅠ～Ⅲ期の変遷が認められている。各竪穴住居の構築時期は、S I 117がⅠ期、S I 403がⅡ期以降、S I 120は出土土器が少ないもののⅢ期の可能性が高いものと考えられる。各廃棄ブロックではⅠ～Ⅲ期のものが出土していることから、掘立柱建物も同様にⅠ～Ⅲ期まで継続して構築されたものと推察される。よって、各竪穴住居と掘立柱建物の一部が同時期に営まれていた可能性は高いものとする。ただし、柱穴群から出土した遺物はごく少量であるため、各掘立柱建物の所属時期は不明といわざるを得ず、各竪穴住居との組み合わせを見出すことはできない。

掘立柱建物群と環状廃棄遺構は平行して存在し、柱穴群と廃棄ブロック間で土器の接合関係が認められるなど、密接な関係が窺える。廃棄ブロックに含まれる土や礫は、柱穴群の掘削により排出されたものと推察される。各廃棄ブロックでは多量の土器・石器のほか、炭化ケルミなどの食物残滓も検出されている。しかし、祭祀遺物など特殊性の認められるものは少ない。これより、掘立柱建物の多くが生活の場となっていたことが推察される。また、貯蔵穴とみられる土坑が少ないことから、貯蔵施設としての機能も持ち合わせていた可能性も十分考えられる。

掘立柱建物群は、形態分類による分布などから北・東・南群に分けることができ、さらに内・外帯に二分される傾向が読み取れる。そのうち東群は、北・南群に比べ柱穴群の幅が広く、大形のものが多ことを特徴とする。特に、C 2類iiiは他のものより際立って規模が大きく、北・南群との機能差を想起させる。

ところで、各期別出土土器をみると、S I 117および廃棄ブロック1・2はⅠ～Ⅱ期のものが多い傾向が窺える。一方、廃棄ブロック6ではⅠ・Ⅱ期のほかにⅢ期のものが多いことが注目される。S I 403においてもⅢ期のものがあることから、集落南側にⅢ期の多寡を認めることができよう。これより、南群側の継続期間が長かった可能性も考えられる。

さらに、石器組成の分析により、集落北側と南側において、石鏃・磨製石斧・砥石の出土量および形態に差が認められている。

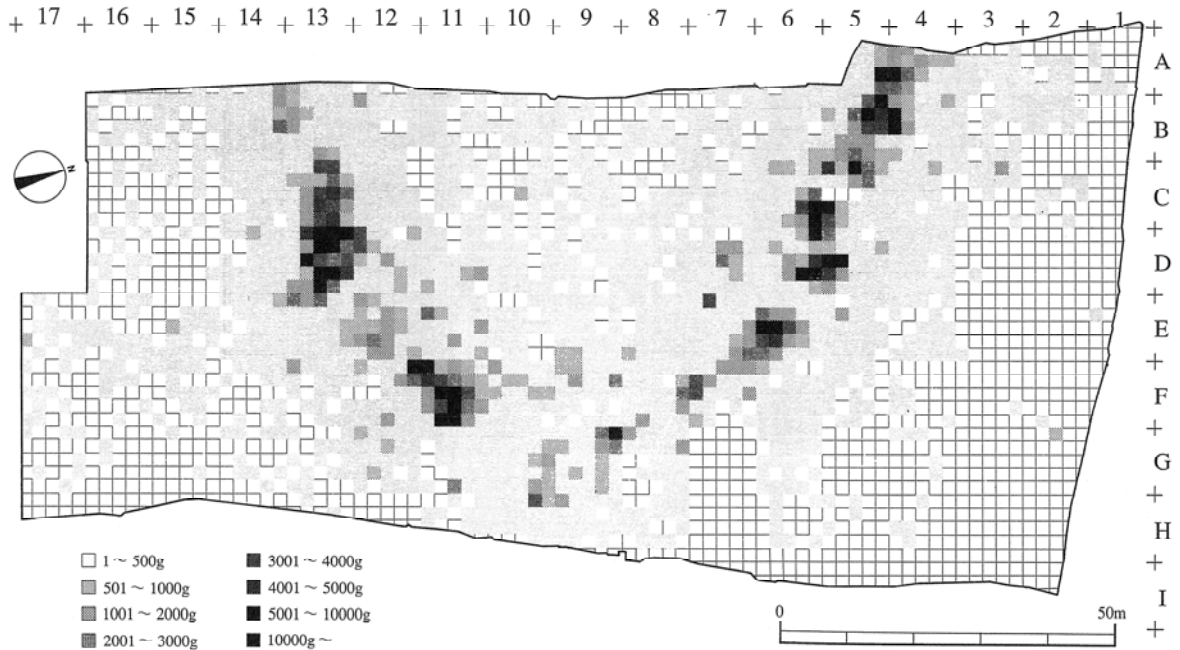
このように、集落北側と南側において掘立柱建物・土器・石器の三者に差が認められることは、集落構成を検討する上で重要と考えられる。遺構・遺物の両面から集落を理解する作業が残る。

2. 遺物

A 土器

(1) 土器の分布 (第59図)

土器の多くは、集落外縁にある環状廃棄遺構から出土している。そのうち、廃棄ブロック1・2・4・6の出土量が極めて多い。各ブロック間は明瞭に途切れている。S I 117・S I 403出土土器の多くは、それぞれ廃棄ブロック1・4と関連するものである。集落内側の柱穴群では土器が極端に少なくなり、中央部に至っては皆無に等しい。環状廃棄遺構の外縁にも若干分布し、特に9～10 G～Hグリッドでやや多めに出土している。S D 405周辺の14～16 E～Fグリッドでは、少量ながら分布の広がりが認められる。



第59図 下層出土土器の重量分布

(2) 記述の方法

下層では質・量とも豊富な土器が出土している。その時期は、縄文時代中期初頭から前葉（以下、中期前葉と呼称する）を主体とし、他に前期終末・中期後葉がわずかに含まれる。ここでは、中期前葉の土器について器形・文様の分類を行い、以下の土器各説においてこの分類を中心に記述することとする。前期終末および中期後葉土器については、中期前葉の記述の後にその都度記述するものとする。なお、中期後葉のものはV層中およびIV層（大田切川火砕流堆積物層）直上で検出されたものを含んでいる。

土器の記載は、遺構出土、廃棄ブロック出土、遺構外出土の順に行った。遺構出土とは、遺構覆土および遺構直上の遺物包含層から出土したものが中心であるが、遺構周辺から出土したものと明確に区分できない

場合はそれらも含んでいる。遺構外出土の遺物は、遺物の出土量が希薄な地点ながらも特に重要と考えられる土器を抽出した。

(3) 図化の方法

作業のスピード化と簡略化を測るために、望遠レンズで撮影した写真をなぞって実測を行った(写真実測)。実測方法は、原寸大もしくは3/4に焼き付けした印画紙をコピーしたものに方眼入りのトレーシングフィルムをかぶせ、トレース台上で光を当てながら鉛筆トレースを行い、断面図を加えるものである。縄文はあらかじめコピー上に施文単位を書き加えて実測した。口径が推測可能な資料については、できるだけ復元実測を試みた。拓本図は原本をコピーして図版に用いた。

図の縮尺

縮尺率は実測図が1/4、拓本図が1/3を基本とするが、文様の細かいもの、小型品の実測図は1/3とした。

図の表現

写真実測を用いたため、断面図は基本的に土器の向かって右側断面を実測して作成した。この断面上にない把手や隆帯を加える場合は、細い線で表現した。右側面に土器片が無い場合、ないし欠ける場合は、任意の位置で断面図を作成ないし合成した。突起や把手が非常に多いものは、複数の断面図で表現した。断面図における「輪積み痕」は破線で示し、欠損部は波形で表した。また、実測図および断面図の実存部分は細線でくくり、推定部分と実存部分の境界は間隔を空けた。突起や把手などが剥落等により欠損していた場合でも、実測図中に推定実線でその形を復元した。

(4) 観察表の記載

図版に掲載したすべての土器について、観察項目を設定し、その内容を一覧表にした。観察項目は以下の通りである。なお、不明なものは空白とした。

出土地点・層位

接合したり同一個体とみなしたすべての破片について、出土した小グリッドと層位を記した。遺構出土の場合は、遺構名と遺構内の層位を記した。

器形・分類

分類の項を参照。

突起

口縁端部に貼付される突起の形状を記した。

竹管幅

半截竹管状工具による沈線文(以下、竹管沈線文と呼称する。)で最も細いものの幅を計測した。

外面(内面)調整・施文等

内外面における器面上のナデやミガキなどの調整と文様を部位別に記した。調整はその方向を「↑」などの矢印で表した。調整と文様を施した順序がわかる場合は、「+」記号を用いてその順序を表した。

法量

器形の外寸を計測し、器高・口縁部径・底部径などをcm単位で記した。

胎土

土器の胎土中には、様々な鉱物を観察することができる。鉱物の種類は石英・雲母・長石が主であり、こ

うした鉱物の有無や比率にはある程度のまとまりを抽出することが可能である。よって、ここでは胎土の特徴を以下のA～G種に分類して観察することとする。これにより、土器の器形や文様の特徴と胎土の特徴を比較することにより、在地および非在地のものを区別することが可能と考えられる。なお、この分類以外の特徴を示す場合は、鉱物の特徴のみを記入した。

- A種 1～3 mmほどの白色粒子を多量に含む。鉱物の量は少なく、長石を若干含む程度である。
- B種 雲母、特に金雲母を非常に多く含むことが特徴である。石英も多めに含む。白色粒子は少ない。
- C種 石英・雲母・金雲母を含むが、B種より少なく、白色粒子も少ない。
- D種 石英を多量に含むことを特徴とする。雲母や白色粒子も多い。
- E種 白色粒子を少量含むほかは、鉱物をほとんど含まない。焼成が不良のものが多い。
- F種 カクセン石を多く含むもの。
- G種 1～3 mmの砂粒を多く含むことを特徴とする。鉱物や白色粒子は少ない。

色調

内外面の色調を標準土色帖〔小山・竹原 1994〕に基づき記した。

炭化物

二次焼成による炭化物の付着について記した。

遺存率

口縁部片から口径を算出し、遺存する率を%で表した。

(5) 分類

縄文時代中期前葉の器形は多様であるものの、特徴の類似するまとまりを見出すことが可能である。また、これらの器形に施される様々な文様は、器面を横位に区画することによって作出された文様帯の内部に施される場合が多い。この文様帯の把握は土器群を理解する上で重要と考える。文様は多種多様であり、そのすべてを取上げることは難しい。ここでは、口縁部に施される文様を重視し、そのなかでも複数の個体に共通して認められる主要をなす文様を取り上げることとする。そして、以上の三点を組み合わせることによって土器の理解を図りたい。

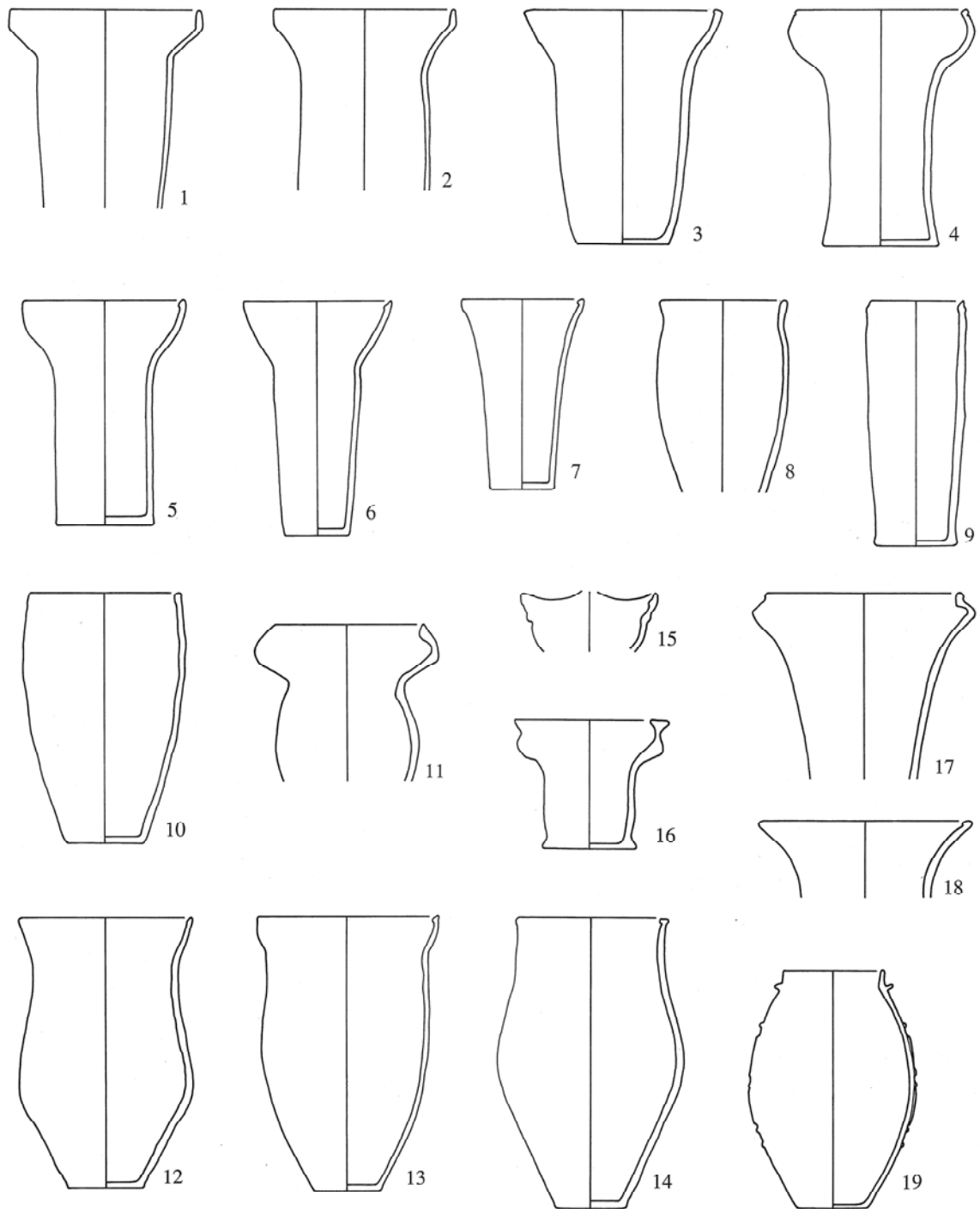
a. 器形

器高が口径より大きいものを深鉢、小さいものを浅鉢と大別する。また、深鉢には口縁部や体部の形態にバリエーションが認められることから、さらに細分を行う。

深鉢 (第60図)

- 1 体部は円筒形をなし、口縁部は体部と明瞭な屈曲をもって直線的に外傾し、口縁部上位が短く直立する。口縁部が内傾ないし直立するものが含まれる。
- 2 体部は円筒形をなし、口縁部は外反ぎみに立ち上がったのちに内傾ないし直立する。
- 3 体部から口縁部にかけて曲線的に短く外傾し、口縁部上位は角度をもって直立ないし外傾する。
- 4 口縁部は丸く内湾してキャリパー状をなす。体部は円筒形をなすものが多い。
- 5 体部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁部上位は丸みをもって直立する。
- 6 器形5とほぼ同じだが、口縁部が直線的に外傾するものを6とする。体部は円筒状をなすもののほか、丸く膨らむものを含む。
- 7 体部から口縁部にかけて屈曲をもたず、緩やかに外傾ないし外反するもの。

VI 下層の調査



第60図 器形分類

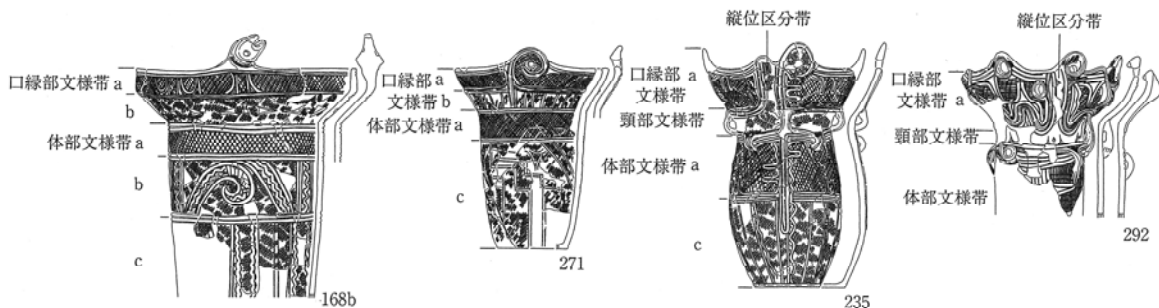
- 8 体部はやや膨らみ、体部上位で緩やかに内反して、口縁部は直立ないし弱く外反する。体部最大径が口径を上回るものと下回るものを含む。
- 9 体部から口縁部への屈曲がなく、口縁部が直立するもの。
- 10 体部がやや膨らみ、口縁部が緩やかに内傾するもの。
- 11 体部は丸く膨らみ、上位で屈曲をもって鋭く外傾した後に、口縁部がキャリパー状に内湾あるいは内傾するもの。

- 12 体部は円筒形ないし丸く膨らむもので、上位で緩く外反したのちに、口縁部が直線的に外傾するもの。体部最大径が口径を下回るものから上回るものまでを含む。大形のものが多い。
- 13 体部は円筒形ないしやや膨らむもので、上位で緩く外反したのちに、口縁部が丸みをもって直立するもの。体部最大径が口径を下回るものからほぼ同じものまでを含む。大形のものが多い。
- 14 体部は丸く膨らみ、上位で内傾したのちに、口縁部が短く直立するもの。体部最大径が口径を上回る。大形のものが多い。
- 15 口縁部の下位が球形に膨らみ、上位はくびれをもって直線的に外傾するもの。体部は円筒状をなすものと思われる。
- 16 体部は短い円筒形を呈し、口縁部は丸みをもって立ち上がり、上端で鋭く外反するもの。口縁端部の幅が広いのも特徴である。
- 17 体部は強く外反して立ち上がり、口縁部は鋭く内屈するもの。
- 18 口縁部が強く外反するもの。
- 19 体部中位が大きく膨んだ後に内傾し、口縁部は体部と屈曲をもって短く直立するもの。

b. 文様帯 (第61図)

縄文時代中期の文様帯については山内清男により論じられている [山内1964]。また、該期の論考においても文様帯の設定について検討されている [山口1978・今村1985・三上1987など]。本稿ではこれらを参考としつつ、設定を試みることにしたい。

文様帯はほとんどすべての器形で見られる。特に、口縁部と体部の境に屈曲を有する器形では、大きく口縁部文様帯と体部文様帯に区別されることが観察できる。口縁部文様帯は、竹管平行沈線文等により上下に二分されるものがあり、上位から口縁部文様帯 a・b とする。二分されず一段構成のものは、口縁部文様帯 a とする。体部文様帯は三分されるものが若干あり、上位から体部文様帯 a・b・c とする。これ以外では、体部文様帯が二分されるものが主体的であり、施文される文様の系統性などから体部文様帯 b が欠如したものと考えられる。よって、二分されるものについては体部文様帯 a・c とする。さらに、口縁部から体部にかけての屈曲部、あるいはそれより下位に装飾の少ない文様帯が横位区画隆帯等によって形成されるものが存在する。これは口縁部文様帯と体部文様帯との中間的な位置にあることから、これを区別して頸部文様帯とする。したがって、口縁部文様帯は口体境の屈曲より上位のものとし、頸部文様帯は同位置かそれより下



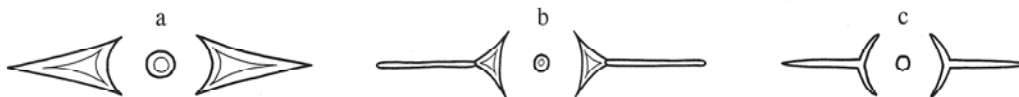
第61図 文様帯の区分

に位置するものとする。頸部文様帯をもつものでは、横位区画隆帯が「W」字状に波状を呈することによって口縁部文様帯と入り組むものがある。また、口縁部文様帯のなかに口縁端部から頸部文様帯まで連なる帯状の区画が形成されるものがある。文様帯ではないが、これを「縦位区分帯」と呼称することとする。

c. 文様

土器に施される個々の文様は、所属時期や系統・地域性を反映するものと考えられる。各文様帯には様々な文様の組み合わせが認められるものの、それらはバラエティーに富み一様とはいえない。よって、土器のおおよその特徴を把握するため、主要をなす特徴的な文様に着目することとしたい。基準とする文様は、口縁部文様帯のものを中心とする。なお、以下に該当しないものも若干存在する。

- A 斜位集合沈線文が施されるもの。波状沈線文が加えられるものも含める。
- B 斜位格子目文が施されるもの。三叉状や「U」字状の竹管沈線文が加えられる場合は、その内部や周辺が彫去される。連続する波状沈線文は施されない。なお、斜位格子目文は、施文手法を記号化して表現することとする。同一原体の竹管沈線文のみで施文されるものを a、竹管沈線文とヘラ描き沈線を併用するものを b、二種類の原体による竹管沈線文によるものを c とする。また、施文順序について、右上がりか後のものを r、左上がりか後のものを l とする。以上の組み合わせについて、「斜位格子目文 b r」などと表記することとしたい。なお、他の分類における斜位格子目文についても、これと同様に表記する。
- C 口縁端部に絡条体圧痕文が施されるもの。口縁部には斜位集合沈線文や斜位格子目文が施される。
- D 斜位格子目文の周囲に「M」字状や「W」字状に蛇行する連続した波状沈線文や、半円状の竹管沈線文が加えられるもの。彫去が加えられない代わりに、ナデ消しが施されるものがある。
- E 格子目文の周囲に D と同様の波状沈線文が加えられるもの。
- F 縦位集合沈線文が施されるもの。D と同様に半円状の竹管沈線文が加えられるものが多い。縦位集合沈線文の施文手法についても、斜位格子目文と同じく同一原体の竹管沈線文のみで施文されるものを a、竹管沈線文とヘラ描き沈線を併用するものを b、二種類の原体による竹管沈線文によるものを c とする。
- G 半円状の竹管沈線文の内部に斜位格子目文が充填されるもの。
- H 半円状の竹管沈線文の内部に縦位集合沈線文が充填されるもの。
- I 口縁部文様帯の周囲に「U」字状や波状の竹管沈線文が施されるもの。斜縄文や撚糸文を地文とする場合が多い。
- J 口縁部文様帯で等間隔に縦位平行沈線文が施されるもの。斜縄文や撚糸文を地文とする場合が多い。
- K 口縁部文様帯に縦位の三角形彫去文が施されるもの。斜縄文や撚糸文を地文とする場合が多い。三角形彫去文は施文手法により大きく三種が認められる（第 62 図）。三角形の内部をすべて彫去するものを a、彫去した三角形の頂点にヘラ描きによる長い沈線が加えられるものを b、すべてヘラ描きで沈線化したものを c とする。



第 62 図 三角形彫去文の分類

- L 「W」字状などの区画隆帯の内部に斜位格子目文が施されるもの。
- M 「W」字状などの区画隆帯の内部に格子目文が施されるもの。

- N 「W」字状などの区画隆帯の内部に縄文や三角形彫去文が施されるもの。
- O 横位の玉抱三叉文が施されるもの。三叉文の施文手法は、文様Kの三角形彫去文と同様に三角形の内部をすべて彫去するものをa、彫去した三角形の頂点にヘラ描きによる長い沈線が加えられるものをb、すべてヘラ描きで沈線化したものをcとする。
- P 爪形文が施されるもの。沈線内に施されるものや隆帯上に施されるものなどを一括する。
- Q ヘラ描きによる短沈線文や平行沈線文・弧状沈線文が施されるもの。
- R 蓮華文が施されるもの。彫刻的・非彫刻的なものを一括する。
- S ヘラ描きによる縦位の短沈線文（いわゆる「基軸文」）上に竹管平行沈線文が施されるもの。
- T 間隔を置いて縦位の竹管平行沈線文が施されるもの。
- U 縄文が施されるもの。
- V 無文のもの。
- W 鋸歯状沈線文が施されるもの。
- X 棒状工具により幅の広い弧状沈線文が施されるもの。
- Y 有節沈線文が施されるもの。
- Z 斜行沈線文が施されるもの。

d. 口縁部内面の仕上げ（第63図）

中期前葉の土器では、口縁部内面に特徴を見出すことができる。口縁部内面が肥厚しないものや、端部が内面側につまみ出されるものがあり、これを1とする。粘土を貼り付けずに端部内面を半截竹管状工具で整えるものも1に含める。口縁端部のやや下側に粘土を貼りつけて、その上を半截竹管状工具で押し引くものがあり、これを2とする。さらに、口縁端部と2の押し引き文との間に縄文を施すものがあり、これを3とする。



第63図 口縁部内面の分類

(6) 器形と文様の組み合わせ（第64～68図）

次に、上述した器形と文様の組み合わせについて代表例を挙げてみることにする。また、その文様帯構成についても特徴を挙げていきたい。なお、ここで扱う土器は図版中に掲載したものであり、掲載しなかった土器を含んでいない。よって、器形と文様の組み合わせには下記以外のものがあることをあらかじめ断っておく。

器形1 1Bに限定される。体部文様帯がa・b・cの3段構成になるもの(168)と、a・cの2段構成になるもの(200)がある。168は口縁端部に獣面突起が付される。また、口縁部文様帯bで深い彫去による玉抱三叉文aや三角形彫去文aが施されることが特徴で、体部文様帯cには羽状沈線文が施される。200は口縁部文様帯bに橋状把手が貼付される。口縁部内面はすべて1である。胎土はC種が主体を占める。

器形2 2A・B・C・E・F・Pが認められる。2Aでは口縁部文様帯a・bおよび体部文様帯a・cで構成されるもの(274)と、口縁部文様帯以外の文様帯をもたず、装飾が乏しいもの(269)がある。前者では口縁部文様帯bに縦位平行沈線文が描かれるもののほか、斜位集合沈線文が施されるものがある。

VI 下層の調査

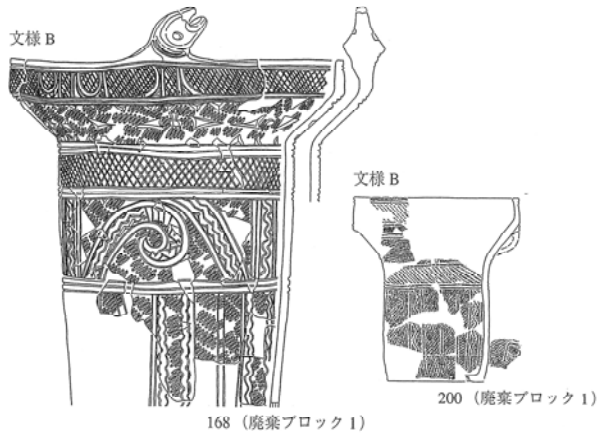
胎土はB・C種が主体的である。2 Bでは口縁部および体部の各文様帯をもつもの(270)が主体的であり、頸部文様帯をもつもの(173)は少ない。173は縦位および横位区画隆帯が施されることが特徴である。胎土はB・C・D種が認められる。2 C(89)では口縁部文様帯bに縦位平行沈線文が施されるものが主体を占める。また、橋状把手が貼付されるものも散見される。胎土はG種である。2 E(375)は口縁部文様帯bをもち、縦位集合沈線文が施されるものと考えられる。胎土はD種である。2 F(231)は口縁部文様帯a以外に文様帯をもたず、体部に縦位の波状沈線文などが施されることが特徴である。胎土はC種である。2 P(177)は口縁部文様帯a・bに分かれるものと考えられ、口縁部に瘤状突起が貼付されることが特徴的である。胎土はB種である。口縁部内面は、375が2であるのを除き、1が主体を占める。

器形 3 3 A・B・Dが認められ、文様の種類が限定されている。このほか、Eとみられる小破片(368)が出土している。3 A(309)では口縁部文様帯a・b、体部文様帯a・bをもち、口縁部および体部に斜位格子目文が施される。口縁部文様帯bには縄文が施されるものや無文のものも多く、橋状把手が貼付されるものもある。3 Bでは体部文様帯a・b・cの3段構成になるもの(32)が若干あるほかは、a・cの2段構成になるものが主体的である。32は口縁部文様帯bに玉抱三叉文aが施されるものとみられ、器形1 Bの168と共通する。体部が2段構成のものは、口縁部文様帯bに縦位平行沈線文(271)、縄文(71)が施されるほか、無文のもの(276)も多い。また、橋状把手は体部文様帯aに連結するもの(276)と連結しないものがある。このほか、縦位隆帯文(271)が貼付されるものがある。体部文様帯cでは、「L」字状沈線文(276)や階段状沈線文(271)が施されるものが目立つ。71の体部文様帯aでは斜位格子目文に波状沈線文が加えられ、文様Dと共通する。口縁部内面は1が主体を占める。3 D(128)は口縁部文様帯aに橋状把手が貼付されるほか、口縁部文様帯bに带状隆帯が施される。胎土はB・C・D種が主体的である。

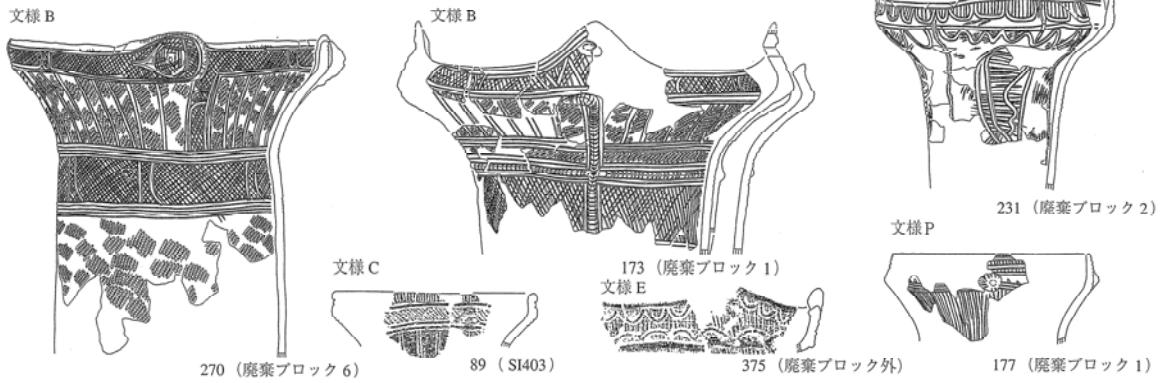
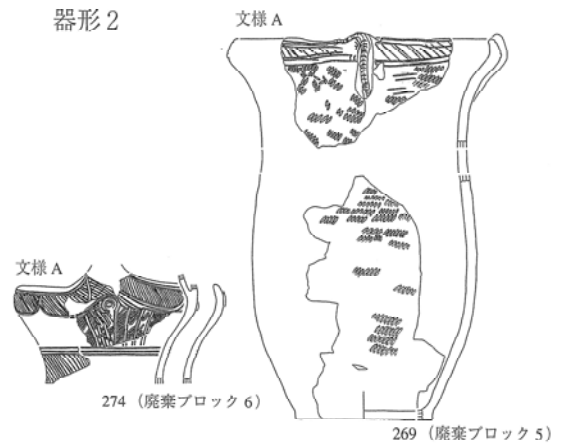
器形 4 4 E・O・R・S・Tが認められる。4 E(122)は口縁部文様帯a・bをもつものと考えられる。口縁部内面は2が認められる。胎土はA種が認められる。4 O(214)も口縁部文様帯a・bをもつもので、玉抱三叉文aが上下逆方向に施される。口縁部内面は1である。胎土はD種である。4 Rは口縁部文様帯a・bに二分されるもの(1)と、口縁部文様帯の中に無文帯を有するもの(133)がある。1は体部文様帯a・cがあり、平行沈線文や波状沈線文で満たされる。133は口縁部無文帯の上下に蓮華文のほか三叉文bが施される。また、いずれも口縁部に渦巻状隆帯文が貼付される。4 S(232)・4 T(233)も4 Rと同様に口縁部文様帯中に無文帯を有する。233は体部に木目状撚糸文が縦位に施されることが特徴的である。4 R・4 S・4 Tの口縁部内面は1ながら、口縁端部が内面側につまみ出されるものが多い。また、胎土もG種で共通する。

器形 5 5 A・B・C・E・F・G・H・I・J・K・L・M・N・Q・Uが認められ、文様の種類に幅があることが明らかである。5 Aは口縁部文様帯aと体部文様帯aの間に頸部文様帯をもつもの(284)と、口縁部文様帯より下に文様帯をもたないもの(349)がある。284は口縁部の斜位集合沈線文に楕円状沈線文が加えられるほか、瘤状突起が貼付される。349は口縁部下位から体部にかけて木目状撚糸文が施される。口縁部内面は1・2がある。胎土はB・C・D・E・Gとバラエティーが認められる。5 Bは5 Aと同様に頸部文様帯をもつもの(277)と口縁部文様帯より下に文様帯をもたないもの(67)がある。前者では口縁部に縦位隆帯文や突起が貼付されるものがあるほか、口縁端部に環状突起が発達するものもある。口縁部内面は1が主体的である。胎土はB・C種が認められる。5 C(64)は口縁端部のほか

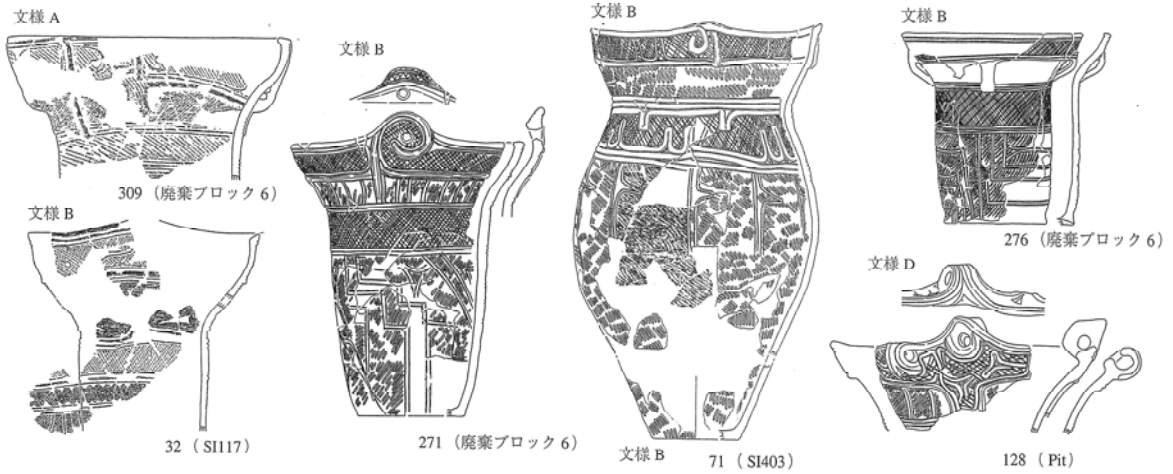
器形 1



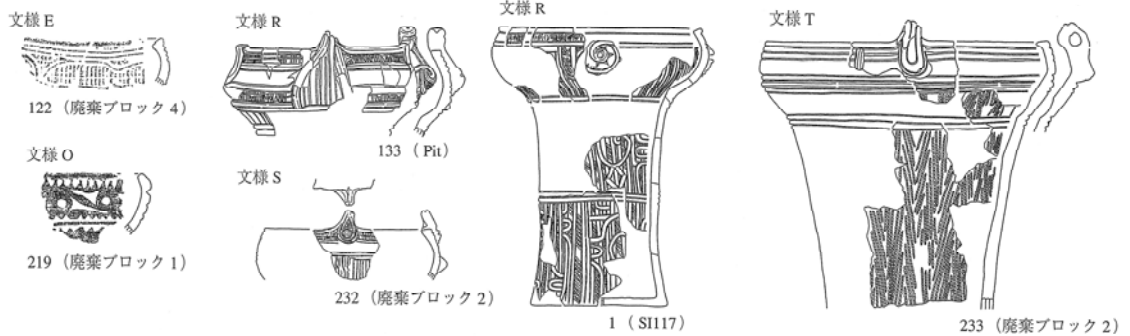
器形 2



器形 3



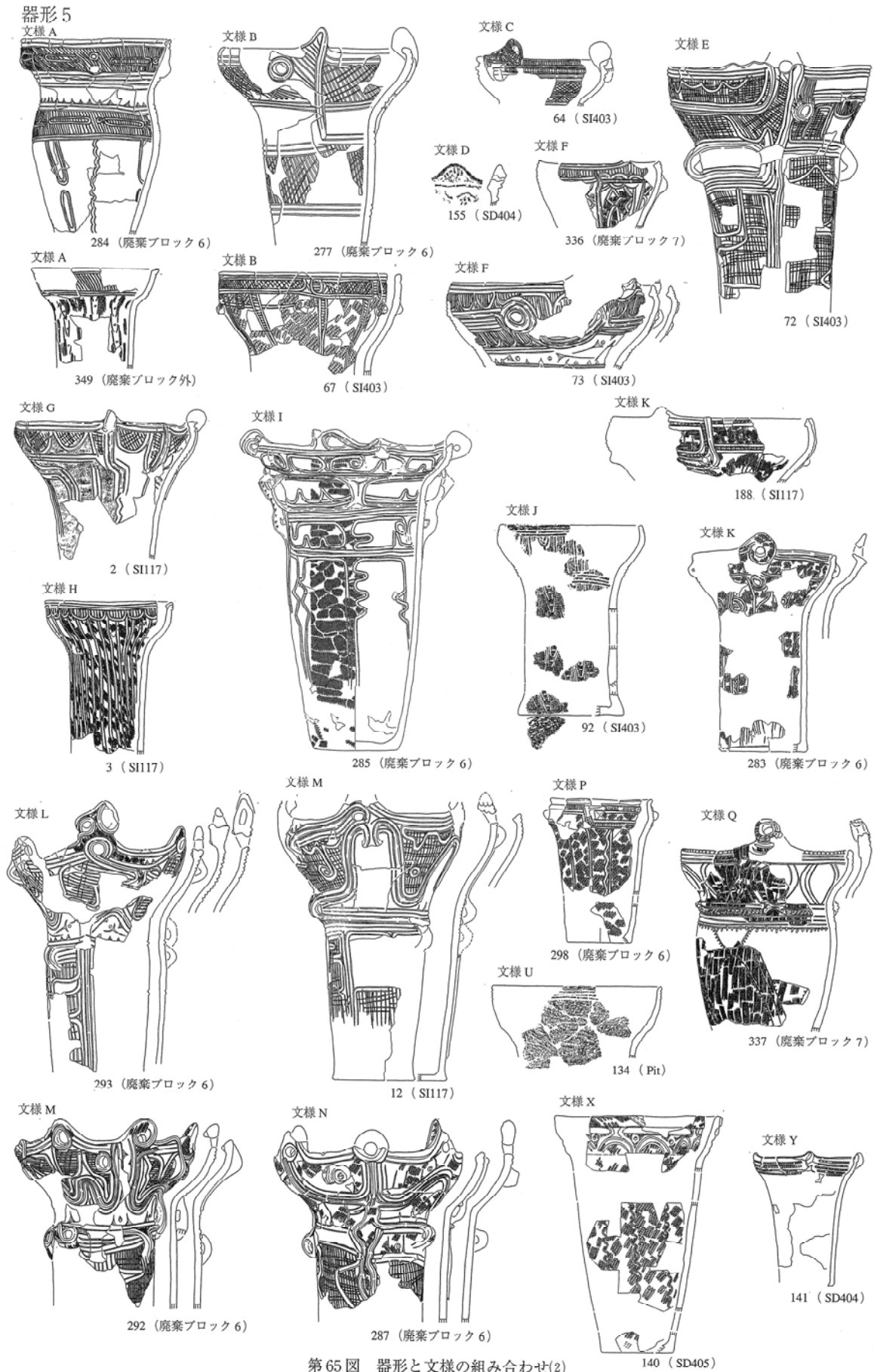
器形 4



第 64 図 器形と文様の組み合わせ(1)

口縁部上位の隆帯文上にも絡条体圧痕文が加えられる。口縁部内面は1が占める。胎土はG種であり、2 Cと共通する。5 D (155) は口縁部に加えられた波状沈線文の縁辺が彫去される。口縁部内面は2・3が主体的である。胎土はC種が認められる。5 E (72) では口縁部文様帯 a・b を保持しつつ、部分的に頸部文様帯が形成される。口縁部には縦位区分帯も認められる。頸部文様帯ないし体部上位には橋状把手が貼付され、体部は縦位隆帯文の貼付により横位区画されない。口縁部内面は1・2が認められる。5 F は5 A・5 Bと同様に頸部文様帯をもつもの(73)と、口縁部文様帯より下に文様帯をもたないもの(336)がある。73は口縁部に横位区画隆帯と環状隆帯文が貼付されるほか、頸部文様帯に玉抱三叉文 b が施される。336は口縁部に縦位隆帯文の貼付が特徴的である。口縁部内面には1と2がある。胎土はA・C・Dが認められる。5 G (2)・5 H (3)・5 J (92)・5 K (283)・5 P (298) は、口縁部文様帯より下に文様帯をもたないものが主体を占める。体部には縦位平行沈線文(2・3)、木目状撚糸文(92)、波状沈線文(283)など縦位方向の装飾を主とする。また、2・188は口縁部や体部に隆帯文が貼付される。口縁部内面は1～3があるものの、2が主体的である。胎土はA・C・D種が主体を占める。5 I (285) は口縁部、頸部、体部 a・c の各文様帯をもつ。口縁部には大振りな耳状や環状突起が付され、頸部文様帯の上下にある横位区画隆帯は橋状把手で連結される。口縁部内面は2である。5 L・5 M・5 Nは、口縁部文様帯と頸部文様帯とを区画する隆帯が「W」字状など大波状を描くことにより、口縁部文様帯と頸部文様帯とが入り組むことが特徴である。また、口縁部上位から頸部まで伸びる縦位区分帯をもつもの(292)がある。体部は縦位区画隆帯により分割されるものが多い。これらには、口縁部文様帯に橋状把手が貼付されるものの、頸部文様帯や入り組む部分の装飾が乏しいもの(12)と、口縁部文様帯に環状突起のほか、形が橋状把手に類似し内部の貫通しないもの(以下、橋状突起と呼称する)など様々な突起が貼付され、頸部文様帯や縦位区分帯に三角形彫去文などの装飾が加えられるもの(293・292・287)の二者が認められる。後者では体部上位にリボンの形に似た突起(以下、リボン状突起と呼称する)や橋状把手が多数貼付されることも特徴であり、格子目文にc種が用いられることも注目される(292)。口縁部内面は2ないし3で、1は確認されていない。胎土はA・C・D種が主体的である。5 P (298) は口縁部の隆帯文上に爪形文が加えられるもので、体部は文様帯をもたず縦位に平行沈線文が施される。5 Q (337) は口縁部文様帯が横位区画隆帯により体部と区画される。端部に爪形文が施されるほか、地文に撚糸文が縦位に施されるのが一般的である。口縁部および体部にはヘラ描きによる弧状沈線文が描かれるほか、沈線沿いや隆帯上にも短沈線文が加えられる。また、口縁部に橋状突起が貼付されるものも認められる。口縁部内面は1ないし2で、2が主体的である。胎土はA・B・D・E種が認められる。5 U (134) は縄文以外の装飾が乏しく、各文様帯が形成されないのが一般的である。5 X (140) は口縁部に無文帯を有し、その下に棒状工具による彫りの深い玉抱三叉文や弧状沈線文が施される。体部に結節縄文が縦位に施されることが特徴である。5 Y (141) は口縁部に有節沈線文が施される。胎土は一般的なものではない。

器形 6 6 A・B・D・E・F・H・I・J・K・L・M・O・P・S・U・Vが認められ、器形5と同様に多様な文様が施される。6 A (176) は全形を知りうるものがないため、文様帯の様相は不明だが、5 Aと同様に頸部文様帯をもつものがあるようである。6 Bは頸部文様帯をもつもの(5)ともたないもの(65)の二者が存在する。また、両者とも体部文様帯をもつものともたないものがある。前者では口縁部端部に大振りな環状突起が付されたり、体部に縦位隆帯文が施されるものがある。後者は口縁部文様帯が二分されず、隆帯文の貼付が認められる。口縁部内面は1・2が認められる。胎土はA種が主体的

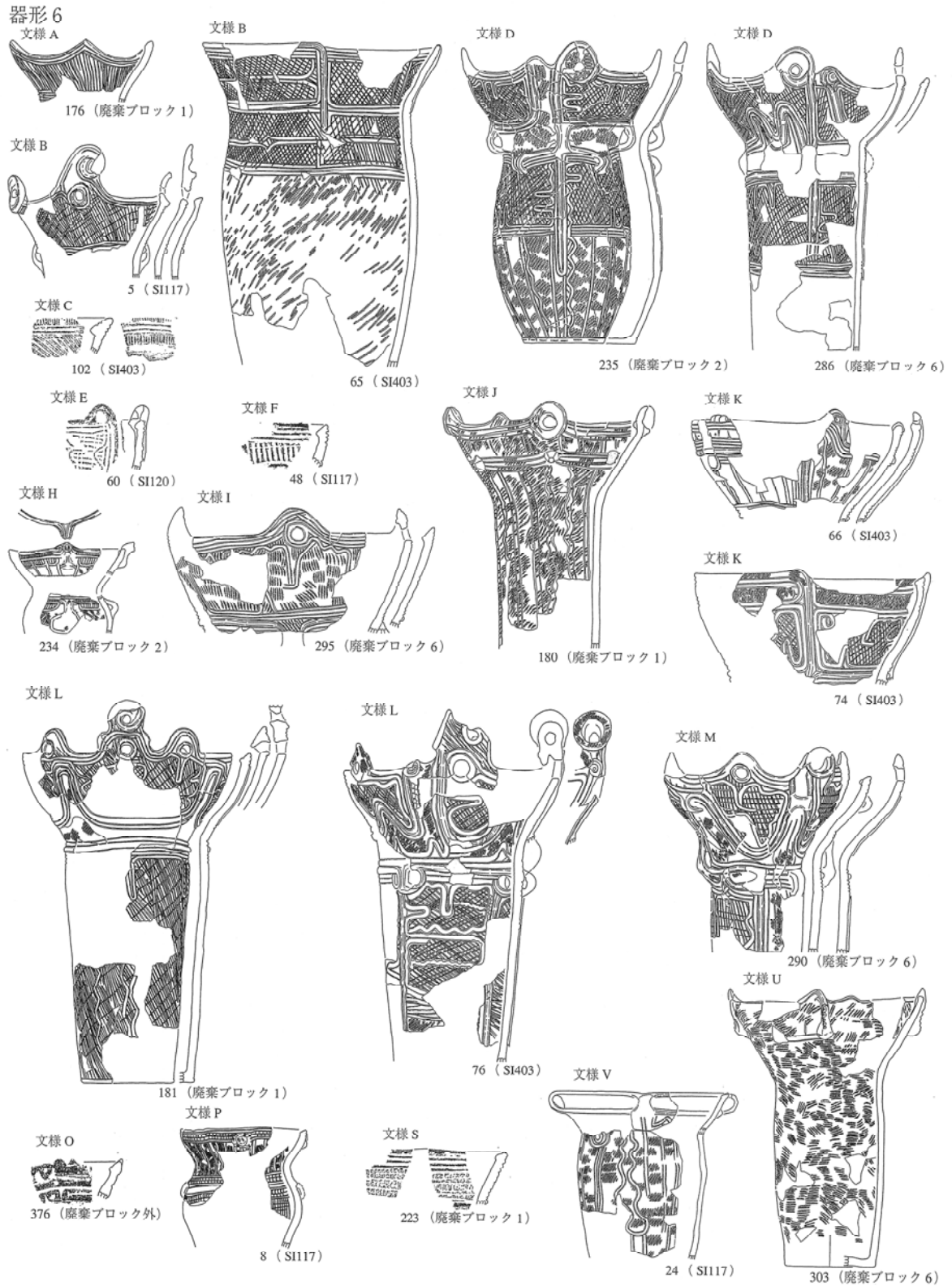


第 65 図 器形と文様の組み合わせ(2)

VI 下層の調査

である。6 C (102) は口縁端部に絡条体圧痕文が施され、口縁部に斜位集合沈線文が施されるほか、肥厚する口縁部内面にも集合沈線文が描かれるものである。6 D (235・286) は口縁部、頸部、体部 a・c 各文様帯をもつ。このほか、体部文様帯をもたないものがある。口縁部文様帯が縦位区画隆帯により四分割されるものが多く、縦位区分帯が形成されるもの (235) や、横位区画隆帯が部分的に「M」字状に入り組むもの (286) が認められる。体部に貼付される縦位隆帯文は 1 条のみである。また、頸部および体部上位に発達する橋状把手も注目される。口縁部内面は 1～3 がある。胎土は A 種が主体的である。6 E (60)・6 F (48)・6 H (234) はいずれも口縁部内面が 2 である。234 は口縁部および頸部文様帯をもつようである。6 I (295) は 5 I と同様に頸部文様帯をもつものと考えられ、口縁端部に環状突起が付される。口縁部内面は 1・2 がある。6 J (180) は 5 J と同様に口縁部文様帯より下に文様帯をもたないものが主体的である。口縁端部に環状突起が付されるほか、口縁部に瘤状突起が貼付される点も 5 J に類似する。口縁部内面は 2 が主体的である。胎土は C 種が認められる。6 K (66・74) は口縁部文様帯 a・b が形成され、縦位区画隆帯によりさらに四分割される。口縁部文様帯 b には平行沈線文が施されるもの (66) と斜位格子目文に波状沈線文が加えられる文様 D が施されるもの (74) がある。口縁部内面は 2 が主体的である。6 L (181・76)・6 M (290) は 5 L・5 M・5 N と同じ特徴を有し、6 L では頸部の装飾が乏しいもの (181) と、頸部および縦位区分帯の装飾が豊かで、口縁部から体部上位に各種突起が発達するもの (76) が認められる。また、76 では格子目文 c 種が用いられることも 5 N と共通する。口縁部内面は 2 ないし 3 である。6 O (376) は口縁部に玉抱三叉文 c が施されている。6 P (8) は頸部文様帯の位置が体部側に下がり、体部上位にある無文帯は頸部文様帯とも考えられる。6 S (223) は縦位の細い短沈線文にヘラ描きによる平行沈線文が加えられる。6 U は横位区画隆帯により頸部文様帯をもつものと、文様帯をもたないもの (303) がある。前者では頸部文様帯に橋状把手が貼付されるのが一般的である。後者では口縁部に縦位隆帯文が貼付されるものがあるほか、口縁端部に絡条体圧痕文が施されるものがある。口縁部内面は 1～3 がある。胎土は A 種が主体的である。6 V (24) は口縁部が横位区画隆帯により区画され、橋状把手が貼付される。体部には波状沈線文などが描かれる。口縁部内面は 2 である。

器形 7 7 A・C・K・L・Q・R・U・V が認められる。このほか、7 J とみられる小破片がある。7 A (202・241) は口縁部文様帯をもち、斜縄文を地文として斜位集合沈線文に波状沈線文が加えられる。体部は縦位の平行沈線文を主体とする。口縁部内面は 1・3 を確認できる。7 C (170) は口縁部文様帯をもち、「L」字状隆帯文条にも絡条体圧痕文が加えられる。体部には網目状撚糸文が施されることも特徴的である。このほかに、体部文様帯をもつものも認められる。胎土は G 種が主体的である。7 K (294) は口縁部文様帯をもち、体部は縦位区画隆帯により四分割される。このほかに、体部文様帯をもたないものがある。口縁部と体部を区分する横位区画隆帯上には、爪形文が加えられるものが多い。また、口縁部文様帯や体部上位に橋状把手が貼付されることも特徴である。口縁部内面は 1・2 がある。胎土は A が主体的である。7 L (10) は口縁部文様帯の下に頸部文様帯に類似する無文帯が部分的に形成されるほか、口縁部に縦位区分帯もみられる。口縁部文様帯の特徴は 6 L に類似する。体部は横位区画がなされず、縦位の波状沈線文などが施される。口縁部内面は 1 である。7 O (130) は体部がやや膨らむ器形で、口縁部・頸部・体部の各文様帯をもつ。頸部は無文帯となり、橋状隆帯が貼付される。口縁部内面は 1 である。7 Q (13) は口縁部文様帯 a・b に区画され、三叉文や短沈線文が施される。体部には



第 66 図 器形と文様の組み合わせ(3)

縦位の波状文や渦巻状文が施される。口縁部内面は2である。7 R (132)・7 T (377) は口縁部に無文帯をもつ。胎土はG種であり、7 Cと共通する。7 U (316)・7 V (22) は、文様帯の区画がみられず、把手や隆帯文の貼付がなされない。胎土はいずれもA種が主体的である。

器形 8 8 B・F・K・P・R・T・Uが認められる。8 B (365) は口縁部文様帯をもつものの、体部の内容は不明である。口縁端部に爪形文が施されるものがある。8 F (187) は口縁部および体部文様帯が多段に区画されることが特徴である。口縁部では隆帯文上に爪形文が施されるほか、体部では格子目文に弧状沈線文が加えられている。8 Kも口縁部および体部文様帯が多段に区画される。爪形文と口縁部文様帯に斜位格子目文が施されるもの(261)があり、8 Bに類似している。一方、格子目文や縦位集合沈線文に弧状沈線文が加えられるもの(84)もあり、8 Fに類似する。なお、口縁部上位が肥厚し、縄文が施されるもの(378)がある。口縁部内面は1が主体的である。胎土はA・B・G種が認められる。8 O (86) は口縁部文様帯が二段構成で、体部は文様帯をもたない。口縁部は玉抱三叉文のほか、三角形彫去文が併用される。また、口縁部の橋状把手と連続して体部に渦巻状沈線文が施される。口縁部内面は2である。8 P (380)・8 R (239) は、いずれも口縁部下位に無文帯を持ち、7 Rと共通する。口縁端部に爪形文が施されるもの(239)がある。8 Tは8 P・8 Qと同様に口縁部に無文帯を持つものと、全面に撚糸文が施されるもの(19)がある。8 R・8 Tの胎土はG種が主体的である。8 U (143) は小形のもので、縦位隆帯文が施される。

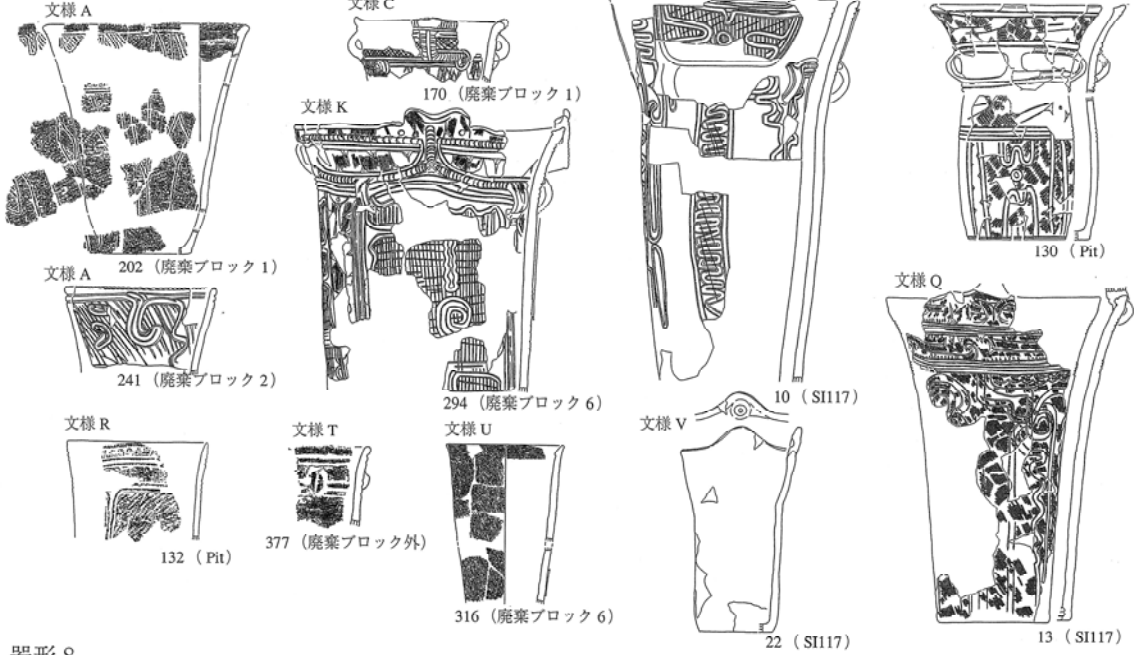
器形 9 9 F・I・J・K・P・Vが認められる。9 F (17)・9 K (334) は口縁部と体部が隆帯文により区画され、隆帯上に爪形文を施す点も類似している。また、9 Kは7 Kと文様構成の共通性が高い。9 Iは口縁部文様帯が区画されるもの(194)のほか、口縁部文様帯をもたず口縁部から体部に縦位の波状沈線文等が施されるもの(302)がある。302は「Y」字状の集合沈線文の両側に短沈線文を加えられたり、撚糸文が縦位に施される点で文様Qに類似する。口縁部内面は1が主体的である。9 J (16) は文様帯をもたず、口縁部や体部上位にリボン状突起や橋状把手が貼付されることが特徴である。9 Pは隆帯上に爪形文を施すもの(136)と、肥厚する口縁部の下に爪形文が施されるもの(354)がある。9 V (208) は口縁部内面が1と2のものがある。

器形 10 10 U (307) に限定され、数量は少ない。307は平行沈線文により口縁部文様帯が区画されるものがあり、体部には隆帯文が貼付される。口縁部内面は1で、胎土はA種が主体的である。

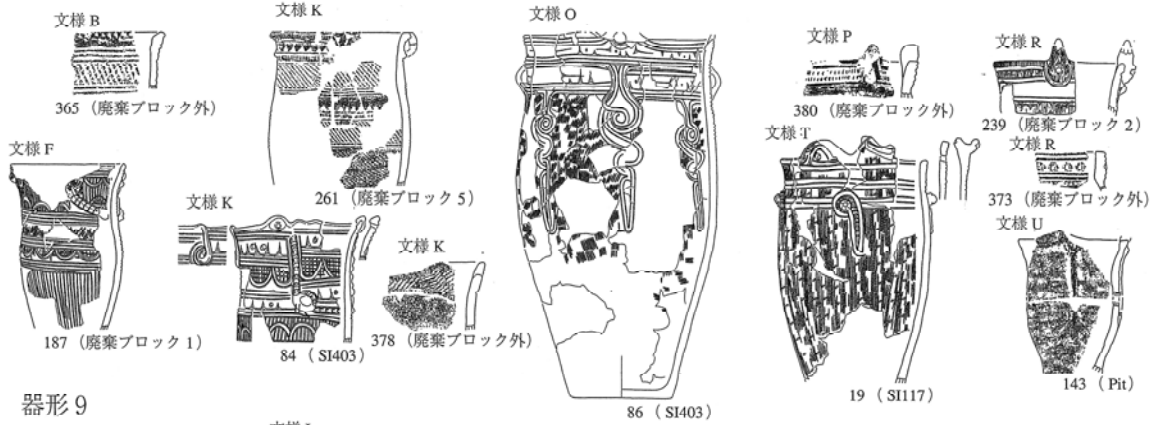
器形 11 11 O・Qに限定される。11 O (21) は口縁部と体部に平行ないし斜位の隆帯文が施され、橋状突起により上下に連結されている。隆帯上に爪形文が施される特徴は、他の器形にも認められるものである。11 Qは体部に文様が施されるもの(190)と無文のもの(301)がある。隆帯文上や沈線文に沿って短沈線文が施される特徴は、5 Q・7 Qと共通するものである。口縁部に獣面突起や把手が貼付されることも注目される。口縁部内面は1・2がある。胎土の特徴は他の文様Qのものと類似する。

器形 12 12 A・B・E・I・M・U・Vが認められる。いずれも大形のものが多く、装飾の少ないものが主体的である。12 A (26)・12 B (75) は、口縁部および頸部文様帯を有し、頸部文様帯には橋状把手が貼付される。体部は縦位に隆帯文や波状沈線文などが施される。口縁部内面は1・2がある。12 E (88) は口縁部文様帯のみを有する。隆帯文や把手は貼付されない。12 J (245) は文様帯をもたないもので、口縁部から体部にかけて縦位に波状沈線文が施される。12 M (11) は口縁部、頸部、体部文様帯をもち、体部は縦位区画隆帯により四分される。橋状突起等が多数貼付される点は、5 M・6 Mと共通する。12

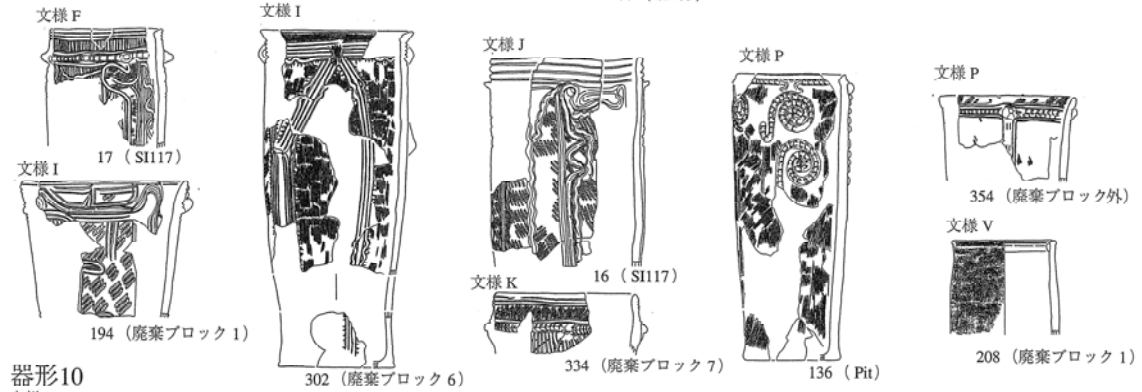
器形 7



器形 8



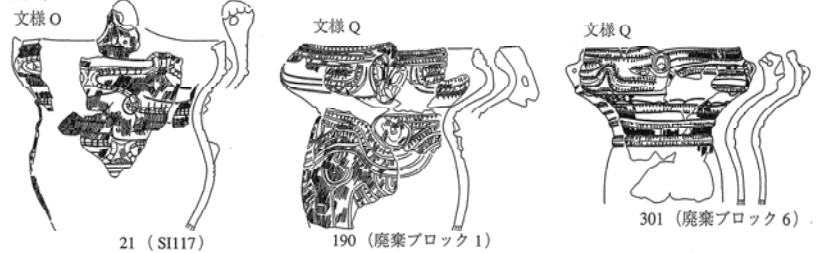
器形 9



器形 10



器形 11



第 67 図 器形と文様の組み合わせ(4)

VI 下層の調査

Uは横位区画隆帯により頸部文様帯をもつもの(25)と、文様帯のないもの(29)がある。後者には口縁端部に絡条体圧痕文が施されるもの(320)がある。口縁部内面は1・2が認められる。12Vは文様帯をもたず全面無文のもの(356)と、横位区画隆帯により口縁部および頸部文様帯が区画されるものがある。口縁端部に渋面突起が貼付される。胎土は全体的にA種が主体をなし、これにB・C・D・F種が加わる。

器形 13 13B・Uに限定される。12Uと同様に装飾性が非常に低く、大形のもが主体を占める。13B(179)は口縁部文様帯a・bおよび体部文様帯a・cをもつ。口縁部には縦位隆帯文が貼付される。また、口縁部文様帯bに斜位集合沈線文が描かれるほか、体部文様帯aに2種類の斜位格子目文が施されることが特徴である。13Uは全面縄文のみのもの(244)が主体で、ほかに平行沈線文によって口縁部と体部が区画されるものや、口縁部に「の」字状隆帯文や縦位隆帯文などが施されるものがわずかに含まれる。口縁部内面は1が主体的である。胎土はA・C種が主体的である。

器形 14 12U・Vに限定される。このほか、文様Jとみられる破片(268)が出土している。器形12・13と同様に装飾性が低く、大形のもが主体を占める。14Uは横位区画隆帯により口縁部文様帯が区画されるもの(28)や、全面縄文のみのものがある。14Vは口縁部に把手が貼付されるもの(87)や、全面無文のものがある。いずれも口縁部内面は1～3が認められる。胎土はA種が主体的である。

器形 15 207のみ確認される。口縁部の上位に縦位の集合短沈線文や鋸歯状沈線文が描かれ、下位に三角形彫去文が施される。他のQ類の短沈線文と特徴が異なる。体部には結節縄文が縦位に施されていることも注目される。胎土は一般的でない。

器形 16 16O(135)のみ確認される。口縁端部に渦巻状沈線文などの装飾が施されることを特徴とする。口縁部から体部は横位に区画される。三叉文は左右両端を玉抱とするもので、一般的なO類と異なる。胎土は一般的でない。

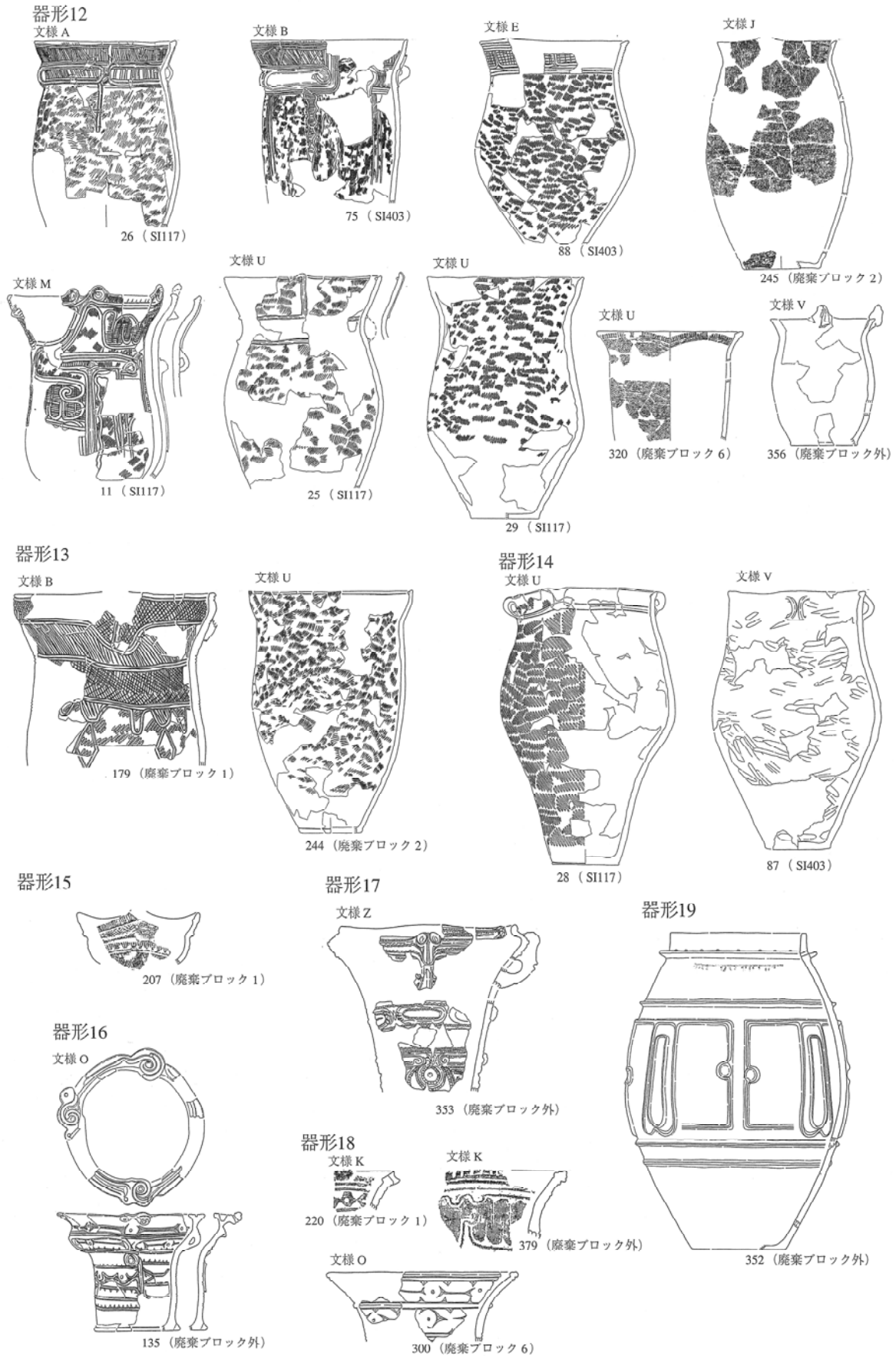
器形 17 17Z(353)に限定される。口縁部から体部は横位多段に区画され、その内部に斜行沈線文や有節沈線文が施される。口縁部には獣面突起が貼付される。胎土は一般的でない。

器形 18 18K・Oを確認できるが、口縁部片のみ確認されているため、全体の様子が不明である。18Kは口縁部文様帯に三角形彫去文a(220)およびb(379)が施されるものがある。前者は上下に鋸歯状に施されることにより、その間が六角形状を呈す。後者は三角形に加えられる沈線が非常に長いことを特徴とする。18O(300)は口縁部が横位多段に区画され、そのなかに玉抱三叉文cが施される。三叉文は左右両端を玉抱とするもので、16Oに類似する。

器形 19 110がある。いわゆる有孔鍔付土器である。口縁部に等間隔に円形の焼成前穿孔が施される。体部は高い隆帯により横位ないし縦位に区画され、ハート形のモチーフが加えられる。確認例は少ない。胎土は一般的でない。

(7) 遺構出土の土器

各遺構から出土した土器について、(5)で述べた器形および文様の組み合わせを中心にみることにする。文様等の詳細については観察表に委ねることとし、ここでは特記すべき事項、および出土状況を中心に記述する。また、層位別の出土傾向についてもみることにする。多層位間で接合する土器については、最も破片数が多い層位を代表させることとし、二層位でほぼ等量の場合は両者を併記することとする。なお、図版中の遺物実測図は、完形に近いものを前に、小破片の拓本図などを後ろに掲載しており、器形・文様順となっ



第68図 器形と文様の組み合わせ(5)

ていないことをあらかじめ断っておく。また、下記の土器説明では、(5)で前述した内容と重複する部分がある。

① S I 117 出土土器 (図版 119 - 1 ~ 55)

遺物は、住居覆土のほか、周堤やその周辺から大量に出土している。特に、南側周堤上やその外縁において出土量が多く、調査段階で周堤範囲の内外を区別することが困難であったため、便宜的に周堤の範囲外から出土したものもここに含めている。中期前葉のほか、前期終末の特徴を示すものがわずかに出土している。出土した土器のほとんどが深鉢である。器形別にみることとする。

器形 2 2 B (44・46)、2 C (45)、2 Q (35) が出土している。44は斜位格子目文に「U」字状沈線文が加えられたもので、半円状沈線文が連続する文様 G とは異なるものであろう。46は口縁端部に爪形文が施される。35はヘラ描きによる波状沈線文が口縁部上位で横位に、下位で縦位に施される。

器形 3 3 B (4・32)、3 C (49) が出土している。4は口縁部および体部文様帯の斜位格子目文に三叉状に沈線文が加えられ、その内部に彫去が施される。32は口縁部文様帯 b において玉抱と予想される三叉文 a が施される。体部は文様帯 a ~ c に区画され、文様帯 c に三角形彫去文 a が施される。49は斜位格子目文に「U」字状沈線文が加えられたものであろう。

器形 4 4 R (1) が出土している。口縁部文様帯 b には渦巻状の隆帯文が貼付され、三角形彫去文が加えられる。体部文様帯 a・c には縦位の波状ないし平行沈線文が施される。

器形 5 5 B (6)、5 G (2)、5 H (3)、5 M (12)、5 Q (35) が出土している。6は頸部文様帯をもつ。2は体部文様帯をもたないもので、半円状の沈線文の内部に斜位格子目文が充填される。口縁部から体部にかけて縦位隆帯文が貼付される。3も体部文様帯をもたず、口縁部で縦位格子目文の上に半円状沈線文が加えられる。12は口縁部に「W」字状区画隆帯が施され、格子目文が加えられる。頸部と入り組む部分の装飾は少ない。体部には縦位隆帯文が1条貼付される。35は口縁部上位が肥厚する。体部では2~3条のヘラ描き波状沈線文により重楕円文が施される。

器形 6 6 B (5・34・47)、6 D (7)、6 F (48)、6 K (50)、6 P (8)、6 V (24) が出土している。5・34は6と同様に頸部文様帯をもつ。5の口縁端部には突起が4単位貼付される。7は口縁部文様帯に縦位隆帯文が6単位施されたものと思われる。口縁部内面は3で、捺糸文が施される。50は口縁部文様帯が横位区画隆帯により a・b に区画される。8は口縁部文様帯 a・b に区画される。体部上位の無文帯は頸部文様帯が体部側に下がったものとする。24は体部に平行沈線文等が施されるものの、口縁部文様帯が無文となることから文様 V とした。

器形 7 7 K (14・15)、7 L (10)、7 Q (13)、7 U (39)、7 V (22) が出土している。14は口縁部文様帯に三角形彫去文が上下交互に施され、横位区画隆帯上に爪形文を加える特徴は50と共通する。15は口縁部文様帯に「の」字状の沈線文が施される。体部は「U」字状沈線文が描かれ、その内部にナデ消しが施される。10は口縁部文様帯に「凹」字状区画隆帯が施される。その下には頸部文様帯に類似する無文帯が部分的に認められる。13は口縁部文様帯が2段に区画され、玉抱三叉文 c のほか、短沈線文が施される。

器形 8 8 T (19) が出土している。口縁端部に獣面突起が貼付されることが特徴である。胎土は砂粒を含む G 種である。

器形 9 9 F (17)、9 J (16・18)、9 V (23) が出土している。17は横位区画隆帯上に突起が貼付される。体部には幅広の波状隆帯文が貼付される。16・18は文様帯に区画されないものである。16は口縁部にリボン状の把手が貼付されるほか、体部に縦位隆帯文が8単位施される。

器形 11 11 O (21) が出土している。21 は口縁部から体部上位にかけて隆帯文が菱形ないし三角形に巡り、交点には橋状突起が貼付される。体部下位は「U」字状沈線文が施される。

器形 12 12 A (26)、12 M (11)、12 U (25・29・38) が出土している。26 は口縁部および頸部文様帯を有する。口縁部文様帯の斜位集合沈線文には波状沈線文が加えられる。体部には縦位隆帯文が 4 単位貼付される。11 は口縁部文様帯に縦位や斜位の区画隆帯文が施され、その一部が頸部や体部と変則的に連結することから文様 M とした。頸部文様帯は口縁部および体部と入り組む。体部上端に突起・把手が多数貼付され、体部は縦位区画隆帯が 4 単位施される。25 は横位区画隆帯により頸部文様帯が区画されるほか、口縁部に縦位隆帯文が貼付される。

器形 13 13 U (27) が出土している。

器形 14 14 U (28・30)、14 V (31) が出土している。28 は横位区画隆帯により口縁部文様帯が区画され、橋状把手が貼付される。30 は口縁部に縦位隆帯文が貼付される。

9 は底部下端の張り出す器形である。20 は口縁部に無文帯をもち、口縁部から体部に波状に隆帯文が貼付される。33 は器形 2 の体部片と思われる。体部は文様帯 a・c に区画され、文様帯 a に斜位集合沈線文が施される。36 は底部下端が大きく張り出す器形で、幅広で深い凹線が 4 単位施される。37 は「U」字状沈線文の内部に縦位集合沈線文が施され、その下端が胎土の移動によりふくらみをもつ。51・53 は大形のもので、器形 12 ないし 13 の可能性が高い。52 は口縁部に間隔の広い撚糸文ほか、円形刺突文が施される。54 は内部が筒状に空洞となる突起で、器形 3 につくものと思われる。55 は器形 1～3 につくもので、内外面に三角形彫去文 a が施され、嘴状に突出する部分が欠ける。

40～43 は円形やソーメン状の浮線文が施される前期終末の特徴を持つものである。40・41 は爪形文が、42 は絡条体圧痕文が口縁端部に施される。43 は器形 1 ないし 2 と思われる。

出土層位 遺構覆土は 1～9 層に分けられる。層別別出土土器をみると、1 層から中心に出土したものは 6・20 である。1～2 層では 35・50 で、2 層を中心とするものは、2・3・5・12・14・18・22・23・25・29・34・44～46・51 である。2～3 層では 26 である。3 層を中心とするものは、4・24・37・38 である。5 層からは 49、8 層からは 9 が出土している。床面直上からは 43 が出土している。また、SK 1 の覆土 3 層から 33 が出土している。

周堤では A①・A②・B・B' 層に分けられる。A①層およびその外縁から出土したものは、1・7・8・10・11・13・15～17・19・21・27・28・36・39・47・52・53 である。これらの中には、遺構覆土 1～3 層出土のものと同接合したものがある。周堤下の旧表土層である B' 層からは、32・42 が出土している。なお、1・5・31 は P 122 出土土器と接合した。

② S I 120 出土土器 (図版 123 56～63)

出土遺物は微量で、SK 23 覆土および周堤からわずかに出土している。また、図示していないが、器形 12 かと考えられる斜縄文を地文とする体部片が出土している (写真図版 233 - 5 参照)。

56 はソーメン状浮線文の貼付による斜位格子目文のほか、口縁端部に爪形文が施される。57 は器形 11 の可能性が高く、体部にヘラ描き沈線文が施される文様 Q であろう。屈曲部に横位の隆帯文が施され、橋状突起が貼付される。58 は口縁部上位が肥厚するもので、縦位平行沈線文が施される。59 は器形 5 で、口縁部に縦位集合沈線文が施される。60 は器形 6 の文様 E で、縦位隆帯文が貼付される。61 は大振りな突起で、器形 5 ないし 6 につくものと思われる。内外面に施される竹管沈線文の幅が広く、内面に三角形彫去文 b が施され

る。62は口縁部に幅広の隆帯が弧状に貼付され、その上面に竹管沈線文が3条施される。63は円筒状をなす体部片で、文様はおそらく玉抱三叉文cになるものであろう。

出土層位 61・63はS K 23覆土内から出土したものである。61はその3層から出土しており、埋没過程の初期段階に含まれるものと考えられる。これ以外は周堤の掘り下げ途中に出土したものである。

③ S I 403・廃棄ブロック4出土土器 (図版124～128)

S I 403は廃棄ブロック4と重複し、これを切って構築されているため、この排土を利用した周堤やその下位から遺物が大量に出土している。特に、北～北西側の周堤A①・A②やB'層のほか、その外縁において出土量が多く、調査段階で周堤範囲の内外を区別することが困難であったため、便宜的に周堤の範囲外の廃棄ブロック4から出土したものもここに含めている。中期前葉のほか、前期終末のものがわずかに出土している。出土した土器のほとんどが深鉢である。器形別にみることにする。

器形1 1 B (105・119) が出土している。105は口縁部文様帯bには玉抱三叉文aが施されている可能性が高い。

器形2 2 A (106)、2 B (104・118)、2 C (89) が出土している。104は横位区画隆帯により口縁部文様帯が区画される。118は口縁部文様帯aの下端に橋状突起が貼付される。

器形3 3 A (111)、3 B (68・71・111・121) が出土している。68は口縁端部に三角形彫去文aが加えられた獣面状の突起が貼付される。71は体径が口径を上回る大形のもので、口縁部文様帯a・bおよび体部文様帯a・cに区画される。口縁部文様帯aでは斜位格子目文に連続する波状沈線文は加えられないが、体部文様帯aでは「M」字状に連続する波状沈線文が加えられており、文様Dと共通する。

器形4 4 E (122) が出土している。格子目文に波状沈線文が加えられる。

器形5 5 A (110・120)、5 B (67)、5 C (64)、5 E (72)、5 F (73)、5 G (90)、5 H (91)、5 J (92・123)、5 Q (115～117・124)、5 U (99) が出土している。67は口縁部文様帯a以下に文様帯をもたない。口縁部下位には縦位平行沈線文間に横位集合沈線文が充填されている。また、瘤状の突起が貼付される。64は突起および口縁端部に絡条体圧痕文が施され、口縁部上位の隆帯上には爪形文が加えられる。また、口縁部文様帯a・bに斜位格子目文が施される。72は口縁部文様帯a・bのほか頸部文様帯を有する。ただし、頸部文様帯は全周していない。口縁部から体部にかけて格子目文を基調とするが、a・b種が併用されている。また、口縁部文様帯a・bでは無文となる部分があるほか、縦位区分帯では斜位格子目文となる。体部は縦位隆帯文が1条施される。73は口縁部文様帯が環状隆帯文や横位隆帯文を挟んで2段になる部分がある。頸部文様帯には玉抱三叉文bが施される。90は91と同様に体部文様帯をもたず、縦位の波状沈線文などが施されるものであろう。92は口縁部文様帯と体部が区画されている。115～117は同一個体である。撚糸文を地文として、ヘラ描きによる平行沈線文や「U」字状沈線文が施され、口縁端部や隆帯文上に短沈線文が加えられる。

器形6 6 B (65)、6 C (102・103)、6 D (107・108)、6 E (112)、6 I (85)、6 J (113)、6 K (66・74)、6 L (76・77) が出土している。65は口縁部文様帯aおよび体部文様帯aがあり、いずれにも斜位格子目文に「L」字状や横位の沈線文が加えられる。また、縦位隆帯文が1条貼付される。102は口縁端部および口縁部内面に絡条体圧痕文が施される。103は口縁部内面に爪形文が施される。107・108は同一個体とみられ、口縁部に連続する「T」字状沈線文が加えられる。112は半截竹管の先端の一方を固定したまま、もう一方をコンパス状に回転させることにより波頂間隔の短い波状沈線文(以下、コンパス波状沈線文と呼称する)

が加えられる。85は口縁部文様帯が平行沈線文により体部と区画される。66・74は口縁部文様帯 a・b に区画され、縦位区画隆帯が4単位貼付される。74の口縁部文様帯 b は文様 D と共通する。76は口縁部および頸部文様帯が「W」字状区画隆帯によって入り組む。口縁端部には突起が発達する。口縁部の縦位区分帯および頸部には縄文が充填されるほか、コンパス波状沈線文が加えられる。体部は縦位区画隆帯により縦位に4分割される。また、その内部は平行沈線文によりさらに上下に区画される。体部上端の橋状突起は両端が半截竹管によって環状に縁取られることが特徴である。77は76と同様に口縁部および頸部文様帯が入り組むもので、縦位区分帯に三角形彫去文が施される。

器形 8 8 K (84)、8 O (86)、8 T (114) が出土している。84は口縁部から体部が横位多段に区画される。三角形彫去文は口縁部および体部文様帯に施され、口縁部下位は文様 D と共通する。隆帯文上には深い爪形文が加えられる。86は口縁部および頸部文様帯をもち、玉抱三叉文 b が施される。体部には縦位の渦巻状沈線文と玉抱三叉文 c が施される。114は無文帯の中に円形刺突文が施される。

器形 10 10 U (97) が出土している。

器形 12 12 B (75)、12 E (88)、12 U (95) が出土している。75は横位区画隆帯により口縁部および頸部文様帯に区画される。また、縦位隆帯文の脇は縦位区分帯となっている。88は口縁部文様帯に格子目文が施される。95は横位区画隆帯により頸部文様帯が区画される。

器形 13 13 U (96) が出土している。口縁部文様帯が区画され、附加条縄文が全面に施される。

器形 14 14 V (87) が出土している。全面に粗いナデ痕が観察できる。

69は口縁部から体部に縦位隆帯文が施される。78は器形 5 ないし 6 で、口縁部から頸部にかけて三脚に分かれる橋状把手（以下、三脚橋状把手と呼称する）が貼付される。79・81は体部に縦位区画隆帯が4単位施される。82は体部が強く膨らむ器形で、縦位および横位隆帯文により区画される。体部の玉抱三叉文 c は、縦横に連結して菱形を呈することが特徴である。83は頸部から口縁部にかけて強く外反する器形であり、体部上位に瘤状の突起が貼付される。94は体部に縦位区画隆帯が施される。

101は口縁端部に円形浮線文が貼付される前期終末の特徴を持つものである。

出土層位 前述した通り、周堤 A①・②層には廃棄ブロック 4 の形成土が多量に含まれるため、周堤 A①・②層から出土した遺物の多くは廃棄ブロック 4 の遺物と考えられる。そして、住居覆土 5 層から出土した遺物の多くも、これらが崩落したものとみられる。また、周堤 A①・②層の下に位置する B' 層は、S I 403 構築以前まで形成されていた廃棄ブロック 4 と考えられ、S I 403 構築時の周堤によって遮蔽されている。よって、ほとんどの土器が住居覆土と周堤 A①・②層および B' 層間で接合するほか、周堤外の廃棄ブロック 4 と接合するものも多い。71は周堤 A②層によって押しつぶされていたものである。72・73・75・87・97・104・109～111が B' 層を中心に出土している。また、80・85・103・106・112～114・118～124は S I 403 周堤の外縁にある廃棄ブロック 4 から出土したものである。

④ピット出土土器（図版 129・130 125～134・136～139・145・147・149・151～154・156～161）

はじめに、掘立柱建物に関連する柱穴から出土した土器について、掘立柱建物 Na の小さいものからみていくこととする。157（S B 7 - P 370）は 8 P で、口縁部に無文帯を有する。147（S B 17 - P 284）は「ハ」字状に連続する浮線文が貼付される前期末葉の特徴を有するものである。134・138は S B 19 - P 122 から出土している。134は 5 U で、口縁部上位に平行沈線文が施される。138は器形 5 ないし 6 と考えられる。頸部文様帯は三角形彫去文 b が施されることから、口縁部と入り組むものと予想される。体部は縦位区画隆帯が

4単位施される。125はS B 24 - P 976およびS B 32 - 968から出土したもので、2 Bである。文様帯は口縁部文様帯 a・b および体部文様帯 a・c に区画される。137 (S B 32 - P 426) は体部に縦位区分帯をもち、その内部に三角形彫去文が左右交互に施される。132 (S B 28 - P 415) は7 Rで、口縁部に無文帯を有する。133 (S B 31 - P 1063) は4 Rで、口縁部上位に渦巻状隆帯が貼付されるほか、口縁部下位に縦位集合沈線文が施される。153 (S B 31 - P 456) は5 Gである。158・159 (S B 35 - P 1302) は5 Gである。131 (S B 39 - P 1235) は台付浅鉢で、台部に方形と円形の透かしが2単位ずつ施される。156 (S B 42 - P 1094) は器形6に付く突起と考えられ、環状の上が円形となる2段のもの(以下、2段突起と呼称する)である。127・130・152はS B 45 - P 1120の1層からまとまって出土したものである。127・152は3 Bである。130は7 Oで、口縁部・頸部・体部 a・c の各文様帯に区画される。口縁部および体部文様帯に玉抱三叉文 b が施される。

このほかのピット出土のものを器形分類順にみることにする。149 (P 345)・154 (P 260) は3 Bである。128 (P 311) は3 Dである。口縁部文様帯 a に橋状把手が貼付される。129 (P 240) は5 Dである。体部以下は文様帯が区画されないようである。160 (P 479) は5 Kである。139 (P 1113) は5 Qである。口縁部には非常に細かい撚糸文を地文とし、ヘラ描き沈線文が施される。136 (P 593) は9 Pである。体部には渦巻状の隆帯文が施されることが特徴である。

⑤土坑出土土器 (図版130 143・144・150・162・165～167)

遺構No順にみることにする。143 (S K 269) は8 Uで、縦位隆帯文が貼付される。144 (S K 414・P 410) は12 Uである。166・167はS K 432から出土したものである。167は小形のものである。150 (S K 460) は6 Dである。162・165はS K 462から出土したものである。

⑥S D 404 出土土器 (図版130 142・148・155)

S D 404から出土した土器は少なく、そのほとんどが小破片である。廃棄ブロック5および6付近から若干出土している。142は体部に撚糸文を地文として弧状の隆帯文が貼付され、その両脇には深い短沈線文が施される。148は5 Cである。155は5 Dである。

⑦廃棄ブロック1 出土土器 (図版131～134)

廃棄ブロック1は、東端でS I 117の周堤と重複している。ここでは、この重複部分を除き、ブロック西端までの範囲から中心に出土したものを廃棄ブロック1出土土器とする。ただし、S I 117出土土器と接合するものも含まれる。出土した土器はすべて深鉢で、器形別にみることにする。

器形1 1 B (168・200) が出土している。168は口縁部文様帯 a・b および体部文様帯 a～c に区画される。口縁部には獣面突起のほか筒状突起が貼付される。口縁部文様帯 a には彫去の深い玉抱三叉文 a が施される。体部文様帯 b には渦巻状ないし斜行する平行沈線間に羽状沈線文が施される。

器形2 2 A (217)、2 B (171～175・198)、2 P (177) が出土している。171～175はいずれも横位区画隆帯により口縁部文様帯が a・b に区画され、口縁部文様帯 b に縦位の平行沈線文が施される。173は頸部文様帯をもち、体部文様帯との境に横位区画隆帯が施される。また、口縁部文様帯から体部にかけて縦位区画隆帯が4単位施され、そのうちの1カ所は体部で「Y」字状となる。174は体部文様帯 a に羽状沈線文が施される。175は口縁部には獣面突起が付される。また、口縁部文様帯 b に縦位隆帯文が貼付される。198は隆帯文が貼付されない。177は口縁部文様帯 a に爪形文のほか、三角形彫去文が施され、瘤状突起が貼付される。

器形3 3 B (178) が出土している。口縁部文様帯 a には曲線的な隆帯文が貼付され、口縁部文様帯 b に

は三角形彫去文 a が施される。

器形 4 4 O (219) が出土している。口縁部文様帯の上下に刻目文が施され、玉抱三叉文は上下対称に配置される。

器形 5 5 K (188・222) が出土している。188 は口縁部文様帯 a の周囲に爪形文が施されるほか、縦位から横位に曲がる隆帯文が貼付される。口縁部文様帯 b にはへら描きによる瓢箪形の沈線文が施される。

器形 6 6 A (176)、6 D (199)、6 J (180・185)、6 L (181)、6 S (223)、6 U (193) が出土している。176 は波状口縁である。199 は斜位格子目文に「W」字状に連続する沈線文が加えられる。180 は口縁部文様帯が体部と区画され、その下端には瘤状突起が貼付される。185 は口縁部上位に爪形文が加えられるほか、口縁部では平行沈線文のほかに波状沈線文が多用される。181 は「凹」字状区画隆帯により口縁部および頸部文様帯が入り組む。口縁部には 2 段突起や環状突起が発達する。口縁部文様帯では斜格子目文には波状沈線文が加えられる。頸部文様帯および縦位区分帯には縄文が充填されるほかは装飾が少ない。体部全面に斜位格子目文が施され、波状沈線文が加えられる。223 は口縁部で縦位の短沈線文にへら描きによる平行沈線文が加えられる。193 は口縁部に波状沈線文が施されるほか、体部に縦位隆帯文が貼付される。

器形 7 7 A (202)、7 C (170)、7 J (218)、7 U (197)、7 V (209) が出土している。202 は口縁部文様帯に斜位集合沈線文が施され、波状沈線文が加えられる。170 は口縁部および口縁部の把手や隆帯文上に絡条体圧痕文が施されるが、体部の撚糸文はこれらと原体が異なる。

器形 8 8 F (187) が出土している。口縁部から体部にかけて横位多段に文様帯が区画される。口縁部文様帯には斜位に隆帯文が貼付され、その上面に爪形文が加えられる。

器形 9 9 I (194)、9 V (208) が出土している。194 は口縁部に瘤状突起が貼付される。

器形 11 11 O (221)、11 Q (224) が出土している。221 は玉抱三叉文 c のほか、短沈線文が多用される。224 は口縁部に弧状の隆帯文が貼付され、その上に短沈線文が施される。

器形 12 12 I (201)、12 U (196) が出土している。196 は横位区画隆帯により頸部文様帯が区画される。

器形 13 13 U (195・211) が出土している。195 は口縁部が短く直立する器形である。

器形 15 207 が出土している。口縁部上端に縦位の集合短沈線文が施され、同様の短沈線による鋸歯状文が施される。口縁部下位から体部には結節縄文が縦位に施される。

器形 18 18 K (220) が出土している。口縁部文様帯で鋸歯状に三角形彫去文が施されることにより六角形鋸歯文となる。

169・212～215 は円形やソーメン状浮線文が施される前期末葉の特徴を有するものである。169 は器形 1 にソーメン状浮線文を貼付した斜位格子目文が施される。213 は同様に突起部分のみソーメン状浮線文の貼付による斜位格子目文となる。215 も 213 と同様のものであろう。

181 は撚糸文を地文として弧状や渦巻状沈線文が施される。文様 Q に類似する。191 もへら描きによる波状沈線文が施されるもので、文様 Q であろう。204 は体部が丸く膨らむ小形のもので、体部上端には焼成前に小円形の穿孔が施される。胎土は 352 に類似する。210 は底面に円形の台が 4 単位貼付されるものである。また、内外面に漆と思われる付着物が認められ外面には赤彩も観察できる。225 は体部に幅広の隆帯文が貼付され、その上面に刺突文が施される。226・228～230 は獣面突起であり、嘴状の張り出しをもつ。

出土層位 廃棄ブロック 1 の層位は、調査段階で細分されていないため、土器のほとんどが基本層序 V 層ないし V b 層として取り上げられている。そのため、層位別の出土傾向は不明である。

⑧廃棄ブロック 2 出土土器 (図版 135・136)

出土量は廃棄ブロック 1 に比べ少ないものの、復元率が高いものが多い。出土した土器はすべて深鉢で、器形別にみることにする。

器形 2 2 F (231) が出土している。口縁部下位に波状沈線文が描かれるほか、体部では楕円形区画内に横位集合沈線文が施される。

器形 4 4 R (251)、4 S (232)、4 T (233) が出土している。232は突起の外面にも短沈線文が施される。また、無文帯の下に縦位集合沈線文が施されるほか、橋状突起が貼付される。233は口縁端部に獣面突起が貼付される。口縁部下位から体部にかけて木目状撚糸文が施される。

器形 5 5 C (248)、5 F (247) が出土している。248は口縁部の沈線内に爪形文が加えられる。

器形 6 6 A (249)、6 D (235・236)、6 H (234) が出土している。249は口縁部の斜位集合沈線文に波状沈線文が加えられる。また、矢羽状の隆帯文が貼付され、その上面に爪形文が施される。235は頸部文様帯をもち、体部は文様帯 a・c に区画される。口縁部には隆帯によって区画された縦位区分帯をもつ。頸部および体部上位に橋状突起が発達する。体部には縦位隆帯文が 1 条貼付される。236も頸部文様帯をもつ。口縁端部に突起が発達する。234は体部が膨らむ器形で、口縁部上位に嘴状に突出する突起が貼付され、その先端には鼻穴状の刺突が施される。

器形 7 7 A (241)、7 U (254) が出土している。241は斜位集合沈線文に「J」字状や楕円形の沈線文が加えられる。254は口縁部内面に撚糸文が施される。

器形 8 8 R (239・240・252)、8 T (238) が出土している。239は口縁端部に爪形文が施される。口縁部無文帯の下には、縦位の短沈線文に横位の三叉文が加えられる。240は体部に「B」字状沈線文や平行沈線文が施され、沈線間にヘラ描きによる斜位集合沈線文が加えられる。

器形 9 9 J (250) が出土している。

器形 12 12 J (245)、12 U (243・246)、12 V (242) が出土している。246は環状突起から縦位隆帯文が垂下する。242は横位区画隆帯により頸部文様帯が区画される。

器形 13 13 U (244) が出土している。

237は頸部文様帯をもち、体部は縦位区画隆帯により 4 分される。

出土層位 廃棄ブロック 2 の層位は、廃棄ブロック 1 と同様に調査段階で細分されていないため、土器のほとんどが基本層序 V 層ないし V b 層、あるいは V 層石中として取り上げられている。よって、層位別の出土傾向は不明である。

⑨廃棄ブロック 3 出土土器 (図版 137 255～260)

出土量は非常に少ない。1 B (255・256)、3 B (258)、5 L (257) が出土している。258は口縁部文様帯 a～b に幅広の貼付け文が施される。260は体部が膨らむ器形で、渦巻状沈線文に区画された内部に集合沈線文が加えられる。259は鳥形とみられる獣面突起である。

出土層位 廃棄ブロック 3 の層位は、廃棄ブロック 1・2 と同様に調査段階で細分されず、基本層序 V 層ないし V b 層として取り上げられたものが多い。そのため、層位別の出土傾向は不明である。

⑩廃棄ブロック 5 A・B 出土土器 (図版 137 261～269)

遺物量は少なく、廃棄ブロック 6 出土土器と接合するものがある。2 A (269)、5 F (263)、5 Q (267)、6 I (265)、8 K (261)、9 K (266)、14 J (268) が出土している。269は口縁部文様帯以下に文様帯が区

画されず、体部の装飾が乏しいものである。261は口縁部から体部にかけて文様帯が横位多段に区画される。口縁端部および横位隆帯文上に爪形文が施される。

出土層位 廃棄ブロック5の層位は、廃棄ブロック1・2と同様に調査段階で細分されず、基本層序V層ないしVb層として取り上げられたものが多い。そのため、層位別の出土傾向は不明である。なお、261・262・269は、廃棄ブロック5Aと5Bの間で接合している。このことから、廃棄ブロック5Aと5Bは、本来は同一のブロックであり、SD404の構築によって分離された可能性も考えられる。

①廃棄ブロック6出土土器（図版138～144）

廃棄ブロック6では、廃棄ブロック1と並び大量の土器が良好な状態で出土している。復元率は高く、全形を知りうるものが多い。

深鉢 出土した土器の多くが深鉢である。ここでは器形別にみることにする。

器形2 2A(274)、2B(270・273)が出土している。274は口縁端部に筒状突起がつくものと思われ、体部文様帯aには斜位集合沈線文が施される。270は口縁端部の突起端部とそれに続いて垂下する隆帯上のみ絡条体圧痕文が加えられる。口縁部文様帯aには半球状の突起が貼付され、その脇に三叉文aが加えられる。273は口縁端部に刻目文が施される。口縁部文様帯aでは斜位格子目文のほか、斜位集合沈線文が施される部分がある。また、「し」字状沈線文内に爪形文が加えられる。

器形3 3A(309)、3B(271・272・275・276・279)が出土している。309は口縁部文様帯a・bに縦位隆帯文が施されるほか、橋状把手は体部文様帯aに連結しない。271・272は体部文様帯cに階段状沈線文や斜位平行沈線文が施される。また、口縁部文様帯a・bには隆帯文が貼付される。275は体部文様帯a～cに区画される。体部文様帯cには三角形彫去文が施される。276は体部文様帯cに「L」字状ないし逆「L」字状の沈線文が施される。279は口縁部文様帯bに玉抱三叉文bが施されるほか、体部文様帯aと連結しない橋状把手が貼付される。

器形5 5A(284)、5B(277)、5I(285)、5J(282)、5K(283)、5L(291・293)、5M(288・289・292)、5N(287)、5P(298)が出土している。284は頸部文様帯をもち、三角形彫去文が施される。口縁部文様帯aおよび体部文様帯aでは、斜位集合沈線文に楕円形や円形の沈線文が加えられる。277も頸部文様帯をもち、口縁部文様帯に環状突起が貼付されるほか、頸部文様帯まで垂下する隆帯文が施される。285は口縁部・頸部・体部の各文様帯に区画され、縄文を地文として波状沈線文が加えられる。口縁端部には耳状ないし環状の大形突起が付くほか、口縁部文様帯から体部文様帯にかけて波状に起伏する橋状把手が貼付される。282は縦位平行沈線文が短く途切れる。291は縦位区分帯をもち、内部に縄文が充填されるほか、玉抱三叉文bが加えられる。また、口縁部文様帯に三脚橋状把手が貼付される。293は「W」字状区画隆帯により口縁部および頸部文様帯が入り組む。頸部文様帯には玉抱三叉文cが施される。体部は縦位区画隆帯により二分される。288も「W」字状区画隆帯により口縁部および頸部文様帯が入り組む。頸部文様帯には縄文が充填され、下端に三角形彫去文bが加えられる。体部は縦位隆帯文により4分される。292は口縁部文様帯および体部上位において環状や山形などの各種突起や橋状把手が発達する。また、格子目文cが施文されることが特徴的である。縦位区分帯には三角形彫去文が加えられる。287も口縁部・頸部文様帯が入り組み、図の右側面に縦位区分帯がある。口縁部文様帯には三角形彫去文のほか、図の裏面で部分的に格子目文が施される。口縁部から体部において橋状突起・把手が発達する。体部は縦位隆帯文により2分され、縦位区分帯も区画される。298は口縁部の隆帯文上に爪形文が施される。

VI 下層の調査

器形6 6 B (280)、6 D (281・286・310)、6 I (295)、6 M (290)、6 U (303) が出土している。280は口縁部および頸部文様帯をもつ。横位区画隆帯および体部隆帯文上に爪形文が加えられる。281は口縁部文様帯 a・b をもつ。頸部の横位区画隆帯上に爪形文が加えられる。286は口縁部・頸部・体部の各文様帯をもつ。口頸部を区画する横位区画隆帯の一部が「M」字状を呈する。口縁部文様帯は縦位区画隆帯により四分される。体部文様帯 a では縦位隆帯文が1条貼付される。295は頸部文様帯を有するものと考えられる。290は「W」字状区画隆帯により口縁部および頸部文様帯が入り組み、縦位区分帯も形成される。体部は縦位区画隆帯により大きく二分され、縦位区分帯も形成される。口縁部・頸部・体部上位では、縦位や横位・斜位に連結される橋状把手が発達する。口縁部・体部には格子目文 c が施される。頸部や口縁部および体部の縦位区分帯では、ヘラ描き沈線の先端に円形彫去文が付属する文様（以下、玉垂文と呼称する）や玉抱三叉文 c が加えられる。303は口縁部に縦位隆帯文が貼付される。

器形7 7 K (294)、7 U (316・317) が出土している。294は口縁部に横位区画隆帯が二重に施される。体部は縦位区画隆帯により四分され、縦位区分帯も形成される。口縁部および縦位区分帯には撚糸文が充填される。316は口縁部内面にも撚糸文が施される。

器形9 9 I (302) が出土している。302は文様 I としたものの、3～4条の集合沈線文により平行・縦位・「Y」字状の文様が施されており、本来は別とすべきかもしれない。これらの文様の脇には短沈線文が加えられる。口縁部には橋状突起が貼付される。

器形10 10 U (307) が出土している。307は平行沈線文により口縁部と体部が区画される。体部には逆「L」字状隆帯文が4単位施される。また、幅広で不定形な隆帯文が貼付される。

器形11 11 Q (301) が出土している。口縁部および体部に幅広の隆帯文が貼付され、上面の両端や隆帯文の脇に短沈線文が加えられる。口縁部下位にはヘラ描きによる波状沈線文が施される。

器形12 12 U (305・306・319～321) が出土している。320は口縁端部から内面にかけて絡条体圧痕文が施される。

器形18 18 O (300) が出土している。300は横位区画隆帯により口縁部が2分され、その内部に両端が玉抱となる玉抱三叉文 c が施される。

324～330は円形ないしソーメン状浮線文が貼付される前期末葉の特徴を有するものである。324は口縁端部に円形およびソーメン状浮線文が貼付されるほか、爪形文が施される。328は筒状突起の下部が残存するものとも思われるが、器形は不明である。

331・332は器形1～3に付くものと思われる獣面突起である。

浅鉢 299は口縁部および体部に縦位ないし斜位の集合沈線文が施される。口縁端部および縦位隆帯文上に爪形文が加えられる。

出土層位 廃棄ブロック6形成層はM1・M2層に二分でき、さらにM2層は部分的にM2A・M2B層に分層できる。土器の多くは多層位間で接合している。また、ブロックの縁辺から出土したものの中には、ブロックの中心から崩落したものが含まれる可能性がある。ここでは、調査時の取り上げ層位をそのまま採用し、破片数が最も多く、単一の層に偏る傾向が認められたものをみることにする。M2B層から中心に出土したものは、270～276・278・279・294・308・320・323・325・326・328・331である。M2A層から中心に出土したものは、277・288・289・292・301・314～316・322・330・332である。このほかのものは、M2A層とM2B層でほぼ等量であったり、多層位間で接合するため、単一層に偏りを認めることが難しい。

⑫廃棄ブロック7出土土器(図版145)

廃棄ブロック7では、ブロック全体を調査していないこともあり、出土量は少な目である。出土した土器のほとんどが深鉢である。

2 B (333)、5 A (345)、5 F (336)、5 Q (337)、6 B (335)、9 K (334) が出土している。333は体部文様帯 a に斜位集合沈線文が施される。336は口縁部下位から体部において文様帯をもたないものである。337は口縁部および体部にヘラ描き沈線による楕円文や弧線文が施される。口体境の横位区画隆帯上や沈線文沿いに短沈線文が加えられる。334は横位区画隆帯の下に斜位格子目文が施される。

338～342はソーメン状浮線文などが施される前期末葉の特徴を有するものである。338は口縁部に弧状にソーメン状浮線文が貼付され、その上に爪形文が加えられる。339は器形2に類似し、ソーメン状浮線文が縦位併行に貼付される。342は口縁部内外面にソーメン状浮線文貼付による斜位格子目文が施される。

出土層位 廃棄ブロック7形成層は、M1・M2層に二分されるが、土器の多くはM2層から出土している。なかでも、339はM2層の下位から出土している。遺物量が少ないため、層位別の特徴を見出すことができない。

(8) 遺構外出土の土器(図版129・130・146・147 135・140・141・164・347～395)

廃棄ブロックを含む遺構以外からは散発的な出土状況を示し、量も非常に少ない。土器はすべて深鉢で、前期末葉・中期前葉・中期後葉の特徴をもつものがある。中期前葉のものについては、器形別にみることにする。

器形2 2 A (369・371)、2 B (347・350・367)、2 E (375) が出土している。369は口縁部内外面に斜位集合沈線文が施される。350は体部文様帯 a～c をもち、口縁部文様帯 a および体部文様帯 a に平行沈線文が施される。367は口縁部下位に「Y」字状沈線文が描かれる。

器形3 3 A (357)、3 B (351・358・366・368) が出土している。366は口縁部文様帯 b に三角形彫去文 a が施される。368は口縁端部に筒状の突起が付く。

器形5 5 A (349)、5 J (370)、5 K (374)、5 X (140)、5 Y (141) が出土している。349は体部に木目状撚糸文が施される。374は口縁部にヘラ描きによる平行沈線文を挟み、上下に三角形彫去文 a が施される。140は口縁部に凹線状の無文帯をもち、その下に棒状工具による弧状沈線文や玉抱三叉文が施される。体部には結節縄文が縦位に施される。141は口縁部に棒状工具によるものと思われる平行沈線文が4～5条施され、その内部に刺突状の刻目文が加えられる。口縁部内面はレンズ状に窪み、その下端には陵が形成される。胎土は一般的でない。

器形6 6 O (376) が出土している。口縁部に撚糸文を地文として横位の玉抱三叉文 c が施される。

器形7 7 C (348)、7 T (377) が出土している。348は口縁端部や隆帯文上に絡条体圧痕文が加えられる。377は口縁部の無文帯上に瘤状の突起が貼付される。

器形8 8 B (365)、8 K (378)、8 P (372・380)、8 R (373) が出土している。378は口縁部上位が肥厚し、その下に三角形彫去文が施される。372は口縁部内面に彫刻蓮華文が施される。380は口縁部の平行沈線内に爪形文が加えられる。373は口縁部に三角形彫去文を上下に加える六角形鋸歯文が施される。

器形9 9 P (354) が出土している。口縁部上位が肥厚し、斜縄文が施される。その下には平行沈線で横位区画された内部に爪形文が1～2列加えられる。また、瘤状突起の下は平行沈線により縦位区画され、その内部に半截竹管による短沈線文が加えられる。胎土は一般的でない。

器形 12 12 U (381)、12 V (356) が出土している。

器形 13 13 U (355) が出土している。口縁部に「の」字状の隆帯文が貼付される。

器形 16 16 O (135) が出土している。口縁端部は広く水平で、耳形状に広がる部分が4単位ある。そこに棒状工具ないし彫去により渦巻状沈線文が施されるほか、垂直ないし斜位に貫通する焼成前穿孔が1～2カ所認められる。口縁部の玉抱三叉文は両端に玉を抱くほか、その両側に半截竹管による浅い沈線が観察できる。体部には縦位隆帯文が1条貼付される。胎土が一般的でない。

器形 17 17 Z (353) が出土している。口縁部から体部にかけて文様帯が横位多段に区画され、その内部に斜行沈線文が施されるほか、有節沈線により楕円文や渦巻文が加えられる。口縁部には獸面突起が貼付され、その下位は橋状把手となる。胎土が一般的でない。

器形 18 18 K (379) が出土している。口縁部に施される三角形彫去文 b は、沈線部の長いことが特徴である。また、その周囲に描かれる波状沈線文の外縁に彫去が加えられる。

器形 19 352 が出土している。いわゆる有孔鏝付土器である。体部は隆帯文による方形やハート形のモチーフで装飾される。口縁部上端に漆によるものと思われる横位の平行沈線文や縦位列状の短沈線文が部分的に観察できる。器面はミガキが著しい。胎土は一般的でない。

146・360～363は円形やソーメン状浮線文が貼付される前期末葉の特徴をもつものである。363は口縁端部に爪形文が施される。364は円形浮線文の代わりに竹管状工具による円形刺突文が施される。

382～383は口縁端部に付く獸面突起である。384は突起の下に撚糸文が施される。

386は隆帯文や凹凸の深い沈線文により渦巻状文などが施される。

387～395は中期後葉のものと考えられる。387は部分的に渦巻状となる横位隆帯文が貼付される。体部には羽状集合沈線文が施される。388・389は折重なって出土したもので、おそらく入子状の埋め甕であったものと考えられる。口縁部の隆帯文上に刻目文が加えられる。390・391は口縁部から体部に「U」字状沈線文が施され、その内外に縄文が加えられたり、ナデが施されるものである。393・395は口縁部が無文のもので、平行沈線文の下に縄文が施される。

出土位置 前期末葉から中期前葉のものでは、135・146・164・348・350・352・358・361～364・366・368・371・380・382は柱穴群内部から出土している。356はS I 120の周堤付近から出土している。381は1次調査時に出土したもので、廃棄ブロック1の可能性が高い。385は廃棄ブロック2から出土した可能性がある。このほかのものは柱穴群および廃棄ブロックより集落外側で出土したものである。このうち、140・141・353・386はS D 405の周辺から出土している。中期後葉のものでは、388・389が3 C 2 - 3グリッドから出土している。この付近はIV層（大田切川火砕流堆積物層）の堆積が薄いため、上層か下層の区別が難しい。

(9) まとめ

a. 資料の分析

① 分析方法

ここでは、住居廃絶後に大量の遺物が外部から廃棄されたS I 117、廃棄ブロック4と重複して構築されたS I 403、層位別に遺物が取上げられた廃棄ブロック6の3カ所について、中期前葉土器の層位別出土傾向およびその特徴をみることにする。方法は、すべての口縁部片を集計し、個体識別法および口縁部計測法〔宇野1992〕の二種を用いた。この詳細は第V章上層土器(9)まとめに記してあるので参照されたい。

中期前葉の土器については、(4)で記述した通り、器形および口縁部文様の分類を行っている。器形は口縁部片だけでもある程度の判別が可能であり、文様も同様である。よって、口縁部片の器形と文様の組み合わせについて層位別に集計することとする。ただし、器形1・2・3の判別は、口縁部上位だけでは難しく混在している可能性がある。口縁端部に貼付される突起は、器形・文様の判別が不可能なものが多く、口縁部残存率を算出することも難しいことから、口縁端部の残存が良好なものを除き集計対象外とした。さらに、器形・文様が判別できないような小片も集計外とした。

対象とした土器は、単一の層から出土したものもあれば多層位間で接合したものもある。こうした資料を同一レベルで分析するためには、ある程度の資料操作が必要である。ここでは、多層位間で接合する土器について、最も破片数が多く、ある程度の偏りが認められる層位を代表させることとした。二層位間でほぼ等量の場合は、両者を併記することとした。分析に際しては、各遺構の特徴によって分析層位を決定した。

分析する3ヵ所とも、土砂と共に廃棄される遺物より古い時期の土器が混入することは十分考えられる。また、堅穴住居の覆土形成は、周堤土の崩落や柱根の腐植による陥没等によって複雑な過程をたどったものと予想される。これらを前提としつつも、層位別の大局的な特徴は得られるものと考えられる。

個体識別法は、同一の個体を識別してより精度の高い集計を行う必要がある。しかし、下層土器は出土数が多いことに加え、類似する文様が施されるため個体識別が難しい場合が多い。よって、集計結果は、口縁部計測法によるものを主体的に、個体識別法によるものを補助的に用いた。そして、口縁部計測法による集計結果はグラフ化し、個体識別法および口縁部計測法の数値データは表とした。

② S I 117の分析 (第69・70図 第6表)

覆土1～9層と周堤A①層上面およびB'層から土器が出土しているが、ここでは覆土1～9層出土土器について分析を行った。対象個数は121点である。出土量は2層が最も多く、4層以下ではわずかに過ぎない。各層における器形および文様の出土傾向をみることにする。

1層では、器形5の残存率が最も高く、文様はB(6)が多い。6は頸部文様帯をもつものである。ほかに文様A・D・G・I・Kがある。器形3では文様Bが出土するものの、量は少ない。他の器形も微量である。このほか、文様Rの20も1層から出土している。

1～2層では、器形5・6があり、文様はそれぞれK(50)・Q(35)である。

2層では、各器形とも残存率が1層に比べ大幅に高くなる。特に、器形5・6・7・9・12が著しい。器形2・3では、文様B(44・46)があるものの、器形5・6に比べ残存率は低い。器形5では文様G(2)・H(3)・M(12)が目立つ。このほか、B・F・Kなどがあり、Mを除くと覆土1とほぼ同じ内容である。器形6は文様B(5・34)が多く、ほかにD・Iがある。器形7では文様K(14)・V(22)がある。器形9では文様Q(18)・V(23)がある。

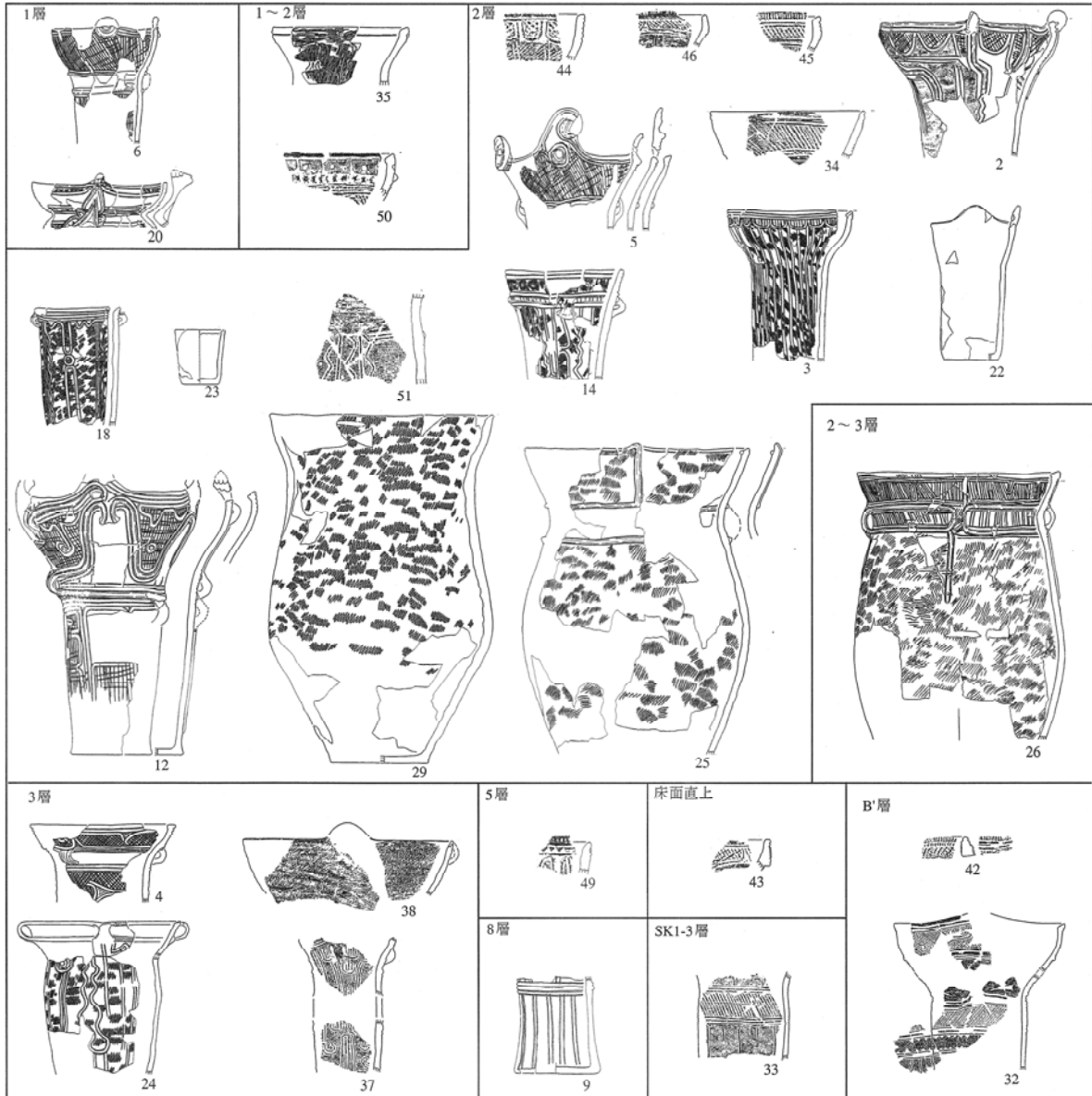
2～3層では、器形12の文様A(26)がある。26の斜位集合沈線文には波状沈線文が加えられる。

3層では、2層で主体を占めていた各器形の残存率が激減する。器形5は文様B・D・Pがわずかにある程度で、文様F・G・H・Mなどは確認できない。器形6も文様U(24)・Vが認められるだけである。一方、器形2・3は2層とほぼ同率を維持し、文様A・B(4)が認められ、3層の主体をなす。器形12では文様U(38)がある。なお、37も本層から出土している。

4層では、ほとんど遺物が出土せず、2B・5Aがわずかに確認できる。

5～8層では、器形3で文様A・B・Cが低率ながら確認できる。5層から3C(49)、8層から9が出土している。器形5・6などはほとんど確認できない。

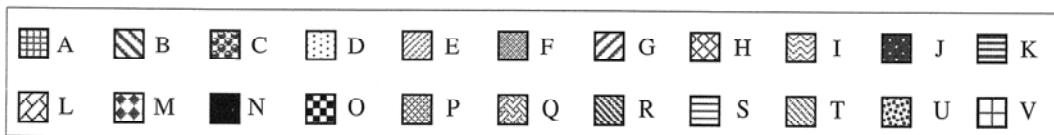
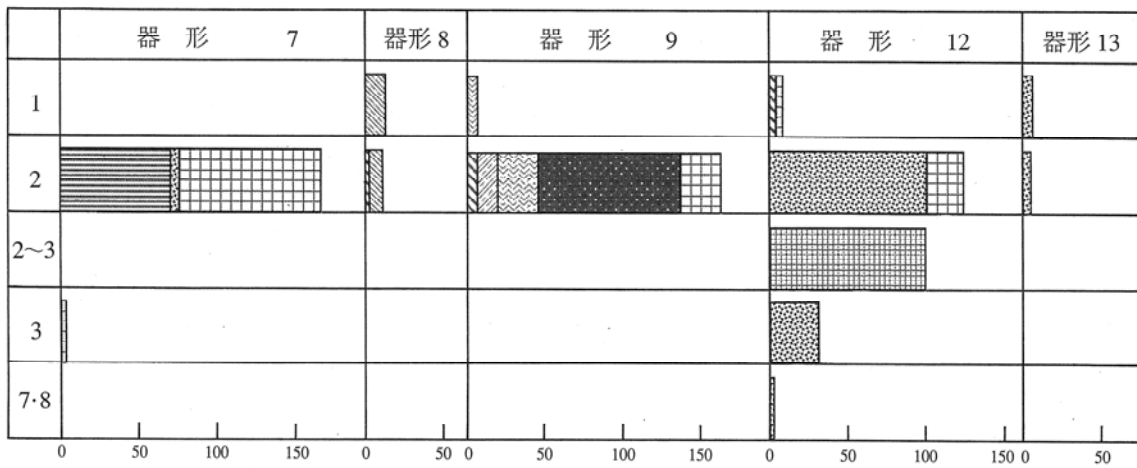
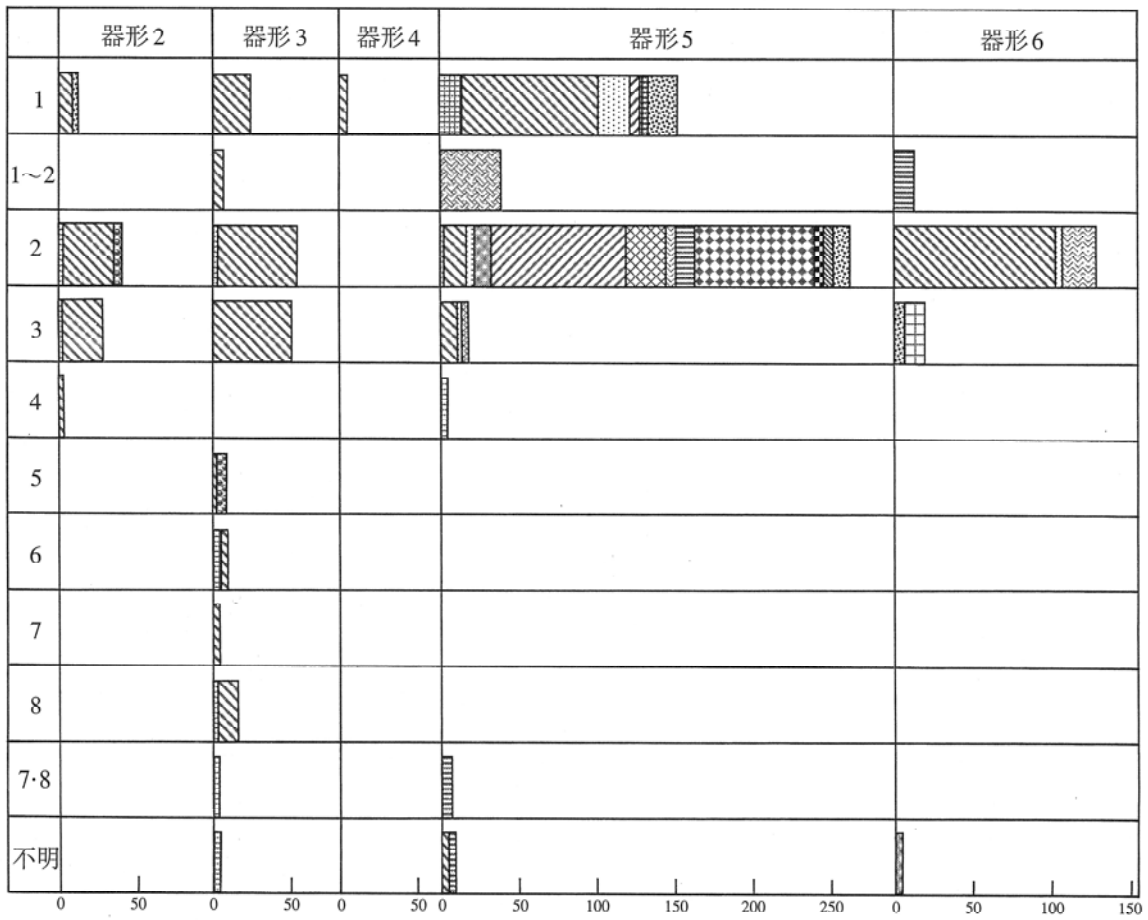
VI 下層の調査



第69図 SI117出土土器

床面直上では、ソーメン状浮線文が貼付される43が出土しているが、そのほかは皆無に等しい。

以上の結果について、土層内容とあわせ考察したい。S I 117の5～8層は、周堤A層の崩落したものが中心と考えられる。つまり、5～8層に含まれる土器は、S I 117構築時以前に存在し、堅穴の掘削、周堤の構築によって周堤A層に混入した可能性が高い。5～8層で主体的に確認された3 A・B・Cは、2層で主体を占める器形5・6を伴っていない。4層はほとんど遺物を含まない層であり、5～8層と2層の形成にある程度の時間差があったものと考えられる。3層では器形2・3の比率が上昇し、器形5・6に先行することが明らかである。2層は活発な廃棄活動により形成されたもので、器形5・6・7・9・12が主体を占めるようになる。以上から、5～8層で出現し3層で主体をなす器形2・3と、2層に主体を占める器形5・6・7・9・12との間に画期が認められよう。東側周堤下のB'層では、3 B (32) とソーメン状浮線文による斜格子目文が施される42が出土しており、S I 117の構築時期の上限を示すものと考えられる。これらは、5～8層および床面直上から出土したものと共通している点が指摘できる。



第70図 SI117出土土器残存率

VI 下層の調査

器形 2 破片数	A	B	C	U	合計
1		1		1	2
2	1	4	1		6
3	1	2			3
4		1			1

器形 2 残存率	A	B	C	U	合計
1		8.3		3.6	11.9
2	3.1	31.2	5		39.3
3	2.5	24.95			27.45
4		3.1			3.1

器形 3 破片数	A	B	C	合計
1		4		4
1~2		1		1
2	1	10		11
3		8		8
5		1	1	2
6	1	1		2
7		1		1
8	1	1		2
7・8	1			1
不明	1			1

器形 3 残存率	A	B	C	合計
1		23.5		23.5
1~2		6.25		6.25
2	3.1	49.6		52.7
3		49.05		49.05
5		2.5	6.25	8.75
6	5	4.2		9.2
7		4.2		4.2
8	3.1	12.5		15.6
7・8	3.5			3.5
不明	4.2			4.2

器形 4 破片数	B	合計
1	1	1

器形 4 残存率	B	合計
1	5	5

器形 5 破片数	A	B	D	F	G	H	I	K	M	O	P	Q	R	U	合計
1	1	2	1		1		1	1						3	10
1~2												1			1
2	1	4	2	2	1	1	1	2	1	1			1	1	18
3		2	1								1				4
4	1														1
7・8								1							1
不明		1						1							2

器形 5 残存率	A	B	D	F	G	H	I	K	M	O	P	Q	R	U	合計
1	14.3	85.4	20		6.25		1.5	3.6						18.35	149.4
1~2												38			38
2	2.5	14	5.2	10.45	84.5	25	6.25	11.85	75	5.6			6.2	10.4	257
3		10.45	2.8								4.2				17.45
4	4.2														4.2
7・8								6.2							6.2
不明		4.5						4.2							8.7

器形 6 破片数	B	D	F	I	K	U	V	合計
1~2					1			1
2	2	1		2				5
3						1	1	2
不明			1					1

器形 6 残存率	B	D	F	I	K	U	V	合計
1~2					12.5			12.5
2	99.5	4.2		20.8				124.5
3						6.25	12.5	18.75
不明			4.2					4.2

器形 7 破片数	K	U	V	合計
2	2	1	1	4
3			1	1

器形 7 残存率	K	U	V	合計
2	68.25	5.3	87.5	161.1
3			3.1	3.1

器形 8 破片数	B	T	合計
1	1	1	2
2	1	1	2

器形 8 残存率	B	T	合計
1		12.5	12.5
2	2.5	8.3	10.8

器形 9 破片数	B	E	I	J	V	合計
1			1			1
2	1	1	1	1	1	5

器形 9 残存率	B	E	I	J	V	合計
1			6.25			6.25
2	6.2	12.5	25	87.5	25	156.2

器形 12 破片数	A	B	U	V	合計
1		1		1	2
2			5	2	7
2~3	1				1
3			2		2
7・8			1		1

器形 12 残存率	A	B	U	V	合計
1		4.2		4.2	8.4
2			97.9	22.95	120.9
2~3	96.8				96.8
3			30		30
7・8			2.5		2.5

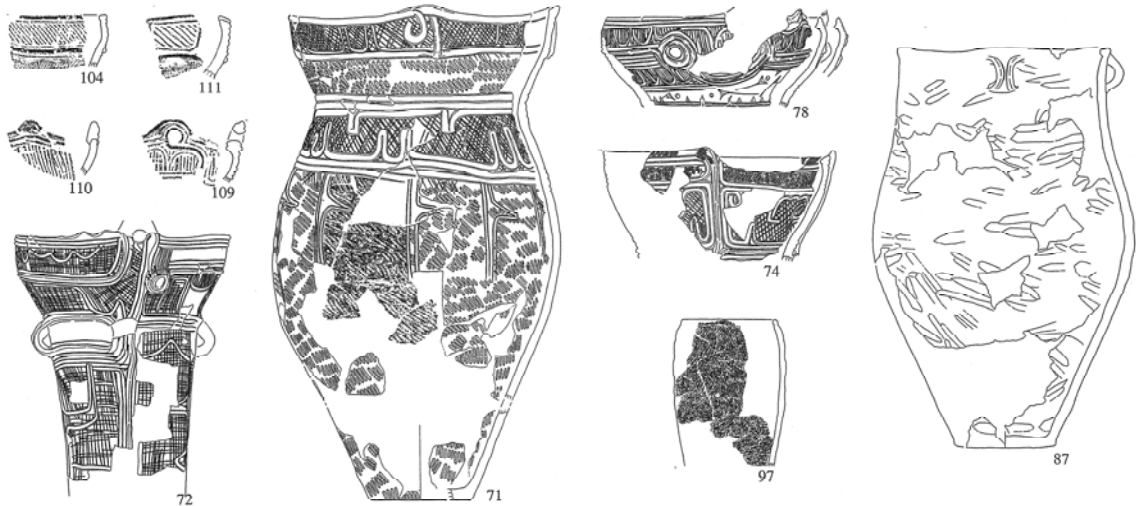
器形 13 破片数	U	合計
1	1	1
2	1	1

器形 13 残存率	U	合計
1	6.25	6.25
2	5	5

第 6 表 SI117 出土土器破片数および残存率

③ S I 403 の分析 (第 71・72 図 第 7 表)

廃棄ブロック 4 と重複して構築されたため、周堤 A①・②層中に多量の遺物が含まれている。そして、覆土 5 層出土土器の多くは、これらの崩落したものと考えられる。このため、周堤 A 層・B' 層および覆土 5 層の間で接合するものが多数を占めており、層別別の傾向を見出すことは難しい。ただし、周堤 A①・②層の下に形成される B' 層は、S I 403 構築時の周堤によって遮蔽されたため住居構築後の遺物混入がほとんどなかったものとする。よって、ここでは B' 層から出土したもの、および B' 層と他層とで接合したものを一括し、それらを集計することとする。これにより、S I 403 構築直前までの土器様相を把握できるものとする。なお、周堤 A 層ないし覆土 1~5 層出土のもので、B' 層と接合しないものも集計した。



第71図 SI403 B'層出土土器

	器形 1	器形 2	器形 3	器形 4	器形 5
B'層					

	器形 6	器形 8	器形 10	器形 12	器形 13	器形 14
B'層						

第72図 SI403 B'層出土土器残存率

B'層出土土器およびそれと同一個体の土器は、46点確認され、そのうちB'層から中心的に出土したものを第71図に掲載した。器形3では文様B(71)が高率を占める。71は周堤A②層の直下から出土したもので、S I 403構築時に押しつぶされた可能性が高い。また、頸部文様帯をもたず、体部文様帯aに文様Dが施されることを特徴とする。器形5は最も多く確認され、文様はB・D・E(72・109)・G・H・Jが主体的なほか、A(110)・F(73)などを確認できる。72は口縁部文様帯a・bを保持しつつ、頸部文様帯が部分的に認められ、注目される。73も口縁部文様帯が部分的に二段構成となり、頸部文様帯も幅が一定していない。器形6では、文様B・D・K(74)・L・Qが確認できる。74は口縁部文様帯a・bが縦位区分隆帯により四分分割されることが特徴である。器形8は文様F・K・Rが認められる。器形14の文様V(87)は、口縁部内面が2である。B'層出土土器は、廃棄活動開始から住居構築直前までの時期幅をもつ可能性が高い。

上記以外の土器は、合計44点確認された。B'層出土土器とほぼ同じ器形・文様が確認され、違いを見出すことは難しい。ただし、器形5ではB'層出土土器に確認されなかった文様Lが認められるほか、器形6でも文様L・Mが認められることが注目される。

VI 下層の調査

器形1 破片数		B	合計	器形1 残存率		B	合計	器形2 破片数		A	B	C	合計	器形2 残存率		A	B	C	合計
	B'含	1	1		B'含	2.5	2.5		B'含	1	1	1	3		B'含	6	9.4	12.5	22.1
	B'外	1	1		B'外	11	11		B'外	1	1	1	3		B'外				
器形3 破片数		A	B	合計	器形3 残存率		A	B	合計	器形4 破片数		E	P	合計	器形4 残存率		E	P	合計
	B'含	2	5	7		B'含	10.6	184.9	195.5		B'含	1	1	2		B'含	5	5	5
	B'外	2	7	9		B'外	6.6	45	51.6		B'外	1	1	2		B'外	12		12
器形5 破片数		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	L	Q	U	合計				
	B'含	1	2		5	3	2	1	3		1			1	19				
	B'外	1	2	1	2		3	1	2	2		4	2		20				
器形5 残存率		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	L	Q	U	合計				
	B'含	10	34.6		45	106.2	22.9	50	61.1		45.8			38	413.6				
	B'外	2.5	25	38	13.5	5.5	11.4	33.3	7.2	20.8		32.8	10.4		194.9				
器形6 破片数		B	C	D	E	J	K	L	M	Q	合計								
	B'含	1		1			2	1		1	6								
	B'外		1		1	1		1	1		5								
器形6 残存率		B	C	D	E	J	K	L	M	Q	合計								
	B'含	56		50			68.6	43.7		8.3	226.6								
	B'外		3.6		2.5	4.2		31.2	5		46.5								
器形7 破片数		D	合計	器形7 残存率		D	合計												
	B'外	1	1		B'外	3.1	3.1												
器形8 破片数		F	K	O	R	合計	器形8 残存率		F	K	O	R	合計						
	B'含	1	1	1	1	4		B'含	18.7	50	3.1	3.1	56.2						
	B'外			1		1		B'外			37.5		37.5						
器形10 破片数		U	合計	器形10 残存率		U	合計	器形12 破片数		B	E	U	合計	器形12 残存率		B	E	U	合計
	B'含	1	1		B'含	19	19		B'含	1	1	2	3		B'含	9.3		31	40.3
	B'外				B'外				B'外	1	2	3			B'外		18.7	10.2	28.9
器形13 破片数		U	合計	器形13 残存率		U	合計	器形14 破片数		V	合計	器形14 残存率		V	合計				
	B'含	3	3		B'含	25	25		B'含	1	1		B'含	87.5	87.5				

第7表 SI403出土土器破片数および残存率

④廃棄ブロック6の分析 (第73・74図 第8表)

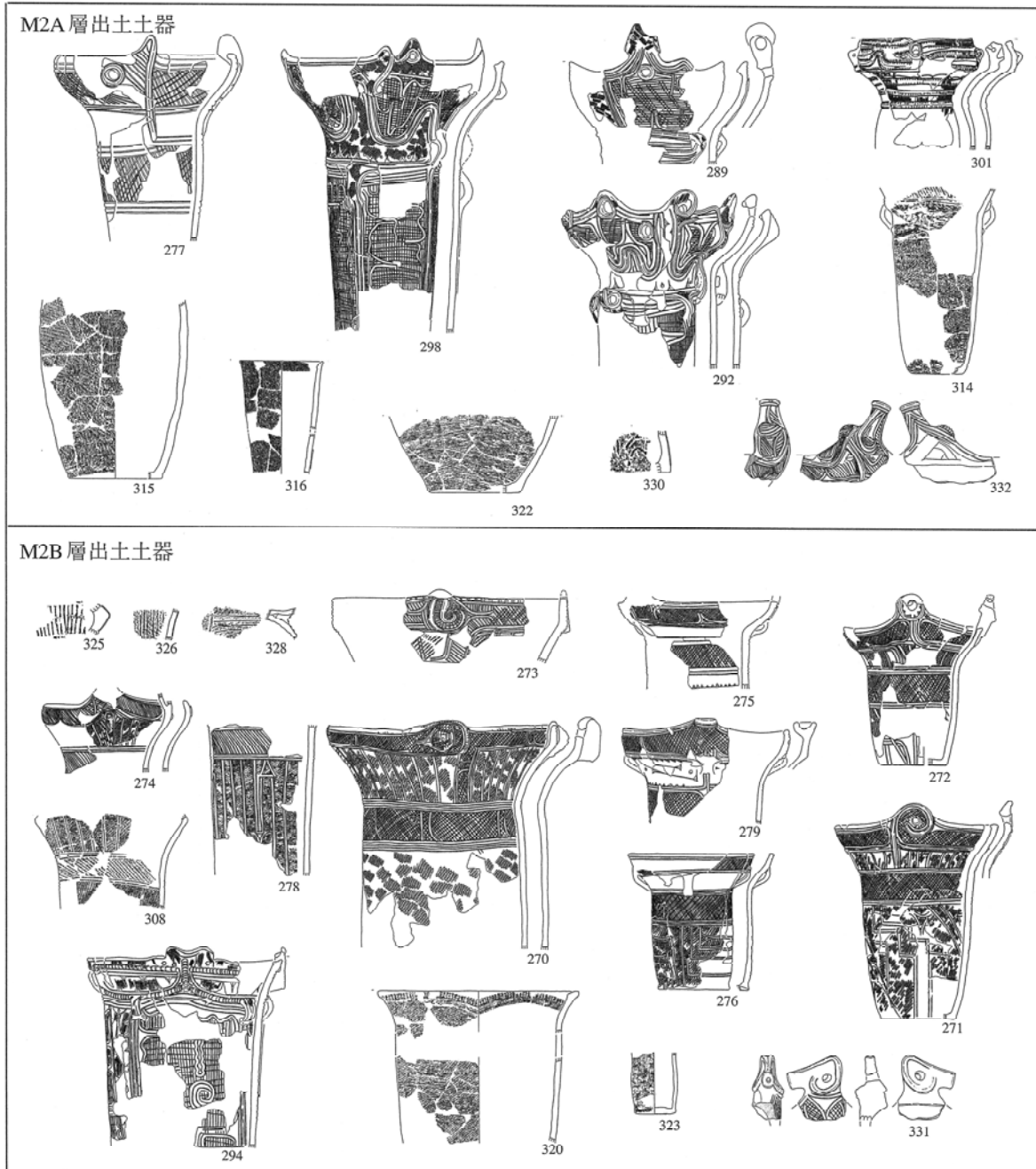
廃棄ブロック6は、M1およびM2層により形成される。そのうち、M2層はブロック中央の最も盛り上がる部分などでM2A・M2B層に上下二分されている。また、ブロックの縁辺部では、ブロック中央からの崩落等によるKN層がある。さらに、M2層の下では廃棄ブロック形成以前の旧表土層であるB層を確認できる。このほか、Va・Vb層およびM層と記載されたものは、本来M1ないしM2層に帰属すべきものであるが、調査時の取り上げ層位をそのまま使用した。全体で174点が確認された。ここでは、層位の安定しているM1・M2 (M2A・M2B)・B層から出土した153点について分析を行う。なお、M2層、M2A層、M2B層にまたがって存在する土器の出土層位については、M2層に偏りが認められるものをM2層とし、M2AおよびM2B層間で接合するもののいずれにも偏りが認められないものもM2層とした。したがって、M2層出土土器は、M2層として取り上げられたもののほかに、M2A・M2B層の一部を含む。また、M1層とM2A・M2B層との間で接合したものはM1～M2層とした。

M1層は偏りを認められるものは少なく、M2層と接合するものが多い。

M1～M2層では、器形6の残存率が高く、文様D・I・Mが確認された。また、器形5でも文様Mが認められた。

M2層では、器形5が主体を占め、次いで器形3・6がやや多い。器形5では文様A・I・J・K・L・Nが多いほか、Qなど多様な文様が確認された。

M2A層では、器形5の残存率が最も高く、他の器形では低率となっている。器形5の文様はM (288・289・292)が目立つ。ほかにB (277)・Fなどが含まれる。器形11では文様Q (301)が認められる。

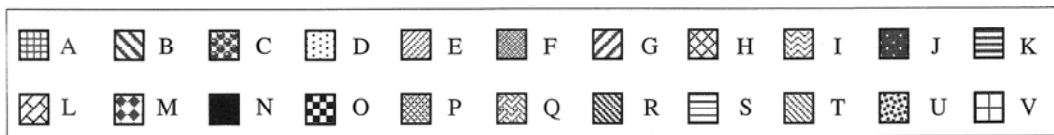
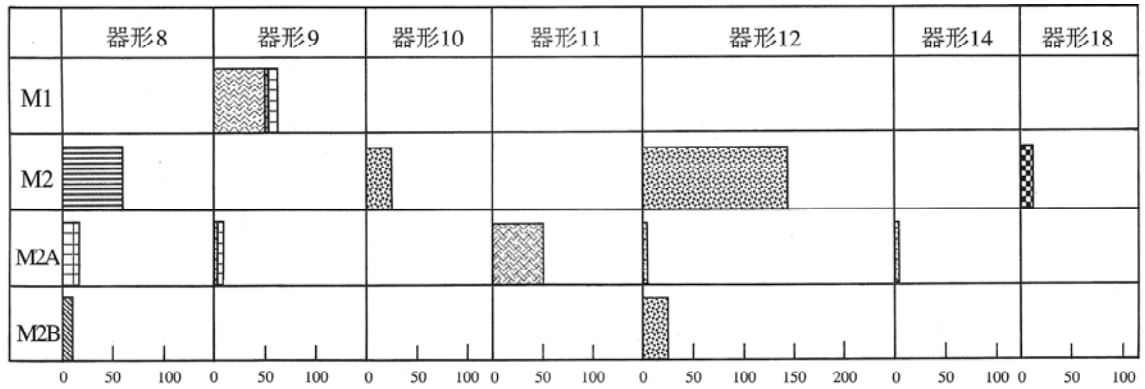
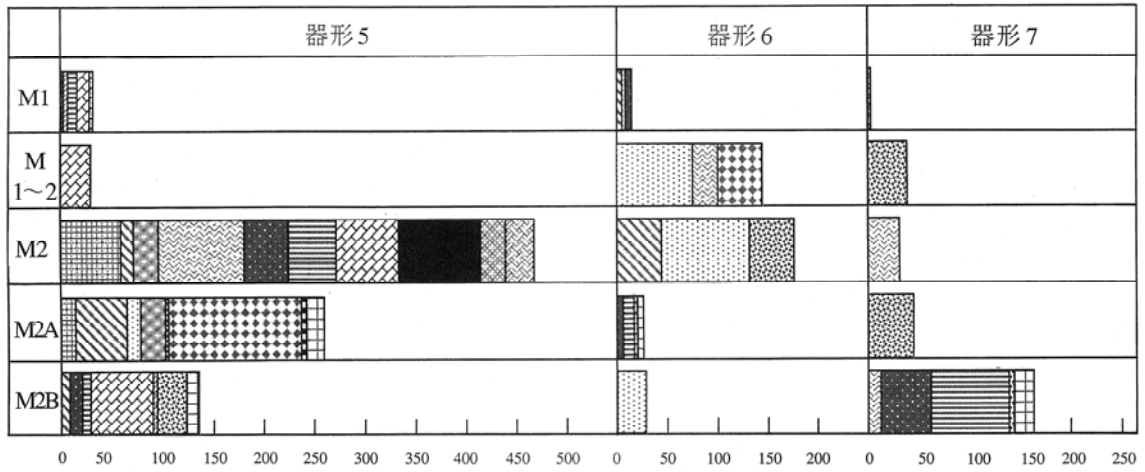
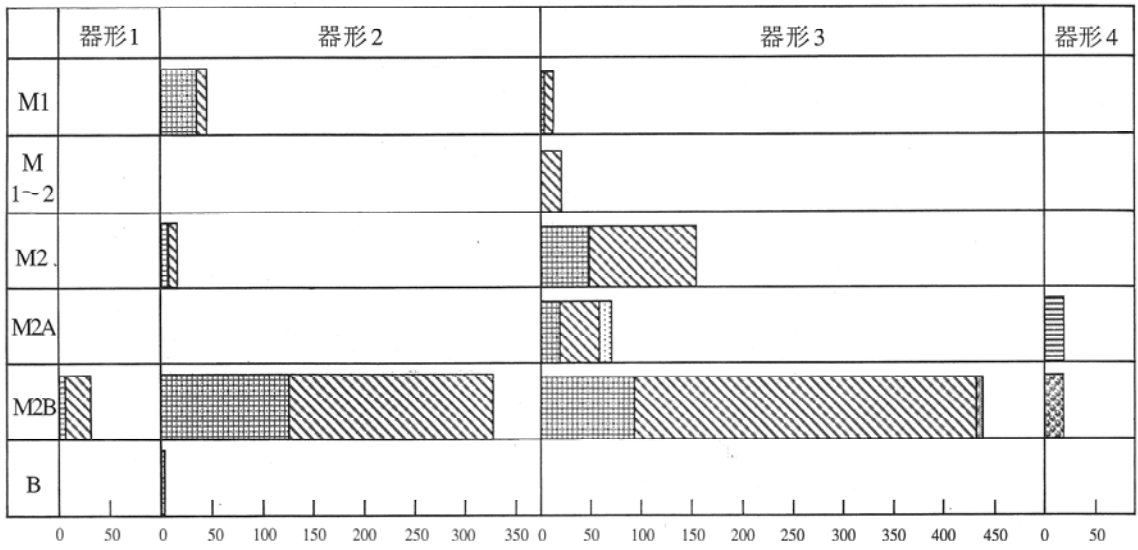


第73図 廃棄ブロック6出土土器

M2B層では、器形2・3の残存率が他を圧倒し、器形7も大幅に増加する。器形1も本層からのみ出土している。一方、M2A層で主体的であった器形5は減少する。器形2では、文様A(274)およびB(270・273)で占められる。器形3も文様A・B(271・272・275・276・279)が高率を占める。いずれも頸部文様帯をもたず、体部文様帯a・b・cに区画されるもの(275)も認められる。器形7では文様J・K(294)が認められる。このほか、前期末葉の特徴を示すもの(325・326・328)も出土している。

以上の結果について、土層内容とあわせ考察したい。廃棄ブロック形成土の最下層であるM2B層と、その直上のM2A層とでは、器形・文様に大きな違いを認めることができる。すなわち、器形2・3から5・6への変化が認められたことである。文様ではA・B中心からM中心へと変化している。一方、M2A層の直

VI 下層の調査



第74図 廃棄ブロック6出土土器残存率

器形1 破片数		A	B	合計	器形1 残存率		A	B	合計	器形2 破片数		A	B	合計	器形2 残存率		A	B	合計					
	V		1	1		V		4.1	4.1		Vb		1	1		Vb			3.1					
	Vb	1		1		Vb	4		4		B	1		1		B	3.1		3.1					
	M2B	1	2	3		M2B	6.3	25	31.3		M1	2	2	4		M1	35.3	10.3	45.6					
											M2	2	2	4		M2	7.5		8.3					
											M2B	6	9	15		M2B	126.4	201.7	328.1					
器形3 破片数		A	B	D	F	合計	器形3 残存率		A	B	D	F	合計		A	B	D	F	合計					
	Va					1		Va		6.2			6.2		Va				6.2					
	Vb	2	2			2		Vb		6.3			6.3		Vb				6.3					
	KN	1	3			5		KN	9.1	19.2			28.3		KN				28.3					
	M	1		1		2		M	1.7		6.2		7.9		M				7.9					
	M1		2			3		M1	3.1	9.3			12.4		M1				12.4					
	M1~M2	2	1			1		M1~M2		20.1			20.1		M1~M2				20.1					
	M2	3	8			10		M2	47.8	105.6			153.4		M2				153.4					
	M2A	3	9	1		13		M2A	18.7	39.3	12		70		M2A				70					
	M2B		26		1	30		M2B	92.5	338.6		6.2	437.3		M2B				437.3					
	不明		1			1		不明		25			25		不明				25					
器形4 破片数		C	K	合計	器形4 残存率		C	K	合計		C	K	合計		C	K	合計		C					
	M2A		1	1		M2A		18.7	18.7		M2A		18.7	18.7		M2A			18.7					
	M2B	1		1		M2B	18.7		18.7		M2B	18.7		18.7		M2B			18.7					
器形5 破片数		A	B	D	E	F	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	U	V	合計						
	Vb		1	1		1												3						
	KN			1														1						
	M1			1	1				1	1						1		5						
	M1~M2									1								1						
	M2	1	1			1	1	2	3	1		1		1				13						
	M2A	2	2	3		2			1		3		1				2	16						
	M2B		1					1	2	2					1	2	1	10						
器形5 残存率		A	B	D	E	F	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	U	V	合計						
	Vb		12.5	6.2		37.5												56.2						
	KN			4.1														4.1						
	M1			2.2	4.1				9.3	12.5						3.5		31.6						
	M1~M2									30								30						
	M2	60	12.5			25	85	44.1	46.8	62.5		81		25	28.1			470						
	M2A	14.5	51.3	13.3		24.9			3.1		131.7		5				17.5	261.3						
	M2B		8.3					12.5	8.6	62					4.2	29.1	12.5	137.2						
器形6 破片数		B	D	I	J	K	M	U	V	合計		B	D	I	J	K	M	U	V	合計				
	Vb								1	1										1				
	M						1			1										1				
	M1	1	1		2					4										4				
	M1~M2		2	1			1			4										4				
	M2	1	1					1		3										3				
	M2A			1	1			1	1	4										4				
	M2B		1							1										1				
器形6 残存率		B	D	I	J	K	M	U	V	合計		B	D	I	J	K	M	U	V	合計				
	Vb								8.3	8.3										8.3				
	M						6.2			6.2										6.2				
	M1	5	3.2		6.6					14.8										14.8				
	M1~M2		106	25		43.7				174.7										174.7				
	M2	43.7	56.2					44		143.9										143.9				
	M2A			6.2	10.5			3.1	6.2	26										26				
	M2B		28.1							28.1										28.1				
器形7 破片数		I	J	K	U	V	合計	器形7 残存率		I	J	K	U	V	合計		I	J	K	U	V	合計		
	KN		1				1		KN		4.1				4.1		KN		4.1			4.1		
	M1				1		1		M1				2.5		2.5		M1			2.5		2.5		
	M1~M2				1		1		M1~M2				45		45		M1~M2			45		45		
	M2	1					1		M2	31.2					31.2		M2					31.2		
	M2A				2		2		M2A					38.85	38.85		M2A					38.85		
	M2B	1	1	2	1	1	6		M2B	12.5	50	77.5	5	19.5	164.5		M2B					164.5		
器形8 破片数		K	R	V	合計	器形8 残存率		K	R	V	合計		K	R	V	合計		K	R	V	合計			
	M2	2			2		M2	59.6			59.6		M2			59.6		M2			59.6			
	M2A			1	1		M2A			16.7	16.7		M2A			16.7		M2A			16.7			
	M2B		1		1		M2B		10		10		M2B		10			M2B		10		10		
器形9 破片数		I	U	V	合計	器形9 残存率		I	U	V	合計		I	U	V	合計		I	U	V	合計			
	KN		1		1		KN			10.4	10.4		KN			10.4		KN			10.4			
	M1	1	1	1	3		M1	50	3.1	9.3	62.4		M1			3.1	9.3	62.4				62.4		
	M2A		1	1	2		M2A		3.1	6.2	9.3		M2A			3.1	6.2	9.3				9.3		
器形10 破片数		U	合計	器形10 残存率		U	合計	器形11 破片数		Q	合計	器形11 残存率		Q	合計	器形14 破片数		U	合計	器形14 残存率		U	合計	
	M2	1	1		M2	25	25		M2A	1	1		M2A	1	1		M2A	4.3	4.3		M2A	4.3	4.3	
器形12 破片数		U	合計	器形12 残存率		U	合計	器形18 破片数		O	合計	器形18 残存率		O	合計		O	合計		O	合計		O	合計
	M2	4	4		M2	142.5	142.5		M2	1	1		M2	12	12		M2	12	12		M2	12	12	
	M2A	1	1		M2A	4.2	4.2																	
	M2B	1	1		M2B	25	25																	

第8表 廃棄ブロック6出土土器破片数および残存率

上に位置するM1層と接合関係が認められたM1~M2層は、文様L・Mが主体的であり、M2A層と共通している。このことから、M2層のなかでも文様L・Mの後出性が認められよう。なお、M2A層から前期末葉の特徴を示すもの(330)や器形2ないし3とみられるもの(332)のほか、M1層からも器形2・3が若干出土しているが、これらは土砂などと共に古い土器が混入したものと考えられる。

b. 土器の変遷

資料の分析から得られたデータをもとに、土器の変遷について考察したい。特に、出土量の多い器形2・3・5・6を中心にみることにする。(第75図)

①下層Ⅰ期

S I 117-5~8層および3層と廃棄ブロック6-M2B層では、器形2・3、文様A・Bにほぼ限定される。特に廃棄ブロック6において顕著に認められることから、これら二者をほぼ同じ段階とみなし、下層Ⅰ期とする。

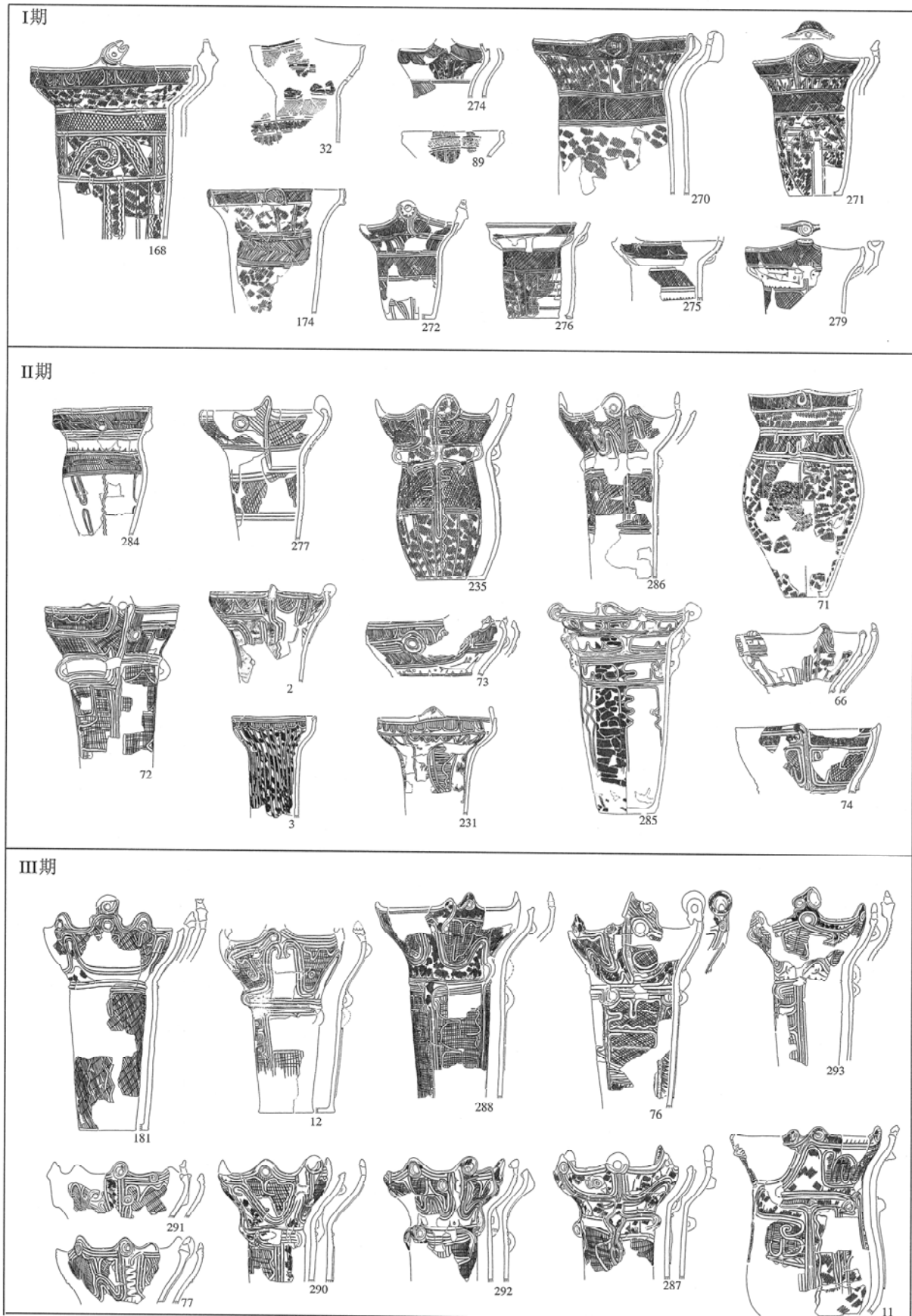
器形は2・3のほかに1も含まれる。文様帯は口縁部および体部文様帯に区画され、縦位区画は認められない。また、頸部文様帯が形成されないことも特徴である。口縁部文様帯はa・bに二分される。体部文様帯はa・b・cに三分されるものと、a・cに二分されるものがある。三分されるものは少ないが、S I 117周堤B'層から32が出土していることから、本期のなかでも古相を示すものと考えられる。

口縁部及び体部文様帯に加飾される斜位集合沈線文や斜位格子目文には、三叉状や「M」字状に沈線文が加えられるものがあるが、一筆書きのように連続しないことが特徴である。また、三叉状の彫去文や円形彫去文が加えられる例が目立つ。口縁端部に爪形文が加えられる文様C(89)は本期に特徴的なものである。口縁部文様帯bには橋状把手が貼付されるものがあるほか、玉抱三叉文aないしbや縦位平行沈線文が施されたり、無文帯とするものがある。特に、玉抱三叉文aは体部文様帯が三分されるものに認められることから、古相の要素といえよう。口縁部文様帯における縦位隆帯文の貼付はわずかで、体部まで達するものは認められない。体部文様帯cでは縦位平行沈線文や波状沈線文のほか、階段状ないし「L」字状沈線文が施されるものが多い。口縁部内面の仕上げは1が主体的で、隆帯が貼付されるものはほとんどない。

②下層Ⅱ期

S I 117-1・2層では器形の中心が2・3から5・6に変化することが明らかで、文様もA・BのほかにD・F・G・H・I・Kなど多種が認められるようになる。また、S I 403のB'層出土土器においても、器形5・6が中心で、文様もD・E・F・G・H・Jが主体となり、S I 117-1・2層とはほぼ共通する。一方、廃棄ブロック6において、これらの文様よりM1~M2層およびM2A層で主体をなす文様L・Mの後出性が認められている。S I 117覆土およびS I 403のB'層出土土器に文様LないしMが1点しか含まれていないことから、これらと廃棄ブロック6-M1~M2層・M2A層との差異を認めることが可能であろう。S I 403-B'層から主体的に出土した土器(第71図)をみてもその違いが明らかである。さらに、S I 403のB'層出土土器以外のものに文様L・Mが多いこともこれを補強する。よって、S I 117-1・2層とS I 403-B'層出土土器から下層Ⅰ期の内容を差し引き、かつ、文様L・Mを除外したものを下層Ⅱ期としたい。廃棄ブロック-M2層にもⅡ期のものが多く含まれる。

主体をなす器形5・6では、口縁部文様帯bが欠如しはじめ、頸部文様帯をもつものが現れることが特徴である。ただし、頸部文様帯をもたないもの(71)も残存する。72のように口縁部文様帯a・bをもちつつ部分的に頸部文様帯が区画される例は、過渡的な様相とも考えられる。口縁部および頸部文様帯は横位区画隆帯によって区画され、縦位区分帯が形成されるものが認められる。口縁部文様帯が縦位区画隆帯により四分されることも本期の特徴である。286の横位区画隆帯は部分的に「M」字状を呈し始めており、文様L・Mへと発展する要素と考えられる。体部文様帯はⅠ期の特徴を保持してa・cに二分されるものが主体を占めるほか、横位区画されないものも認められるようになる。ただし、縦位に四分されるものはほとんど認められない。このほか、口縁部文様帯より下に文様帯が区画されないものが増加する。



第75図 土器の変遷

口縁部文様帯では、斜位集合沈線文や斜位格子目文などに波状沈線文や半円状沈線文が加えられるほか、I期において認められなかった格子目文や縦位集合沈線文などが半円状沈線文の内部に充填されることが特徴といえる。また、平行沈線文が描かれる文様Jや三角形彫去文bに円形彫去文が併用される文様Kも目立つ。口縁部に瘤状や環状の突起が貼付されるのも本期の特徴である。頸部文様帯は無文のものや縄文地文とするものなど装飾性が低いものが主体的である。体部文様帯aの文様は、口縁部文様帯と共通するものが多い。ただし、71は体部文様帯に文様Dが施されることから本期に位置付けられる。口縁部の縦位隆帯文は体部まで達するようになり、橋状把手の貼付も顕著となる。口縁部内面の仕上げは1のほかに隆帯が貼り付けられる2が目立つようになる。

③下層Ⅲ期

廃棄ブロック6のM1～M2層およびM2A層で主体をなす文様L・Mが中心となる段階を下層Ⅲ期とする。M2層ではI・Ⅱ期のものを差し引いたものがⅢ期に該当する。

器形5・6では、口縁部文様帯と頸部文様帯が「W」字状区画隆帯によって上下に入り組むようになる。また、Ⅱ期で出現した縦位区分帯をもつものも一般的である。体部文様帯は縦位区画隆帯により四分されるものが主体を占め、Ⅱ期まで認められた横位区画はほとんどみられなくなる。

口縁部文様帯では、Ⅱ期で出現した文様D・Eと同様のモチーフが隆帯区画内に加えられるほか、縄文を地文として三角形彫去文が施される文様N(287)も施される。これらの中には、頸部文様帯および縦位区分帯の装飾性が低いものと高いものがある。前者(12・181)は口縁部から体部上位にかけて橋状把手が配されるほか、口縁端部に環状突起などが発達するほかは、Ⅱ期の要素が残存しており、本期でも古相のものと考えられる。後者では頸部文様帯や縦位区分帯に本期に特徴的な玉抱三叉文cや玉垂文などが加えられる。また、口縁端部には環状突起などが多数配されるほか、口縁部から体部上位に橋状突起・リボン状突起・三脚突起など様々な突起が貼付される。口縁部文様帯の斜位格子目文や格子目文に二種類の原体によるc種が用いられことも後者の特徴である。口縁部内面の仕上げは隆帯が貼付される2のほか、これに縄文などが加えられる3が目立つ。

以上のように、各遺構の層位データからI～Ⅲ期の変遷を認めることができる。各期における文様帯の変化はスムーズで、文様も系統的といえる。

上述した主体的な土器以外のものにも、各期を代表する文様が施されるものと考えられる。特に、玉抱三叉文(文様K)はa→b→cの大きな変遷を辿るものと考えられ、所属時期決定の参考材料となろう。また、ヘラ描きによる沈線文や短沈線文が施される文様Qは、廃棄ブロックM2A層で高率であることから、Ⅲ期に中心を置くものと考えられる。文様U・Vなど装飾の乏しいものの時期判断は難しいが、横位区画隆帯により頸部文様帯が意識されるものや縦位隆帯文が貼付されるものはⅡ期以降のものと考えられる。また、口縁部内面の仕上げに、1→2→3の大きな変遷が認められることも参考となろう。いずれにせよ、主体的な土器以外のものについては、判断材料に乏しいため所属時期を明らかにするまでに至っていない。

c. 編年的位置

頸南地域における中期前葉の土器は、板倉町峯山B遺跡[秦ほか1986]・新井市原通八ツ塚遺跡[古川・伊藤1982]・中郷村南田遺跡[親跡1988]・籠峰遺跡[小池1996]・妙高村道添遺跡[室岡1994・1995]・柿ノ木町遺跡[親跡1992]で比較的まとまっている。いずれも県内の海岸部に広く分布する北陸系土器群と様相を異にし、中部高地の影響を強く受けた地域色の濃いものである。

和泉A遺跡下層では、ソーメン状浮線文が貼付される前期終末の特徴を示すものが出土しているものの、そ

の量はごく微量で、主体をなすものではない。S I 117周堤B'層では、これとI期の土器が伴出していることから、むしろI期古相に伴う可能性を指摘できる。よって、I期の上限は中期初頭に求めることが妥当と考える。

I期のものは、南田遺跡・妙高高原町関川谷内遺跡〔小池1998b〕に若干認められる程度である。

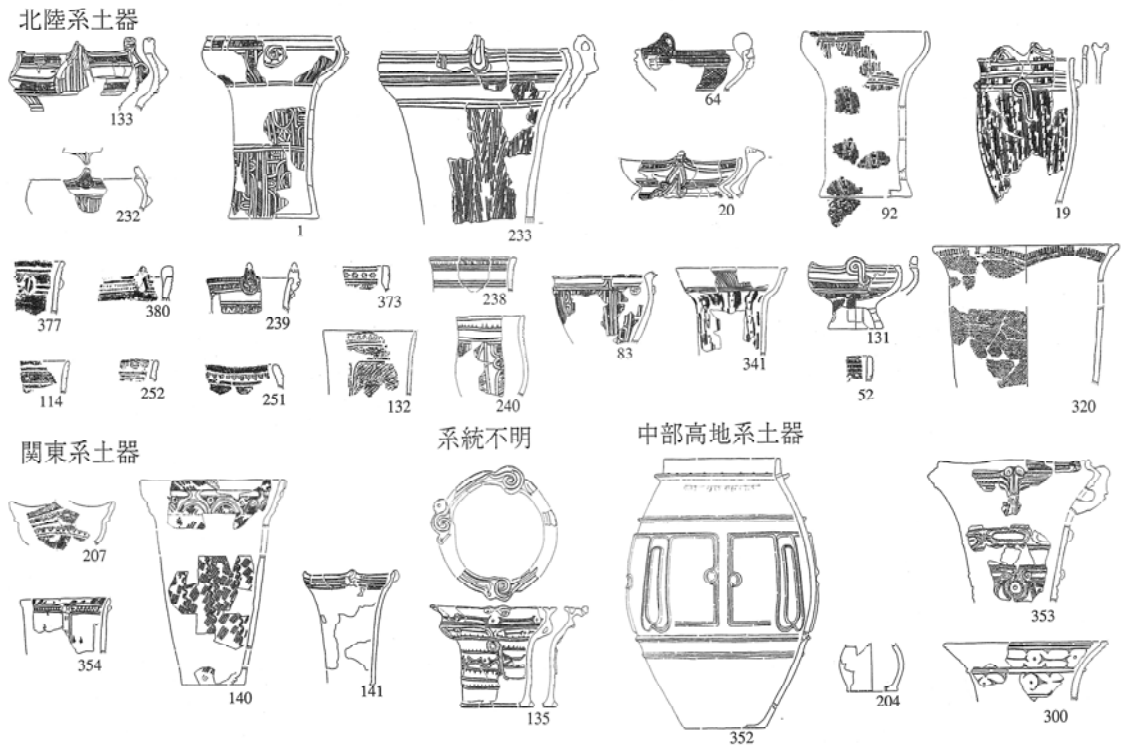
II期のものは、県内では峯山B遺跡のほか、堀之内町清水上遺跡〔寺崎1996〕・小千谷市金塚遺跡〔大滝・寺崎1999〕にも散見され、信濃川中・上流域や海岸部にも広がりがみられる。また、長野県では三水村上赤塩遺跡〔寺内1991〕・武石村岩ノ口遺跡〔塩入1993〕に認められる。長野県における当該期の集成〔上田・三上1995〕によると、東北信の多くの遺跡に分布するようである。

III期のものは、県内では峯山B遺跡において本稿の文様Mが認められる。また、柏崎市尻振坂遺跡〔中野1996〕にも類似資料がある。長野県では上赤塩遺跡に本稿の器形5・文様Lのものがある。

和泉A遺跡に隣接する籠峰遺跡SK3からは、中期前葉の良好な一括資料が得られている。五領ヶ台II式やその直後型式の影響が窺えるもので、報文でも五領ヶ台直後型式以降に位置づけられている。この一括資料中に、本稿I～III期のものが含まれていないことが注目される。また、和泉A遺跡から東方約3kmに位置する道添遺跡や北東約3kmに位置する南田遺跡、および北方約5kmに位置する原通八ツ塚遺跡では、籠峰遺跡SK3資料に類似するものや、飯山市深沢遺跡〔西沢1982〕を指標とする「仮称“深沢式”」〔高橋1989〕がまとまっている。また、新崎式後半期を主体とする海岸部の吉川町長峰遺跡〔室岡・関ほか1984、小池1996〕でも、「仮称“深沢式”」と五領ヶ台直後型式とみられるものが出土しており、籠峰遺跡SK3一括資料などと同様の在り方を示している。しかし、これらの遺跡では本稿I～III期のものは認められていない。一方、和泉A遺跡下層土器に「仮称“深沢式”」は含まれない。このことは、下層土器と近接する各遺跡との時期差を示すものと考えらるべきであろう。よって、III期の下限を籠峰遺跡SK3一括資料および「仮称“深沢式”」以前とすることが可能と考える。

新潟県内における当該期の土器編年は、層位的な検証が行われた巻町豊原遺跡〔前山1994〕の成果に基づき、いくつかの論考が提示されている〔寺崎1996、佐藤1997など〕。これらは北陸系土器の変遷を中心としている。和泉A遺跡下層から出土した北陸系土器を第76図に示した。これらの多くが胎土G種であり、搬入品である可能性が高い。このうち、92はS I 403のB'層を含むものであり、II期に所属する可能性が高い。器形5で、口縁部に等間隔に縦位平行沈線文が施される特徴は、豊原遺跡第V群2期にみられるものである。20はS I 117の東側周堤付近と覆土2層とで接合しており、II～III期に所属するものであろう。このほか、320は廃棄ブロック6のM2B層から出土したものだが、52と共に東北地方の円筒系土器の影響を受けたものとも考えられる。これ以外は、各廃棄ブロックや遺構外から出土したものだが、層位的な検証を行えるものはない。器形4～8を中心に、彫刻蓮華文が施される文様Rのほか、間隔を置いて横位平行沈線文が施される文様Tが主体をなしている。文様Tには平行沈線間の区画内文様を省略されたものがあり、豊原遺跡第V群2期にも認められる特徴である。また、文様Rは豊原遺跡第VI群において主体的に用いられるものである。以上から、和泉A遺跡の下層土器は、豊原遺跡第V群2期～第VI群と部分的に併行するものとみられ、II期は豊原遺跡第V群2期と接点を持つ可能性を指摘できる。ただし、頸城地方では新潟平野の様相と単純に比較することは難しく、今後更に検討を要する。

関東系土器は非常に少ない。207は廃棄ブロック1から出土したもので、五領ヶ台Ia式〔今村1985〕と考えられる。また、140・141・354は五領ヶ台II式と考えられるが、いずれも遺構外から出土したものであり、



第76図 異系統の土器

本稿Ⅰ～Ⅲ期のいずれと接点をもつかは不明といわざるを得ない。

中部高地系土器では、352は有孔鏝付土器であるが、これも柱穴群から出土しているため所属時期は不明である。204も有孔鏝付土器の可能性はある。353は猪沢式と考えられるが、これも集落外から出土しており、Ⅰ～Ⅲ期との関係は不明である。東北信では長野市松原遺跡を指標とする「松原土器」〔上田・三上1995〕・「松原式土器」〔上田1998〕が提唱されている。「松原土器」は梨久保式土器〔三上1987〕と対比して、沈線文系・縄文系の在り方の相違、文様要素、器形の相違などにより、分離・独立されたものである。このうち、松原遺跡資料を古段階の基準資料とし、新段階についてはまとまった資料がないとしながらも、岩の口遺跡や和泉A遺跡が当てられている。松原遺跡資料は、地文により縄文系・沈線文系に分離され、縄文系では胴部懸垂文が、沈線文系では浮彫文が特徴的な文様となる。器形は、体部が直線的に外傾し、口縁部が鋭く外屈した後にキャリパー状に内湾するものが日立つ。この器形のものは、口縁部上位に幅狭な無文帯をもつものの、口縁部が横位に大きく二分されないことが特徴である。一方、和泉A遺跡下層Ⅰ期では縄文系・沈線文系の区別をすることは難しく、器形や文様帯の在り方は、むしろ梨久保式Ⅰ段階～Ⅱa段階のものに近い。また、松原遺跡資料に類似するものはほとんど出土していない。このことは時期差を反映したものと考えることも可能だが、その場合、器形・文様帯・文様の特徴において松原遺跡から和泉A遺跡への系統性を認めにくい。よって、両者を同一型式とするには再考が必要と考える。

以上のように、和泉A遺跡のⅠ～Ⅲ期の土器は、中期初頭を中心に、頸南地域および長野県の北東信を中心に分布する地域性の強い土器群である。今後、周辺地域との関係など更に検討する必要がある。

B 土製品

①土器片円盤 (396～422)

下層からは、土器片の周囲を打ち欠いたり磨ることによって円盤状に仕上げられた「土器片円盤」75点が出土した。廃棄ブロックとほぼ重なるようなかたちで分布しており、ある特定の範囲から集中して出土した様子は認められない。

法量は、円形に近い形に整えられているので、長さ・幅の計測値に大きな差は認められず、平均値は、長さ4.9cm、幅4.7cmである。しかし、それぞれの個体における長さ・幅のパラエティーは1.7cm～10cmと豊富である。重さも、大きさのパラエティーを反映して2.1g～110.5gと様々であり、平均値は28.2gである。一方、厚さは大きさの差に関係なく、0.6cm～1.4cmというごく狭い範囲に収まり、平均値は1cmである。

素材(土器片)の特徴は、土器片の胴部～頸部が用いられることが多いが、いずれも反り具合が小さく、比較的偏平な部位が選択されているようである。また、底部が用いられていることも特徴的である。底部と体部の境の輪積み痕に沿って割れた底部破片を素材とし、剥離を加えて整形している。偏平かつ円形であり、土器片円盤の作成に都合のよい素材であったと考えられる。

整形の方法には「打ち欠き」と「磨り」が認められる。上層の観察と同様に「打ち欠き」と「磨り」の組み合わせから3つに分類してみた。その結果、「打ち欠きのみ」が34点(45%)、「打ち欠き+磨り」が17点(23%)、「磨りのみ」が24点(32%)であった。このように、「打ち欠き」が「磨り」よりも、やや多用されている状況が分かる。両者の関係については、「打ち欠き→磨り」という原則は守られている。「打ち欠き+磨り」の一群における2つの調整方法の切り合い関係は、読み取れるものに関しては必ず磨りが後であった。「磨り」という過程を経て、より滑らかな円形に仕上げられたと考えられる。「磨り」の方向については、確認できなかった。また、395の中央部には焼成後の貫通孔が観察される。

②土偶 (423)

中期初頭の土器とともに土偶1個体が出土している。ほとんどが12D・13EグリッドのSD404付近からの出土であるが、左腕のみが4Dグリッドの風倒木痕から出土である。距離にして80m近く離れた位置から出土したものの同士の接合である(第77図)。

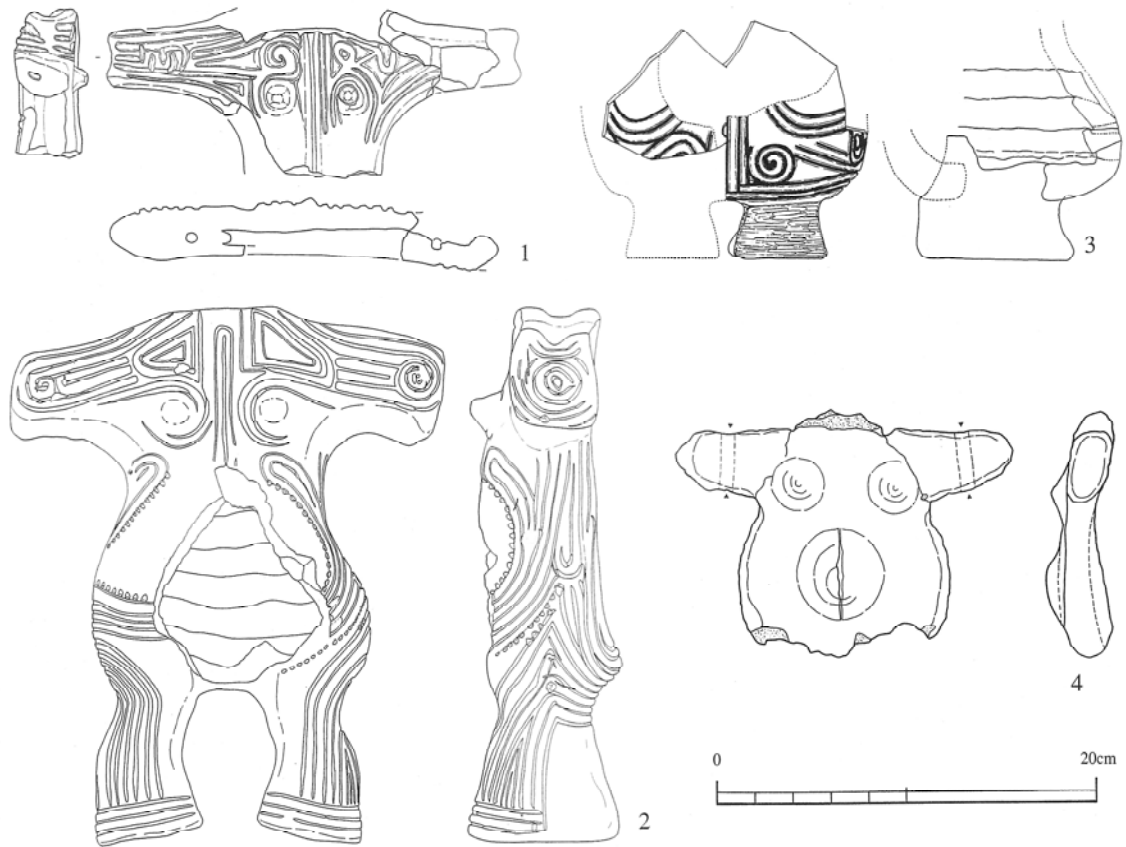
水平方向に長く延びる腕をもち、十字の形態が作出されている。残存部からは、緩く膨らむ腹部が観察されるが、極端に張り出すことはないと思われる。

体部の断面形態は、偏平で中空であり、内面には輪積み痕が観察された。輪積みにより大まかな形態を作出した後、偏平な形態が作出されたと考えられる。また、左右の腕の中央体部寄りには縦方向の貫通孔が認められ、吊り下げのような使用の在り方が予想される。胎土は径1～2mmほどの白色粒子を多量に含む特徴的なものであり、中部高地系とされる土器(353)の胎土と共通する。また、破損品であり全体像を把握できないが、423の胎土とも共通する(ただし、同一個体ではない)。



第77図 土偶の出土位置

県内において中期初頭に位置付けられている土偶（第78図）は、津南町上野遺跡（2）[江坂1962、阿部1998]、吉川町長峰遺跡（3）[本間1984]で報告されている。和泉A遺跡出土例は、上野遺跡出土例と側面観・断面形における共通性が理解される。一方、長峰遺跡のように大きく張り出す腹部～腰部は有さないと考えられる。また、安田町萩野遺跡出土の土偶についても、中期前葉の土器を主体とした遺物群に含まれており（4）[亀井・望月1994]、左右水平方向に延びる両腕に縦方向の貫通孔が存在する点では和泉A遺跡出土例と共通する。



第78図 県内出土の中期前葉の土偶

③環状土製品（425～428）

環状を呈する土製品が4点出土した。耳栓と考えるには周囲の挟りが弱く、環状土製品と呼んでおきたい。いずれも、厚手でシャープなつくりではなく、文様が施されることもない。427の環の部分には、焼成前の貫通孔が認められる。

④焼成粘土塊（429～436）

形態は様々であり、ボタン状のもの（428～430）・棒状のもの（434・435）・不定形なものが認められる。ボタン状は、断面が楕円形を呈し、基石のように仕上げられたもの（429）、裏面が大きく窪んだもの（428）が認められる。胎土に含まれる混和材は少なく、焼成も良好ではない。棒状は、土器成形時の粘土紐のような形態である。表面には、引き伸ばす際についた指頭の圧痕が認められる。不定形は、粘土を手で握った（こねた）ものが焼成されており、指頭の圧痕が認められる。

C 石器 (図版 151～190、写真図版 289～305・309)

(1) 記述の方法

下層石器群は、大田切川火砕流堆積物層 (IV層) と赤倉火砕流堆積物層 (VI層) に挟まれた包含層から出土した石器群である。大田切川火砕流は、遺跡のほぼ全域を覆っているが、その堆積が薄い範囲もあり、若干の混在が認められる。しかし、個別分類や垂直分布の検討など文化層分離のための過程は踏まれている。すなわち、取り上げた層位のみが根拠であるため、上層と下層とが厳密に分離されたわけではないが、土器の出土状況を見るかぎり、上層石器群が多量に混在することはないと思われる。

石器群の記述は、上層石器群と同様の方法で行うことを基本方針とした。出土石器の分類は、そのまま活用することで上層と下層を比較できるようにした。ただし、下層石器群においては、遺構出土と包含層出土とを分けずに扱っている。これは、遺構ごとに遺物を提示するよりも、まずは下層石器群全体の内容を明らかにすることがより重要と考えたためである。遺構の覆土に遺物が埋没する過程には様々なケースの存在が予想されるが、S I 117・S I 403においては覆土が廃棄ブロックの土層から構成されている。すなわち、それらを有意な一括資料と扱うことは大きな危険を伴うこととなる。そこで、本報告では出土位置の明示には心掛けるが、遺構出土を一括資料の単位としないでおきたい。ただし、特徴的な出土状況が認められる場合は、適宜、触れることとしたい。

こういった考えのもと、図版作成にあたっては、まず器種ごとに分類し、その中で廃棄ブロックごとに提示することを原則とした。そして、出土したグリッド・廃棄ブロック・遺構番号を図版中に併せて明示することとしたい。しかし、版組みの都合上、この原則から外れるものもあるので注意していただきたい。

(2) 石器の分布

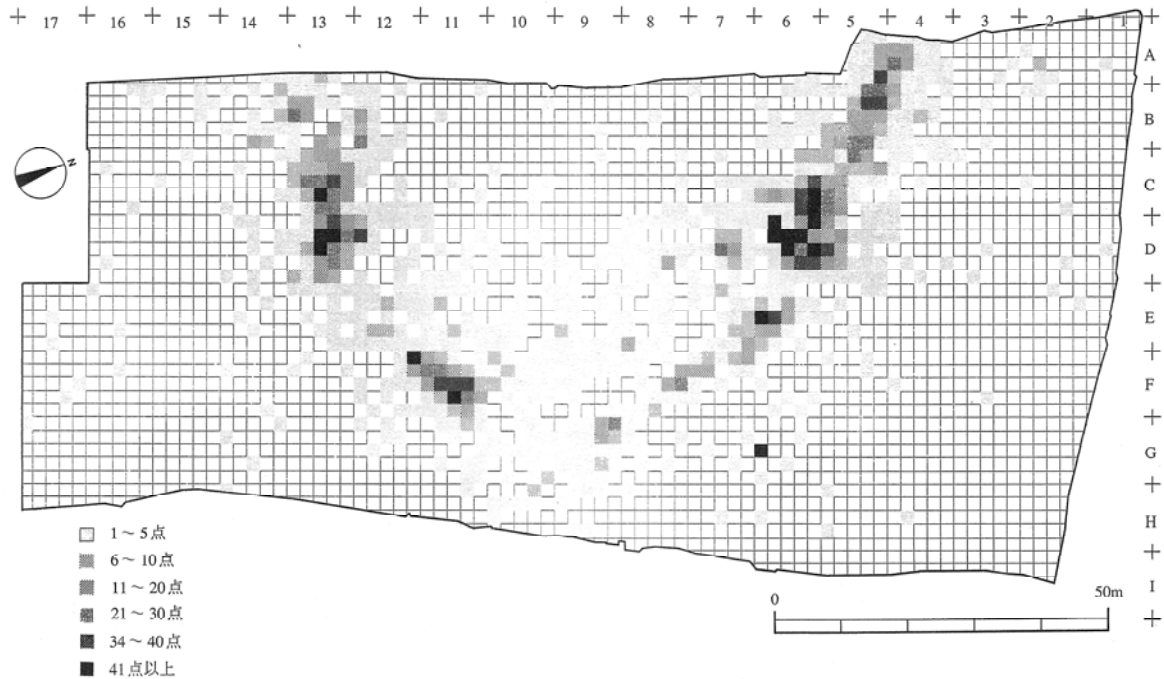
下層石器群は、大田切川火砕流堆積物層 (IV層) 直下のV層から出土したものである。下位には赤倉火砕流堆積物層 (VI層) があり、2つの火砕流堆積物層に挟まれるような出土状況を呈する。出土状況について、遺構と包含層にわけてみていきたい。

遺構から出土した石器は、3軒の大型住居から出土したものが大半である。しかし、そのうちS I 117は廃棄ブロック1に、S I 403は廃棄ブロック4に覆われており、覆土は廃棄ブロックの土層から構成されている。すなわち、住居の覆土から出土したものの、住居に帰属する資料とは言い難いものである。廃棄ブロックと重複しないS I 120の覆土から出土したものについては、一定のまとまりと考えることができる (86・122～126・186・187・247・418・612)。しかし、出土点数が少なく、周囲の包含層と点数・内容とも大きく違わない。これらの状況から、S I 120を除けば住居ごとに資料を提示する意味は小さいと考えられる。

一方、掘立柱建物が復元されている環状廃棄帯の内側のピットからは、磨石類・石皿・石棒といった大形の礫石器・石製品が多量に出土している。その意義については様々な解釈が可能であるが、柱穴の版築に使用した結果と考えることができる (第VI章1.B(2)参照)。また、打製石斧や磨製石斧が、廃棄ブロック (包含層) の状況と比べると、やや目立って出土していることも特徴的である。

包含層・廃棄ブロックから出土した石器の分布は、土器の重量分布図 (第59図) と同様に分布の濃淡が明瞭に把握される (第79図)。土器分布の集中域は、柱穴群 (掘立柱建物群) を取り囲むように7ヶ所のまとまりが環状に分布するが、石器についてもそれとほぼ重複するように分布の濃密な範囲が認められる。中でも、1ブロックと6ブロックは特に濃密で、広範囲に広がっていることがわかる。しかし、それ以外のブロック

VI 下層の調査



第79図 下層出土石器の点数分布

は、周囲よりも出土点数が多いものの、ブロック外とする範囲と明瞭に一線を画することは難しい。また、ブロック間における石器組成の差は、点数に比例して多少はあるものの、比率的には大きな違いは認められない。ただし、細分形態の組成に若干の相違が認められる。この点については後述することとしたい。

(3) 石器組成

下層からは、69,161点の石器が出土しており、その内訳は第9表・第80図のとおりである。ここでは、各器種ごとの特徴をまとめていきたい。

	石鏃	石鏃未成品	尖頭器	石錐	石匙	楔形石器	打製石斧	磨製石斧	磨製石斧未成品	スクレイパー	両面調整石器	折面調整石器	対向調整石器	周縁敲打調整石器	微細剥離痕ある剥片	剥片	砕片	石核	原石	礫器	磨石類	石皿	砥石・砥石片	石製品	総点数	総重量 (g)	平均重量 (g)
安山岩A	3	1	2	1	3	23	43			28	30				114	319	2315	10	1						2893	9039.4	3.1
安山岩B							2			241	576	88	9	4	129	800		13	149	1				5	2012	80566.5	40.0
安山岩C																					535	55			595	398910.1	670.4
安山岩D						6	46	3		24	12	2	1		59	376	1	10	4	3					547	33664.3	61.5
黒曜石	24	10		3		33				13		1			55	242	1535	4	2						1922	561.2	0.3
流紋岩																3									3	12.3	4.1
チャート	4					1										15	2	1	1						24	473.4	19.7
凝灰岩	2						3	5								2					1				13	578.5	44.5
石英																1	5	1	2						9	426.1	47.3
水晶																1			1						2	111.1	55.6
玉髄				541		631				13	3				785	58754	13	80							60820	5772.3	0.1
鉄石英										1															1	22.5	22.5
頁岩			1			4				1	2					1	3		2						14	515.6	36.8
砂岩							2									59		1		1	6				150	19213.0	128.1
硬砂岩										1	1					4			1	1	1				9	926.8	103.0
蛇紋岩								49	11							12	64							3	139	3469.9	25.0
滑石																								5	5	14.8	3.0
翡翠																				1				1	2	237.0	118.5
琥珀																								1	1	1.6	1.6
総点数	33	11	3	545	3	698	96	57	11	322	624	91	10	4	357	2620	62679	53	244	6	543	55	81	15	69161	554516.3	8.0

第9表 下層石器群の石器組成と石材組成

①石鏃 (1~34)

石鏃は、44点出土しており、成品と判断したものは33点、未成品と判断したものは11点である。剥片・碎片・石核・原石を除いた割合は0.9%に過ぎない。上層石器群と比べると、著しく小さな割合といえる。

成品 1~23

成品で特筆されるのは、凹基無茎鏃 (B類:1~13・15~21) が27点と大多数を占めることである。割合にして90% (不明を除く) にも及ぶ。その中でも細長いものと寸詰まりなものにわけられる。細長いものは小さな挟りの基部を、寸詰まりのものは半円状の大きな挟りの基部を有する。すなわち、寸詰まりのものの脚部がより長い傾向にある。特に、12・13は、いわゆる円脚鏃に近い形態といえる。また、幅広のものは薄手、細長いものは厚手であることが多い。

凹基無茎鏃のほかに、平基無茎鏃 (C類)、有茎鏃 (A類)、尖基鏃 (D類) が各1点ずつ加わる。平基無茎鏃 (14) は、両側縁の基部側に挟りを有する特徴的な形態であり、装着方法との関連が想起される。有茎鏃 (22) は、幅広で寸詰まりのものであり、上層の晩期後葉のブロックに帰属する一群と共通する。大田切川火砕流堆積物層が薄い範囲からの出土であり、本来的には下層石器群に伴わない可能性もある。尖基鏃 (23) は、未成品とも考えられるものである。二次加工が粗雑で、細部の調整がなされておらず、先端部が入念に作出されていない。

完形品と欠損品の比率は、完形品が19点 (58%)、欠損品が14点 (42%) であり、やや完形品が多いことがわかる。欠損品は、先端部欠損の1類が6点 (40%) と最も多く、脚部欠損の4類が3点 (20%)、体部欠損の5類が3点 (20%)、基部欠損の2類が2点 (13%)、先端部・基部欠損の3類が1点 (7%) と続く。先端部の欠損は、衝撃剥離によると思われるものが含まれる (5・12)。

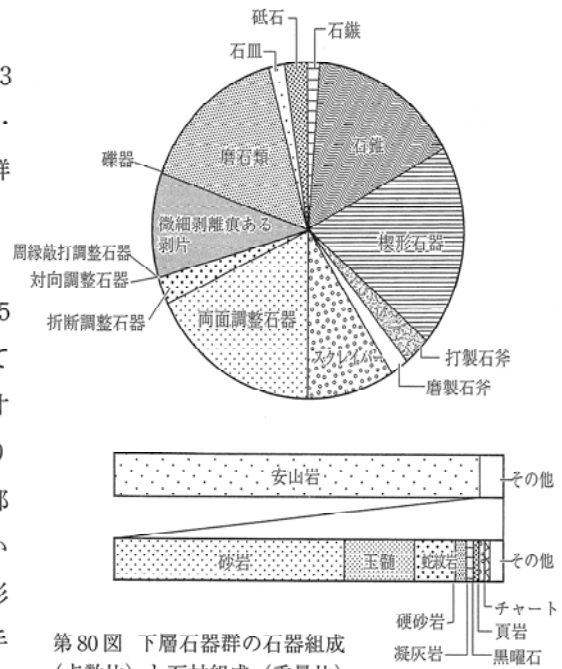
石材は、黒曜石が圧倒的に多く、24点 (73%) を占める。これに続き、チャートが4点 (12%)、ガラス質安山岩3点 (9%)、凝灰岩2点 (6%) となる。黒曜石は、6・14について産地同定を試みたが、霧ヶ峰という結果が得られている。チャート・ガラス質安山岩については、遺跡直下の片貝川で採取可能な石材であるが、これらを用いた石鏃製作は遺跡内で積極的には認められない。また、鉄石英にも似た赤色のチャートが用いられた13は、形態的にも異質であり成品として遺跡内に単独で搬入されたと考えられる。

出土位置に関する傾向としては、廃棄ブロック1・2は少なく、廃棄ブロック6で多数出土していることが特徴的である。また、廃棄ブロック外出土のものは、大形であることが多い。

未成品 24~34

未成品と判断したものは11点であるが、二次加工の進捗は様々である。未成品であるがゆえに読み取れる情報を中心に述べていきたい。

まず、素材となる剥片は、石鏃に似たプロポーションのものが選択されていることが予想される。特に、横長剥片が利用されることが多く、折断により大きさ・形状を予め変更している例も認められる (27・32)。いずれも比較的厚手であることが多い。



第80図 下層石器群の石器組成 (点数比) と石材組成 (重量比)

二次加工の多くは、周縁のみに留まっており、深い剥離痕が内側にまで達する成品とは対照的である。二次加工を内側にまで深く施すことで厚さを減じていたのであろう。また、両極打撃による加工は、上層石器群と比べると積極的に評価できるものは少ない。33・34は、その可能性を指摘できる資料ではあるが、決して大きな割合を占めるわけではない。楔形石器の項で詳述するが、下層石器群に伴う楔形石器は厚手のものが多く、石鏃製作に両極打撃が活用されていたことを積極的に評価する材料は少ない。

石材は、全て黒曜石であり成品の傾向と一致するものの、そのほかの石材は認められない。黒曜石を用いた石鏃製作は、大量生産するような性格のものではなく、素材のようなかたちで搬入されたものを仕上げた程度と考えられる。

②尖頭器 (39～41)

図化した3点を尖頭器と判断したが、三者三様の形態を呈している。39は、柳葉形を呈するもので、細かな調整剥離が入念に施されている。先端右側面には折断面を打面にした二次加工が観察され、折断の利用が理解される。40は、39より幅広で大型のものであるが、先端部を大きく欠損している。細部の調整が粗く、未成品としての要素も併せ持つ。41は、幅広な木葉形を呈するものと考えられるが、両面調整石器と明瞭に判別できるものではない。石材は、39・41がガラス質安山岩、40が珪質頁岩である。40と同質の珪質頁岩はほかに認められず、単独個体で搬入された可能性が高い。

③石錐 (35～38・99～121・124～126)

石錐は、545点出土しているが、そのほとんど(541点)は玉髓製である。玉髓製のものは、極めて小形であるが明瞭な使用痕を肉眼観察できるものが含まれる。その多くは、楔形石器を素材としており、その関連性を含め、後述することとしたい。

玉髓製を除くと4点(35～38)が出土しているのみである。35～37は、全周に二次加工が施され、棒状に仕上げられている。錐部の横断面形は、厚手な三角形や四角形で、芋虫のような形態である。38は、素材剥片の一端に錐部のみが作出されたものである。石材は、小形の玉髓製を除けば、3点が黒曜石(36～38)、1点がガラス質安山岩(35)である。

④石匙 (42～44)

図化した3点を石匙と判断した。後述するが、「横形石匙」などと呼ばれる一群をここには含めず、基部が作出されたもののみを抽出したが、全体のプロポーシオンを把握できるものは1点のみである。42は、台形に張り出す細身の基部とやや内湾し左右両端が鋭く尖る刃部をもつ。43・44は、対置する二側縁に大きく内湾する両面調整が認められる。これを基部の作出として積極的に評価したが、調整剥離は粗く未成品と考えられる。石材は、いずれもガラス質安山岩である。

⑤楔形石器 (45～77・80～96・122)

楔形石器は、698点出土しているが、そのほとんど(631点、90%)は玉髓製である。玉髓製は極めて小形のものが多く、先述の小形石錐との強い関連性が予想される詳細については後述することとしたい。

玉髓製を除くと、楔形石器は67点の出土となる。形態は様々であるが、2極1対が圧倒的に多く55点(82%)、4極2対は12点(18%)である。ただし、46・47・57・60・65は、4極2対の痕跡を示すと思われる剥離痕が認められるものである。すなわち、対置すると思われる剥離痕は、これと直交する方向に軸を準備した両極打撃により失われている。

2極・4極を問わず下層石器群の楔形石器において特徴的なことは、厚手のものが大きな割合を占める点である。特に、2極1対の両極打撃により、厚手で縦長の形態が作出されたもの(45・54・63・64・71・72など)が特徴的に加わる。一方、上層石器群に多数認められた薄手で、石鏃製作との密接な関連が予想される一群はほとんど認められない。49・50に、その関連性を窺うことができるが数量的には少ない。厚手の石鏃は一定量存在し、その関連性を否定することはできないが積極的に認めるための材料は認められない。また、70・74の表裏面には磨耗痕が観察され、70については線状痕を伴う。両極打撃による剥離痕も、この使用痕を切っており、素材剥片の段階に使用痕が形成されたと考えられる。使用痕が、打製石斧にみられるものとよく似ており、刃部再生剥片からの転用と予想される。なお、この2つの石材はガラス質安山岩である。

石材は、先述の玉髓を除けば、黒曜石33点(49%)、安山岩29点(43%)、頁岩4点(6%)、チャート1点(2%)であり、ほとんどが黒曜石とガラス質安山岩(23点)であることがわかる。中でも、黒曜石が最も大きな割合を占める点は、石鏃の石材組成と一致するが、より安山岩が多用されていることが特徴的である。また、頁岩が一定量、組成に加わることも、他の器種と比べて特筆される。

⑥打製石斧(127～206)

打製石斧は、96点出土している。細分形態別にみると撥形が最も多く57点(64%)、短冊形が20点(23%)、分銅形が1点(1%)、寸詰まりが11点(12%)、欠損による分類不明が7点と続く。ただし、短冊形や分銅形と判断したものの多くは、撥形と形態的連続性をもって捉えられるものである。また、寸詰まりのものについても、他の各形態が欠損したものを再加工した結果と考えられる。すなわち、ここで各形態ごとに細分類したものの、下層石器群における打製石斧は撥形に傾倒するといえる。

欠損は31点(32%)に認められ、完形品の割合がより大きいことがわかる。欠損部位ごとにみると、基部欠損が6点(19%)、刃部欠損が16点(52%)、刃部・基部欠損が1点(3%)、断片のみ残存が8点(26%)となり、刃部欠損品の割合が大きいことが特徴的である。一方、遺跡内からは、打製石斧と同様の使用痕が認められる剥片が数点出土しており、遺跡内で刃部再生などの変形が行われたことを示唆している。また、刃部欠損品が多いこととの因果関係が予想される。

肉眼観察可能な使用痕は、41点(43%)に認められた。使用痕が認められないものの一部は未成品的な側面をもっており、こういった点を考え併せると決して小さな割合ではない。上層石器群と同様に使用痕が片面に偏って分布することがある一方、著しい磨耗が広範囲に認められるものが多い。また、それを切る剥離痕も観察され、製作されてから使用を経て遺棄・廃棄に至る間に変形を繰り返していることが予想される。

多くの磨耗面には、基軸と平行する線状痕が観察される。一部は、基軸に対し45度ほど傾いた斜位方向の線状痕が認められる。いずれも、原則的には表裏とも同方向の線状痕であり、表裏が対象物と同時に同方向に接触した結果と考えられる。打製石斧は土掘り具といわれている[大山1927]が、線状痕の観察からもその可能性を肯定的に考えることができる。具体的な用途としては、植物性食品の採集具[大山1927]や農具[藤森1970]のほかに、住居などの建設に伴う土木作業での利用も想定することができる。粗い粒子から構成される地山は、著しい磨耗や線状痕を形成しやすい環境と考えられる。

また、184の線状痕の一部は、研磨により形成された可能性がある。実測図上の左側面と表裏面の境に磨製石斧のような角が作出されていること、線状痕の方向が表裏で異なることがその根拠である。他の使用痕と比べると不自然であり、研磨痕と考えるのが妥当と考えられる。しかし、同様の石材が磨製石斧に利用されることはなく、また、刃部から体部にかけては打製石斧に一般的な使用痕が観察されることから、これを磨製石斧の未成品とは考えないでおきたい。

石材は、ガラス質等の安山岩 91 点 (95%)、凝灰岩 3 点 (3%)、砂岩 2 点 (2%) と、安山岩が多用されている。打製石斧に利用される安山岩は、比較的粗粒で斑晶が多く、遺跡直下の片貝川で容易に採取できる石材である。打製石斧の石材の種類と組み合わせの分析から、在地の入手し易い石材を利用したことが想定されている [山本1989] が、本遺跡においても石材選択と石材環境の密接な関連性を指摘することができる。また、関東地方では打製石斧の製作により産出された調整剥片は多く出土しない [宮里1995 など] とされているが、本遺跡では同質の石材が他の器種にも多用されており、状況を把握することはできなかった。

出土位置については、他の石器同様に廃棄ブロックから多数が出土しているが、ピット群からの出土例が目立ち特徴的である。

⑦磨製石斧 (207～256)

磨製石斧とその素材は、68 点出土している。その内訳は、成品が 57 点、素材が 11 点である。

成品 207～236・241・245・246・249～254

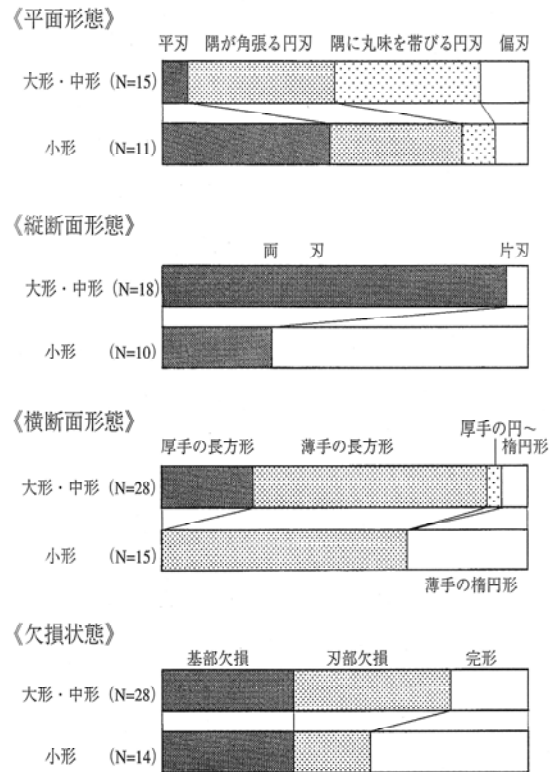
成品は 57 点出土している。大きさによる分類は、大形が 2 点 (5%)、中形が 27 点 (64%)、小形が 13 点 (31%)、分類不能が 15 点である。刃部の平面形態の分類は、平刃が 7 点 (16%)、両隅に丸みをもつ円刃が 13 点 (30%)、両隅が角張る円刃が 7 点 (16%)、偏刃が 4 点 (9%) である。刃部の縦断面形態の分類は、両刃が 22 点 (69%)、片刃が 10 点 (31%) である。横断面形態の分類は、厚手の長方形が 8 点 (16%)、薄手の長方形が 31 点 (63%)、厚手の円～楕円形が 3 点 (6%)、薄手の楕円形が 7 点 (14%) である。

このように、様々な視点から分類を試みたが、大形・中形と小形とで形態が大きく異なることが予想された。その相違点を表すグラフが第 81 図である。

平面形態 大形・中形は円刃が多く、小形は平刃が多い。隅が角張る円刃は双方に一定量みられるが、大形・中形のもは隅が丸みを帯びた円刃と、小形は平刃と形態的連続性が認められるものである。すなわち、ここに示した数値以上に、大きさと刃部平面形態の密接に関連すると考えられる。

縦断面形態 大形・中形は両刃、小形は片刃という傾向が顕著に表れている。特に、小形で平刃のものは例外なく片刃であり、機能的な問題を考える上で興味深い。

横断面形態 大形・中形は長方形のものが多く、円～楕円形のは少ない。長方形の多くは、薄手に分類されているが、厚手に分類したものと形態的連続性を有するものである。すなわち、いわゆる定角式が大きな割合を占めている。円～楕円形のもの (229・210・230) は、いずれも欠損品であり、完形品であったとき本当にそう判断されるものかはわからない。また、敲打痕が残されたり、左右が非対称であったりと、未成品的な側面を併せもつものであり、長方形と判断されたものと同等に比較できるものではないかもしれない。一方、小形は



第 81 図 磨製石斧の形態分類

長方形・楕円形ともあるが、すべて薄手に仕上げられており、大形・中形とは対照的である。

欠損状態 大形・中形・小形とも、基部欠損と刃部欠損が認められるが、大形・中形は刃部欠損が、小形は基部欠損がやや多いといえる。ただし、小形の欠損の度合いは小さく、完形に近いものが多い。また、完形品の比率についても、大形・中形が21%あまりであるのに対し、小形は43%を占めている。すなわち、小形の多くは完形またはそれに近い状態で出土しているといえる。

以上のように、ここで大形・中形としたものと小形としたものとで顕著な形態的相違が認められた。この相違が意味することについては、使用痕の在り方など十分に検討されるべきであるが、機能や用途の相違を反映する可能性を指摘できる。ちなみに、肉眼で観察可能な使用痕は、207と253に認められた。なお、ここで明らかになった大きさや形態の関係は、上層石器群においても同様の傾向が認められる。縄文時代早期以降の磨製石斧に一般的な傾向といえるかもしれない。

石材は、蛇紋岩49点(86%)、凝灰岩5点(9%：207・210・222)、安山岩3点(5%：224・225・234)である。蛇紋岩が多用されていることが特徴的である。糸魚川産と同定された翡翠の存在を併せて考えると、西頸城地方との密接な関係が予想される。

また、廃棄ブロックの内側から出土したものが多いことも特徴的である。この分布は、柱穴群の分布と一致しており、ピット中出土のもの(249～256)も認められる。特に、掘立柱建物との関連については検討する必要がある。一方、廃棄ブロックから出土したもの(207～220)は少なく、他の器種と比べて対照的である。その中で特徴的なことは、廃棄ブロック6・7といった南側から小形のものが出土している点である。廃棄ブロック外出土のものについても、小形ものは集落の南側に集中しており注目される。

素材 237～240・242～244・247・248・255・256

素材は11点出土したが、すべて蛇紋岩であった。それらは、製作工程をよく示すものであるが、大きく3種類の在り方に分類される。

第1は、擦切技法によるものである(238・239・247・248・256)。これらの資料において、擦切痕は両側縁にみられることはなく、一方の側縁のみにみられる。すなわち、擦り切られる素材の縁辺のみが、素材段階の資料として遺跡に残されているのである。その中には、239のように刃部を作出しようとした意図がみられるものから、擦切後、加工を施されないものまで様々な形態を呈している。248については法量的に対応する成品はみられず、磨製石斧の素材になり得なかった可能性が高い。すなわち、擦切技法による素材作出で生じた残滓であったと考えられる。こういった資料や後で触れる石鋸の存在から、遺跡内で擦切が行われたことを指摘できる。また、擦切によって深い溝を形成した後、最終的に敲打によって切り落とした痕跡が238・239に認められる。

第2は、礫を直接研磨するものである(237・240・242・243)。偏平な円礫の平坦面に研磨痕が認められ、平坦面どうしが平行関係になるよう整えられている。この一群は、石製品の未成品であることも予想される。

第3は、剥離により形態を整えていくものである(244・255)。244は、礫を直接研磨するもの同様、剥離後に平坦な2面が平行関係になるよう整えている。さらに、平坦面と側面が垂直関係になるよう側面に研磨が加えられている。255は、研磨痕が無く、打製石斧の撥形のような形態を呈するが、石材が蛇紋岩であることからここに分類した。

⑧スクレイパー (257～309)

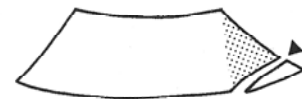
スクレイパーは、322点出土している。スクレイパーの刃部剥離痕の特徴〔織笠1993〕を有するものを判断した。しかし、その中には部分的に両面調整になっているものも含まれる。そこで、両面調整が点的（単発的）に分布するものをスクレイパー、線的に分布する（剥離痕が横方向に連続的に重なる）ものを両面調整石器と区分することとした。また、複数の異なる刃部が存在する場合は、より長く、より入念な調整を優先して分類することとした。各分類の比率は、A類が107点、B類が13点、C類が43点、D類が4点、E類が7点、F類が23点、G類が125点となる。刃角が急角度なものと、浅角度なものとはほぼ半数ずつ認められる。

A類・B類は、急角度で直線状～外弯状の刃部ラインをもつものである（257～265・297・300～304）。直線状・外弯状の刃部ラインが形成されているが、いずれの場合も剥離長1mm前後の微細剥離痕を伴っていることが特徴的である。257・261・265は、裏面から折断面に沿って表面に向かう調整剥離を施すことで90度に近い刃角を作出している。これは、折断調整石器に分類されることもある。

C類は、いわゆる鋸歯縁石器である（266～269・271～273・289・293・296・305・306・309）。ノッチが連続することで、鋸の歯のようにジグザグのラインが作出される。鋸歯縁のラインは、直線状～外弯状を呈するものが主体であるが、289のように内弯状を作出するものもある。それぞれのノッチの刃角は90度に近く、特にノッチを作出する大剥離痕の打点付近は急角度に仕上げられている。また、293の研磨痕は、剥離後に施されており、磨製石斧との関連性が予想される。

E類は、いわゆるノッチド・スクレイパーである（276・291）。鋸歯縁石器のようにノッチが連続することはなく、それぞれが独立して存在する。鋸歯縁石器と比べるとノッチが大きく、鋸歯縁石器（C類）で内弯状の刃部を有するもの（289）と形態的連続性をもって捉えることができる。

G類は、浅角度な剥離痕による刃部を有する一群である。サイド・スクレイパー的な刃部を有するもの（274・284など）はここに含まれる。この一群に特徴的なことは、裏面に調整が施されることが多い点である。表面との間に作出される断面形は、結果的に両面調整に近い形態となる（第82図）。すなわち、片面のみの調整ではあるが、断面形態において両面調整と同様の効果が得られているとも評価できる。また、刃部ラインについても両面調整石器との共通性が認められる。下層石器群に、両面調整石器が多量に加わる状況を加味するならば、G類は、その未成品、あるいは省略形であるとも考えられる。



第82図 スクレイパーG類の裏面調整
(横断面形)

石材は、安山岩が293点（91%）と最も多く、黒曜石13点（4%）、玉髄13点（4%）、鉄石英・頁岩・硬砂岩が各1点（1%）と続く。中でも、流理構造質安山岩が241点（75%）を占めており、両面調整石器などと共通した在り方を呈する。また、黒曜石や玉髄が一定量、加わることも特徴的である。いずれも、小形のスクレイパーであり（264・265・270・290・291・296・301）、他の石材のものが大形であるのと対照的である。

⑨両面調整石器 (313～362・364～417・425)

両面調整石器は、624点出土している。両面調整が施された範囲の平面形態により細分類した。その結果、直線状のものが138点（22%）、外弯状ものが275点（44%）、内弯状のものが6点（1%）、端部に点的に施されるものが205点（33%）となった。

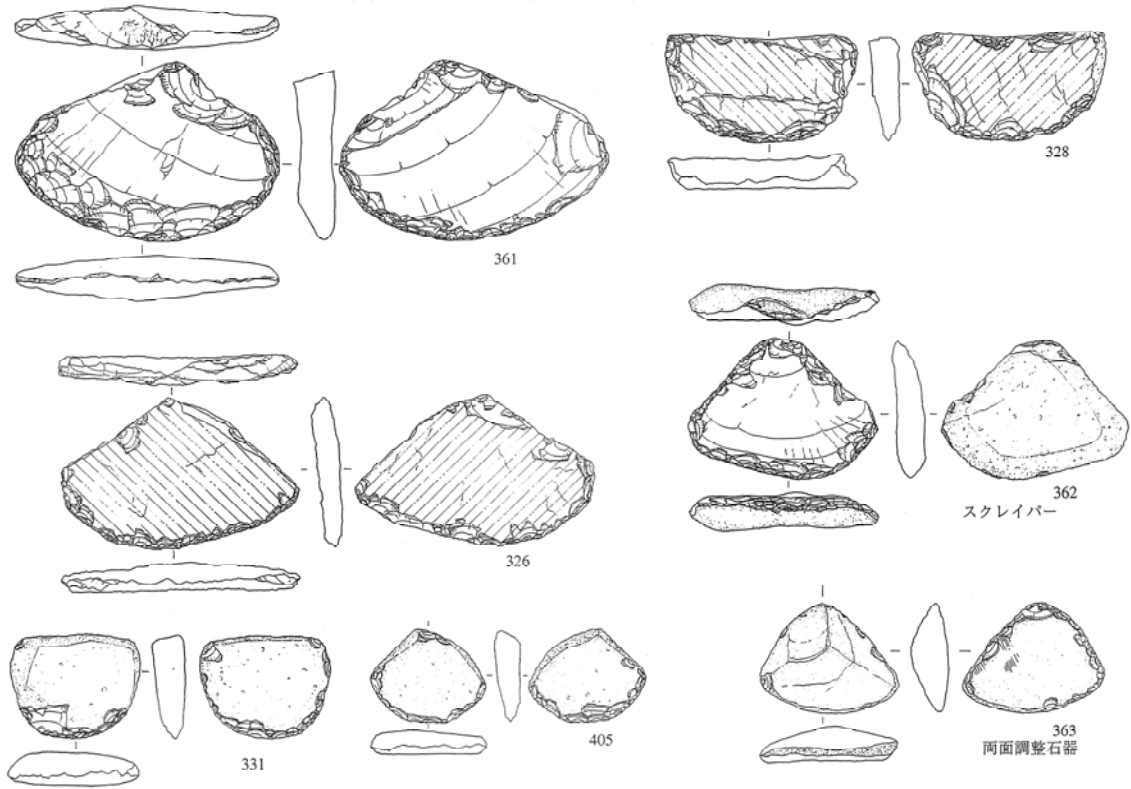
直線状のもの（K1類）は、両面調整が素材の長辺に施されるもの（330・332・339・349・352・398など）と、短辺に施されるもの（327・350・370・372・376・389など）とが認められる。両者とも、断面形が左右線対称に仕上げられることが多いが、短辺に施されたものの一部は、片刃に近い（370・372など）。スクレイパーの刃部と共通した在り方といえる。また、直線状のもの全般にいえることであるが、やや外弯するものや、やや内弯するものとの形態的連続性が認められる。その多くは、素材のラインが活かされるようなかたちで作出されており、素材の形状は大きく修正されていない。

外弯状のもの（K2類）は、大きくは、カーブが緩く長い刃部をもつもの（326・328・353・354・358・361・362・364・397・403・405など）と、円形あるいは半円形の刃部ラインをもつもの（318・320・321・343・345・368・369・392・393・404・406・408・418など）とに分類できる。前者は、横形石匙や横刃形石器などといわれている形態と共通し横長である（第83図）。緩やかな外弯形を呈する刃部の他端に両面調整が施されることはなく、折断面やそれを打面としたわずかな折断面調整が認められることが多く、全周に両面調整がめぐること（358などがある）は稀である。326・361など、形態的斉一性が高い一群も認められるが、326は流理構造質安山岩、361はガラス質安山岩を用いている。すなわち、石材を問わず一定の形態に仕上げようとする意図が認められる。また、326には顕著な潰れが認められ、周縁敲打調整石器に分類した363と形態的に類似する。後者は、前者と比べると縦長、もしくは円形に仕上げられている。縦長の場合（337・343・347・360・368など）、両面調整は刃部のみに施されることが多く、刃部以外には折断面調整や片面調整などが施されている。すなわち、ひとつの石器に複数種類の調整の在り方が認められるのである。円形の場合（321・345・392・393・406・410・418など）は、両面調整が全周に施されることが多く、調整により大きく形状が修整された結果と考えられる。

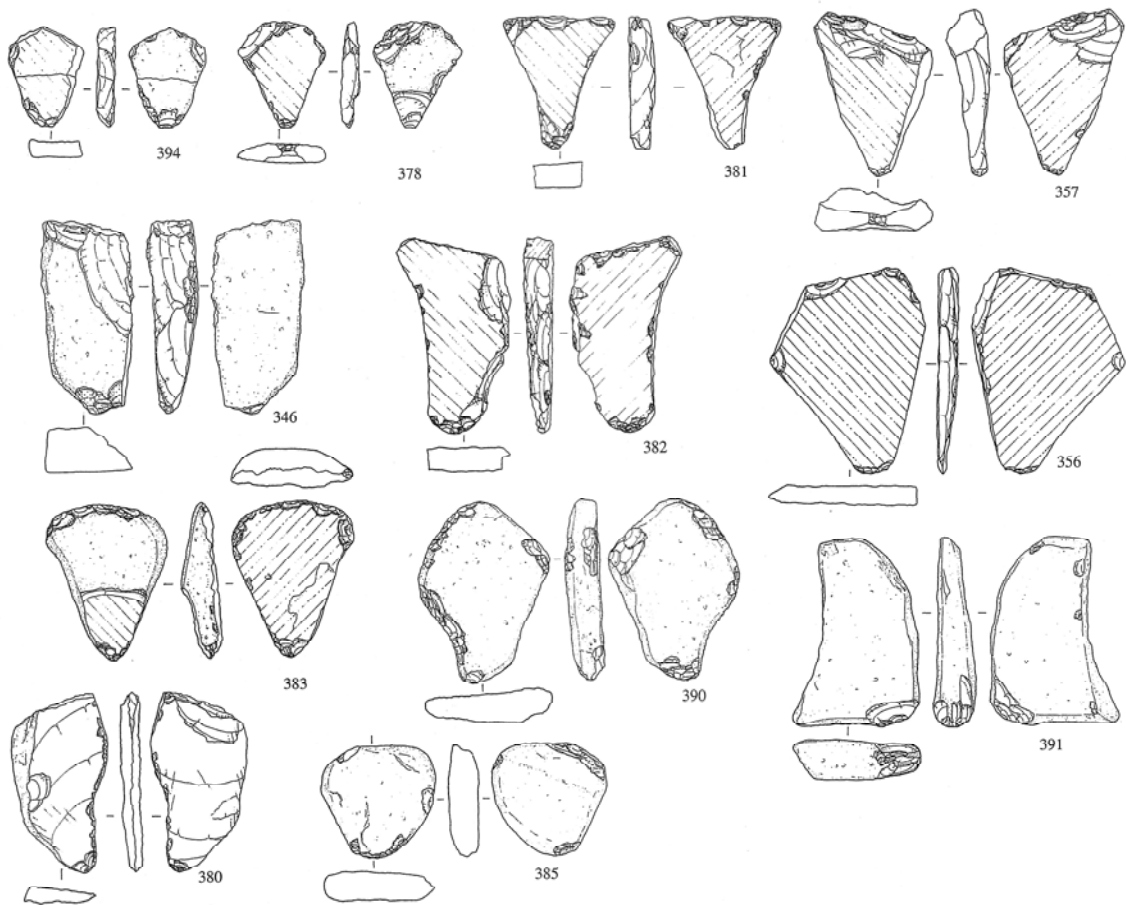
内弯状のもの（K3類）は、素材剥片の内弯する部分を利用して調整が施されている。313は直線に近い刃部ラインであるが、316は明らかに内弯形を作出している。316は、シルエットだけをみれば三脚石器とも類似するが、両面調整は一辺のみであり積極的に評価せずにおきたい。また、表裏の広範囲に明瞭な使用痕が認められる。これは、両面調整石器の表裏にしばしばみられる線状痕を伴わず磨耗のみである。また、石匙の未成品と考えた43・44も、調整の在り方のみによって分類すればこの一群に含まれる。

「端部に点的（K4類）」は、剥片の鋭角な端部に両面調整を施す極めて特異な石器である（第84図）。大形～小形まで様々であるが、刃部の形態は相似する。この種の石器は205点を数え、下層石器群を特徴づける形態のひとつといえる。この種の石器を製作するのに都合のよい大きさの端部は、意図的に作出されることが多い。流理構造に沿って剥離された剥片を折断により平板・三角形に仕上げるのが最も一般的である（356・357・381・394・414・416など）。特に、刃部を作出する平面上の一端の開きを50～60度前後と鋭角に折断して整えることが多い。こうして得られた斉一性の高い形態は、折断のコントロールを想起させるものである。厚手の素材に対しても同様の措置がとられており、支持固定具や加圧具など折断のための入念な準備が存在する可能性を指摘しておきたい。このように、折断により着実に目的とする形態を作出することが一般的であるが、剥片や原石が適当な端部をもっていれば折断という過程を経ないこともある（355・383・385・388・390・391・395など）。素材を得る過程よりも、最終的に得られる素材の形態に重点が置かれていたのであろう。こういった意味においても、一定の厚さ・大きさの剥片を多量かつ連続的に得られる流理構造の安山岩を利用することは、効率的な選択であったと考えられる。

VI 下層の調査



第83図 両面調整石器K2類の形態的まとまりと類似形態 (S = 1 : 4)



第84図 両面調整石器K4類の形態的まとまり (S = 1 : 4)

使用痕は、風化による磨耗との区別が難しいが、刃部と表裏の平坦面に認められた。刃部に認められたものは、調整が施された両面に磨耗が認められる(332・368・420など)。刃部ラインの形状を問わず、両面調整という二次加工により作出された刃部が、道具として機能したことを意味している。殊に、K4類といった特異な形態についても同様のことがいえることは重要である。また、表裏の平坦面に線状痕や磨耗が認められることがある(316・320・332・340・345・377・400・418など)。線状痕の方向は様々で、表裏で一致するような原則はない。こういった在り方は、板状石器の使用痕[高橋1992、沢田1995]と共通する。

石材は、安山岩が628点と圧倒的に多く、特に流理構造のものが576点を占めている点が特筆される。このほかにも、玉髓3点(384・423)、頁岩2点(316・354)、硬砂岩1点が認められるが、ごく小さな割合である。玉髓のものは、板状の礫を素材としており、その在り方は流理構造の安山岩と共通する。

⑩折断調整石器(424・429)

折断調整石器は、91点出土している。折断面を打面にした剥離痕が、片面のみに認められるものが65点(71%)、両面に認められるものが26点(29%)である。折断の技術的有効性については、上層石器群において触れてきたが、下層石器群においては、特に流理構造の安山岩を用いた多くの石器に顕著に認められる。節理面に沿って剥離された平板な剥片は、一定の厚さを連続的に得るという点で有効であるが、形状をコントロールすることは難しいと思われる。そこで、折断により形状を大きく修整して目的とする形態に近付けている。その上で調整剥離を加え、様々な器種に仕上げているわけであるが、折断面を打面にした調整剥離はその在り方のひとつといえる。

折断面を打面とした調整剥離は、折断調整石器のみに留まるわけではなく、石鏃(32)、尖頭器(39)、楔形石器(53・55・75)、打製石斧(135・143・149・174・180・182・189・190)、スクレイパー(281・297・298など)、両面調整石器(308・325・341・343・347・370・381・382・402・411・416・418など)にも認められる。特に、ここで折断調整石器に分類したものは、両面調整石器との技術的親和性が強く、その多くは両面調整石器の未成品として位置づけられる可能性がある。詳細については、後述することとしたい。

石材は、88点(97%)が流理構造の安山岩、2点がその他の安山岩、1点が黒曜石である。安山岩が多用される点は、両面調整石器と共通する。黒曜石は、石鏃・楔形石器など小形剥片石器との関連性が予想される。

⑪対向調整石器(427・428・430～433)

対向調整石器は、10点出土している。折断などにより作出された表裏面と直交またはそれに近い位置関係にある面に対し、表裏両面から調整剥離を施した石器である。厚手で偏平な剥片を素材とし、調整が施された範囲の平面形態は外弯形を呈する。特に、431は均整のとれた円形に仕上げられている。厚手で偏平な素材は、流理構造の安山岩から得られることがほとんどである。

このように、折断面に対し表面や裏面から調整剥離を施す石器は、阿子島香氏により折断調整石器のひとつの形態として理解されている[阿子島1979]。本遺跡では、折断面を打面として表裏面に対し調整剥離を施したものを折断調整石器と呼ぶことにした。表裏のどちらか一方から折断面に対し調整剥離が連続的に施され、鋭角な刃角が作出されたものをスクレイパー、対置する一定の範囲に調整剥離が表裏両面から施され、垂直に近い刃角が作出されたものを対向調整石器と分類した。また、同様の技術は、折断面のフィニッシュ(第43図)の除去にも認められる(452)。

⑫周縁敲打調整石器 (363・434)

周縁敲打調整石器は、4点出土した。363は、偏平な礫を素材とし、外弯する鋭角な一辺に敲打痕が認められる。両面調整石器のK2類（例えば361や362など）との形態的共通性が窺える資料といえる。434は、ほぼ全周に激しい敲打痕が認められ、その衝撃により付随して形成されたと思われる剥離痕が表裏両面に認められる。折断調整石器との技術的親和性が窺える資料といえる。

確認された4点の石材は、すべて流理構造の安山岩であり、スクレイパー・両面調整石器・折断調整石器で多用されている素材と共通する。また、それらと形態的・技術的な共通性が認められる。敲打による調整方法は特徴的ではあるが、それにより一定の形態が作出されることはない。

⑬礫器 (435～439)

礫器は、6点出土した。この種の石器は、とかく礫器か石核かということで議論になるが、礫または分厚い剥片を素材とし、鋭さよりも堅牢さに条件がおかれた刃部〔織笠1992〕を有するものを呼ぶこととしたい。著しい刃潰れを伴う剥離痕や磨耗は、石核としての頭部調整・打面調整というよりは、礫器の刃部と捉えたほうがより妥当〔堤1984〕であろう。

ここで礫器と分類したものの中には、片刃礫器(436)と両刃礫器(435・437～439)とが存在する。435・436は垂角礫を、437・438は分割礫を、439は円礫を素材としている。439については、平坦面には凹痕が認められ複数の用途を経ている可能性がある。いずれも、刃部には激しい刃潰れや磨耗がみられ、鋭い縁辺は認められない。石材は、そういった特徴の反映か、ガラス質のものは用いられておらず、439が砂岩製であるほかは安山岩製である。比較的粗く、容易に採取できる石材が充てられている。

⑭磨石類 (487～555)

磨石類は、543点出土した。細分類による数量比は、磨痕のみが111点(A類:20%)、磨痕+凹痕が283点(B類:52%)、磨痕+敲打痕が15点(C類:3%)、磨痕+凹痕+敲打痕が33点(D類:6%)、凹痕のみが73点(E類:13%)、凹痕+敲打痕が14点(F類:3%)、敲打痕のみが14点(G類:3%)となり、磨痕+凹痕が半数を占めている。各痕跡ごとに見ると、磨痕は447点(82%)、凹痕は403点(74%)、敲打痕は76点(14%)に認められたことになる。磨痕と凹痕がより多くの磨石類に伴うといえる。

A類(487～494)は、素材の形状を大きく修整するもの(487～489)と保持するもの(490～494)とに分けられる。横断面形からは、前者は方形、後者は楕円～円形を呈することがわかる。このほかに、磨痕は明確でないものの、同様の大きさや形態を有する搬入礫が存在することに注意を払いたい。素材または肉眼で観察できない使用痕が存在するものと考えられる。また、493・494のように球状のものが特徴的に含まれる。そのほかにも、554など同様の大きさ・形態を呈する球状の礫が10点ほど存在する。これらの直径は、531・534・536など深い凹痕にフィットし、両者の関連性が予想される。

B類(495～501)は、数量的に最も多いが、他の分類と強い連続性をもって存在する。特に、C類の502・503・505などは、明瞭な凹痕が形成される前段階に位置づけられるものであろう。ここに分類されたものの多くは、断面が楕円形の円礫を素材とし、表裏の広い平坦面に磨痕が認められる。そして、その磨痕を切るようにして凹痕が中央に形成されることが一般的である。この傾向と一致しないものもないわけではなく、磨痕により断面形が四角形を呈するもの(495)や、側面に凹痕が形成されるもの(496・501など)も存在する。

C類(502～507)は、表裏の平坦面に敲打痕が認められB類と共通するものと、端部に敲打痕が存在するものがあるが、ここで分類したものの多くは後者に分類される。いずれも、敲打痕が磨痕を切っており、端部の敲打痕には剥離痕を伴うものが認められる。

D類(508～512)は、磨痕・凹痕・敲打痕の3種類の要素が複合したものである。すなわち、他の分類の要素を多かれ少なかれ備えている。この場合についても、磨痕→凹痕・敲打痕という切り合い関係の原則はかわらない。

E類(513～534)は、多様な在り方を呈する。断面が楕円形の礫を素材とし、より平坦な2面の中央部に凹痕が形成されることが一般的であるが、平坦部の面積が小さな側面にも形成されることがある。また、凹痕の深さは、浅いものから極端に深いものまで様々である。特に、E類には深く広い凹痕を有するものが一定量存在する。先述のとおり、球状で小形の磨石や礫の直径とこの凹痕の大きさがフィットすることは注目される。

F類(535～541)は、より広い平坦面に凹痕、端部に敲打痕が観察されることが一般的である。中には、円形を呈しその全周縁に敲打痕が観察される特徴的なものもある。また、536は全面を敲打することで球形を作出し、その一部に深い凹痕を作出した特異な形態のものである。

G類(542～548・550～552)は、凹痕が初期段階を示すと思われるものと、敲石として利用されたと思われるものが認められる。前者は断面楕円形の平坦部に、後者は端部に敲打痕が観察される。端部に敲打痕が観察されるものは、他の使用痕との組み合わせにはみられない独特の在り方といえる。550は、小形で細長い扁平礫の両端部から側面にかけて平坦な敲打痕が形成されている。552は、細長い扁平な亜円礫の対置する側面の2ヶ所に、敲打によるくびれが形成されている。

石材は、安山岩が535点、砂岩が6点(492・538・545)、硬砂岩が1点(550)、凝灰岩が1点(544)である。安山岩が98%以上を占め、圧倒的に多いことがわかる。安山岩と砂岩については、片貝川で採取可能であり、豊富な石材環境の反映と考えられる。

⑮石皿(559～585)

石皿は、55個体出土している。その内訳は、皿面が弓状に深く窪むA類が26個体47%(561・567・568・577・578・580など)、平坦でほとんど窪まないB類が29個体53%(559・560・566・574・579・581など)であり、両者ともほぼ同数ずつ認められることとなる。また、B類はA類の使用の初期段階を示すものと考えられる。すなわち、弓状に深く窪む皿面は、繰り返し使用した結果、形成されたものと判断される。下層石器群には、素材に近いものから表裏が貫通しそうになるほど使用したもの(567など)まで、様々な段階を示す資料が存在する。ここでは、こういった充実した資料から石皿の製作・使用の過程を復原したい。

石皿の素材となった石材は、すべて安山岩である。特に、角閃石を多量に含む比較的軟質で粗粒の安山岩が多用されている。その中には、亜円礫から亜角礫まで様々であるが、いずれも扁平なもので、直接、皿面を形成することが可能なものである。実際、形態を整えず、そのまま皿面だけを形成しているものが存在する(560・582など)。一方、皿面の周縁に敲打痕が認められる例がある(565・579・583)。皿面全面を敲打することで緩く窪む断面形をあらかじめ作出していることも予想されるが、579のようにほとんど窪まないものについても敲打痕が認められるのは周縁のみである。したがって、敲打は皿面とする範囲の周縁のみに限定

されるものであると予想される。皿面以外にも、裏面を平坦にして安定性を増したもの(559・569・576・580・581・583)や、側面を直線的に調整して、平面形を左右線対称の逆台形に仕上げたもの(567・580)もある。いずれにせよ、偏平な素材を準備することで、皿面にする平坦な表面と、安定性のある裏面を確保していたと考えられる。そして、繰り返し使用する過程で弓状の深い窪みが形成されたのであろう。

形態的特徴について、まず目に付くのは、平面形態が楕円形のもの(561・562・566・568・574・575・582など)と四角形に近いもの(567・569・576・578・580・581など)とが認められることである。四角形に近いものは、側面を磨ることで直線的なラインが作り出されることが多い。そして、搔き出し口の側の幅がより狭い傾向にある。大きさは、バラエティーの幅が広く、長さが60cm以上のものから14cmのものまでである。また、大形で弓状に窪むものについては、欠損していることが多いことも特徴的である。

石皿の出土状況は興味深い在り方を呈する。他の石器と同様、廃棄ブロックからも多数出土しているが、石皿に特徴的なことはピット中から出土したものが多くことである。ピット出土の石皿は12個体、22%にもおよぶ。他の器種において、このような高率を示すことはなく、特異な在り方といえる。石皿のほかにも、粗粒の安山岩が多用される磨石類・石棒といった比較的大形の石器が目立ってピットから出土しており、版築に再利用されたことが予想される。

⑩砥石 (587～612)

砥石・砥石片は、81点出土している。砥石は、砥面の断面形態により分類しているが、観察できる砥面が小さな砥石片の分類には有効でない。例えば、窪む砥面の一部を残す砥石片であるとしても平坦と判断されてしまう傾向がある。そこで、砥面の全体像を把握できる砥石56点のみについて分類すると、砥面が窪むA類が15点(27%)、砥面が平坦なB類が17点(30%)、いわゆる石鋸であるC類が23点(41%)、いわゆる筋砥石であるD類が1点(2%)であった。

窪んだり平坦な砥面を有する砥石は、A類とB類に分類したものの、実際はひとつの石器にふたつの要素が混在している。しいていえば、厚みのある素材を利用するものには窪む砥面(594～599・606・611)、偏平な素材を利用するものには平坦な砥面(600・602・607・610)が形成される傾向にある。前者は、多面体の平坦面4面以上に砥面が認められることがほとんどで、その素材をできる限り有効に利用しようとする在り方が理解される。後者は、素材の性格上、砥面が平坦な1～2面に形成される。また、凹痕を伴うことがあり特徴的である(602・607・610)。

石鋸(擦切石器)・筋砥石については、立木由理子氏により集成・検討されている[立木1997]。下層石器群の石鋸についても、そこで集成されたものとは大きく変わらず、平面形態は直線的なもの(601・603・605)と曲線的なもの(604・612)とがあり、断面形態はすべてU字形～V字形を呈する。素材は、砥石片を利用するものが多いが砥面が全面に及び、A類やB類としての側面を併せ持つものもある。対象物については、擦切技法により製作された磨製石斧(220・223・230・231)および素材(238・239・247・248・256)が多数出土しており、その有力な候補として挙げられる。石鋸の刃部厚のバラエティーと磨製石斧にみられる擦切痕の幅のバラエティーがよく一致すること、磨製石斧の素材になり得ないと思われる残滓(248)が出土していることは、その裏付けとなろう。

筋砥石(609)は、断面形態がV字形～U字形の溝状砥面が多数認められるものである。ただし、断面形は、均整のとれたV字形やU字形ばかりでなく、左右線対称でないものもある。また、各砥面の形態は、浅いものから深いもの、直線的なものから曲線的なもの、幅が広いものから狭いものと、それぞれ様々な形態を示

す。各砥面の方向については、基本的には同方向であるが、すべてが平行しているわけではなく交差するものもある。玉類を研磨したとされる砥石の溝状砥面は、幅が均一かつ直線的であり、複数ある場合は単位ごとに平行してほぼ等間隔に走るとされている [立木1997]。これとは形態上、明らかに区分されるものであり、玉類の研磨が行われたとは考えにくい。研磨の対象物として骨角器の可能性が指摘されることがある [宮下1987、立木1997] が、そういったことも念頭に置いて検討される必要がある。

また、これら砥石・砥石片のうち35点(43%)が被熱している。そして、被熱に伴う剥落・分割により新たに形成された粗い面が、砥面として再利用されている(595・597)。意図的な加熱により、平滑になった砥面を再生しているかのようである。一方、平滑になった面を意図的に剥離している例もある(599・606・611)。被熱により新たに形成された面を再利用することは、偶発的な事象なのであろうか。

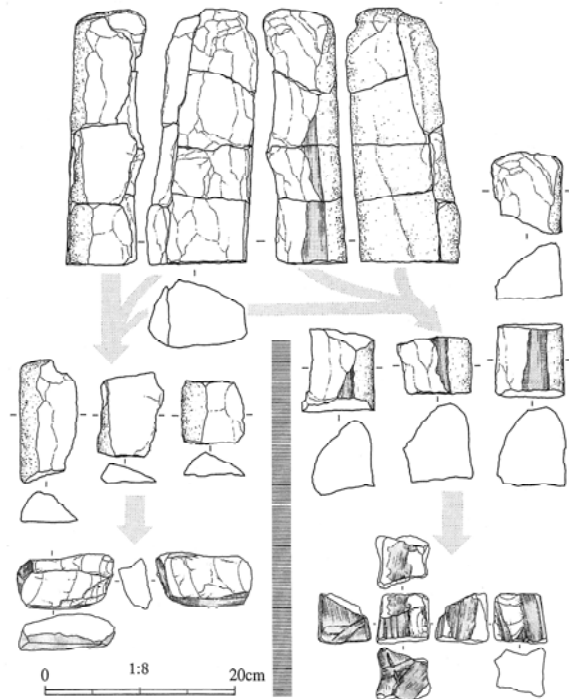
そこで注目したいのが586の接合資料である(第85図)。砥面は、ごく一部にしか残っておらず、その延長に存在したと考えられる砥面の大部分は被熱により剥落している。さらに、それが7個体以上に分割されている。分割後の姿を観察すると、厚みのある多面体と、薄手で断面三角形の剥片に分類される。前者は、596や597など多面体を呈し窪んだ砥面を有する砥石の素材に、後者は、601や602など擦切石器の素材になりうる形態といえる。この分割が意図的に行われていたとすれば、そういった再利用の姿を念頭においていたことが予想される。しかし、分割は広い砥面の放棄を意味し、大きなデメリットを伴う選択といえる。一方、分割により砥面になりうる各面の面積は狭くなるが、総合するとより広い面積が確保されることになる。こういったメリットと残された砥石の形態を考え併せるならば、分割が意図的に行われていないとしても、こういった素材が利用されていたと考えることができよう。

石材は、すべて砂岩である。ほとんどが粒子が細かく均質なものであるが、粒子が粗く均質でないもの(594)も利用されている。

(4) 剥片剥離技術

剥片剥離技術は、上層石器群と同様の傾向が認められる。礫(458・465・476・484)、分割礫(461・478・485)、剥片(460・464・475)と石核の素材の形状は様々であるが、剥片剥離の準備段階である打面調整や頭部調整が入念に行われることはない。打面転位の繰り返して適当な打角を準備するという原則に則っている。

石核素材の多様さから、打面の形状は剥離面・分割面・折断面(460・469・470)・礫面(458・461・465・467・476・480)・節理面(485)と様々であるが、適当な打角があれば剥片剥離を開始している。適当な打角の準備においては、打面を固定し打点を移動するもの(480)と、頻繁な打面転位を行うものとが認められるが、下層石器群においては後者が圧倒的に多い。後者には、打面と作業面を入れ替える180度の打面転位が多く認められ(482)、それが繰り返された結果、両面調整体に近い状態になっているもの(475・486)もある。



第85図 砥石の分割と再利用

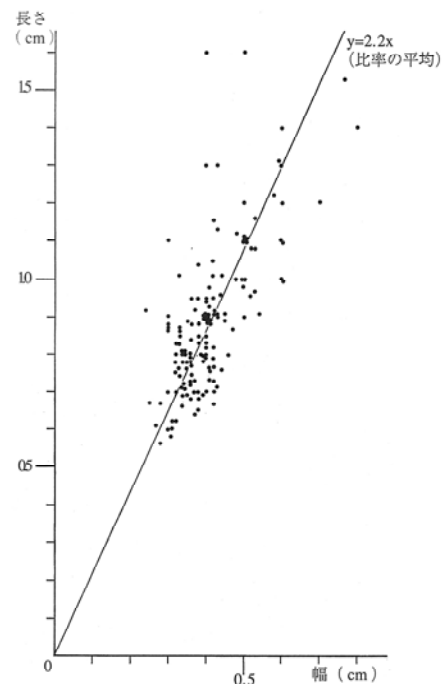
こういった石核から得られる剥片は、一定の形態をなすことはなく、幅広で寸詰まりな剥片であることが多い。石核の作業面には、縦長剥片を剥離した痕跡はほとんど認められず、数少ない縦長剥片(443・447・448・455)も、石刃技法のような一定の手順をもって得られたものではなく、偶発的に得られたものと考えられる。448の表面には、90度方向の打面転位を示す剥離痕が形成されており、そのことを裏付けている。

流理構造の安山岩を素材とするもの(463～465・467・486)については、他の石材と同様、剥片剥離のための入念な準備は行われぬが、節理面に沿うように剥片剥離していることが特徴的である。一定の厚さの素材を連続的に得るために、素材の特徴を有効に活用しているといえる。ただし、460については節理面と直交するような方向に剥離している。扁平な素材であり、直接、節理面に沿うように剥片を剥離することは難しく、打面と適当な打角を準備したかのようなのである。

なお、440・466・468・479は地山の火砕流堆積物層に含まれる粗粒の安山岩を素材としているものである。440・466・468には、全面にローリングによると思われる摩滅が認められ、擬石器の可能性を指摘できる。

(5) 玉髄製小形石錐の製作と使用

下層石器群の最も大きな特徴のひとつに、半透明～乳白色の玉髄を多用していることが挙げられる。その多くは、長さ0.88cm、幅・厚さ0.4cmほど(平均値)と極めて小さい(第86図)が、明らかな使用痕が観察されるものもあり、道具のひとつであったと理解される。それらは、S I 117のSK1・SK2・P50とその東側の廃棄ブロック下、S I 120のSK23から出土しており、碎片を多量に含む土をウォーターセパレーションしたことによって明らかになった。楕円形や小判形を呈する大型竪穴住居の長軸の一端(南東側)に存在する土坑・ピットから特徴的に出土しているといえる。ただし、S I 117の土坑は、竪穴住居の埋没後に形成されたもの、廃棄ブロック下の出土層位は竪穴住居形成以前のものと評価されており、(第VI章1. B(1)参照)、一括して扱うことには危険を孕んでいる。いずれにせよ、特殊な作業空間の存在が予想されるのである。なお、選別する土を保管する際に、出土状況が記録された荷札の一部が腐蝕してしまい、出土情報を失ったものがあり、出土位置ごとに情報を提示していない。



第86図 玉髄製小形石器の大きさ (V～VI類)

a. 製作工程の復原

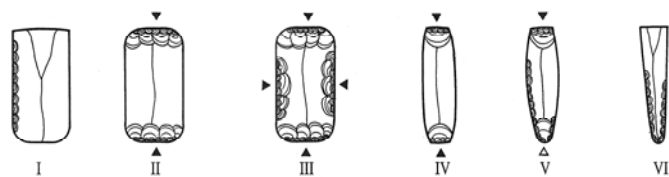
製作工程の復原にあたっては、玉髄製の石器をI類～VI類(第87図)に分類し整理した。

I類…スクレイパー。剥片の一辺に線的に二次調整が加られた石器。

II類…2極1対の楔形石器。長さが幅の2倍未満のものをここに分類した。

III類…4極2対の楔形石器。

IV類…2極1対の楔形石器。長さが幅の2倍以上で角柱状のものをここに分類した。

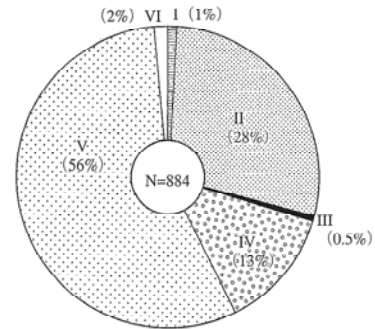


第87図 玉髄製小形石器の形態分類

V類 … IV類の端部に二次調整が加えられた石錐。

VI類 … 角柱状の剥片の端部に二次調整が加えられた石錐。

以上のように、石器組成表においては、I類をスクレイパー、II・III・IV類を楔形石器、V・VI類を石錐と分類した。ここに示した細分形態の組成は、I類が6点(1%)、II類が246点(28%)、III類が5点(0.5%)、IV類が112点(13%)、V類が496点(56%)、VI類が19点(2%)となる(第88図)。角柱状を呈するもの(IV・V・VI類)が627点(71%)を占めることとなり、一定の形態に仕上げようとする在り方が理解される。ここでは、製作工程を復原することで、6つの分類相互の関連性を把握したい。



第88図 玉髓製小形石器の細分形態の組成

①原石

原石は、2～3cmの小礫であったことが礫面を多く残す83から推測される。また、同様の大きさの原石も出土している。

②両極剥離－素材の作出－

小さく厚手の礫を有効に活用すべく、両極剥離が行われている。それに付随して作出された剥片を素材に用いることが多い。すなわち、II・III類の楔形石器(80～87・122)は、石核としての役割を果たしたと考えられる。また、両極打撃の繰り返して楔形石器の小形化は進行し、II・III類がIV類に近付いていくことも予想される。得られた剥片には、さらに両極打撃が加えられ角柱状の素材が作出される(88～95)。

③二次調整－錐部の作出－

角柱状を呈した楔形石器(IV類)の一端に錐部が作出されることが多い。両極打撃の痕跡が認められず楔形石器と判断されない場合でも、必ずといってよいほど角柱状の剥片が充てられている。錐部作出のための二次調整は、素材の形状を大きく修正するような性格のものではない。素材自体に錐部になりうる適当な形態が準備されていれば、調整を加えずに錐として利用している場合もある(109)。素材や調整の在り方よりも、最終的に作出される形態に重点が置かれたと理解される。

④加熱処理による石器製作の可能性

加熱処理とは、比較的低温(500℃以下)で岩石を熱し、再び徐々に冷やすことによって剥離に関する性質を改善する技術である。適切な加熱処理が行われれば、未処理の状態に比較して剥離に要する力が小さく、しかも、より大きな剥片を剥離することができ、加工が容易になるとされている[御堂島1993b]。

玉髓の加熱処理は、御堂島正氏により詳細に検討されている[御堂島1993a・b]。欧米における研究を紹介し、実験結果をもとに、遺物における加熱処理の痕跡を見出している。それによると、加熱処理後の剥離面は強い光沢を帯び、加熱処理前の剥離面(熱を直接に受けた表面)は光沢を有さない(磨りガラス状)という。こういった結果を踏まえ遺物を検討したところ、厚みのない素材剥片を剥離した後、加熱処理して押圧剥離などによる二次調整が施されたと予測している。

こういった視点をもって、和泉A遺跡出土の玉髓製小形石器を観察したところ、強い光沢を有する剥離面が認められた。86は、その顕著な例である。両極打撃によって形成された剥離面は強い光沢を有する反面、両極打撃以前の剥離面に光沢は認められず(スクリーントーン添付範囲)、明らかな差が看取された。光沢面の状態は、御堂島氏が実験的に製作した石器の状態と極めてよく似ている。また、剥離痕の切り合い関係と光沢面の位置関係の観察からは、適当な大きさの剥片を剥離して加熱処理を施した後、両極打撃を行ったこと

がわかる。硬く、小さな素材を加工するのに、加熱処理を施し加工しやすくすることは有効であったろうし、実際、そういった処理が施されていたと想定することは難しくない。しかし、実験結果を持ち合わせての検討は行っていないため、加熱加工の可能性を指摘するに留めておきたい。

b. 使用痕の観察

上述のように作出された石器の細く尖る先端部には、しばしば著しい磨耗痕が肉眼観察される。側面から見ると横位方向の線状痕が錐部の周囲を廻るように観察され、錐のような回転運動によって形成されたものと考えられる。しかし、小さな石器は単独で使用されたのではなく、ソケットに装着して使用されたと予想される。一端のみに明瞭な使用痕が残され、他端が角柱状のままであることは、その裏付けといえるかもしれない。

使用痕は、肉眼観察のほか実体顕微鏡を用いて細部を観察した（図版309）。その結果、錐部の先端と周囲に回転方向の線状痕と著しい摩滅が認められた。しかし、使用痕は凸部のみに分布し、凹部にはほとんど認められなかった。わずかな凹部は、対象物との接触による影響が小さかったといえる。研磨剤を使用したとしても、凹部への影響があるはずであり、硬い対象物に直接穿孔した結果と考えられる。

こういった前提と錐部の直径を勘案して穿孔された対象物の候補を考えてみたい。出土遺物の中では管玉などの玉類や土器片円盤の穿孔、 玦状耳飾りの補修孔の作出に用いられたことが予測される。しかし、それらの出土点数は少なく、500点以上出土している石錐の点数とのバランスがとれない。遺跡に残らなかった有機質の遺物を考えるのであれば、骨角器の加工が予想されるが、より詳細な検討が必要になる。

c. 類例

形態的類例は、北海道で認められる。

礼文島のオシオンナイ遺跡〔大塚1976〕では、縄文後期中葉の土器に伴って1000本を超える玉髓製の石錐が出土している。しかし、紹介されている実測図を見る限り、より大きく、基部の幅が広い。すなわち、和泉A遺跡にみられるような角柱状の素材が用いられているわけではなく、棒状に仕上げられているわけでもない。また、多量に出土する石錐は、共存遺物の状況からホッキ貝を素材とする平玉の製作に使われたものと類推されている。すなわち、和泉A遺跡とは時期・形態・用途が異なるものと考えられる。

渡島半島の日本海側に位置する瀬棚郡瀬棚町・瀬棚南川遺跡〔上野ほか1983〕からは、和泉A遺跡のものと形態的共通点が多い石錐が多量に出土している。統縄文時代の住居跡や土坑から出土しており、時期的には全く異なるものであるが、形態的・技術的によく似たものであり、比較の材料としたい。

報告書によると、玉髓（メノウ）製で幅の狭い棒状の石錐（CⅣ型）が13,914点出土している。両極打撃により作出された横断面形が四角形の素材が用いられている。調整ないし微細な剥離があるものが6割、剥離はなく使用痕が認められるものが3割、未成品・破片が1割である。使用痕は、一端のみのものもあるが両端に認められ、廃棄段階では「米粒」状をなすものが多い。長さは、最大で2.18 cm、最小で0.64 cm、厚さは0.7 cmを超えるものはなく、最小は0.46 cmである。平均値は、長さが1.124 cm、厚さが0.46 cmである。

このように、両端に錐部が作出されることを除けば、石材・製作技術・形態・大きさ・出土点数の多さにおいて、和泉A遺跡出土のものとよく共通するといえる。また、住居や土坑からまとめて出土する在り方も共通する。時期も地域も異なる瀬棚南川遺跡と和泉A遺跡を単純に同等に評価することはできないだろうが、特異な形態が多量に出土する状況は重要な共通点である。

また、瀬棚南川遺跡の報告書では、玉髓製の石錐で土器に穿孔した実験結果を提示しているが、1つの孔を開けるだけで使用先端部が摩滅して光沢が形成されたという。この結果をもとに、この種の石錐の損耗度が激しいものであったと推測しているが、1万点を超える出土点数は多く、特殊な作業行為をしていた人間集団の存在を予想している。

使用痕を十分に検証する必要があるが、和泉A遺跡についても遺跡内で石器の製作から使用に至る一連の行動を示す資料（原石・素材・調整剥片・碎片・成品・使用された成品）が得られており、何らかの特定の作業が、特定の場所で行われたことを予測させる。このような石器組成の特異な偏りの意味することについては慎重に議論されるべきであるが、瀬棚南川遺跡における報告と同様に解釈することができよう。

以上のように、形態的類例を紹介したが、和泉A遺跡と同等に比較できる資料とはいえない。一見、碎片にしか見えないこの種の石器は、調査時・観察時に見落とされている可能性があり、類例の増加を待って詳細に検討されることが望まれる。

（6）流理構造質安山岩の利用

流理構造の安山岩は、打製石斧・スクレイパー・両面調整石器・折断調整石器・対向調整石器・周縁敲打調整石器など2,012点の石器に用いられている。総重量にして、80kgを超える量が遺跡に搬入されている。このように多用された流理構造の安山岩は、現在では数少ないながらも遺跡直下の片貝川で採取可能な石材である。多量に持ち込まれている状況を考慮すれば、遺跡からそう遠くない場所で採取したものと予想される。豊富な石材環境の反映と考えられよう。

上述のとおり、様々な器種に充てられているものの、特に、スクレイパーと両面調整石器は多量に出土しており、下層石器群を特徴づける石器として位置付けてきた。この2種類の器種を含め、しばしば「不定形石器」と呼ばれる一群の石器を二次調整の在り方によって分類してきたが、ここでは、それらの石器の製作工程と相互の関係について検討してみたい（第89図）。

a. 製作工程の復原

①原石～剥片剥離

原石は、遺跡直下の片貝川など周辺で多量に採取したと考えられる。その形状は、板状の亜角礫～亜円礫（第89図1 a・1 b）であり、片貝川で採取したものと共通する。流理構造という性格を生かすべく節理面に沿うように力を加えるが（2 a・2 b）、その際も他の石材と同様、剥片剥離のための入念な準備を行うことはない。剥離方向についても計画性は認められず、特定の手順で剥片剥離を行っていないようである。そうであっても、石材の性格上、ある程度画一的な厚さの素材を獲得できた（2 b）であろうし、失敗しても豊富な石材環境のもとすぐに素材を補充できたであろう。素材の形状や大きさよりも、まずは適当な厚さが必要であったと予想される。

②折断

流理構造の安山岩からは、一定の厚さの素材を得ることはできても、大きさ・形態までを整えることは難しい。そこで、大きさと形態を整える工程として折断の存在が認められる（3 a・3 b）。流理構造の安山岩を素材とするほとんどの石器に折断面が確認されるが、特に両面調整石器K4類については形態の規整に大きな役割を果たしている（357・378・381・382・414など）。K4類は、50～60度ほどの角度を有する端部先端に両面調整を施す特異な形態であるが、一定の開きを有する端部の多くは折断により作出されている。これは、特にわかりやすい一例であるが、折断後に刃部が作出されている接合資料（425）により、他の分類に

についても折断が一定の役割を果たしたと考えられる。

また、原石や剥片に適当な厚さ・大きさ・形態が備わっていれば、剥片剥離や折断という過程を経ることなく、二次調整を加え完成品に仕上げられることもある（礫素材：282・331・363・379・383・385・303、剥片素材：277・333・334・362・383）。素材の製作工程を重要視していない在り方が理解される。

③二次調整

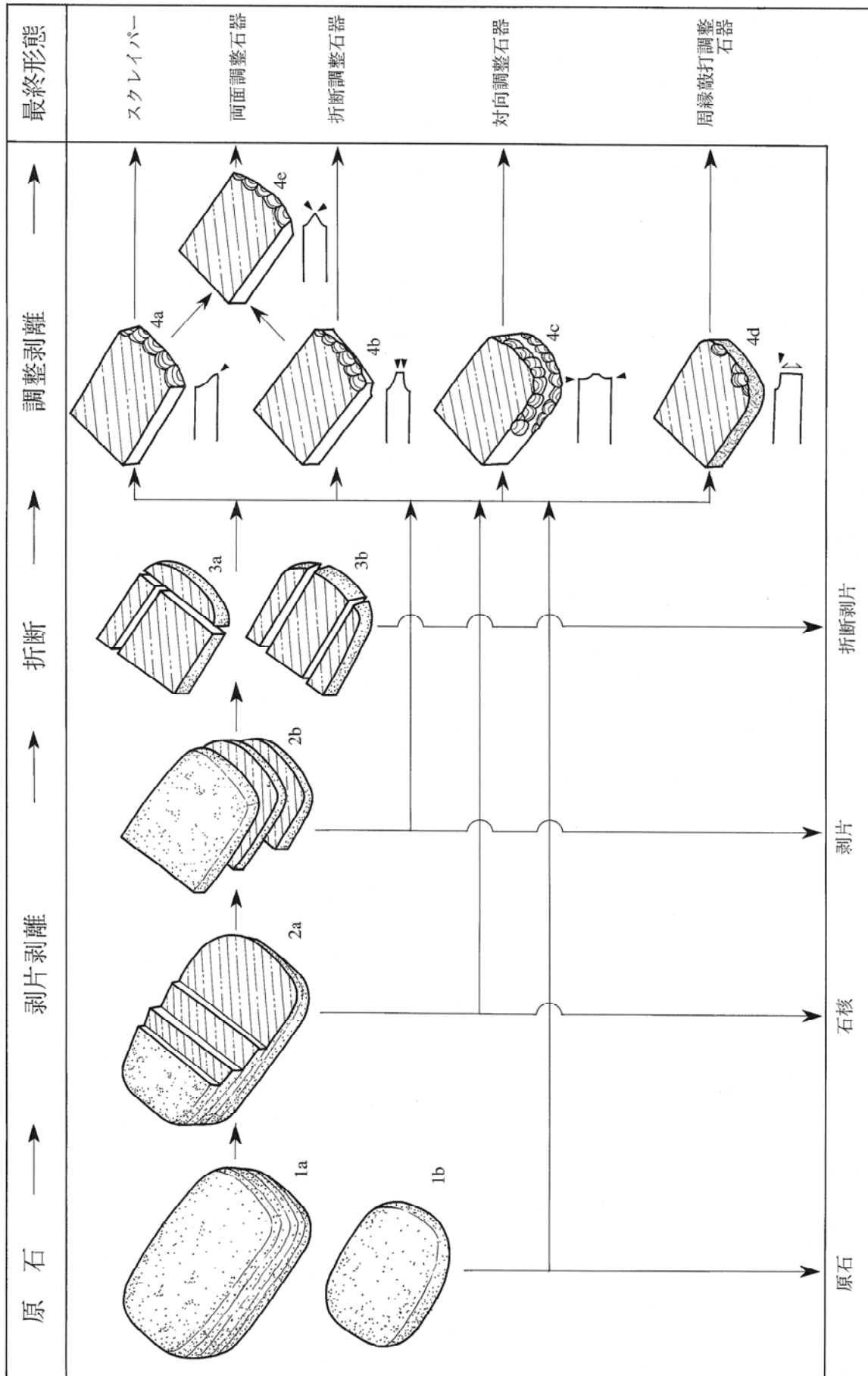
折断により、大きさ・形態が整えられ二次調整が加えられる。本報告では、この調整の在り方によって、いわゆる「不定形石器」を5種類に分類した。調整は、片面調整・両面調整・折断調整・対向調整・周縁敲打調整が認められたものの、ひとつの石器に複数種類の調整が存在することもあった。本報告では、より長くより入念な調整が施された刃部をもとに優先的に分類してきたが、特に両面調整においては片面調整や折断調整との複合形が多かった。また、再三触れているK4類については、両面調整以外の調整がより長く施されているが、端部に点的な両面調整を施す一群に有意なまとまりが認められたため積極的に評価している。

両面調整は、片面を調整した後に裏返して再び調整を加えることで形成されるのが一般的である（4 a→4 e）。本報告では、片面調整のみで留まっているものをスクレイパーと分類している。スクレイパーが目的的な形態であったこともあろうが、両面調整石器との関連性が予想される。特に、裏面のみに調整を施す一群の断面形は、両面調整と共通しており（第82・83図）、同様の効果が得られている（277・278・281・282・288・298・300など）。流理構造の安山岩を素材とするスクレイパーの多くは、両面調整石器の未成品や省略形であったと考えられる。

折断調整は、折断面を打面として表裏面に向かう調整剥離であるが、これには片面のみのものと両面のものがある。その目的は、余分な高まりの除去や厚さの減少など、多様な在り方が認められる。また、両面を均等に剥離していけば、折断面の幅は狭くなり、最終的には均整のとれた両面調整が作出される（4 b→4 e）。例えば、343は、実測図上側がK4類のように端部両面に調整が施されているが、表裏の間には折断面が残されている。先端の開きの大きさを考慮すると、K4類の未成品とも考えることができる。429は、折断調整石器に分類されているが折断面はほとんど残っておらず、両面調整に極めて近い断面形態を呈している。すなわち、折断調整を経て両面調整に至る工程を想定しておきたい。両面調整石器に折断調整が認められるのは、こういった工程を反映しているのかもしれない。

対向調整・周縁敲打調整は、両面調整の形成と連動すると積極的に評価することはできない。対向調整は、両面調整が鋭い刃部を作出するのと対照的で、垂直に近い断面形に仕上げられる（4 c）。周縁敲打調整も、垂直に近い断面形が作出されるが、敲打の衝撃により、表裏に折断調整状の剥離痕が形成されることがある（4 d）。また、363については、361・405など緩やかな外湾状の刃部を有する両面調整石器と形態的によく似ており、使用の過程で形成された敲打痕であることも考えられる。

以上のように、スクレイパー・折断調整石器の一部は、両面調整石器製作の一工程を示していると考えられた。多量に製作された両面調整の刃部は、肉眼観察で使用痕が観察されるものもあり道具として使用されたことは確実と思われる。具体的な用途については別途検討する必要があるが、極めて多量に製作され使用されている状況を考えれば、刃が鈍くなると使い捨てするような「便宜的石器」[阿子島1989]であったと予想される。豊富な石材環境のもと、決して緻密ではないが、一定の形態を量産するのに適した流理構造の安山岩を選択的に利用した背景には、そういった事情があるのだろう。すなわち、質より量に比重が置かれた石器製作が行われたことを意味していると考えられる。



第89図 流理構造質安山岩の利用

b. 類例

この種の石器の類例は、散見の限り棚畑遺跡〔鶴飼ほか1990〕・花上寺遺跡〔岡谷市教委1987〕・風呂屋遺跡〔石原・鶴田1998〕など長野県内に認められる。いずれも詳細については触れられていないが、偏平な礫や節理面に沿って板状に割れた偏平な剥片を素材とし、縁辺に両面調整が施されている。霧ヶ峰・和田峠の黒曜石の利用、中部高地的な色彩が強い土器、後に触れる琥珀の出土など、信州方面との強い共通性が理解される。しかし、両面調整が施される石器は、和泉A遺跡ほど顕著でないものの、県内外の縄文時代の遺跡で認められ、そういったものと比較検討も必要となつてこよう。

また、板状の素材を用いること、表裏の平坦面に異方向の線状痕が認められること〔高橋1992・沢田1995〕は、中越地方を中心に認められる板状石器の在り方と共通する。板状石器は急角度の片面調整が原則であり、調整の在り方は明らかに異なる。

(7) 石材組成

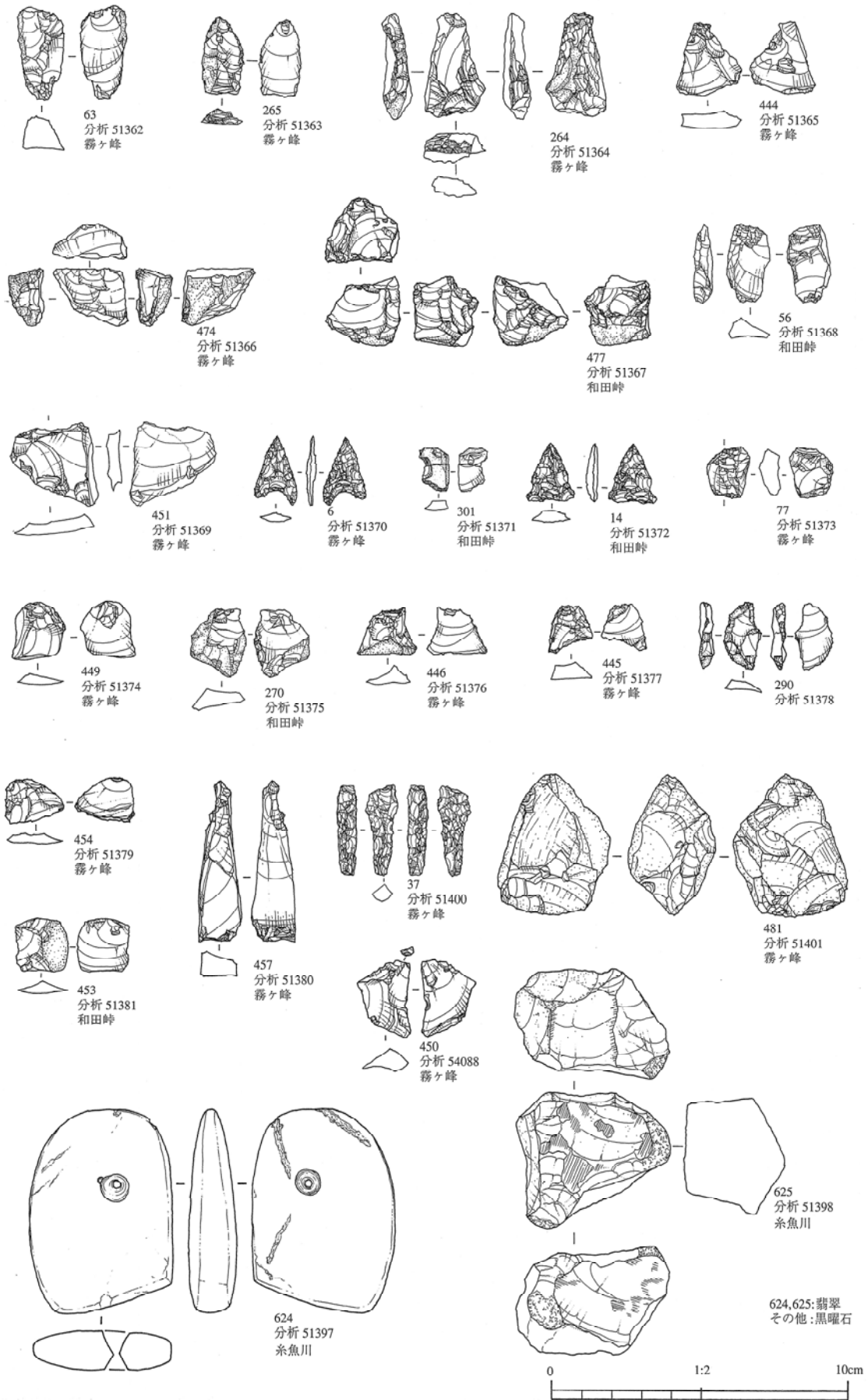
石材組成(第9表・第80図)は、点数の上では玉髓が60,820点(88%)と圧倒的多数を占めている。しかし、その多くは小形の石錐およびその製作過程に生じた碎片であり、総重量は5,772.3 g(1%)に過ぎない。1点あたりの平均重量は0.01 gである。

これとは対照的に安山岩は点数では6,047点(9%)であるが、総重量は522,180.2 g(94%)を占める。1点あたりの平均重量は86.4 gである。このように重量で大きな割合を占めるのは、磨石類と石皿の大半が安山岩Cに分類されるためである。また、石器組成において大きな割合を占める両面調整石器やスクレイパーに安山岩B(流理構造)が充てられ、石鏃や楔形石器といった小形の石器には安山岩A(ガラス質)が充てられている。したがって、1点あたりの平均重量は安山岩の分類ごとで大きく異なる。点数・重量とも大きな割合を占める安山岩は、遺跡直下の片貝川で採取可能な石材である。しかし、石鏃に用いられるほど無斑晶質なものや、石皿に用いられている板状で角閃石を多量に含む角礫~亜角礫は採取されていない。片貝川で採取できなかったとしても、遺跡に搬入されている重量を考慮すると、そう遠くからもたらされたものでないことが予想される。

黒曜石は、1,922点(3%)、561.2 g(0.1%)が出土している。1点あたりの平均重量は0.3 gであり、極めて小さな値を示す。これは、石鏃・楔形石器など小形石器に充てられていること、碎片を多量に含むことを反映している。また、石核や原石は極めて小さく、大きな素材として搬入されていないことが予想される。なお、科学分析によると霧ヶ峰と和田峠の産地が同定されている(第90図)。

砂岩は、150点(0.2%)、515.6 g(0.1%)が出土している。総重量は黒曜石と近い値であるが、1点あたりの平均重量にすると3.4 gとはるかに大きな値を示している。これは、砥石や磨石類に多用されていることを反映している。また、被熱により剥落した破片や、砥面を再生するかのような剥片も多数含まれている。砂岩は、難波山層起源のものが矢代川で、起源ははっきりしないが片貝川でも採取できる。また、妙高高原町笹ヶ峰上流の寺泊層(小川層)相当層でも産出される〔中村1995〕。

蛇紋岩は、石製品も含めると139点(0.2%)、3,469.9 g(0.6%)が出土している。1点あたりの平均重量にすると249.6 gとなり、点数の割には重量が大きな値を示している。これは、ほとんどが磨製石斧とその素材であること、比重が大きいことの反映と考えられる。これらの産地は、青海-蓮華帯に求められるが、翡翠が糸魚川産と同定されていることを考えれば、新潟側の産地との密接な関連性が予想される。



第90図 産地分析資料(黒曜石・翡翠)

このほかにチャート(24点)、頁岩(14点)、凝灰岩(13点)、石英(9点)、硬砂岩(9点)、流紋岩(3点)、水晶(2点)、鉄石英(1点)が少量ずつ加わり、その多くは単独で搬入されている。チャートが遺跡直下の片貝川で容易に採取できるほかは、遠隔地的な石材、もしくは在地的な石材であってもやや離れた矢代川などに産地が求められる石材と考えられる。

(8) 石材環境

石材環境(第44・45図)については、上層石器群と重複しない石材(水晶・鉄石英)のみについて触れることとしたい。水晶は、遺跡から最も近い産地として、山梨県甲府市や長野県南佐久郡などが知られている。しかし、本遺跡で用いられている水晶は玉髓に付着したものであり、玉髓の産地を追求する必要性がある。鉄石英は、県内では下越地方で多く産出されるが、遺跡から近い長野県小谷村でも採取可能という[中村1995]。

(9) まとめ

a. 石器組成と石材組成

下層石器群の石器組成は、石鏃・尖頭器・石錐・石匙・楔形石器・打製石斧・磨製石斧・スクレイパー・両面調整石器・折断調整石器・対向調整石器・周縁敲打調整石器・微細剥離痕を有する剥片・剥片・石核・原石・礫器・磨石類・石皿・砥石から構成される。剥片・碎片・石核・原石・砥石片を除いたそれぞれの点数比は、第9表・第80図のとおりである。この石器組成において特徴的なことは、石錐・楔形石器・スクレイパー・両面調整石器・磨石類が非常に多い点である。

石錐と楔形石器は、どちらも玉髓製が90%以上を占めている。玉髓製の石錐は、長さ0.9cmほどと極めて小形であり、楔形石器のほとんどはその素材と考えられる。むしろ、玉髓製を除いた石錐と楔形石器の比率は決して大きくはない。長さ0.9cmほどと小さな石錐であっても、明瞭な使用痕が残されており、下層石器群を特徴づける器種といえる。

スクレイパーと両面調整石器は、流理構造の安山岩が多用される。両面調整石器においては、92%にも達する。流理構造の安山岩を素材とするスクレイパーや折断調整石器は、両面調整石器の製作過程を示す可能性がある。均質な厚さの素材を連続的に得られるという、流理構造質安山岩の特質が生かされての利用と考えられる。豊富な石材環境のもと、刃が鈍くなると使い捨てするような便宜的な石器[阿子島1989]であると推測される。出土点数の多さは、その反映と考えられる。

磨石類は、543点にも達し、そのうち99%は粗粒の安山岩を素材としている。それらは、様々な使用痕の組み合わせにより、様々な形態を呈する。中でも、下層石器群で注目されるのは、極めて深く広い凹痕を有する石器である。新潟県内でまとまった数が出土したのは、おそらく初めてのことであり、長野県棚畑遺跡[鶴飼ほか1990]などに類例が求められる。磨石類の多さと対応するように、石皿が55個体出土していることも注目される。素材から、使用が進んだものまでバラエティーが認められたが、使用が進むほど欠損していることが特徴的である。

これまで触れてきた、しばしば不定形石器と呼ばれる一群や磨石類を除くと、打製石斧・磨製石斧の多さが目立つ。打製石斧は96点にも達するが、そのうち91点は安山岩製である。形態的には、撥形もしくはそれと形態的連続性をもって捉えられるものであり、特定の形態に偏る傾向が強い。また、その多くに明瞭な使用痕が観察されることも特徴的である。

磨製石斧は、57点出土しているが、そのうち49点が蛇紋岩製である。大形は厚手・両刃・円刃、小形は薄

手・片刃・平刃である傾向が強い。また、蛇紋岩製の未成品が11点出土していることも特筆される。その多くには擦切痕が認められ、砂岩製の石鋸（擦切石器）と関連づけて考えることができる。砥石が56点出土している状況を考えあわせると、素材から製品まで、一連の工程が遺跡内で行われた可能性がある。

打製石斧・磨製石斧の多さと比べると、石鏃は33点と少なく、尖頭器・石匙はそれぞれ3点に過ぎない。石鏃は、33点を多いと考えることもできないことはないが、石器群全体の中における割合は決して多くはない。石鏃には黒曜石が多用され、未成品についても同様の傾向が認められる。しかし、上層石器群のように石鏃製作が盛んに行われた痕跡は認められない。また、素材に楔形石器が用いられたことを積極的に評価できるような資料は認められず、横長の剥片に直接、二次調整を加えたようである。そのほかにもチャート・ガラス質安山岩・凝灰岩が利用されているが、ほとんどが単独個体で搬入されている。形態は、石材を問わず無茎凹基鏃が主体であり、脚部が長い小形品が特徴的に認められる。

尖頭器は、2点がガラス質安山岩製、1点が頁岩製である。形態は、木葉形～柳葉形までと様々であるが、頁岩製は玉髓に近い極めて良質なものであり、明らかに単独個体で搬入されている。石匙は、3点ともガラス質安山岩であるが、成品は1点のみと少ない。多量に出土している両面調整石器の一部は、横形石匙ともいえるような形態であり、相互の関係について検討する必要がある。礫器が一定量加わることも特徴的であり、いずれも、大形で厚く鈍い刃部を有する。石材は、剥片石器には適さない粗粒な安山岩が多用され、刃部には、著しい摩滅痕が認められる。石核でなく、ひとつの道具として認識されるべき一群である。

b. 石材環境と石材組成

下層石器群に用いられている石材の多くは、頸南地方で採取可能なものである。殊に、安山岩は豊富な供給環境のもと、圧倒的多数を占める第一石材である。ガラス質・流理構造・粗粒の三者に分類、それぞれの利用状況を検討したところ、それぞれの物性を活かした在り方が看取された。流理構造に関しては、両面調整石器という特定の形態を量産する上で重要な役割を果たしていた。流理構造を含めた様々な物性の安山岩は、現在、遺跡直下の片貝川でも容易に採取可能である。522kgにもおよぶ安山岩が出土している状況を考えれば、片貝川に限定できなくとも、妙高山麓のそう遠くない場所で獲得していたと考えられる。

妙高山麓では、安山岩以外の石材も採取可能である。遺跡直下の片貝川でも、チャート・砂岩・凝灰岩などの堆積岩が採取される。しかし、地質図上では片貝川は堆積岩を含む地層を開析しておらず、厚く堆積した火砕流下に埋もれた基盤層に由来する可能性がある。妙高西麓から南葉山麓までの間には、頁岩と砂岩の互層から形成される難波山層が分布し、それを開析する河川では堆積岩を採取できる。特に、砥石に用いられている砂岩は、難波山層起源である可能性があるが、妙高高原町の笹ヶ峰上流の寺泊層でも採取できるといえる。また、関川や矢代川では、良質なチャートを容易に採取できる。すなわち、遺跡で用いられている石材のほとんどは、遺跡直下の片貝川など、妙高山麓の河川で採取可能であったと考えることができる。

頸南地方で明らかに採取できない石材には、黒曜石・蛇紋岩がある。

黒曜石は、科学分析の結果、霧ヶ峰と和田峠の産地が同定されている。分析していない資料についても、質感が極めてよく似ており、また、地理的な関係を考慮しても中部高地からもたらされた可能性を指摘できる。霧ヶ峰と和田峠は、いずれも蓼科高原の原産地であり、中部高地の産地の中でも限定的である。また、上層石器群と比べると、原石や石核が小形であり、搬入された時点での大きさは小さかったと考えられる。

蛇紋岩は、磨製石斧と石製品の製作のみに利用が限定されている。青海－蓮華帯に産出される蛇紋岩は、新潟側と長野側に産地が存在する。地理的な要素を加味した距離関係と、糸魚川産と同定された翡翠(624・265)が出土していることを考慮すれば、新潟側の産地からもたらされた可能性が高い。また、石製品に用いられ

VI 下層の調査

ている滑石についても、同様のことがいえる。蛇紋岩が、どのようなかたちで搬入されているかについては、成品としての搬入と、素材としての搬入が考えられる。下層出土の資料には、素材として搬入されたものも含まれており、それを加工する砥石も多量に出土している。

玉髓は、小形の石錐とその製作工程に産出される楔形石器に多数認められる(78~126)。石核の一部(482・484)が大形であるが、基本的には大きな原石を用いていない。片貝川でも玉髓が採取されているが、1cmほど小さく黄色味を帯びており石器に用いられているものとは異なる。近隣で良質な玉髓が採取される地域としては、長野県の小谷村や中野市をあげられるという(中村由克氏の御教示による)。およそ60kgが搬入されている状況を考えれば、長野県北部など近隣の地域に産地が求められよう(第45図)。このほかに、珪質頁岩や鉄石英が遠隔地からもたらされたものと考えられるが、そのほとんどは単独個体での搬入である。

c. 遺構出土の石器

石器の出土点数を、廃棄ブロック・竪穴住居・ピット群(掘立柱建物)にわけて一覧表にまとめた(第10表)。ここには、各遺構における石器の数量が示されているとともに、器種ごとの分布の偏りが表されている。数値の隣りに示されている記号は、各器種の遺構間にみられる数量の多寡を示している。◎は上位1・2位、○は3・4位、△は5位以下であるが10点以上出土しているものに付してある。

この表を観察すると、1・2・6ブロックとS I 117・S I 403が極めて多いことがわかる。ただし、先述のとおりこれらの竪穴住居から出土したものは、廃棄ブロックに帰属するものが殆どであり、純粹に住居に伴うと考えられるものは極めて少ない。いずれにしても、各器種の出土点数の上位は、これらの遺構で多くを占める。すなわち、出土点数の多さと、各器種の点数の割合は、おおよそ比例関係にあると考えられる。しかし、その原則から外れるいくつかの器種が認められる。

第1に、楔形石器と石錐がS I 117とS I 120に極めて多い点である。その多くは、玉髓製の小形のものであり、住居の長軸の一端に位置する土坑・ピットから出土している。特定の器種が、特定の場所から多量に出土していること、石錐の一部には顕著な使用痕も認められる(図版309)ことを勘案すると、何らかの特定の作業が、特定の場所で繰り返し行われた可能性を指摘できる。

第2に、打製石斧・磨製石斧が柱穴群から比較的多く出土している点である。特別多いわけではないが、全体の数量と比べると多いことがわかる。また、土掘具と考えられる打製石斧が、明瞭な使用痕を伴った状態でピットの覆土から出土していることは、何らかの土木作業が行われたことを示唆しているかもしれない。

第3に、磨石類や石皿といった調理具が、ピットの覆土から多数出土している点である。石皿の多くは、破損品であり、中には意図的な破損を窺わせるものもある。単純に使用した場を反映しているのではなく、使用后・破損後に、柱の版築に転用された可能性がある。

これらの状況は、特定の範囲から、特定の器種が、特徴的に出土する状況を表している。しかし、原則的には、出土総数の多寡と比例して、器種の多寡が認められる。

	1ブロック	2ブロック	3ブロック	4ブロック	5ブロック	6ブロック	7ブロック	SI117	SI120	SI403	ピット群
石錐	6 ◎	1	1		2 ○	11 ◎		2 ○			1
尖頭器								1	1 ◎	1 ◎	
石錐	1				1	2 ○		501 ◎	40 ◎		
石匙						2 ◎					
楔形石器	8	3	2	1		11 ○	1	598 ◎	38 ◎	14 ○	6
打製石斧	13 ◎	9 ○			2	3	3	8	2	12 ◎	9 ○
磨製石斧	5 ○	1	2			3 ○	3 ○	7 ◎	2	3 ○	7 ◎
スクレイパー	35 ○	20	3	3		54 ◎	13 △	71 ◎	1	31 ○	6
両面調整石器	71 ◎	56 ○	8	10 △	5	16 △	15 △	109 ◎	1	56 ○	17 △
折断調整石器	8 ○					3 ○	3 ○	32 ◎		10 ◎	1
対向調整石器	5 ◎					1 ○	1 ○	2 ◎			1 ○
周縁敲打調整石器						1 ◎	1 ◎		1 ◎	1 ◎	
礫器	1 ○							2 ◎			
磨石類	57 ○	42 △	5	5	11 △	55 ○	16 △	134 ◎	7	44 △	61 ◎
石皿	8 ○	10 ○	1			4		17 ◎		5	13 ◎
砥石	7 ○	9 ◎	1					12 ◎	5 ○	3	4

第10表 各遺構における石器組成

d. 調査区北側と南側にみられる石器組成の差 (第91図)

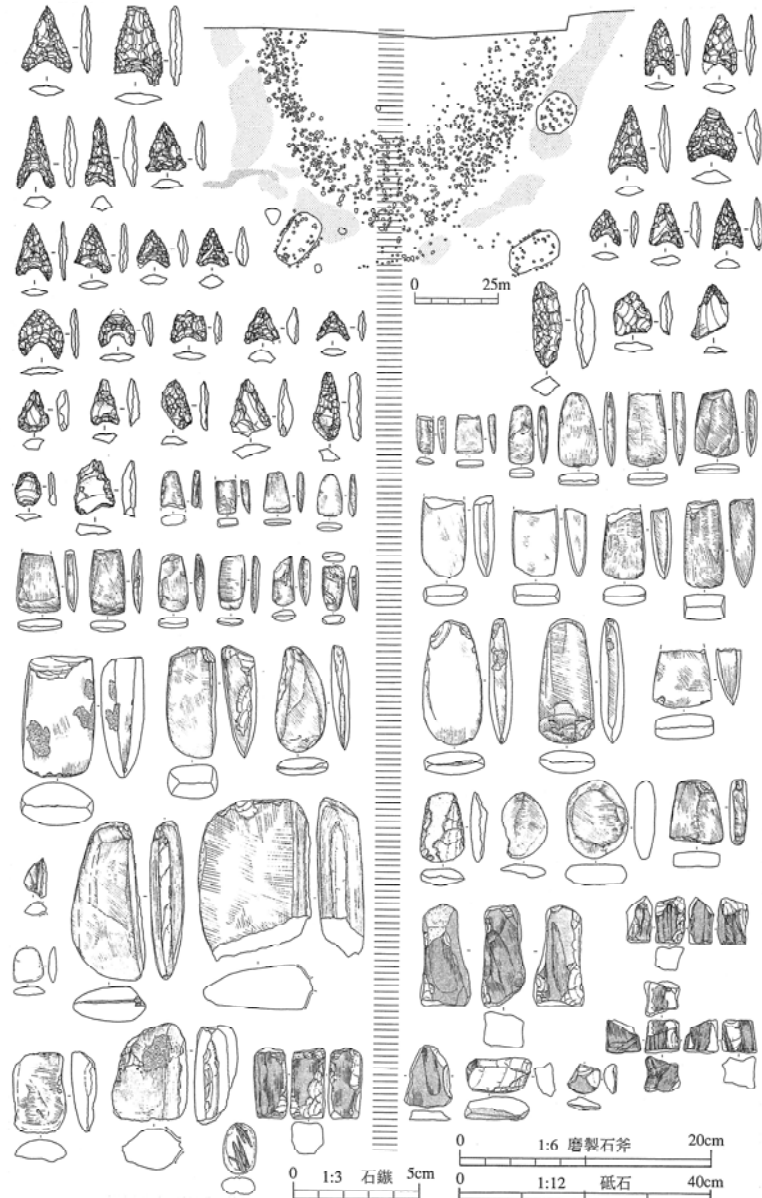
遺物の集中域は、廃棄ブロックとして理解されており大きく7ヶ所に分離されている。石器の分布が密な範囲についても、それらとほぼ重なるようなかたちで認められた。ただし、廃棄ブロック3・4・5については遺物の分布が極めて稀薄である。この分布が希薄な3ブロックと4ブロックの間、9列と10列の間を境として調査区を二分して考えると、石鏃・磨製石斧・砥石に若干の相違点が認められた。この他の器種についても、検討してみたが大きな相違点は認められなかった。ここでは、調査区を南北に分離して理解することで、石鏃・磨製石斧・砥石の相違点を明らかにしていきたい。

北側では、石鏃の出土点数が少ない。有茎鏃・尖基鏃が1点ずつ認められるほかは、すべて無茎凹基鏃である。基部の凹みは比較的浅く、2.2cm前後のものが主体を占める。未成品の出土点数も少ない。磨製石斧は中形～大形で厚手のものが主体を占める。しかし、未成品は小形を製作するのに適した大きさであり対照的である。また、未成品4点のうち3点がS I 117の覆土からの出土である。一方、砥石が多量に出土していることとの対応関係が注目される。

特に、磨製石斧の器面の調整に大きな役割を果たすであろう平坦～緩く窪む砥面をもつ砥石が多く、磨製石斧の製作が想定させる。

南側では、石鏃の出土点数が北側と比べると多く、大形から小形、幅広から狭小と、形態的パリエティーに富む。凹みが深いものが多く、脚部が細長いものが特徴的である。また、未成品が比較的多い。磨製石斧は小形で薄手のものが主体を占める。しかし、未成品は大形で厚手であり対照的である。一方、砥石の出土点数は極めて少ない。未成品は出土したものの、それを加工する砥石が出土しておらず、磨製石斧の製作を積極的に評価できない。

このように、石鏃と磨製石斧には、出土位置による形態的相違が認められる。場の性格を反映した結果と考えられるが、具体的には遺跡全体の構造を十分に把握した上で検討されるべきであり、ここでは事実の記載に留めておきたい。



第91図 調査区北側と南側に見られる石器組成の差

D 石製品

①石棒 (613～616)

石棒は、4点確認された。いずれも、角閃石を多量に含み比較的軟質な粗粒の安山岩を素材とする大形品である。ちなみに、同質の石材は大形の石皿にも特徴的に充てられており、大形の原石を採取していたことが窺える。形態的には、四者四様でいずれも特徴的な形態を呈する。613～616は、先端部付近で1条の溝が周囲をめぐっているものである。先端部付近で急速にすぼまるもの(613・615)と、寸胴のもの(614)とが認められる。613については、先端部が大きく窪んでおり特徴的である。616は、頭部と体部とを区画する明瞭な段が設けられている。さらに、頭部の周囲をめぐる1条の溝が認められ、また、平坦な先端部には平面がU字状を呈する盛り上がりが見られる。形態的類例は、巻町豊原遺跡出土資料に認められ、共伴遺物と層位的検討から中期中葉前半段階に位置づけている[小野・前山1988]。出土位置は、石器が最も多く出土した廃棄ブロック1やS I 117には認められず、ピット群(613・615)と、廃棄ブロック6(614・616)に認められた。613については、P 838の覆土からの出土であり、版築に転用した可能性がある。

②玦状耳飾り (617・619)

617・619は、玦状耳飾りと考えられる。いずれも、廃棄ブロック1からの出土である。617は蛇紋岩、619は滑石製である。残存状況が良好な619は、細長の優美な形態を呈する。右半分を欠損しているが、欠損面は研磨されており、再利用しようとした意図が看取される。2点とも、欠損部の脇に穿孔が認められる。

③管玉 (618・622)

618と622(別個体)は、滑石製の管玉である。618はS I 117および廃棄ブロック1から、622は廃棄ブロック7からの出土である。両者とも、復原した径は1.5～1.6cmと大きく、また、孔の径も0.8cmほどと大きい。全体像がわかる618は、両端が広がり、中央部がくびれる特徴的な形態である。同様の形態は、吉川町長峰遺跡[小池1984]などにおいて、前期末葉～中期初頭の土器とともに出土している。当該期の特徴的な形態である可能性がある。

④琥珀玉 (620)

620は、暗赤色で透明の琥珀玉である。S I 117の周堤下部から出土した(図版70)。調査時に大きく破損したため、(財)元興寺文化財研究所にアクリル樹脂含浸による強化と接着・復元作業を委託した。復元された形態は、左右非対称で、上下両端と側縁とが垂直な位置関係にない。上下両端から穿孔されたと考えられるが、実測図の上側には明瞭な面取りが観察される。縄文時代の琥珀製品は、新潟県内でははじめての出土例であり、周辺地域の出土例と比較検討したい。

琥珀製品の分布と原産地

琥珀は、松柏科植物の樹脂が石化したもので、現在でも宝飾品の素材として利用されている。先史時代においても、後期旧石器時代より玉類の素材として利用されている。しかし、日本における琥珀の産地は、北海道石狩地方・岩手県久慈市・福島県いわき市・千葉県銚子市・岐阜県瑞浪市など数カ所に限られており、容易に入手できる素材でなかったと考えられ、実際、琥珀製品の出土例は多くない。

そこで、こういった特徴的な遺物から当時の交易の在り方を復元しようと、赤外吸収スペクトルによる産地分析が確立されている[室賀ほか1974、室賀1976]。しかし、出土した琥珀の劣化状態は様々で、計測位置ごとで吸収位置や強度が異なるという限界が指摘されている(第七章6参照)。本遺跡出土の琥珀製品についても、銚子産に似ているとされているものの産地は明言されていない。

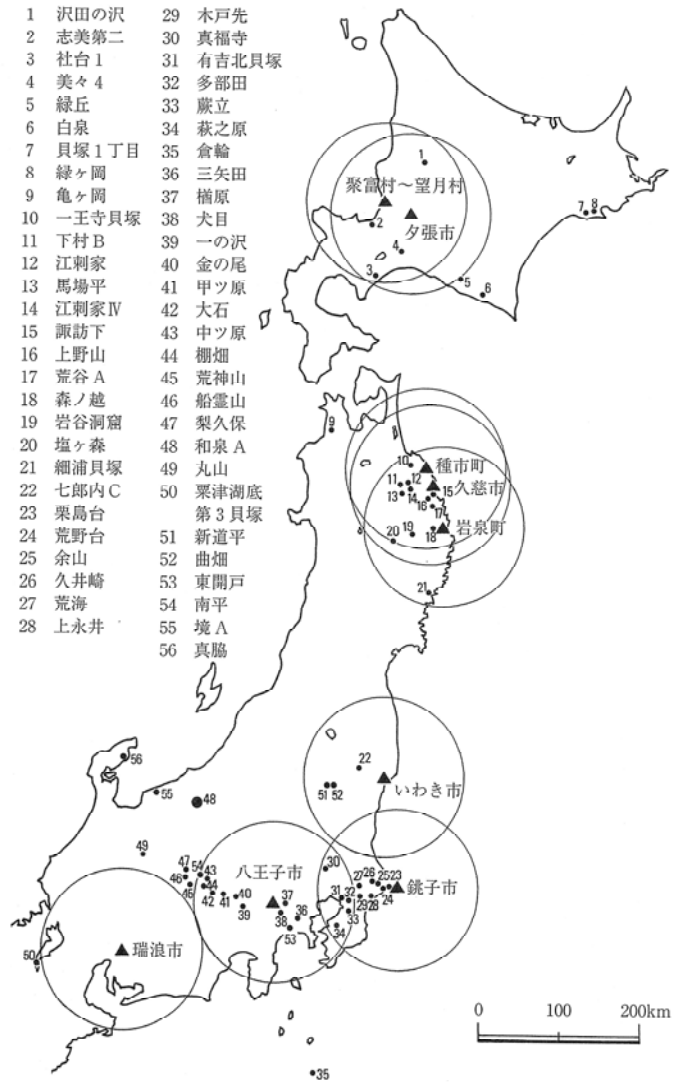
このように自然科学分析の研究が行われる一方、野口義麿氏 [野口1952]、松下亘氏 [松下1982]、伊藤陸憲氏 [伊藤1982]、佐々木清文氏 [佐々木1983]、宮下健司氏 [宮下1988]、五味信吾氏・野代幸和氏 [五味・野代1994] らにより琥珀製品を出土した遺跡が集成されている。ここでは、それらに近年の成果を加えて、縄文時代に帰属するといわれている琥珀製品の分布図を作成し、現在確認されている琥珀の産地とそこから半径100kmの範囲を加えることとした(第92図)。それにより、分布からみた産地と出土遺跡の位置関係を考察してみたい。

この分布図からは、北は北海道から西は滋賀県まで、極めて広範囲で縄文時代のものとされる琥珀が出土していることがわかる。特に、北海道西部・岩手県東部・千葉県北部・長野県諏訪盆地～山梨県甲府盆地には、分布の集中域が認められる。和泉A遺跡は、これらの集中域から離れた地域から出土している。また、北海道西部は石狩地方の産地と、岩手県東部は久慈市など三陸海岸沿いの産地と、千葉県北部は銚子市の産地と、諏訪盆地～甲府盆地は八王子市の産地とそれぞれ近距離にあることがわかる。い

ずれの集中域も産地から半径100kmの範囲内にはほぼ収まり、石器石材のように近距離の産地との関連性が予想される。ただし、八王子産の琥珀は小粒で軟質であり真の琥珀になっていないといわれており [吉田1992]、遺物との関連性について消極的に評価されている [五味・野代1994]。

近距離の原産地との関連性が予想されるものの、琥珀のように稀少で装飾効果が高い遺物は、性格の特殊性から一概にはいえない。実際、山梨県甲府原遺跡の分析では、いわき産や銚子産の可能性を示すデータを得ており [五味・野代1994]、複雑な流通ルートが存在を示唆している。また、すべての原産地と海を隔てた八丈島の倉輪遺跡からの出土は、分布の広さを示すとともに遺物の特殊な性格を反映している。

こういった点には注意を払うべきであるが、琥珀を出土する遺跡が、原産地周辺に多いことも事実である。原産地に近い地域においても、琥珀製品は単発的に出土することが多く、製作遺跡と評価されているのは銚子市の栗島台遺跡のみである。銚子市の原産地のひとつ西明浦海岸から約3kmに位置する遺跡からは、琥珀による玉作りの可能性を示唆する遺物が出土している [寺村・安藤1973]。琥珀が多産されない状況を考えれば、原産地と製作遺跡とが近距離にあることは合理的な立地といえよう。



第92図 琥珀の原産地と縄文時代の琥珀が出土した遺跡

琥珀玉の帰属時期

琥珀製品自体の十分な形態的検討がなされていない今日、帰属時期の決定については伴出する土器に頼らざるを得ないのが現状である。伴出遺物に頼る帰属時期の決定には限界があり詳細なことはいえないが、分布の集中域ごとに大局的な傾向を述べていきたい。

北海道西部は、晩期末葉から利用され [佐々木1983]、後続する縄文時代には出土遺跡が急増する。一部は、縄文時代に帰属する可能性もある。多くは、土坑からの出土である。

岩手県東部は、前期末葉ないし中期から利用され、数は少ないが後期・晩期のものもある。中でも、中期中葉以降からの出土が多いという。また、住居址から原石が出土することが多い。

千葉県北部は、前期末葉ないし中期初頭から後期・晩期まで利用されている。製作遺跡といわれる粟島台遺跡では、中期前葉～後期初頭（主体となる土器は中期）の土器と同一の層位から琥珀が出土している。

諏訪盆地～甲府盆地は、中期前葉～後葉にかけての遺跡のみで出土している [宮下1988]。甲ッ原遺跡では五領ヶ台Ⅱ式が出土した土坑から [五味・野代1994]、金の尾遺跡では中期中葉に位置づけられる住居跡から出土しており [末木ほか1987]、具体的な年代観が与えられている。また、銚子市以西に位置する琥珀出土遺跡の多くが前期後葉～中期前葉段階に位置づけられることも特徴的である [五味・野代1994]。和泉A遺跡下層の土器についても、前期末葉～中期初頭にほぼ収まり、琥珀がそれに伴うことは確実視される。五味・野代両氏の見解に即した年代観を与えることができる。ただし、大珠については中期でも新しい段階の土器群に伴うようである。

また、北海道だけでなく本州中央部においても、琥珀玉は土坑から出土することが多い。七郎次C・木戸先・甲ッ原・梨久保・丸山 [岐阜県文化財保護センター1997] では土坑から出土している。ひとつの土坑から数点出土することが一般的であるが、七郎次Cの39号土坑から50点余りが出土している。このような出土状況は、琥珀玉の性格を反映している可能性が高い。ちなみに、これらの土坑の帰属時期は前期後葉～中期前葉に位置づけられている。

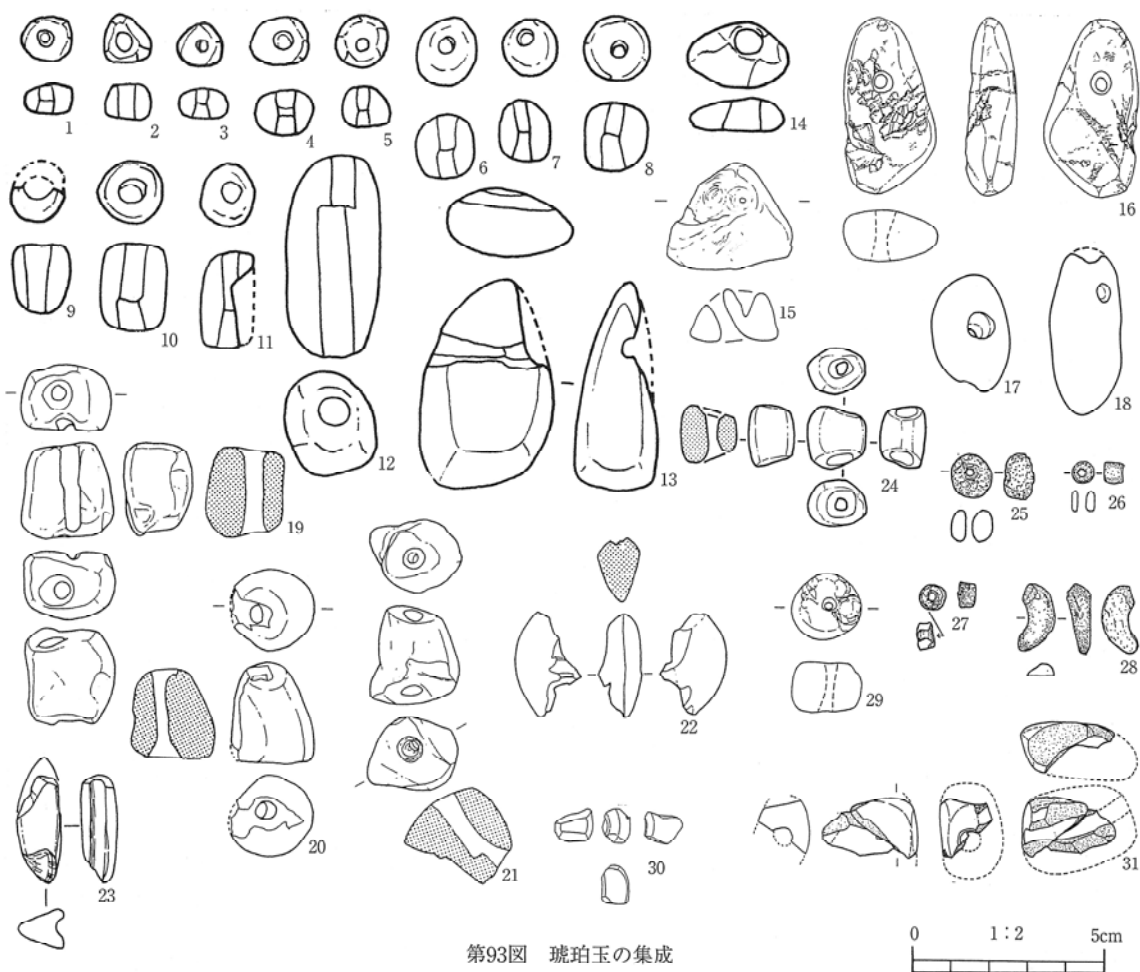
以上のように、各地域ごとで帰属時期が若干、異なることが予想される。このことは、原産地の開発状況と密接に関わってくる重要な問題といえよう。

琥珀玉の形態的検討

第93図に、図化されている主要な琥珀玉をまとめてみた。1～14が福島県七郎次C遺跡 [阿部1982]、16が千葉県粟島台遺跡 [伊藤1982]、15が千葉県木戸先遺跡 [中山1994]、19～22が山梨県甲ッ原遺跡 [五味・野代1994]、23が山梨県金の尾遺跡 [末木ほか1987]、17・18が長野県梨久保遺跡 [梨久保遺跡調査団1986 PL116・117の写真をトレース]、24が和泉A遺跡、29が石川県真脇遺跡 [山田1986]、31が富山県境A遺跡 [久々1999]、25～28が東京都（八丈島）倉輪遺跡 [前田ほか1987]、30が滋賀県粟津湖底遺跡 [中川1997] 出土のものである。

これを見てもわかるとおり、白玉に近い偏平なもの・管玉状のもの・垂飾・勾玉が認められ、バラエティーに富んでいる。ただし、帰属時期の検討を行っておらず、すべてを同列に扱うことは大きな危険をはらんでいる。しかし、類例の少ない現在、まずは琥珀という素材によりグルーピングして検討してみたい。

白玉に近い偏平なものは、最も多くの遺跡にみられる形態であり、七郎次C（1～11）・甲ッ原（19～21）・和泉A（24）・真脇（29）・境A（31）・倉輪（25～27）・粟津湖底第3貝塚（30）に認められる。七郎次C（1～11）では大きさ・形態とも強い斉一性が認められる一方、甲ッ原（19～21）のようにそれぞれ個性的な形態を呈するものもある。また、和泉A出土資料のように上下の端部が平行関係にないものも存在する。なお、



第93図 琥珀玉の集成

管玉状と判断したものは形態的連続性をもって捉えられるものであり、9～10・31は管玉状と判断すべきかもしれない。

管玉状のものは、七郎次C (12)・金の尾 (23) に認められる。全体像がわかる七郎次Cの例をみると、太い棒状の素材の中央に上下から穿孔していることがわかる。10や11の大形品ということもできる。

垂飾は、粟島台 (16)・梨久保 (17・18) に認められる。いずれも比較的大形で偏平な素材のより平坦な表裏から穿孔している。穿孔の在り方は、木戸先出土資料 (15) の在り方とも共通する。また、七郎次Cの13は垂飾と同様の素材を用いているものの、より狭い平坦面を有する側方から穿孔されている。

勾玉は、倉輪遺跡出土資料のみに認められる特異な形態である (28)。

穿孔方法は、表裏あるいは上下からの穿孔を中央付近でつなぎあわせる例が多い。玉類の穿孔方法としては一般的な在り方といえるかもしれないが、比較的軟らかい素材が慎重に扱われたことを示している可能性がある。19の実測図表面には穿孔の痕跡が観察されるが、穿孔時のアクシデントで半割した欠損面と考えられる。素材の脆さを象徴する資料といえよう。また、製作途中に大きく破損したものが再利用されていることは、素材の稀少さの反映と考えられる。15にも、貫通しない穿孔の痕跡が認められるが、これも穿孔の失敗を意味していると思われる。琥珀玉の形態的バラエティーは、素材の稀少さがゆえ素材の形状を最大限、有効に利用しようとした表われといえるかもしれない。

和泉A遺跡と琥珀の道

和泉A遺跡出土の琥珀は、銚子産に類似するものの限定されるには至っていない。また、いずれの原産地・分布の集中域からも距離をおいており、位置関係から原産地との関係について論じることは難しい。そういっ

た中、最も近い分布の集中域である諏訪盆地～甲府盆地で出土したものの、帰属時期・製品の形態の共通性が見出される。伴出する土器についても、中部高地的な色彩が強く、その関連性を裏付けるものといえる。信州方面の琥珀玉との強い関連性が窺える。

さて、それでは諏訪盆地～甲府盆地にかけて出土している琥珀の原産地はどこなのであるか。最も近い原産地は、八王子であるが小粒で軟質であり「真の琥珀になっていない」とされている [吉田1992]。そして、遺物との関連性について消極的に評価されている [五味・野代1994]。しかし、現在、良質なものを採取できないことのみを根拠に、過去を同様に評価することはできず、選択肢のひとつとして残しておきたい。

この次に近い原産地は、銚子である。甲ッ原遺跡では、銚子産と同定されたものが出土している。琥珀が出土した遺跡は、諏訪盆地～甲府盆地～八王子・町田と、現在のJR中央本線に沿うように分布しており、その延長線上には、千葉県北部の分布の集中域と銚子市の原産地が存在する。科学分析の結果を考え併せても、銚子産の琥珀が広く分布した可能性を指摘できる。宮下健司氏が指摘した「多摩丘陵－甲府盆地－諏訪盆地」というルート [宮下1988] は、蓋然性の高い推測であったと考えられる。甲ッ原遺跡では、銚子以外にもいわき産が同定されており注目される。銚子と同様、東方の原産地である点は注目される。一方、琥珀が出土した遺跡の分布は、瑞浪の原産地が位置する西方には連続しない。東方とのより強固な関連性を読み取ることができる。

こういった仮説を裏付けるために科学分析を行うわけであるが、その限界も指摘されており、科学分析に大きく依存する方向性は、現段階では大きな危険性を孕んでいるといわざるをえない。ここでは、十分な検討を経ることができなかったが、まずは琥珀玉の形態・製作技術・分布などを詳細に検討する必要がある。そういった過程を経て、科学分析の成果と対応関係を追及することは有効であると思われる。また、各原産地における原石群との対比も必要であろうが、遺物同士のデータを比較すること [植田1999] も重要な課題と考えられる。黒曜石の産地分析においては、遺物同士の比較から未発見の原産地の存在が指摘されており (例えば [藁科1996])、琥珀についても同様のことがいえる可能性がある。できる限り多くの原産地の、できる限り多くの原石から基礎データを作成することは前提であるが、遺物のデータを対比する必要性も感じる。

⑤大珠 (624)

624は、翡翠製 (アルピタイト?) の大珠である。廃棄ブロック6からの出土である。石質は、白色不透明であり良質なものではなく、比重もやや軽い。形態は、楕円形の二側縁を直線的に整え、厚手に仕上げられている。中央やや上側に表裏からの穿孔が認められる。産地分析の結果、糸魚川産と同定されている。また、翡翠を用いた玉作りを行っている境A遺跡でも琥珀玉が出土している [久々1999]。琥珀玉と翡翠大珠がセットで出土したことは、地域間の関係を追及する上で重要な意味をもつものと思われる。

⑥翡翠原石 (625)

625は、透明感のある緑色が部分的に認められる良質な翡翠の原石である。全面が剥離痕と顕著な敲打痕に覆われており、稜を中心とした高まりには研磨痕が認められる。また、広範囲に煤が付着しており、剥離による成形時に加熱していた可能性がある。産地分析の結果、糸魚川産と同定されている。

⑦その他 (621・623)

621と623は、残存部の全面が研磨された石製品であるが、断片であり全体像を把握できないものである。621は、表裏からの穿孔が一端に認められ、珠状耳飾りなどの石製品の一部と考えられる。623は、穿孔部の中央で欠損した後、再加工されたものであると考えられる。穿孔の痕跡と考えられる半円状の抉入には、穿孔方向と平行する研磨痕が観察される。